大阪府埋蔵文化財調査報告2012－５

和泉寺跡・府中遺跡　Ⅱ

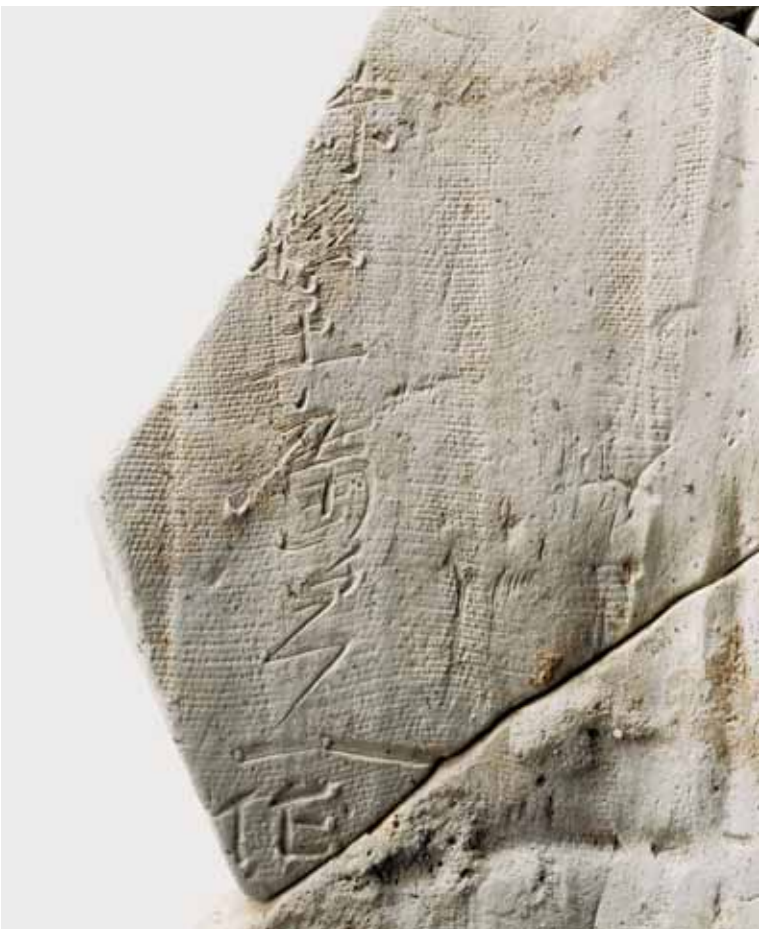
－都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

和泉寺跡・府中遺跡　Ⅱ

－都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会



1　文字瓦(654)

2　文字瓦(655)

1　文字瓦(656)

2　文字瓦(657)

3　文字瓦(522)

巻頭図版三　遺物

1　軒丸瓦(658)

2　軒丸瓦(661)

3　軒丸瓦(525)

4　軒平瓦(673)

5　軒平瓦(670)

巻頭図版四　遺物

1　11001-4区出土甑(45)

2　11001-4区出土弥生土器

序　　文

本書で報告いたします和泉寺跡、府中遺跡は、和泉市の北西部に位置しています。和泉寺跡は、古くから古代寺院跡と推定されてきました。また、府中遺跡は、縄文時代から近世に至るまで連綿と人々が生活を営んできた場所です。

このたび、都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴って発掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代の柱穴や自然流路、奈良時代の土坑や溝、中世の建物跡や耕作の痕跡など、重要な発見がありました。調査地周辺では、これまでにも弥生時代から古墳時代の多数の土器が出土しており、周辺に人々が暮らしていたことが推定されていましたが、居住域が明らかになったのは初めてのことです。また、中世については、周辺のこれまでの調査成果とあわせ、人々の生活や耕作の場所の変遷と広がりがわかる、興味深い成果となりました。

古代寺院に関しては、奈良時代の遺構等から多数の瓦が出土したこと、中でも、和泉寺跡では初めての文字瓦が出土したことが、大きな成果です。文字瓦には、古代氏族の人名が刻まれていたものがあったことから、寺院建立に関わった氏族が初めて明らかになりました。文献資料に記録が残されていない和泉寺跡での文字資料の出土は、発掘調査の重要性をあらためて示すものと言えるでしょう。

今回の調査成果の活用によって、この地に生きた人々の歴史がよりいっそう明らかにされていくことを願っております。

調査にあたりましては、周辺にお住まいの方々をはじめとして、関係各位から多大なご指導、ご協力を賜り、心から感謝しております。今後とも、文化財保護行政へのいっそうのご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　　荒井　大作

例　　言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部より依頼を受け、平成20年度から平成23年度まで実施した、都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う和泉市府中町四丁目・府中町所在和泉寺跡・府中遺跡の発掘調査のうち、平成21年度調査、平成22年度調査の一部および平成23年度調査についての報告書である。

２．発掘調査の期間と担当者は以下のとおりである。

平成21年度（調査番号09017・09049）

平成21年９月１日から平成22年３月31日

大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　副主査　土屋みづほ

平成22年度（調査番号10001・10078）

平成22年４月１日から９月６日、平成23年２月１日から３月31日

大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　副主査　土屋みづほ

平成23年度（調査番号11001）

平成23年４月１日から７月29日

大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　副主査　土屋みづほ

また、遺物整理事業については、平成21年度から平成24年度にかけて、調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子を担当として実施した。

３．本調査の写真測量（基準点測量含む）は、平成21年度（調査番号09017）は株式会社アコード、平成22年度（調査番号09049・10001）は大阪測量株式会社に委託した。撮影フィルムは各社で保管している。

４．本調査の基準点測量は、平成22年度（調査番号10078・11001）は株式会社ケーディーエムに委託した。

５．本書で掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

６．胎土分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

７．出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で所蔵している。

８．本書の編集・執筆は土屋が行った。ただし、第７章第２節は、パリノ・サーヴェイ株式会社の報告を、土屋が編集のうえ掲載した。

９．発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、全額を大阪府都市整備部が負担した。

10．現地での発掘調査および遺物整理事業にあたっては、和泉市教育委員会からご協力を得た。記して感謝します。

11．本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は2790円である。

凡　　例

１．基準高は、T.P.（東京湾平均海水位）を基準とし、プラス値を使用している。

２．座標系は、世界測地系により、第VI系に準拠している。単位はメートルである。

３．方位は座標北を示す。調査地点においては、座標北は、磁北より東へ6°39′、真北より西へ０°19′振れる。

４．土層断面図の土色および土器・土製品・瓦の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

５．遺構平面図の縮尺は、全体図250分の１、部分図40分の１を基準としているが、一部100分の１、80分の１、20分の１がある。遺物図の縮尺は、土器、粘土塊、瓦が４分の１、土製品が４分の１または２分の１、石器・石製品が２分の１、金属製品が１分の１である。

本文目次

序文
例言
凡例
第１章　調査の経緯・経過と方法
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　発掘作業の経過…… 3
　第３節　整理等作業の経過…… 4
　第４節　調査方法…… 5
　第５節　既往の調査成果…… 7
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境…… 9
　第２節　歴史的環境……10
第３章　11001-5区の調査成果
　第１節　基本層序……15
　第２節　耕作溝検出面の調査……17
　第３節　中世遺構検出面の調査……19
　第４節　弥生時代遺構検出面の調査……21
　第５節　出土遺物
　　第１項　土器……23
　　第２項　石製品……25
第４章　11001-4区の調査成果
　第１節　基本層序……27
　第２節　耕作溝検出面の調査……29
　第３節　中世遺構検出面の調査……33
　第４節　弥生時代遺構検出面の調査……37
　第５節　出土遺物
　　第１項　土器……40
　　第２項　土製品……49
　　第３項　粘土塊……49
　　第４項　瓦……50
　　第５項　石製品……57
第５章　09017-2区他の調査成果
　第１節　基本層序……58

第２節　近世遺構検出面の調査……62
第３節　中世遺構検出面の調査……66
第４節　弥生～古墳時代遺構検出面の調査……75
第５節　自然流路の調査……81
第６節　出土遺物
第１項　土器……83
第２項　土製品……115
第３項　瓦……116
第４項　石器・石製品……124
第５項　金属製品……124
第６章　09017-1区他の調査成果
第１節　基本層序……126
第２節　中世遺構検出面の調査……129
第３節　奈良時代遺構検出面の調査……133
第４節　出土遺物
第１項　土器……141
第２項　土製品……154
第３項　瓦……155
第４項　石器・石製品……214
第５項　金属製品……217
第７章　自然科学分析の成果
第１節　分析の目的……218
第２節　胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）……219
第８章　総括
第１節　遺構の変遷……239
第２節　弥生時代から古墳時代遺物の様相……251
第３節　古代遺物の様相……253

参考文献……259
土器観察表……262
土製品・粘土塊観察表……288
瓦観察表……289
石器・石製品観察表……294
金属製品観察表……294

挿図目次

図１　調査区配置図（平成５年度大阪府作成1:2,500地形図に加筆）…… 2
図２　遺跡範囲の変遷…… 3
図３　地区割り図…… 5
図４　調査地位置図（国土地理院1:25,000地形図「岸和田東部」平成19年６月１日発行に加筆）…… 9
図５　和泉寺跡・府中遺跡周辺の主要遺跡……13
図６　11001-5区土層図 ……16
図７　11001-5区耕作溝検出面全体図 ……18
図８　11001-5区溝217・220断面図 ……18
図９　11001-5区中世遺構検出面全体図 ……20
図10　11001-5区柱穴227・293・294・297・298・301・302、溝225断面図 ……20
図11　11001-5区柱穴221・222、溝223平面図・断面図……21
図12　11001-5区弥生時代遺構検出面全体図 …22
図13　11001-5区弥生時代遺構検出面柱穴平面図・断面図……22
図14　11001-5区出土土器 ……25
図15　11001-5区出土石製品 ……26
図16　11001-4区土層図 ……28
図17　11001-4区全体図（耕作溝検出面・中世遺構検出面・弥生時代遺構検出面）… 31-32
図18　11001-4区溝001・007・008・233・291・292断面図 ……33
図19　11001-4区中世遺構検出面全体図 … 35-36
図20　11001-4区中世遺構検出面遺構断面図 …37
図21　11001-4区柱穴228・230・231、ピット229平面図・断面図……38
図22　11001-4区落ち込み２断面図 ……39
図23　11001-4区遺構出土土器 ……40
図24　11001-4区包含層出土土器（１）……41
図25　11001-4区包含層出土土器（２）……42
図26　11001-4区包含層出土土器（３）……43
図27　11001-4区包含層出土土器（４）……44
図28　11001-4区包含層出土土器（５）……45
図29　11001-4区包含層出土土器（６）……47
図30　11001-4区包含層出土土器（７）……48
図31　11001-4区出土土製品 ……49
図32　11001-4区出土粘土塊 ……50
図33　11001-4区出土瓦（１）……51
図34　11001-4区出土瓦（２）…… 53-54
図35　11001-4区出土瓦（３）……55
図36　11001-4区出土石製品 ……57
図37　09017-2区他土層図 …… 59-60
図38　09017-2区他近世遺構検出面全体図 ……63
図39　09017-2区他溝042断面図……64
図40　09017-2区他中世遺構検出面全体図…… 67-68
図41　09017-2区他柱穴198 ～200断面図 ……69
図42　09017-2区他溝002・003平面図・断面図……71
図43　09017-2区他流路001断面図……73
図44　09017-2区他弥生～古墳時代遺構検出面全体図…… 77-78
図45　09017-2区他柱穴004・006・009・014 ～017平面図・断面図 ……79
図46　09017-2区他柱穴004土器出土状況図……80
図47　09017-2区他柱穴019・021、ピット020平面図・断面図……80
図48　09017-2区他ピット064平面図・断面図……81
図49　09017-2区他自然流路断面図 ……82
図50　09017-2区他近世遺構検出面の土器 ……84
図51　09017-2区他中世遺構検出面の土坑・溝・柱穴・ピット・落ち込み出土土器……85
図52　09017-2区他流路001出土土器（１）……87

図53　09017-2区他流路001出土土器（２）……89
図54　09017-2区他流路001出土土器（３）……90
図55　09017-2区他流路001出土土器（４）……91
図56　09017-2区他流路001出土土器（５）……92
図57　09017-2区他流路001出土土器（６）……93
図58　09017-2区他流路001出土土器（７）……94
図59　09017-2区他流路001出土土器（８）……95
図60　09017-2区弥生～古墳時代遺構検出面の土器……96
図61　09017-2区他包含層出土土器（１）……98
図62　09017-2区他包含層出土土器（２）…… 100
図63　09017-2区他包含層出土土器（３）…… 102
図64　09017-2区他包含層出土土器（４）…… 103
図65　09017-2区他包含層出土土器（５）…… 104
図66　09017-2区他包含層出土土器（６）…… 105
図67　09017-2区他包含層出土土器（７）…… 107
図68　09017-2区他包含層出土土器（８）…… 109
図69　09017-2区他包含層出土土器（９）…… 110
図70　09017-2区他包含層出土土器（10）…… 112
図71　09017-2区他包含層出土土器（11）…… 113
図72　09017-2区他包含層出土土器（12）…… 114
図73　09017-2区他出土土製品（１）…… 116
図74　09017-2区他出土土製品（２）…… 116
図75　09017-2区他出土瓦（１）…… 119
図76　09017-2区他出土瓦（２）…… 121
図77　09017-2区他出土瓦（３）…… 123
図78　09017-2区他出土石器・石製品 …… 125
図79　09017-2区他出土金属製品 …… 125
図80　09017-1区他土層図 …… 127-128
図81　09017-1区他中世遺構検出面全体図 … 130
図82　09017-1区他建物１平面図・断面図 … 131
図83　09017-1区他溝006・032断面図 …… 132
図84　09017-1区他奈良時代遺構検出面全体図 …… 135
図85　09017-1区他土坑001・002・046平面図・断面図…… 136-138
図86　09017-1区他溝033断面図…… 139
図87　09017-1区他落ち込み004断面図…… 140
図88　09017-1区他中世遺構検出面の土器 … 142
図89　09017-1区他土坑001出土土器（１）… 143
図90　09017-1区他土坑001出土土器（２）… 144
図91　09017-1区他土坑001出土土器（３）… 145
図92　09017-1区他土坑001出土土器（４）… 147
図93　09017-1区他土坑001出土土器（５）… 149
図94　09017-1区他落ち込み004・137出土土器 …… 151
図95　09017-1区他包含層出土土器 …… 153
図96　09017-1区他出土土製品 …… 154
図97　09017-1区他出土文字瓦（１）…… 156
図98　09017-1区他出土文字瓦（２）…… 157
図99　09017-1区他出土軒丸瓦（１）…… 160
図100　09017-1区他出土軒丸瓦（２）…… 161
図101　09017-1区他出土軒平瓦…… 165-166
図102　09017-1区他出土道具瓦（１）…… 169
図103　09017-1区他出土道具瓦（２）…… 170
図104　09017-1区他出土道具瓦（３）…… 171
図105　09017-1区他出土丸瓦（１）…… 174
図106　09017-1区他出土丸瓦（２）…… 175
図107　09017-1区他出土丸瓦（３）…… 176
図108　09017-1区他出土丸瓦（４）…… 178
図109　09017-1区他出土丸瓦（５）…… 180
図110　09017-1区他出土丸瓦（６）…… 181
図111　09017-1区他出土平瓦（１）…… 187-188
図112　09017-1区他出土平瓦（２）…… 189-190
図113　09017-1区他出土平瓦（３）…… 192
図114　09017-1区他出土平瓦（４）…… 193
図115　09017-1区他出土平瓦（５）…… 195
図116　09017-1区他出土平瓦（６）…… 197
図117　09017-1区他出土平瓦（７）…… 199
図118　09017-1区他出土平瓦（８）…… 201
図119　09017-1区他出土平瓦（９）…… 203
図120　09017-1区他出土平瓦（10）…… 205

図121　09017-1区他出土平瓦（11）…… 207
図122　09017-1区他出土石器・石製品（１）　215
図123　09017-1区他出土石器・石製品（２）　216
図124　09017-1区他出土金属製品…… 217
図125　分析試料写真（１）…… 221
図126　分析試料写真（２）…… 222
図127　各粒度階における鉱物･岩石出現頻度（１）
…… 228
図128　胎土中の砂の粒径組成（１）…… 228
図129　各粒度階における鉱物･岩石出現頻度（２）
…… 229
図130　胎土中の砂の粒径組成（２）…… 229
図131　各粒度階における鉱物･岩石出現頻度（３）
…… 230
図132　胎土中の砂の粒径組成（３）…… 230
図133　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 230
図134　胎土薄片顕微鏡写真（１）…… 231
図135　胎土薄片顕微鏡写真（２）…… 232
図136　胎土薄片顕微鏡写真（３）…… 233
図137　胎土薄片顕微鏡写真（４）…… 234
図138　胎土薄片顕微鏡写真（５）…… 235
図139　層序柱状図 …… 241
図140　遺構変遷図 …… 243-244
図141　遺構主軸方向分布図 …… 248-249
図142　和泉寺跡推定寺域・和泉国府推定域と調査区位置図（昭和36年度大阪府撮影空中写真に加筆）…… 250

表目次

表１　調査区名対応表…… 3
表２　分析資料一覧…… 220
表３　ガラスビード作成条件…… 223
表４　蛍光Ｘ線装置条件…… 223
表５　蛍光Ｘ線定量測定条件…… 224
表６　薄片観察結果（１）…… 225
表７　薄片観察結果（２）…… 226
表８　薄片観察結果（３）…… 227
表９　胎土分類結果…… 236
表10　蛍光Ｘ線分析結果…… 236

図版目次

巻頭図版１　遺物
　１　文字瓦（654）
　２　文字瓦（655）
巻頭図版２　遺物
　１　文字瓦（656）
　２　文字瓦（657）
　３　文字瓦（522）
巻頭図版３　遺物
　１　軒丸瓦（658）
　２　軒丸瓦（661）
　３　軒丸瓦（525）
　４　軒平瓦（673）
　５　軒平瓦（670）
巻頭図版４　遺物
　１　11001-4区出土甑（45）
　２　11001-4区出土弥生土器
図版１　空中写真・11001-5区遺構
　１　和泉寺跡・府中遺跡空中写真
　　（昭和36年度大阪府撮影）
　２　中世遺構検出面東部（西から）
図版２　11001-5区遺構
　１　中世遺構検出面西部（西から）
　２　弥生時代遺構検出面西部（西から）
図版３　11001-4区遺構
　１　耕作溝検出面東部（東から）
　２　中世遺構検出面東部（東から）
図版４　11001-4区遺構
　１　弥生時代遺構検出面中央部（南西から）
　２　落ち込み２土器出土状況（北東から）
　３　落ち込み２土器出土状況（東から）
　４　落ち込み２土器出土状況（北東から）
　５　落ち込み２土器出土状況（北から）
図版５　09017-2区他遺構
　１　近世遺構検出面（南東から）
　２　溝042（南東から）
　３　溝042（南から）
　４　溝042土層断面（南から）
　５　中世遺構検出面（09017-2区　南東から）
　６　中世遺構検出面（09017-2区　南西から）
　７　中世遺構検出面（10078-3区　東から）
　８　中世遺構検出面（10078-3区　北から）
図版６　09017-2区他遺構
　１　中世遺構検出面（10001-2区　北から）
　２　中世遺構検出面（09049-1区　北東から）
図版７　09017-2区他遺構
　１　中世遺構検出面（10078-2区　南から）
　２　中世遺構検出面（10078-2区　北から）
　３　溝09049-002・003（南から）
　４　溝09049-002・003（南東から）
　５　流路001（09049-1区　東から）
　６　流路001（10001-2区　西から）
　７　流路001土層断面（09049-1区　東から）
　８　流路001土層断面（10001-2区　西から）
図版８　09017-2区他遺構
　１　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（09017-2区　南西から）
　２　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（09017-2区　東から）
図版９　09017-2区他遺構
　１　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（10001-2区　北から）
　２　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（10078-3区　東から）
　３　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（10078-3区　北東から）
　４　柱穴004土器出土状況
図版10　09017-2区他遺構
　１　弥生～古墳時代遺構検出面
　　（09049-1区　北東から）
　２　自然流路土器出土状況
　　（09049-1区　南東から）
　３　自然流路土器出土状況
　　（09049-1区　北東から）
　４　自然流路土器出土状況
　　（09049-1区　南から）
　５　自然流路土層断面
　　（09049-1区　北東から）
図版11　09017-1区他遺構
　１　中世遺構検出面（11001-8区　南東から）
　２　中世遺構検出面（11001-8区　南西から）
図版12　09017-1区他遺構
　１　中世遺構検出面（09017-1区　南西から）
　２　中世遺構検出面（10078-1区　北西から）
図版13　09017-1区他遺構
　１　中世遺構検出面（10078-1区　北から）
　２　中世遺構検出面（10078-1区　西から）

図版14　09017-1区他遺構
　１　奈良時代遺構検出面
　　（09017-1区　南西から）
　２　溝033（北西から）
　３　落ち込み004（北から）
　４　土坑001土層断面（南西から）
　５　落ち込み004土層断面（北西から）
図版15　11001-4区出土土器
　包含層・落ち込み２出土土器
図版16　11001-4区出土土器
　落ち込み２出土土器
図版17　11001-4区出土土器
　落ち込み２出土土器
図版18　11001-4区出土土器
　落ち込み２出土土器
図版19　09017-2区他出土土器
　１　溝042出土土器
　２　中世遺構検出面遺構出土土器
図版20　09017-2区他出土土器
　流路001出土土器
図版21　09017-2区他出土土器
　１　流路001出土土器
　２　柱穴004・ピット062出土土器
図版22　09017-2区他出土土器
　包含層出土土器
図版23　09017-2区他出土土器
　包含層出土土器
図版24　09017-2区他出土土器
　包含層出土土器
図版25　09017-2区他出土土器
　包含層出土土器
図版26　09017-2区他・09017-1区他出土土器
　１　09017-2区他包含層出土土器
　２　09017-1区他土坑001出土土器
図版27　09017-1区他出土土器
　１　土坑001出土土器
　２　土坑001出土土器
図版28　09017-1区他出土土器
　１　土坑001出土土器
　２　土坑001出土土器
図版29　09017-1区他出土土器
　土坑001出土土器
図版30　09017-1区他出土土器、
　　11001-4区出土粘土塊
　１　09017-1区他
　　落ち込み137・包含層出土土器
　２　11001-4区出土粘土塊
図版31　11001-4区出土瓦
　平瓦
図版32　09017-2区他出土瓦
　文字瓦・軒丸瓦・軒平瓦
図版33　09017-2区他出土瓦
　平瓦
図版34　09017-2区他出土瓦
　平瓦
図版35　09017-1区他出土瓦
　文字瓦
図版36　09017-1区他出土瓦
　文字瓦・軒丸瓦
図版37　09017-1区他出土瓦
　軒丸瓦
図版38　09017-1区他出土瓦
　軒平瓦
図版39　09017-1区他出土瓦
　道具瓦
図版40　09017-1区他出土瓦
　道具瓦
図版41　09017-1区他出土瓦
　丸瓦
図版42　09017-1区他出土瓦
　丸瓦・平瓦
図版43　09017-1区他出土瓦
　平瓦
図版44　09017-1区他出土瓦
　平瓦
図版45　09017-1区他出土瓦
　平瓦
図版46　09017-1区他出土瓦
　平瓦
図版47　09017-1区他出土瓦
　平瓦
図版48　石器・石製品・金属製品
　09017-2区他・09017-1区他出土
　石器・石製品・金属製品

第１章　調査の経緯・経過と方法

第１節　調査に至る経緯

都市計画道路大阪岸和田南海線は、和泉市の中心部を南北に貫く幹線道路で、主要地方道大阪和泉泉南線のバイパス道路として整備が進められている。このうち和泉市府中町他に位置する府中工区は、府中町四丁目および府中町に位置する南側の範囲の計画が先行して進められている。この事業予定地の一部が和泉寺跡および府中遺跡の範囲に含まれていることから、平成 17 年度、平成 18 年度に、事業予定地全域で試掘・確認調査を実施した。試掘調査は、平成 17 年 10 月 12 日から 10 月 22 日に６箇所（05-1 ～ 05-6 トレンチ）、平成 19 年１月９日から２月 16 日に６箇所（06-1 ～ 06-6 トレンチ）のトレンチを設定して実施した（図１）。

平成 17 年度、平成 18 年度の試掘・確認調査の結果、05-1 トレンチを除くすべてのトレンチで土師器、須恵器、瓦器等の遺物が出土した。また、05-5・05-6 トレンチで包含層を確認し、05-5 トレンチでピット、05-6 トレンチで溝、土坑等、06-5 トレンチでピット、溝、土器溜まり等の遺構を検出した。このうち 05-1・05-2・05-3 トレンチは遺物が出土しないか極わずかであり、地形的には 05-4・05-5 トレンチから約 10m 南西の地点で約１m 下がり、その約 200m 南方を槇尾川が西流する。したがって、これらのトレンチ出土遺物は洪水堆積物由来のものと考え、05-4・05-5 トレンチから約 10m 南西の地形変換点を境として北側の道路予定地は本調査が必要と判断し、従来遺跡外としていた部分を和泉寺跡および府中遺跡の範囲拡大によって新たに遺跡範囲内とした。範囲拡大にあたっては、和泉市教育委員会と協議のうえ、地形、地割を考慮するとともに、古代の遺物が比較的多く出土した 05-4・05-5 トレンチ周辺は和泉寺跡、弥生時代および中世の遺物が多く出土した国道 480 号以北は府中遺跡として範囲拡大を行った（図２―A）。

平成 17 年度、平成 18 年度の試掘・確認調査によって必要と判断した本調査の開始後、平成 23 年３月には、道路整備にあたって国道 480 号北側の拡幅が新たに必要となり、その事業予定地の一部が遺跡範囲外であったため、試掘調査を実施した（11-1・11-2 トレンチ）。その結果、両トレンチで弥生土器、土師器が出土し、包含層を確認した。これより本調査が必要と判断し、和泉市教育委員会と協議のうえ、府中遺跡の範囲拡大を行った（図２―B）。

本調査は平成 20 年度に開始し、調査方法、道路整備事業の内容変更への対応等について都市整備部と協議を行いながら、平成 23 年度にかけて実施した。平成 20 年 11 月から平成 21 年３月に４箇所（08019-1 ～ 08019-4 区）、平成 21 年９月から平成 22 年３月に２箇所（09017-1・09017-2 区）、平成 22 年２月から９月に３箇所（09049-1・10001-2・10001-3 区）、平成 23 年２月から７月に８箇所（10078-1 ～ 10078-3・11001-4 ～ 11001-8 区）の調査区について調査を実施した。本書ではこのうち平成 21 ～ 23 年度実施の 09017-1 区、09017-2 区、09049-1 区、10001-2 区、10078-1 ～ 10078-3 区、11001-4 ～ 11001-8 区について報告する。その他の調査区は、平成 23 年度刊行の『和泉寺跡・府中遺跡』で報告済である。

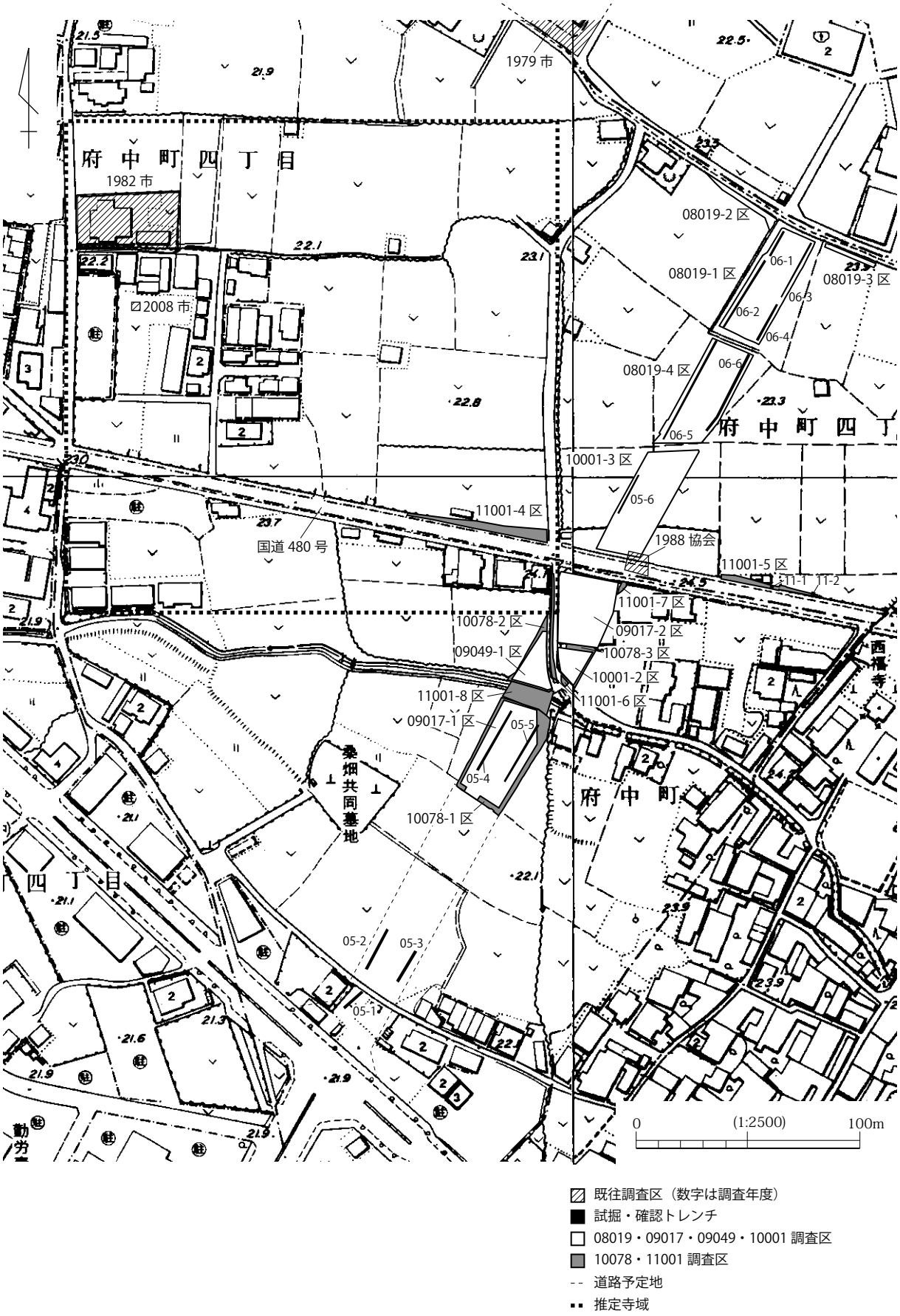


図１　調査区配置図（平成５年度大阪府作成 1:2,500 地形図に加筆）

なお、平成 20 年度から平成 22 年度の調査区名については、現地調査時と調査翌年度の年報報告時とで異なる名称を用いたものがあるため、報告書作成にあたっては調査番号を付した新たな名称を設定した（表１）。平成 21 年度、平成 22 年度については、年度内に終了する調査（09017・10001）の開始後に新たな調査の開始が決定しており、これについては新たな調査番号（09049・10078）を設定して調査を実施した。また、いずれも２ヵ年度にわたって実施することとなったため、一連の調査であっても年度開始時に新たに新年度の調査番号（10001・11001）を設定しているが、調査区名は調査番号を付した通し番号とした。

表１　調査区名対応表

本報告	年報	調査時
08019-1 区	北東区	北西区・北東区
08019-2 区		西区
08019-3 区		東区
08019-4 区	南西区	南西区・南東区
09017-1 区	09-01 区	南区
09017-2 区	09-02 区	北区
09049-1 区		B 区
10001-2 区		C 区
10001-3 区		A 区

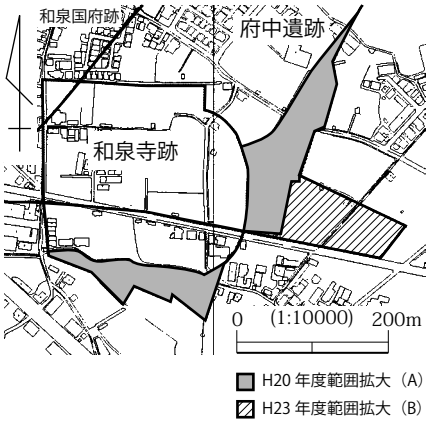


図２　遺跡範囲の変遷

第２節　発掘作業の経過

平成 21 年度は、まず、09017-1･09017-2 区の調査を平成 21 年９月１日から平成 22 年３月 17 日にかけて実施した。調査面積は 1680㎡である。掘削作業に伴う排土の置き場確保のため、09017-2 区は調査区を北東側・南西側に２分して調査を実施した。

調査は 09017-1 区から開始した。９月１日に機械掘削を開始、９月７日に人力掘削を開始し、10 月 23 日にヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、下層の包含層の有無等を確認するためトレンチ調査を行った。また、調査区南西部で検出した奈良時代の土坑が調査区外まで続くことを確認したため、道路予定地境界に設置されていた安全柵際まで調査範囲を拡大して土坑の広がりを確認した。埋め戻しは、平成 22 年１月 18 日に開始し、１月 25 日に終了した。

以上の 09017-1 区調査と一部並行して、09017-2 区の調査も開始した。平成 21 年 10 月 22 日に機械掘削を開始し、11 月４日に調査区全体の機械掘削を終えた。人力掘削は南西側から実施することとし、11 月５日に開始、12 月 15 日にヘリコプターによる空中写真測量を実施した。この段階では非常に深い溝１条を完掘できていなかったため、この周囲を残して 12 月 21 日から 24 日に埋め戻しを行った。この南西側の溝の掘削を継続しながら、平成 22 年１月５日に北東側の人力掘削を開始し、１月 22 日にヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、下層遺構検出面の調査を行い、埋め戻しを３月１日に開始、３月５日に終了した。後述するように、文字瓦が出土したことから、遺物公開も目的のひとつとして、11 月 28・30 日、12 月１日の３日間にわたって現地公開を開催し、このうち 11 月 30 日、12 月１日は、調査作業中の状況を公開した。計 132 人の方々に参加いただいた。

先述のように、09017-1･09017-2 区調査の開始後に、平成 21 年度に新たな調査の開始が決定

したため、09017-2 区調査と併行して調査を開始し、平成 22 年度に引き続いて行うこととなった。新たに決定した調査区のうち本書で報告するのは 09049-1・10001-2 区で、この２区の調査面積合計は 200㎡である。便宜上、09049・10001 という調査番号を冠した調査区名となっているが、いずれも実際には平成 21 年度から平成 22 年度にかけて実施した。09049-1 区は、平成 22 年２月 23 日に機械掘削を開始、３月１日に人力掘削を開始した。また、併行して、10001-2 区についても、３月 18 日に機械掘削を開始、４月 15 日に人力掘削を開始した。09049-1 区、10001-2 区とも、５月 25 日にヘリコプターによる空中写真測量を実施した。09049-1 区は、埋め戻しを５月 26 日に開始、５月 28 日に終了した。10001-2 区は、土層観察用畦の除去等を行った後、埋め戻しを６月２日に開始、６月４日に終了した。

調査番号 10001 を冠した一連の調査は、すでに報告した 10001-3 区を含めて平成 22 年９月に終了していたが、その後、道路整備に伴う擁壁設置予定部分や、現状が里道、水路等のため未調査であった箇所について、調査実施が決定した。そのため、平成 22 年度から平成 23 年度にかけて調査を実施することとなった。これが 10078-1 ～ 10078-3・11001-4 ～ 11001-8 区で、調査面積合計は 1320㎡である。便宜上、10078・11001 という調査番号を冠した調査区名となっているが、実際には 10078-1・3 区は、平成 22 年度から平成 23 年度にかけて調査を実施した。

調査は 10078-1 区から開始した。平成 23 年２月 18 日に機械掘削を開始、２月 21 日に人力掘削を開始した。調査区の一部は、５月に調査実施となったが、その他については埋め戻しを３月 25 日に開始し、４月４日に終了した。10078-2 区は、３月 14 日に機械掘削を開始、３月 16 日に人力掘削を開始し、３月 31 日に埋め戻しを行った。10078-3 区は、３月 30 日に機械掘削を開始、４月１日に人力掘削を開始し、４月 12 日に埋め戻しを完了した。

11001-4 区は、掘削作業に伴う排土の置き場確保のため、調査区中央に位置するスロープを境に東西に２分、さらにそれぞれを東西に２分して、４分割で調査を実施した。５月 16 日に機械掘削を開始、５月 17 日に人力掘削を開始し、７月 27 日に埋め戻しを完了した。11001-5 区は、掘削作業に伴う排土の置き場確保のため、調査区中央に位置するスロープを境に東西に２分して調査を実施した。５月 25 日に機械掘削を開始、６月１日に人力掘削を開始し、７月 26 日に埋め戻しを完了した。11001-6 区は、７月１日に機械掘削を開始、７月４日に人力掘削を開始し、７月 16 日に埋め戻しを完了した。11001-7 区は、７月９日に機械掘削を開始、７月 11 日に人力掘削を開始し、７月 12 日に埋め戻しを完了した。11001-8 区は、７月９日に機械掘削を開始、７月 13 日に人力掘削を開始し、７月 28 日に埋め戻しを完了した。すべての調査区について、７月 29 日に現地での全調査を終了した。

第３節 整理等作業の経過

現地での調査と併行して出土遺物の洗浄等を行ったが、各調査区とも本格的な整理作業は現地調査終了後に開始し、出土遺物の注記、接合、実測、復元を進めた。遺物写真の撮影は、平成

21･22 年度出土遺物の一部を平成 22・23 年度に、その他は平成 24 年度に行った。遺構、遺物の版組、トレースは平成 23 年度から平成 24 年度に、文章の作成は平成 24 年度に行った。

本書で掲載する調査区では、コンテナ 145 箱の遺物が出土している。掲載遺物の選択に際しては、図化の可能なものから、遺構出土のものを優先した。遺構出土遺物、包含層出土遺物とも遺構の時期や包含層の形成時期を示す遺物に重点をおき、他の時期に所属する遺物は特徴的なものを掲載した。また、包含層出土の遺物については、その上面または下面で検出した遺構の時期に関わる場合で、特に、遺構出土遺物からは遺構の時期を限定しにくい場合等に、重点的に掲載した。

09017-1 区で出土した奈良時代の瓦については、焼成の特徴と胎土に関連があるか、共伴する土器の胎土と差異があるかを調べるため、胎土分析を行うこととした。また、11001-4 区自然流路で出土した古墳時代の韓式系土器についても、産地を明らかにするために、その他の土師器、粘土塊と比較して胎土分析を行うこととした。いずれも平成 24 年度に委託した。

第 4 節　調査方法

地区割り　本書で報告する調査区は、大阪府作成の 10,000 分の 1 地形図を基準とすると、以下のように示される。10,000 分の 1 地形図の南西端、X=-192000 m、Y=-88000 mを基点に南北をA ～ O の 15 分割、東西を 0 ～ 8 の 9 分割する南北 6 km、東西 8 km の「第 I 区画」では、「D4」に位置する。第 I 区画を南北、東西とも 4 分割し、南西端を 1 、東方向へ順に番号をつけ北東端を 16 とする南北 1.5km、東西 2 km の「第Ⅱ区画」では、「14」に位置する。第Ⅱ区画の北東端を基点に南北を A ～ O の 15 分割、東西を 1 ～ 20 の 20 分割する南北、東西とも 100m の「第Ⅲ区画」では「2B・2C・3B・3C・3D・4B・4C・4D」に位置する。第Ⅲ区画の北東端を基点に a ～ j の 10 分割、東西を 1 ～ 10 の 10 分割する南北、東西とも 10 mの「第Ⅳ区画」では、「第Ⅲ区画 4B の 4g」を北端、「第Ⅲ区画 3D の 10a」を南端、「第Ⅲ区画 2C の 6a」を東端、「第Ⅲ区画 4C の 2j」を西端とする範囲におさまる。

遺物の取り上げは、本来、第Ⅳ区画を基本とするが、調査区の長軸が座標軸に斜交すること、調査区をさらに分割しての調査実施となった箇所も多いことから、09017-1・09017-2・09049-1・10001-2 区は、調査区の形状に即して約 10m 四

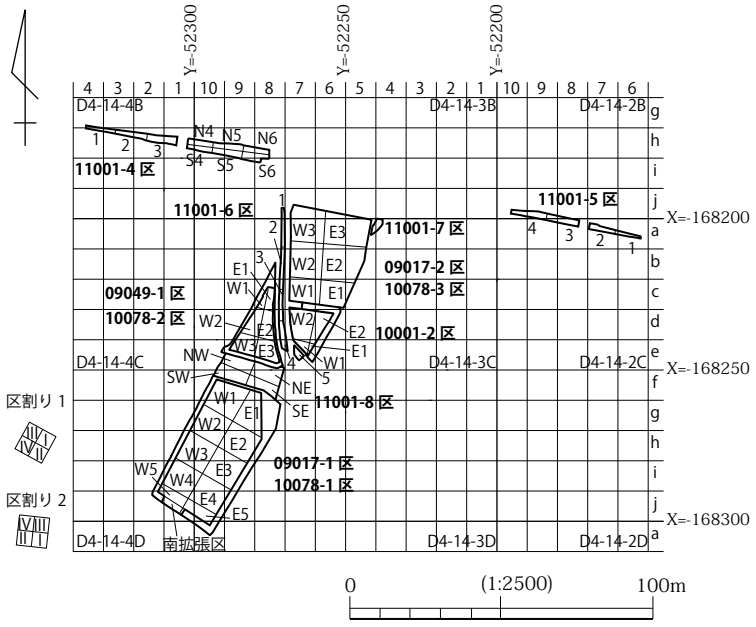


図 3　地区割り図

方の区画を設定して取り上げを行った。09017-1 区は、E1 ～ E5 区、W1 ～ W5 区を設定したほか、土坑を検出した拡張部分を南拡張区として計 11 区画を設定した。09017-2 区は、E1 ～ E3 区、W1 ～ W3 区として計 6 区画を設定した。09049-1 区は、E1 ～ E3 区、W1 ～ W3 区として計 6 区画を設定した。10001-2 区は、E1・E2 区、W1・W2 区として計 4 区画を設定した。また、09017-1・09049-1・10001-2 区の周囲を取り囲むように位置する 10078-1 ～ 10078-3 区については、上記の各区画に東西南北を付して位置を示した。また、09017-1・09017-2・09049-1・10001-2・10078-1 ～ 10078-3 区では、人力掘削の出土遺物は、各区画をさらに 5 m四方に 4 分割した Ⅰ～Ⅳ区の区画で取り上げた（ 09017-1・09049-1・10001-2・10078-1 ～ 10078-3 区：図 3 区割り 1 、09017-2 区：図 3 区割り 2）。11001-4 区は、調査区長軸方向を基準に約 10 mごとに分割して 6 区画を設定し、人力掘削の出土遺物は、 4 ～ 6 区をさらに南北に 2 分割した区画で取り上げた。11001-5･11001-6 区は、調査区長軸方向を基準に約 10 mごとに分割し、それぞれ 4 区画、5 区画を設定した。11001-7 区は調査範囲が狭小で出土遺物も少量であったため地区割りは行っていない。11001-8 区は NE・SE・NW・SW の 4 区画を設定した（図 3）。

掘削・記録　現代の盛土は機械掘削によって除去し、近世の包含層以下の層は人力で掘削した。ただし、09017−1 区の南拡張区は、拡張しての調査時には重機の搬入が不可能であったため、すべて人力で掘削した。包含層は層ごとに掘削し、前述の区画ごとに遺物の取り上げを行った。層名は、現地調査時は色調や砕屑物等により呼称したが、本書では基本層序の上層から順に層序番号を付して層名とした。なお、調査当初に個別に名称を付した層位についてその後の検討により一連の堆積層と判断した場合は、同一の層序番号に枝番号を付して層名とした。遺構掘削は、半裁または土層観察用の畦を残すことによって土層断面の観察、写真撮影、断面図の作成を行った。ただし、11001-4・11001-5・11001-8 区の中世遺構検出面では非常に多くの柱穴を検出したことから、文章や略図による記録にとどめたものもある。遺構出土の遺物は土層観察用畦等を基準に区分けをして層ごとに取り上げ、柱穴に関しては、平面検出中、柱掘方、柱痕跡の出土遺物を分けて取り上げた。ただし、狭小である等の理由により一括して取り上げたものもある。必要に応じて遺物出土状況の撮影、作図を行った。

図化は、09017-1 区の奈良時代遺構検出面、09017-2 区北東部の近世遺構検出面、09017-2 区南西部と 09049-1・10001-2 区の弥生～古墳時代遺構検出面は、委託により空中写真測量を実施し、20 分の 1 および 100 分の 1 の縮尺で行った。その他の遺構検出面は、調査区内外の 4 級基準点やこれをもとに調査区内に設置した基準点を用い、平板または実測基線の設定により縮尺 100 分の 1 、50 分の 1 等で図面を作成した。また、遺物出土状況等個別の遺構実測図は縮尺 10 分の 1 で作成し、土層断面図は縮尺 20 分の 1 で作成した。

撮影には、 6 × 7 cm 版および 35mm 版のフィルムカメラを用い、 6 × 7 cm 版は白黒フィルムで、35mm 版は白黒フィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。 6 × 7 cm 版は遺構検出面の全景や重要な遺構の撮影の際に使用した。

遺構番号　調査番号ごとに、調査区、遺構の検出面、種類に関わらず３桁の通し番号を与えた。報告にあたっては、遺構の種類を付して、溝 001 等と表記する。遺構種類のうち柱穴とピットについては、柱痕跡を確認したものを柱穴、確認していないものをピットと呼称する。

本書で報告対象となる調査区は 12 区あるが、調査区が近接し、連続した遺構が検出されている事例もみとめられる。そのため、報告にあたっては、遺構や基本層序の関係を検討した結果より、「11001-5 区」「11001-4 区」「09017−2・09049-1・10001-2・10078-2・10078-3・11001-6・11001-7」「09017−1・10078-1・11001-8」の４つに分けることとし、これを大調査区と呼称する。後２者は、含まれる調査区が多いことから、全体を指す場合など必要に応じて「09017−2 区他」「09017−1 区他」と呼称する。大調査区の同一検出面で調査番号の異なる同じ３桁の遺構番号が混在する場合は、遺構番号の前に調査番号を付することがある。また、複数の柱穴から構成される掘立柱建物については、柱穴にそれぞれ個別の遺構番号を与え、報告にあたっては、この大調査区ごとに建物１等建物にも連番を付す。また、人為的な遺構であるか断定できないものについて、落ち込みとして大調査区ごとに連番を付すものもある。また、多数の溝や柱穴を検出した際には、土層断面の記録を取った遺構および遺物が出土した遺構のみに遺構番号を付した場合もある。調査時に人為的な遺構と考えて遺構番号を付したもので、後の検討により自然の落ち込み等人為的な遺構ではないと判断したものがあるが、その遺構番号は欠番とし、他の遺構に与えることはしていない。したがって、遺構番号数と実際の遺構数は一致しない。

整理等作業　遺構図、遺物図等のトレースは、すべて Adobe 社の IllustratorCS2・CS3・CS4 のいずれかを用いた。09017-1・09017-2・10001-2 区から出土した瓦については、平成 22 年５月 30 日に開催された古代寺院史研究会で、製作技法や所属時期等について多くの教示を得た。

第５節　既往の調査成果

和泉寺跡は、白鳳時代から奈良時代の瓦が多く採集されてきたことから古代寺院跡として認識され、周辺の地割から２町（約 220 m）四方のほぼ正方位の寺域をもつと推定されてきた。和泉国府跡推定域に隣接するという立地やその規模より、一時は国分寺の役割を担ったとの説、郡領氏族である珍県主の氏寺との説がある等、和泉国における重要な寺院として位置づけられてきた。しかし、和泉寺跡周辺の発掘調査事例は少なく、また、かつては基壇上の高まりが残っていたと伝えられるものの、現在ではその痕跡はみとめられず位置も不明である。そのため、建立時期、伽藍配置、推定寺域の妥当性とも明らかでない。一方、府中遺跡は、５町または６町四方と推定されている和泉国府跡を囲み、南北約 1 km、東西約 1.2km にわたる広大な範囲をもち、発掘調査事例も多い。ここでは、本書で報告する調査地周辺を中心に既往調査成果についてまとめる。

調査地周辺で実施された発掘調査としては、昭和 54 年度の和泉市教育委員会による推定寺域外北側の調査（図１―1979 市、以下同）、昭和 57 年度の和泉市教育委員会による推定寺域内北西部の調査（1982 市）、昭和 63 年度の財団法人大阪府埋蔵文化財協会による推定寺域外南東側

の調査（1988 協会）、平成 20 年度の和泉市教育委員会による推定寺域内西部の調査（2008 市）がある。

昭和 54 年度の調査では、古墳時代の土坑、落ち込み、奈良時代から中世の掘立柱建物 4 棟、土坑が検出され、包含層から古墳時代から近世にわたる遺物が出土した。包含層からは古代の瓦も出土しており、文字瓦 1 点が見つかっている。この文字瓦は、本書で報告する 09017-1 区出土の文字瓦との関連が考えられる資料である。

昭和 57 年度の調査では、遺構は検出されなかったが、包含層から奈良時代の土器、瓦、中世の土器が出土した。

昭和 63 年度の調査では、弥生時代の流路、近世の耕作溝等が検出され、弥生時代中期から近世にわたる遺物が出土した。平成 23 年度刊行の報告書で報告した 10001-3 区の調査では、この昭和 63 年度調査区の北西部を確認し、両調査区の遺構の関係を確認することができた。

平成 20 年度の調査では、奈良時代の溝状遺構 2 条が検出された。溝状遺構 2 条は東西方向にのび、整地層から掘り込まれている。溝状遺構と包含層から、奈良時代の土器、瓦が出土している。この調査成果が、推定寺域内で奈良時代の遺構が確認された唯一の事例である。

以上のように、調査地周辺の既往調査では、弥生時代から近世にわたる遺物の出土がみとめられるものの、調査事例が少なく、遺構の分布状況は明らかでない。和泉国府跡も含めた府中遺跡の全範囲の既往調査をみると、縄文時代中期末から晩期の土坑、弥生時代中期から後期の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、中近世の溝等、縄文時代から近世にわたる各時期の遺構が確認されている。こうした府中遺跡全体の調査成果との関連を検討するに足る調査成果の蓄積がないのがこれまでの調査区周辺の状況であることから、今回の一連の調査成果は、重要な成果となると予想された。

本書で報告する調査成果と一連の調査である平成 23 年度刊行の報告書に記載した調査成果については第 8 章でも触れるが、ここで簡単に調査成果をまとめておく。08019-1・08019-2・10001-3 区の主な調査成果として、弥生時代～古墳時代の自然流路と土器溜まり、中世の掘立柱建物がある。土器溜まり等で出土した庄内式併行期の土器には、淡路島との関係を示す土器が比較的多く含まれており、当時の地域間交流を考えるうえで重要な成果となった。また、府中遺跡の東端部における土地利用の変遷が明らかとなり、古代寺院の推定寺域の根拠とされてきた周辺地割の形成過程についての情報も得ることができた。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

和泉寺跡、府中遺跡の所在する和泉地域は、和歌山県との境となる和泉山脈と、その西方の丘陵地帯、それに連続する洪積段丘、海岸線までの沖積平野から成る。和泉山脈は、標高 800 m前後と比較的なだらかで、領家花崗岩類、泉南酸性火砕岩類を基盤層に、礫岩、砂岩、泥岩が堆積している。丘陵地帯は、礫岩、砂岩、泥岩が互層を成す大阪層群によって形成される。和泉山脈を水源とするいくつかの河川がこの丘陵地帯を西流して大阪湾へと注いでおり、和泉地域はこれらの河川によって分断されている。丘陵地帯の縁辺には、この中小河川に沿って河岸段丘が広がっており、高位段丘、中位段丘、低位段丘に分かれる。和泉地域で主に発達しているのは中位段丘で、高位段丘、低位段丘は部分的にしかみとめられない。沖積平野は大阪湾沿岸および河川沿いにみとめられるが、分布範囲は狭い。

和泉寺跡、府中遺跡は、和泉市北西部、南東から北西へ蛇行しながら流れる槇尾川の右岸に位置し、中位～低位段丘上に広がっている（図４）。槇尾川も丘陵地帯を西流する河川のひとつであり、南側を流れる松尾川、牛滝川と合流し、大津川となって大阪湾へ注ぐ。調査地の標高は 23 m前後である。調査地周辺の地形はほぼ平坦であるが、約 500 m南方を流れる槇尾川周辺では、槇尾川へ向かって北から南へ緩やかに下降する地形となっている。槇尾川は現在では流路が固定

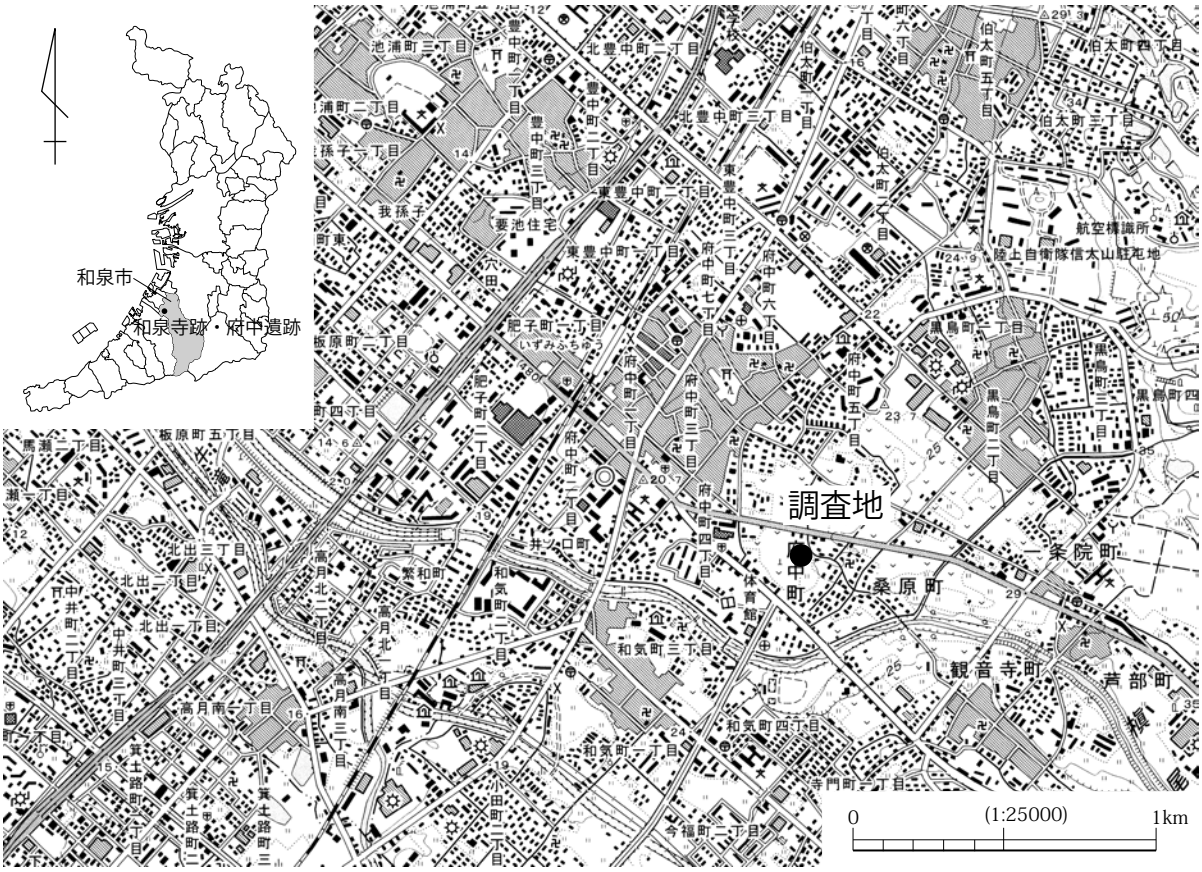


図４　調査地位置図（国土地理院 1:25,000 地形図「岸和田東部」平成 19 年 6 月 1 日発行に加筆）

されているが、近年までしばしば氾濫をおこしていたと伝えられている。今回の調査でも旧河川に由来すると考えられる洪水堆積層を確認している。

第２節　歴史的環境

和泉寺跡、府中遺跡の歴史的環境について、周辺市域も含め、大津川流域を中心に概観する。本書で報告する調査で遺物、遺構が顕著である弥生時代以降を中心にみていく。以下、本文中の遺跡名に付した番号は図５に対応する。

旧石器時代　和気遺跡（25）で翼状剥片が、大床遺跡、伯太北遺跡（６）、万町北遺跡、観音寺山遺跡（29）、上フジ遺跡、西山遺跡等で国府型ナイフ形石器が見つかっている。遺構は確認されておらず、遺物も後世の撹乱を受けた状況で出土するものが多いが、遺物の分布より丘陵上や高位段丘上、中位段丘上等比較的高域に遺跡が立地しているものと推定できる。

縄文時代　草創期では、伯太北遺跡、万町北遺跡、三田遺跡等で有舌尖頭器が出土しているが、遺構は確認されていない。早期も詳細な様相は明らかでなく、仏並遺跡で土器が出土しているのが数少ない例である。前期では、仏並遺跡、池田寺遺跡（46）、小田遺跡（35）で土器が出土しているが、遺構については明らかでない。

中期になると、仏並遺跡では後期前半まで存続する竪穴住居や土器棺墓が、府中遺跡（２）では中期末の土坑が検出されている。また、小田遺跡、万町北遺跡等でも土器が出土している。特に中期末には、遺跡数の増加と低域への展開が顕著であり、土器の散発的な出土にとどまる前期以前と比べると、遺構の様相が明瞭となる。

後期には、仏並遺跡で中期から遺構が存続する。府中遺跡、池田寺遺跡、池上曽根遺跡（３）万町北遺跡、軽部池西遺跡（37）、山ノ内遺跡（38）、高位段丘上に立地する山直中遺跡等で土器が出土しており、遺跡数のさらなる増加と生活域の拡大がみとめられる。本書で報告する調査でも、遺構の検出はないものの、後期の土器が出土している。

晩期には、仏並遺跡、府中遺跡、池上曽根遺跡、万町北遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡で引き続き土器が出土する。小田遺跡でも土器の出土がみとめられる。後期と比べると遺跡数が減少し、遺構の様相もやや不明瞭となるが、立地の多様性は引き継がれている。

弥生時代　大津川流域で最古の弥生時代集落遺跡は、下流域右岸に位置する池浦遺跡で、前期中葉の溝が確認されている。前期後葉には、同じく下流域右岸に、環濠をもつ大集落である池上曽根遺跡が現れ、竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。また、虫取遺跡でも前期後葉から中期前葉の溝、土坑等が検出されており、田治米宮内遺跡でも前期後葉の土器が出土している。これまで確認されている前期の遺跡は少数ではあるが、低位段丘や沖積平野等低域に立地する傾向がみとめられる。

中期前葉には、池浦遺跡、虫取遺跡は廃絶するが、池上曽根遺跡では集落域の拡大がみとめられる。府中遺跡でも中期前葉の土器が出土しているが、遺構の様相は明らかでない。中期中葉には、

池上曽根遺跡においてさらなる集落域の拡大がみとめられ、中期後葉には最盛期を迎える。また、中期後葉には、府中遺跡、槇尾川中流域の万町北遺跡、池田下遺跡（44）で竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、松尾川右岸の寺田遺跡（30）、左岸の軽部池遺跡（34）でも竪穴住居が確認されている。また、槇尾川と松尾川に挟まれた和気遺跡でも土坑等が検出されており、小田遺跡、山ノ内遺跡、田治米宮内遺跡等でも中期の土器が出土している。以上のように、中期の特に後葉には遺跡の増加が顕著で、集落の立地も、主として低域に立地する前期と比較すると、多様な立地に展開する様相がみとめられる。

後期になると、池上曽根遺跡では、環濠の機能が失われて居住域が分散化し、中期に営まれていた他の集落遺跡も、その多くが縮小、廃絶に至る。その中で、府中遺跡、万町北遺跡、小田遺跡等では引き続き遺構が検出されており、特に府中遺跡では、大規模な方形周溝墓が確認されるようになる。一方、丘陵上には、観音寺山遺跡、惣ヶ池遺跡（12）が現れ、竪穴住居が検出されている。いずれも広義の高地性集落で、観音寺山遺跡では、117基もの竪穴住居が確認されている。後期後葉には、今木遺跡、軽部池西遺跡、山ノ内遺跡、西大路遺跡で竪穴住居が検出されており、再び低域への集落の展開がみとめられる。

以上のように、大津川流域における弥生時代の集落の様相は、前期には低域に集落が営まれ、中期の特に後葉に広域にわたる集落の展開と増加がみとめられる。後期には、池上曽根遺跡等中期の大集落が規模を縮小する一方、丘陵上に高地性集落が現れ、後期後葉には再び低域にも中小集落が形成される、という展開を示す。

古墳時代　庄内式併行期には、高地性集落が廃絶する一方、府中遺跡や隣接する豊中遺跡（８）では引き続き集落が営まれる。また、和気遺跡、上町遺跡、七ノ坪遺跡（５）でも竪穴住居等が検出されており、寺田遺跡でも、庄内式併行期から古墳時代前期頃の掘立柱建物が確認されている。本書で報告する調査でも、弥生時代後期から古墳時代の土器が出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期頃と考えられる柱穴等も検出した。

前期には、府中遺跡、和気遺跡、豊中遺跡、七ノ坪遺跡、寺田遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡、西大路遺跡等が庄内式併行期から存続する。また、三田遺跡では多数の土壙墓が確認されている。前期後葉には、松尾川左岸の丘陵端に位置する摩湯山古墳（33）、和泉丘陵北端の和泉黄金塚古墳、久米田の貝吹山古墳と、前方後円墳が築造される。

中期には、府中遺跡、和気遺跡、寺田遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡、西大路遺跡等で引き続き集落が営まれ、寺田遺跡、田治米宮内遺跡は後期にかけて盛行期となる。中期後半には、山直北遺跡で竪穴住居が検出されている。久米田古墳群では風吹山古墳等が築造される。また、陶邑窯跡群で須恵器生産が開始され、集落遺跡でも出土土器の多くを須恵器が占めるようになっていく。

後期には、寺田遺跡等が中期から存続する。後期後半には、万町北遺跡、二俣池北遺跡、上フジ遺跡等で竪穴住居が検出されており、新たな集落遺跡が現れる。また、群集墳が多く築かれる

ようになる。

飛鳥時代～奈良時代　飛鳥時代には、万町北遺跡、二俣池北遺跡が存続する。池田寺遺跡、水込遺跡でも集落が形成されるが、古墳時代後期と比較すると希薄となる。奈良時代には、７世紀から存続する集落遺跡に加え、府中遺跡、板原遺跡、小田遺跡、山直北遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡等でも集落が形成され、遺跡の増加がみとめられる。万町北遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、硯、墨書土器等特徴的な遺物の出土が注目される。

この時期に建立されたとみられる古代寺院には、信太寺跡、和泉寺跡（１）、坂本寺跡（18）、池田寺跡（45）、和泉国分寺跡等がある。信太寺跡は信太山丘陵の北端部に位置し、磚積基壇が検出されている。７世紀後半に建立された信太首の氏寺と考えられている。和泉寺跡、坂本寺跡、池田寺跡、和泉国分寺跡は、槇尾川流域に位置しており、前３者はいずれも右岸に約２km の間隔をおいて位置しており、古代寺院の密集する地域であった。和泉寺跡西方には南北方向の熊野街道（24）が、槇尾川流域には河内国南部へ続く東西方向の街道があり、寺院建立にあたり、街道との位置関係が選地の重要な要素であったことがうかがえる。和泉寺跡は、出土瓦から７世紀後半頃の建立と想定されているものの、伽藍配置等詳細は明らかでない。坂本寺跡は、塔、講堂等が調査されており、法起寺式伽藍配置であることが明らかとなっている。７世紀中葉に建立された坂本臣の氏寺と考えられている。池田寺跡は、伽藍配置は明らかでないが、８世紀頃の瓦窯や７～９世紀の掘立柱建物が検出されており、７世紀後半に建立された池田首の氏寺と考えられている。和泉国分寺跡は調査がほとんどなされておらず詳細は明らかでない。『続日本後紀』に承和６年（839）に和泉郡の安楽寺が和泉国分寺とされたと記されており、これ以前には和泉寺跡が国分寺の役割を担ったとの説もある。

なお、信太寺跡、坂本寺跡、池田寺跡では文字瓦が出土しており、北方に位置する大野寺跡でもより多数の文字瓦が出土している。本書で報告する調査区でも、和泉寺跡では初となる文字瓦が５点出土した。また、寺院を構成するものではないが、奈良時代の遺構を検出し、このうち土坑からは瓦等寺院関連の遺物が多数出土した。

当初は河内国に含まれていた和泉地方であるが、霊亀２年（716）、大鳥、和泉、日根の３郡を割いて「和泉監」が設けられる。天平 12 年（740）に再び河内国に併合されるが、天平宝字元年（757）には、河内国から大鳥、和泉、日根の３郡が分かれて和泉国が設置される。和泉国府跡（９）は和泉国の国衙と考えられているが、既往の調査では、国衙に関係する明確な遺構は見つかっていないことから、国衙を他の遺跡に比定する説もある。

平安時代　池田寺遺跡、万町北遺跡、二俣池北遺跡、水込遺跡、山直北遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡等が奈良時代から存続し、和気遺跡、山直中遺跡でも集落が現れる。万町北遺跡では、「大同５年」（810）と記された木簡が出土しているのが注目される。

中世　和気遺跡、二俣池北遺跡、水込遺跡、山直中遺跡等で引き続き集落が営まれ、池田寺遺跡でも集落跡が見つかっている。また、万町遺跡では、14 世紀前半の土坑墓や 15～16 世紀の火葬墓、

1 和泉寺跡　2 府中遺跡　3 池上曽根遺跡　4 曽根城跡　5 七ノ坪遺跡　6 伯太北遺跡　7 大福寺跡
8 豊中遺跡　9 和泉国府跡　10 国府城跡　11 聖神社遺跡　12 惣ヶ池遺跡　13 伯太藩陣屋跡　14 信太千塚古墳群
15 丸笠山古墳　16 王塚古墳　17 黒鳥山荘遺跡　18 坂本寺跡　19 願成遺跡　20 陶邑窯跡群大野池地区
21 大野池遺跡（北地区）　22 大野池遺跡（南地区）　23 山田古墳群　24 熊野街道　25 和気遺跡　26 観音寺城跡
27 狐塚古墳　28 寺門古墳群　29 観音寺山遺跡　30 寺田遺跡　31 摩湯北遺跡　32 イナリ古墳　33 摩湯山古墳
34 軽部池遺跡　35 小田遺跡　36 軽部池　37 軽部池西遺跡　38 山ノ内遺跡　39 山県北遺跡　40 和泉丘陵 A1 地点遺跡
41 和泉丘陵 A87 地点遺跡　42 池田山遺跡　43 唐国池田山古墳群　44 池田下遺跡　45 池田寺跡　46 池田寺遺跡　47 池田寺瓦窯

図５　和泉寺跡・府中遺跡周辺の主要遺跡

土坑墓が検出されている。本書で報告する調査でも、和泉寺跡および府中遺跡の東端で中世の多数の柱穴等が見つかっており、集落の存在が確認できた。

また、軽部池西遺跡、二俣池北遺跡では水田が、和気遺跡等では条里制に則った区画溝が確認されており、生産関連遺構もみとめられる。和泉郡域の条里制は、海岸線に平行する方向、N―46°―E の傾きをもっており、中世以降、この条里制に則る畦畔や溝の検出例が顕著となる。本書で報告する調査でも、府中遺跡の東端で水田耕作に関わる遺構を検出した。

近世　中世に引き続き、各所で条里制に則った区画溝が確認されている。本書で報告する調査でも、府中遺跡の東端で貯水の機能をもつと推定できる溝等、水田耕作に関わる遺構を検出した。

第３章　11001-5 区の調査成果

第１節　基本層序（図６）

層序は、上層から順に現代の作土である灰色土（第Ⅰ層、層厚 0.1 ～ 0.2 m）、現代の床土である明褐色土（第Ⅱ層、層厚 0.05 m）、中世以降の包含層であるにぶい黄褐色細砂（第Ⅲ層、層厚 0.1 ～ 0.25 m）、中世以降の包含層である黄褐色細砂（第Ⅳ層、層厚 0.05 ～ 0.1 m）、古墳時代以降の包含層である中礫混じり褐色細砂～砂シルト（第Ⅴ層、層厚 0.1 ～ 0.4 m）、古墳時代以降の包含層である褐色砂シルト～粘シルト（第Ⅵ層、層厚 0.1 ～ 0.45 m）、遺物が出土していない中礫・褐色粘シルト混じり褐色粗砂（第Ⅶ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m）、遺物が出土していない中礫混じり褐色粗砂（第Ⅷ層、層厚 0.15 m以上）である。なお、調査区は中央に位置する幅約３mのスロープを境に２分されるため、土層図も２分して示したが、基本層序には共通性がみとめられる。

第Ⅰ層、第Ⅱ層は、道路整備予定地となる以前の作土および床土である。第Ⅰ層は、層厚の差はあるが、現代の撹乱によって削られた部分を除き、調査区のほぼ全域に分布する。第Ⅱ層は、調査区の東部のみに分布する。第Ⅰ層上面の高さは 23.2 ～ 23.5 mで、高低差がある。第Ⅰ層下面の高さは調査区東部では 23.4 mと高く、西部では 23.0 ～ 23.1 mと低い。第Ⅱ層下面の高さは第Ⅰ層と同様北部では 23.3 ～ 23.4 mと高く、西部では 23.0 ～ 23.1 mと低い。このように第Ⅰ層、第Ⅱ層とも下面が全体的に東から西へ下がっていることから、削平の影響があるとしても、第Ⅰ層上面も同様に東から西へ下がっていたものと推定できる。

第Ⅲ層は、層厚の差はあるが、調査区の全域に分布する。第Ⅲ層下面の高さは東部で 23.1 m、層厚 0.25 mで、西側に向かってやや上がり中央部よりやや東で最も高く 23.2 m、層厚 0.1 m、西側へ向かって次第に下がり、最も低い西部で 22.9 m、層厚 0.1 mである。第Ⅳ層は、調査区東部のみに分布するが、層厚が薄いため明瞭に確認できない箇所も多く、断続的な分布である。第Ⅳ層下面の高さは 23.2 ～ 23.3 mである。第Ⅳ層上面では、中世以降の耕作に伴う溝群を検出しており、第Ⅲ層は水田作土、第Ⅳ層はこれに伴う床土と考えられる。第Ⅲ層は弥生時代から中世の、第Ⅳ層は弥生時代から古墳時代の遺物を含む。下層出土遺物等より形成時期は 12 世紀頃以降と推定できるが、下限は明らかでなく、近世まで下る可能性もある。

第Ⅴ層は、調査区全域に分布する。第Ⅴ層下面の高さは最も高い北部で 23.0 m、層厚 0.15 mで、西側へ向かって下がるとともに層厚が厚くなり、調査区中央部よりやや東で 22.8 m、層厚は最も厚く 0.4 mとなる。調査区中央部よりやや西で最も低く 22.6 m、層厚 0.35 mとなり、そこから西側へ向かって上がり、調査区西部で 22.8 m、層厚 0.1 mとなる。第Ⅴ層上面では、中世と考えられる柱穴多数と溝を検出した。また、調査区東部では、第Ⅳ層の分布範囲外で、第Ⅳ層上面検出遺構に連続する溝群も検出した。第Ⅴ層は弥生時代から古墳時代の遺物を含む。形成時期は弥生時代以降と考えられるが、下限は明らかにし得ず、中世まで下る可能性もある。

第Ⅵ層は、層厚の差はあるが、調査区西部のみに分布する。第Ⅵ層下面の高さは調査区中央部

よりやや西で 22.7 m、層厚 0.05 ～ 0.1 mで、西側へ向かって下がり、22.4 m、層厚 0.45 mになる。そこから西側へ向かって上がり、調査区西部で 22.6 m、層厚 0.2 mとなる。第Ⅵ層と直上層の第Ⅴ層との差異は明瞭ではなく、一連の層とも考えられるが、調査区西端で第Ⅵ層上面に焼土溜まり 1 基を検出した。この焼土溜まりが人為的な遺構であるかは断定できないが、その可能性を考慮し、第Ⅴ層と区別して基本層序を設定することとした。第Ⅵ層は、弥生時代の遺物を含み、形成時期は弥生時代以降と考えられるが、下限は明らかでなく、古墳時代まで下る可能性がある。

第Ⅶ層は、調査区西側のみに断続的に分布する。第Ⅶ層下面の高さは、調査区中央部で 22.6 m、層厚 0.15 mで、西側へ向かって下がり、22.3 mになった後、西側に向かって上がり、調査区西部で 22.5 m、層厚 0.05 mとなる。第Ⅶ層上面では、弥生時代後期頃と考えられる柱穴を検出した。第Ⅶ層からは遺物は出土していない。第Ⅶ層上面遺構検出遺構の時期から、形成時期は弥生時代後期以前と推定できるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

第Ⅷ層は、調査区全域に分布する。土層観察用溝により層厚 0.15 m以上であることを確認したが、下面を確認することはできなかった。他の調査区の調査成果より、第Ⅴ～Ⅶ層は洪水堆積

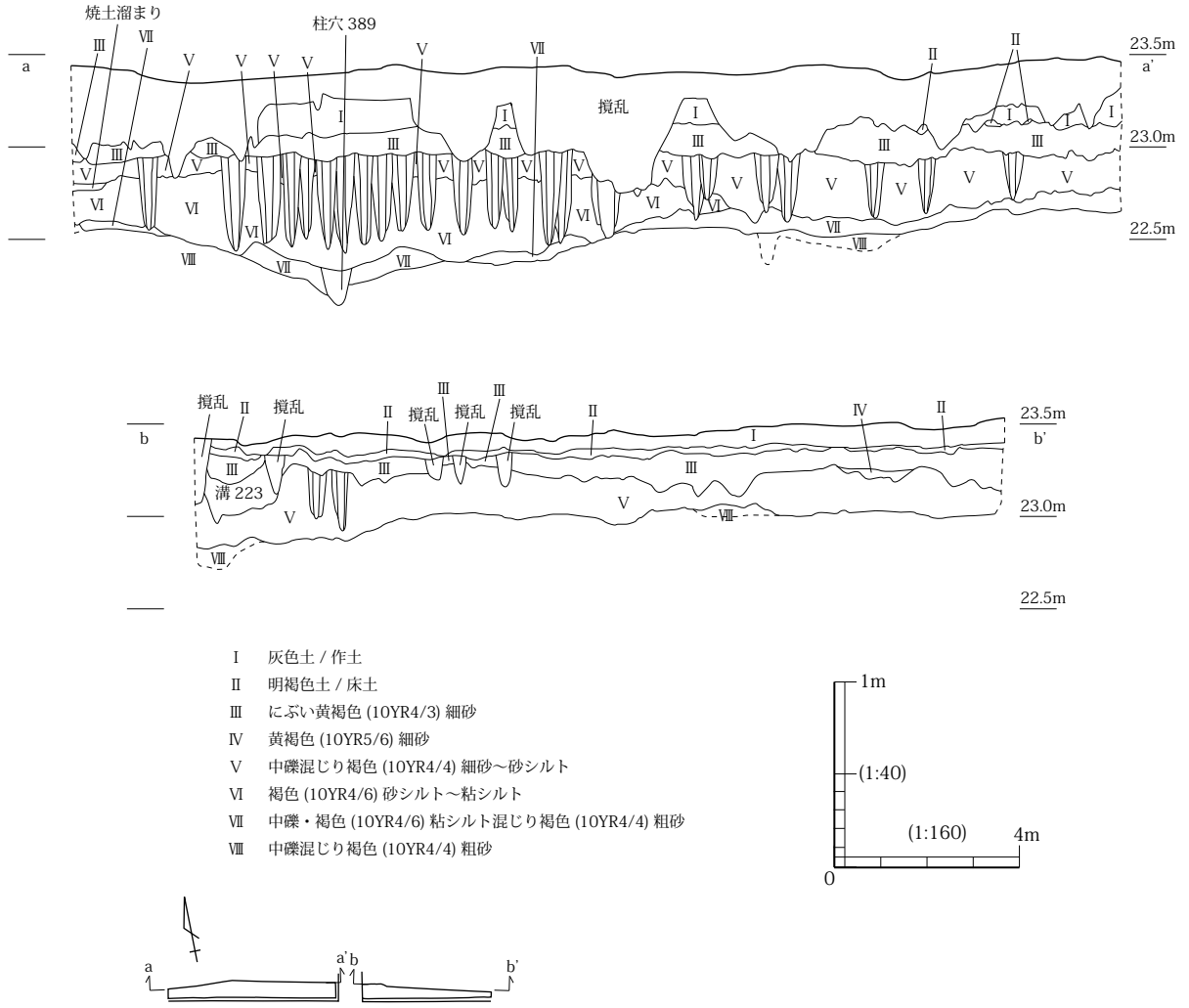


図６　11001-5 区土層図

物、第Ⅷ層上面は自然流路の痕跡であると推定できる。また、同様に他の調査区の成果より、第Ⅷ層が活発な堆積作用による洪水堆積物であることも推定できる。なお、調査区西部では、第Ⅶ層の堆積の薄い部分や分布範囲外で、第Ⅶ層上面検出遺構に連続する柱穴を検出した。第Ⅷ層からは遺物は出土していない。第Ⅶ層と同様、形成時期は弥生時代後期以前と推定できるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

以上のように、11001-5 区では、３面の遺構検出面を確認した。第Ⅲ層を除去した第Ⅳ層上面では、中世以降の耕作に伴う溝群を検出した。第Ⅲ層または第Ⅳ層を除去した第Ⅴ層上面では、中世と考えられる柱穴、溝を検出した。第Ⅵ層を除去した第Ⅶ層上面では、弥生時代後期頃と考えられる柱穴を検出した。以下ではこれらの遺構検出面を、順に「耕作溝検出面」「中世遺構検出面」「弥生時代遺構検出面」と呼称する。また、人為的遺構であるかは判断できないが、第Ⅵ層上面では焼土溜まりを検出したほか、人為的遺構ではないが、第Ⅷ層上面は、自然流路の痕跡と推定できる。

第２節　耕作溝検出面の調査（図７・８）

基本層序第Ⅳ層上面で検出した。遺構は溝のみで、調査区の東部で確認している。第 1 節で述べたように、第Ⅳ層は非常に薄い部分もあることから、直下層の第Ⅴ層上面まで掘削して検出した遺構もある。

溝は８条検出した。本来一連のものが後世の削平により断絶したと判断できるものは 1 条として扱った。埋土に共通性がみとめられたため、特徴的なものを中心に遺構番号を付し、その他のものについては番号を付していないものがある。溝の主軸方向分布範囲は、N―0 ～ 10°―E、N―２～４°―W とややばらつきがあるが、いずれも南北方向である。

溝の最大幅は、0.05 ～ 0.1 m、深さは溝 220 が 0.1 m、その他は 0.02 ～ 0.05 mである。

埋土はいずれも暗灰黄色偽礫混じり黄褐色細砂である。

遺物は出土しなかった。

これらの溝は、いずれも耕作に伴う溝と考えられ、鋤溝の可能性が高い。平成 23 年度に報告した 08019-1 区調査区など周辺の他調査区でも同様の特徴をもつ溝が多数検出されており、溝埋土の植物珪酸体分析によりイネが多量に検出されている事例もあることから、11001-5 区のこれらの溝についても、水田耕作に伴うものと判断できる。以上より、第Ⅲ層は水田作土、第Ⅳ層はこれに伴う床土と考えられる。作土層である第Ⅲ層は瓦器等中世の遺物を含むこと、下層の中世遺構検出面の遺構から瓦器が出土していることから、少なくとも 12 ～ 14 世紀頃には水田耕作が行われたものと推定できる。しかし、第Ⅲ層直上層は現代作土または床土であるため下限は明らかでなく、近世まで下る可能性もある。

なお、調査区西部では遺構を確認していないが、基本層序第Ⅲ層は調査区の全域に分布する。また、西部では第Ⅳ層がみとめられないことから、遺構の空白域があるのは耕作の継続により削

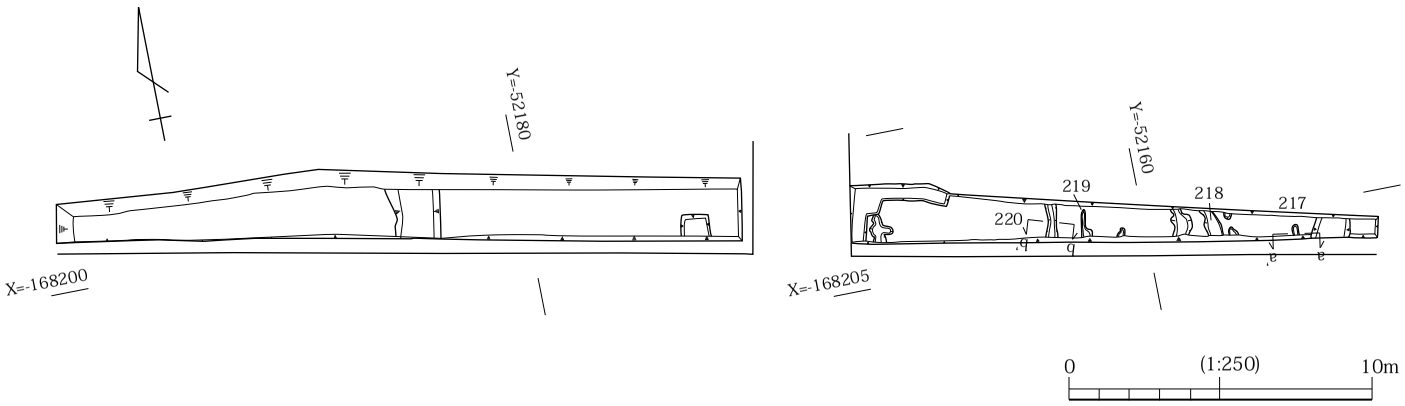
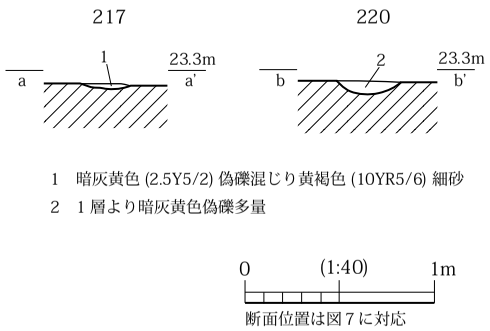


図７　11001-5 区耕作溝検出面全体図



1　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
2　1 層より暗灰黄色偽礫多量

図８　11001-5 区溝 217・220 断面図

平を受けたためか、深さの浅いものが多く、平面的に検出できていないためと考えられ、水田耕作は調査区全域で行われていたものと推定できる。

第３節　中世遺構検出面の調査（図９、図版１―２・２―1）

基本層序第Ⅴ層上面で検出した。遺構は柱穴 142 基、溝２条である。遺構は調査区全域で検出した。第Ⅴ層は上部のマンガン沈着が顕著で遺構検出が困難であったため、上部 0.05 m程度を掘削して検出した遺構もある。

柱穴（図９～ 11）　柱穴は調査区西部で特に密集して検出した。調査区の幅が狭いこともあり、いずれも構成する建物を明らかにできなかった。非常に多くの柱穴を検出したこと、埋土に共通性がみとめられることから、規模が特徴的なもの、遺物が出土したものを中心に遺構番号を付し、その他のものについては遺構番号を付していないものがある。また、これら以外に、調査区壁断面の精査によりこの面に伴うと考えられる柱穴 26 基を確認した。

平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.5 m、柱痕跡の平面規模は直径 0.1 ～ 0.2 mである。柱掘方は、調査区東部では 0.1 ～ 0.15 mと浅いものが、調査区西部では 0.4 ～ 0.5 mと深いものが多く、検出位置との相関関係がみとめられる。一方、平面規模と深さとは比例しない。調査区東部では、遺構検出面である第Ⅴ層の層厚が比較的薄く、また、下層は第Ⅵ・Ⅶ層がみとめられず礫混じりの第Ⅷ層が直下に堆積するが、調査区西部では、第Ⅴ層または第Ⅵ層が厚く堆積する。後述のように、後世の削平の影響もあるとしても、掘削の容易な第Ⅴ層・第Ⅵ層の厚い部分では掘方を深く掘ったために深さに差異が生じた可能性が考えられる。

埋土は、褐色砂または褐色シルトで、礫の混じるものもある。基本層序第Ⅴ・Ⅵ層に類似しており、これらの層に由来するものと考えられる。また、調査区中央部の柱穴 307 ～ 309 等では掘方掘削の際に埋土を掘削しており先後関係がみとめられる。調査区西部の密集部では特に顕著である。

遺物は、中世の瓦器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器や土師器、弥生土器が出土している。特に弥生時代後期から庄内式併行期の土器が多いことから、弥生時代から古墳時代の遺物は、下層の第Ⅴ・Ⅵ層に由来するものと考えられる。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は、柱穴 313 から土師質羽釜羽部 1 点、柱穴 326 から瓦器 1 点が出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。混入遺物ではあるが、下層の第Ⅴ・Ⅵ層に由来する可能性のあるものとして、柱穴 339 から出土した須恵器 1 点（遺物番号２に該当、以下同様に表示）、柱穴 334 から出土した弥生土器 1 点（３）を図化した。

溝 223（図 11）　調査区中央部で検出した。南北方向から東西方向に屈曲するが、両端とも調査区外にのびる。長さは南北方向に 1.4 m以上、東西方向に 2.0 m以上、幅は南北方向部分で 0.9 m以上、東西方向部分で 0.4 m以上、深さ 0.05 ～ 0.25 mである。主軸方向は、南北方向部分で

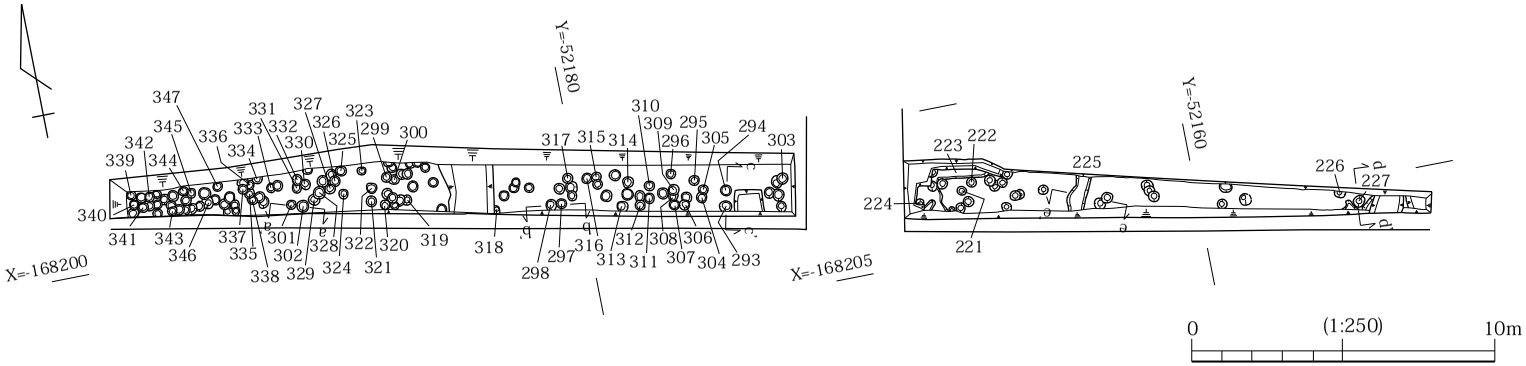


図９　11001-5 区中世遺構検出面全体図

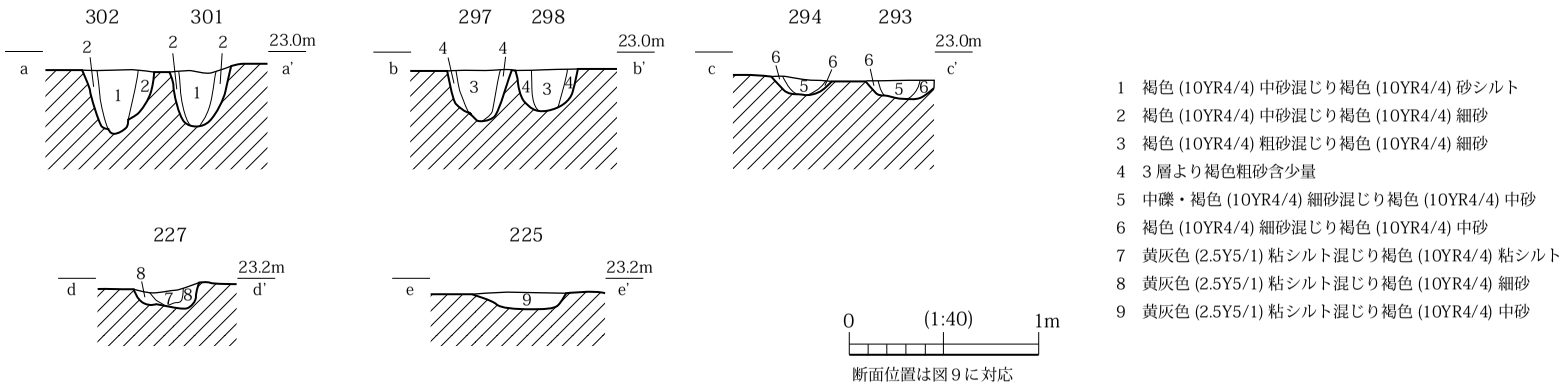


図 10　11001-5 区柱穴 227・293・294・297・298・301・302、溝 225 断面図

N―13°―W、東西方向部分でN―81°―Wである。柱穴224など計３基の柱穴に埋土を掘削されており、先後関係がみとめられる。遺物は、遺構の時期を示すものではないと考えられるが、須恵器、土師器が出土し、うち須恵器１点を図化した（１）。

溝225　調査区東部で検出した。南北方向で、両端とも調査区外にのびる。長さ1.3 m以上、幅0.5 m、深さ0.1 mである。主軸方向はN―23°―Eである。遺物は、遺構の時期を示すものではないと考えられるが、土師器、弥生土器が出土した。小片で、図化できるものはなかった。

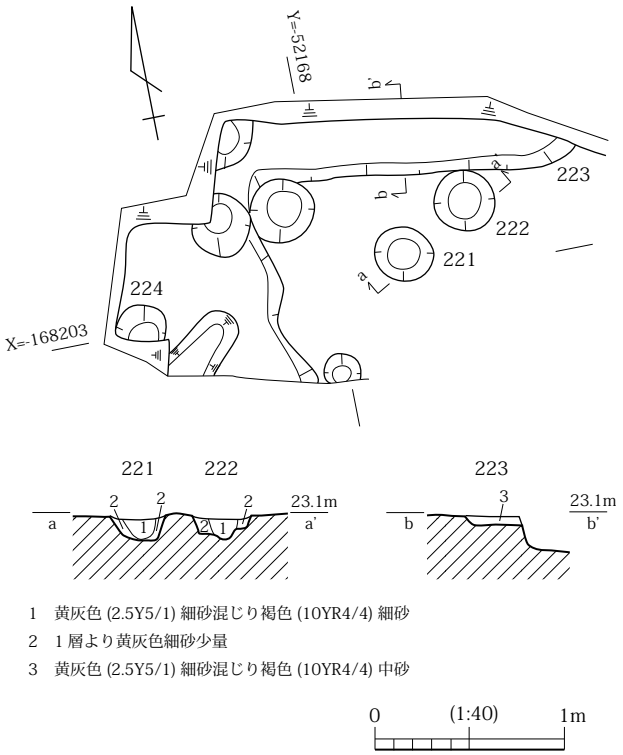


図11　11001-5区柱穴221・222、溝223 平面図・断面図

小結　中世遺構検出面の遺構出土遺物は小片が大半であり、また、多くは古代以前の混入遺物と考えられるもので、遺構の時期を示すものではない。少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。瓦器の出土から、12～14世紀頃と考えられるが、上層の耕作溝検出面の下限も明らかでなく、さらに時期が下る可能性も否定できない。ここでは、中世と広く捉えておき、第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

溝の主軸方向の分布範囲は広いが、耕作溝検出面の遺構と同様、南北方向を志向している可能性がある。柱穴に、深さ0.1 mのものがあることから、本来の地表面から0.4 mほどは削平されているものと推定できる。建物等の構成を明らかにできなかったが、多数の建物が存在していたこと、特に密集する調査区西部では、数度にわたる建て替えが行われたものと推定でき、時期幅があるものと考えられる。

第４節　弥生時代遺構検出面の調査（図12、図版２―2）

第Ⅶ層上面で検出した。遺構は柱穴24基を検出し、調査区西部のみで検出した。第１節で述べたように、第Ⅶ層は調査区西部のみに分布しており、遺構検出範囲も西部のみである。また、第Ⅶ層は非常に薄い部分もあることから、直下層の第Ⅷ上面まで掘削して検出した遺構もある。

柱穴（図13）　調査区の幅が狭いこともあり、いずれも構成する建物を明らかにできなかった。

平面形は円形または隅丸方形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径0.3～0.4 mまたは一辺0.4～0.6 mで、深さ0.1～0.3 m、柱痕跡の平面規模は直径0.2～0.4 mである。

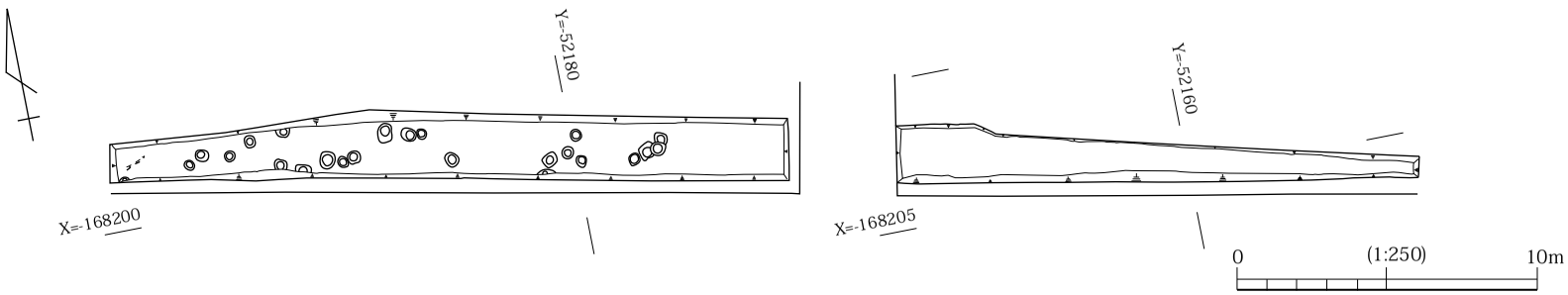
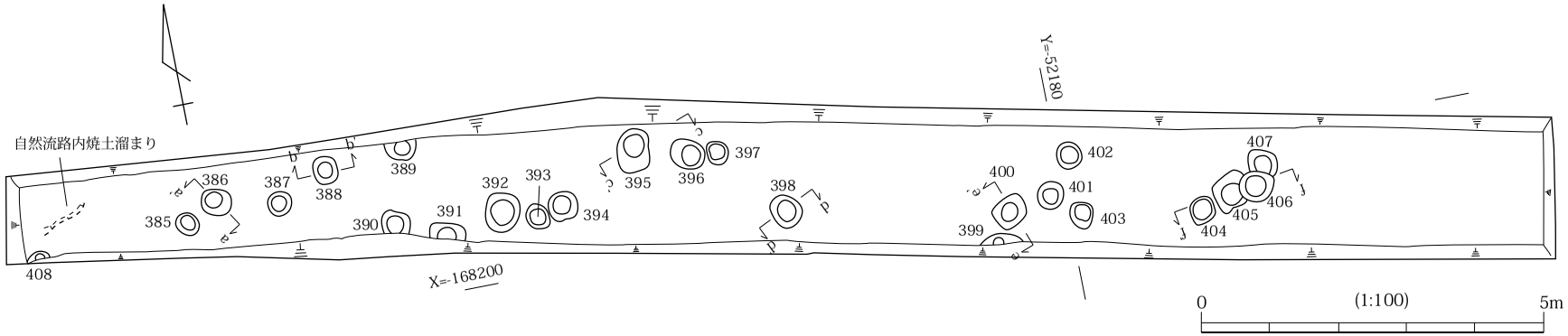
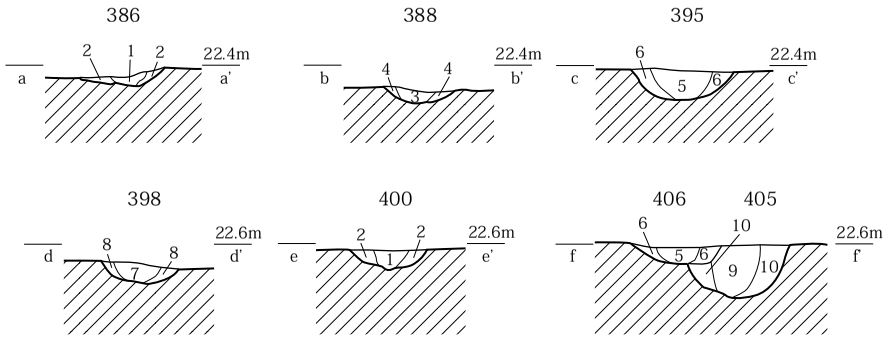


図 12　11001-5 区弥生時代遺構検出面全体図





1　褐色 (10YR4/4) 粗砂混じり褐色 (10YR4/6) 粘シルト
2　1 層より褐色粗砂多量
3　褐色 (10YR4/4) 細砂混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
4　3 層より褐色細砂少量
5　中礫・にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中砂混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト
6　5 層よりにぶい黄褐色中砂多量
7　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中砂混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト
8　7 層よりにぶい黄褐色中砂多量
9　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト
10　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト

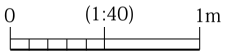


図 13　11001-5 区弥生時代遺構検出面柱穴平面図・断面図

柱掘方の深さは、柱穴 395・405 など平面形が方形のものは 0.2 ～ 0.3 mとやや深いものが多い傾向があるものの、同じく方形の柱穴 400 では 0.1 mであり明確な相関関係はみとめられない。また、深さと検出位置との相関関係もみとめられず、平面規模とも比例しない。

埋土は、褐色砂またはにぶい褐色または黄褐色のシルトで、礫の混じるものもある。基本層序第Ⅶ層に類似しており、これらの層に由来するものと考えられる。また、調査区東部の柱穴 405 ～ 407 では掘方掘削の際に埋土を掘削しており先後関係がみとめられる。

遺物は、柱穴 404・405・407 から弥生土器が出土している。いずれも小片であるが、弥生時代後期から庄内式併行期の時期幅におさまるものと考えられる。このうち、柱穴 405 から出土した弥生土器 1 点（4）を図化した。

小結　弥生時代遺構検出面の出土遺物はいずれも小片であったが、弥生時代後期から庄内式併行期の時期幅におさまるものと考えられる。したがって、遺物の出土しなかった遺構も含めて、弥生時代後期から庄内式併行期のものと推定できる。ただし、遺構検出面直上層の第Ⅵ層は、形成時期は弥生時代以降と考えられるものの下限は明らかでないため、古墳時代まで下る可能性も否定はできない。第 8 章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

柱穴は、深さ 0.1 mのものがあることから、本来の地表面から 0.4 mほどは削平されているものと推定できる。建物等の構成を明らかにできなかったが、掘立柱建物が存在していたものと推定でき、また、柱穴に先後関係がみとめられることから、一部では建て替えが行われたものと考えられる。また、調査区が狭いため断定はできないが、柱穴の並びより、建物の主軸方向が東西方向であった可能性がある。

なお、第 1 節で述べたように、第Ⅴ～Ⅶ層は洪水堆積物、第Ⅷ層上面は自然流路の痕跡であると推定できる。また、第Ⅵ層上面では、焼土溜まり 1 基を検出している。人為的遺構と断定はできないが、平面の位置を図 12・13 に、断面を図 6 に示した。

第 5 節　出土遺物

第 1 項　土器

はじめに、各地区に共通する遺物の掲載方法について示す。報告は、土器、土製品、粘土塊、瓦、石器・石製品、金属製品の順に、出土遺構検出面または包含層ごとに報告する。遺物番号は実測図掲載順の連番とする。法量、調整、色調、胎土等については観察表で示し、文章中では特徴的なものを中心に記載する。

本書で報告する調査区では、弥生時代後期から古墳時代の土器と奈良時代の土器が特に多く出土しているが、その大半は良好な一括遺物と言い難いもの、または遺構の先後関係等出土状況から遺物の編年を行うのは困難なものである。このため、土器編年については、既存の編年を使用する。各時期の編年や形式名は、弥生時代中期については地村（1999）を参考とし、地村の設定する第Ⅲ様式、第Ⅳ様式をそれぞれ中期中葉、中期後葉と呼称する。樋口（1990）も参考として

いる。弥生時代後期については、若林（1999）を参考に前葉、中葉、後葉に３区分し、これと一部重複するが、弥生時代後期後半から庄内式併行期の編年については西村・池峯（2006）を、形式名については西村（1996）を参考とする。下田Ⅰ―１式を後期中葉、下田Ⅰ―２～４式を後期後葉、下田Ⅱ―１～Ⅱ―２古を庄内式前半、下田Ⅱ―２新～Ⅱ―３式を庄内式後半とする。ただし、製塩土器については宮地（2000）および積山（2004）を参考とする。なお、庄内式併行期の土器は甕等に弥生時代後期との判別が困難なものが多いため、庄内式併行期の土器についても便宜的に弥生土器と呼称する。布留式期については西村・池峯（2006）を参考とし、下田Ⅲ式および布留１式～２式古段階を布留式前半、布留２式新段階～４式を布留式後半と呼称する。ただし、形式名称については、市村（2009）を参考に、甕Ｄを布留形甕、高杯Ｄを外反高杯、高杯Ｅを有稜高杯と呼称する。また、古墳時代中～後期の土師器については、辻（1999）、中野（2010）も参考とし、特に高杯の接合技法については中野（2010）の分類を参照する。古墳時代の須恵器については田辺（1966）を、古代の土器については古代の土器研究会編（1992）、中世の土器については中世土器研究会編（1995）を主に参考とする。また、中世の土師器皿については、12cmを境に大皿、小皿と分類する。

耕作溝検出面の遺構からは遺物が出土しなかったため、以下では中世遺構検出面の土器から順に報告する。

（１）中世遺構検出面の土器（図 14）

中世遺構検出面の遺構からは、土師質羽釜、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。いずれも小片で、図化できるものはわずかであり、遺構の時期を示す中世のものに図化できるものはなかった。ここでは、混入遺物であるが、比較的残存度のよい３点を報告する。

１は須恵器蓋である。溝 223 から出土した。奈良時代に位置づけられる。

２は須恵器杯身である。柱穴 339 から出土した。TK209 頃に位置づけられる。

３は弥生土器鉢底部である。柱穴 334 から出土した。上げ底状の底部で、不明瞭であるが外面にタタキを施す。後期～庄内式併行期に位置付けられる。

第３節でも述べたように、図化できなかった少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。

（２）弥生時代遺構検出面の土器（図 14）

弥生時代遺構検出面の遺構からは、少量の弥生土器が出土した。ここでは、比較的残存度のよいもの１点を報告する。

４は弥生土器甕底部である。柱穴 405 から出土した。中央部付近がやや窪む平底で、外面に右上がりのタタキを施す。外面が二次焼成により赤色に変色する。後期～庄内式併行期に位置付けられる。

このほか、弥生土器の体部小片が出土しており、外面にタタキを施すものがみとめられる。したがって、遺構出土遺物は少量で、小片が多いものの、いずれも弥生時代後期から庄内式併行期

におさまるものと考えられる。

（3）包含層出土土器

包含層出土遺物は、その形成時期を示すものを中心とし、それ以前の時期の遺物については特徴的なものを報告する。

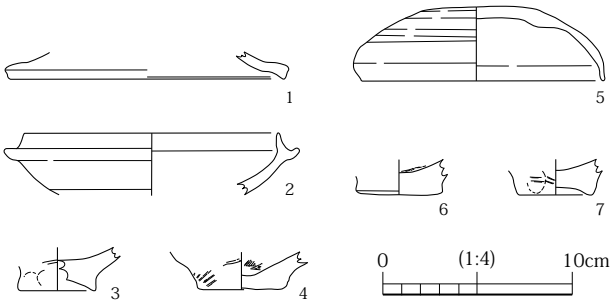


図 14　11001-5 区出土土器

基本層序第Ⅲ層出土土器　基本層序第Ⅲ層からは、土師質羽釜、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。いずれも小片で図化できず、詳細な時期比定は困難であるが、土師質羽釜、瓦器を含むことから、第Ⅲ層の形成時期は中世以降と推定できる。

基本層序第Ⅳ層出土土器（図 14）　基本層序第Ⅳ層からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土し、このうち 1 点を図化した。

5 は須恵器杯蓋である。口縁部の一部がひずむ。TK209 頃に位置づけられる。

基本層序第Ⅳ層出土土器は、弥生時代から古墳時代のものであるが、上層の第Ⅲ層が作土、第Ⅳ層が床土と考えられること、第Ⅲ層から中世の土器が出土していることより、第Ⅳ層の形成時期についても中世以降と推定できる。

基本層序第Ⅴ層出土土器（図 14）　基本層序第Ⅴ層からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土し、このうち 1 点を図化した。

6 は弥生土器底部である。平底で、内面に工具痕がみとめられる。詳細な時期比定は困難である。

基本層序第Ⅴ層出土土器は、弥生時代から古墳時代のものであるが、出土遺物が少量であること、上層の第Ⅲ・Ⅳ層の形成時期が中世以降であることから、第Ⅳ層の形成時期は、古墳時代より下る可能性もある。

基本層序第Ⅵ層出土土器（図 14）　基本層序第Ⅵ層からは、弥生土器が出土し、このうち 1 点を図化した。

7 は弥生土器底部である。やや上げ底状の底部で、外面に横位のタタキを施す。鉢の可能性がある。後期～庄内式併行期に位置付けられる。

基本層序第Ⅵ層出土土器は、弥生時代のものであるが、いずれも小片で、図化した 1 点を除くと、詳細な時期比定は困難である。図化したものは後期から庄内式併行期のものであるが、出土遺物が少量であること、上層の第Ⅴ層の形成時期が古墳時代には下ることから、第Ⅵ層の形成時期が、弥生時代より下る可能性もある。

第 2 項　石製品（図 15）

石器は 1 点が出土した。

8 は、砥石である。基本層序第Ⅱ～Ⅲ層から出土した。一端を欠損するが、両側面が内側に向かっ

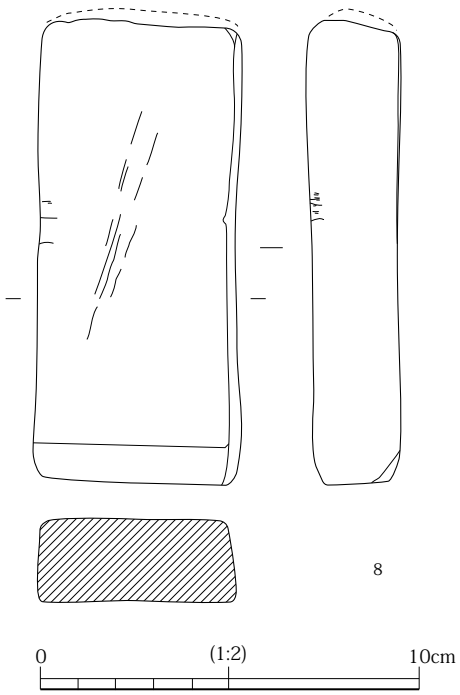


図 15　11001-5 区出土石製品

て湾曲することから、端部付近が残存しているものと考えられる。石材は砂岩である。残存する 5 面すべて滑らかとなっており、上下左右の 4 面は、使用による湾曲がみとめられる。下端面は平坦でややざらつきがあるため、成形の研磨を施したのみで未使用の可能性もある。擦痕はいずれの面も不明瞭である。形態からも、出土状況からも、時期比定は困難である。

第４章　11001-4 区の調査成果

第１節　基本層序（図 16）

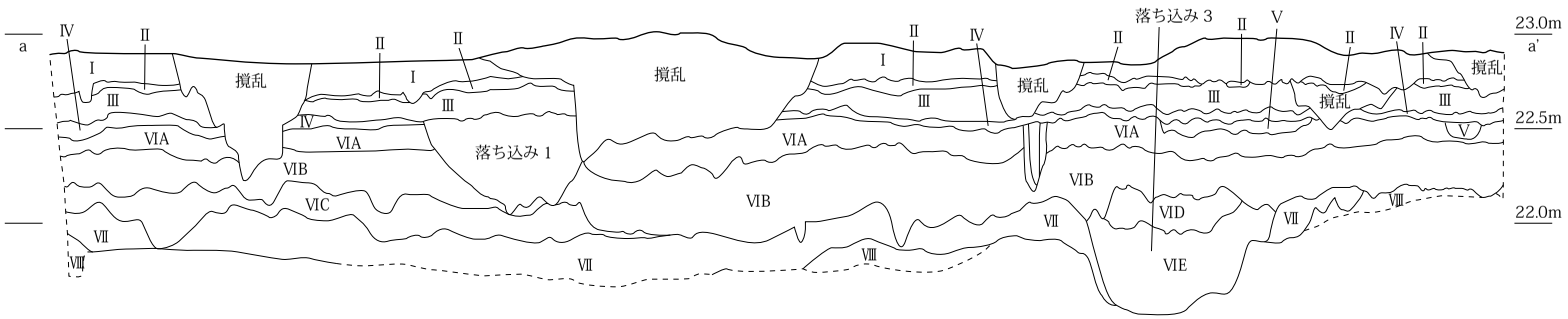
層序は、上層から順に現代の作土である黒灰色土（第Ⅰ層、層厚 0.15 ～ 0.3 m）、現代の床土である明褐色土（第Ⅱ層、層厚 0.05 ～ 0.1 m）、中世以降の包含層である灰黄色砂シルト（第Ⅲ層、層厚 0.1 ～ 0.2 m）、中世以降の包含層である黄褐色粘シルト（第Ⅳ層、層厚 0.05 ～ 0.1 m）、古代以降の包含層である灰黄色砂シルト（第Ⅴ層、層厚 0.05 ～ 0.1 m）、弥生時代から古代の包含層である褐色細砂～粘シルト（第ⅥＡ～ⅥＥ層、層厚ⅥＡ：0.1 ～ 0.2 m、ⅥＢ：0.1 ～ 0.55 m、ⅥＣ：0.05 ～ 0.3 m、ⅥＤ：0.1 ～ 0.2 m、ⅥＥ：0.05 ～ 0.25 m）、弥生時代の包含層であるにぶい黄褐色砂シルト～粘シルト（第Ⅶ層、層厚 0.15 ～ 0.3 m以上）、遺物が出土していない中～大礫混じり褐色粗砂（第Ⅷ層、層厚 0.15 m以上）である。なお、調査区は中央に位置する幅約３ｍのスロープを境に２分されるため、土層図も２分して示したが、基本層序には共通性がみとめられる。

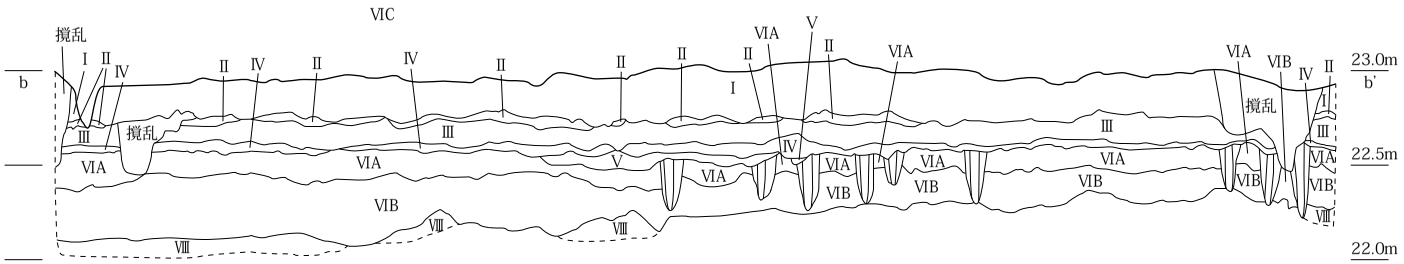
第Ⅰ層、第Ⅱ層は、道路整備予定地となる以前の作土および床土である。第Ⅰ層は、層厚の差はあるが、現代の撹乱によって削られた部分を除き、調査区のほぼ全域に分布する。第Ⅱ層は、層厚が薄いため明瞭に確認できない箇所もあるが、調査区東部の一部を除きほぼ全域に断続的に分布する。第Ⅰ層上面の高さは 22.9 ～ 23.0 ｍで、高低差は少ない。第Ⅰ層下面の高さも 22.7 ～ 22.8 ｍと高低差は少ない。第Ⅱ層下面の高さも 22.6 ～ 22.7 ｍと高低差は少ない。このように第Ⅰ層、第Ⅱ層とも、層厚の差はあるものの、調査区内での高低差は少ない。

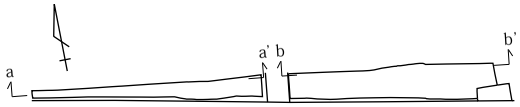
第Ⅲ層は、層厚の差はあるが、調査区の全域に分布する。第Ⅲ層下面の高さは 22.5 ～ 22.6 ｍと高低差は少ない。第Ⅳ層も層厚の差はあるが、調査区の全域に分布する。第Ⅳ層下面の高さは 22.5 ～ 22.6 ｍである。第Ⅳ層上面では、中世以降の耕作に伴う溝群と落ち込みを検出しており、第Ⅲ層は水田作土、第Ⅳ層はこれに伴う床土と考えられる。第Ⅲ・Ⅳ層とも弥生時代から中世の遺物を含む。形成時期は中世以降と推定できるが、下限は明らかにし得ず、近世まで下る可能性もある。

第Ⅴ層は、調査区東部および中央部やや西側に断続的に分布する。第Ⅴ層下面の高さは、調査区東部で 22.5 m前後、調査区中央部よりやや西側で 22.4 m前後である。第Ⅴ層は弥生時代から古墳時代の遺物を少量含む。下層出土遺構の時期や上層出土遺物等より形成時期は中世頃と推定できる。

第Ⅵ層は、色調や砕屑物により５層に細別したが、層界が不明瞭で出土遺物の時期差も明確にはみとめられないことから、一連の層と判断した。ⅥＡ・ⅥＢ層は層厚の差はあるが、調査区の全域に分布し、ⅥＣ層は調査区西部のみに、ⅥＤ・ⅥＥ層は調査区中央部のやや西部のみに分布する。第Ⅵ層下面の高さは調査区東部では 22.3 m前後、層厚 0.3 ｍで、西側へ向かって下がるとともに層厚が厚くなり、調査区中央部で 22.0 m前後、層厚 0.4 m前後となる。そこから西で急激







Ⅰ　黒灰色土 / 作土
Ⅱ　明褐色土 / 床土
Ⅲ　灰黄色 (2.5Y6/2) 砂シルト
Ⅳ　黄褐色 (10YR5/6) 粘シルト
Ⅴ　灰黄色 (2.5Y6/2) 砂シルト
VIA　褐色 (10YR4/4) 細砂～砂シルト
VIB　褐色 (10YR4/4) 粘シルト
VIC　褐色 (10YR4/4) 砂シルト
VID　中礫・褐色 (10YR4/4) 砂シルト混じり黒褐色 (10YR3/1) 砂シルト
VIE　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 中砂
Ⅶ　にぶい黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト～粘シルト
Ⅷ　中～大礫混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂

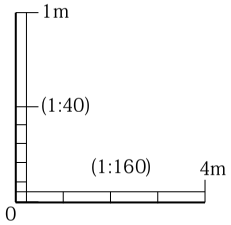


図 16　11001-4 区土層図

に下がって21.5 m前後となり、層厚も1.05 mと最大となる。その西側では急激に上がり、22.1 m、層厚0.4 mとなった後、層厚と高低差があるが、一方向に下がることはなく、21.9 ～ 22.1 m前後で推移する。第Ⅵ層上面では、中世と考えられる柱穴多数と土坑、溝を検出した。第Ⅵ層は弥生時代から奈良時代の遺物を含む。形成時期は弥生時代から奈良時代頃と考えられるが、中世に下る可能性も否定できない。

第Ⅶ層は、調査区西部のみに分布する。第Ⅵ層下面の高さは調査区中央部よりやや西で22.0 m前後、層厚0.15 mで、西側へ向かって下がる。調査範囲が狭く、安全の確保のため一部掘り切ることができなかった部分があるが、下面の高さが22.7 m、層厚0.3 m以上となった後、西側へ向かって上がり、調査区西部で22.0 m、層厚0.15 mとなる。第Ⅶ上面では遺構は確認できなかったが、層界に薄い炭化物層を確認できる部分があった。第Ⅶ層は、弥生時代の遺物を含む。形成時期は弥生時代以降と推定できるが、下限は明らかでなく、古墳時代に下る可能性もある。

第Ⅷ層は、調査区全域に分布する。撹乱や土層観察用溝により層厚0.15 m以上であることを確認したが、下面を確認することはできなかった。第Ⅷ層上面では、弥生時代後期頃の柱穴、ピット、落ち込みを検出した。近接する10001-3区等他の調査区の成果より、第Ⅵ・Ⅶ層は洪水堆積物、第Ⅷ層上面は自然流路の痕跡であると推定できる。また、同様に他の調査区の成果より、第Ⅷ層が活発な堆積作用による洪水堆積物であることも推定できる。第Ⅷ層からは遺物は出土していない。上面検出遺構出土遺物や上層出土遺物等より形成時期は弥生時代後期以前と推定できるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

以上のように、11001-4区では、３面の遺構検出面を確認した。第Ⅲ層を除去した第Ⅳ層上面では、中世以降の耕作に伴う溝群、落ち込みを検出した。第Ⅴ層を除去した第Ⅵ層上面では、中世と考えられる柱穴、土坑、溝を検出した。第Ⅵ層を除去した第Ⅷ層上面では、弥生時代後期頃と考えられる柱穴、ピット、落ち込みを検出した。以下ではこれらの遺構検出面を、順に「耕作溝検出面」「中世遺構検出面」「弥生時代遺構検出面」と呼称する。また、第Ⅷ層上面は、自然流路の痕跡と推定できる。

第２節　耕作溝検出面の調査（図17・18、図版３―1）

基本層序第Ⅳ層上面で検出した。遺構は溝46条、落ち込み1基で、調査区全域で確認している。

溝　46条検出した。本来一連のものが後世の削平により断絶したと判断できるものは1条として扱った。また、溝292のように本来数条の溝であったものを一連の遺構として検出したものがあり、溝本来の数はさらに多かったものと考えられる。埋土に共通性がみとめられたため、特徴的なものを中心に遺構番号を付し、その他のものについては番号を付していないものがある。

溝は南北方向のものと東西方向のものに大きく分かれ、溝237のように屈曲するものについても、南北方向と東西方向である。南北方向のものの主軸方向分布範囲は、N―6°―W ～ N―15°―E、東西方向のものの主軸方向分布範囲はN―78 ～ 90°―E、N―85 ～ 90°―Wで、特に東西方向の

まとまりが顕著である。

溝の最大幅は、0.1 ～ 0.5 mであるが、本来数条の溝であったものを一連の遺構として検出したものを除くと、0.1 ～ 0.2 mである。深さは 0.02 ～ 0.05 mである。

埋土はいずれも灰黄色または黄灰色細砂である。

遺物は中世の瓦器と土師器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土した。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は、溝 002 から土師器小皿口縁部片と 13 世紀頃の瓦器椀高台片が出土したほか、その他の溝からも瓦器片が出土したが、いずれも小片で図化できなかった。混入遺物ではあるが、下層の第Ⅵ層に由来する可能性のあるものとして、溝 233 から出土した須恵器 1 点（9）を図化した。

これらの溝は、いずれも耕作に伴う溝と考えられ、鋤溝の可能性が高い。平成 23 年度に報告した隣接する 10001-3 区など周辺の他調査区でも同様の特徴をもつ溝が多数検出されており、溝埋土の植物珪酸体分析によりイネが多量に検出されている事例もあることから、11001-4 区のこれらの溝についても、水田耕作に伴うものと判断できる。また、遺構埋土は上層の第Ⅲ層と類似することからも、第Ⅲ層は水田作土、第Ⅳ層はこれに伴う床土と考えられる。溝埋土、作土層である第Ⅲ層とも瓦器等中世の遺物を含むことから、少なくとも 12 ～ 14 世紀頃には水田耕作が行われたものと推定できる。しかし、第Ⅲ層直上層は現代作土または床土であるため下限は明らかでなく、近世まで下る可能性がある。

落ち込み 1　調査区西部で検出した。南端のみを検出しており、調査区外へのびる。東西方向は 3.1 m以上、南北方向は 1.0 m以上、深さは 0.5 mである。

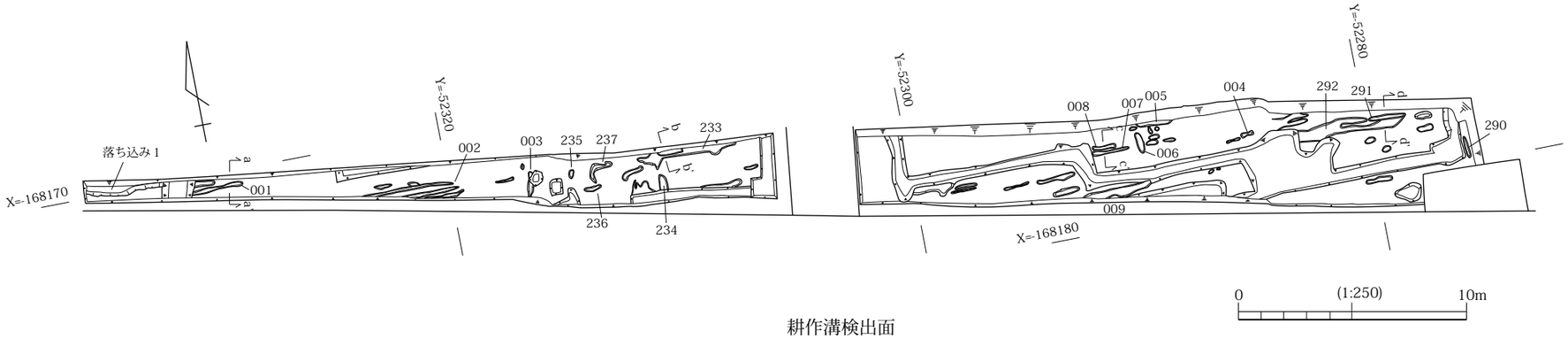
埋土は暗灰黄色細砂である。

遺物は古墳時代の須恵器のほか、瓦が多く出土した。いずれも丸瓦または平瓦の小片であることから詳細な時期比定は困難であり、図化していないが、奈良時代頃のものを主体とし、平安時代から中世の可能性のあるものも含む。

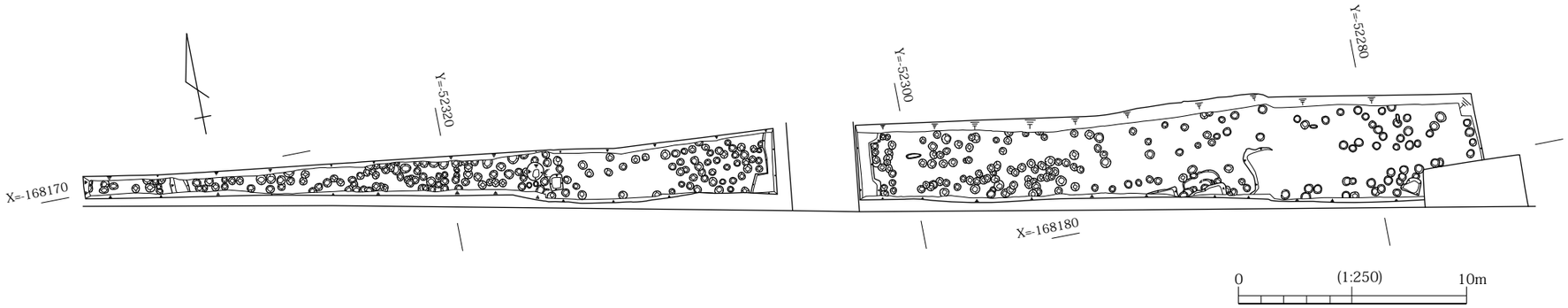
形状より、土坑または溝と考えられるが、調査区内での検出部分がわずかであり、断定できない。古代の瓦が非常に多く出土することから、下層の第Ⅵ層に由来する瓦が後世に廃棄された廃棄土坑である可能性が考えられる。

小結　耕作溝検出面の遺構出土遺物は小片が大半であり、また、多くは古代以前の混入遺物と考えられるもので、遺構の時期を示すものではない。少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。瓦器の出土から、12 ～ 14 世紀頃と考えられるが、上層の耕作溝検出面の下限も明らかでなく、さらに時期が下る可能性も否定できない。ここでは、中世と広く捉えておき、第 8 章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

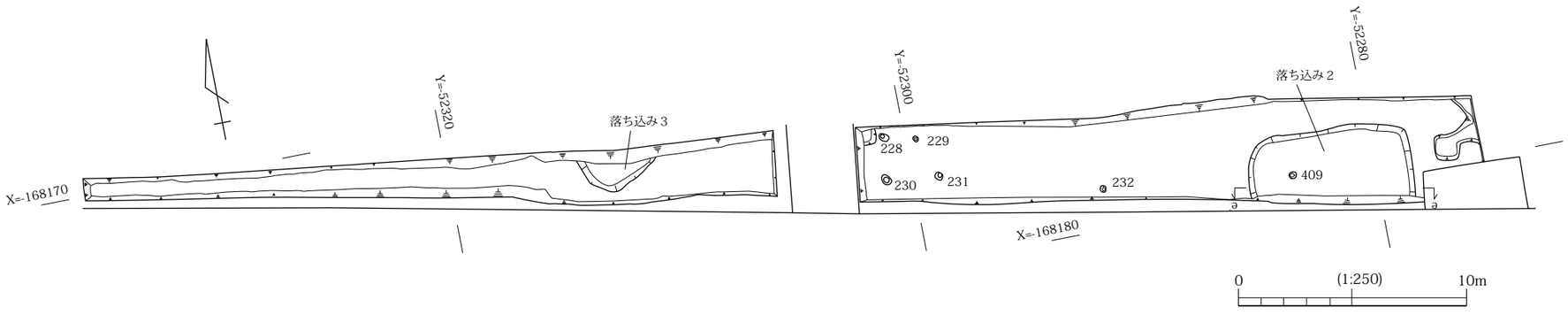
溝の主軸方向は、座標北方向またはそれと直交する方向に近く、特に東西方向ではまとまりが強い。また、一部のみの検出であるが、落ち込みの南端部も東西方向である。調査区は、和泉寺



耕作溝検出面



中世遺構検出面



弥生時代遺構検出面

図 17　11001-4 区全体図（耕作溝検出面・中世遺構検出面・弥生時代遺構検出面）

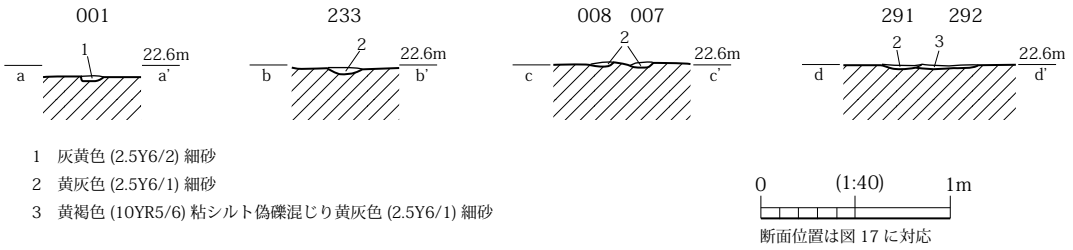


図 18　11001-4 区溝 001・007・008・233・291・292 断面図

跡推定寺域内の南東隅部に位置していることから、遺構主軸方向から寺域推定の根拠となっている現在の地割の形成時期を検討することが特に重要な調査区である。周辺の調査区の様相も含め、第８章であらためて検討することとする。

第３節　中世遺構検出面の調査（図 17・19、図版３―２）

基本層序第Ⅵ層上面で検出した。遺構は柱穴 359 基、土坑 1 基、溝３条である。遺構は調査区全域で検出した。第ⅥＡ層は上部にマンガン沈着が顕著であり、遺構検出が困難であったため、遺構、特に柱穴の多くは上部 0.05 ～ 0.1 m程度を掘削して検出した。

柱穴（図 19・20）　柱穴は調査区中央部から西部で特に密集して検出した。調査区の幅が狭いこともあり、いずれも構成する建物を明らかにできなかった。非常に多くの柱穴を検出したこと、埋土に共通性がみとめられることから、規模が特徴的なもの、遺物が出土したものを中心に遺構番号を付し、その他のものについては遺構番号を付していないものがある。また、これら以外に、調査区壁断面の精査によりこの面に伴うと考えられる柱穴 10 基を確認した。

平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m、柱痕跡の平面規模は直径 0.1 ～ 0.25 mである。前述のように、検出面上部を掘削して検出したものが多く、個々の柱穴断面図では検出後の深さのみの図化であるが、調査区壁断面の精査より、最深で深さ 0.4 mであることが確認できた。調査区壁断面の精査の結果も踏まえて検討すると、柱掘方は、検出位置との相関関係はみとめられず、平面規模と深さも比例しないものと考えられる。

埋土は、褐色細砂～粘シルトのものが多く、一部、黄褐色砂シルトで礫の混じるものもある。前者は基本層序第Ⅵ層に類似しており、この層に由来するものと考えられる。また、調査区中央部やや東側の柱穴 136・137 等では掘方掘削の際に埋土を掘削しており先後関係がみとめられ、調査区中央部から西部の密集部では特に顕著である。

遺物は、中世の磁器と瓦器、奈良時代の須恵器と土師器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土している。特に弥生時代後期から庄内式併行期の土器が多いことから、弥生時代から古墳時代の遺物は、下層の第Ⅵ層に由来するものと考えられる。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は、柱穴 062 から青磁 1 点、柱穴 058 から瓦器椀 1 点のほか、瓦質羽釜や土師質羽釜と

考えられるものが出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。混入遺物ではあるが、下層の第Ⅵ層に由来する可能性のあるものとして、柱穴 269・364 から出土した須恵器各 1 点（10・11)、柱穴 191・377・379 から出土した弥生土器各 1 点（12・13・15)、柱穴 044 から出土した瓦 1 点（104）を図化した。

土坑 126（図 19・20） 調査区東部で検出した。南側を柱穴と撹乱によって掘削されるが、形状より東西方向が長軸方向と推定できる。

平面形は不整円形で、長軸 1.7 m、短軸 0.8 m以上、深さ 0.1 mである。

埋土は褐色粘シルトである。

柱穴 145 ～ 148 等計 7 基の柱穴に埋土を掘削されており、先後関係がみとめられる。

遺物は、遺構の時期を示すものではないと考えられるが、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が出土し、うち弥生土器 1 点を図化した（14)。

溝（図 19・20） 調査区東部から中央部で計 3 条検出した（溝 131・356 他)。南北方向のものが 1 条（溝 356)、東西方向のものが 2 条（溝 131 他）である。長さ 0.4 ～ 0.7 m、幅 0.15 ～ 0.25 m、深さ 0.02 ～ 0.05 mである。埋土は褐色砂シルト～粘シルトである。

主軸方向は、南北方向のものが N―7°―E、東西方向のものが N―79 ～ 87°―W である。

溝 356 は柱穴 355 の埋土を掘削しており、先後関係がみとめられる。

遺物は、遺構の時期を示すものではないと考えられるが、溝 131・356 から弥生土器が出土した。図化できるものはなかった。

小結 中世遺構検出面の遺構出土遺物は小片が大半であり、また、大半は古代以前の混入遺物と考えられるもので、遺構の時期を示すものではない。柱穴から出土した少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。瓦器の出土から、12 ～ 14 世紀頃と考えられるが、瓦質羽釜の可能性のある小片も出土していること、上層の耕作溝検出面の下限が明らかでないことから、さらに時期が下る可能性も否定できない。ここでは、中世と広く捉えておき、第 8 章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

溝の主軸方向は、検出数が少ないこともあり、断定はできないが、概ね、耕作溝検出面の遺構と同様、座標北方向またはそれに直交する方向に近い。また、いずれも残存する全長は短いが、鋤溝の可能性が高い。

柱穴は、深さ 0.1 mのものがあり、第Ⅵ層上部をやや掘削しての検出であることを考慮しても、本来の地表面から 0.2 mほどは削平されているものと想定できる。建物等の構成を明らかにできなかったが、多数の建物が存在していたこと、特に密集する調査区西部では、数度にわたる建て替えが行われたものと推定でき、時期幅があるものと考えられる。また、調査区中央部やや西側の柱穴 240 ～ 243（図 19 断面 d-d'）、調査区中央部やや東側の柱穴 178 ～ 181 周辺、調査区東部の柱穴 377 ～ 380 周辺、柱穴 351 ～ 353（図 19 断面 i-i'）など南北方向または東西方向に近い

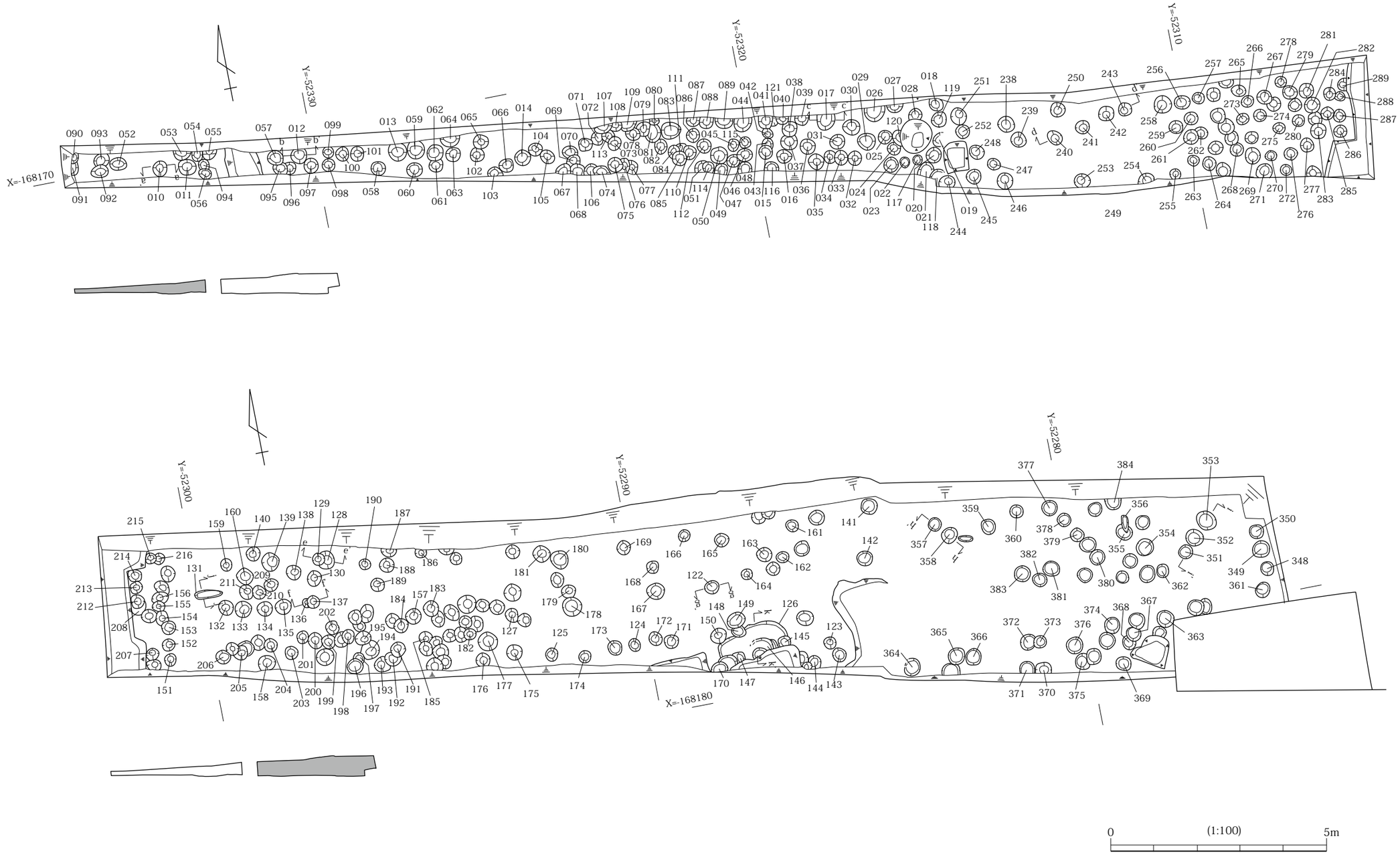


図 19　11001-4 区中世遺構検出面全体図

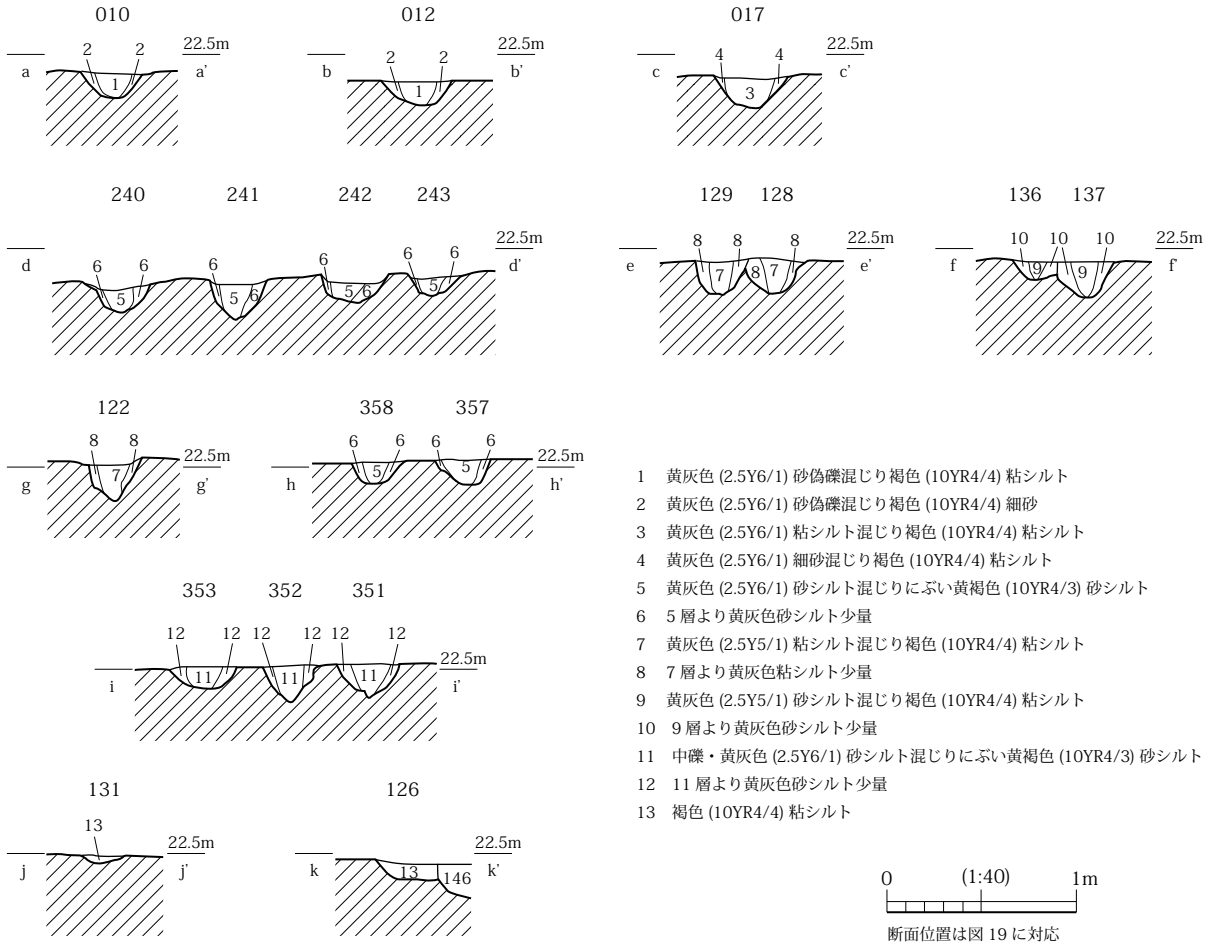


図 20　11001-4 区中世遺構検出面遺構断面図

方向で柱穴が列状に並ぶ箇所がみとめられる。溝の主軸方向と共通することからも、これらの柱穴については、それぞれ同一の建物あるいは柵を構成していた可能性が考えられる。

また、溝 356 は柱穴 355 の埋土を掘削しており先後関係がみとめられる。この 1 箇所のみでは断定はできないが、柱穴が全体として鋤溝と考えられる溝群に先行するものであれば、建物や柵が密集する状況から耕作の場へと、土地利用が変化したものと考えられる。この点についても、第 8 章で他の調査区との比較を通じてあらためて検討することとする。

第 4 節　弥生時代遺構検出面の調査（図 17、図版 4）

第Ⅷ層上面で検出した。遺構は柱穴 4 基、ピット 2 基、落ち込み 2 基を検出し、調査区中央部から東部で検出した。第 1 節で述べたように、調査区西部では、安全の確保のため第Ⅷ層上面まで掘削できていない部分があることから、検出できてない遺構が西部に存在している可能性もある。

柱穴・ピット（図 21、図版 4）　調査区中央部から東部で柱穴 4 、ピット 2 を検出した。調査区の幅が狭いこともあり、構成する建物を断定するのは困難であるが、以下では考え得る可能性も含め記述する。

柱穴（228・230 ～ 232）は、平面形は円形または隅丸方形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径または一辺 0.3 ～ 0.5 mで、深さ 0.1 ～ 0.15 m、柱痕跡の平面規模は直径 0.15 ～ 0.25 mである。柱掘方は、平面規模の比較的小さい柱穴 231 が最も深い等、平面規模とは比例せず、深さと検出位置との相関関係もみとめられない。埋土は、中礫混じり灰黄褐色シルトである。

ピット（229・409）は、平面形は円形で、ピット 229 はややいびつな形状である。平面規模は直径 0.25 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mである。埋土は、中礫混じり灰黄褐色シルトである。

遺物は、柱穴 228・231 から弥生土器が出土している。いずれも小片で図化できず、詳細な時期比定も困難である。

これらの柱穴・ピットのうち、柱穴 228・230 ～ 232、ピット 229 は、柱痕跡または遺構の中心部を結ぶと、南北方向 2.0 m前後、東西方向 1.5 ～ 2.4 mの台形状を呈する。ピット 229 は、柱痕跡を確認できていないものではあるが、これらの柱穴やピットの深さから考えると本来の地表面から 0.4 mほどは削平されていると推定できることから、ピット 229 は柱穴最深部の痕跡で

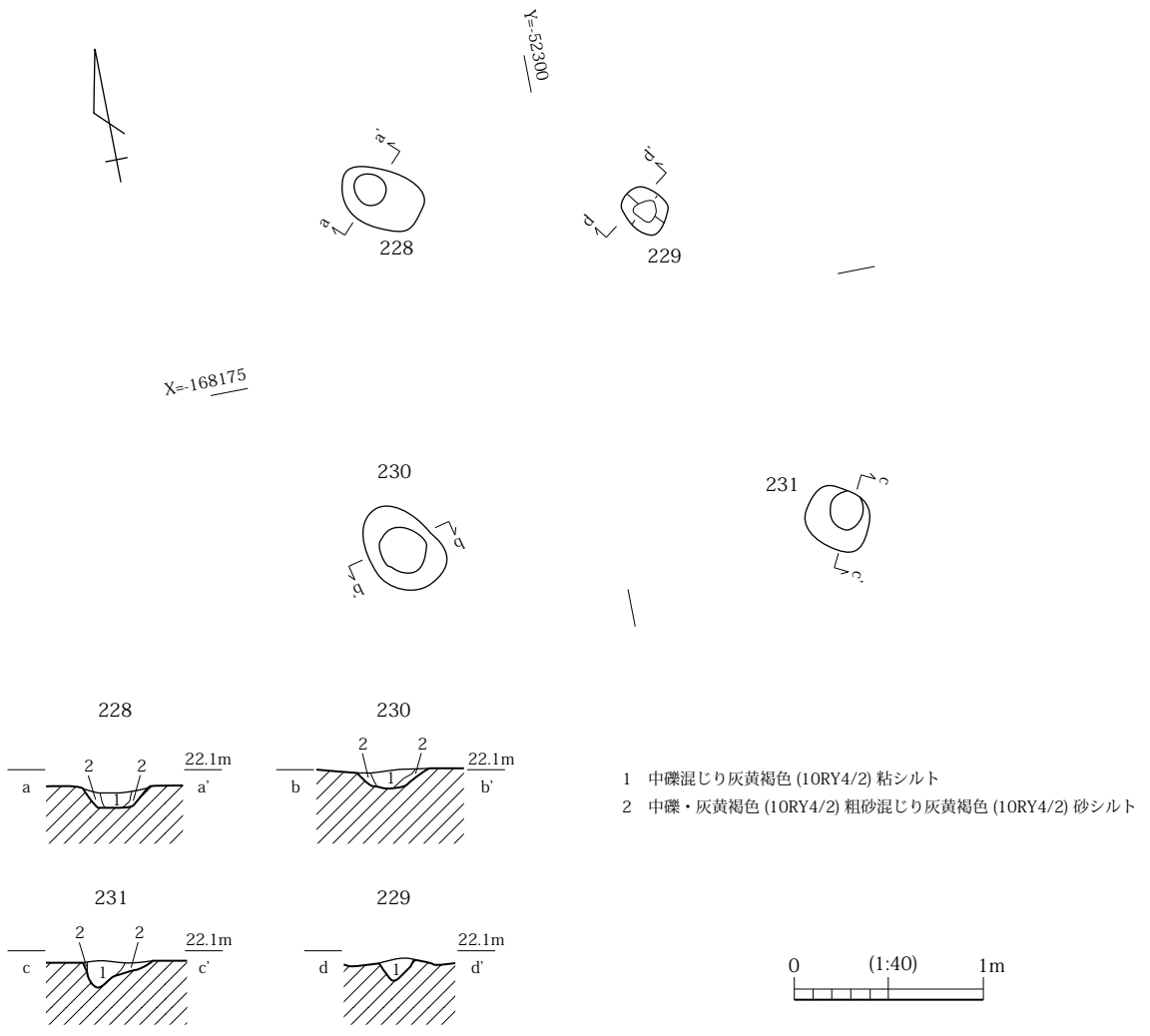


図 21　11001-4 区柱穴 228・230・231、ピット 229 平面図・断面図

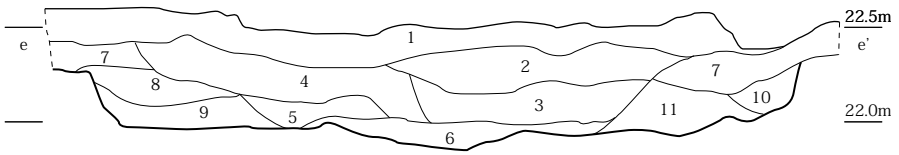
ある可能性も考えられる。柱穴であるとしてもこれら４遺構から成る平面形はいびつであり、また、調査区外の状況が不明ではあるが、同一の建物を構成する可能性が指摘できる。

落ち込み（図 16・22、図版４－２～５）　調査区東部で１基（落ち込み２）、調査区中央部西側で１基（落ち込み３）の計２基を検出した。

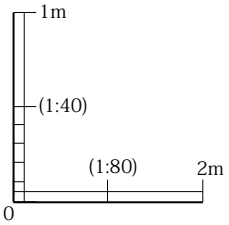
落ち込み２は、南部は調査区外へのびるが、検出範囲では、東西方向 7.5 m、南北方向 3.5 m の方形を呈する。土層断面からは、基本層序第Ⅵ層と連続する一連の堆積であり、床面、壁溝等の痕跡も確認することができなかったが、平面形状、落ち込み内でのピット 409 の検出、落ち込み内北部～西部の肩部付近を中心に完形に近い弥生土器が多数出土したことから、方形の竪穴住居の痕跡である可能性が考えられる。調査の工程上、落ち込み２を東西で分断して調査することとなったため、当初、住居の可能性については考慮せずに調査を進めていた。そのため、落ち込み内外で明瞭に遺物を分けて取り上げることができておらず、基本層序第Ⅵ層として取り上げたものも多いが、落ち込み２内出土と確定できるものはいずれも弥生土器で、後期から庄内式併行期におさまり、少数ながら後期後葉に限定できるものがみとめられる。したがって、竪穴住居跡であるとすれば、弥生時代後期から庄内式併行期、特に後期後葉を中心とした時期と推定できる。

落ち込み３は、北部が調査区外にのびるが、検出範囲では、東西方向 3.4 m、南北方向 2.0 m の方形を呈する。土層断面からは、基本層序第Ⅵ層と連続する一連の堆積であり、床面、壁溝等の痕跡も確認することができなかった。また、落ち込み２のように土器が集中して出土する状況もみられなかったが、竪穴住居等の遺構の可能性も考えられる。

小結　弥生時代遺構検出面では、確実に遺構と判断できる柱穴、ピット出土遺物はいずれも弥生土器小片で、詳細な時期比定は困難である。しかし、竪穴住居跡等の遺構の可能性のある落ち込み２から弥生時代後期から庄内式併行期の時期幅におさまる遺物が出土していることから、遺物の出土しなかった遺構も含めて、弥生時代後期から庄内式併行期のものである可能性が考えられ



1　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混じり褐色 (10YR4/4) 細砂 / 基本層序ⅥA 層に対応
2　中礫・暗褐色 (10YR3/3) 粘シルト混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
3　中～大礫・暗褐色 (10YR3/3) 粘シルト混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
4　２層より暗褐色粘シルト多量
5　中～大礫・褐色 (10YR4/4) 粗砂混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
6　褐色 (10YR4/4) 粘シルト混じり暗褐色 (10YR3/3) 粘シルト
7　中礫・暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘シルト混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
8　中礫・暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘シルト混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
9　オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘シルト
10 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘シルト混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト / 基本層序ⅥC 層に対応
11 ５層に褐色 (10YR4/4) 粗砂混じる



断面位置は図 17 に対応

図 22　11001-4 区落ち込み２断面図

る。ただし、遺構検出面直上層の第Ⅵ層は、形成時期は弥生時代以降と考えられるものの下限は明らかでないため、遺構の時期が古墳時代まで下る可能性も否定はできない。第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

明確な建物跡としては確認できなかったが､掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴とピット、竪穴住居跡の可能性のある落ち込み２が存在することから、調査区内に弥生時代後期から庄内式併行期の居住域が存在していたことが推定できる。また、両者が掘立柱建物あるいは竪穴住居跡であったとすると、主軸がそろうことから、同時期に営まれた可能性が指摘できる。

なお、第１節で述べたように、第Ⅵ・Ⅶ層は洪水堆積物、第Ⅷ層上面は自然流路の痕跡であると推定できる。近接する 10001-3 区等周辺の調査成果も踏まえ、第８章で、自然流路の広がり、時期についてあらためて検討する。

第５節　出土遺物

第１項　土器

（１）耕作溝検出面の土器（図 23）

耕作溝検出面の遺構からは、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物はいずれも小片で図化できなかった。ここでは、混入遺物ではあるが、下層に由来する可能性のあるものとして、１点を報告する。

９は、須恵器杯蓋である。溝 233 から出土した。TK47 に位置づけられる。

第２節でも述べたように、図化できなかった少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。上層形成時期の下限が明らかでないことから、近世まで下る可能性もある。

（２）中世遺構検出面の土器（図 23）

中世遺構検出面の遺構からは、磁器、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。遺構の時期を示す中世のものはいずれも小片で、図化できるものはなかった。ここでは、混入遺物であるが、比較的残存度のよい６点を報告する。

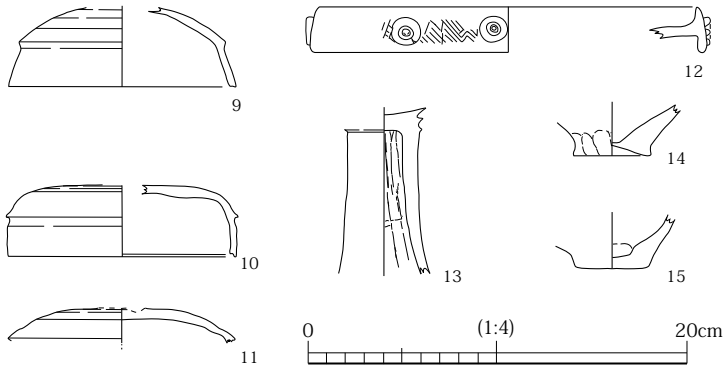


図 23　11001-4 区遺構出土土器

10・11 は、須恵器蓋である。10 は柱穴 364 から出土した。天井部外面に別個体の小片が融着する。TK23 頃に位置づけられる。11 は柱穴 269 から出土した。つまみを欠損する。

12 ～ 15 は、弥生土器である。12 は柱穴 191 から出土した。広

口壺で、垂下した口縁部の外面に波状文と竹管円形浮文を施す。後期～庄内式併行期に位置づけられる。13 は柱穴 379 から出土した。高杯で、脚柱部中空である。後期中葉頃に位置づけられる。14･15 は底部である。14 は土坑 126 から出土した。上げ底状で、外面にタタキを施すようであるが、不明瞭である。15 は柱穴 377 から出土した。平底である。いずれも詳細な時期比定は困難である。

第３節でも述べたように、図化できなかった少量の中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、いずれも小片で、詳細な時期比定は困難である。瓦器の出土から、12 ～ 14 世紀頃と考えられるが、瓦質羽釜の可能性のある小片も出土していること、上層の耕作溝検出面の下限が明らかでないことから、さらに時期が下る可能性も否定できない。

（３）弥生時代遺構検出面の土器

弥生時代遺構検出面の遺構からは、弥生土器が出土した。いずれも小片で図化できず、詳細な時期比定は困難である。第４節で述べたように、落ち込み２出土土器からは弥生時代後期から庄内式併行期の遺構面と推定できるが、落ち込み２内出土土器を基本層序第Ⅵ層出土土器と確実に分けて取り上げられていないことから、包含層出土土器とあわせて報告することとする。

（４）包含層出土土器

包含層出土遺物は、その形成時期を示すものを中心とし、それ以前の時期の遺物については特徴的なものを報告する。

基本層序第Ⅱ～Ⅳ層出土土器（図 24） 基本層序第Ⅱ・Ⅲ層は一体で掘削した部分が多いため、あわせて報告する。基本層序第Ⅱ～Ⅳ層からは、磁器、土師質羽釜、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。第Ⅲ・Ⅳ層に限定できるものを中心に、形成時期を示すと考えられるもの、また、それ以前の遺物で特徴的なもの７点を図化した。

16 は、青磁椀である。残存度が低く口径は不明である。龍泉窯系青磁連弁文椀Ⅰ 2a で、13 世紀第二四半期に位置づけられる。

17 は、土師器小皿である。13 世紀に位置づけられる。

18 は、瓦器椀である。内面にミガキがみとめられる。12 世紀後葉頃に位置づけられる。

19・20 は、須恵器杯である。19 は杯 A、20 は杯 B で高台を欠損する。いずれも奈良時代に位置づけられる。

21 は、須恵器把手付鉢である。外面に波状文を施す。22 は須恵器器台

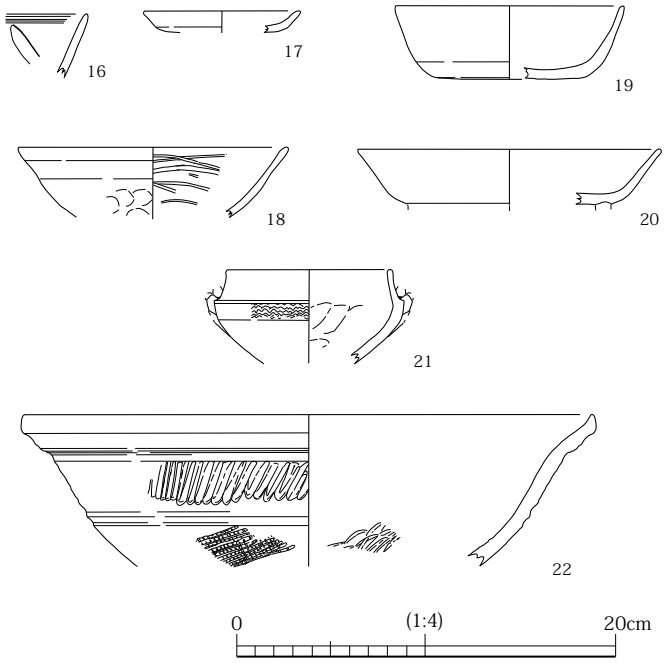


図 24　11001-4 区包含層出土土器（１）

である。外面に波状文を施す。

第Ⅲ・Ⅳ層の形成時期を示すと考えられる中世の遺物には 12 世紀後葉～ 13 世紀のものがあるが、第Ⅲ層の直上層は現代作土・床土であることから、形成時期は近世まで下る可能性も考えられる。

基本層序第Ⅴ層出土土器　基本層序第Ⅴ層からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土したが、いずれも小片で、図化できるものはなかった。また、出土遺物は弥生時代から古墳時代に位置づけられるものであるが、下層で中世の遺構を検出していることから、形成時期は中世以降と考えられる。

基本層序第Ⅵ層出土土器（図 25 ～ 30、巻頭図版 4 、図版 15 ～ 18）　基本層序第Ⅳ層からは、須恵器、韓式系土器、土師器、弥生土器が出土した。このうち特徴的なもの、住居跡の可能性のある落ち込み 2 出土のもの等 75 点を図化した。57 ～ 97 は落ち込み 2 出土に限定できるもの、23 ～ 56 は落ち込み 2 出土のものを含む可能性があるが、大半は落ち込み 2 より上層からの出土と考えられるものである。

23 は、土師器杯である。奈良時代に位置づけられる。

24 ～ 39 は、古墳時代の須恵器である。24 ～ 33 は須恵器杯蓋である。30・32 は外面に自然釉がみとめられる。34 は蓋で、つまみを欠損する。35 ～ 38 は須恵器杯身である。38 は底部外面に自然釉がみとめられる。39 は須恵器高杯で、長方形透かしを 4 方向に施す。24 ～ 28・35 ～ 37 は TK23 に、29 ～ 31・34・38 は TK47 頃に、32・33 は MT15 頃に位置づけられる。

40 ～ 44 は、古墳時代の土師器である。40 は甕である。体部外面には工具痕がみとめられるが、

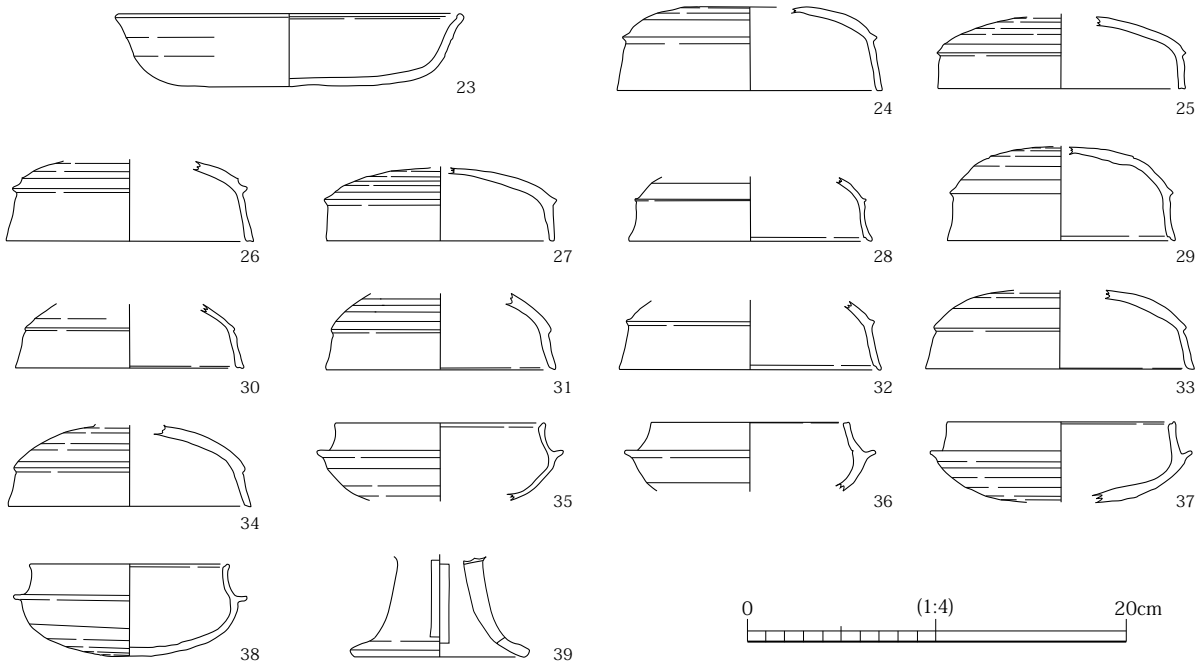


図 25　11001-4 区包含層出土土器（2）

摩滅が著しく不明瞭である。41 は有稜高杯である。杯部底部に棒状工具による刺突痕跡が残る接合法Ｃである。42・43 は高杯で、杯部形状より外反高杯の可能性が考えられる。いずれも外面にハケを施す。42 は杯部底部に棒状工具による刺突痕跡が残る接合法Ｃである。43 も杯部底部に棒状工具による刺突痕跡が残る可能性があるが、不明瞭である。44 は製塩土器脚台である。外面にユビオサエを施す。外面は二次焼成により褐色に変色する。41 は布留式後半に位置づけられる。

45 は、韓式系土器甑である。底部に６孔が残存し、８孔であったと考えられる。体部外面にタタキを施し、底部付近はケズリを施す。体部中央よりやや上部、把手の上端部付近の位置に沈線を１条施す。把手端部は垂直で、把手下面には棒状工具による刺突痕跡が残る。体部外面に黒斑がみとめられる。百済系のものと考えられる。生産地を検討するため、第Ⅵ層出土の在地と考えられる土師器と比較して胎土分析を行った。胎土分析の目的、方法、結果等詳細については第７章で報告する。

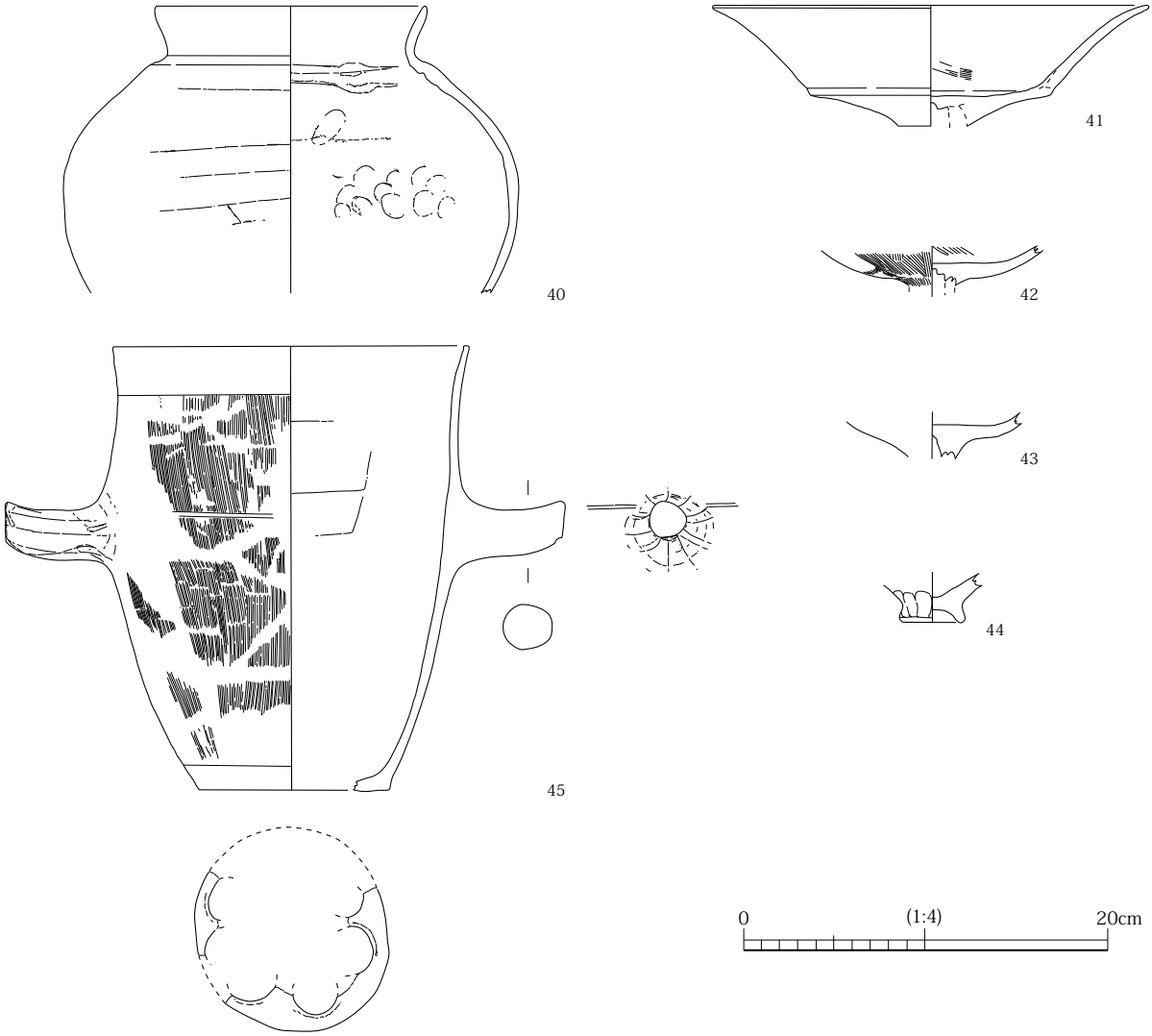


図 26　11001-4 区包含層出土土器（３）

46 ～ 56 は、弥生土器である。

46 は広口壺で、垂下した口縁部の外面に沈線と竹管円形浮文を施す。

47 は弥生形甕である。体部外面に右上がりのタタキを施す。口縁端部は丸くおさめる。

48 ～ 55 は底部である。50・51 は外面に右上がりのタタキを施す。50 は底部外面に木の葉文がみとめられ、ススが付着する。底部形状は、48・49・53 は中央部付近が窪む平底、50・52・54・55 は平底、51 はやや外側に突出する平底である。50 は甕、51 は甕か鉢と考えられる。

56 は有稜高杯である。脚柱部中空で、透かしの有無は欠損により不明である。脚柱部中央部付近に円形窪み 1 がみとめられる。棒状工具で刺突したような痕跡であるが、貫通はしていない。

46 ～ 56 のうち、46 は後期、47・50・51 は後期～庄内式併行期に、56 は庄内式併行期に位置づけられる。詳細な時期比定の困難なものもあるが、後期～庄内式併行期を中心時期とするものと推定できる。

57 ～ 97 は、落ち込み 2 出土の弥生土器である。

57 ～ 70 は、壺または壺の可能性あるものである。57 ～ 61 は広口壺である。57・58 は垂下した口縁部の外面に沈線と竹管円形浮文を施す。口縁部、頸部の内外面にミガキがみとめられる。59・61 は口縁部が頸部から垂直に立ち上がって外反し、60 は口縁部が単純に外反する。59 は頸部内外面にハケを施す。60 は体部内面にハケ、頸部、体部の外面にミガキを施す。61 は頸部内外面、体部外面にミガキを施す。底部内面にコゲ、体部下半外面にススが付着する。底部形状は平底である。

62 は体部外面にハケを施す。体部中央部から下半の外面に黒斑がみとめられる。体部下半外面にススが付着する。63 は体部内外面にハケを施す。外面にはミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。64 は体部外面にハケの後ミガキを施す。底部形状は、62・64 は平底、63 は外側にやや突出する平底である。

65 ～ 67 は、底部である。65 は体部内面にハケを施し、体部外面に不明瞭であるがミガキがみとめられる。66 は体部内面にハケを施し、体部外面にミガキがみとめられる。67 は体部外面に

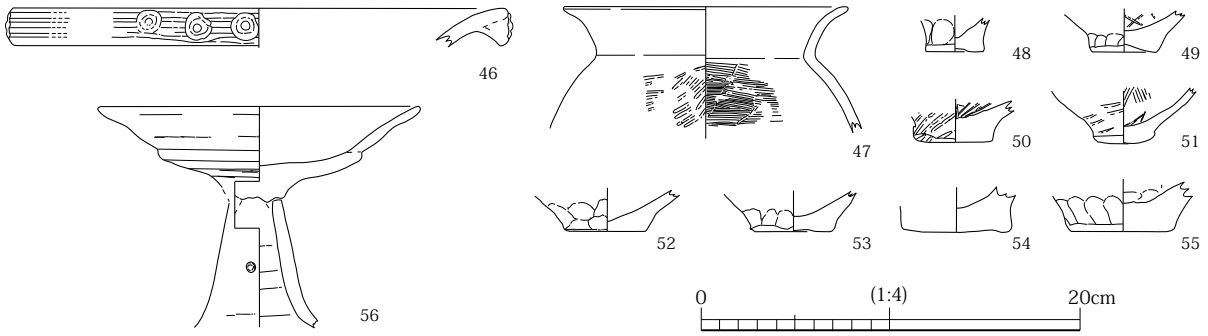


図 27　11001-4 区包含層出土土器（4）

ミガキがみとめられる。底部形状は、65・66 は中央部付近が窪む平底、67 は平底である。

68 は、体部である。体部内面にハケを施し、体部外面にミガキがみとめられる。

69 は、欠損により形状を確定できないが、小形壺の可能性がある。底部形状は中央部付近が窪む平底である。70 は小形壺である。体部外面にハケを施した後、ミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。体部下半に焼成前穿孔が 1 みとめられる。底部形状は平底である。

57 ～ 70 のうち、57・58・60・62 は後期、59・61・68 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。詳細な時期比定の困難なものもあるが、後期～庄内式併行期を中心時期とするものと推定できる。

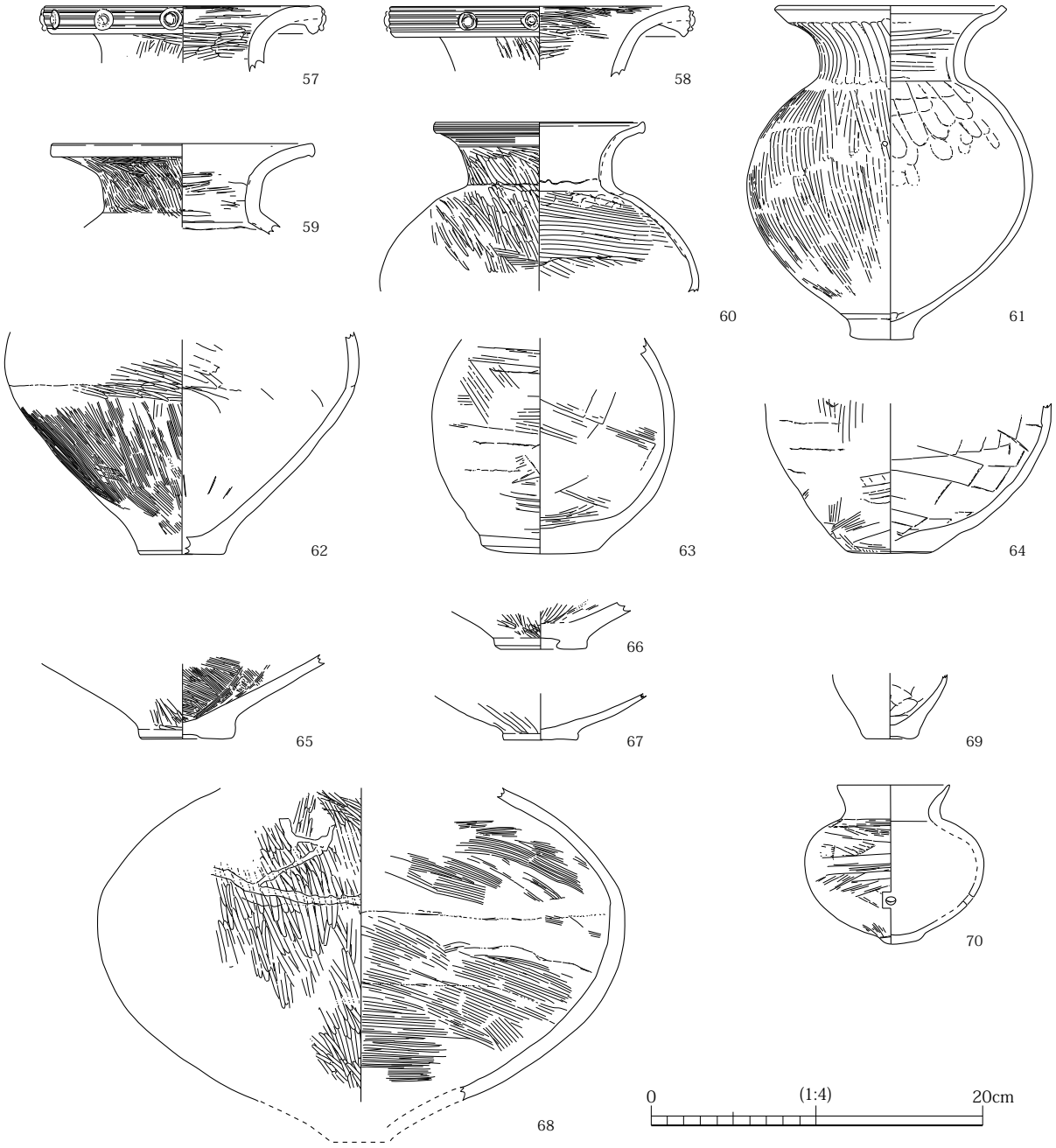


図 28　11001-4 区包含層出土土器（5）

71 ～ 81 は、弥生形甕である。71 ～ 73 は器高 14cm 未満の超小形である。71 は口縁部と体部が直接接合せず、図上復元で、口縁部の傾きと口径は不確定である。口縁部は鈍い端面をもち、外面にハケ状の痕跡がみとめられる。体部外面は右上がりのタタキを施し、頸部までタタキが及ぶ。体部はタタキの後、一部ナデを施す。72 は体部と底部が直接接合せず、図上復元である。体部外面に右上がりのタタキを施す。タタキは 4 条／ cm と、2.5 ～ 3 条／ cm 程度のものが多い中で、やや細いものである。底部外面にススが付着する。73 は口縁部の形状がいびつで、端部は丸くおさめる。体部外面は右上がりのタタキを施し、頸部までタタキが及ぶ。体部はタタキの後、一部ユビオサエ・ナデを施す。体部外面はススが付着する。二次焼成により赤色に変色し、表面が剥離する部分もみとめられる。71 ～ 73 の底部形状は外側にやや突出する平底である。

74 は、器高 14cm 以上 17cm 未満の小形である。口縁部は端部がわずかに上方に拡張され、上面に弱い稜線をもつ。体部外面に 4 条／ cm とやや細い右上がりのタタキを施した後、一部に縦方向のハケを施す。体部下半から底部の内面に黒斑がみとめられる。底部形状は欠損により不明である。

75 は、器高 17cm 以上 24cm 未満の中形である。全体に大きくひずむ。口縁端部は丸くおさめる。口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部外面に 2 条／ cm とやや太い右上がりのタタキを施す。体部上半外面に黒斑がみとめられ、体部下半外面にススが付着する。底部形状は平底である。

76 は、口縁部は鈍い端面をもつ。口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部外面は横位のタタキの後、下半一部に工具による縦方向の調整を施す。体部下半外面に黒斑またはスス付着がみとめられる。

77 は、口縁部は端部がわずかに上方に拡張され、上面に弱い稜線をもつ。体部外面に右上がりのタタキを施し、タタキが口縁部まで及ぶ。口縁部のみタタキ後にヨコナデを施す。

78 は、口縁部は鈍い端面をもつ。体部外面に右上がりのタタキを施した後、頸部にヨコナデを施す。

79 は、器高 17cm 以上 24cm 未満の中形である。口縁端部は鈍い端面をもつ。口縁部形状はいびつで、口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部外面は右上がりのタタキの後、下半に縦方向のハケ状の調整を施す。口縁部から体部上半外面に黒斑がみとめられる。体部下半外面にススが付着する。底部形状は平底である。

80 は、器高 24cm 以上 30cm 未満の大形である。体部上半と下半が直接接合せず、図上復元である。口縁部は鈍い端面をもつ。口縁部形状はいびつで、口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部外面は右上がりのタタキの後、下半に縦方向のハケ状の調整を施す。外面のタタキは頸部に及ぶ。体部下半から底部外面にススが付着する。底部形状は平底である。

81 は、縁部は端部がわずかに上方に拡張されるようであるが、摩滅が著しく形状は不明瞭である。体部外面に 4 条／ cm とやや細い右上がりのタタキを施す。体部外面にススが付着する。

71 ～ 81 のうち、74・79 は後期に位置づけられる。その他のものはいずれも後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

82 ～ 90 は底部である。82・83・86 は外面に右上がりのタタキを施す。87 は外面に不明瞭であるがタタキがみとめられる。89 は外面に横位のタタキを施す。83 は外面にススが付着する。84 は底部外面に黒斑がみとめられる。底部形状は、82 はやや外側に突出する平底、83・84・

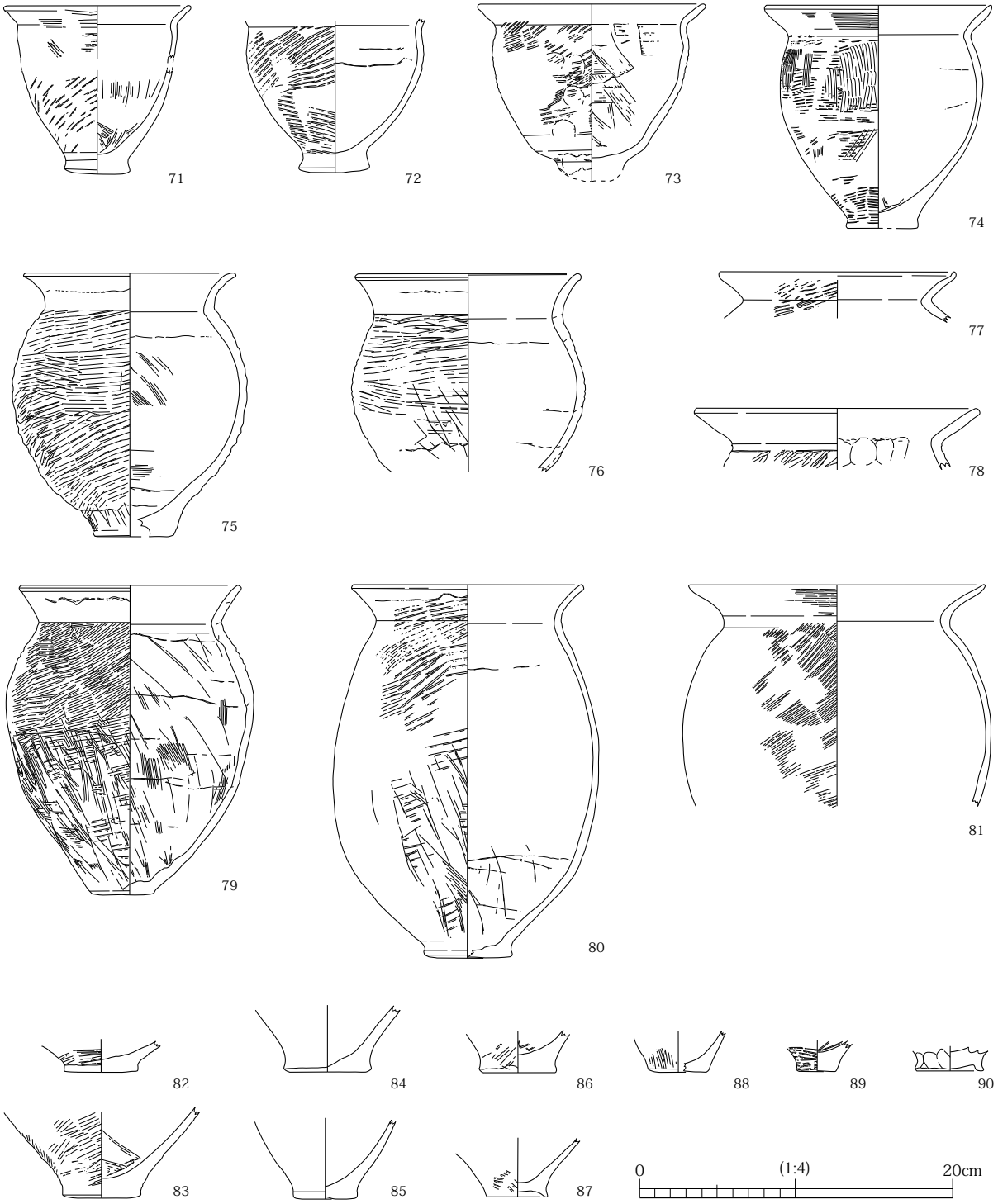


図 29　11001-4 区包含層出土土器（6）

86･89 は平底、85･90 は中央部付近が窪む平底、87 は上げ底状である。82･83 は弥生形甕である。84 は壺、85・86・88・90 は甕、87 は鉢、89 は甕か鉢と考えられる。82・83・86・87・89 は後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

91 ～ 94 は椀形高杯で、いずれも脚柱部中空である。91 は円形透かしを 4 方向に施す。透かしの配置は不均等であるが、２孔を１組として２組配置したものと考えられる。脚部内面に竹管状の工具で穿孔した痕跡がみとめられるが、貫通はしていない。杯部内外面、脚部外面にミガキを施す。92 は欠損により透かしの有無は不明である。杯部内面にハケを施す。杯部外面にハケ状痕跡がみとめられるが、不明瞭であり、ミガキを施した可能性もある。93 は円形透かしが２箇所残存し、３方向であったと考えられる。円盤充填である。杯部内面にハケ、杯部外面、脚部外面に板ナデを施す。94 は全体に大きくひずむ。円形透かしを３方向に施す。杯部内外面、脚部外面にハケを施す。杯部内面はミガキ状の痕跡もみとめられるが不明瞭である。91 ～ 94 は後期に所属し、94 は後期後葉頃に位置づけられる。

95･96 は小形鉢である。95 は椀形の体部に、やや突出した平底をもつ。体部内面にハケを施す。底部形状は、中央部付近が窪む平底である。全体にひずみが大きく、口縁部形状がいびつであることから、製作途上品を転用した鉢である可能性も考えられる。96 は浅めの体部に平底をもち、口縁部は屈曲して斜め上方にのびる。体部内面にハケと板ナデを施す。底部形状はやや突出する平底である。95 は後期に位置づけられる。

97 は製塩土器脚台である。脚部外面に左上がりのタタキを施す。二次焼成により黒～灰白色に変色する。Ⅰ式で、後期後葉～庄内式前半に位置づけられる。

基本層序第Ⅵ層出土土器は、弥生時代から奈良時代の幅広い時期のものが出土している。一方、落ち込み２内では、弥生土器のみが出土しており、後期～庄内式併行期に位置づけられる。個々

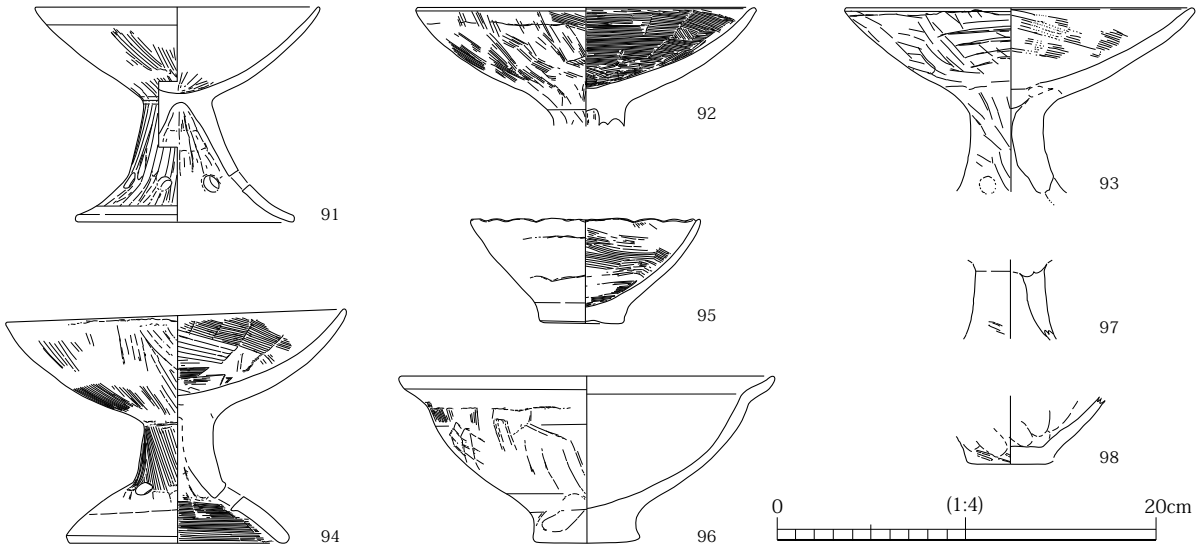


図 30　11001-4 区包含層出土土器（７）

の詳細な時期は限定し難いものが多いが、高杯に後期後葉頃のものがあること、庄内式併行期に明瞭に限定できるものがみとめられないことから、落ち込み２内の土器は後期後葉を中心時期とすると考えられる。落ち込み２が竪穴住居跡であれば、この時期のものと推定でき、また、落ち込み２が遺構ではないとしても、同じ基本層序第Ⅷ層上面で検出した弥生時代遺構検出面の柱穴、ピット等について後期頃のものと推定できる。したがって、第Ⅵ層形成時期は、弥生時代後期から少なくとも奈良時代の長期にわたるが、下層については後期から庄内式併行期頃に堆積した可能性が考えられる。また、直上の第Ⅳ・Ⅴ層の形成時期が中世と考えられることから、出土遺物では奈良時代のものが下限であるものの、第Ⅵ層の形成時期は平安時代、あるいは中世まで下る可能性もある。

基本層序第Ⅶ層出土土器（図 30）　基本層序第Ⅶ層からは、少量の弥生土器が出土した。いずれも小片で、ここでは図化できる１点を報告する。

98 は弥生土器底部である。外面に不明瞭であるが左上がりのタタキを施す。底部形状は平底である。甕か鉢と考えられる。後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

基本層序第Ⅶ層出土遺物は少量の弥生土器のみで、出土遺物のみから形成時期を推定することは難しい。先述のように、上層の第Ⅵ層形成時期は弥生時代後期以降と考えられ、下層の第Ⅷ層上面検出遺構は弥生時代後期頃と推定できるものの、第Ⅶ層の分布範囲では下層に遺構を検出していないことから、遺構の時期と第Ⅶ層の形成時期の先後関係は明確でない。第Ⅶ層形成時期は、弥生時代後期頃と考えられるが、形成開始時期はさらに遡る可能性も考えられる。

第２項　土製品（図 31）

土製品は２点が出土した。

99 は土錘である。基本層序第Ⅱ・Ⅲ層から出土した。一端を欠損する。基本層序第Ⅱ・Ⅲ層からは弥生時代から近世の土器が出土しており、詳細な時期比定は困難である。

100 は円形で、一面に孔をもつ。基本層序第Ⅵ層から出土した。摩滅が著しく、欠損の有無は不明である。第Ⅵ層からは弥生時代から奈良時代の土器が出土しており、詳細な時期比定は困難であるが、弥生土器に類似した胎土である。

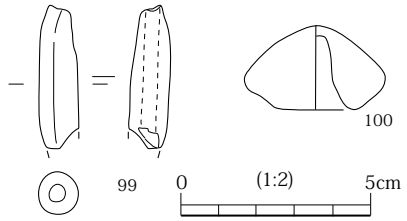


図 31　11001-4 区出土土製品

第３項　粘土塊（図 32、図版 30 －２）

基本層序第Ⅵ層からは粘土塊が複数点出土した。このうち、法量が大きくかつ人為的に加工された可能性のある２点を報告する。

101 は表面の一部がやや滑らかになる。胎土は粗く、径５cm 程度の礫を多数含む。102 は表

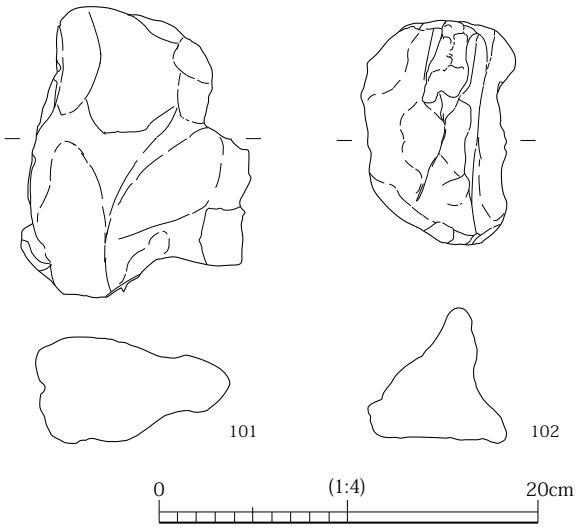


図 32　11001-4 区出土粘土塊

面の一部が滑らかになる。一部黒色に変色することから、熱を受けた可能性がある。胎土は粗く、径 5 cm 程度の礫を含む。

図化しなかったものはいずれも最大長が 5 cm 程度の小片であるが、102 と同様に黒色に変色するものが含まれていた。これらの粘土塊は、土器の材料として持ち込まれた可能性があることから、同じ基本層序第Ⅵ層から出土した韓式系土器甑、土師器と比較するため胎土分析を行った。胎土分析の目的、方法、結果等詳細については第 7 章で報告する。

第 4 項　瓦（図 33 ～ 35、図版 31）

瓦については、丸瓦は大脇（1991）、平瓦は佐原（1972）、中世の瓦については市本（1993）および中世土器研究会編（1995）を主に参考とした。また、平瓦桶巻作りの分割に関わる製作技術上の用語については瀧本（1983）を参考としたほか、凸面布目平瓦については小谷（2001）、中井（2002）等を参考に観察を行った。

丸瓦は凸面を上面、狭端部を上方に向けて提示、平瓦は凹面を上面、広端部を上方に向けて提示することを基本とし、記述にあたっての上下左右はその状態での位置を示す。縄叩きを施すものについては、3 cm あたりの縄目粒数と縄本数を計測し、布目圧痕は図縦方向を縦糸、横方向を横糸と呼称して、3 cm あたりの布目数を計測した。いずれも摩滅や調整により計測不能なものも多く、3 cm あたりでの計測が行えず推定によりそれぞれの数を提示したものは、推定と表示する。

11001-4 区から出土した瓦は、丸瓦が 112 点で計 13081g、平瓦が 301 点で計 45317g、計 413 点で 58398g である。小片が多く、また、大半は弥生時代から中世の遺物を含む包含層から出土しているため、詳細な時期比定は困難であるが、古代～中世のものが出土している。その中で、第Ⅵ層出土のものについては、層の形成時期が平安時代以降に下る可能性はあるものの、出土土器は奈良時代以前のもののみが出土していることから、瓦の時期は奈良時代以前に限定できる可能性がある。ここでは、特徴的なものや残存度の高いものについて、第Ⅵ層出土のものを中心に報告する。

103 ～ 110 は平瓦である。

103 は基本層序第ⅥB 層から出土した。1 側面が残存する。凹面に糸切り痕がみとめられる。凹面に布目が残るが不明瞭である。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は 5 粒／ 3 cm、縄本数は 11 本／ 3 cm である。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。枠板圧痕はみとめられ

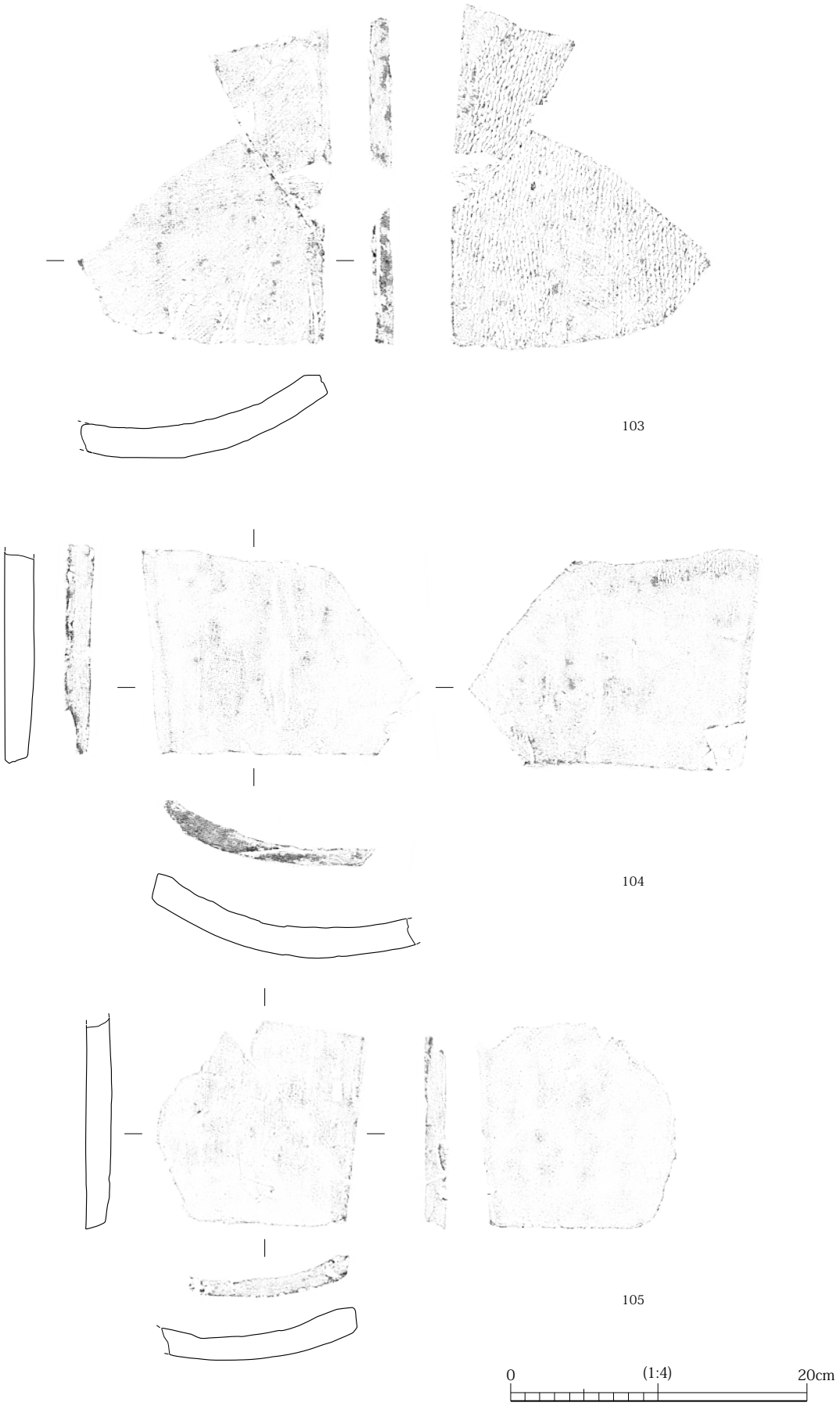


図 33　11001-4 区出土瓦（1）

ない。焼成はやや不良である。古代から中世に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

104 は、中世遺構検出面の柱穴 044 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 22 本／ 3 cm、横糸 22 本／ 3 cm である。枠板圧痕状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。凹面の一部にナデを施し、狭端面付近、側縁付近には調整を施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 14 本／ 3 cm である。縄叩き後に調整を施すが、不明瞭である。狭端面はケズリを施すようであるが不明瞭である。凸面側に面取りを施す。側面は平坦になるが調整不明である。凸面側縁に面取りを施すようであるが、摩滅が著しく不明瞭である。焼成は不良でいぶし状になる。

105 は、基本層序第Ⅵ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 22 本／ 3 cm、横糸 27 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。凹面の一部に横方向のハケ状痕跡がみとめられる。狭端面付近には横方向のケズリを施し、側縁付近にも調整を施す。凸面の調整は摩滅により不明である。狭端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

106・107 は、残存度の高いものである。いずれも基本層序第Ⅵ層から出土した。

106 は、全長 37.0cm、広端幅 28.3cm、狭端幅 21.9cm、最大厚 1.8cm である。右側面一部を欠損する。凹面は右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 25 本／ 3 cm、横糸 23 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕が計 12 枚分みとめられる。凹面の広端面付近に調整を施し、狭端面付近には横方向のケズリを施す。また、両側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施した後、縦方向の調整を、摩滅により不明瞭であるが、ほぼ全面に施すようである。広端面は平坦になるが調整不明である。凸面側一部が面取り状になる。狭端面はケズリを施し、面取りはない。両側面とも平坦になるが調整は不明である。左側面は面取りはない。右側面は、凸面側縁に面取りを施すようであるが、摩滅が著しく不明瞭である。焼成は不良でいぶし状になる。

107 は、全長 34.8cm、広端幅は推定 26.0cm、狭端幅は推定 22.0cm、最大厚 2.1cm である。左上隅を除く 3 箇所の隅部を欠損する。凹面は右下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸推定 36 本／ 3 cm、横糸 30 本／ 3 cm である。枠板圧痕がみとめられ、板幅 2.0cm 前後、計 12 枚前後と推定できる。また、縦からやや斜め方向に布綴じ合せ目がみとめられることから、粘土板桶巻作りと考えられる。凹面一部にナデを施し、両端面付近に横方向のケズリを、両側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 14 本／ 3 cm である。縄叩き後に全面に横方向の調整を施した後、縦方向にハケ状の調整を施す。また、一部に、指紋と布目痕がみとめられる。広端面はケズリを施し、凸面側一部が面取り状になる。狭端面はケズリを施し、面取りはない。ケズリの後に指紋がみとめられる。左右両側面ともケズリを施し、凸面側縁に面取りを施す。焼成はやや良で、半須恵質である。

108・109 は、凸面布目平瓦である。いずれも基本層序第Ⅵ層から出土した。

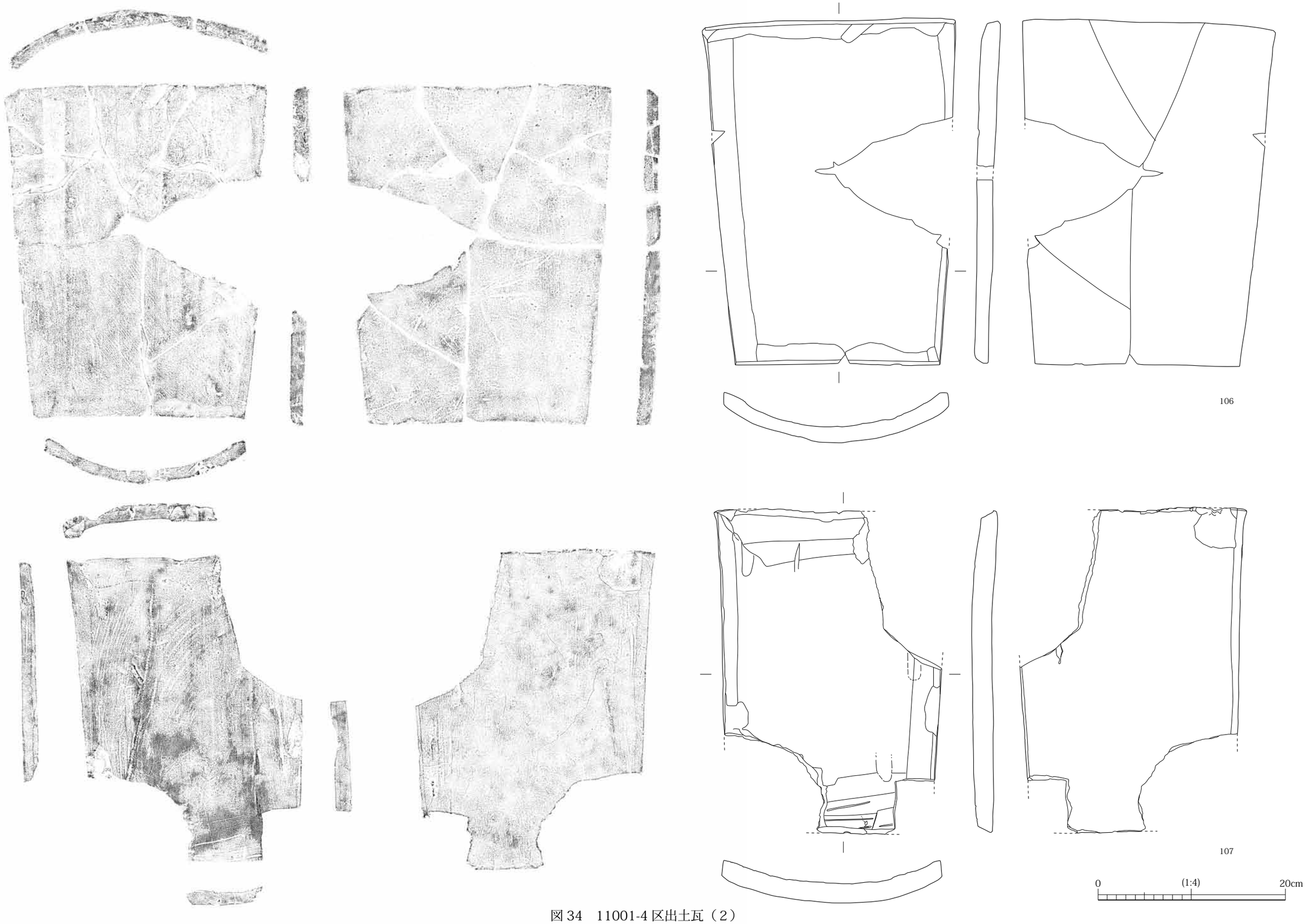


図 34　11001-4 区出土瓦（2）

108 は、1 端面が残存する。最大厚 2.6cm である。凹面は、横または斜め方向のナデを施した後、一部に縦方向のハケ状痕跡がみとめられる。凸面は布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。端面はケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

109 は、狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.1cm である。凹面は、横方向のナデを施す。凸面は布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕が端面際までみとめられる。布綴じ合せ目の可能性のある痕跡がみとめられるが、断定はできない。縦方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良でいぶし状

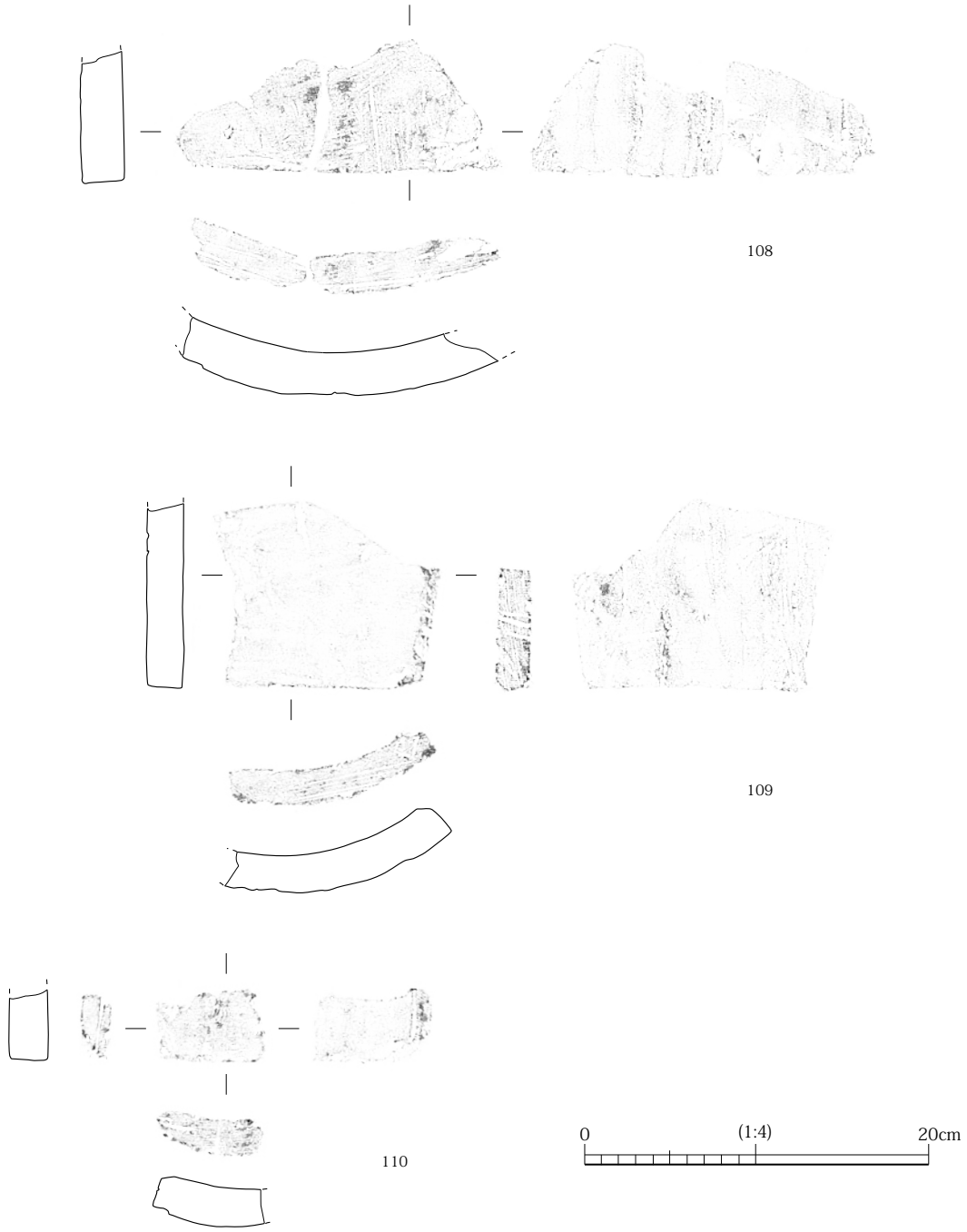


図 35　11001-4 区出土瓦（3）

になる。

110 は、基本層序第Ⅳ・Ⅵ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.3cm である。凹面は、ナデを施すようであるが、不明瞭である。凸面は側縁付近のみ布目が残り、縦方向のケズリ状痕跡が不明瞭であるがみとめられる。凹凸がみとめられるものの、枠板圧痕であるかは断定できない。狭端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成は不良でいぶし状になる。枠板圧痕は不明瞭であるものの、凸面に凹凸が確認できること、凹面のナデ状痕跡、凸面のケズリ状痕跡、厚さが大きいといった 108・109 と共通する特徴をもつことから、凸面布目平瓦と考えられる。

ここで、11001-4 区出土瓦の概要をまとめておく。まず、特に図化するべきと判断したものがない丸瓦については、小片が多く、形状の不明なものが大半であるが、行基式、玉縁式の両者が出土しており、玉縁式の中には形状から 8 世紀に位置づけられるものが出土している。焼成は、大半が不良のものであるが、須恵質～半須恵質のものが 25 点、計 3465g 出土した。なお、基本層序第Ⅵ層出土のものは、10 点、計 1629g が出土しており、行基式の可能性の高いものが 1 点含まれているが、小片が多く、時期的なまとまりを検討することは困難である。

平瓦は、まず、基本層序第Ⅵ層出土のものを見ると、29 点、計 11497g が出土している。詳細な時期比定の困難なものもあるが、うち 10 点は、凹面に枠板圧痕が確認できる。これらは、凹面の端面付近や側縁付近に調整を施す点、端面・側面にケズリを施す点等共通点がみとめられることから、同一の製作技法によっている可能性が高い。また、糸切り痕のみとめられるもの（106・107）、布綴じ合せ目がみとめられるもの（107）が含まれることから、粘土板桶巻作りであると推定できる。また、凸面布目平瓦が計 6 点出土している。凸面布目平瓦は、凹面にナデを施す、枠板圧痕による凸面の凹凸が比較的顕著である、凸面に縦方向のケズリを施す、最大厚 2.1 ～ 2.7cm と、他の平瓦と比べて厚いという特徴をもつ。これらの特徴から、凸面の布目は明瞭でないものの凸面布目平瓦と推定できるものも 1 点あることから、凸面布目平瓦と考えられるものは計 7 点となる。これは、基本層序第Ⅵ層出土平瓦の約 4 分の 1 を占める。出土地点による瓦の特徴については第 8 章でまとめるが、11001-4 区では、凸面布目瓦の占める割合が比較的高いことが指摘できる。

次に、基本層序第Ⅵ層出土以外のものを見ると、凹面に枠板圧痕が確認できるものが 31 点出土しており、これらについても、上記の基本層序第Ⅵ層出土で枠板圧痕が確認できるものとの間に製作技法の共通性がみとめられ、粘土板桶巻作りによるものと推定できる。また、凸面布目平瓦あるいは凸面布目平瓦と推定できるものが計 11 点出土しており、やはり、基本層序第Ⅵ層出土凸面布目平瓦との間に製作技法の共通性がみとめられる。したがって、これらについても、同時期に同じ製作技法で作られた可能性が考えられる。以上のように、11001-4 区出土の平瓦は、出土状況として一括性の高いものではないものの、粘土板桶巻作りによるもの、凸面布目瓦という 2 群が含まれることが指摘できる。これらの所属時期については、他の出土遺物等から 8 世紀

以前の可能性が指摘できるのみであるが、第８章で、他の調査区出土の瓦との比較によって、あらためて詳細な時期の検討を行うこととする。

なお、平瓦は、焼成は、大半が不良のものであるが、須恵質～半須恵質のものが基本層序第Ⅵ層出土で２点、その他で５点出土しており、丸瓦と比較して焼成の不良のものがさらに多いと言える。

第５項　石製品（図 36）

石器は１点が出土した。

111 は、砥石である。基本層序第Ⅱ～Ⅵ層から出土した。一端を欠損する。石材は砂岩である。残存する５面すべてに擦痕がみとめられる。上下の４面は、砥面として使用したものと考えられるが、両側面、１端面は成形の研磨を施したのみで未使用の可能性もある。形態からも、出土状況からも、時期比定は困難である。

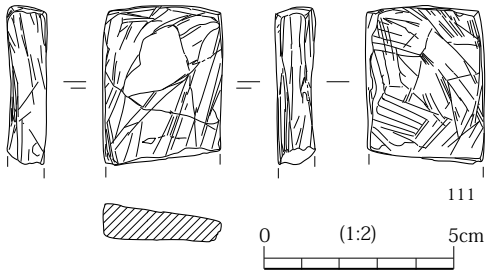


図 36　11001-4 区出土石製品

第５章　09017-2 区他の調査成果

第１節　基本層序（図 37）

第１章第４節で述べたように、本章の報告対象は 09017-2･09049-1･10001-2･10078-2･10078-3･11001-6･11001-7 区であるが､煩雑となるため最大面積の調査区名から「09017-2 区他」と呼称し、記述の中で必要に応じて各調査区名も使用することとする。

層序は、上層から順に現代の盛土であるにぶい黄褐色土（第Ⅰ層、層厚 0.1 ～ 1.0 m）、現代の作土である灰色土（第Ⅱ層、層厚 0.1 ～ 0.3 m）、現代の床土である黄褐色土（第Ⅲ層、層厚 0.05 ～ 0.25 m）、近世以降の包含層である褐灰色粘シルト（第Ⅳ層、層厚 0.05 ～ 0.2 m）、中世以降の包含層である褐灰色砂シルト（第Ⅴ層、層厚 0.1 ～ 0.6 m）、弥生時代から中世の包含層である褐色～にぶい黄褐色粘シルト（第Ⅵ A ～Ⅵ C 層、層厚Ⅵ A：0.1 ～ 0.5 m、Ⅵ B：0.1 ～ 0.9 m、Ⅵ C:0.05 ～ 0.6 m)､弥生時代の包含層である褐色細砂～砂シルト（第Ⅶ層､層厚 0.05 ～ 0.15 m)、弥生時代の包含層であるにぶい黄褐色細砂～砂シルト（第Ⅷ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m)、遺物が出土していない中礫混じり褐色粗砂（第Ⅸ層、層厚 0.65 m以上）である。なお、調査区は、安全性の確保のため連続して調査が行えずに土層観察が分断された箇所もあるが、基本層序には共通性がみとめられる。

第Ⅰ層は、道路整備予定地となる以前の建物建設や水路設置に伴う盛土である。09017-2･11001-7 区等調査区北部に分布し層厚の差が大きい。第Ⅰ層上面の高さは 22.9 ～ 24.0 mで高低差が大きい。第Ⅰ層下面の高さも 22.6 ～ 23.0 mと高低差が大きく、特に調査区北端部で厚い。

第Ⅱ層、第Ⅲ層は、道路整備予定地となる以前、あるいは建物、水路建設以前の作土および床土である。第Ⅱ層は、層厚の差はあるが、現代の撹乱によって削られた部分を除き、調査区のほぼ全域に分布する。第Ⅲ層は、層厚が薄いため明瞭に確認できない箇所もあるが、調査区東部の中央部を除きほぼ全域に断続的に分布する。第Ⅱ層下面の高さは 22.7 ～ 22.9 mと高低差は少ない。第Ⅲ層下面の高さも 22.6 ～ 22.8 mと高低差は少ない。このように第Ⅱ層、第Ⅲ層とも、層厚の差はあるものの、調査区内での高低差は少ない。

第Ⅳ層は、調査区北部を中心に分布する。第Ⅳ層は下層の第Ⅴ層と類似しており、調査当初、下層の第Ⅴ層との分層を意識していなかったが、第Ⅴ層上面で遺構を検出したことによって、層を区分した。そのため、当初の掘削部では層界を明確にできていない箇所も多く、分布域の南端は明らかではないが、少なくとも、10001-2 区以南には分布しないことを確認している。第Ⅳ層下面の高さは明らかにできていない箇所もあるが、確認できた範囲では、22.6 ～ 22.7 mと高低差は少ない。第Ⅳ層は弥生時代から近世の遺物を含む。形成時期は近世以降と推定できるが、下限は明らかにできず、近現代まで下る可能性がある。

第Ⅴ層は層厚の差があり、また、上層の第Ⅳ層との層界を明らかにできていない箇所があるが、調査区のほぼ全域に分布する。第Ⅴ層下面の高さは 22.3 ～ 22.6 mである。第Ⅴ層上面では、近

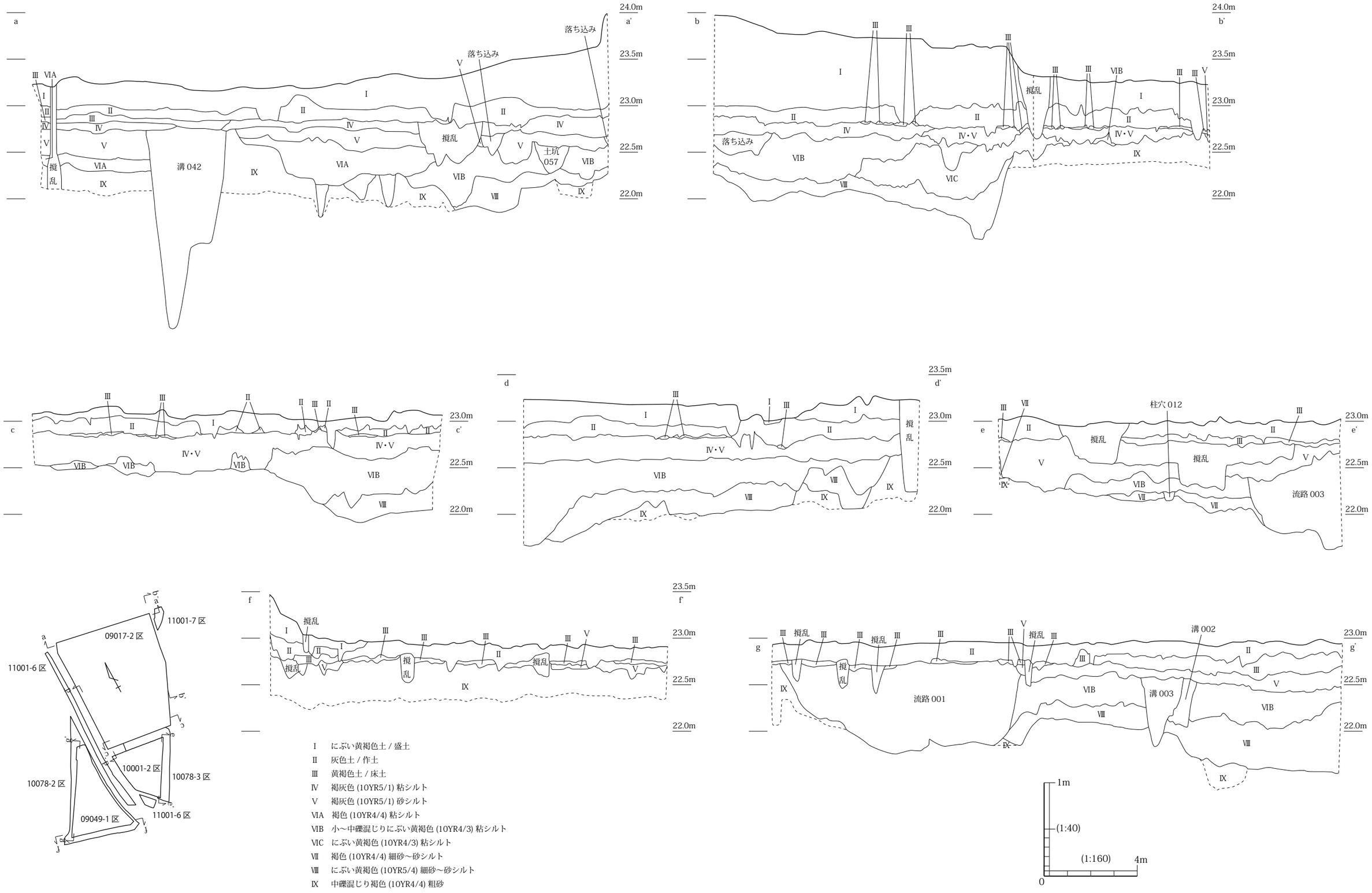


図 37　09017-2 区他土層図

世の土坑、溝、落ち込みを検出している。第Ⅴ層は弥生時代から中世の遺物を含む。形成時期は中世以降と推定できるが、下限は明らかにし得ず、近世まで下る可能性がある。

第Ⅵ層は、色調や砕屑物により３層に細別したが、層界が不明瞭で出土遺物の時期差も明確にはみとめられないことから、一連の層と判断した。第ⅥA層は、調査区北部に分布する。第ⅥB層は、層厚の差はあるが、調査区北西部と南部を除く範囲に分布する。第ⅥC層は、調査区中央部のやや北側に分布する。第Ⅵ層下面の高さは、調査区北部で 22.3 m前後、層厚 0.1 m前後で、南側に向かって急激に下がり、22.0 m前後、層厚 0.5 ～ 0.6 mとなる。そのさらに南側で急激に上がって 22.5 m前後、層厚 0.1 m前後となって途切れる。調査区南東部では、22.1 m前後、層厚 0.1 ～ 0.2 mで再びみとめられるが、南西部では確認できない。第Ⅵ層上面では、中世の柱穴、ピット、土坑、溝、流路、落ち込みを検出している。第Ⅵ層は、弥生時代から中世の遺物を含み、形成時期は弥生時代から中世頃と推定できる。なお、第ⅥC層からは、特に多くの土器が出土した。

第Ⅶ層は、調査区東部、10001-2･10078-3 区のみで確認した。上層の第Ⅵ層との層界は明瞭でないが、第Ⅶ層上面で遺構を検出したことから、層を区分した。そのため、10001-2 区以前に調査した 09017-2・09049-1 区では、第Ⅶ層を第Ⅵ層と一連と誤認して認識できていない可能性もある。確認できている範囲では、第Ⅶ層下面の高さは 10001-2 区中央部で 22.1 m、層厚 0.1 m前後で、南側に向かって下がり、21.9 m、層厚 0.15 mとなる。さらに南側では上層の遺構に掘削されるため、分布範囲の南端は確認できていない。第Ⅶ層上面では、古墳時代頃の柱穴、ピットを検出した。第Ⅶ層は弥生時代の遺物を少量含む。形成時期は弥生時代以降と推定できるが、下限は古墳時代まで下る可能性がある。

第Ⅷ層は、調査区北東部から中央部に断続的に分布する。第Ⅷ層下面の高さは調査区北東部では 22.3 m前後、層厚 0.1 mで、南西側へ向かって下がるとともに層厚が厚くなり、21.7 m前後、層厚 0.5 m前後となる。そこから南で急激に上がって 22.3 ～ 22.5 mとなり途絶える。第Ⅷ層は弥生時代の土器を含む。形成時期は弥生時代以降と推定できるが、下限は古墳時代まで下る可能性がある。

第Ⅸ層は、調査区全域に分布する。撹乱部分や土層観察用溝により層厚 0.65 m以上であることを確認したが、下面を確認することはできなかった。第Ⅸ層上面では、弥生時代頃の柱穴、ピット、土坑、落ち込みを検出した。第Ⅸ層上面で遺構を確認した箇所では、第Ⅶ・Ⅷ層の分布がみとめれないことから、この遺構検出面は、第Ⅶ層上面で検出した遺構と連続するものである可能性が考えられる。したがって、以下ではこれらをひとつの遺構検出面として記述する。また、他調査区の成果等より、第Ⅵ～Ⅷ層は洪水堆積物、第Ⅸ層上面は自然流路の痕跡であると推定できるほか、第Ⅸ層が活発な堆積作用による洪水堆積物であることも推定できる。第Ⅸ層からは遺物は出土していない。上面検出遺構出土遺物や上層出土遺物等より形成時期は弥生時代後期以前と推定できるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

以上のように、09017-2 区他では、３面の遺構検出面を確認した。第Ⅳ層を除去した第Ⅴ層上

面では、近世の土坑、溝、落ち込みを検出した。第Ⅴ層を除去した第Ⅵ層上面では、中世の柱穴、ピット、土坑、溝、流路、落ち込みを検出した。第Ⅵ層を除去した第Ⅶ層または第Ⅸ層上面では、弥生時代から古墳時代の柱穴、ピット、土坑、落ち込みを検出した。以下ではこれらの遺構検出面を、順に「近世遺構検出面」「中世遺構検出面」「弥生～古墳時代遺構検出面」と呼称する。また、第Ⅸ層上面は、自然流路の痕跡と推定できる。

なお、11001-6 区では、調査区が狭小であったこと、西側に水路が存在していたため湧水が著しく、第Ⅸ層上面までの掘削はできなかった。また、里道であったため、埋管等による撹乱で第Ⅵ層上部まで掘削されていた。11001-7 区についても調査区が狭小で、安全の確保のため、第Ⅸ層上面まで掘削することができなかった。

第２節　近世遺構検出面の調査（図 38、図版 5―1）

基本層序第Ⅴ層上面で検出した。遺構は土坑５基、溝１条、落ち込み３基で、調査区北部から中央部の 09017-2 区内のみで確認している。09017-2 区は、廃土置き場の確保のため北東側と南西側に２分して南西側から調査を行った。南西側の調査時には、近世遺構検出面を認識しておらず、第Ⅵ層上面の遺構調査後、第Ⅵ層の掘削を進める中で、溝 042 が上層の基本層序第Ⅴ層上面の遺構であることを確認した。その後、09017-2 区北東側の調査時には、第Ⅴ層上面で遺構検出を行ったが、南西側調査時には、第Ⅵ層上面検出遺構として検出してしまった遺構がある可能性がある。しかし、遺構埋土および出土遺物の検討から、南西側に確実に第Ⅴ層上面の遺構であったと判別できるものは溝 042 以外にはないものと判断した。したがって、南西側第Ⅵ層上面で検出したその他の遺構については中世遺構検出面のものとして扱うこととする。

土坑　調査区北部で、土坑 047・048 他計５基を検出した。埋土に共通性がみとめられたため、特徴的なものや遺物が多く出土したものを中心に遺構番号を付し、その他のものについては番号を付していないものがある。

土坑 047・048 等３基、調査区北端部の２基でそれぞれ埋土を掘削しており先後関係がみとめられる。

形状はいずれも不整円形で、規模の確認できる１基では、長径 3.7 m、短径 3.1 m、深さ 0.6 mである。

埋土はいずれも上層は中礫混じり褐色シルト、下層は暗灰黄色粘土である。土坑の性格は明らかでないが、深さ、埋土の共通性より、類似した機能をもつ可能性がある。

遺物は、中世の土師質羽釜と瓦器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土した。遺構の時期を示すと考えられる近世以降の遺物はみとめられなかった。混入遺物ではあるが、下層に由来する可能性のあるものとして、土坑 047 から出土した須恵器２点（136・137）を図化した。

溝 042（図 39、図版 5―２～４） 溝は１条検出した。調査区北部から中央部に位置する南北方向の溝である。北側は調査区外にのびており、全長 29.0 m以上である。幅は 3.6 ～ 4.1 mである。南部では、先述のように、下層の基本層序第Ⅵ層の掘削開始後の検出となったため、第Ⅴ層上面での幅を確認できていないが、土層観察用畦の精査により本来の検出面における位置を確認できた箇所については、図 38 に破線で示した。この推定部分を含めると、最大幅は 5.0 mとなる。

横断面形は、東側では約 1.2 m下がったところで幅 1.0 ～ 1.5 mの平坦面をもった後、急激に下がり、最深部では検出面からの深さが 2.1 ～ 2.2 mになる。西側は、急激に立ち上がる。また、縦方向の断面は溝主軸に平行する方向で観察できていないが、南端部は、急激に立ち上がる形状である。底面の高さは、20.6 m前後で調査区内では大きな高低差はみられない。

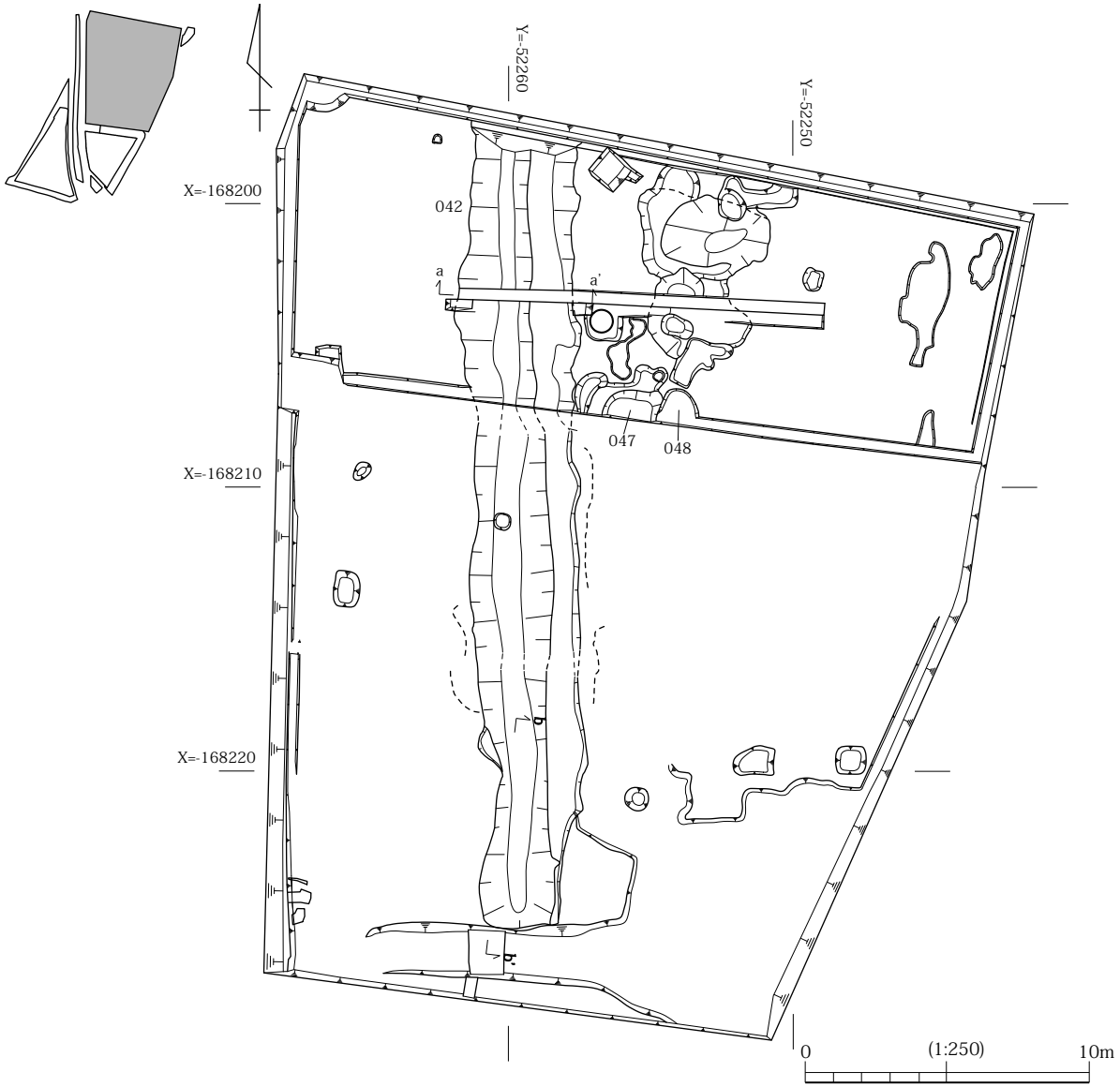
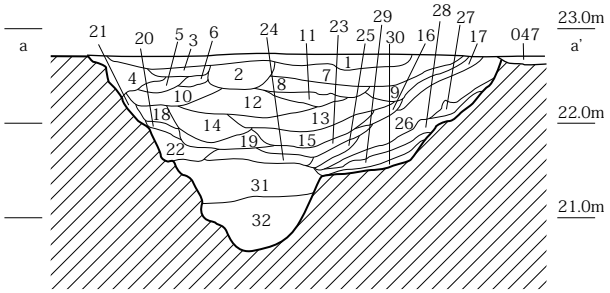


図 38　09017-2 区他近世遺構検出面全体図

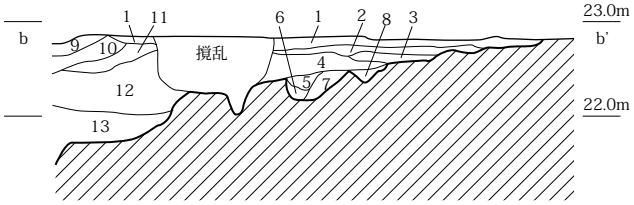
主軸方向は、N―1°―W である。

埋土は大きく 3 層に分けられる。上層から順に、褐灰色細砂～砂シルト（図 39：a-a' 断面 1 ～ 12 層、以下では上層と呼称）、黄灰色砂シルト～粘シルト（図 39:a-a' 断面 13 ～ 30 層、中層）が堆積し、平坦部以下の最深部に灰色砂シルト～粘シルト（図 39：a-a' 断面 31・32 層、下層）が堆積する。最深部は還元状態にあり、最終的には流入土壌により埋没して、機能を失ったものと考えられる。

遺物は、近世の磁器、中世の瓦質羽釜、土師質羽釜、瓦器、土師器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土した。遺物は、上～中層で多く出土し、下層の灰色



1　褐灰色 (10YR6/1) 砂シルト
2　中～大礫・黄褐色 (10YR5/6) 砂偽礫混じり褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト
3　中礫・褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
4　中礫・黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト
5　4 層より黄灰色粘土偽礫多量
6　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト
7　中礫・褐灰色 (10YR5/1) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
8　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
9　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり褐灰色 (10YR5/1) 細砂
10　中礫・褐灰色 (10YR5/1) 砂偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
11　黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト混じり褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト
12　中礫・褐灰色 (10YR5/1) 砂偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
13　明褐色 (10YR5/6) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
14　明褐色 (10YR5/6) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
15　明褐色 (10YR5/6) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂
16　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
17　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
18　中礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
19　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
20　中礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂
21　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂
22　中礫・黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり明褐色 (10YR5/6) 粘シルト
23　中礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
24　中礫・褐色 (10YR4/4) 砂シルト混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
25　中礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
26　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
27　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
28　黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂混じり褐色 (10YR4/4) 細砂
29　褐色 (10YR4/4) 中～粗砂混じり褐色 (10YR4/4) 細砂
30　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細～中砂　ラミナ
31　灰色 (10Y4/1) 砂シルト
32　中礫混じり・灰色 (10Y4/1) 砂シルト～粘シルト



1　褐灰色 (10YR6/1) 細砂
2　褐灰色 (10YR6/1) 砂シルト
3　黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
4　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
5　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
6　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
7　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト
8　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
9　褐灰色 (10YR6/1) 細砂
10　褐灰色 (10YR6/1) 砂偽礫混じり黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
11　褐灰色 (10YR6/1) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
12　黄灰色 (2.5Y5/1) 砂シルト
13　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘シルト

0　(1:80)　2m

断面位置は図 38 に対応

図 39　09017-2 区他溝 042 断面図

砂シルト～粘シルト層からの出土遺物は少量であった。しかし、灰色砂シルト～粘シルト層からも近世の遺物が出土していることから、溝の掘削および機能の時期は近世以降と推定できる。遺構の時期を示すと考えられる近世の遺物のほか、混入遺物ではあるが、特徴的なもの等、計 24 点（112 ～ 135）を図化した。

溝 042 の機能を考えるにあたっては、伝えられている古地名が参考になる。地元の方々によると、この場所には、貯水池があり、「新池（しんげ）」と呼称されていたということである。溝最深部が還元状態であった点からも、水を貯めておくための貯水溝と考えられる。

なお、平成 23 年度に報告した 10001-3 区でも、平面形、断面形、最深部が還元状態であるという埋土とも類似する同様の特徴をもつ東西方向の溝が 1 条検出されている。10001-3 区の溝は 12 ～ 13 世紀のものであるが、同様の機能をもつものと推定できる。

落ち込み　調査区北東部で３基を検出した。いずれも南北方向で、うち２基は調査区外へのびる。深さ 0.1 ～ 0.2 mである。

埋土は黄灰色シルトである。

遺物は中世の瓦器、土師器が出土したが、いずれも小片で、図化できなかった。また、落ち込みの機能や時期を示す遺物は出土しなかった。

３基とも、人為的な遺構であるかは不明である。

小結　近世遺構検出面の遺構出土遺物は弥生時代から近世のものが出土している。中世以前の混入遺物と考えられるものが大半であるが、少量ながら 18 ～ 19 世紀の遺物が出土しており、溝 042 の最深部からも近世の遺物が出土していること、下層の基本層序第Ⅴ層から中世の遺物が出土していることから、近世の遺物出土が確認できなかった土坑も含め、18 ～ 19 世紀の遺構であると推定できる。なお、直上層の基本層序第Ⅳ層形成時期が近代まで下る可能性も否定できないことから、溝 042 の最終埋没時期はさらに下る可能性も考えられる。

機能を推定し得た遺構は溝 042 のみであるが、直上層の基本層序第Ⅳ層は、周辺調査区の中世以降の作土に類似する。直上層の形成が近世以降であることは確実であり、また、下層で床土と考えられる土層の確認はできていないものの、層の類似性より、作土である可能性が考えられ、近世以降、周辺で耕作が行われていた可能性が考えられる。溝 042 の機能が貯水であるとすると、耕作用の灌漑施設として用いられた可能性が考えられることからも、近世以降、連綿と耕作が行われていたこと、また、その中のある時期に、南北方向の貯水溝が設けられていたものと推定できる。そうであれば、機能を推定できなかった他の土坑や落ち込みも、耕作に関わる何らかの機能をもっていた可能性が考えられる。

主軸方向を検討できた遺構は溝 1 条のみであるが、座標北に近い方向である。また、人為的な遺構であるかは断定できないものの、落ち込み３基についても、主軸方向が座標北に近いように見受けられる。人為的に掘削されたものではないとしても、耕作に伴う何らかの痕跡であれば、当時の周辺地割を反映している可能性があり、地割の形成過程を考える参考となると考えられる。

これらの溝・落ち込みの検出位置は、和泉寺跡推定寺域外であるが、推定寺域南東隅部に近接している。周辺の調査区の様相も含め、第８章であらためて遺構主軸方向の検討により寺域推定の根拠となっている現在の地割の形成時期を検討することとする。

第３節　中世遺構検出面の調査（図 40、図版５―５～７―２）

基本層序第Ⅵ層上面で検出した。遺構は柱穴 78 基、ピット９基、土坑 13 基、溝８条、流路 1 条、落ち込み 10 基である。遺構は調査区全域で検出し、特に南部で多く検出した。

柱穴（図 41）　柱穴は 78 基を検出した。調査区中央部から南部、特に 10078-2・3 区で多く検出した。これは、土層が類似する周辺調査区の調査を進めるにしたがって、検出が容易になったことによっている可能性があり、一連の調査で初期に調査を実施した 09017-2・09049-1・10001-2 区では、本来存在していた柱穴を検出できていない可能性がある。したがって、本来は、調査区全域に、南部の 10078-2・3 区と同様の密度で柱穴が密集していた可能性を考慮する必要がある。

多数の柱穴を検出した南部の 10078-2・3 区では調査区の幅が狭いこともあり、いずれも構成する建物を明らかにできなかった。遺構番号はすべての柱穴に付している。また、10078-2・3 区の柱穴 195 ～ 197 は、基本層序第Ⅵ層が堆積しておらず、第Ⅸ層上層で検出した。そのため、下層の弥生～古墳時代遺構検出面に伴う遺構である可能性もある。埋土、遺物からも本来の検出面を判断できなかったため、本節の中世遺構検出面と、次節の弥生～古墳時代遺構検出面の両者の全体図に表示し、遺構数の合計にもそれぞれ含めることとする。

平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.2 m、柱痕跡の平面規模は直径 0.1 ～ 0.3 m である。柱掘方は、検出位置との相関関係はみとめられず、平面規模と深さも比例しないものと考えられる。

埋土は、褐色またはにぶい黄褐色の細砂～粘シルトで、礫の混じるものもある。基本層序第Ⅵ層に類似しており、この下層に由来するものと考えられる。また、調査区西部の柱穴 142 ～ 144、調査区東部の柱穴 204･205、柱穴 206･207 等では掘方掘削の際に他の柱穴の埋土を掘削しており先後関係がみとめられる。

遺物は、中世の瓦器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土している。特に弥生時代から古墳時代の遺物が多いことから、下層の第Ⅵ層に由来するものと考えられる。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は、柱穴 199・203・206・211・213 から瓦器が出土している。このうち、柱穴 199 から出土した瓦器 1 点（144）を図化した。

ピット　ピットは、９基を検出した。調査区北部で５基（ピット 038・039・054・055・058）、調査区西部で４基（ピット 009・010・011・013）を検出し、調査区東部および南部では検出していない。

平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。平面規模は直径 0.1 ～ 0.5 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m である。深さは、検出位置との相関関係はみとめられず、平面規模と深さも比例しないものと考

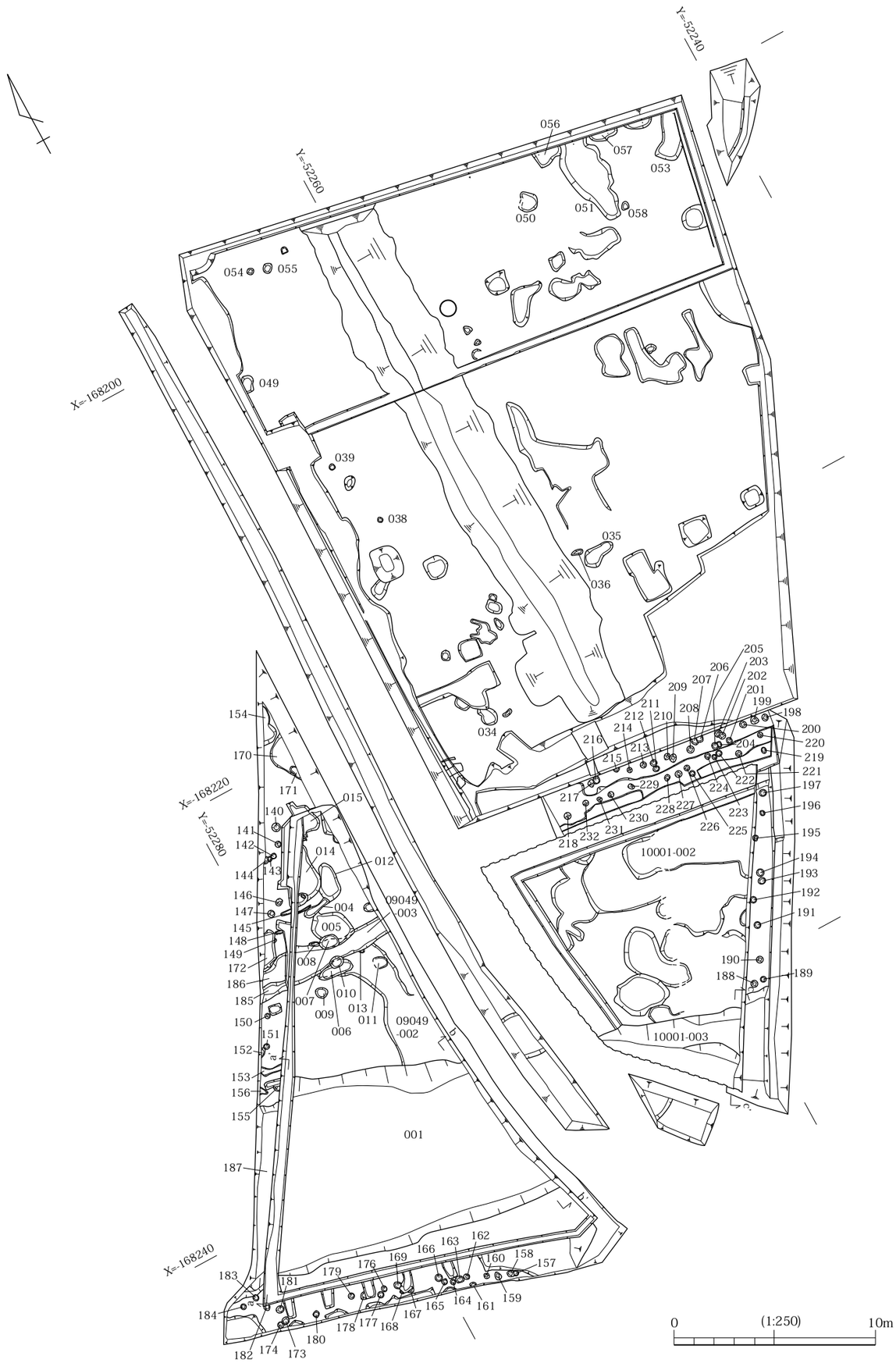


図 40　09017-2 区他中世遺構検出面全体図

えられる。

埋土は、調査区北部のピット 054・055 では褐色砂、その他は黄灰色細砂～砂シルトである。調査区西部のピット 010 は、掘削の際に溝 003、落ち込み 006 の埋土を掘削しており、先後関係がみとめられる。また、ピット 011・013 は、掘削の際に溝 002 の埋土をを掘削しており、ピット 011 は溝 003 に埋土を掘削され、先後関係がみとめられる。

遺物は、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が出土しているが、遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は出土しなかった。混入遺物であるが、ピット 013 出土の弥生土器 1 点（147）を図化した。

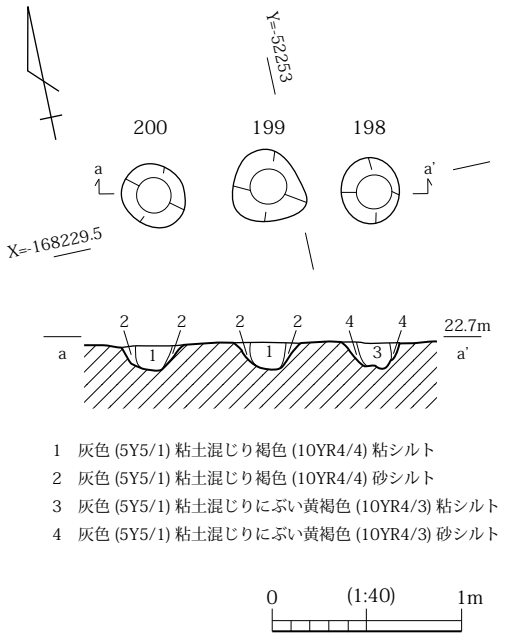


図 41　09017-2 区他柱穴 198 ～ 200 断面図

土坑　13 基を検出した。調査区北部で 2 基（土坑 049・050）、調査区中央部で 3 基（土坑 034 ～ 036）、調査区西部で 8 基（土坑 005・007・008・012・014・015・170・171）を検出しており、調査区東部および南部では確認していない。

平面形は、円形のもの（土坑 007）、楕円形のもの（土坑 012）、隅丸方形のもの（土坑 014・170）があるが、不整形のものが多い。

平面規模は長軸または長径が 0.5 m前後のもの（土坑 007･008･036）から、3.0 m程度もの（土坑 014）まであり多様であるが、深さは土坑 007 が 0.3 mであるほかは、いずれも 0.1 ～ 0.2 m程度である。

埋土はにぶい黄褐色～褐色の細砂～粘シルトで、ベース層である基本層序第Ⅵ層に類似する。

調査区西部では、土坑 005・007・008、土坑 012・014、土坑 170・171 等で先後関係がみとめられる。また、土坑 005・007・008 は、溝 003 埋土を掘削しており、先後関係がみとめられる。

遺物は、中世の瓦器と土師器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が出土している。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物では、土坑 034 から土師器小皿が、土坑 012・014・035 から瓦器が、土坑 050 から焼土が出土した。このうち土坑 012・014 出土の瓦器 1 点（143）と、混入遺物であるが、土坑 005 出土の弥生土器 1 点（149）を図化した

溝 09049-002・003（図 42、図版７―３・４）　調査区西部で検出した。10001-2 区に同じ遺構番号の流路および落ち込みがあることから、遺構番号に調査番号「09049-」を付す。

溝 09049-002 は、南端を流路 001 に掘削され、東側は調査区外にのびる。全長は、南北方向に 7.0 mのびた後、西側へ屈曲する。東西方向の部分は溝 09049-003 に埋土を掘削されるが、調査区西壁精査でも確認できることから、東西方向 5.0 m以上で、調査区外へのびることがわかる。幅は、

南側では 2.5 m以上であるが、西側へ屈曲する部分では 1.8 m前後と狭くなり、調査区西端では溝 09049-003 に埋土を掘削されるが、少なくとも 1.5 m以下となる。深さは、南側では 0.6 m、そこから北側では 0.4 mで、西側に屈曲後、約 6.5 mのびた所で 0.4 ～ 0.5 mとなる。底面の深さは、南側で 21.9 m、そこから北側で 22.2 m、西端で 21.9 mであり、調査区内では、一方向に下がる状況はみとめられない。埋土は黄褐色～暗灰黄色の細砂～粘シルトを主体とする。

溝 09049-003 は、東西方向にのび、東側、西側とも調査区外にのびる。溝 09049-002 の東西方向部分の埋土を掘削する。全長 6.9 m以上、幅 1.0 ～ 2.0 m、深さは東部では 0.3 m前後で、西側では 0.6 ～ 0.8 mと深くなる。底面の高さは、東側で 22.4 m、西側で 21.8 ～ 22.0 mであり、調査区内では、西側に向かって下がることが確認できる。なお、調査区西端では、溝 185 と溝 186 の２条として平面検出を行った。土層断面の検討より、これらは溝 09049-003 に連続する溝で、溝 185 は掘削し直したものと判断できる。いずれも埋土は褐色～黄褐色の砂シルト～粘シルトを主体とする。

主軸方向は、溝 09049-002 は、南北方向部分で N―６°―W、東西方向部分で N―76°―W である。溝 09049-003 は、N―88°―W である。これらの溝の機能は不明であるが、後述のように、中世に調査区周囲では耕作を行っていたと考えられることから、灌漑施設である可能性が考えられる。溝 09049-002 と溝 09049-003 とは先後関係がみとめられ同時に機能してはいなかったと考えられ、流入土の堆積等により溝 09049-003 の機能が停止した後に、溝 09049-002 が同一の機能を目的として掘削された可能性が考えられる。

遺物は、溝 09049-002 から中世の瓦器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が、溝 09049-003 から古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が出土した。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は小片で図化できず、混入遺物であるが、溝 09049-002 出土の弥生土器３点（146・148・150）、溝 09049-003 出土の弥生土器１点（145・151）を図化した。

その他の溝　調査区西部で６条（溝 004・145・148・149・153・156）を検出した。いずれも東西方向である。全長が判明しているのは溝 004 のみで 1.4 m、その他の溝はいずれも調査区外にのびるか後世に掘削されているが、0.2 ～ 1.0 m以上である。幅 0.15 ～ 0.3 m、深さ 0.02 ～ 0.05 mである。埋土は黄褐色または黄灰色の細砂～砂シルトである。

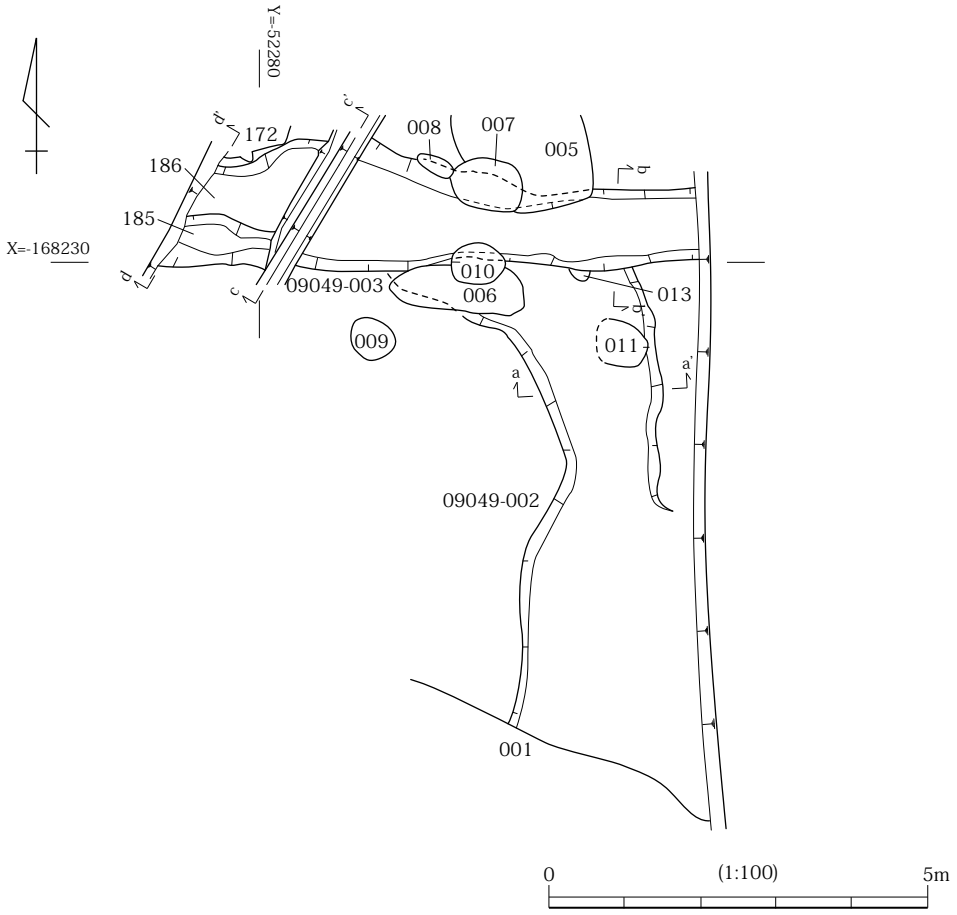
主軸方向は、東西方向のものが N―79°―Ｅ、N―56 ～ 84°―W である。

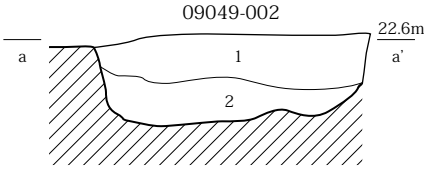
溝 004 は土坑 005・012 の埋土を掘削しており、先後関係がみとめられる。

これらの溝は、規模、方向がそろうことより、耕作に伴う鋤溝と考えられる。

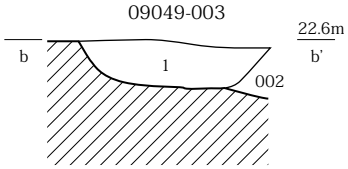
遺物は、溝 004 から土師器片が出土したが、小片で図化できず、所属時期も不明である。

流路（図 43、図版７―５～７―8）　調査区南部で１条を検出した。調査区東側から西側へ順に、10078-3 区から 10001-2 区で検出した 003、09049-1 区で検出した 001、10078-2 区で検出した 187 が一連の遺構である。また、調査区中央部 11001-6 区でも、湧水や撹乱の影響により第Ⅵ層上面での検出は行えなかったものの、流路と一連と考えられる落ち込み部を確認している。以下

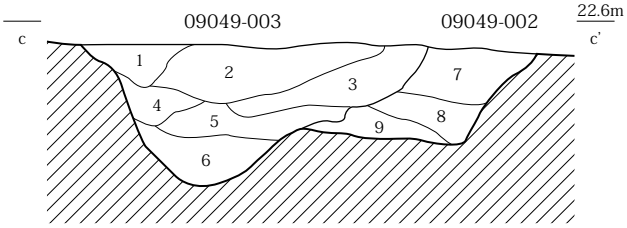


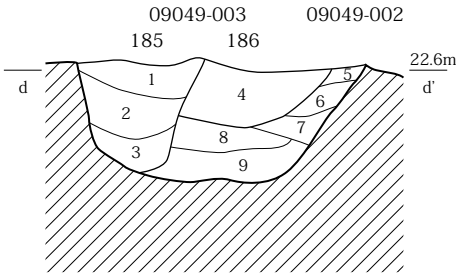


1　中礫混じり黄灰色 (2.5Y4/1) 粘シルト
2　中礫・黄灰色 (2.5Y4/1) 粘シルト混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘シルト



1　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘シルト





溝 09049-003
1　褐色 (10YR4/4) 砂シルト
2　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂～砂シルト
3　褐色 (10YR4/4) 粘シルト
4　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
5　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
6　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘シルト
溝 09049-002
7　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
8　黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂
9　黄褐色 (2.5Y5/3) 砂シルト

溝 185（09049-003）
1　褐色 (10YR4/4) 粘シルト
2　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト
3　褐色 (10YR4/4) 粘シルト
溝 186（09049-003）
4　褐色 (10YR4/4) 細砂
溝 09049-002
5　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂シルト混じり黄褐色 (10YR4/4) 細砂
6　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂シルト
7　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘シルト
8　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘シルト混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂～砂シルト
9　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト

0　(1:40)　1m

図 42　09017-2 区他溝 002・003 平面図・断面図

では、最も広範囲で検出した 09049-1 区での遺構番号を用い、流路 001 と呼称する。

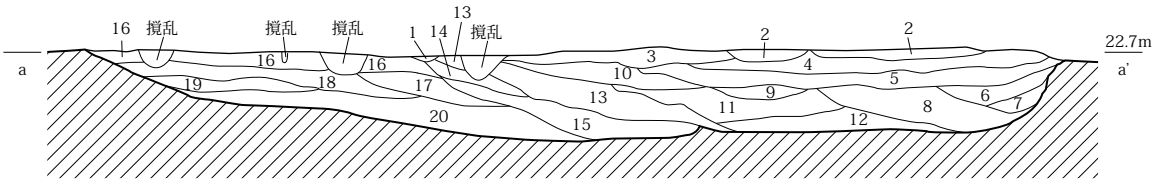
流路 001 は東西方向で、東西両端とも調査区外にのびる。全長 27.5 m以上、幅 7.5 ～ 9.0 m、最深部の深さは 1.0 m前後である。底面の高さは 21.7 ～ 21.8 mであり、調査区内では、高低差はみとめられない。

埋土は、中礫混じり細砂～粘シルトを主体とする。西半（09049-1・10078-2 区内）では、層厚 0.1 ～ 0.4 mの黒褐色粘シルト層（図 43：断面 a―a'13 層、断面 b―b'20 層）を連続して確認しており、この層から土器が特に多く出土し、中でも弥生土器が多数出土した。また、同じく西半（09049-1・10078-2 区内）では、 最下層で礫混じりのにぶい黄褐色～黄褐色粗砂層（図 43：断面 a―a'20 層、断面 b―b'24 層）を連続して確認しており、この層からの出土遺物は少量であった。また、調査区西半の北側肩部では、にぶい黄褐色シルト層（図 43：断面 a―a'6・7 層）から弥生時代から古墳時代の遺物がまとまって出土したが、ベース層である基本層序第Ⅵ層との層界が不明瞭であったため、本来基本層序第Ⅵ層内に含まれていた遺物を流路出土として取り上げてしまっている可能性がある。

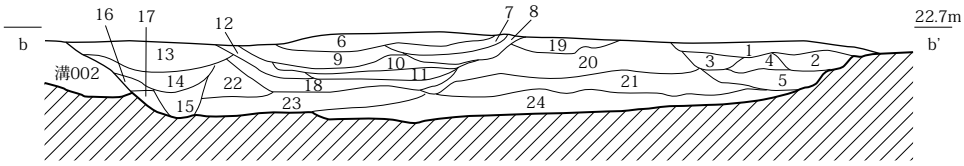
主軸方向は N―75°―W である。

流路 001 は、形状や埋没状況からは自然流路である可能性が考えられるが、主軸方向が人為的な溝と考えられる溝 09049-002・003 に類似することから、方向等に人為的に手が加えられたものである可能性も考えられる。灌漑機能を有していた可能性がある溝 09049-002 埋土を掘削していることから、溝 09049-002 に代わって灌漑機能を果たした可能性もある。

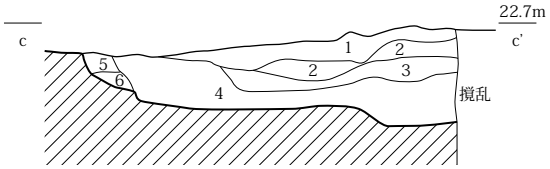
遺物は、中世の瓦質土器と瓦器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土した。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は少量であり、大半は弥生時代から古墳時代の遺物である。また、先述のように、黒褐色粘シルト層では弥生時代から古墳時代の遺物が多く、最下層のにぶい黄褐色～黄褐色粗砂層では遺物が少量であるなど層による差異が確認できたことから、こうした一連の堆積層として確認できた層の遺物は、層ごとに報告した。また、基本層序第Ⅵ層に含まれていた遺物が混在している可能性のあるにぶい黄褐色シルト層出土遺物についても、層ごとに報告した。その他の層の遺物については、層位による出土遺物の差は明確でなかったが、11001-6 区内では奈良時代の遺物が比較的多く出土する等、出土地点による差異がみとめられた。これらの古代以前の遺物はベース層である基本層序第Ⅵ層に由来するものである可能性があり、流路 001 内の地点による遺物の差異は第Ⅵ層に含まれる遺物の地点による差異に起因すると考えられることから、上述の３層を除く層から出土した遺物については、出土地区ごとの報告とした。以上より、出土遺物は、09049-1・10078-2 区出土土器 48 点（152 ～ 199）、黒褐色粘シルト層出土土器 41 点（200 ～ 240）、にぶい黄褐色～黄褐色粗砂層出土土器６点（241 ～ 246）、にぶい黄褐色シルト層出土土器６点（247 ～ 252）、11001-6 区出土土器 16 点（253 ～ 268）、10001-2・10078-3 区出土土器 10 点（269 ～ 278）、11001-6 区出土瓦 1 点（538）と、混入遺物も含み計 128 点を図化した。



1　中礫・黒褐色 (10YR3/2) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
2　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘シルト
3　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細～中砂
4　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗細混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
5　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト
6　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト
7　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂シルト
8　中礫混じり灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～砂シルト
9　中礫混じり黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂
10　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 中～粗砂
11　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗砂
12　灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂～砂シルト　ラミナ
13　中礫・黄褐色 (10YR5/6) 粘土偽礫混じり黒褐色 (2.5Y3/2) 粘シルト
14　中礫混じり暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘シルト
15　中礫・黄褐色 (10YR5/6) 粘土偽礫混じり暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘シルト
16　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂
17　中～大礫・暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
18　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細～粗砂
19　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂
20　中～大礫混じり黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂



1　灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂　ラミナ
2　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y5/2) 細～粗砂　ラミナ
3　灰オリーブ色 (5Y6/2) 細砂～砂シルト　ラミナ
4　灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂～中砂　ラミナ
5　灰色 (5Y6/1) 中～粗砂　ラミナ
6　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂
7　中礫混じり黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂
8　灰色 (7.5Y5/1) 細砂
9　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂～砂シルト
10　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂
11　灰色 (5Y5/1) 粘土混じり灰色 (7.5Y5/1) 中～粗砂　ラミナ
12　灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂～砂シルト
13　中礫混じりオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂～砂シルト
14　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂～砂シルト
15　中礫混じりオリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂
16　オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂
17　中礫・オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂偽礫混じり灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂
18　灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘シルト
19　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂
20　中礫混じり黒褐色 (2.5Y3/2) 粘シルト
21　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂混じり灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘シルト
22　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘シルト
23　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗砂　ラミナ
24　中礫・灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂



1　中礫・黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混じりにぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂
2　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂
3　中礫混じり暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘シルト
4　中礫混じり灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂
5　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
6　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト

0　(1:80)　2m

断面位置は図 40 に対応

図 43　09017-2 区他流路 001 断面図

落ち込み　調査区北東部で５基（051・053・056・057 他）、調査区西部で４基（006・152・154・172）、調査区東部で１基（10001-002）を検出した。

調査区北東部の５基はいずれも調査区外にのびる。深さ 0.05 ～ 0.1 m、埋土は褐色砂～粘シルトである。

調査区西部の４基のうち３基（152・154・172）は調査区外にのびる。深さ 0.1 ～ 0.2 m、埋土は黄褐色砂～粘シルトである。

調査区東部で検出した１基（10001-002）は、調査区北東部にのびる。深さ 0.1 ～ 0.2 m、埋土は褐灰色砂シルトで、上層の基本層序第Ⅴ層に類似する。

以上の落ち込み 10 基とも、人為的な遺構であるかは不明である。このうち調査区東部で検出した落ち込み 10001-002 については、埋土が基本層序第Ⅴ層に類似すること、基本層序第Ⅴ層は、他の調査区で確認した中世以降の作土に類似することから、耕作に伴う痕跡である可能性が高い。先述のように鋤溝と考えられる溝群が同一面で検出されていることからも、生産域が存在していたものと考えられる。その他の９基の機能は明らかでないが、耕作に関係する痕跡である可能性がある。

遺物は、中世の土師質羽釜と瓦器、奈良時代の土師器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土した。このうち、遺構の時期を示す中世の遺物である落ち込み 051 出土の土師質羽釜１点（138）、落ち込み 10001-002 出土の土師器および瓦器４点（139 ～ 142）と瓦１点（529）を図化した。

小結　中世遺構検出面の遺構出土遺物は少量で、また、多くは古代以前の混入遺物と考えられるもので、遺構の時期を示すものではない。中世の出土遺物は 12 ～ 14 世紀頃と考えられるが、時期を限定し難いものも多いほか、埋没時の混入遺物が大半と考えられることから、遺構の機能時期を示すものとは判断できない。また、上層の基本層序第Ⅴ層の形成時期下限が明らかでないことから、さらに時期が下る可能性も否定できない。ここでは、中世と広く捉えておき、第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

溝・流路の主軸方向は、南北方向、東西方向、北西―南東方向とばらつきがある。機能については、溝 09049-002・09049-003・流路 001 は灌漑目的で掘削または人為的に手が加えられたものである可能性がある。その他の小溝群がいずれも鋤溝と考えられること、落ち込み 10001-002 が耕作に伴う痕跡であると考えられることからも、中世遺構検出面の遺構には耕作に関わるものが一定量含まれているものと考えられる。

柱穴は、深さ 0.05 mのものがあることより、本来の地表面から 0.45 mほどは削平されているものと想定できる。建物等の構成を明らかにできなかったが、先述のように、当初に実施した調査区では検出できてない柱穴が存在していた可能性があることからも、多数の建物が存在していたこと、特に密集する調査部分もあることから、数度にわたる建て替えが行われたものと推定でき、時期幅があるものと考えられる。

また、落ち込み 10001-002 埋土が直上層の基本層序第Ⅴ層に類似し、基本層序第Ⅴ層が中世以降の作土であると考えられることから、柱穴等建物に関わる遺構の埋没後に、調査区のほぼ全域で耕作が行われたものと推定でき、建物群が耕作域と混在する状況から耕作関連の遺構のみへと、土地利用が変化したものと考えられる。この点についても、第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて検討することとする。

第４節　弥生～古墳時代遺構検出面の調査（図 44、図版８～ 10―１）

第Ⅶ･Ⅸ層上面で検出した。遺構は柱穴 33 基、ピット 27 基、土坑１基、落ち込み１基である。調査区のほぼ全域で検出したが、特に南半に集中する。第１節で述べたように、第Ⅸ層上面で遺構を検出した箇所では第Ⅶ･Ⅷ層が分布しておらず、すべての地点で第Ⅵ層直下で遺構検出を行っている。したがって、第Ⅶ層上面検出遺構と第Ⅸ層上面検出遺構の間に時期差があるかは、層位からは判断できないため、一連の遺構面として扱う。

なお 09049-1 区・10001-2 で同一の遺構番号のもの（016 ～ 021）があるため、以下では必要に応じて遺構番号の前に調査番号を付す。

柱穴（図 45 ～ 47）　調査区南東部で 30 基（004・006・009・012 ～ 015・10001-016 ～ 021・195 ～ 197・233 ～ 246）、調査区南西部で３基（09049-019・09049-021・023）を検出した。遺構番号はすべての柱穴に付した。なお、第３節で述べたように、10078-3 区の柱穴 195 ～ 197 は、基本層序第Ⅵ層が堆積していない地点で、第Ⅸ層上層で検出した。そのため、上層の中世遺構検出面に伴う遺構である可能性も考えられる。埋土、遺物からも本来の検出面が判断できなかったため、中世遺構検出面、弥生～古墳時代遺構検出面の両者の全体図に表示し、遺構数の合計にもそれぞれ含めている。建物の構成を断定するのは困難であるが、以下では考え得る可能性も含め検討する。

平面形は円形または隅丸方形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は円形のものは直径 0.3 ～ 0.5 m、隅丸方形のものは一辺 0.5 ～ 0.9 mで、後者の方が規模が大きい。柱掘方の直径についても、前者は 0.1 ～ 0.2 m、後者は 0.15 ～ 0.3 mと規模に差異がみとめられる。柱掘方の深さは 0.1 ～ 0.3 mで、深さと平面形態および規模とは比例せず、深さと検出位置との相関関係もみとめられない。

埋土は、褐色またはにぶい黄褐色の砂～粘土で、礫を含むものが多い。

柱穴 004 周辺では、比較的規模の大きい隅丸方形の柱穴が多く検出されている（図 45）。一定間隔や柱筋が通る形ではないが、深さ 0.1 mの柱穴があり、後世に削平された柱穴が存在する可能性が高いことからも、この地点に建物が存在した可能性が高い。また、柱穴 006・009・015、004・018 では先後関係がみとめられることから、建物の建て替えも行われたものと推定できる。

遺物は、古墳時代の土師器、弥生土器が出土したが、いずれも小片であった。柱穴 004 からは、柱掘方埋土から多くの土師器片が出土した（図 46、図版９－４）。いずれも甕と考えられるもの

であったが、接合せず、口縁部２点のみを図化した（279・280）。これらの土師器片は、他の柱穴と比較して非常に集中して出土することから、掘方埋め戻し時に意図的に入れられたものである可能性が考えられる。このほか、混入遺物の可能性もあるが、柱穴 10001-020 出土の弥生土器１点を図化した（281）。

ピット（図 47･48）　調査区北部で 12 基（043 ～ 045･062 ～ 069･071）、調査区南東部で５基（005・007・008・010・011）、調査区南西部で 10 基（09049-016 ～ 018・09049-020・024 ～ 026 他）を検出した。遺構番号は、調査区南西部の 09049-016 ～ 018 南側で検出した特に小規模の３基を除くものに付した。

平面形は円形で、ややいびつな形状のものを含む。規模は、09049-016 ～ 018 南側で検出した遺構番号を付していない３基が直径 0.05 ～ 0.1 m、深さ 0.05 ～ 0.1 m、その他は直径 0.15 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mである。埋土は、褐色砂～粘シルトで、礫を含むものもある。

遺物は、古墳時代の土師器、弥生土器が少量出土した。このうち、混入遺物の可能性もあるが、ピット 062 出土の弥生土器２点を図化した（282・283）。

土坑 022　調査区南西部で検出した。平面形は不整円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m、埋土は褐色粗砂である。遺物は出土しなかった。

落ち込み　調査区中央部で１基を検出した。遺構番号は付していない。埋土は褐色粘シルトで、直上層の基本層序第Ⅵ層に類似する。自然の落ち込みである可能性が高い。遺物は出土しなかった。

小結　弥生～古墳時代遺構検出面では、遺構内から古墳時代の土師器、弥生土器が出土したものの、いずれも小片で詳細な時期比定は困難である。しかし、柱穴 004 柱掘方から布留式甕が出土しており、この周辺の柱穴と平面形、規模、埋土が類似することから、調査区南東部の柱穴 004 周辺柱穴については古墳時代前期頃の遺構である可能性が考えられる。その他の調査区北部、調査区西部では、遺物は少量の弥生土器片や時期比定の困難な土器片が出土したのみであるが、弥生時代後期後葉の高杯、後期～庄内式併行期に位置づけられる底部等が出土していること、遺構からの須恵器の出土はないことより、弥生時代後期から古墳時代前期頃の時期幅におさまるものと考えられる。なお、遺構検出面直上層の第Ⅵ層は、弥生土器が多く出土してはいるものの、第Ⅵ層の形成時期の下限は中世に下る可能性があることから、下層の遺構面の時期を判断する材料とはできない。基本層序第Ⅵ層に類似する層や、基本層序第Ⅸ層と一連と考えられる層の上面での遺構は周辺の他の調査区でも確認されていることから、第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

このように、遺構の時期を限定することは難しく、また、明確な建物跡としては確認できなかったが、掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴が存在することから、調査区内に、弥生時代後期から古墳時代前期頃の居住域が存在していたことが推定できる。先述のように深さ 0.05 m の柱穴があることから、本来の地表面から 0.45 mほどは削平されているものと想定できる。また、

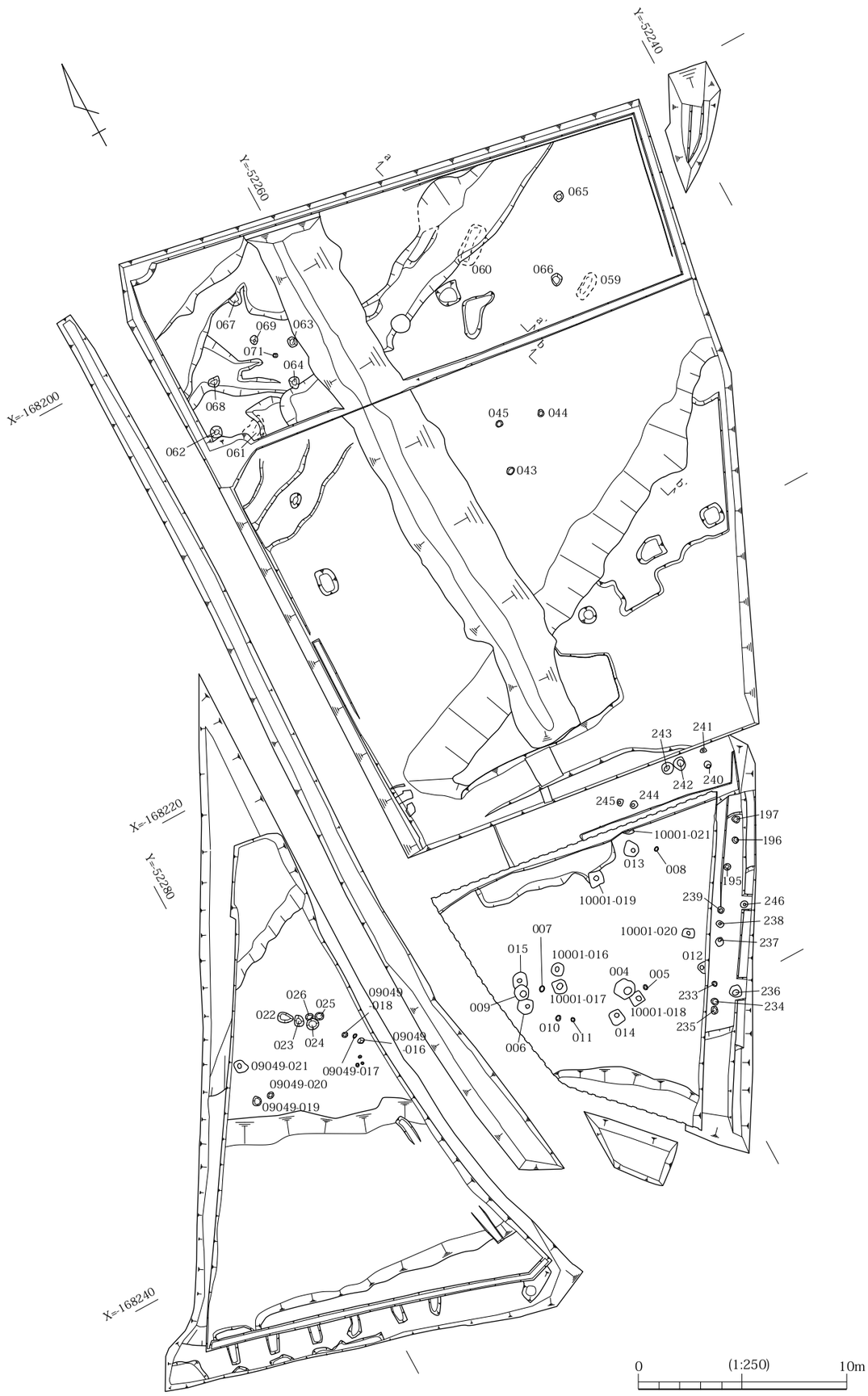
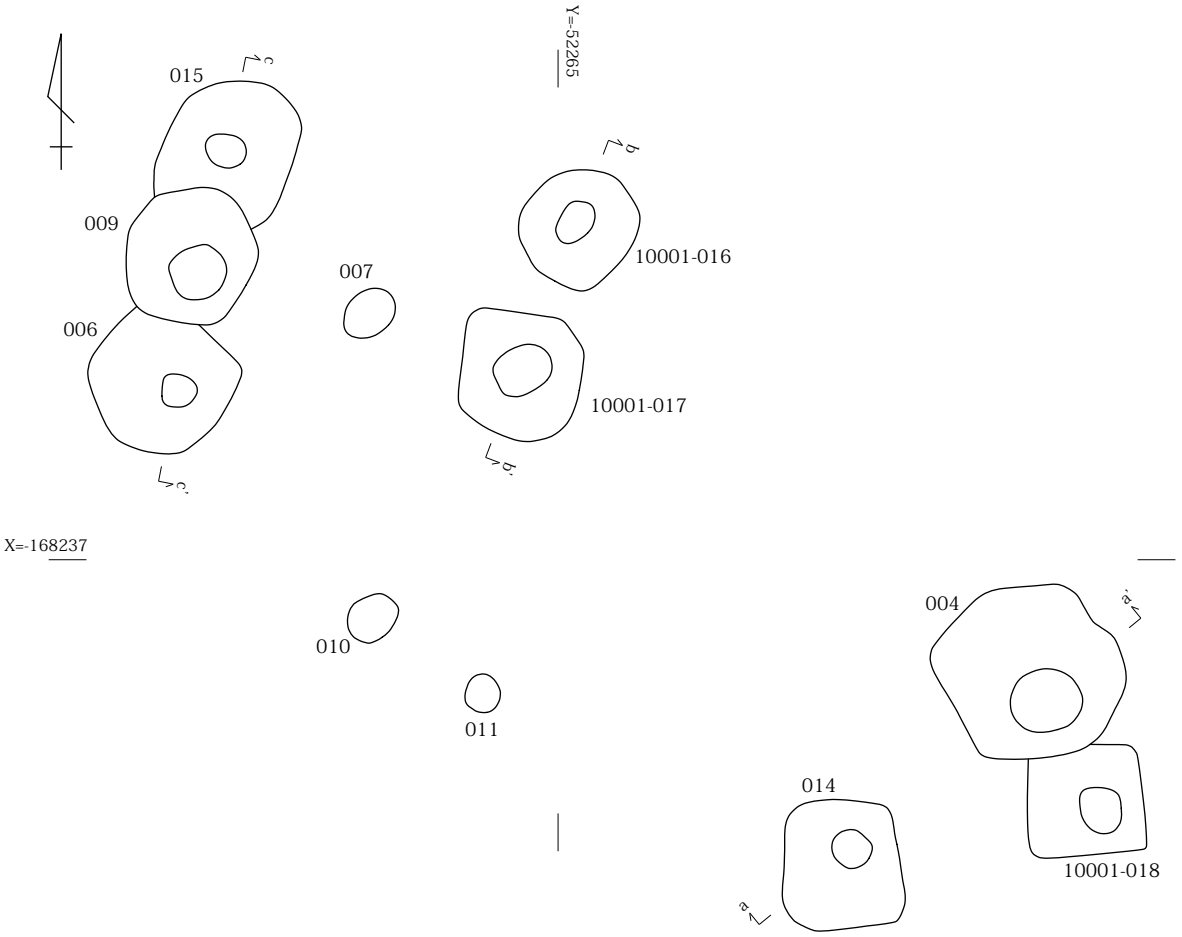
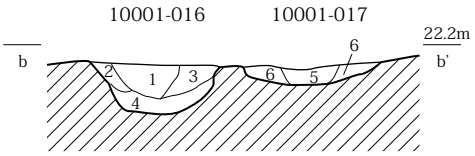
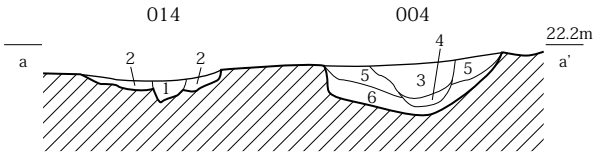


図 44　09017-2 区他弥生～古墳時代遺構検出面全体図

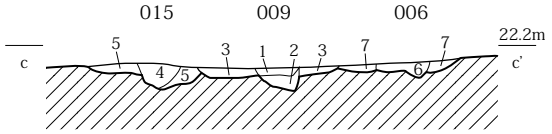




1　中礫混じり灰色 (5Y4/1) 中～粗砂
2　中礫・褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり灰色 (5Y4/1) 粗砂
3　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
4　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり灰色 (5Y4/1) 細砂
5　中礫混じり灰色 (5Y4/1) 粗砂
6　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR5/3) 中～粗砂



1　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
2　中～大礫混じり褐色 (10YR4/4) 細砂
3　中～大礫・黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
4　3 層より褐色粘土偽礫少量
5　中～大礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
6　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり灰色 (5Y5/1) 粗砂



1　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 中～粗砂
2　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 粗砂
3　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂
4　中礫・にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土偽礫混じりオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中～粗砂
5　中～大礫混じりオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘シルト
6　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/4) 粘シルト
7　中礫混じりにぶい黄褐色 (10YR4/4) 砂シルト

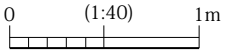


図 45　09017-2 区他柱穴 004・006・009・014 ～ 017 平面図・断面図

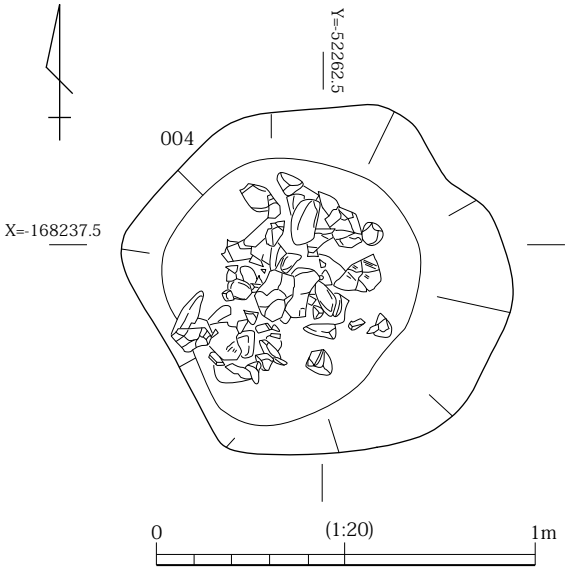


図 46　09017-2 区他柱穴 004 土器出土状況図

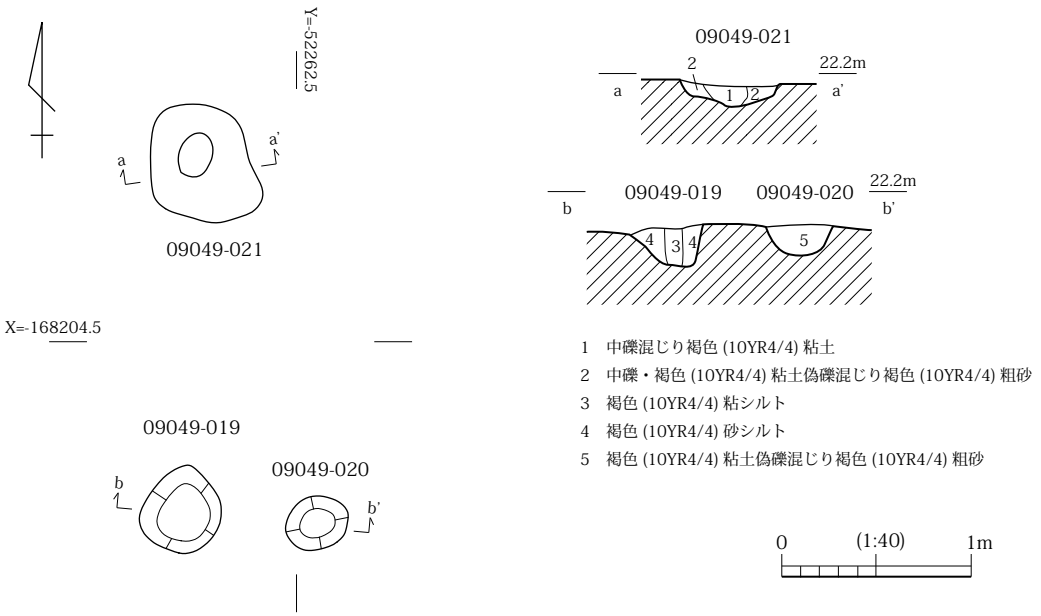


図 47　09017-2 区他柱穴 019・021、ピット 020 平面図・断面図

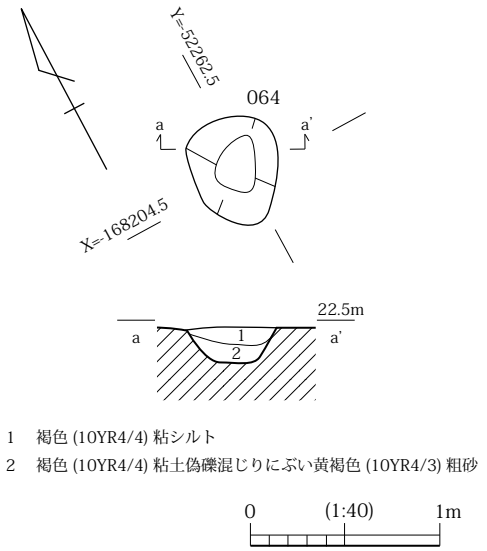


図 48　09017-2 区他ピット 064 平面図・断面図

調査区南部では中世の流路によって削平されており、本来は遺構が存在した可能性がある。したがって、弥生時代後期から古墳時代前期にわたり、調査区全体に、また、調査区外にも広がる居住域が存在していた可能性が考えられる。

第５節　自然流路の調査（図 49、図版 10―２～５）

第１節で述べたように、第Ⅵ～Ⅷ層は流入した洪水堆積物、第Ⅸ層上面は自然流路の痕跡であると推定できる。第Ⅵ層は調査区のほぼ全域に、第Ⅶ層は調査区東部のみに、第Ⅷ層は、調査区北東部から中央部に断続的に分布する。

第Ⅸ層上面は、北部から中央部にかけて起伏を繰り返しながら次第に下がり、調査区中央部で 21.7 m前後となる。その南側ではやや上がり、22.3 ～ 22.5 m前後となる。第Ⅵ層は全体に堆積し、特に下がる部分に、第Ⅶ・Ⅷ層が堆積する。現在は、調査区の南方を槇尾川が西流することから、当時の河川活動によって流入したものと考えられる。

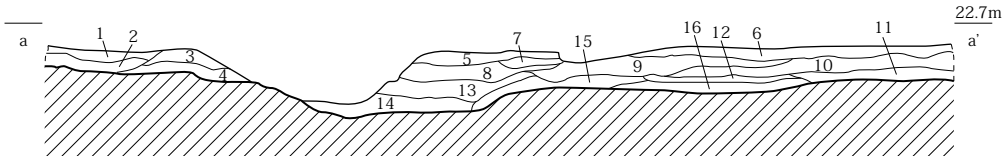
第Ⅵ層は、色調や砕屑物により３層に細別したが、層界が不明瞭で出土遺物の時期差も明確にはみとめられないことから、一連の層と判断した。第ⅥＡ層は、調査区北部に、第ⅥＢ層は、調査区北西部と南部を除く範囲に、第ⅥＣ層は、調査区中央部のやや北側に分布する。第ⅥＢ層では、炭化物を多く含む層が調査区北部で部分的に検出された（図 49：断面 a―a' 7 ・12 層）。遺構の可能性も考えて精査を進めたが、明確な掘り込みは確認できず、上下で層界を明瞭に確認することもできなかった。また、検出高さも 22.1 ～ 22.5 mと高低差が大きかったことから、遺構ではないと判断した。何らかの人間活動に関わる痕跡であることを考慮し、平面で確認した箇所を示している（図 44：059 ～ 061）。第Ⅵ層は、弥生時代から中世の遺物を含み、形成時期は弥生時代から中世以降と推定できる。第ⅥＣ層からは、特に多くの土器が出土した。また、完形に

近い弥生土器が出土した箇所もあり、特に、09049-1 区では、直下層が第Ⅸ層となる部分で、弥生後期の土器がまとまって出土した（図版 10―２～４）。

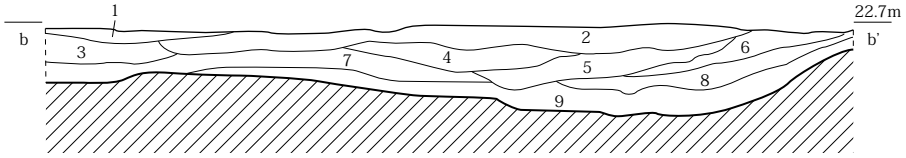
第Ⅶ層は、上層の第Ⅵ層との層界は明瞭でないが、上面で遺構を検出したことから、層を区分した。そのため、第Ⅶ層を第Ⅵ層と一連と誤認して認識できていない可能性もある。第Ⅶ層は弥生時代の遺物を少量含む。形成時期は弥生時代以降と推定できるが、下限は古墳時代まで下る可能性がある。

第Ⅷ層は、弥生時代の土器を含む。形成時期は弥生時代以降と推定できるが、下限は古墳時代まで下る可能性がある。

自然流路の痕跡を上面で確認した第Ⅸ層は、周辺調査区の成果より、遺物をほとんど含まないと予想された。そのため､調査範囲の広い 09017-1 区他で下層確認トレンチを設定することとし、09017-2 区他では土層観察用トレンチでの下層確認のみにとどめた。第Ⅸ層は、礫混じりの粗砂層であることから、活発な堆積作用による洪水堆積物と考えられる。また、周辺調査区全体で確



1　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 中～粗砂 / 基本層序ⅥA 層に対応
2　1 層より中礫少量 / 基本層序ⅥA 層に対応
3　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 細砂 / 基本層序ⅥA 層に対応
4　褐色 (10YR4/4) 細砂 / 基本層序ⅥA 層に対応
5　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
6　褐色 (10YR4/4) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
7　炭化物混じり褐色 (10RY4/4) 粘シルト
8　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
9　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
10　褐色 (10YR4/6) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
11　褐色 (10YR4/4) 粘シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
12　炭化物混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
13　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト / 基本層序Ⅷ層に対応
14　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 粘シルト / 基本層序Ⅷ層に対応
15　中礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂～砂シルト / 基本層序Ⅷ層に対応
16　褐色 (10YR4/4) 粗砂混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂 / 基本層序Ⅷ層に対応



1　褐色 (10YR4/4) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
2　褐色 (10YR4/4) 粘シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
3　褐色 (10YR4/4) 砂シルト / 基本層序ⅥB 層に対応
4　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト / 基本層序ⅥC 層に対応
5　暗褐色 (10YR3/1) 粘シルト / 基本層序ⅥC 層に対応
6　褐色 (10YR4/4) 粘シルト / 基本層序ⅥC 層に対応
7　褐色 (10YR4/6) 砂シルト / 基本層序Ⅷ層に対応
8　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じりにぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 / 基本層序Ⅷ層に対応
9　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土偽礫混じり黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂～砂シルト / 基本層序Ⅷ層に対応

0　(1:80)　2m

断面位置は図 44 に対応

図 49　09017-2 区他自然流路断面図

認できることから、上層の第Ⅷ層以上とは異なる河川堆積作用によるものと推定できる。

自然流路は、平成 23 年度に報告した調査区も含め、本事業の一連の調査区全体で確認していることから、周辺の調査成果も踏まえ、第８章で、自然流路の広がり、時期についてあらためて検討する。

第６節　出土遺物

第１項　土器

（１）近世遺構検出面の土器（図 50、図版 19―１）

近世遺構検出面の遺構からは、磁器、瓦質羽釜、土師質羽釜、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。ここでは、遺構の時期を示す近世のもののほか、混入遺物ではあるが特徴的なもの等 26 点を報告する。

112 ～ 135 は、溝 042 から出土した。

112 ～ 116 は、磁器椀である。112 は波佐見焼白磁椀である。18 世紀に位置づけられる。113 は京焼系灰釉椀で、高台外面は露胎である。19 世紀に位置づけられる。114 は波佐見焼染付椀である。18 世紀中頃に位置づけられる。115 は波佐見焼染付一重網目椀で、高台外面は一部露胎である。18 世紀中頃にに位置づけられる。116 は波佐見焼染付草花文椀で、蛇の目釉剥ぎである。18 世紀中頃に位置づけられる。

117 は、瓦質羽釜である。口径は羽部上部径から復元しており、不確定である。頸部は内傾し、段を形成する。15 世紀に位置づけられる。

118・119 は、瓦器椀である。摩滅が著しくミガキの有無は不明である。118 は和泉型である。13 世紀中葉に位置づけられる。119 は、12 世紀に位置づけられる。

120 は、須恵器擂鉢である。残存度が低く口径は不確定であるが、26cm 前後と考えられる。13 世紀に位置づけられる。

121 は、移動式竈の可能性がある。内外面の一部にススが付着する。古墳時代から奈良時代頃のものである可能性があるが、器種も断定できず、所属時期は明らかでない。

122 ～ 129 は、須恵器である。122 ～ 125 は、須恵器蓋である。122 は、宝珠つまみで、外面に自然釉がみとめられる。123 は、つまみ部が剥離する。126 は杯Ｂ、127 は皿である。128 は、甕である。ひずみが大きく、口径は不確定である。129 は、壺底部である。122 は飛鳥時代に、123 ～ 129 は奈良時代に位置づけられる。

130 ～ 132 は、古墳時代の須恵器である。130・131 は杯身である。131 はひずみが大きく、口径は不確定である。132 は高杯である。長方形透かしを２段に施しており、上段は４方向が完存するが､いずれも内側まで貫通はしない。下段は１箇所が残存し､貫通する。下段も４方向であったと考えられる。外面に自然釉がみとめられる。130 は TK43 頃に、131 は TK209 頃に位置づけられる。

133 ～ 135 は、弥生土器である。133 は広口壺である。口縁は垂下し、外面に沈線と竹管円形浮文を施す。134 は高杯である。脚柱部は短く中実で、円形透かしを 4 方向に施す。裾部外面にケズリを施す。形状より椀形高杯と考えられる。135 は甕底部である。外面に右上がりのタタキを施す。外面にススが付着する。底部形状は中央部付近が窪む平底である。133 は後期後葉～庄内式前半に、135 は後期～庄内式併行期に、134 は庄内式併行期に位置づけられる。

溝 042 の埋土は大きく 3 層に分けられ、出土層位の判明するものは、上層出土のものが 12 点（115・117 ～ 119・122・123・127・129・130・132 ～ 134）、中層出土のものが 7 点（113・116・120・121・126・131・135）、下層出土のものが 3 点（112・124・125）である。各層とも弥生時代から近世の遺物が出土しており、層位による明確な時期差は確認できなかった。

136・137 は、土坑 047 から出土した。ただし、137 は、溝 042 または土坑 048 の遺物である可

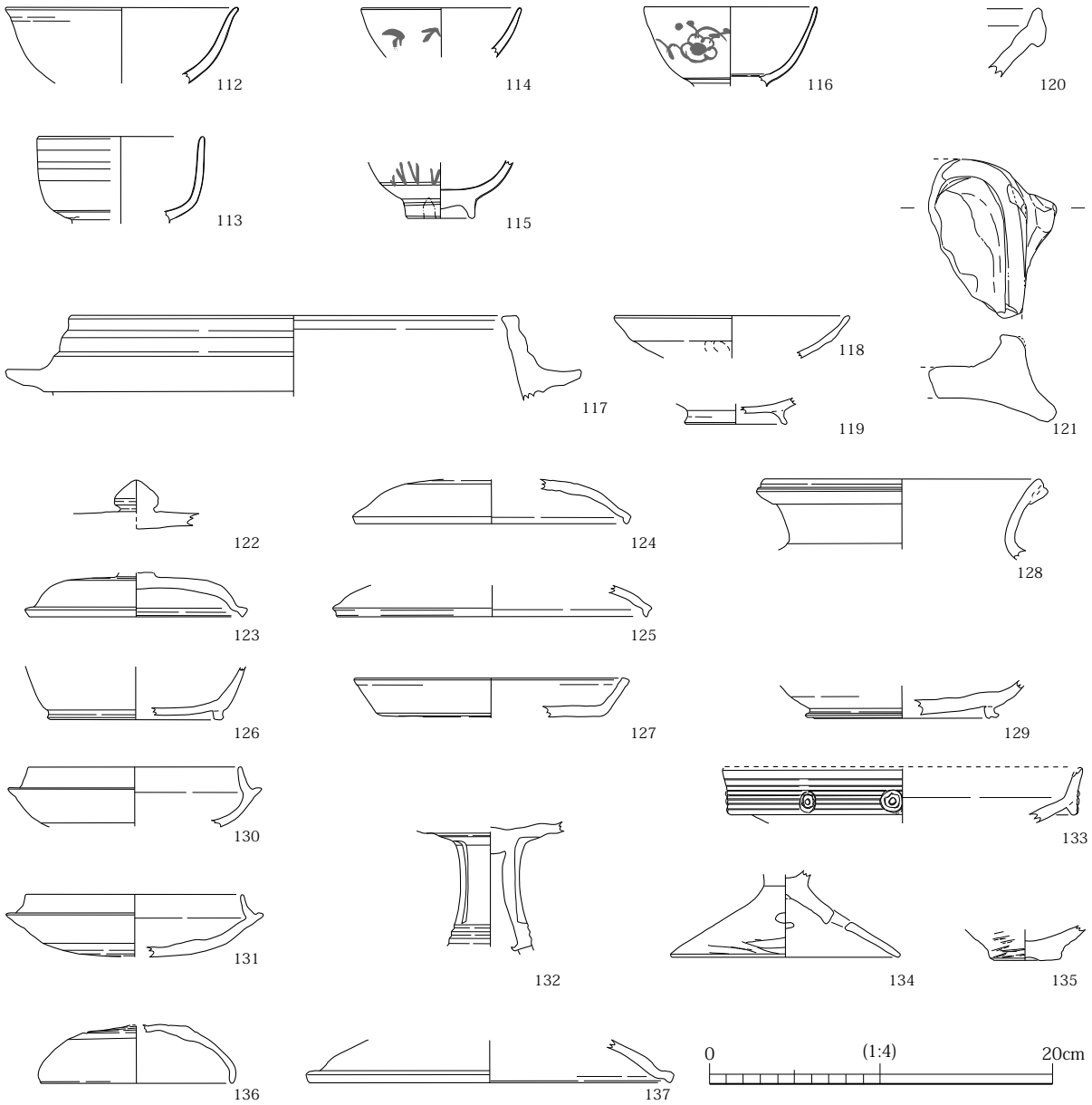


図 50　09017-2 区他近世遺構検出面の土器

能性もある。136 は、須恵器杯蓋である。全体に大きくひずむ。7 世紀第一四半期に位置づけられる。137 は須恵器蓋である。奈良時代に位置づけられる。

近世遺構検出面の遺構出土遺物は、中世以前の混入と考えられるものが大半であるが、少量ながら 18 ～ 19 世紀の遺物が出土しており、溝 042 の最深部からも 18 世紀の遺物が出土している。したがって、少なくとも 18 世紀には溝 042 が機能していたと考えられる。また、下層の基本層序第Ⅴ層から中世の遺物が出土していることから、近世の遺物出土が確認できなかった土坑も含め、近世以降の遺構であると推定できる。ただし、直上層の基本層序第Ⅳ層形成時期が近代まで下る可能性も否定できないことから、遺物が出土していない土坑の時期はさらに下る可能性も考えられる。

（２）中世遺構検出面の土器

中世遺構検出面の遺構からは、瓦質土器、土師質羽釜、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。図化した土器の大半が流路 001 出土であるため、以下では流路 001 を除く遺構の土器、流路 001 出土土器の順に報告する。

土坑・溝・柱穴・ピット・落ち込み出土土器（図 51、図版 19―２） 流路 001 を除く遺構出土土器は、計 14 点を報告する。

138 は、落ち込み 051 から出土した。土師質羽釜である。口径は羽部径から推定している。体部外面にケズリを施す。13 世紀に位置づけられる。

139 ～ 142 は落ち込み 10001-002 から出土した。139 は土師器小皿である。140 は瓦器小皿である。内面にミガキがみとめられる。141・142 は瓦器椀である。摩滅によりミガキの有無は不明である。141 は 13 世紀中葉に、142 は 12 世紀後半に位置づけられる。

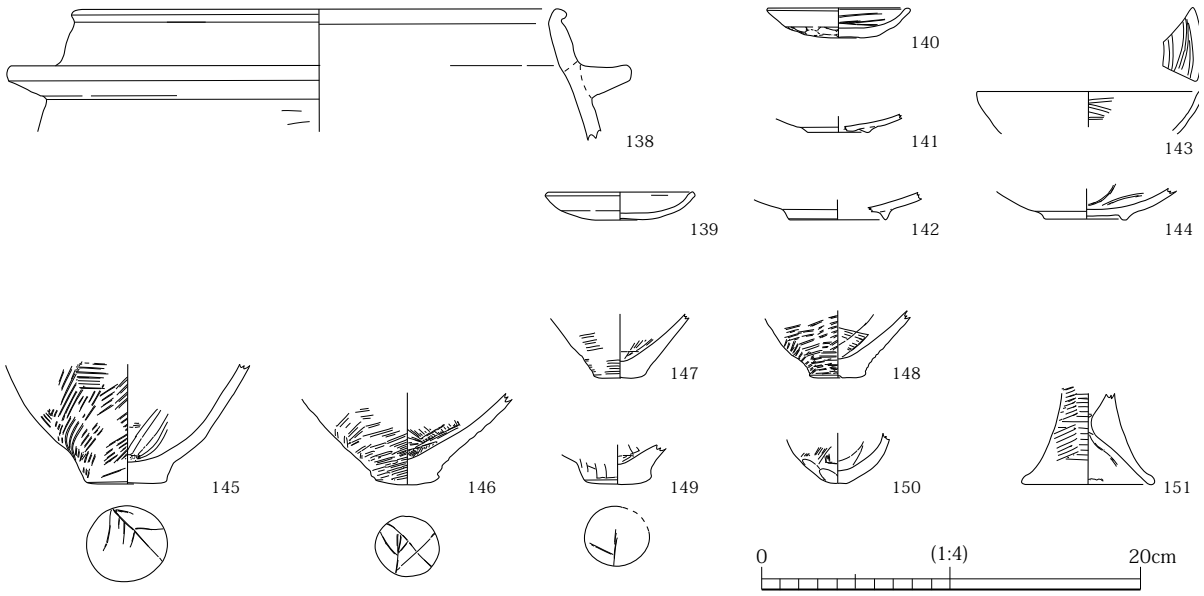


図 51　09017-2 区他中世遺構検出面の土坑・溝・柱穴・ピット・落ち込み出土土器

143 は土坑 012・014 から出土した。瓦器椀で、内面にミガキがみとめられる。14 世紀前半に位置づけられる。

144 は柱穴 199 柱痕跡から出土した。瓦器椀で、内面にミガキがみとめられる。12 世紀末～13 世紀前葉に位置づけられる。

145 ～ 151 は弥生土器である。145・151 は溝 09049-003 から、146・148・150 は溝 09049-002 から、147 はピット 013 から、149 は土坑 005 から出土した。

145・146 は甕である。145 は外面に 4 条／ cm とやや細めの右上がりのタタキを施す。底部外面に木の葉文がみとめられる。体部外面にススが付着する。底部形状は、中央部付近がわずかに窪む平底である。146 は外面に右上がりのタタキを施す。底部外面に木の葉文がみとめられる。内面にコゲが、外面にススが付着する。底部形状は、外側に突出する平底である。147・148 は、甕または鉢の底部である。147・148 とも、外面に右上がりのタタキを施し、底部形状は平底である。149 は底部である。底部外面に、不明瞭であるが木の葉文がみとめられる。底部形状は、外側にやや突出する平底である。145 ～ 148 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

150 は小形蛸壺である。丸底で、外面にユビオサエがみとめられる。庄内式併行期頃に位置づけられる。151 は製塩土器脚台である。体部から脚部の外面に右上がりのタタキを施す。脚部は二次焼成により黒色に変色する。Ｉｂ式で、庄内式併行期に位置づけられる。

流路 001 出土土器（図 52 ～ 59、図版 20・21― 1 ）　流路 001 出土土器は、混入遺物も含み計 127 点を報告する。先述のように、西半に連続して堆積する層があること、出土地点により遺物に差異がみとめられることから、09049-1・10078-2 区出土遺物 48 点（152 ～ 199）、黒褐色粘シルト層出土遺物 41 点（200 ～ 240）、にぶい黄褐色～黄褐色粗砂層出土遺物 6 点（241 ～ 246）、にぶい黄褐色シルト層出土遺物 6 点（247 ～ 252）、11001-6 区出土遺物 16 点（253 ～ 268）、10001-2・10078-3 区出土遺物 10 点（269 ～ 278）の順に、報告する。

152 ～ 199 は、09049-1・10078-2 区出土遺物のうち、黒褐色粘シルト層・にぶい黄褐色～黄褐色粗砂層・にぶい黄褐色シルト層出土遺物を除くものである。

152 は、瓦質土器で、甑の可能性がある。体部はタタキ後にナデを施す。中世に所属する可能性があるが、断定はできない。

153 ～ 155 は、須恵器壺である。156 は、須恵器杯Ｂで、貼り付け高台である。153・154・156 は、奈良時代頃に位置づけられる。

157 は、須恵器鉢である。外面に波状文を施す。

158 ～ 165 は、須恵器蓋である。158 は、外面にカキメを施す初期須恵器である。159 は、大きくひずむ。外面に自然釉がみとめられる。壺の蓋の可能性がある。160 ～ 165 は、杯蓋である。161 ～ 164 は TK10 頃に、165 は TK209 頃に位置づけられる。

166 ～ 174 は、須恵器杯身である。166・167 は焼成があまい。169 は外面に自然釉がみとめられる。受部には別個体の破片が融着する。172 はひずみが大きく、復元的に図化している。166・167 は

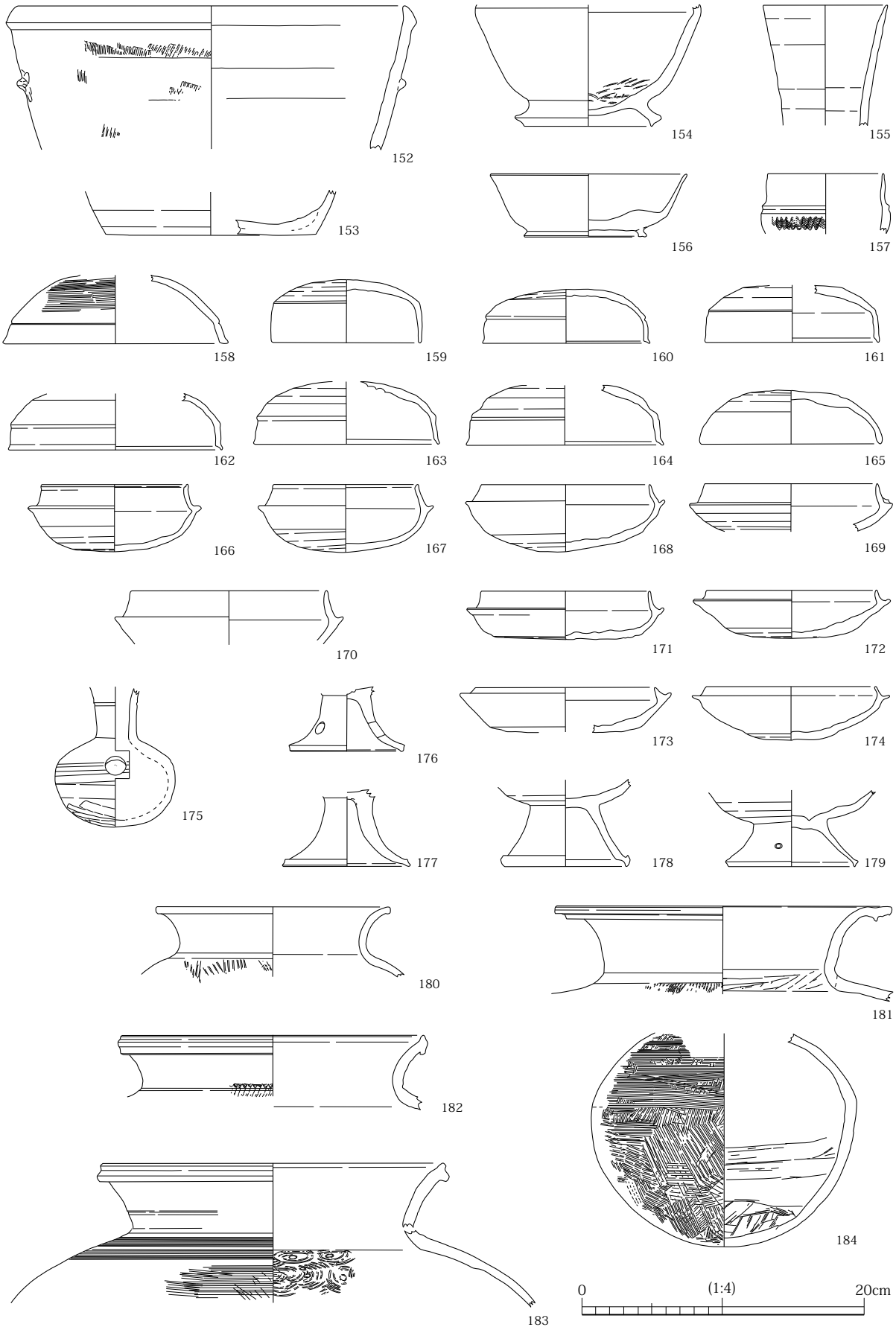


図 52　09017-2 区他流路 001 出土土器（1）

TK47 頃に、168 ～ 170 は TK10 頃に、171 ～ 174 は TK209 頃に位置づけられる。

175 は、須恵器鼎である。円形の 1 孔をもつ。TK10 頃に位置づけられる。

176 ～ 179 は、須恵器高杯である。176 は、円形透かしが 2 箇所残存し、３方向であったと考えられる。177 ～ 179 は、透かしがない。178 は、外面に自然釉がみとめられる。179 は、脚部に竹管文が 1 箇所みとめられる。

180 ～ 183 は、須恵器甕である。184 は、須恵器で、甕の可能性がある。183 は、口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。183 は MT15 頃に、182 は TK10 頃に位置づけられる。

185 ～ 187 は、土師器甕である。185 は口縁部、体部とも内外面にハケを施す。外面に黒斑がみとめられる。186 は、口縁部内面にハケを、口縁端部に沈線を施す。体部外面は、4.5 条／cm の右上がりのタタキを施す。187 は､口縁部内外面にハケを施す。体部内面は縦方向ケズリを、体部外面はハケを施す。体部外面にススが付着する。

188 は、土師器杯である。内面にミガキがみとめられる。奈良時代に位置づけられる。

189・190 は、土師器高杯である。189・190 とも、杯部底部に棒状工具による円形刺突痕が残る接合法 C である。190 は、杯部外面にハケを施す。189・190 とも布留式期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

191 ～ 199 は、弥生土器である。

191･192 は､高杯である。191 は､脚柱部中空である。庄内式併行期頃に位置づけられる。192 は、脚柱部中空である。脚部外面にミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。後期中葉～後葉に位置づけられる。

193 は、脚台または高杯脚部と考えられる。外面にハケを施す。194 は、製塩土器脚台である。外面に左上がりのタタキを施す。変色等二次焼成の痕跡は確認できない。後期～庄内式併行期に所属すると考えられるが、詳細な時期比定は困難である。

195 は、広口壺である。頸部内外面にハケを施す。後期に位置づけられる。

196 は、器台である。外面にハケを施す。円形透かしが３箇所残存し、やや不均等であるが、４方向であったと考えられる。

197 ～ 199 は、底部である。197・199 は、外面に右上がりのタタキを施す。199 は、外面にスス状の痕跡がみとめられる。底部形状は、197・198 はやや突出する平底、199 は平底である。197 は甕か鉢、199 は甕である。198 は鉢の可能性が考えられる。197・199 は後期～庄内式併行期に所属すると考えられるが、詳細な時期比定は困難である。

200 ～ 240 は、09049-1・10078-2 区の黒褐色粘シルト層出土のものである。

200 は須恵器杯蓋である。TK47 頃に位置づけられる。

201 ～ 240 は、弥生土器である。201 ～ 210 は、壺である。

201 ～ 205 は、広口壺である。201 は、口縁部が垂下する。口縁部外面に沈線と竹管円形浮文を施し、上下端部には刻目がみとめられる。202・203 は、口縁部が頸部から垂直に立ち上がっ

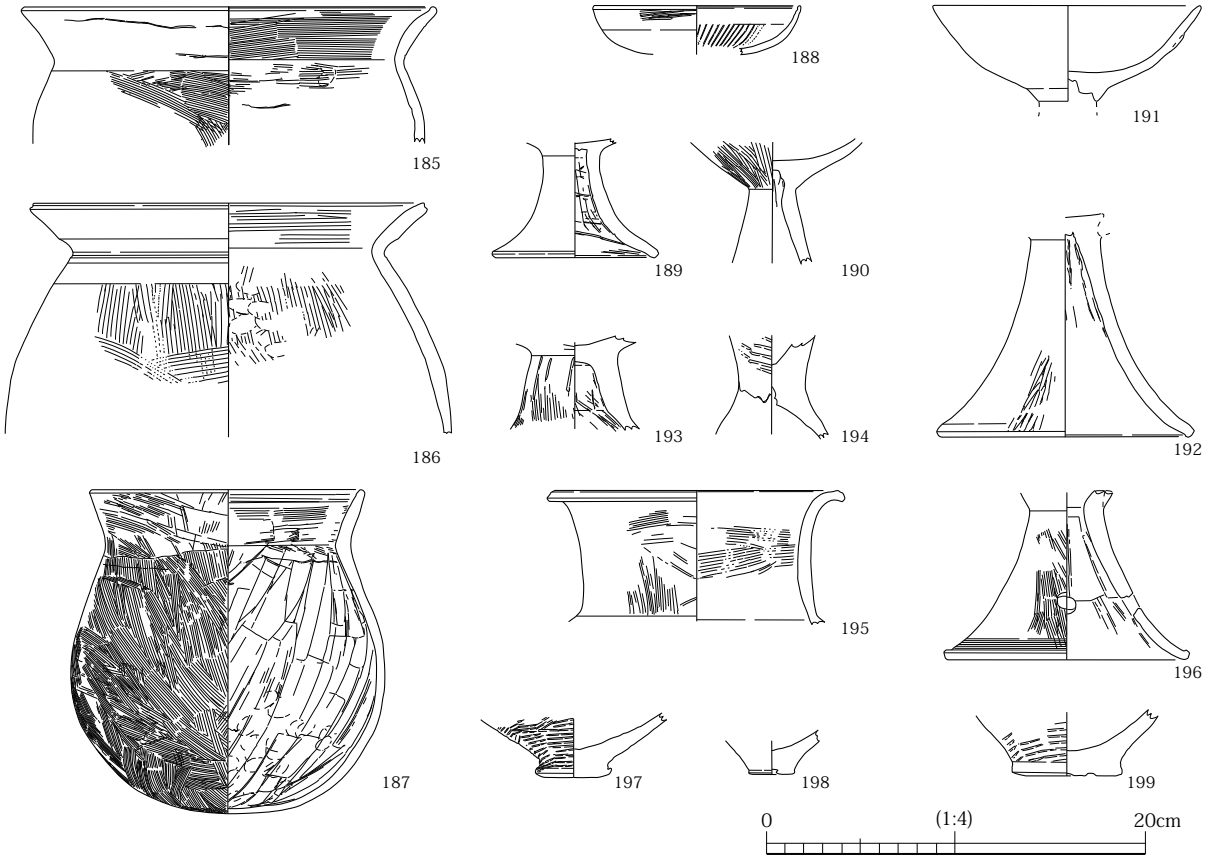


図 53　09017-2 区他流路 001 出土土器（2）

て外反する。202 は内外面にミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。口縁端部に沈線と円形浮文の剥離痕跡がみとめられる。204 は、口縁部と頸部が直接接合せず、図上復元である。口縁部が単純に外反する。205 は球形に近い体部をもつ。203 は後期に、201・202・204 は後期～庄内式併行期に、205 は庄内式併行期に位置づけられる。

206・207 は、長頸壺である。206 は、頸部と体部が直接接合せず、図上復元である。体部外面にハケを施す。207 は、体部上部内面にシボリ目がみとめられる。体部外面にハケを施す。口縁端部がやや内傾することから、口縁端部付近まで残存すると考えられる。206・207 は、弥生時代後期に位置づけられる。

208 ～ 210 は、壺底部である。底部形状は、208 は平底、209 は中央部付近が窪む平底、210 は外側に突出する平底である。

211 ～ 221 は、甕である。

211 は、口縁端部が立ち上がり、受口状を呈する。胎土に角閃石を含み、生駒西麓産の可能性がある。

212 ～ 217・219 ～ 221 は弥生形甕である。212 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。体部に右上がりのタタキを施す。213 は口縁端部に鈍い端面をもつ。体部に横位のタタキを施す。タタキは頸部に及び、口縁部途中には粘土接合痕がみとめられる。214 は、口縁端部がわずかに上方に拡張

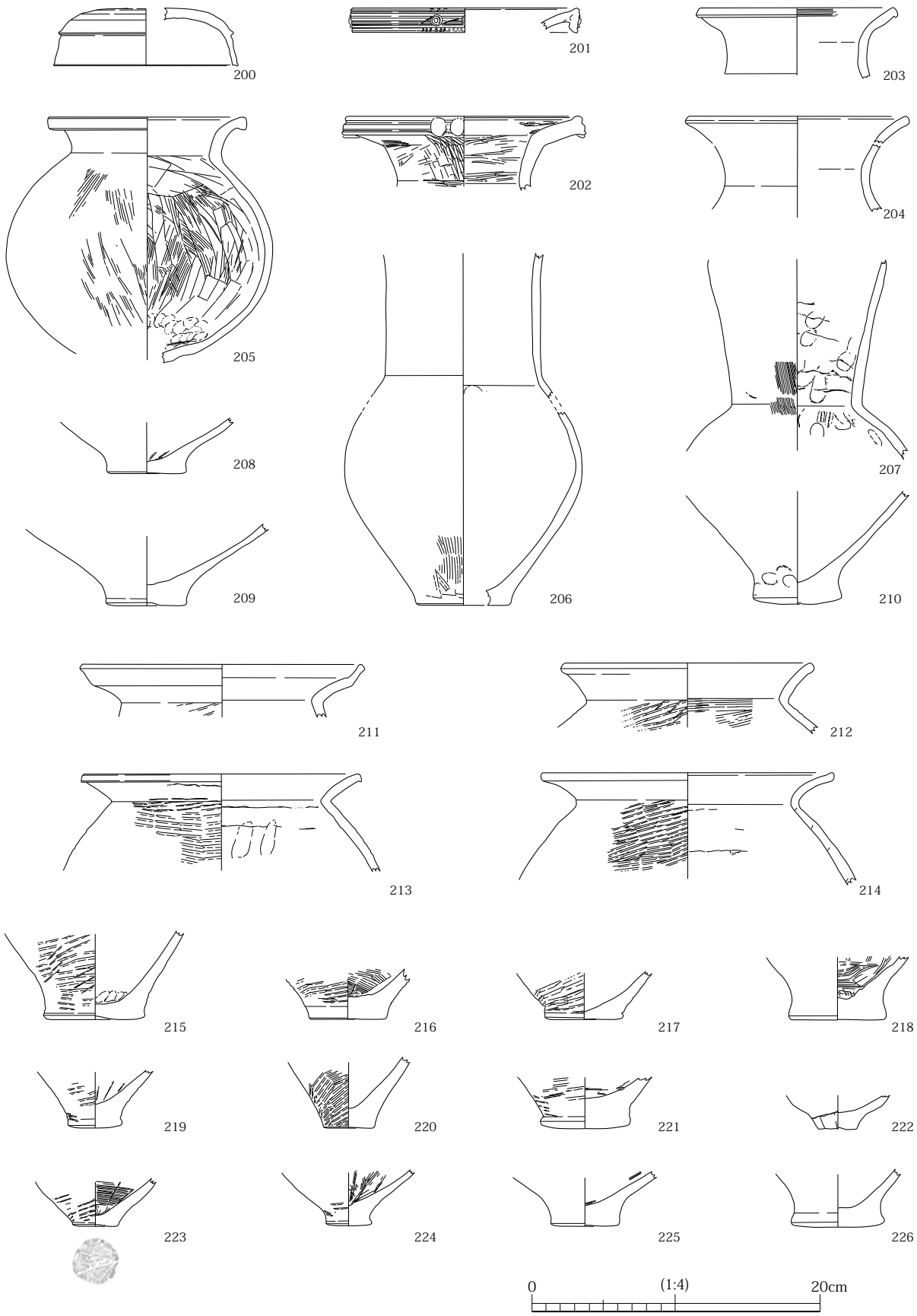


図 54　09017-2 区他流路 001 出土土器（3）

する。215 は、外面に右上がりのタタキを施す。外面にススが付着する。216・217 は、外面に右上がりのタタキを施す。胎土に角閃石を含み、生駒西麓産の可能性がある。218 は、外面にススが付着する。219 は、外面に右上がりのタタキを施す。内面にコゲ状の付着物がみとめられる。220 は、外面に右上がりのタタキを施す。外面に黒斑がみとめられる。221 は、外面に右上がりのタタキを施す。底部形状は、215 は中央部付近が窪む平底、216 ～ 218・220 は平底、219・221 は外側にやや突出する平底である。212 ～ 217・219 ～ 221 は、後期から庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

222 ～ 226 は、底部である。222 は、外面に黒斑がみとめられる。223 は、外面に右上がりのタタキを施す。底部外面に木の葉文がみとめられる。224 は、外面に右上がりのタタキを施すが、後の調整により不明瞭となる。底部形状は、222･223 は中央部付近が窪む平底、224･225 は平底、226 は外側にやや突出する平底である。222･223 は甕か鉢と考えられる。224 は壺か鉢､225 は壺、226 は甕か鉢の可能性がある。222 ～ 224 は、後期から庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

227 ～ 234 は、高杯である。227 は口縁端部下に沈線を施す。外面に黒斑がみとめられる。228 は有稜高杯である。229 は脚柱部中空で、円形透かしが 1 箇所残存する。透かしの方向数は不明

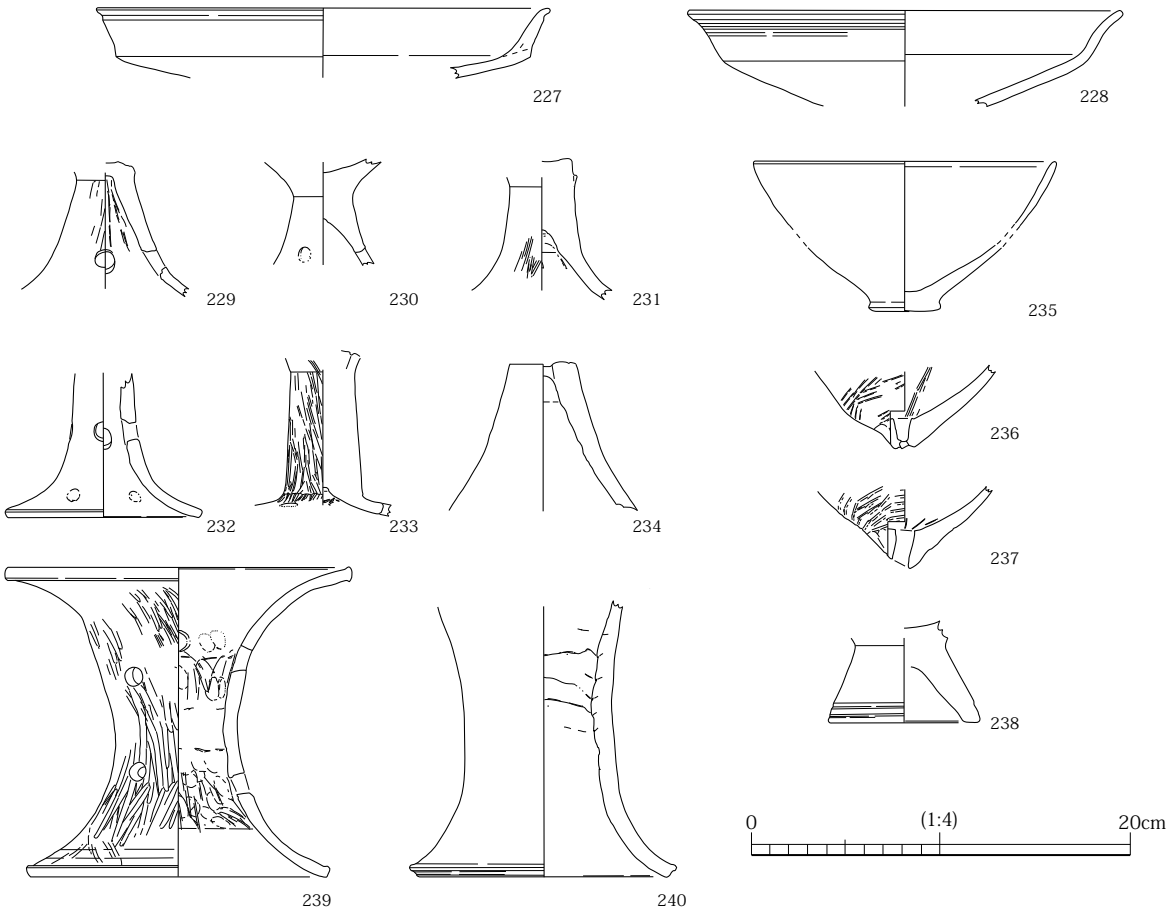


図 55　09017-2 区他流路 001 出土土器（4）

である。230 は脚柱部中空で、円形透かしを３方向に施す。231 は脚柱部半中実で、透かしの有無は不明である。232 は脚柱部中空で、円形透かしを４方向に施す。裾部にも円形透かしの痕跡の可能性のある部分が２箇所みとめられる。233 は脚柱部中実で、円形透かしが１箇所残存する。透かしの方向数は不明である。外面にミガキを施す。234 は脚柱部中空で、透かしの有無は不明である。234 は後期中葉頃に、228・230・232 は後期中葉～後葉に、229 は後期後葉～庄内式併行期に、231・233 は庄内式併行期に位置づけられる。

235 ～ 237 は、鉢である。235 は、小形鉢である。口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。椀形の体部にやや突出した平底をもつ。236・237 は有孔鉢である。体部は深く、底部は下方にやや突出して小さい。体部外面に右上がりのタタキを施す。236 は孔部が石でふさがる。237 は外面に黒斑がみとめられる。235 は後期に、236・237 は庄内式併行期に位置づけられる。

238 は、脚台である。裾部外面に沈線を施す。

239・240 は大形器台である。239 は、口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。筒状の短い体部に広がる口縁部と裾部をもち、口径は裾径よりやや大きい。上下２段に各３方向の円形透かしを施す。上下段とも位置は不均等で、透かしの大きさも均一ではない。外面にミガキを施す。240 は、壺口縁部の可能性もあるが、粘土接合痕の方向より器台と判断した。裾部が大きくひずむ。透かしはみとめられない。239・240 は後期に位置づけられる。

以上のように、09049-1・10078-2 区の黒褐色粘シルト層出土のものは、古墳時代の土器も含むものの、弥生時代の土器が大半を占める。個々の詳細な時期比定は困難であるが、後期～庄内式併行期におさまるものが多い。

241 ～ 246 は、09049-1・10078-2 区で最下層のにぶい黄褐色～黄褐色粗砂層から出土したものである。

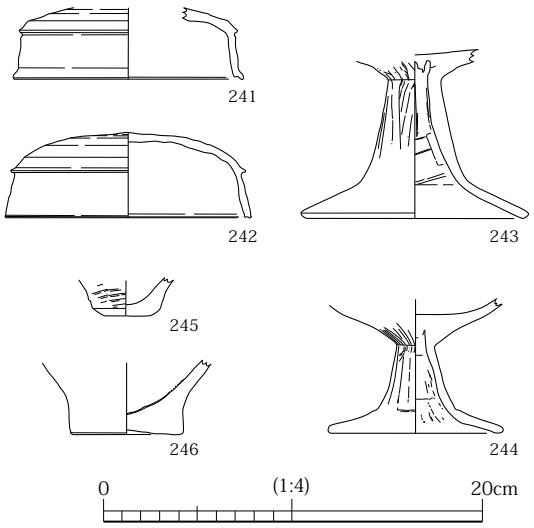


図 56　09017-2 区他流路 001 出土土器（５）

241・242 は須恵器杯蓋である。底面直上で出土した。242 は TK23 に、241 は TK47 に位置づけられる。

243・244 は、土師器高杯である。243 は、杯部外面にハケを施す。杯部底部に棒状工具による円形刺突痕が２箇所残り、接合法 C である。243・244 とも透かしの有無は不明である。243・244 は布留式期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

245･246 は、弥生土器底部である。245 は、外面に右上がりのタタキを施す。246 は内面に黒色物が付着する。底部形状は、245 は平底、246 は中央部付近がやや窪む平底である。

245・246 は、甕の可能性が考えられる。後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

以上のように、09049-1・10078-2 区で最下層のにぶい黄褐色～黄褐色粗砂層出土のものは、少量であった。小片で図化できなかったものの中世の遺物も出土しているが、弥生時代から古墳時代のものが大半である。

247 ～ 252 は、09049-1・10078-2 区で北側肩部付近のにぶい黄褐色シルト層から出土したものである。

247 ～ 252 は、弥生土器である。

247・248 は弥生形甕である。247 は、体部外面に 4 条／ cm の右上がりのタタキを施した後、体部中央部の一部に 2 ～ 3 条／ cm の縦方向のタタキ状調整を施す。タタキは頸部におよび、口縁部途中には粘土接合痕がみとめられる。口縁部はややいびつである。口縁端部は幅の狭い鈍い端面をもつ。体部下半外面にススが付着する。248 は、体部外面に右上がりのタタキを施す。底部形状は外側にやや突出する平底である。247 は、体部形状が丸みをもつことから庄内式併行期に位置づけられる。248 は後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

249・250 は底部である。249 は、外面にケズリの後ハケを施す。250 は外面にタタキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。底部形状は、249 は平底、250 は外側がやや窪む平底である。249 は甕か壺の可能性がある。

251・252 は高杯である。251 は脚柱部中実で、円形透かしが 2 箇所に残存する。透かしは 3 方向であったと考えられる。椀形高杯の可能性が高い。252 は脚柱部中空で、円形透かしが 1 箇所に残存する。透かしの方向数は不明である。252 は後期後葉～庄内式併行期に、251 は庄内式併行期に位置づけられる。

以上のように、09049-1・10078-2 区北側肩部付近のにぶい黄褐色シルト層からは、弥生時代後期～庄内式併行期の土器が多く出土した。肩部付近では、ベース層である基本層序第Ⅵ層から

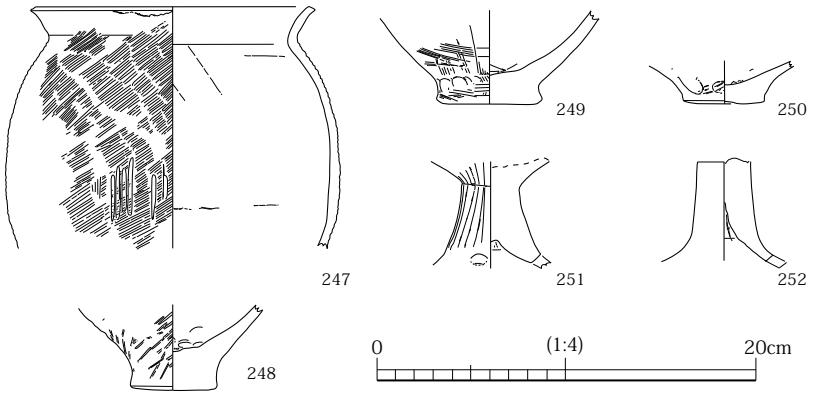


図 57　09017-2 区他流路 001 出土土器（6）

弥生土器がかたまって出土していたこと、ベース層と流路埋土の層界が不明瞭であったことから、ここで報告した土器の中には本来基本層序第Ⅵ層に含まれていた土器が混在している可能性がある。

253 ～ 268 は、11001-6 区の流路内出土遺物である。このうち、262・263 は 09049-1・10078-2 区に続く黒褐色粘シルト層出土のもの、その他は、上層から出土し、里道埋管設置時や隣接する水路設置時の撹乱出土のものが混在している可能性があるものである。

253 は瓦器小皿、254・255 は瓦器椀である。255 は内面にミガキがみとめられる。253・254 は摩滅が著しくミガキの有無は不明である。253 は 13 世紀後半～ 14 世紀前半、254・255 は 13 世紀前半頃に位置づけられる。

256・257 は須恵器杯である。258 は須恵器皿である。259 は須恵器壺である。256 ～ 258 は奈良時代に位置づけられる。260 は須恵器平瓶か横瓶と考えられる。261 は須恵器甕の可能性がある。体部外面に櫛描列点文がみとめられる。

262 ～ 268 は弥生土器である。262 は長頸壺である。体部上半と下半は直接接合せず、図上復

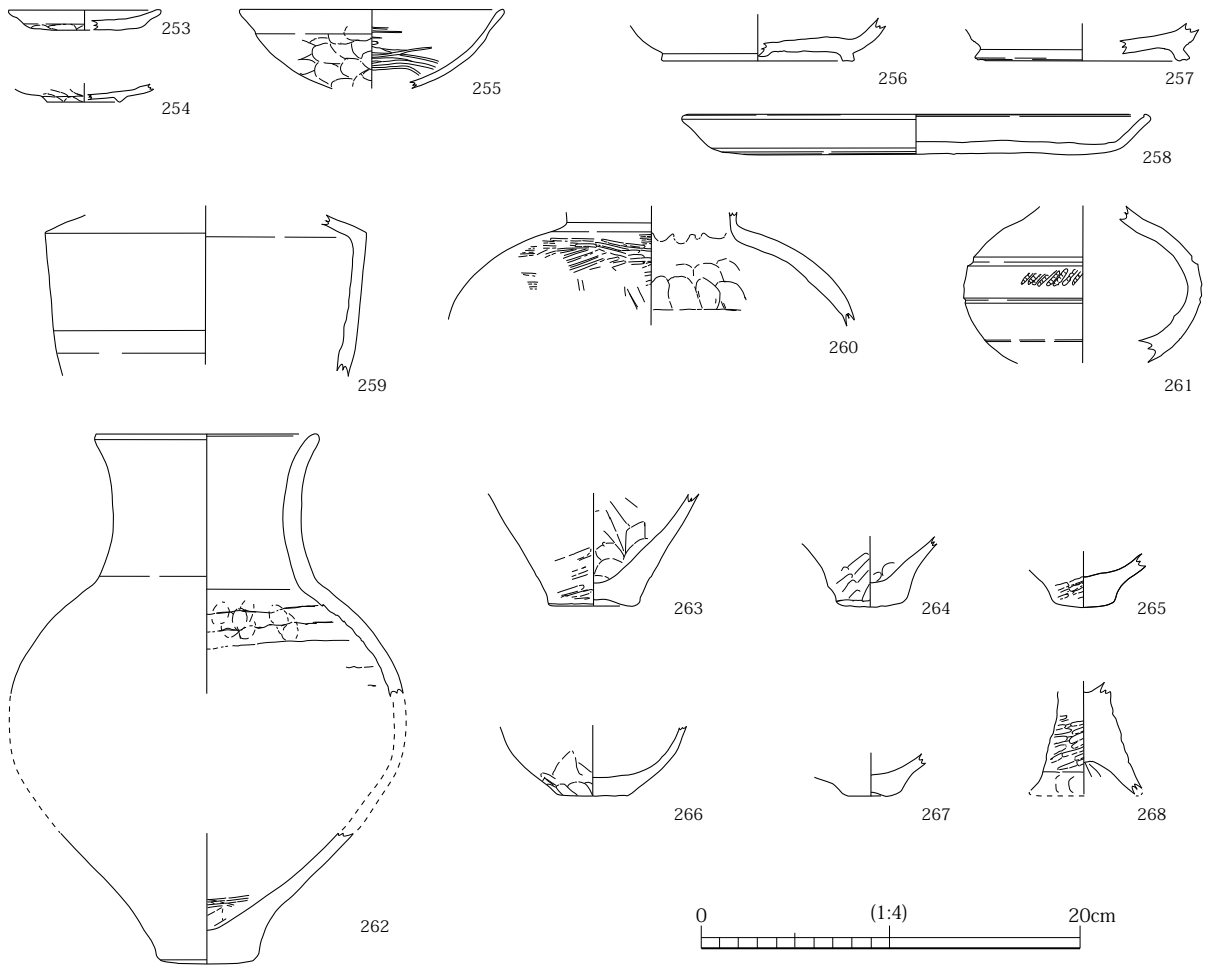


図 58　09017-2 区他流路 001 出土土器（7）

元である。底部形状は、外側に突出する平底である。

263・264 は甕底部である。外面に右上がりのタタキを施す。264 は外面にススが付着する。底部形状は、263 は中央部付近が窪む平底、264 は外側に突出する平底である。263・264 は後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

265 ～ 267 は底部である。265 は外面に右上がりのタタキを施す。266 は外面にミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。底部形状は、265 は外側に突出する平底、266 は平底、267 は中央部付近が窪む平底である。265 は甕か鉢である。266 は壺の可能性がある。265 は後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

268 は製塩土器脚台である。裾端部は欠損するが、ほぼ端部に近い部分まで残存するものと考えられる。脚部外面に右上がりのタタキを施す。二次焼成により、外面一部が橙色～黒色に変色する。Ｉｂ類で、庄内式併行期に位置づけられる。

以上のように、11001-6 区の流路内では、弥生時代から中世の遺物が出土しており、奈良時代の遺物が比較的多い。また、弥生土器では後期～庄内式併行期の遺物が多いが、これは、他の地区とも共通する特徴である。

269 ～ 278 は、10001-2・10078-3 区の流路内出土遺物である。

269 は、須恵器鉢である。270・271 は、須恵器杯身である。271 は MT15 ～ TK10 に位置づけられる。272 は、須恵器甑である。体部外面にタタキを施す。百済系と考えられる。

273 ～ 277 は、土師器である。273 は、布留形甕である。口縁部は内側に肥厚し、内傾する端面をもつ。体部外面に明瞭な横方向のハケはみとめられない。274 は、小型丸底壺である。口縁

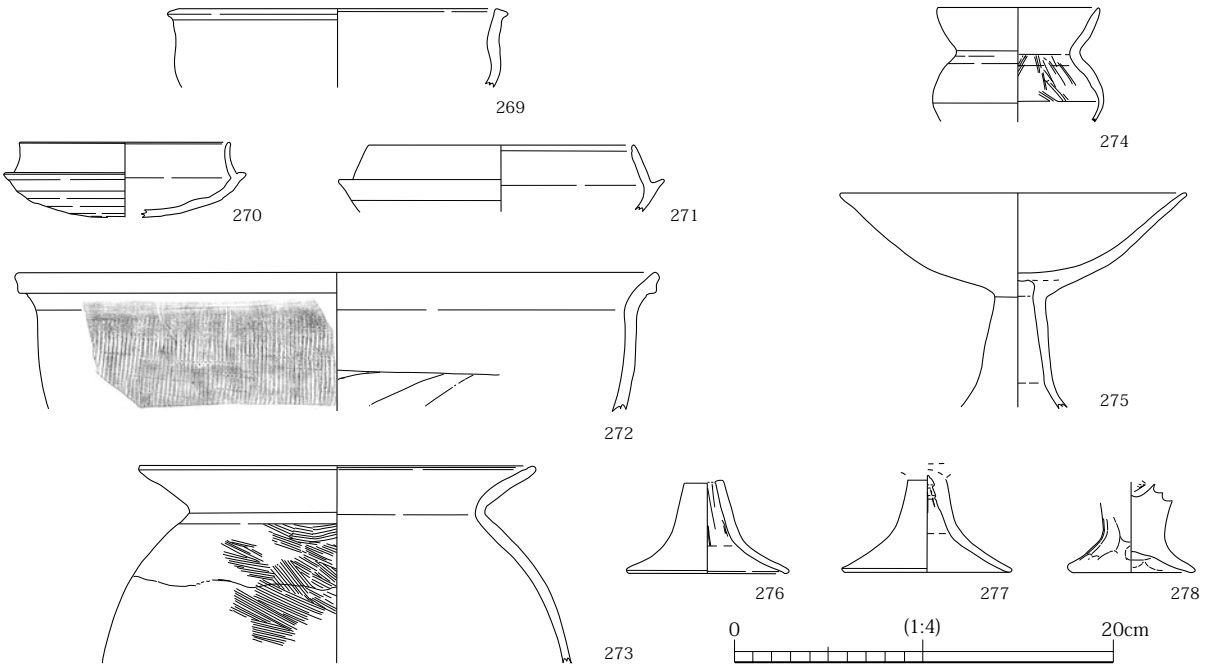


図 59　09017-2 区他流路 001 出土土器（8）

部は体部最大径より開かない。275 ～ 277 は、高杯である。275 は外反高杯である。透かしの有無は不明である。276・277 は、透かしは施さない。277 は、不明瞭であるが、杯部底部に棒状工具による円形刺突痕が残り、接合法 C と考えられる。273 ～ 277 は布留式期に所属し、273・274 は、布留式後半に位置づけられる。

278 は製塩土器脚台である。脚部外面にユビオサエを施す。Ⅱ b 式である。庄内式併行期頃に位置づけられる。

10001-2・10078-3 区の流路内からは、小片で図化できなかったものの中世の遺物も出土しているが、弥生時代から古墳時代の土器が大半である。

以上のように、流路出土遺物は、黒褐色粘シルト層では弥生時代後期～庄内式併行期の遺物が多く、最下層のにぶい黄褐色～黄褐色粗砂層では遺物が少量である。また、11001-6 区内では奈良時代の遺物が比較的多く出土する等、層位や地点により差異がみとめられる。流路の機能時期は中世と考えられることから、多く出土した弥生時代から古墳時代の土器は二次的な堆積ではあるが、中世より以前に、基本層序第Ⅵ層等、周辺に堆積していた土層に由来するものと考えられ、古代のものも含め、地点による出土遺物の差異は、基本層序第Ⅵ層等に本来含まれていた遺物の差異を反映している可能性がある。古代以前の土地利用の一端を示している可能性が指摘できる。

小結　第３節でも述べたように、中世の遺物が遺構の時期を示すものと推定できるが、少量で、詳細な時期比定は困難なものが多い。時期比定の可能な中世の遺物は 12 ～ 14 世紀頃のものが出土しているが、遺構の時期がさらに下る可能性も否定できない。

（３）弥生～古墳時代遺構検出面の土器（図 60、図版 21―２）

弥生～古墳時代遺構検出面の遺構からは、少量の弥生土器、土師器が出土した。ここでは、混入の可能性のあるものも含め、５点を報告する。

279・280 は土師器布留式甕である。柱穴 004 から出土した。口縁部は内側に肥厚し、内傾する端面をもつ。摩滅により調整は不明瞭である。

281 ～ 283 は、弥生土器である。281 は柱穴 020 から出土した。甕である。282・283 はピット 062 から出土した。282 は甕底部である。外面に右上がりのタタキを施す。外面は二次焼成により赤色に変色する。底部形状は中央部付近が窪む平底である。283 は、有稜高杯である。杯部外

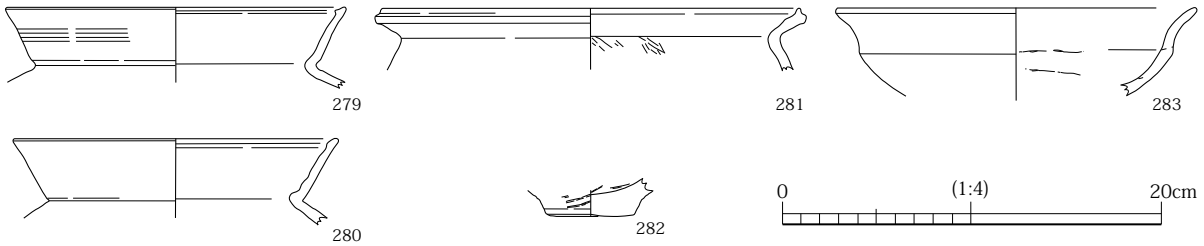


図 60　09017-2 区他弥生～古墳時代遺構検出面の土器

面にミガキを施すようであるが、不明瞭である。281 は中期後葉に、283 は後期後葉に、282 は後期～庄内式併行期に位置付られる。

弥生～古墳時代遺構検出面の遺構出土の土器は少量で、個々の遺構の時期を検討することは困難である。直上の第Ⅵ層から弥生時代後期～庄内式併行期の土器が多く出土していること、遺構からの須恵器の出土はないことより、弥生時代後期から古墳時代前期頃の時期幅におさまるものと考えられる。

（4）包含層出土土器

包含層出土遺物は、その形成時期を示すものを中心とし、それ以前の時期の遺物については特徴的なものを報告する。

撹乱出土土器（図 61） 撹乱出土のものであるが、下層に由来するものが含まれる可能性があること、他に類例が見られないなど特徴的なもの等を含め 9 点報告する。

284・285 は土師器焙烙である。284 は把手を 2 方向にもち、上部から各 1 孔を穿孔する。外面にススが付着する。285 は把手が 1 箇所残存し、上部から 1 孔を穿孔する。外面にススが付着する。284・285 は 18 世紀に位置づけられる。

286 は黒色の土師器壺蓋である。外面にタタキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。下面周囲の凸部が剥離した部分に筋状の調整痕がみとめられ、凸部接合前に調整を施したものと考えられる。17 ～ 18 世紀に位置づけられる。

287 は須恵器杯蓋である。288 は須恵器杯身である。TK47 に位置づけられる。289 は須恵器高杯である。脚部は長方形透かしを 3 方向に施し、外面にカキメがみとめられる。TK47 に位置づけられる。290 は須恵器器台である。脚部は上段に長方形透かしが 5 箇所残存し、8 方向であったと考えられる。下段は三角形透かしが 2 箇所残存する。方向数は不明であるが、上段と同じく 8 方向と推定して図化した。脚部外面に波状文を施す。

291・292 は土師器である。291 は外反高杯である。杯部底部に棒状工具による円形刺突痕が残り、接合法 C と考えられる。刺突は杯部上部まで貫通しているが、摩滅により表面が剥離したためで、本来は貫通していなかったものと考えられる。布留式期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。292 は、製塩土器脚部である。

撹乱出土ではあるが、10001-2 区では近世の遺物が比較的多く出土していることが特徴的である。10001-2 区内では近世の遺構は検出されていないが、北側に隣接する 09017-2 区では 18 ～ 19 世紀の溝等が検出されていることから、これらの遺構の機能時期に関連する遺物である可能性が考えられる。

基本層序第Ⅱ・Ⅲ層出土土器（図 61） 基本層序第Ⅱ・Ⅲ層は現代の作土・床土であるが、下層に由来するものが含まれる可能性があることから、特徴的なものを 8 点報告する。基本層序Ⅳ層以下から出土した可能性のあるものも含め、基本層序Ⅱ・Ⅲ層出土の可能性のあるものはここで報告する。

293・294 は瓦器小皿である。294 は内面にミガキがみとめられる。12 ～ 13 世紀に位置づけられる。

295・296 は須恵器杯蓋である。296 は外面に自然釉がみとめられる。295 は TK23 頃に、296 は TK47 に位置づけられる。297 ～ 299 は須恵器杯身である。297 は底部外面には調整を施さない。297 は 7 世紀第一四半期に、298 は TK217 に、299 は TK23 に位置づけられる。

300 は弥生土器底部である。底部付近に 1 孔をもつ。底部形状は平底である。

基本層序第Ⅳ・Ⅴ層出土土器（図 62、図版 22） 基本層序第Ⅳ・Ⅴ層は、当初、第Ⅳ層と第Ⅴ層を分層できていなかったこともあり、一体で掘削した部分が多いため、あわせて報告する。基本層序Ⅵ層以下から出土した可能性のあるものも含め、基本層序Ⅱ・Ⅲ層出土の可能性のあるものはここで報告する。

基本層序第Ⅳ・Ⅴ層からは、磁器、土師質羽釜、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土している。中世、近世の遺物を中心に、混入遺物も含め特徴的なもの 31 点を報告する。

301 は、磁器椀である。波佐見焼染付仏飯器で、台部があると考えられる。18 世紀中頃に位置

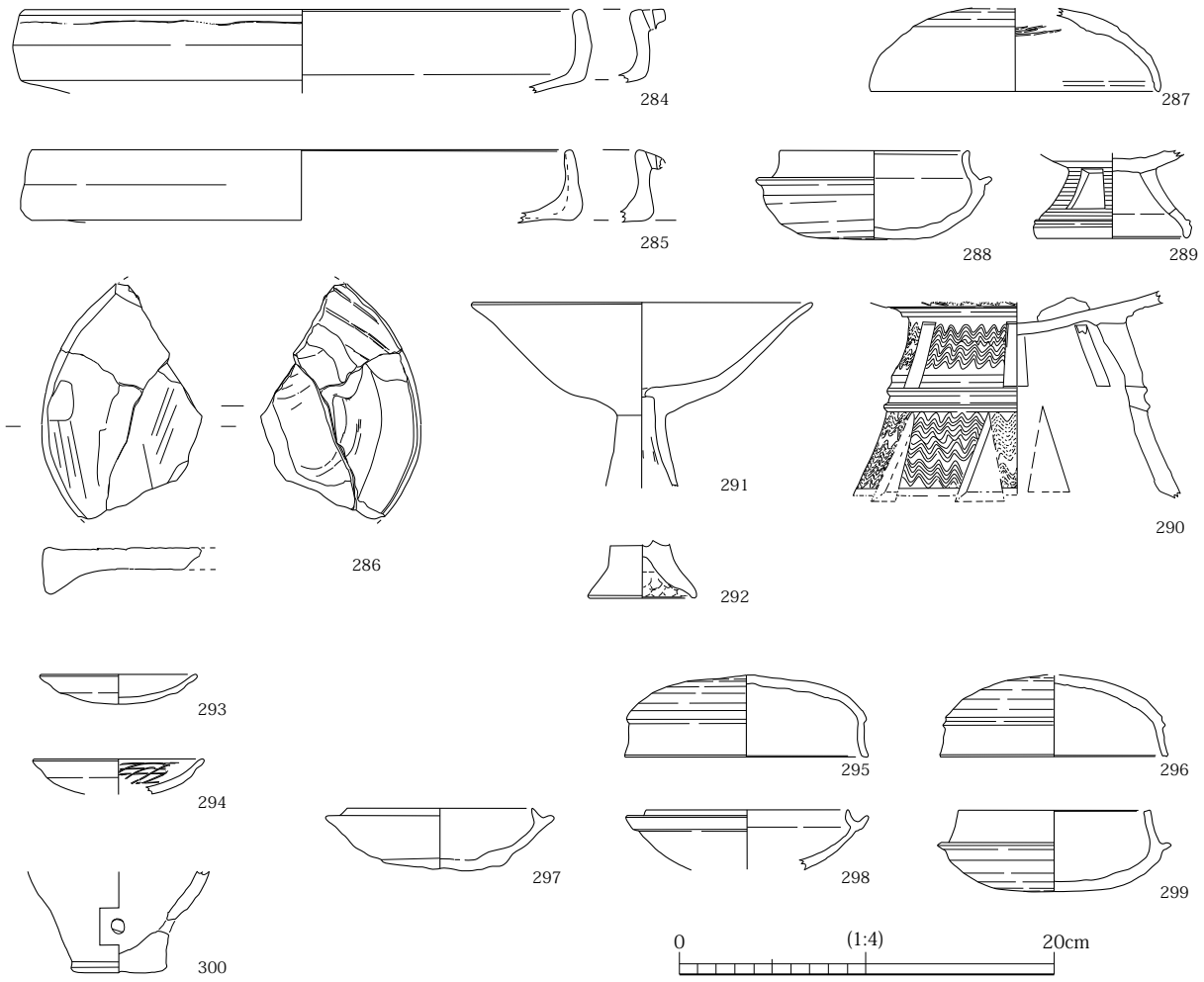


図 61　09017-2 区他包含層出土土器（1）

づけられる。

302 は、土師器小椀である。口縁部にスス状の痕跡がみとめられるが、焼成時の黒斑の可能性もあり、使用痕跡であるかは断定できない。17 ～ 18 世紀に位置づけられる。

303 は、土師質羽釜である。13 世紀頃に位置づけられる。

304 ～ 308 は､瓦器椀である。いずれも内面にミガキがみとめられる。305･307 は 13 世紀前半、304・308 は 13 世紀中葉、306 は 13 世紀末～ 14 世紀前葉に位置づけられる。

309 は、土師器大皿である。外面にユビオサエがみとめられる。13 世紀に位置づけられる。

310 は、土師器杯である。外面にユビオサエがみとめられる。奈良時代に位置づけられる。

311 は、須恵器杯である。奈良時代に位置づけられる。

312・313 は、須恵器杯蓋である。TK209 頃に位置づけられる。314 は、須恵器杯身である。TK209 に位置づけられる。

315 は、須恵器横瓶の可能性がある。体部外面はタタキの後にカキメを施す。316 は、須恵器甕である。TK10 頃に位置づけられる。317 は、須恵器甕である。奈良時代に位置づけられる。318 は、須恵器壺である。内外面に自然釉がみとめられる。外面に波状文を施す。319 は、須恵器壺底部である。奈良時代に位置づけられる。320 は、須恵器脚部で、高杯または壺と考えられる。脚部外面にカキメを施す。全体に大きくひずむ。脚部内面に礫が多く付着する。321･322 は、須恵器高杯である。321 は脚部に円形透かしを３方向に施す。322 は脚部に長方形透かしが２箇所に残存し、３方向であったと考えられる。

323 ～ 325 は、土師器である。323 は、布留形甕である。体部外面に横方向にハケを施す。324 は甕で、複合口縁をもつ。325 は小型丸底壺である。口縁端部を欠損するが、端部付近まで残存するものと考えられ、口縁部は体部最大径より開かないと推定できる。体部外面にハケを施す。323 ～ 325 は布留式期に所属し、325 は布留式後半に位置づけられる。

326 ～ 331 は、弥生土器である。326 は、椀形高杯である。脚部外面にミガキを施す。脚柱部中実で、透かしは施さない。庄内式併行期に所属すると考えられるが、布留式期に下る可能性もある。327 は、口縁部で、外面に波状文と竹管円形浮文を施し、上下端には刻目文がみとめられる。複合口縁壺か淡路型器台と考えられ、庄内式併行期に位置づけられる。328・331 は弥生形甕である。328 は口縁端部に鈍い端面をもつ。外面に右上がりのタタキを施す。331 は外面に中央部は横位の、下部は右上がりのタタキを施す。粘土接合痕が明瞭に残る。底部形状は平底である。329・330 は底部である。329 は外面に右上がりのタタキを施す。底部に１孔をもち、甕または有孔鉢と考えられる。330 は、不明瞭であるが外面に右上がりのタタキを施す。底部形状は中央部付近がやや窪む平底である。甕か鉢と考えられる。328 ～ 331 は、後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

以上のように、基本層序第Ⅳ・Ⅴ層からは、弥生時代後期から近世の土器が出土した。基本層序第Ⅳ・Ⅴ層の遺物を明確に分けて取り上げることができなかったが、第Ⅴ層上面検出遺構から

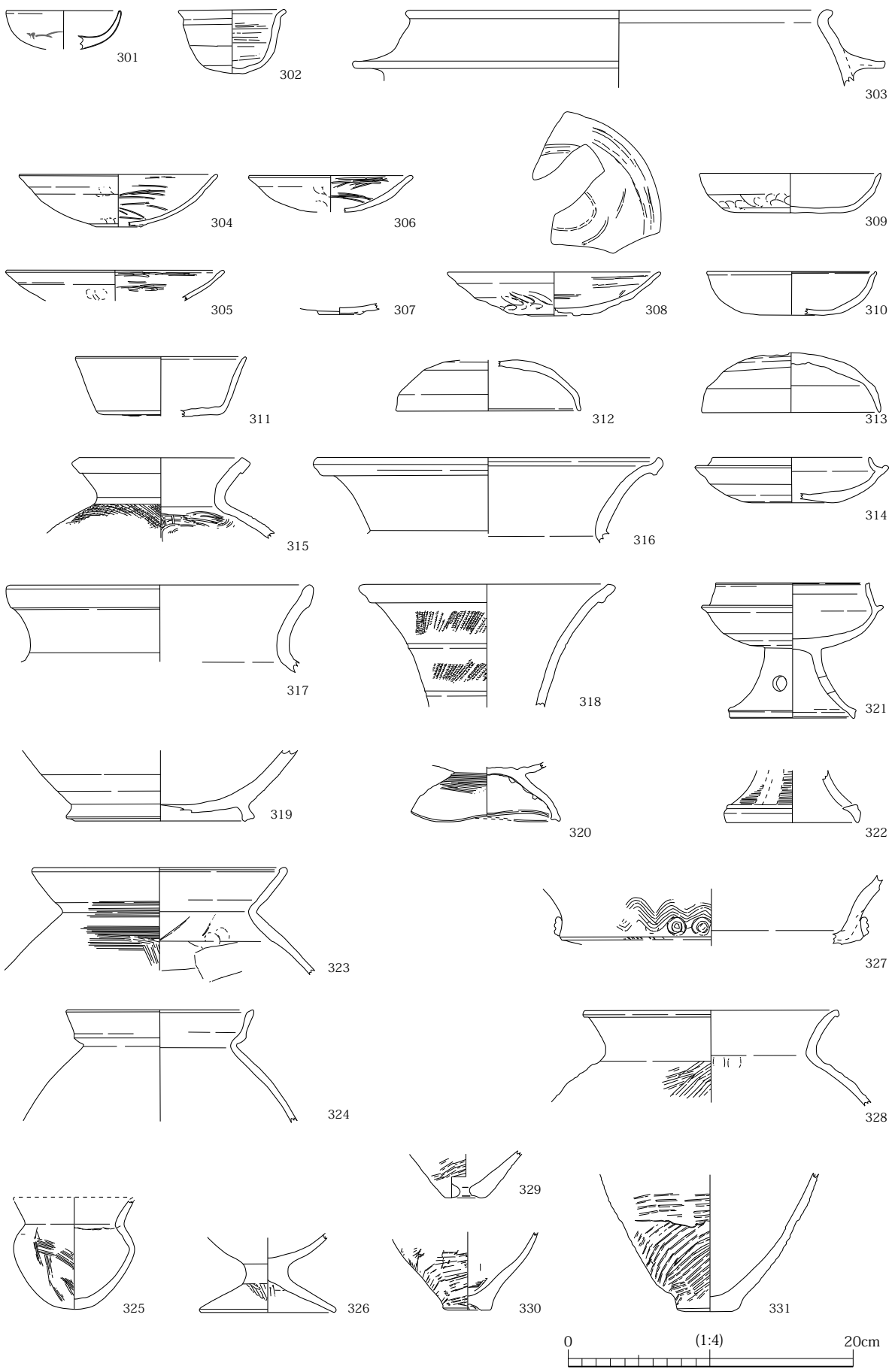


図 62　09017-2 区他包含層出土土器（2）

18 世紀の土器が、第Ⅵ層上面検出遺構から 12 ～ 14 世紀頃の土器が出土していることから、第Ⅳ層の形成時期は 18 世紀以降、第Ⅴ層の形成時期は 14 世紀以降と考えられる。

基本層序第Ⅵ層出土土器（図 63 ～ 72、図版 22 ～ 26―１） 基本層序第Ⅵ層からは、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。このうち特徴的なもの等を 184 点報告する。一部下層の第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物を含むものもあるが、第Ⅵ層出土の可能性のあるものとしてここであわせて報告する。また、第Ⅵ層は細分して遺物を取り上げた箇所もあり、明瞭な時期差はみとめられないものの、遺物量に違いがある部分もあることから、細分層ごとに報告する。また、出土地点により時期差がみとめられる可能性を考慮し、地区ごとにも分けて報告する。

332 ～ 349 は、09017-2 区の第ⅥＡ層出土である。

332 は、須恵器杯蓋である。TK23 に位置づけられる。

333 は、土師器鉢である。口縁部、体部、底部はそれぞれ直接接合せず、図上復元である。体部外面にケズリを施す。

334 ～ 349 は、弥生土器である。334 は細頸壺である。頸部と体部は直接接合せず、図上復元である。後期中頃に位置づけられる。

335 ～ 339 は、弥生形甕である。335 は、体部外面に、上部には左上がりの、中央部には右上がりのタタキを施す。口縁端部には鈍い端面をもち、口縁部はいびつである。体部外面にススが付着する。336 は、外面に右上がりのタタキを施す。底部形状は、中央部が窪む平底である。337 は、外面に右上がりのタタキを施す。外面にススが付着する。底部形状は、外側に突出する平底である。338 は、外面にタタキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。内面にコゲが付着する。底部形状は、中央部が窪む平底である。339 は、外面に右上がりのタタキを施す。外面にススが付着する。底部形状は平底である。335 ～ 337・339 は、後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

340 ～ 343 は、底部である。340 は、外面に右上がりのタタキを施す。底部は上げ底状である。鉢の可能性が考えられる。341 は、外面に右上がりのタタキを施す。外面に黒斑がみとめられる。底部形状は、中央部が窪む平底である。甕か鉢と考えられる。342 は、外面にハケ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。内面に粘土皺が多数みとめられ、粘土接合痕の可能性がある。底部形状は、中央部が窪む平底である。343 は、外面に右上がりのタタキの後、縦方向のケズリ状の痕跡がみとめられる。底部形状は、中央部がわずかに窪む平底である。340・341・343 は、後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

344・345 は、高杯である。344 は、有稜高杯である。脚柱部は中空である。杯部内外面、脚部外面にミガキを施す。口縁部はひずむ。杯部外面に黒斑がみとめられる。後期中葉頃に位置づけられる。345 は、脚柱部は中空である。円形透かしが 1 箇所残存するが、方向数は不明である。後期に位置づけられる。

346 は、大形鉢である。後期～庄内式併行期に位置づけられるが、詳細な時期比定は困難である。

347 は、大形器台である。口縁部はやや垂下する。円形透かしを３段に施し、上段は１箇所、中段は１箇所、下段は３箇所が残存する。下段は６方向と考えられる。上段、中段は２方向の可能性があるが断定できない。後期中葉～後葉に位置づけられる。

348・349 は手焙である。348 は口縁端部に刻目を施す。349 は覆部端面が残存する。覆部下端に刻目文のある突帯をもつ。348・349 は、後期後葉～庄内式併行期に位置づけられる。

350 ～ 423 は、09017-2 区の第Ⅵ B 層出土である。第Ⅵ C 層出土の可能性のあるものも一部含

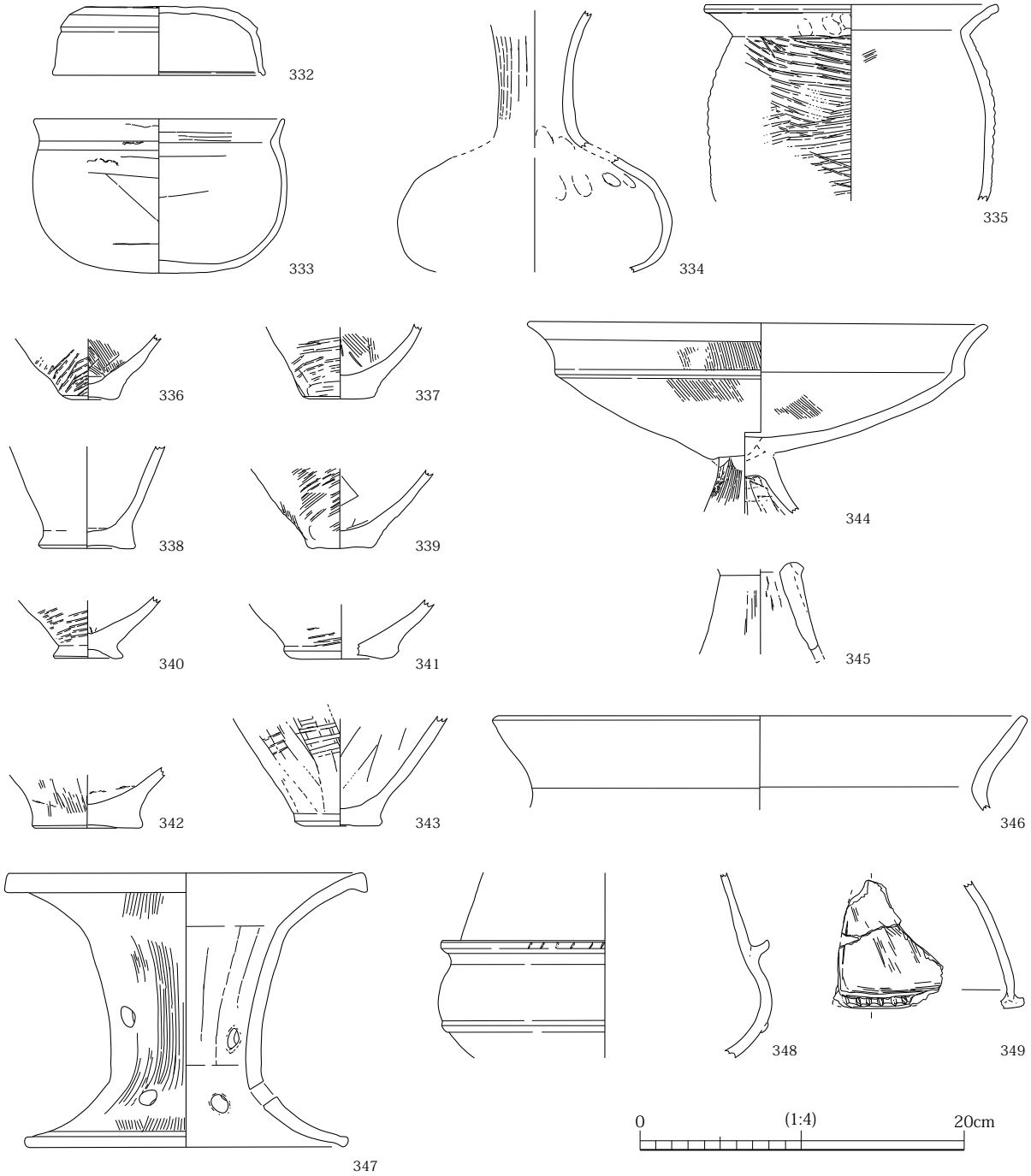


図 63　09017-2 区他包含層出土土器（３）

んでいる。

350 は、土師器杯である。底部外面にユビオサエがみとめられる。奈良時代に位置づけられる。

351 は、須恵器蓋である。奈良時代に位置づけられる。

352 は、須恵器蓋である。中央部が窪むつまみをもつ。全体に大きくひずむ。TK43 に位置づけられる。353･354 は、須恵器杯蓋である。353 は TK47 頃に、354 は、TK43 に位置づけられる。355・356 は、須恵器杯身である。TK209 に位置づけられる。357 は、須恵器高杯である。脚部外面にカキメを施す。脚部に円形透かしを３方向に施す。

358 は、土師器で、小型丸底壺である。359 は、土師器高杯である。杯部外面にハケを施す。杯部底部に棒状工具による円形刺突痕が残り、接合法 C と考えられる。

360 ～ 423 は弥生土器である。

360 ～ 362 は長頸壺である。360 は外面底部付近に不明瞭であるが左上がりのタタキがみとめられる。外面に黒斑がみとめられる。361・362 は、頸部から体部外面にハケを施す。360 ～ 362 は後期に所属し、360 は後期後葉頃に位置づけられる。

363 ～ 366 は、広口壺である。363 は、口縁部が単純に外反し、口縁端部に刻目を施す。364 ～ 367 は、口縁端部が垂下する。364 は、口縁部外面に沈線と竹管円形浮文を施す。365 は口縁部外面に竹管円形浮文を施す。366 は口縁部の垂下が小さく、外面に竹管円形浮文を施す。生駒西麓産である。363 ～ 366 は、後期に位置づけられる。

367 は複合口縁壺で、口縁部外面に竹管円形浮文を施す。庄内式併行期に位置づけられる。

368 は壺の肩部で、外面に刺突文を施す。

369 ～ 373 は、壺底部である。369 は、底部径が小さく中央部が窪む形状である。370 は、体部外面に黒斑がみとめられる。底部形状は平底である。371 は、外面にミガキがみとめられる。

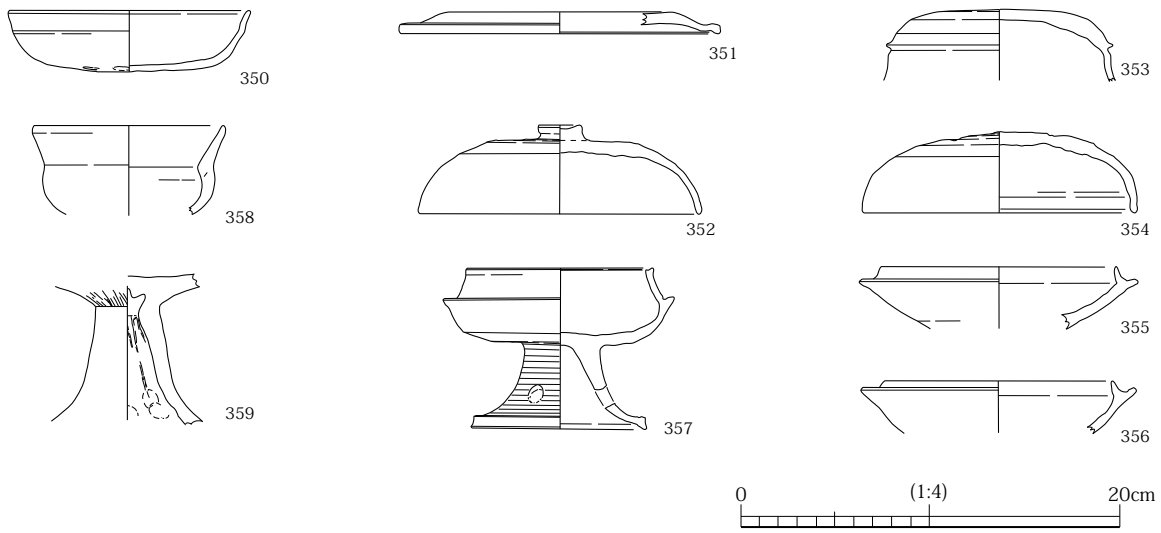


図 64　09017-2 区他包含層出土土器（４）

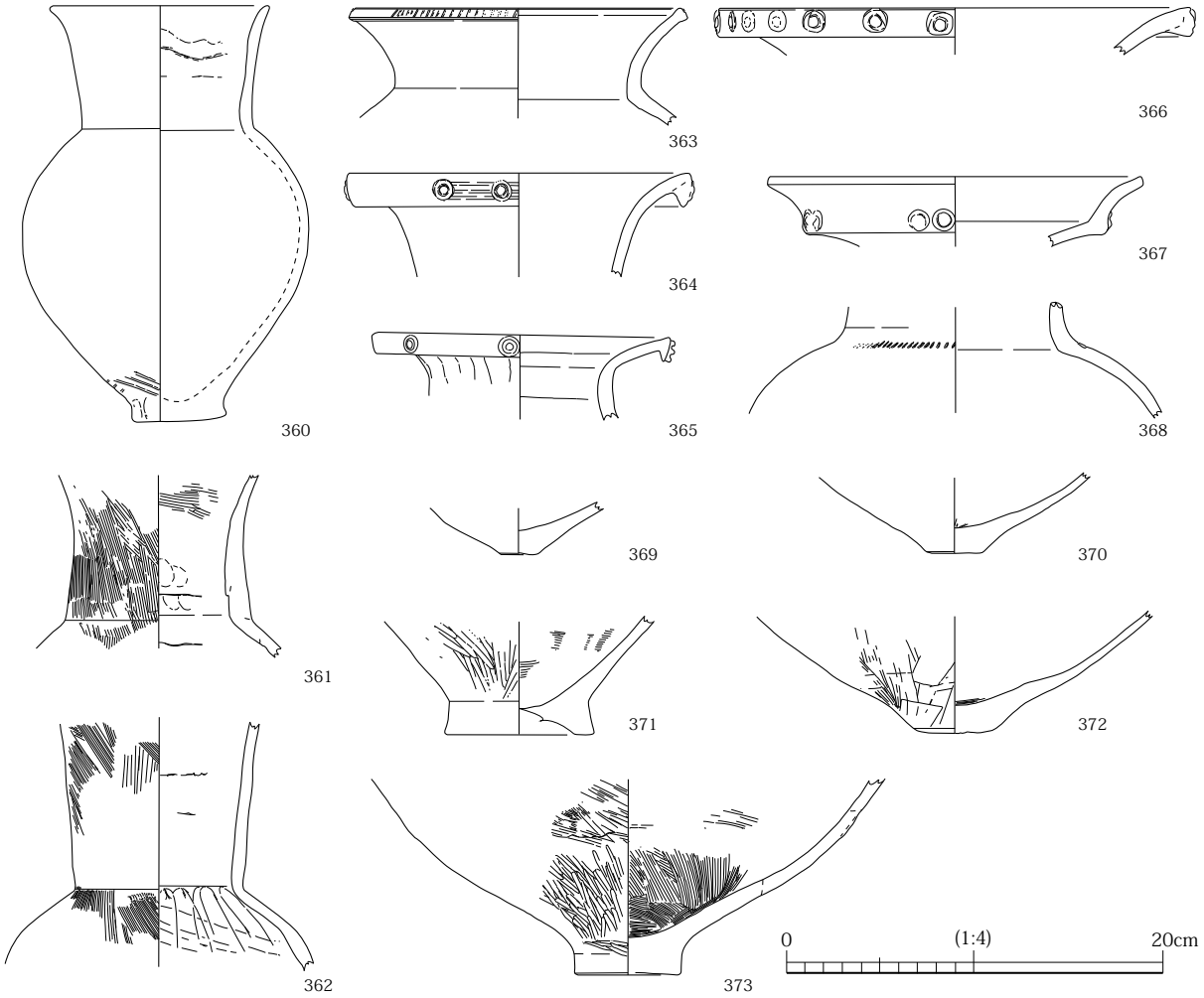


図 65　09017-2 区他包含層出土土器（5）

372 は、底部が外側にやや突出する形状である。373 は、外面にミガキがみとめられる。底部形状は、中央部付近が窪む平底である。

374 ～ 394 は、甕である。374 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。375 は、口縁部を丸くおさめる。376 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。胎土に角閃石を含むかは不明であるが、チョコレート色を呈しており、生駒西麓産の可能性がある。

377 ～ 380･382･383 は、弥生形甕である。377 は、口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。口縁端部は鈍い端面をもつ。体部外面に右上がりのタタキを施す。タタキ後に一部ナデを施すようであるが、不明瞭である。タタキは頸部におよび、口縁部はややいびつである。口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部上半外面にススが付着する。378 は、体部が丸みをもつ形状である。口縁部はまるくおさめる。体部外面に右上がりのタタキの後、下半に縦方向のハケを施す。タタキは頸部におよび、口縁部はややいびつである。口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部下半外面にススが付着する。379 は、口縁端部をややつまみ上げる。体部外面に右上がりのタタキを施す。380 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。体部外面に右上がりのタタキを施す。タタ

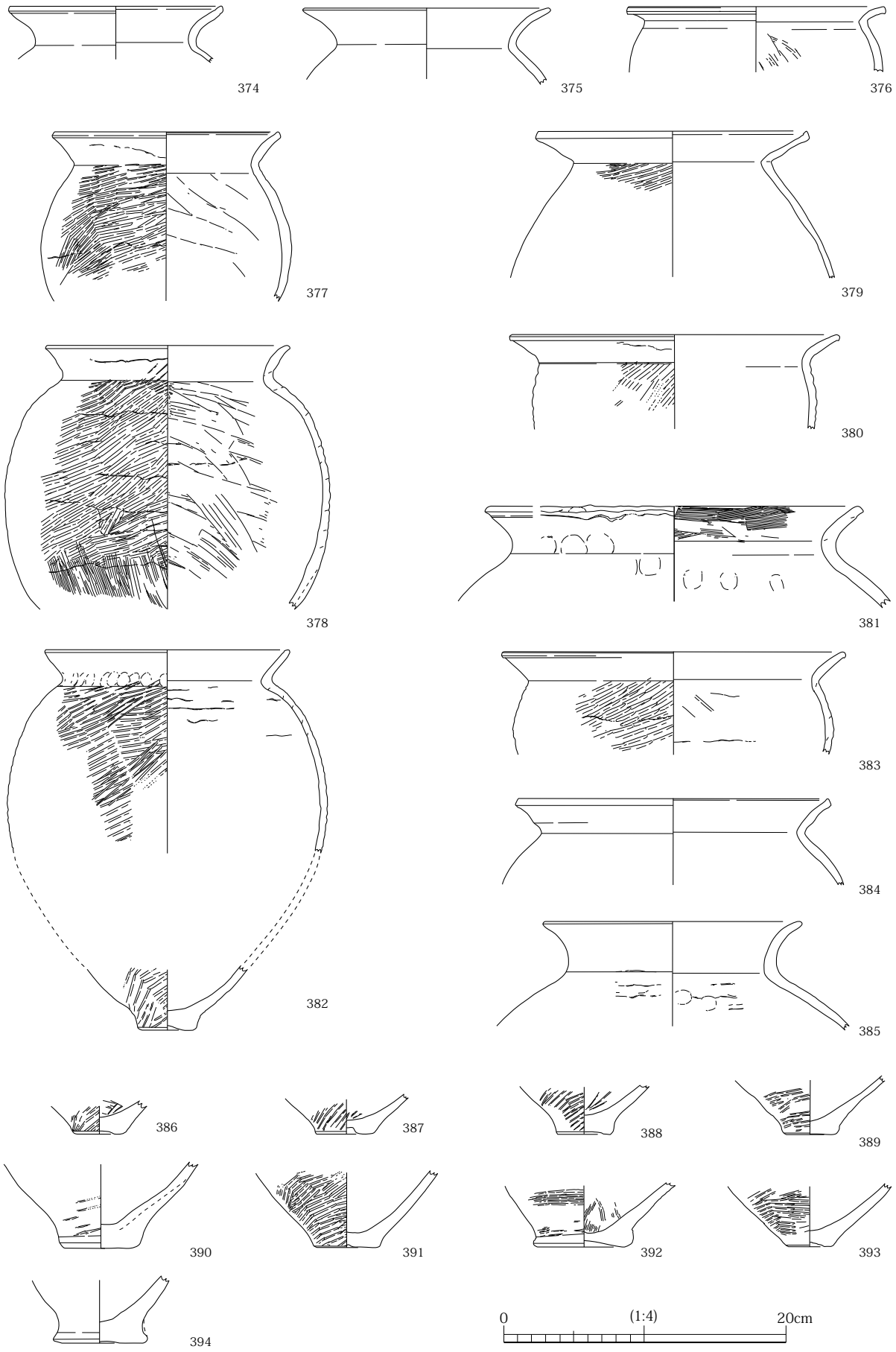


図 66　09017-2 区他包含層出土土器（6）

キは頸部におよび、口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。381 は、口縁部がいびつで、口径は不確定である。口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。口縁端部はユビオサエがみとめられ、鈍い端面をもつ。全体に粗雑な作りである。382 は、体部と底部が直接接合せず、図上復元である。口縁部はまるくおさめる。体部外面に右上がりのタタキを施す。タタキは頸部におよび、口縁部はややいびつである。体部内面にコゲ、体部外面にススが付着する。底部形状は、中央部付近が窪む平底である。383 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。口縁部はややいびつで、口径は不確定である。体部外面に右上がりのタタキを施す。体部上半外面に黒斑がみとめられる。384 は、口縁部外面に鈍い稜線をもつ。385 は、口縁部が外反し、端部はまるくおさめる。

386 ～ 394 は、甕底部である。体部外面に、386 ～ 391 は右上がりの、392・393 は横位のタタキを施す。392 はタタキ後にナデを施す。388･390･391 も、タタキ後にナデを施すようであるが、不明瞭である。393 は外面に黒斑がみとめられる。387・394 は、内面にコゲが付着する。386・389 ～ 392 は、外面にススが付着する。388 は、二次焼成により、外面が赤色に変色する。底部形状は、386 ～ 390・392 ～ 394 は中央部付近が窪む平底、391 は、外面に突出する平底である。

377・379 ～ 393 は、後期～庄内式併行期に所属し、378 は庄内式併行期に位置づけられる。

395 ～ 404 は、高杯である。

395 ～ 398 は有稜高杯である。395 は、口縁部がひずむ。397 は、脚柱部中実で、円形透かしを３方向に施す。

399 は椀形高杯である。口縁端部が摩滅しており、やや上方にのびる可能性もある。

400 は脚柱部中空で、円形透かしが 1 箇所残存するようであるが、不明瞭である。椀形高杯と考えられる。401 は脚柱部中空で、円形透かしが 1 箇所残存するが、方向数は不明である。椀形高杯と考えられる。402 は脚柱部中空で、円形透かしを 4 方向に施す。椀形高杯の可能性がある。403 は脚柱部中空で、円形透かしを３方向に施す。404 は脚柱部中空で、透かしの有無は不明である。

395 は庄内式前半に、396・400 は後期後葉に、397・401・402 は庄内式併行期に、399 は後期～庄内式併行期に、403・404 は後期中葉～後葉に位置づけられる。

405 は、脚部である。外面に右上がりのタタキの後、ミガキを施す。脚柱部中空で、円形透かしが２箇所に残存し、３方向であったと考えられる。椀形高杯の可能性がある。

406 ～ 408 は、小形鉢である。406 は、口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。椀形の体部に平底をもつ。外面に右上がりのタタキを施す。407 は、口縁部と体部が直接接合せず、図上復元で、口径、器高とも不確定である。椀形の体部に平底をもつ。外面に右上がりのタタキを施す。底部は外側にやや突出する。408 は、口縁部が屈曲して斜め上方にのびる。体部内外面にミガキ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。体部外面に黒斑がみとめられる。406・407 は後期に、408 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

409 は、ミニチュア鉢である。口縁部はいびつで、端部がわずかに欠損している可能性もある。

410 は、手焙である。覆部は剥離する。鉢部口縁部に突帯状の痕跡があるが、全周するかは不明である。庄内式併行期に位置づけられる。

411 は、複合口縁状の精製の淡路型器台である。口縁部内面に波状文を施し、外面には沈線、波状文を、口縁部端と受部に刻目文を施す。外面一部に黒斑がみとめられる。庄内式併行期に位置づけられる。

412 ～ 416 は、底部である。412 は、体部外面に横位の、底部付近に右上がりのタタキを施す。外面に黒斑がみとめられる。中央部付近がやや窪む平底である。外面にスス状の痕跡がみとめられることから、甕の可能性がある。413 は、外面に左上がりのタタキを施す。底部に 1 孔をもち、

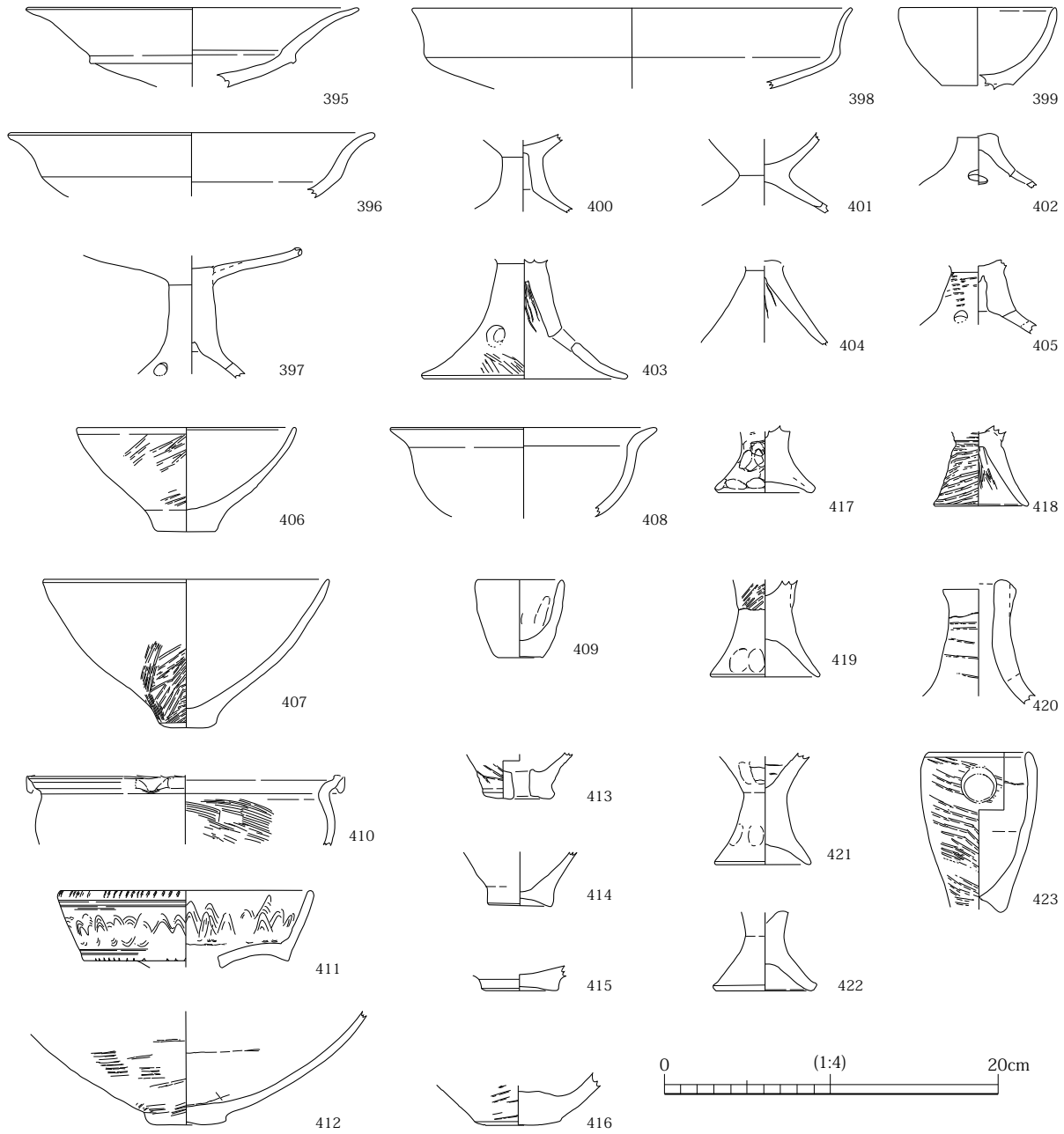


図 67　09017-2 区他包含層出土土器（7）

甕か有孔鉢と考えられる。414 は、外面に不明瞭であるがユビオサエがみとめられ、上げ底状である。鉢の可能性が考えられる。415 は、中央部付近が窪む平底である。416 は、外面に右上がりのタタキの後、一部にナデを施す。底部外面に木の葉文がみとめられる。底部は外側にやや突出する。 412・413・416 は後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

417 ～ 420 は、製塩土器脚台である。417 は、体部外面にタタキ、脚部外面にユビオサエがみとめられる。二次焼成により脚部外面が赤色に変色する。Ⅱａ式である。418 は、脚部外面にタタキを施す。二次焼成により体部内面が赤色に変色する。Ⅰｂ式である。419 は体部外面に右上がりのタタキ、脚部外面にユビオサエがみとめられる。二次焼成により体部内外面が赤色～黒色に変色する。ⅠｂまたはⅡａ式である。420 は、脚部外面に左上がりまたは横位のタタキを施す。二次焼成により脚部全体が橙色に変色する。Ⅰａ式である。

417 は、庄内式併行期に位置づけられる。418・420 は後期後葉～庄内式前半に、419 は後期後葉～庄内式併行期に位置づけられる。

421･422 は脚台である。421 は外面にユビオサエがみとめられる。製塩土器の可能性があるが、二次焼成の痕跡はみとめられない。422 は台付鉢の可能性がある。

423 は蛸壺である。口縁部と体部が直接接合せず、図上復元である。口縁部付近に 1 孔をもつ。外面に左上がりのタタキを施す。底部は欠損するが、平底と考えられる。後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

424 ～ 459 は、09017-2 区の第ⅥＣ層出土である。

424 は、土師器高杯である。布留式期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

425 ～ 459 は、弥生土器である。

425・426 は、長頸壺である。425 は、外面にミガキを施す。426 は、外面にハケを施す。425・426 は後期に位置づけられる。

427・428 は、広口壺である。427 は、口縁部がいびつである。427・428 は後期～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

429 ～ 432 は、壺底部である。429 は、外面にミガキを施す。431 は底部外面に木の葉文がみとめられるが、炭化物が付着し不明瞭である。432 は、体部と底部が直接接合せず、図上復元である。外面に黒斑がみとめられる。429 は平底、430・431 は外側にやや突出する平底、432 は底部中央部付近が窪む平底である。

433 は、外面にミガキを施す。外面に黒斑がみとめられる。平底である。壺の可能性がある。

434 は、ミニチュア壺である。頸部外面に棒状工具による刺突状の痕跡がみとめられる。外面にミガキを施す。

435 ～ 444 は、甕である。435 ～ 437・439・441・442 は、弥生形甕である。435 は、口縁部がややひずむ。口縁端部はまるくおさめる。体部外面は、上部に右上がりの、中央部に横位のタタキを施す。タタキは頸部におよぶ。436 は、口縁部に鈍い端面をもつ。体部外面に右上がりのタ

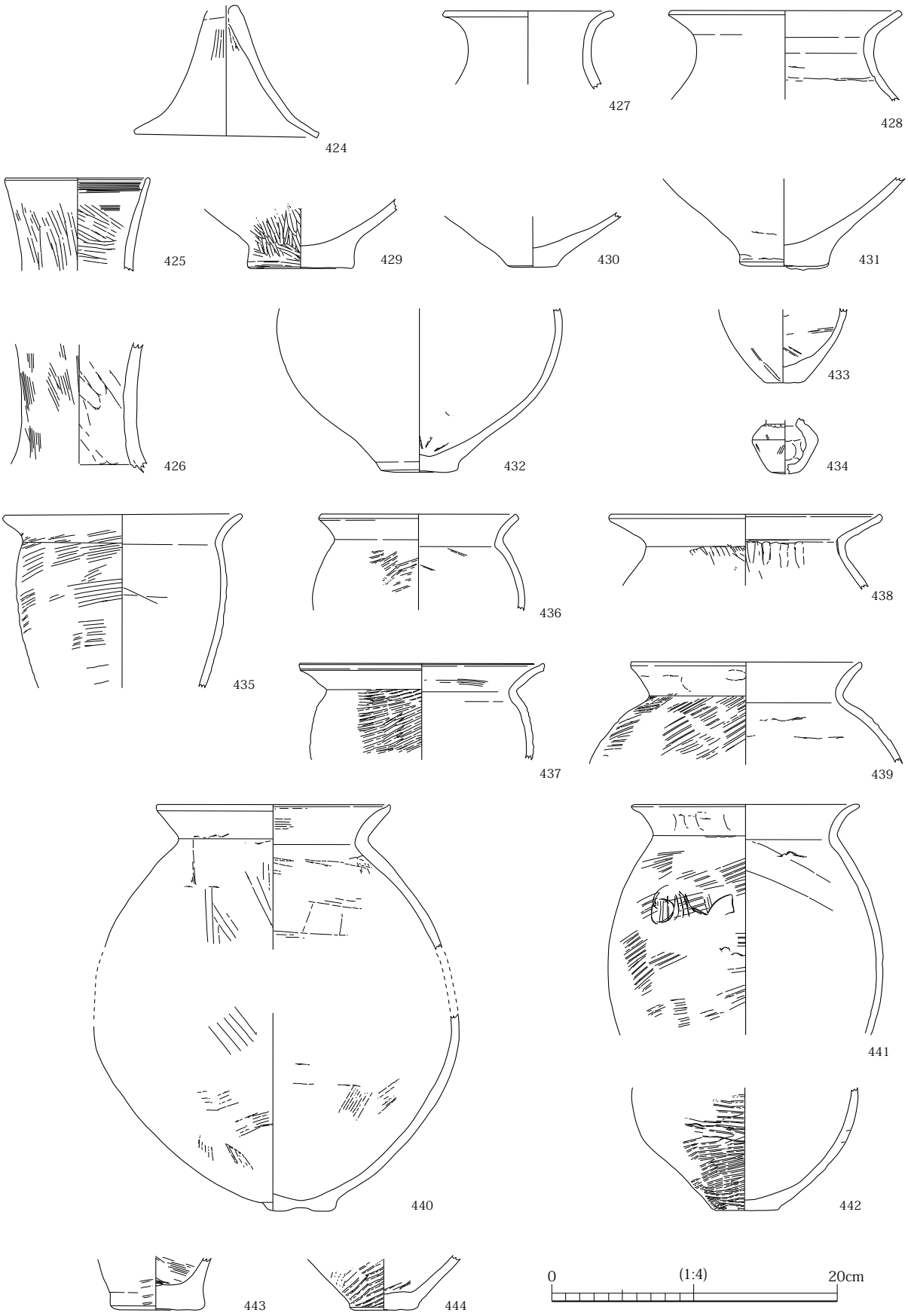


図 68　09017-2 区他包含層出土土器（8）

タキを施す。437 は、口縁端部をわずかに上方に拡張する。体部外面に右上がりのタタキを施す。438 は、口縁端部を上方に拡張する。頸部付近外面に工具痕がみとめられ、ハケの可能性がある。439 は、口縁端部をややつまみ上げる。体部外面に右上がりのタタキを施す。タタキは頸部におよぶ。口縁部はややいびつで、口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。440 は、体部上半と下半が直接接合せず、図上復元である。体部はまるみを帯びる形状である。口縁端部はややつまみ上げる。口縁部はひずむ。体部外面にタタキの後、ミガキを施す。体部下半外面にススが付着する。底部は中央部付近が窪む平底である。441 は、口縁端部をまるくおさめる。体部外面に右上がりのタタキを施す。口縁部形状はややいびつで、口縁部途中に粘土接合痕がみとめられる。体部上部外面に線刻がみとめられる。442 は、体部と底部が直接接合せず、図上復元である。体部外面に右上がりのタタキを施す。体部外面にススが付着し、二次焼成により赤色に変色する。底部は中央部付近が窪む平底である。443 は、外面に右上がりのタタキを施す。内面にコゲが付着する。底部は中央部付近が窪む平底である。444 は、外面に右上がりのタタキを施す。内面にコゲが、外面にススが付着する。底部は平底である。435 は後期に、438・440 は庄内式併行期に、436・437・439・441 ～ 444 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

445 ～ 452 は、高杯である。

445 ～ 448 は、有稜高杯である。445 は、杯部内外面にミガキを施す。脚柱部中空で、円形透

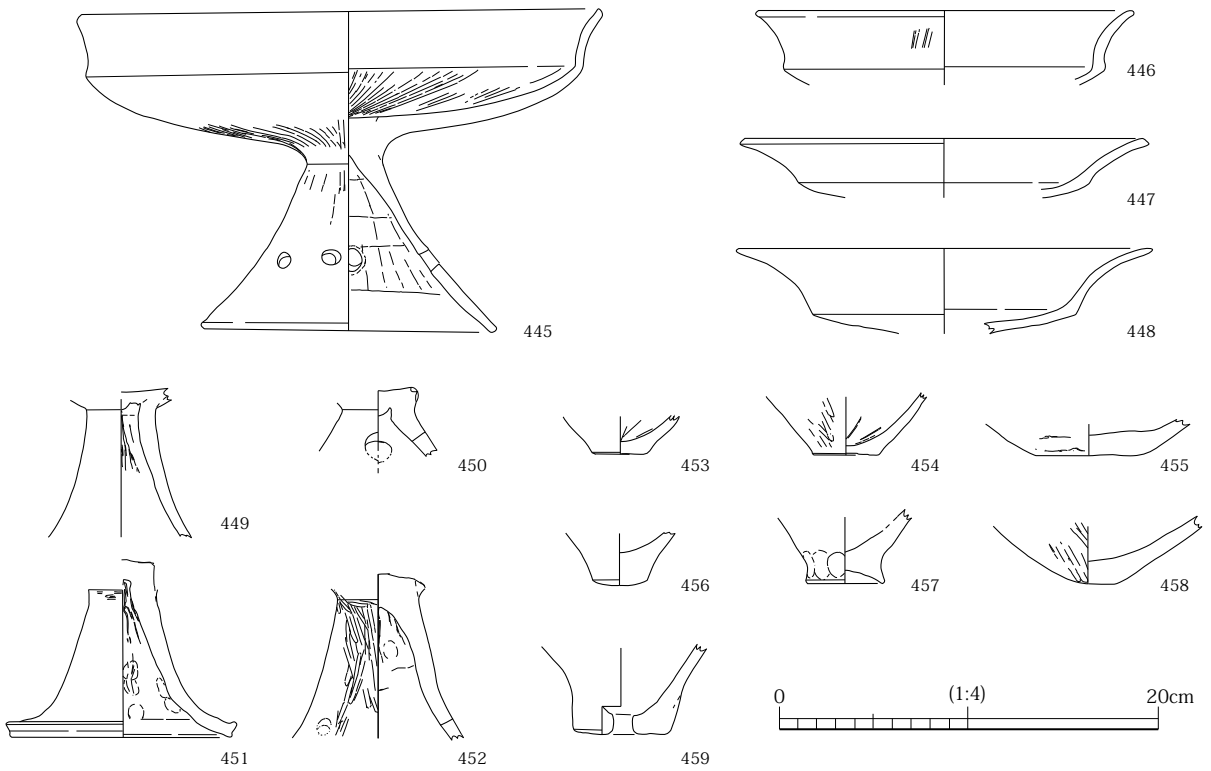


図 69　09017-2 区他包含層出土土器（9）

かしを２孔１組で３組施す。円盤充填である。口縁端部、裾端部は端面をもつ。446 は、不明瞭であるが、杯部内外面にミガキを施す。447 は口縁部が注ぎ口状にひずんでおり、口径は不確定である。

449 は脚柱部中空で、透かしの痕跡状のものがみとめられるが、不明瞭であるため、透かしはないものとして図化した。充填法である。450 は脚柱部中空で、円形透かしが２箇所に残存し、２方向または４方向と考えられる。円盤充填である。451 は脚柱部中空で、透かしは施さない。452 は脚柱部中空で、円形透かしが２箇所に残存し、３方向と考えられる。

445 は後期前葉頃に、451・452 は後期中葉頃に、449・450 は後期中葉～後葉に、447 は後期後葉～庄内式前半に、448 は庄内式前半に位置づけられる。

453 ～ 459 は、底部である。453 は、外面にミガキを施すようであるが、不明瞭である。壺の可能性がある。454 は、外面にミガキを施す。壺または鉢の可能性がある。455 は壺の可能性がある。456 は外面に黒斑がみとめられる。457 は外面にユビオサエがみとめられる。外面にスス状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。甕か鉢と考えられる。458 は、外面にミガキを施すようであるが、不明瞭である。壺の可能性がある。459 は底部に１孔をもつ。有孔鉢か甕と考えられる。底部形状は、453・454 は中央部付近がやや窪む平底、455 は平底、456 は外側に突出する平底、457 は上げ底状、458 は径の小さな平底である。

460 ～ 480 は、10001-2・10078-3・11001-7 区の第Ⅵ層出土である。

460 ～ 462 は、瓦器椀である。460・462 は、内面にミガキがみとめられる。460 は 12 世紀後葉に、461 は 13 世紀前葉に、462 は 13 世紀後葉に位置づけられる。

463・464 は須恵器杯である。464 はひずみにより口径は不確定である。463 は奈良時代に、464 は７世紀第一四半期頃に位置づけられる。

465 ～ 468 は、須恵器杯蓋である。466 ～ 468 は TK10 に位置づけられる。469 は、須恵器杯身である。口縁端部が欠損するが、TK209 頃と考えられる。

470 は、須恵器器台である。外面に自然釉がみとめられる。外面に２段に波状文を施す。

471 ～ 480 は、弥生土器である。471 は、口縁部が垂下する。472 は、垂下する口縁部外面に、沈線と竹管文、線刻文を施す。生駒西麓産である。壺か器台と考えられる。473 は、外面にミガキを施す。中央部付近がやや窪む平底である。壺と考えられる。

474 ～ 476 は、甕である。474 は口縁部がいびつである。体部内面には粘土接合痕が明瞭にみとめられる。胎土は非常に粗い。475 は、外面に右上がりのタタキを施す。底部は平底である。476 は、外面に右上がりのタタキを施す。中央部付近が窪む平底である。474 ～ 476 は、後期後半～庄内式併行期に所属するが、詳細な時期比定は困難である。

477 ～ 480 は、底部である。477 はミニチュア土器の可能性もある。平底である。478 は、外側に突出する平底である。479 は平底である。壺の可能性が考えられる。480 は外面に右上がりのタタキを施す。底部は中央部付近が窪む平底である。甕の可能性が考えられる。

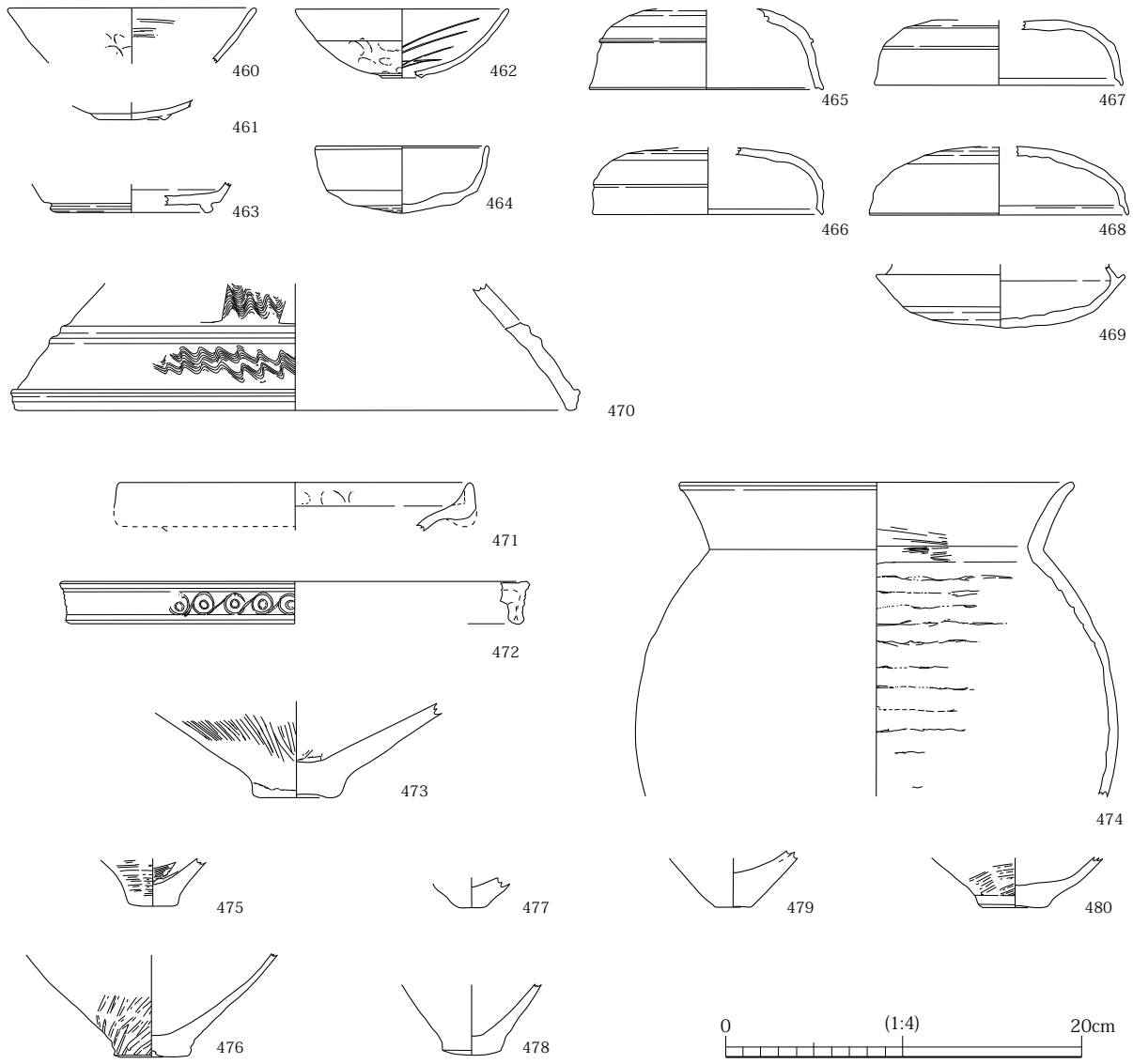


図 70　09017-2 区他包含層出土土器（10）

481 ～ 486 は、11001-6 区の第Ⅵ層出土である。

481 は、須恵器杯である。奈良時代に位置づけられる。482 は、須恵器杯身である。TK10 頃に位置づけられる。483・484 は、須恵器高杯である。483 は、長方形透かしを 2 方向に施す。TK209 頃に位置づけられる。484 は透かしを施さない。485・486 は須恵器壺である。486 は外面に沈線と波状文を施す。肩部外面に自然釉がみとめられる。

487 ～ 515 は、09049-2・10078-2 区の第Ⅵ層出土である。

487 は、須恵器鉢である。口縁部内外面に自然釉がみとめられる。488 は須恵器杯身である。489 は、須恵器壺である。肩部外面に自然釉がみとめられる。

490 は、土師器脚台である。台付土器または器台と考えられる。庄内式併行期～布留式期に位置づけられる。

491 ～ 515 は、弥生土器である。

491・492 は、高杯である。491 は脚柱部中空で、円形透かしを３方向に施す。脚部外面にミガキを施す。492 は脚柱部中実で、円形透かしが２箇所残存し、３方向に施していたものと考えられる。椀形高杯と考えられる。491 は後期後葉～庄内式併行期に、492 は庄内式併行期に位置づけられる。

493 は製塩土器である。体部外面に右上がりのタタキを施す。脚部内面は二次焼成により赤色に変色する。後期後葉～庄内式併行期に位置づけられる。

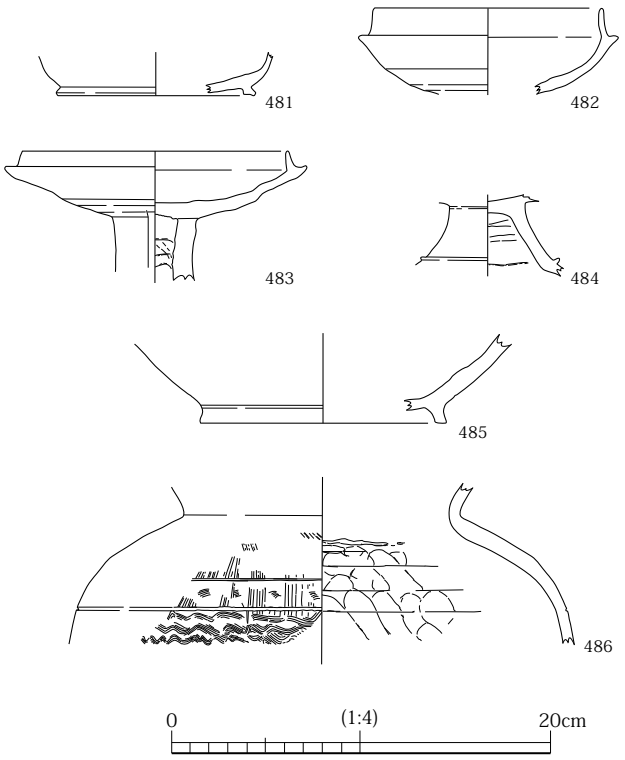


図 71　09017-2 区他包含層出土土器（11）

494 ～ 496 は広口壺である。494 は口縁部が垂下し、外面に竹管円形浮文を施す。頸部から体部の外面にミガキを施す。底部は外側にやや突出する。495 は、口縁部と頸部が直接接合せず、図上復元である。口縁部は単純に外反する。496 は、口縁部は単純に外反する。頸部外面にミガキを施す。494 は後期に、495・496 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

497 は口縁端部にタタキによる刻目状痕跡がみとめられる。淡路型甕の可能性が考えられる。

498 ～ 508 は甕である。498・499 は弥生形甕である。498 は、口縁部外面にユビオサエがみとめられ、ヨコナデは施さない。体部外面には、２条／ cm と太めの右上がりのタタキを施す。口縁部はいびつで、粘土接合痕がみとめられる。体部内面の調整は不明瞭であるが、薄手であることから、ケズリを施した可能性がある。底部は欠損するが、尖底に近い形状になると推定できる。体部下半の内面にコゲ、外面にススが付着する。499 は、口縁端部に鈍い端面をもつ。口縁部内外面にハケ状の痕跡がみとめられる。体部外面に右上がりのタタキを施す。体部下半外面にススが付着する。500 は、口縁端部を上方に拡張する。庄内式甕で、生駒西麓産である。501 は、口縁部がやや内湾し、端部を上方につまみ上げる。体部外面は、タタキの後ハケを施す。体部外面にススが付着する。

502 ～ 508 は、甕底部である。502 ～ 506 は、体部外面に右上がりのタタキを施す。507 は不明瞭であるが体部外面に右上がりのタタキを施すようである。508 は、体部外面に横位のタタキを施す。505 は底部外面に木の葉文がみとめられる。503 ～ 505 は、外面にススが付着する。507 は、二次焼成により赤色に変色する。底部形状は、502・506 は平底、503・505・507・508 は中

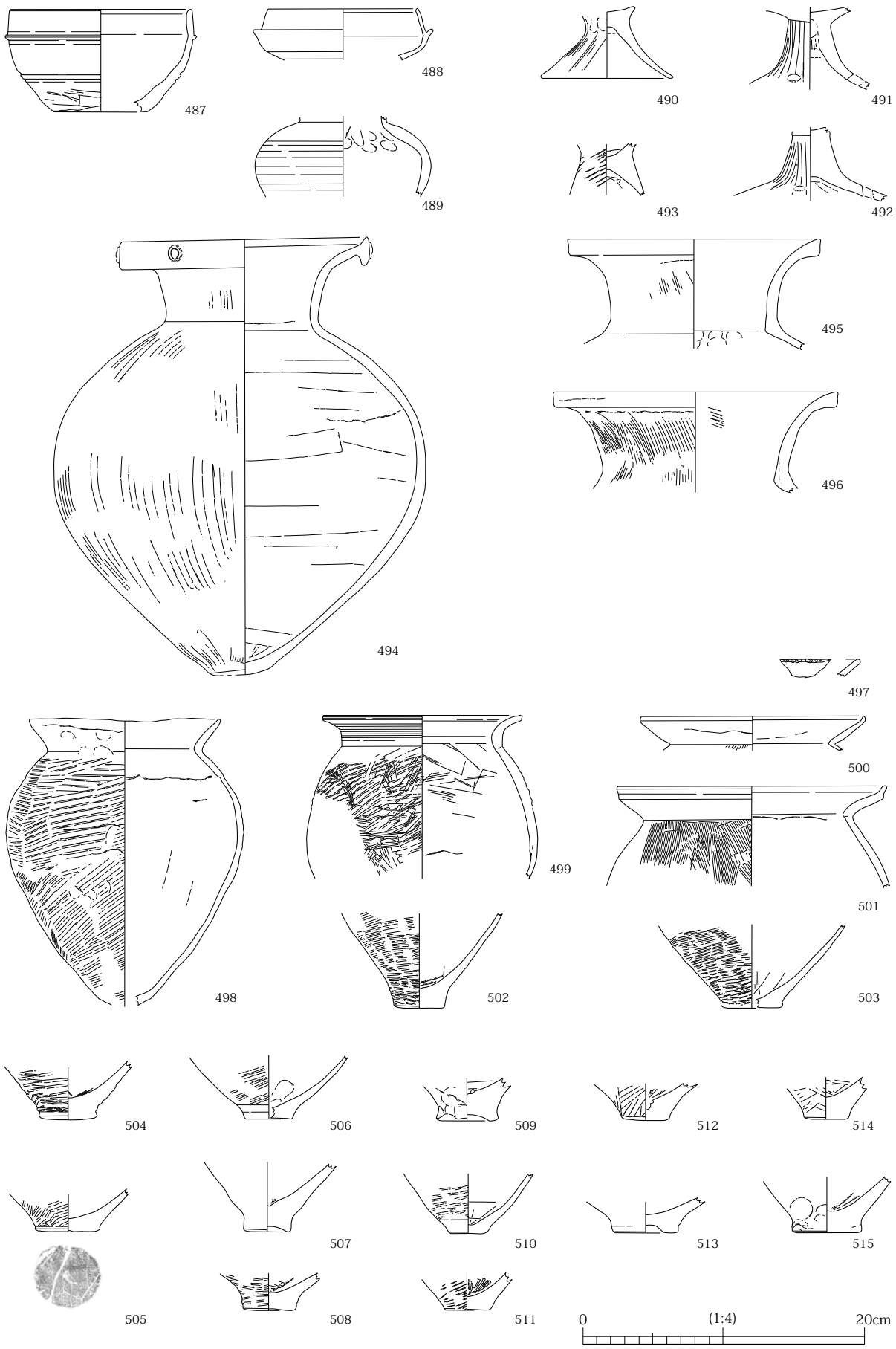


図 72　09017-2 区他包含層出土土器（12）

央部付近が窪む平底、504 は外側に突出する平底である。498・500 は庄内式併行期に、499・501 は後期に、502 ～ 508 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

509 ～ 515 は、底部である。509 は、外面にユビオサエがみとめられ、上げ底状になる。鉢と考えられる。510 ～ 512 は、体部外面に右上がりのタタキを施す。513 は、不明瞭であるが体部外面に左上がりのタタキを施すようである。515 は、体部外面にユビオサエがみとめられる。511 は、外面にスス状の痕跡がみとめられ、甕の可能性がある。底部形状は、510・511・514 は平底、513・515 は中央部付近が窪む平底、512 は外側に突出する平底である。510・512 ～ 514 は甕か鉢と考えられる。510 ～ 513 は後期～庄内式併行期に位置づけられる。

以上のように、基本層序第Ⅵ層からは、弥生時代から中世の幅広い時期の土器が出土している。基本層序第Ⅵ層の下で検出した遺構からは弥生時代から古墳時代の土器が出土しており、少なくとも古墳時代前期に下る遺構が一部には存在していたと考えられる。しかし、弥生時代の土器のみが出土する遺構もあり、また、遺物を出土しない遺構が大半であることから、第Ⅵ層の形成時期は、弥生時代に遡る可能性が考えられる。調査区内で出土した弥生土器の大半が後期～庄内式併行期に所属することから、遺構の時期は後期以降であると推定できる。したがって、第Ⅵ層形成時期は、弥生時代後期から庄内式併行期を上限とすると考えられる。また、中世の遺物が少量出土しているが、上面で中世の遺構を検出していることから、耕作等により混入した可能性も否定はできない。奈良時代の遺物は一定量出土することから、第Ⅵ層の形成時期は、弥生時代後期から奈良時代を中心とすると推定できる。なお、調査区により、弥生土器の多く出土する調査区（09017-2･09049-1 区周辺）と､それほど弥生土器の出土量が顕著でない地区とがみとめられるが、後期～庄内式併行期のものが大半である点は共通している。奈良時代の土器も、調査区のほぼ全域で出土しているが、11001-6 区周辺では全体の出土量に比較すると奈良時代のものが多い傾向があり、中世遺構検出面の流路出土遺物にも同じ傾向がみとめられる。したがって、こうした包含層出土遺物は、奈良時代の土地利用のあり方を反映している可能性が考えられる。

基本層序第Ⅶ・Ⅷ層出土土器　基本層序第Ⅶ・Ⅷ層からは、少量の弥生土器が出土したが、いずれも小片で、図化できない。上層に基本層序第Ⅵ層が堆積すること、第Ⅸ層の形成時期が周辺の調査成果より弥生時代後期以前と考えられることから、後期～庄内式併行期頃に形成されたものと推定できる。

第２項　土製品（図 73・74）

土製品は６点が出土した。

516 ～ 519 は、土錘である。516・517 は、小形で２孔をもつ。516 は基本層序第ⅥＢ層から出土した。一端の一部を欠損する。一部に黒斑がみとめられる。518 は、中世遺構検出面の流路 001 から出土した。一端を欠損するが、端部周辺まで残存するものと考えられる。518・519 は、大形で長軸方向に孔をもつ。518 は基本層序第Ⅴ層から出土した。完形である。519 は近世遺構

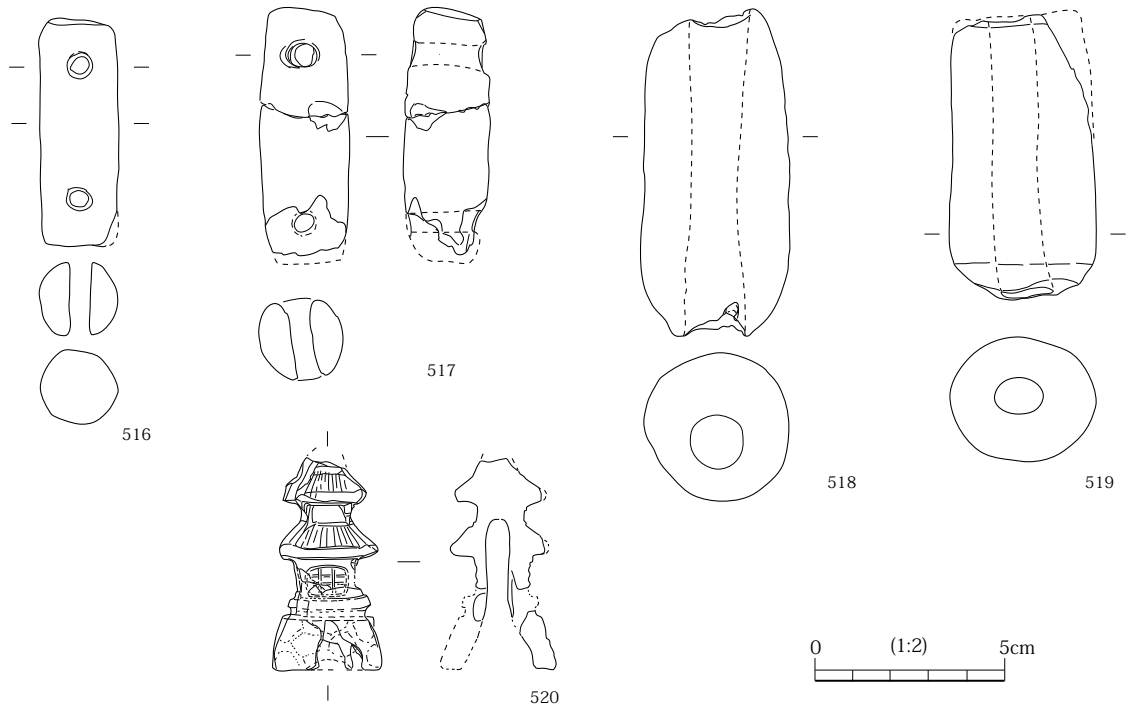


図 73　09017-2 区他出土土製品（１）

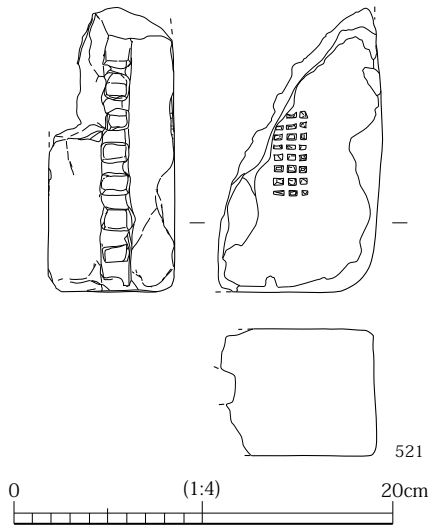


図 74　09017-2 区他出土土製品（２）

検出面の土坑 047 から出土した。片面が約半分程度剥離する。516 ～ 519 は、出土状況からも詳細な時期比定は困難である。

520 は、灯篭形の箱庭道具である。基本層序第Ⅳ層から出土した。

521 は、煉瓦である。基本層序第Ⅳ層から出土した。欠損し、全長、幅とも不明である。上面に、1 辺 0.5cm 前後の方形の窪みを３列×８列施す。また、側面には、１辺 1.3cm × 0.7 ～ 1.6cm の窪みが 7 以上みとめられる。側面は欠損し、窪みの底部のみが残存している。

第３項　瓦（図 75 ～ 77、巻頭図版２・３、図版 32 ～ 34）

はじめに、各地区の出土点数、重量を種別ごとに示す。

09017-2 区から出土した瓦は、文字瓦（平瓦）が 1 点で 280g、軒丸瓦が 1 点で 265g、丸瓦が 23 点で計 2817g、平瓦が 145 点で計 19323g、計 170 点で 22685g である。

09049-1 区から出土した瓦は、丸瓦が 8 点で計 587g、平瓦が 65 点で計 8751g、計 73 点で 9338g である。

10001-2 区から出土した瓦は、軒丸瓦が 4 点で計 895g、軒平瓦が 2 点で計 591g、道具瓦の可能性のあるものが 2 点で計 502g、丸瓦が 59 点で計 6063g、平瓦が 170 点で計 17051g、計 237 点で 25102g である。

10078-2 区から出土した瓦は、軒丸瓦が 1 点で 284g、丸瓦が 14 点で計 897g、平瓦が 46 点で計 7900g、計 61 点で 9081g である。

10078-3 区から出土した瓦は、軒丸瓦が 1 点で 240g、軒平瓦が 2 点で計 580g、丸瓦が 20 点で計 1892g、平瓦が 37 点で計 4912g、計 60 点で 7624g である。

11001-6 区から出土した瓦は、軒平瓦が 1 点で 671g、丸瓦が 21 点で計 2842g、平瓦が 137 点で計 28798g、計 159 点で 32311g である。

11001-7 区からは瓦は出土していない。

各地区とも小片が多く、また、大半は弥生時代から中近世の遺物を含む包含層や撹乱から出土しているため、詳細な時期比定は困難であるが、古代～中世のものが多く出土している。ここでは、特徴的なものや残存度の高いものを中心に報告する。

522 は文字瓦である。基本層序第Ⅵ層から出土した。1 側面が残存する。凹面に布目が残り、縦糸 59 本／3 cm、横糸 41 本／3 cm と細かい布目である。凹面に、2.3cm × 0.7cm の横方向の窪みがみとめられ、窪み内にも布目が残る。枠板圧痕はみとめられない。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は 8 粒／3 cm、縄本数は 13 本／3 cm である。縄叩き後一部にナデを施すようであるが、不明瞭である。側面はケズリを施し、凹面側に面取りを施す。最大厚は 2.6cm と厚い。焼成は良で須恵質である。文字は、焼成前に凹面に刻まれる。下部は欠損するが、「宮」と考えられる。「宮」一文字が刻まれた文字瓦の類例はみられないことから、下に文字が続く可能性がある。枠板圧痕はみとめられないものの、側面の傾きからは一枚作りとは考え難いことから桶巻作りの可能性が高い。和泉地域で桶巻作りがみられるのは 8 世紀前半以前であることから、8 世紀前半以前のものと考えられる。後述のように、09017-1 区からは、粘土板桶巻作りと考えられる 7 世紀末～8 世紀前半の文字瓦が 4 点出土しており、人名と考えられるものが少なくとも 3 点あることから、この文字瓦についても人名の可能性が考えられる。堺市大野寺跡で「宮道」と刻まれた 8 世紀の文字瓦が見つかっており「宮」ではじまる人名の存在が確認できることからも（堺市教育委員会 2004：文字瓦一覧表 315）、この瓦が人名の一部である可能性は高い。

523 ～ 525 は、軒丸瓦である。

523 は、撹乱から出土した。瓦当径は推定 16cm 前後である。巴文で、圏線、珠文をめぐらす。焼成はやや不良でいぶし状になる。鎌倉時代前期頃に位置づけられる。524 は、撹乱から出土した。瓦当径は推定 16cm 前後である。巴文で、圏線、珠文をめぐらす。焼成はやや良である。鎌倉時代頃に位置づけられる。525 は、撹乱から出土した。瓦当径は 14cm 以上、内区径は推定 12cm 前後である。複弁五葉蓮華文である。范のズレがみとめられる。焼成はやや良である。岡寺式で、8 世紀前半に位置づけられる。和泉寺跡既存資料に類例がみとめられる。

526・527は、軒平瓦である。526は、基本層序第ⅥB層から出土した。瓦当縦幅は4.6cmである。唐草文である。凹面は、左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。瓦当付近に横方向のケズリを施す。凸面はナデを施し、一部にハケ状痕跡がみとめられる。焼成はやや良で、一部は須恵質である。平安時代後期に位置づけられる。527は、基本層序第ⅥB層から出土した。1側面が残存する。唐草文である。凹凸両面が剥離するが、凹面側剥離面には左上を支点とする糸切り痕が、凸面側剥離面には右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。凹面側剥離面の糸切り痕はやや不明瞭で、接合された平瓦部からの圧痕である可能性も考えられる。凹面側剥離面に布目が残り、縦糸推定18本／3cm、横糸推定20本／3cmである。凹面側剥離面に幅3.0cm前後の縦方向の窪みがみとめられる。凸面側剥離面は、一部に縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。7世紀～8世紀頃のものと考えられる。和泉寺跡既存資料に類例は確認できていない。

528・529は、道具瓦の可能性があるものである。

528は、撹乱から出土した。1端面と1側面が残存する。湾曲して、布目のある面が外側を向くが、凸面布目平瓦の特徴は備えていないことから、平瓦が焼成の際にひずんだものか、意図的に湾曲させたものと考えられる。ここでは凸面布目平瓦と区別するため、布目の残存する面を便宜的に凹面と呼称する。凹面は、糸切り痕がみとめられる。布目が残存するが、不明瞭である。凸面は、糸切り痕がみとめられるが、不明瞭である。縄叩きを施し、縄目粒数は5粒／3cm、縄本数は推定14本／3cmである。縄叩き後に調整は施さない。側面はナデを施し、緩く湾曲する。面取りはない。焼成はやや良で、一部須恵質である。所属時期は不明であるが、中世のものである可能性が考えられる。

529は、中世遺構検出面の落ち込み10001-002から出土した。残存する面はなく、形状、部位は不明である。図上面に幅3.0cm前後の縦方向の窪みがみとめられる。厚みがあることから、鴟尾または磚の可能性が考えられる。鴟尾であるとすると、他の調査区で出土したものと胎土が大きく異なる。磚であるとすると、窪みは粘土を押し込んだ痕跡の可能性がある。焼成はやや不良である。所属時期は不明であるが、胎土の特徴より中世のものである可能性が考えられる。

530～542は、平瓦で、凸面布目平瓦である。

530は、基本層序第Ⅴ層から出土した。1端面が残存する。最大厚2.4cmである。凹面は、斜め方向の調整を施し、ケズリの可能性がある。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅2.0cm前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。端面付近一部に縄目状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。端面はケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

531は、基本層序第Ⅲ層以下から出土した。1側面が残存する。最大厚2.1cmである。凹面はナデを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、枠板圧痕と考えられる縦方向の凸凹が不明瞭であるがみとめられる。縦方向のケズリを施す。側面際に縦方向の窪みがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。側面はケズリを施す。凹面側縁に面取りを施すようであるが、不明瞭で

図 75　09017-2 区他出土瓦（1）

ある。焼成は不良である。

532 は、撹乱から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.3cm である。凹面はナデを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。幅 0.3cm 前後の縦方向窪みがみとめられ、枠板の綴じ紐痕の可能性が考えられる。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成はやや良で、一部は須恵質である。

533 は、基本層序第Ⅲ・Ⅴ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.3cm である。凹面は、不定方向のナデを施した後、側縁付近に縦方向のケズリを施す。また、側縁付近が段状になる。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凸面側縁に面取りを施す。焼成はやや良で、一部は須恵質である。

534 は、基本層序第ⅥB 層から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.5cm である。凹面は、横または斜め方向のナデを施した後、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、枠板圧痕と考えられる縦方向の凸凹が不明瞭であるがみとめられる。縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、凸面側縁に面取りを施す。一部に布目状の痕跡がみとめられる。焼成はやや良で、一部は須恵質である。

535 は、基本層序第Ⅴ層から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.3cm である。凹面は、横方向のナデを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良でいぶし状になる。

536 は、基本層序第ⅥB 層から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.5cm である。凹面は、横方向のナデを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、枠板圧痕と考えられる縦方向の凸凹が不明瞭であるがみとめられる。縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成は不良であるが、側面の一部はやや良である。

537 は、撹乱から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.0cm である。凹面は、横または斜め方向のナデを施す。凸面は布目が残り、縦糸 25 本／3 cm、横糸 33 本／3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

538 は、中世遺構検出面の流路 001 から出土した。1 側面が残存する。最大厚 2.5cm である。凹面は、横方向の調整を施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、枠板圧痕と考えられる縦方向の凸凹が不明瞭であるがみとめられる。摩滅により調整の有無は不明である。縦方向の段状痕跡があり、布綴じ合せ目の可能性がある。側面の調整は不明であるが、凸面側縁に面取りを施す。焼成は不良である。

539 は、基本層序第ⅥB 層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.3cm である。凹面は、ナデ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。凸面は布目が残り、縦糸 26 本／3

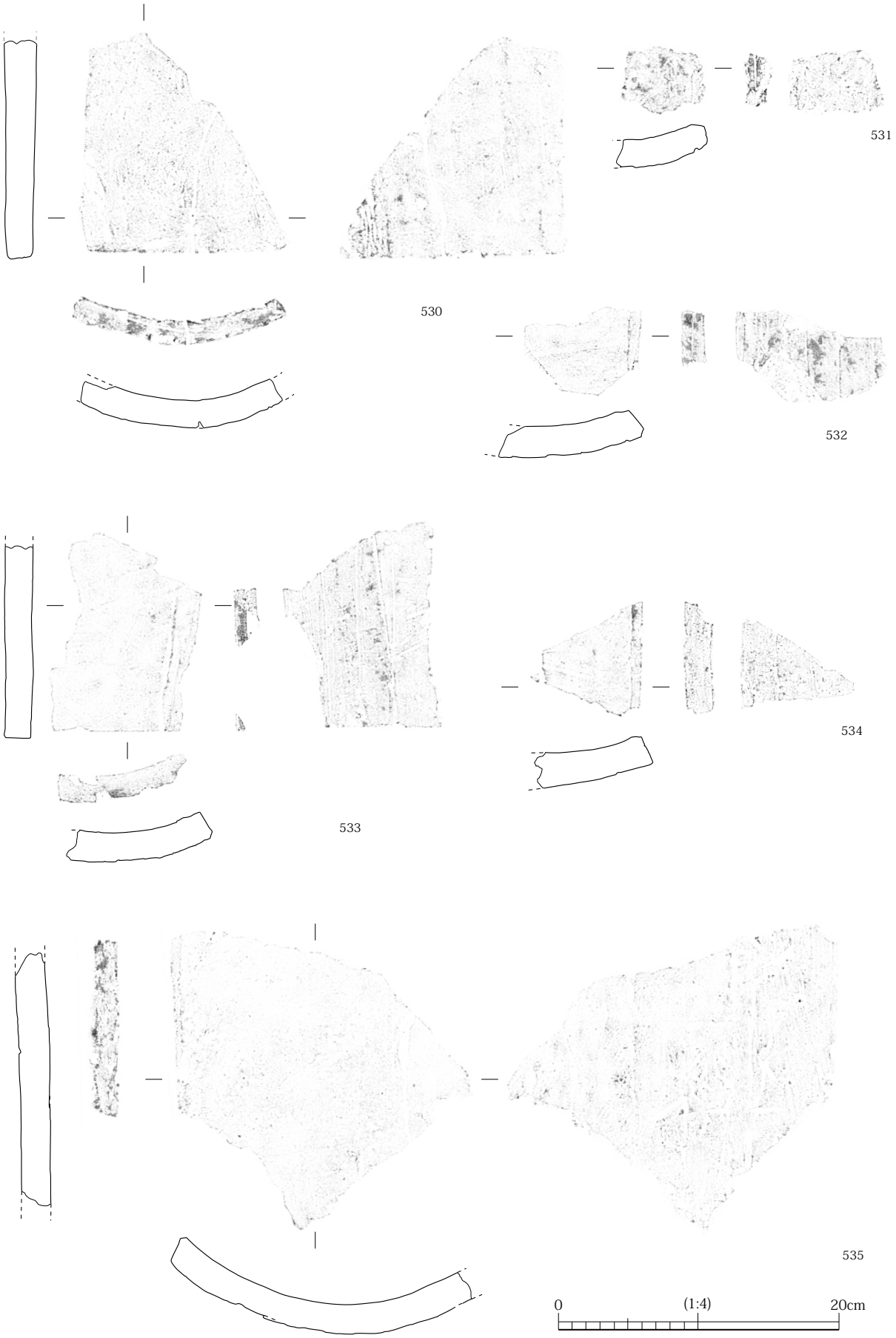


図 76　09017-2 区他出土瓦（2）

cm、横糸 32 本／３cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕が狭端面際までみとめられる。縦方向のケズリを施す。狭端面は平坦になるが調整不明である。面取りはない。側面はケズリを施し、凸面側に面取りを施すようであるが、不明瞭である。焼成は不良である。

540 は、基本層序第ⅥＢ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.1cm である。凹面は、ナデ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。縦方向の段状痕跡がみとめられる。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

541 は、基本層序第ⅥＢ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.1cm である。凹面は、横または斜め方向のナデを施す。凸面は布目が残り、縦糸推定 48 本／３cm、横糸 42 本／３cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕が狭端面際までみとめられる。一部に縦方向の調整を施す。長さ 0.5 ～ 1.0cm、幅 0.2cm 前後の窪みが横方向に並び、枠板の綴じ紐痕の可能性が考えられる。狭端面はケズリを施し、面取りはない。狭端面ケズリの際の粘土が一部凸面側にかぶさる。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。面取りの際の粘土が一部側面にかぶさる。焼成は良で、須恵質である。

542 は、基本層序第ⅥＢ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 2.1cm である。凹面は、斜め方向のナデを施す。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縦方向のケズリ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。縦方向の段状痕跡があり、布綴じ合せ目の可能性がある。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

ここで、09017-2 区他出土瓦の概要をまとめておく。まず、特に図化するべきと判断したものがない丸瓦については、小片が多く、形状の不明なものが大半であるが、行基式、玉縁式の両者が出土している。焼成は、大半が不良のものであるが、須恵質または半須恵質のものもある。なお、中世の遺物も含むが奈良時代以前の遺物が主体である基本層序第Ⅵ層出土のものは、10 点、計 1629g が出土しており、行基式の可能性の高いものが 1 点含まれているが、小片が多く、時期的なまとまりを検討することは困難である。

平瓦については、凹面に枠板圧痕が確認できるものが一定量みとめられる。摩滅の著しいものが多く、詳細な調整の観察は困難であったが、11001-4・09017-1 区他出土のものに確実に粘土板桶巻作りであると推定できるものが一定量あることから、09017-2 区他出土瓦の中にも粘土板桶巻作りのものが含まれている可能性は十分に考えられる。また、凸面布目平瓦が計 45 点出土している。凸面布目平瓦は、凹面にナデを施す、凸面の枠板圧痕による凹凸が比較的顕著である、凸面に縦方向のケズリを施す、最大厚が他の平瓦と比べて厚いという、先述の 11001-4 区出土のものと共通する特徴をもつ。09017-2 区他出土平瓦の全体量からみると、割合としては多くはないが、後述するように、09017-1 区他出土瓦と比較すると多量である。特に、09017-2 区他

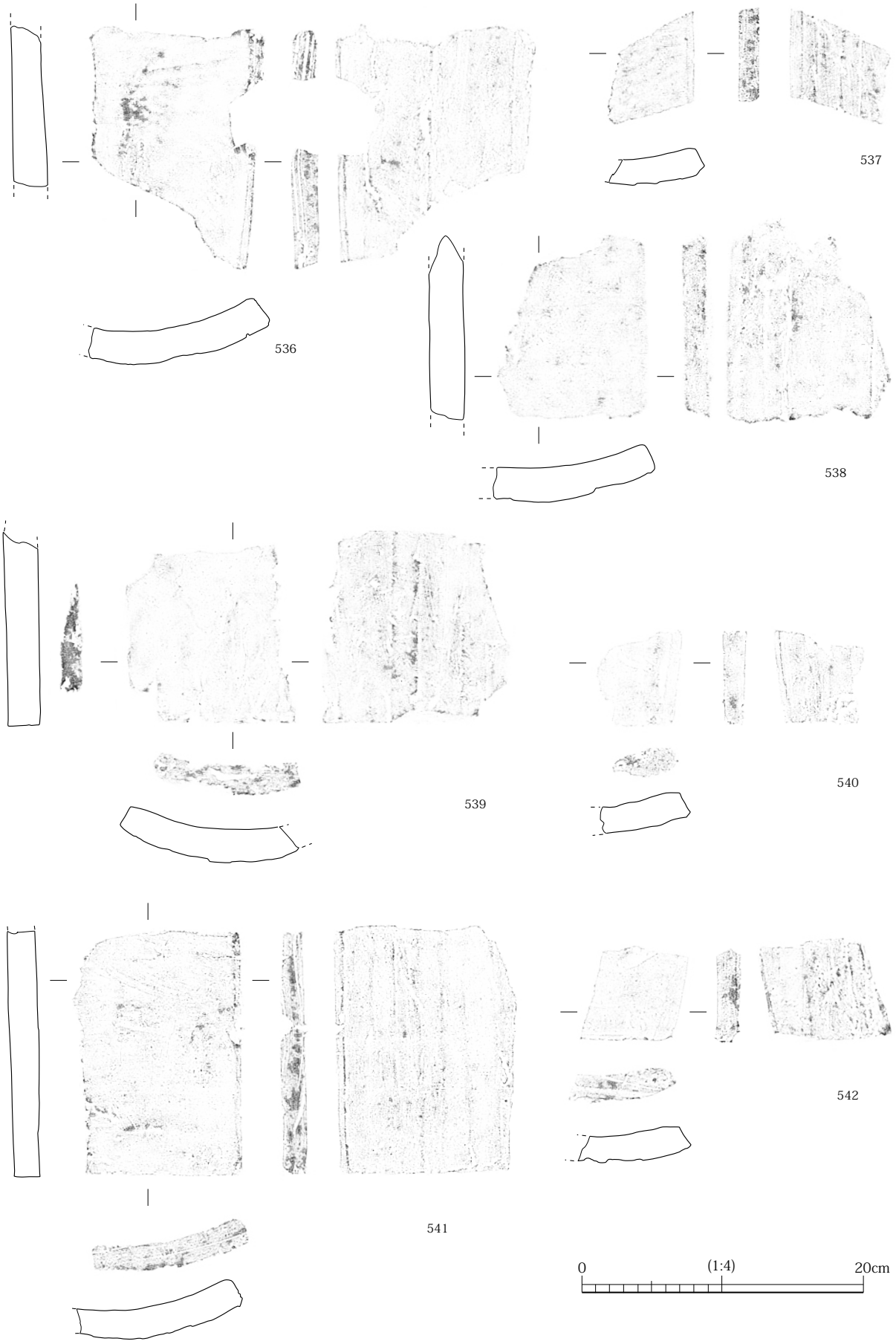


図 77　09017-2 区他出土瓦（3）

出土瓦は中世のものを 09017-1 区他より多く含んでいると考えられることから、古代以前のものに限れば、その出土割合は高いと推測できる。特に、11001-6 区では、凸面布目平瓦が計 23 点と 09017-2 区他出土のうちの半数が出土している。また、この調査区では、調査面積に比すると瓦の出土量が点数でも重量でも多く、比較的残存度の高いものも多い。また、須恵質のものが比較的多く出土する傾向もみとめられる。11001-6 区では、基本層序第Ⅵ層や中世の流路から奈良時代の土器が比較的多く出土している。瓦の出土傾向も考慮すると、二次的堆積であるとしても、奈良時代等古代の遺物が集積する要因があったものと推定できる。

このように、09017-2 区他出土瓦は、古代から近世まで幅広い時期のものを含むものの、11001-4 区出土の平瓦と同様、粘土板桶巻作りによるもの、凸面布目瓦という２群が含まれる。これらの瓦の所属時期については、他の土器や軒瓦等の出土遺物等から８世紀以前の可能性が指摘できるのみであるが、第８章では、他の調査区出土の瓦との比較によって、より詳細な時期の検討を行うこととする。

第４項　石器・石製品（図 78、図版 48）

石器・石製品は３点が出土したほか、サヌカイト剥片も出土した。

543 は、石包丁である。基本層序第ⅥＢ層から出土した。両端を欠損する。石材は緑色片岩である。研磨痕は不明瞭であるが、剥離等による凹み部を除き、全面が滑らかになる。両刃である。穿孔は両面から行う。左図の左側の孔では、両面とも背部側に紐ずれによる摩滅がみとめられる。

544 は、砥石である。基本層序第Ⅴ層から出土した。一端を欠損する。形状より、使用によって薄くなった長軸の中心付近で欠損したものと考えられる。石材は泥岩である。折損部を除く全面に擦痕がみとめられるが、側面、端面は調整の研磨のみで使用していない可能性もある。形状からも出土層位からも、所属時期の限定は困難である。

545 は、砥石である。基本層序第ⅥＢ層から出土した。一側縁を欠損するほか、周縁も一部欠ける。石材は砂岩である。側面は自然面で、円礫を使用した砥石である。擦痕は不明瞭であるが、両面を砥石面として使用しており、側面が特に滑らかとなる。形状からも出土層位からも、所属時期の限定は困難である。

第５項　金属製品（図 79、図版 48）

546 は、銅銭である。一部欠損する。基本層序第Ⅳ層から出土した。寛永通宝である。直径 2.5cm、重量 1.8g である。

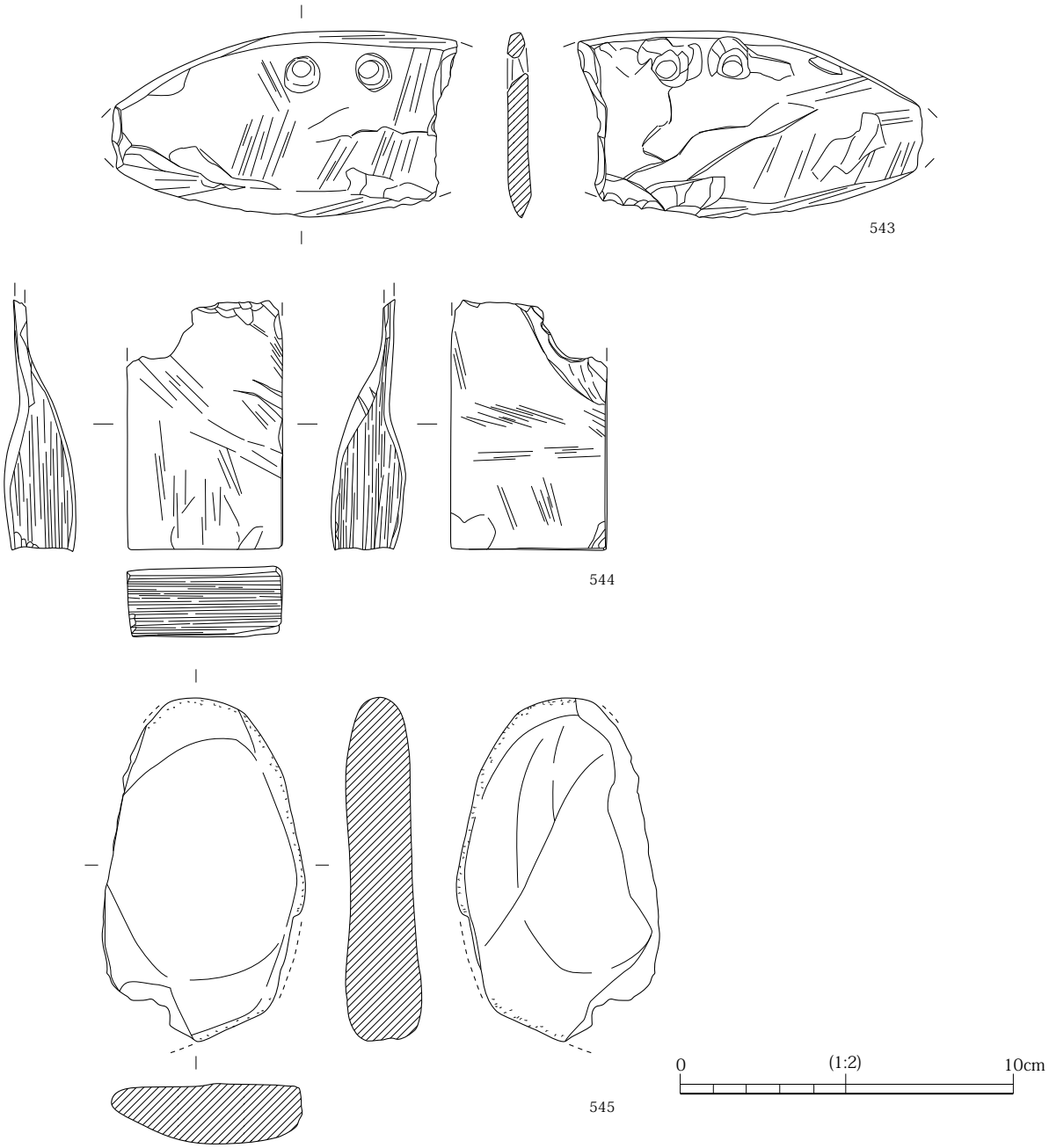


図 78　09017-2 区他出土石器・石製品

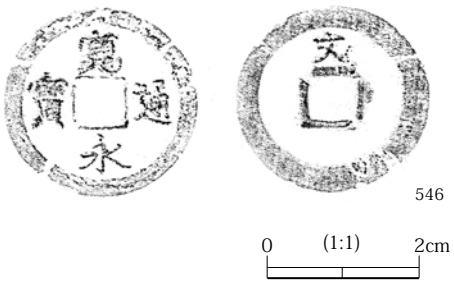


図 79　09017-2 区他出土金属製品

第６章　09017-1 区他の調査成果

第１節　基本層序（図 80）

第１章第４節で述べたように、本章の報告対象は 09017-1・10078-1・11001-8 区であるが、煩雑となるため最大面積の調査区名から「09017-1 区他」と呼称し、記述の中で必要に応じて各調査区名も使用することとする。

層序は、上層から順に現代の盛土である黒灰色土（第Ⅰ層、層厚 0.3 ～ 1.0 m）、現代の作土である灰色土（第Ⅱ層、層厚 0.1 ～ 0.3 m）、現代の床土であるにぶい黄褐色土（第Ⅲ層、層厚 0.05 ～ 0.1 m）、現況の作土以前の盛土であるにぶい黄褐色土（第Ⅳ層、層厚 0.2 ～ 0.6 m）、中世以降の包含層である黄褐色砂シルト（第Ⅴ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m）、中世以降の包含層である黄灰色砂シルト（第Ⅵ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m）、古代以降の包含層である黄褐色粘シルト（第Ⅶ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m）、古代以降の包含層である褐色砂シルト（第Ⅷ層、層厚 0.05 ～ 0.15 m）、縄文時代から弥生時代の遺物を少量含む、褐色細砂または礫混じり褐色粗砂（第ⅨＡ・ⅨＢ層、層厚 1.5 m以上）である。

第Ⅰ層は、道路整備予定地となる以前の水路設置や耕作に伴う盛土である。調査区の北端部、南端部にのみに分布する。第Ⅰ層上面の高さは 22.6 ～ 23.2 mで、高低差が大きい。第Ⅰ層下面の高さも 22.2 ～ 22.9 mと高低差が大きいが、これは、調査区北端部では水路際の盛土を行ったため、調査区南端部では、南側に向かって下がる地形で耕作するにあたり、段状に成形したためと、盛土の性格が異なることによる。

第Ⅱ層、第Ⅲ層は、道路整備予定地となる以前の作土および床土である。第Ⅱ層は、層厚の差はあるが、調査区の全域に分布する。第Ⅲ層は、層厚が薄いため明瞭に確認できない箇所もあるが、調査区のほぼ全域に断続的に分布する。第Ⅱ層下面の高さは、調査区南端部を除き 22.7 ～ 22.8 mと高低差は少ないが、南端部では、段状に下がって 22.4 mとなる。第Ⅲ層は、南端部では確認できないため、下面の高さは 22.6 ～ 22.7 mと高低差は少ない。このように第Ⅱ層、第Ⅲ層とも調査区内での高低差は全体としては少ないが、南端部では耕作に伴う段状地形の影響を受ける。

第Ⅳ層は、調査区南部のみに分布する。耕作に伴う段状成形のための盛土である。なお、第Ⅳ層の下には、現代の作土、床土、盛土がみとめられ、数度にわたって耕作地に盛土による成形が繰り返されたことがうかがえる。この第Ⅳ層より下の現代の作土、床土、盛土を、それぞれ第Ⅱ'層、Ⅲ'層、Ⅳ'層とする。Ⅱ'～Ⅳ'層とⅡ～Ⅳ層の間にどれくらいの時期差があるかは不明であるが、出土遺物より現代の層と判断できる。

第Ⅴ層は、調査区の東部から南東部に分布する。第Ⅴ層下面の高さは 22.6 m前後で、分布範囲の両端で次第に薄くなる。第Ⅴ層は、弥生時代から中世の遺物を含む。形成時期は中世以降と推定できるが、下限は明らかでなく、現代まで下る可能性がある。

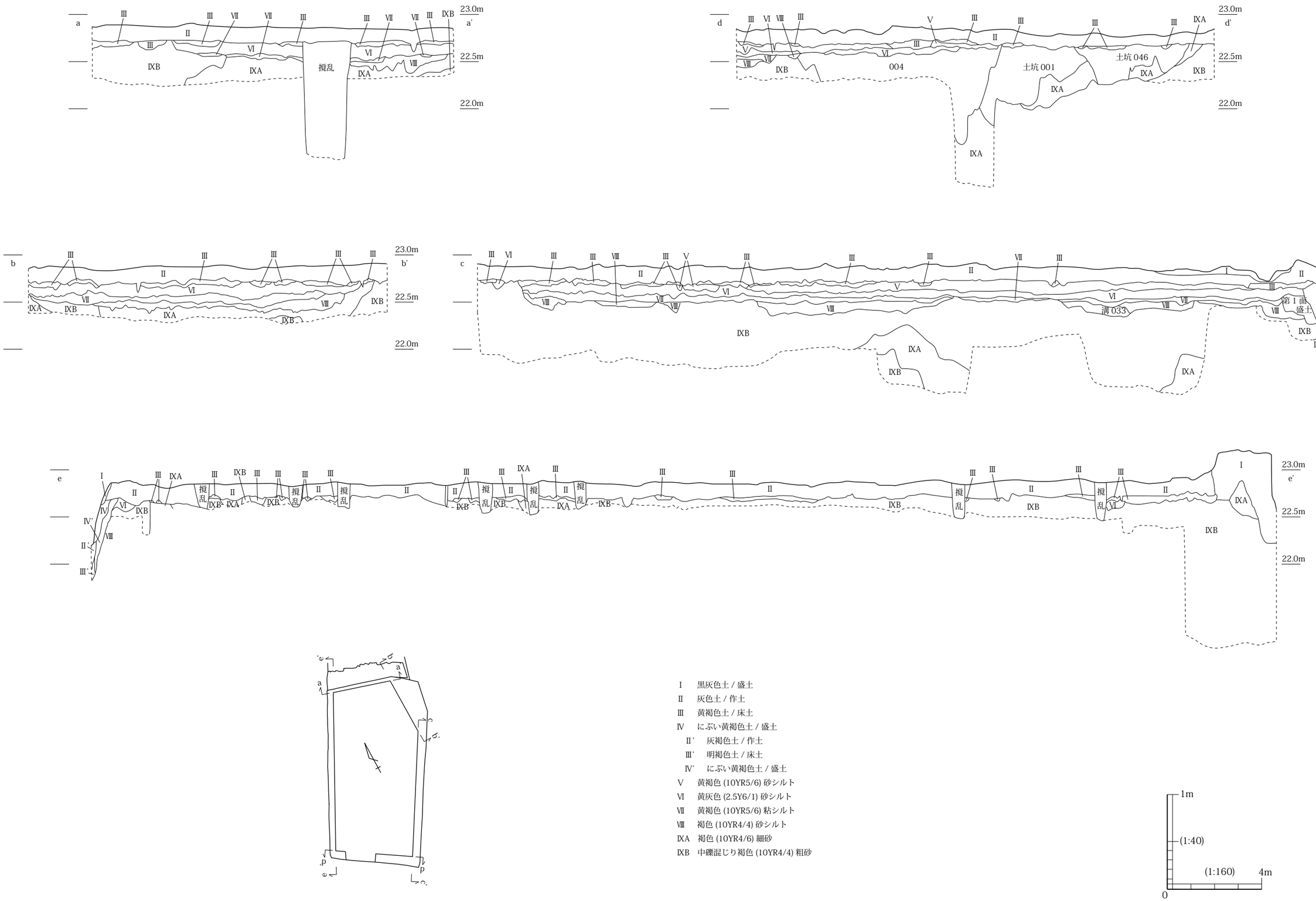


図 80　09017-1 区他土層図

第Ⅵ層は、層厚の差はあるが、調査区北西部を除く範囲に分布する。第Ⅵ層下面の高さは、22.5 m前後である。第Ⅵ層は、弥生時代から中世の遺物を含み、形成時期は中世以降と推定できるが、下限は明らかでなく、近世まで下る可能性がある。

第Ⅶ層は、層厚の差はあるが、調査区北西部を除く範囲に断続的に分布する。第Ⅶ層下面の高さは、22.5 m前後である。第Ⅶ層上面では、中世の建物、柱穴、土坑、溝、落ち込みを検出した。第Ⅶ層は、弥生時代から奈良時代の遺物を少量含む。形成時期は奈良時代以降と推定できるが、下限は中世まで下る可能性がある。

第Ⅷ層は、層厚の差はあるが、調査区北西部を除く範囲に断続的に分布する。第Ⅷ層下面の高さは、22.4 ～ 22.5 mである。下層の第Ⅸ層上面が下がる部分に堆積しており、第Ⅸ層上面では、第Ⅷ層を埋土とする落ち込みを確認した。第Ⅷ層は、弥生時代から奈良時代の遺物を少量含む。形成時期は奈良時代以降と推定できるが、下限は中世まで下る可能性がある。

第Ⅸ層は、調査区全域に分布する。下層確認トレンチにより、層厚 1.5 m以上であることを確認したが、下面を確認することはできなかった。第ⅨＡ層と第ⅨＢ層に細分したが、層界は不明瞭な部分が多く、また、上下の堆積関係にあるものではなく、互層となる。第Ⅸ層は洪水堆積物であり、堆積作用のより活発な時期に堆積したものが礫混じり粗砂である第ⅨＢ層であると考えられる。第Ⅸ層上面では、奈良時代の土坑、溝、落ち込みを検出した。第Ⅸ層は、縄文時代から弥生時代の遺物を少量含む。他の調査区の成果より、形成時期は弥生時代後期以前と推定できるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

以上のように、09017-1 区他では、２面の遺構検出面を確認した。第Ⅵ層を除去した第Ⅶ層上面では、中世の建物、柱穴、土坑、溝、落ち込みを検出した。第Ⅷ層を除去した第Ⅸ層上面では、奈良時代の土坑、溝、落ち込みを検出した。以下ではこれらの遺構検出面を、順に「中世遺構検出面」「奈良時代遺構検出面」と呼称する。

第２節　中世遺構検出面の調査（図 81、図版 11 ～ 13）

基本層序第Ⅶ層上面で検出した。遺構は掘立柱建物 1 基、柱穴 99 基、土坑 1 基、溝 45 条、落ち込み２基である。遺構は調査区全域で検出し、特に北東部で多く検出した。

建物 1（図 82、図版 12―２）　調査区北東部で検出した。柱穴 009・015・023・025・027・034 の６基から成る、北―南方向１間、東―西方向２間の建物である。北―南方向の長さが北側柱で 3.0m、南側柱で 2.6 m、東―西方向の長さが東側柱で 1.2 m、西側柱で 1.9 mで、いびつな方形を呈する。柱間寸法は、北―南方向が 1.2 ～ 1.9 m、東―西方向が 1.1 ～ 1.2 mである。床面積は 4.34㎡、主軸方向は、N―67°―W である。

柱穴の平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径 0.3 ～ 0.35 m、深さ 0.05 ～ 0.1 m、柱痕跡の平面規模は直径 0.15 ～ 0.2 mである。

遺物は出土しなかった。

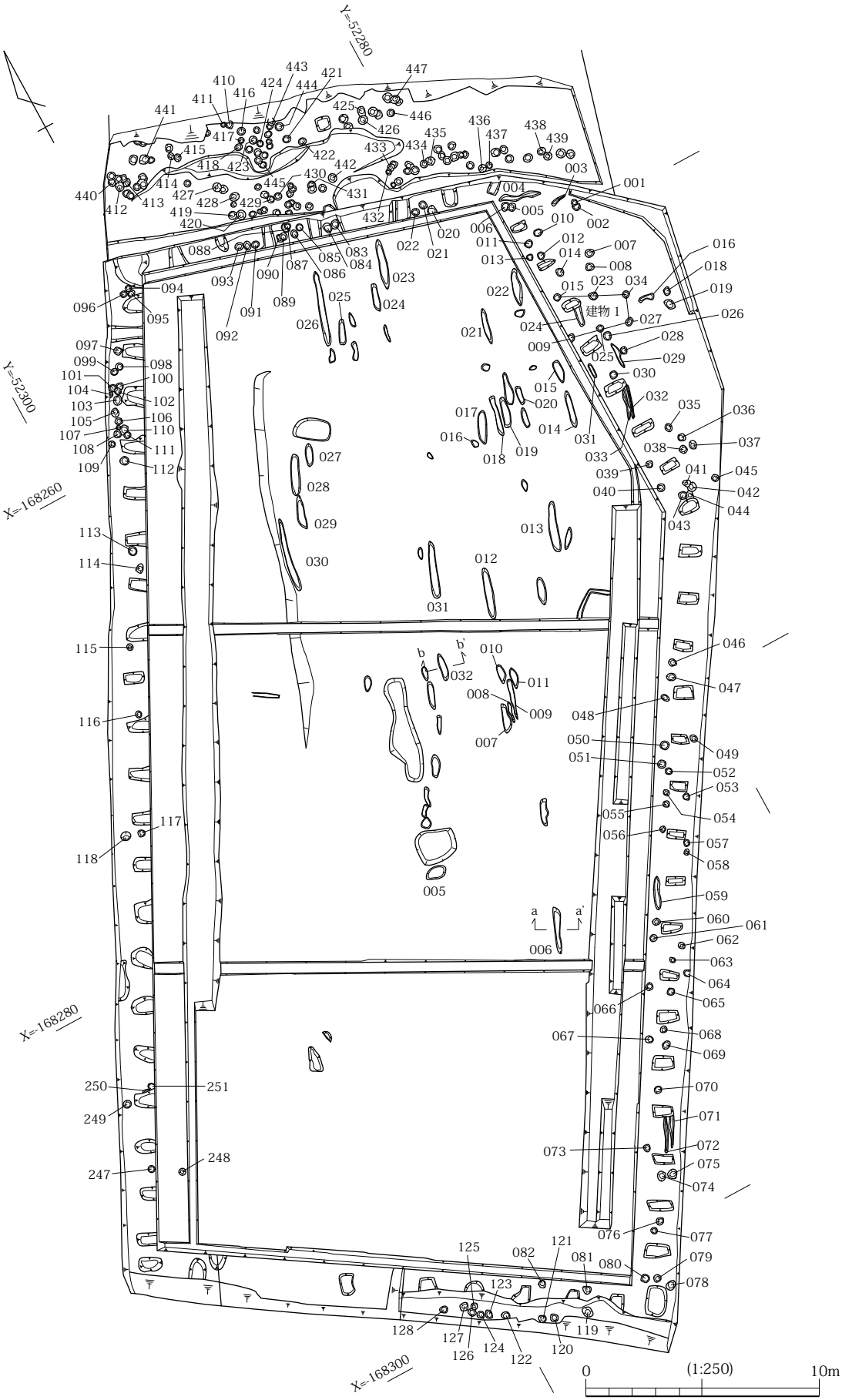


図 81　09017-1 区他中世遺構検出面全体図

なお、後述のように、09017-1 区では本来存在していた柱穴を検出できていない可能性があるため、調査区西部に建物がのびる可能性もある。

柱穴　柱穴は 99 基を検出した。調査区北東部から南部、特に北東部で多く検出した。柱穴を検出した範囲は 10078-1・11001-8 区で、これは、土層が類似する周辺調査区の調査を進めることで検出が容易になったことによる可能性がある。したがって、一連の調査で初期に調査を実施した 09017-1 区では、本来存在していた柱穴を検出できていない可能性があり、本来は、調査区全域に、10078-1・11001-8 区と同様の密度で柱穴が密集していた可能性を考慮する必要がある。多数の柱穴を検出した部分でも、10078-1 区では調査区の幅が狭いこともあり、いずれも構成する建物を明らかにできなかった。遺構番号は、10078-1 ではすべての柱穴に付したが、11001-8

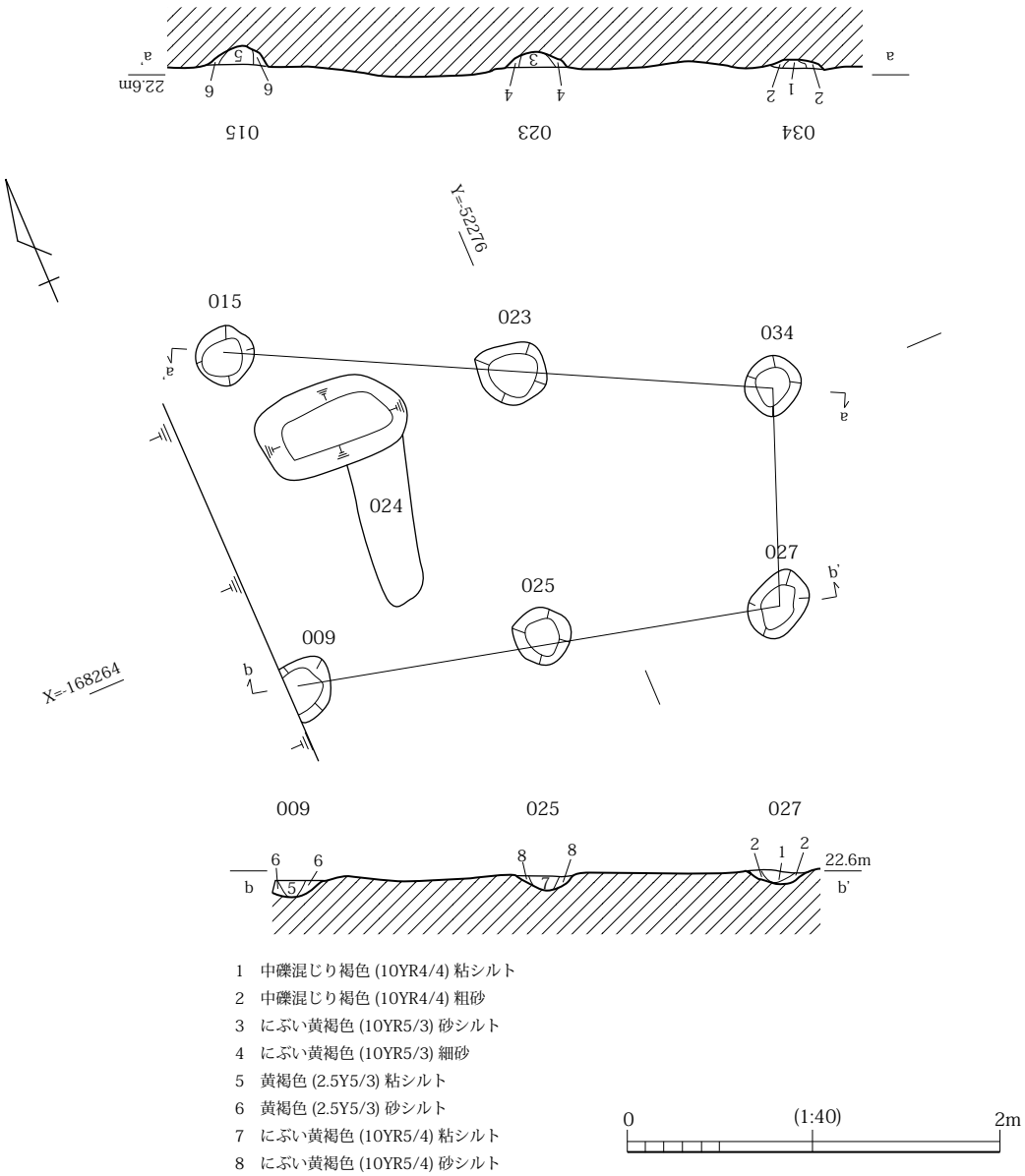


図 82　09017-1 区他建物 1 平面図・断面図

区では遺物が出土するなど特徴的な柱穴のみに付している。

平面形は円形で、いびつな形状ものを含む。柱掘方の平面規模は直径0.3～0.5 m、深さ0.05～0.2 m、柱痕跡の平面規模は直径0.1～0.3 mである。柱掘方の深さと検出位置との相関関係はみとめられず、平面規模と深さも比例しないものと考えられる。

埋土は、褐色砂～シルトで、礫の混じるものもある。調査区北西部では、柱穴089周辺、412周辺、424周辺等で掘方掘削の際に他の柱穴の埋土を掘削しており、先後関係がみとめられる。

遺物は、中世の瓦器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土しているが、いずれも小片である。遺構の時期を示すと考えられる中世の遺物は、柱穴030から瓦器が、柱穴078から土師器小皿が出土しているが、小片で図化できず、時期比定も困難である。

土坑005　調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。規模は、長軸1.0 m、長軸0.5 m、深さ0.05 mである。

埋土は褐灰色砂シルトで、直上の第Ⅵ層に類似する。

遺物は、土師器と瓦が出土したが、小片で図化できず、時期比定は困難である。

溝（図83）　調査区中央部から北部、南東部で西部で45条を検出した。南北方向に近いものと東西方向に近いものに分けられる。幅0.1～0.4 m、深さ0.02～0.05 mである。埋土は褐灰色砂シルトで、直上の第Ⅵ層に類似する。

主軸方向は、南北方向のものがN―２～40°―Eの範囲に分布し、特にN―２～28°―Eの範囲に集中する。東西方向のものは、N―83°―E、N―73～84°―Wである。

これらの溝は、規模、方向がそろうこと、埋土が直上の第Ⅵ層に類似することより、耕作に伴う鋤溝と考えられ、第Ⅵ層は作土であると推定できる。これは、他の調査区でも第Ⅵ層に類似した作土と推定できる層が確認されることからも裏付けられる。

遺物は、近世の磁器のほか、須恵器、土師器が出土したが、いずれも小片であった。遺構の機能時期より下るものである可能性もあるが、溝017から出土した磁器1点（547）を図化した。

落ち込み　調査区中央部で２基を検出した。深さ0.5～0.1 m、埋土は褐灰色砂シルトで、直上の第Ⅵ層に類似する。人為的な遺構であるかは不明であるが、埋土が基本層序第Ⅵ層に類似し、基本層序第Ⅵ層は中世以降の作土と考えられること、鋤溝と考えられる溝群が同一面で検出されていることから、耕作に伴う痕跡である可能性が高い。その他の９基の機能は明らかでないが、耕作に関係する痕跡である可能性もある。

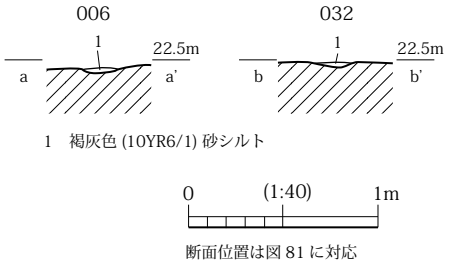


図83　09017-1区他溝006・032断面図

遺物は出土しなかった。

小結　中世遺構検出面の遺構出土遺物は少量で、古代以前の混入遺物と考えられるものも含まれていた。中世の出土遺物では、瓦器があることから12～14世紀頃と考えられるが、近世の磁器も出土する。直

上の第Ⅴ層が作土と考えられることから、耕作域としては、近世まで下がる可能性が考えられる。第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて時期を検討することとする。

溝の主軸方向は、南北方向よりやや東に振れる方向に集中する。他の調査区とは主軸方向がやや異なっており、この点については第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて検討する。

柱穴は、深さ 0.05 mのものがあり、本来の地表面から 0.45 mほどは削平されているものと想定できる。建物等の構成を明らかにできなかったが、先述のように、当初に実施した調査区では検出できてない柱穴が存在していた可能性があることからも、多数の建物が存在していたものと考えられる。また、特に密集する調査部分もあることから、数度にわたる建て替えが行われたものと推定でき、時期幅があるものと考えられる。

また、溝埋土が直上層の基本層序第Ⅵ層に類似し、基本層序第Ⅵ層が近世まで下る可能性のある作土であること、柱穴機能時の地表面が 0.45 mほどは削平されていると推定できることから、直接の先後関係はみとめられないものの、柱穴等建物に関わる遺構の埋没後に、調査区のほぼ全域で耕作が行われたものと推定でる。したがって、建物群から耕作関連の遺構のみへと、土地利用が変化したものと考えられる。この点についても、第８章で他の調査区との比較を通じてあらためて検討することとする。

第３節　奈良時代遺構検出面の調査（図 84、図版 14）

第Ⅸ層上面で検出した。遺構は土坑３基、溝１条、落ち込み９基である。調査区の北西部を除く範囲で検出した。

土坑 001・046（図 85、図版 14―４）　調査区南西部で検出した。南側は調査区外にのびる。第１章で述べたように、当初 09017-1 区を調査した際には、南側の里道との境界に設置された柵際まで調査を行う予定ではなかった。そのため、遺物が多数出土した土坑 001 の広がりをおさえるため、土坑検出箇所のみ南側まで拡張して調査を行った。その後、東西の擁壁設置部分の追加調査にあわせて、10078-1 区として南側の里道際まで全体に調査をおこなったため、最終的には 09017-1 区周囲全体を調査した形となっている。

09017-1 区調査において南側に拡張した際、土層観察用トレンチの精査により、南東部で土坑 001 に埋土を掘削される落ち込み状遺構を検出した。東側埋土をを落ち込み 004 によって掘削されているため全体の形状が明らかでないが、土坑 001 に先行する別の土坑である可能性を考慮し、土坑 046 とした。出土遺物は類似しており、土坑 001・046 が一連の土坑である可能性も考えられるが、土坑 046 を平面で検出できた範囲が狭く、判断できない。土坑 001・046 で出土した瓦間には接合関係がみとめられたため、人為的に別途掘削された土坑であるとしても、土坑 001 埋土には本来土坑 046 に含まれていた遺物が多数含まれているものと推定できる。

土坑 001 は、平面形は不整形で、長軸 13.3 m以上、短軸 0.3 ～ 0.8 m以上、深さ 0.1 ～ 0.7 mである。土坑 046 は、平面形は不明で、長軸 0.2 m以上、短軸 0.2 m以上、深さ 0.2 ～ 0.4 mである。

土坑 001 の埋土は、大きく３層に分けられる。上層から順に、黄褐色細砂層（図 85：断面 b―b' ３～４層・c―c' １～３層・d―d' １～６層、以下では上層と呼称する）、褐色細砂～粘シルト層（図 85：断面 b―b' ５～８層・断面 c―c' ４～９層・d―d' ７～ 14 層・e―e' １～９層、中層）、ラミナのみとめられる黄褐色細砂層（図 85：断面 c―c'10 層・d―d'15 層、下層）である。黄褐色細砂層（上層）、褐色細砂～粘シルト層（中層）からは瓦等多数の遺物が出土したが、ラミナのみとめられる黄褐色細砂層（下層）では少量であった。また、埋土には炭化物の混じる層があり、特に上層の黄褐色細砂層で顕著であった。埋没の最終段階で、特に炭化物の混入する要因があったものと考えられる。炭化物の有無のみで分層することはできないが、特に炭化物が集中する４箇所については、「炭溜まり」として１～４の番号を付し、遺物を分けて取り上げた。なお、北端部のみ、最上層に、赤褐色細砂の堆積がみとめられる（図 85：断面 b―b' １～２層）。この部分では、土坑 001 が土坑 002 埋土を掘削していること、土坑 002 埋土が赤褐色細砂～シルトであることから、土坑 002 埋土に由来するものと考えられる。

土坑 001 は土坑 002・046 の埋土を掘削し、土坑 001・土坑 046 とも落ち込み 004 により埋土を掘削されるという先後関係がみとめられる。落ち込み 004 は河川活動に伴う洪水堆積物であり、土坑埋没後に、河川活動の影響を受けたことがわかる。

遺物は、奈良時代の須恵器と土師器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が出土し、特に瓦が大量に出土した。遺構の時期を示すと考えられる奈良時代の土器、瓦を中心に、土器 79 点（548 ～ 626）、瓦 53 点（654 ～ 656・658・668・670・677・678・681・685 ～ 689・693・694・697 ～ 700・702 ～ 705・707 ～ 714・716 ～ 720・722 ～ 730・732 ～ 736・743・745）を図化した。

土坑 001 の機能については、非常に多くの遺物、特に瓦が出土していることから、廃棄土坑と考えられる。先述のように、最下層に遺物を少量含むラミナのみとめられる黄褐色細砂層が堆積し、それより上層で遺物が多量に出土することから、土坑の最深部が流入土等によって自然堆積した後に、土器、瓦が多数廃棄されたものと想定できる。また、土器は、混入遺物である古墳時代以前のものを除くと８世紀後半に位置づけられるのに対し、瓦は７世紀末から８世紀前半に所属するものである。また、瓦はすべて破損している。したがって、寺院に関連する建物に葺かれていた瓦が、一定期間をおいて不要となり、廃棄されたものと考えられる。また、土坑内からは、スサ状痕を含む焼土塊も出土しており、出土瓦の中には、破損後に二次焼成を受けたと推定できるもの、スサ状痕を含む焼土の付着が顕著なもの、焼成の際に破損したものがみとめられた。したがって、周辺に瓦窯があったことが推定でき、建物に使用されていたもののほか、焼成の際の破損品や瓦窯で再利用されていた破損瓦の転用品もあわせて廃棄されたものと考えられる。また、土器では、甕、鍋が多く出土しており、杯類は少量である一方、鉢は比較的多く出土している。鉢は、僧侶の活動に関連するものと考えられる。甕、鍋は、使用痕跡のみとめられないものが多く、日常的に使用したものではない可能性が考えられることから、ある特定の目的に用いられた

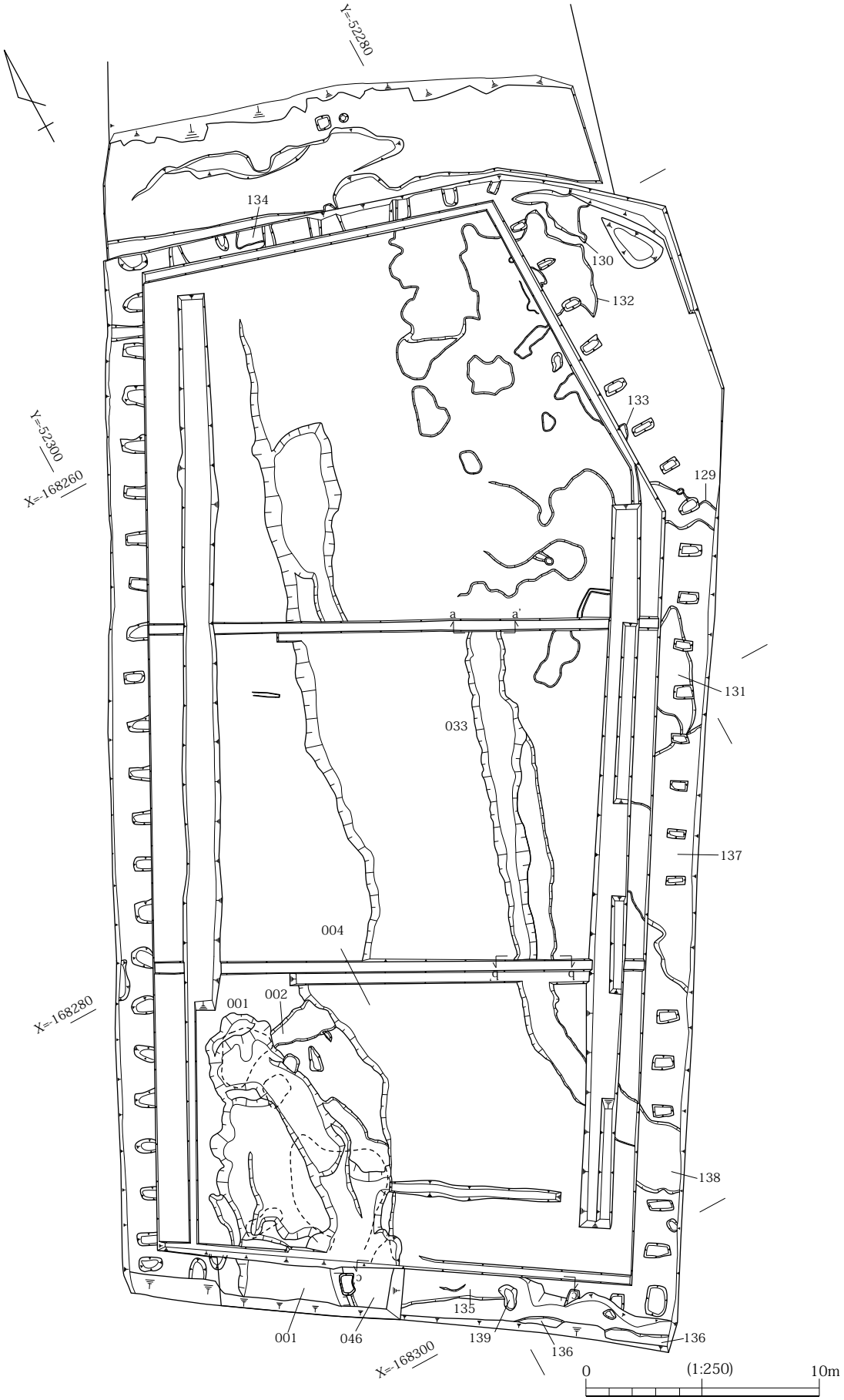
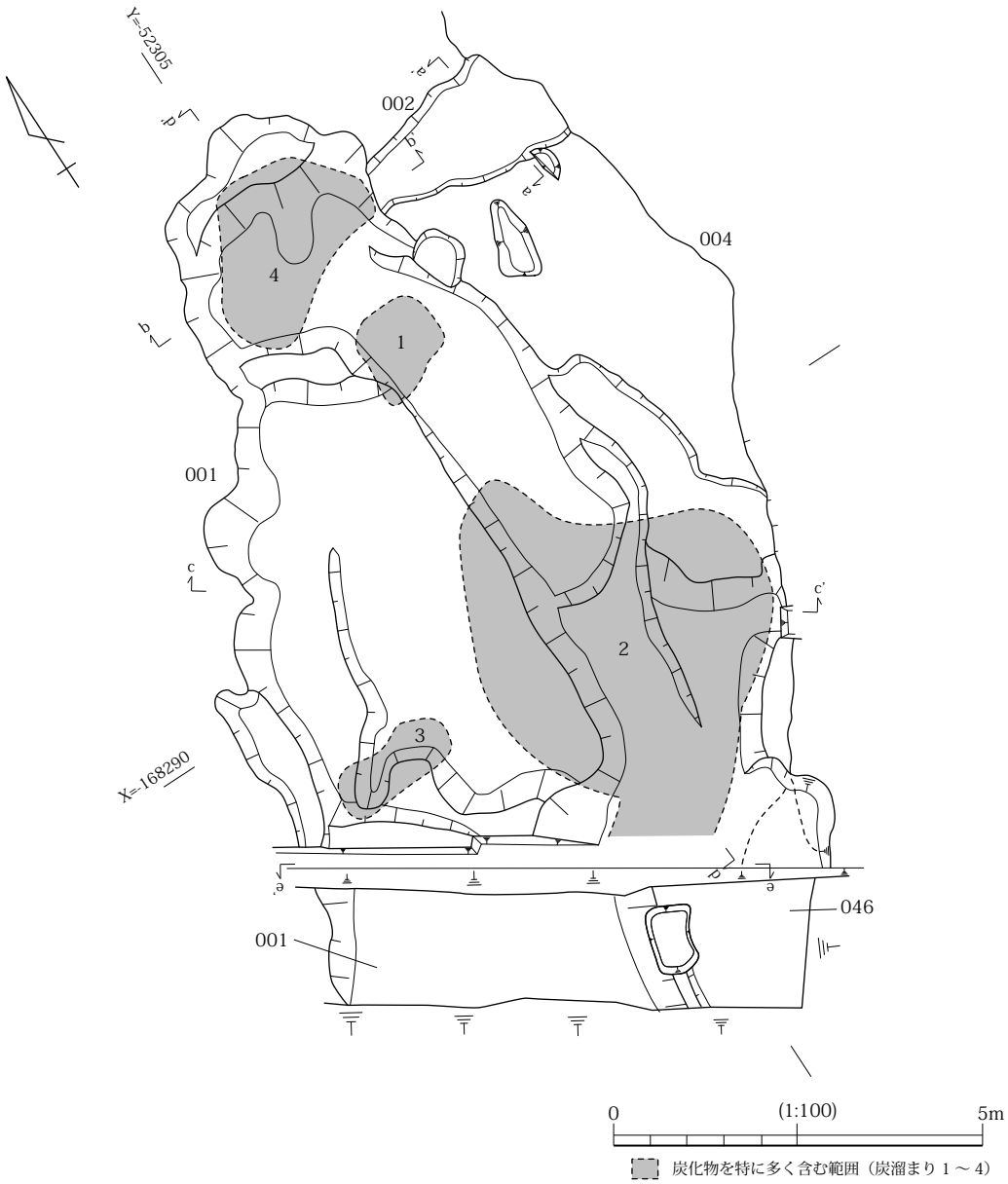
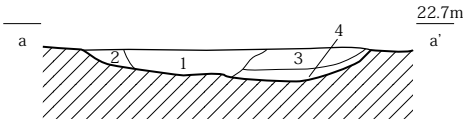
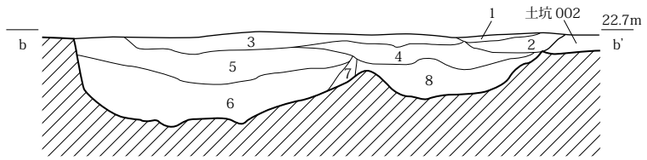


図 84　09017-1 区他奈良時代遺構検出面全体図

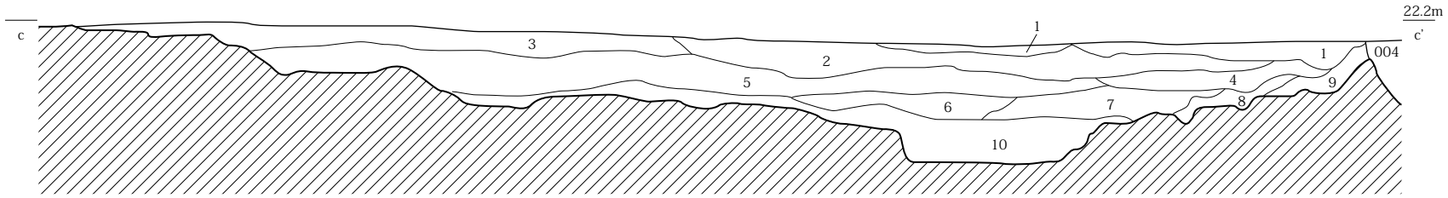




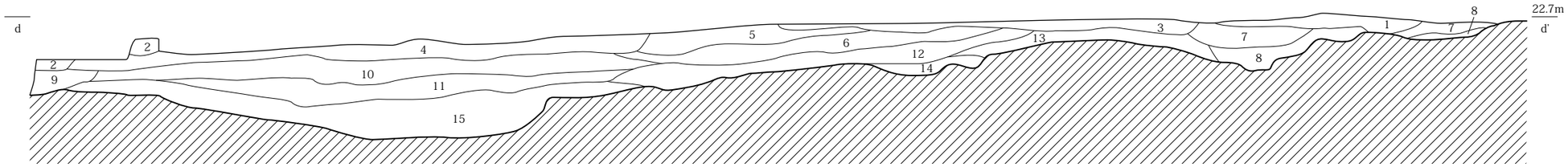
1　赤褐色 (2.5YR4/6) 粘シルト
2　明赤褐色 (5YR5/6) 粘シルト
3　赤褐色 (2.5YR4/6) 粘土偽礫混じり赤褐色 (5YR4/6) 細砂
4　褐色 (7.5YR4/6) 細砂



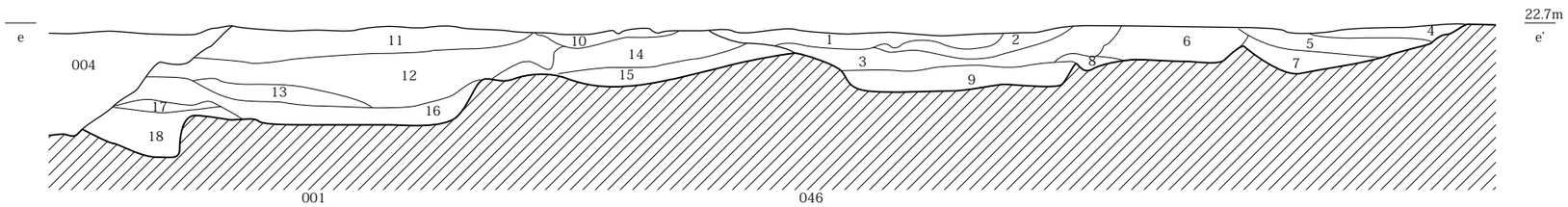
1　炭化物・灰白色 (10YR7/1) 粘土偽礫混じり赤褐色 (2.5YR4/6) 細砂
2　炭化物・中礫混じり赤褐色 (2.5YR4/6) 細砂
3　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 中砂
4　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
5　炭化物・中礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
6　炭化物・中礫混じり褐色 (10YR4/4) 細砂
7　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
8　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト



1　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 中砂
2　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
3　中礫・褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
4　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
5　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘シルト
6　炭化物混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
7　黄褐色 (10YR5/6) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
8　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
9　黄褐色 (10YR5/6) 細砂
10 黄褐色 (10YR5/6) 細砂　ラミナ



1　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 中砂
2　1 層より炭化物多量
3　灰白色 (10YR7/1) 砂偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
4　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
5　黄褐色 (10YR5/6) 細砂
6　褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂～砂シルト
7　炭化物・中礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂
8　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
9　黄褐色 (10YR5/6) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
10 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘シルト
11 褐色 (10YR4/4) 粘シルト
12 褐色 (10YR4/4) 砂シルト
13 黄褐色 (10YR5/6) 細砂～砂シルト
14 褐色 (10YR4/4) 粘土偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 細砂
15 黄褐色 (10YR5/6) 細砂　ラミナ



001
1　炭化物混じりにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
2　炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
3　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土偽礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
4　黄褐色 (10YR5/6) 粘シルト
5　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘シルト
6　黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
7　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
8　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト
9　中礫混じり黄褐色 (10YR5/6) 細砂

046
10 炭化物混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
11 炭化物混じり黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
12 炭化物混じり褐色 (10YR4/4) 砂シルト
13 炭化物混じり褐色 (10YR4/6) 粘シルト
14 黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト
15 黄褐色 (10YR5/6) 細砂
16 黄褐色 (10YR5/6) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 粘シルト
17 黄褐色 (10YR5/6) 粘シルト
18 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘シルト

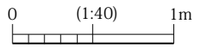


図 85　09017-1 区他土坑 001・002・046 平面図・断面図

甕、鍋類が、不要瓦とともにまとめて廃棄された状況が推定できる。調査区の位置は推定寺域外の南東部であり、寺域外での僧侶の活動との関連が考えられる。

土坑 002（図 85） 調査区南西部で検出した。長軸は東西方向で、東側を落ち込み 004 埋土に、西側を土坑 001 埋土に掘削される。平面形は不整形で、長軸 2.6 m以上、短軸 0.7 ～ 1.7 m、深さ 0.2 mである。

遺物は出土しなかった。

土坑の機能は不明である。

溝 033（図 86、図版 14―２） 調査区東部で検出した。09017-1 区調査区では 033、10078-1 区調査区では 138 の遺構番号を付したが、一連の溝であることから、09017-1 区調査区の遺構番号で呼称する。

南北方向で、南端部では南東方向に緩やかに曲がって調査区外にのびる。北端部は浅くなって途絶える。

全長 25.0 m以上、幅 1.3 ～ 3.1 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。

南北方向部分での主軸方向は、N―19°―Ｅで、座標北方向より東に振れる。

遺物は、古墳時代の土師器、須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。また、遺構の時期を示すと考えられる古代の遺物は出土しなかった。

溝の機能は不明であるが、溝の東側では明瞭な遺構は確認されていないことから、境界を画する機能であった可能性が考えられる。

落ち込み 004（図 87、図版 14―３・５） 調査区南部で検出した。09017-1 区調査区では 004、10078-1 区調査区では 135 の遺構番号を付したが、一連の溝であることから、09017-1 区調査区の遺構番号で呼称する。また、10078-1 区調査区で 139 の遺構番号を付した落ち込みも、一連のものと考えられる。

埋土は褐色細砂～シルトまたは中礫混じり褐色中砂を主体とし、ベース層である基本層序第Ⅸ層に類似する。そのため、他の遺構の埋土を掘削する部分以外では平面的な確認ができず、土坑 001・002 周辺で肩部を確認した後、下層確認用トレンチの設定によって、分布範囲を確認した。

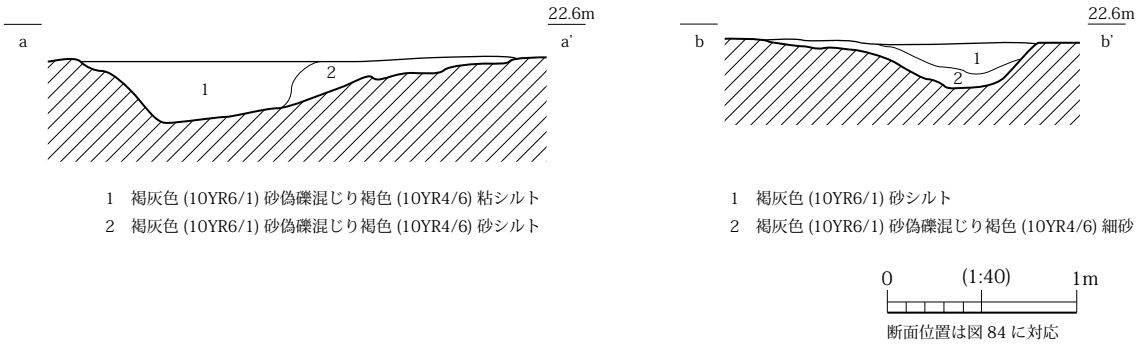
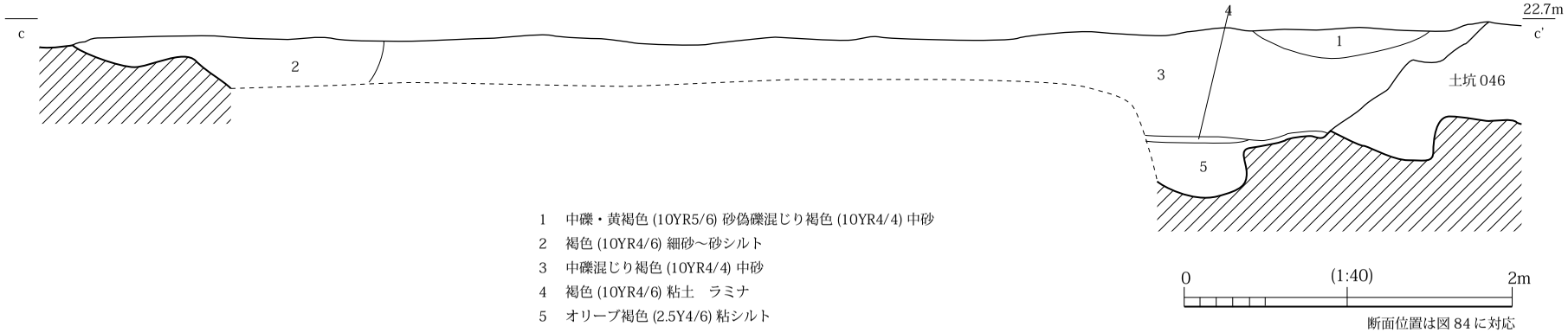


図 86　09017-1 区他溝 033 断面図



1　中礫・黄褐色 (10YR5/6) 砂偽礫混じり褐色 (10YR4/4) 中砂
2　褐色 (10YR4/6) 細砂～砂シルト
3　中礫混じり褐色 (10YR4/4) 中砂
4　褐色 (10YR4/6) 粘土　ラミナ
5　オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘シルト

図 87　09017-1 区他落ち込み 004 断面図

その結果、北側では、土坑 002 周辺で浅くなって途切れること、東側は断面観察でも明瞭ではないが、溝 033 との先後関係はみとめられないことから溝 033 までは広がらないと判断した。また、南端部（10078-1 区の 135・139 部分）は、浅い段状を呈してやや南側に上がるものの、上面の標高が 09017-1 区検出部分より低く、直上層は中世以降に形成された基本層序第Ⅵ層である。したがって、この部分が南端ではなく調査区外までのびるものと考えられる。以上より、全長 15.0 m以上、幅 7.0 ～ 8.6 m、深さ 0.2 ～ 1.0 mである。

遺物は、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器、瓦が少量出土した。このうち、奈良時代の須恵器 1 点を図化した（630）。土坑 001・046 埋土を掘削することから 8 世紀後半以降と推定できるが、下限は明らかでなく、中世まで下る可能性もある。

埋土と分布範囲より、河川活動に伴う南側からの洪水堆積物と判断できる。

その他の落ち込み　調査区西部を除く範囲で 8 基（129 ～ 134・136・137）を検出した。また、調査区北部から中央部でも、浅い段状の痕跡を複数確認しているが、立ち上がりは不明瞭であり、遺構番号は付していない。埋土は褐色砂シルトで、直上層の基本層序第Ⅷ層に類似する。自然の落ち込みである可能性が高い。

遺物は古墳時代の須恵器と土師器、弥生土器が出土した。遺物の時期を示すと考えられる古代のものは出土しなかったが、落ち込み 137 出土の特徴的なもの 3 点を図化した（627 ～ 629）。

小結　奈良時代遺構検出面では、遺構内から奈良時代の土器、7 世紀末～ 8 世紀前半の瓦が出土した。これら遺構の機能時期あるいはそれに近い時期を示す考えられる遺物の大半は土坑 001・046 からの出土であるが、遺物が出土しなかった土坑、溝についても同時期と推定できる。ただし、落ち込み 004 については、土坑埋没後の堆積であることから時期が下る可能性がある。また、落ち込み 004 直上の一部に基本層序第Ⅷ層が堆積し、その他の落ち込みの埋土が上層の基本層序第Ⅷ層に類似することから、これらの落ち込みはさらに時期が下る可能性がある。

土坑 3 基のうち 2 基（001・046）については、瓦、鉢等寺院との関連がうかがえる遺物が出土した。また、溝 1 条についても、境界を画するものであるとすると、寺院と関連する可能性も考えられる。これらの遺構、遺物は、推定寺域外の土地利用や、僧侶の活動の様相を示すものと考えられる。また、土坑出土瓦等の特徴から、近辺に瓦窯が存在する可能性が高いことも明らかとなった。

第 4 節　出土遺物

第 1 項　土器

（1）中世遺構検出面の土器（図 88）

中世遺構検出面の遺構からは、磁器、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。ここでは、混入遺物の可能性もあるが、1 点を報告する。

547 は、磁器皿である。溝 017 から出土した。瀬戸焼染付皿である。18 世紀に位置づけられる。

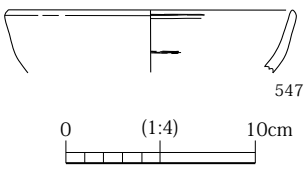


図 88　09017-1 区他中世遺構検出面の土器

中世遺構検出面の遺構出土遺物は少量であり、古代以前の混入と考えられるものも含まれていた。瓦器があることから 12 ～ 14 世紀頃と考えられるが、近世の磁器も出土する。直上の第Ⅴ層が作土と考えられることから、耕作域としては、近世まで下がる可能性が考えられる。

（２）奈良時代遺構検出面の土器

奈良時代遺構検出面の遺構からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。大半は土坑 001 の出土である。

土坑 001 出土土器（図 89 ～ 93、図版 26―２～ 29）　土坑 001 からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土した。古墳時代以前の混入遺物も含め、79 点を報告する。

548 は須恵器蓋である。549･550 は杯Ｂである。551 ～ 554 は杯Ａである。555 ～ 561 は鉢Ａである。556・557 は残存度が低く口径不明である。562 は片口をもつ平底の鉢である。563 は底部のみであるが、鉢Ａと考えられる。564 は口縁部で、甕の可能性がある。内面に自然釉がみとめられる。565 は壺底部で貼り付け高台である。548 ～ 565 は奈良時代に所属し、548 ～ 563・565 は８世紀後半に位置づけられる。

566・567 は、須恵器杯蓋である。568 は、須恵器杯身である。底部中央部付近にヘラ記号がある。566 ～ 568 は、TK23 ～ TK47 に位置づけられる。

569 は、灰色のいぶし状になる土師器である。体部と把手２が出土したが、直接接合せず、把手の位置は不明である。推定位置での図上復元である。体部外面に櫛目状の工具痕がみとめられる。奈良時代に所属する可能性があるが、断定できない。

570 ～ 576 は、土師器杯である。572 は、残存度が低く口径は不確定である。570・572 は、内面に暗文がみとめられる。570 外面、574・575 内外面には、強いヨコナデによる線状痕が明瞭にみとめられる。573 は、口縁端部形態より摂津地域との関連がうかがえる。574・575 は、底部外面にヘラケズリを施す。576 は高台をもつ。570 ～ 576 は奈良時代に所属し、570･572 ～ 576 は、８世紀後半に位置づけられる。

577・578 は、鉢である。残存度が低く口径は不確定である。579 は、高台をもつ平鉢である。577 ～ 579 は、８世紀後半に位置づけられる。

580 ～ 625 は、土師器の甕または鍋である。口径に比して器高の低いものを鍋としたが、体部の欠損により分類できないものもある。

580 ～ 589 は、甕である。

580 は長胴甕である。口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部外面はハケを施した後、頸部付近の一部にナデを施す。口縁部から体部の外面にススが付着する。

581 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はケズリを施し、

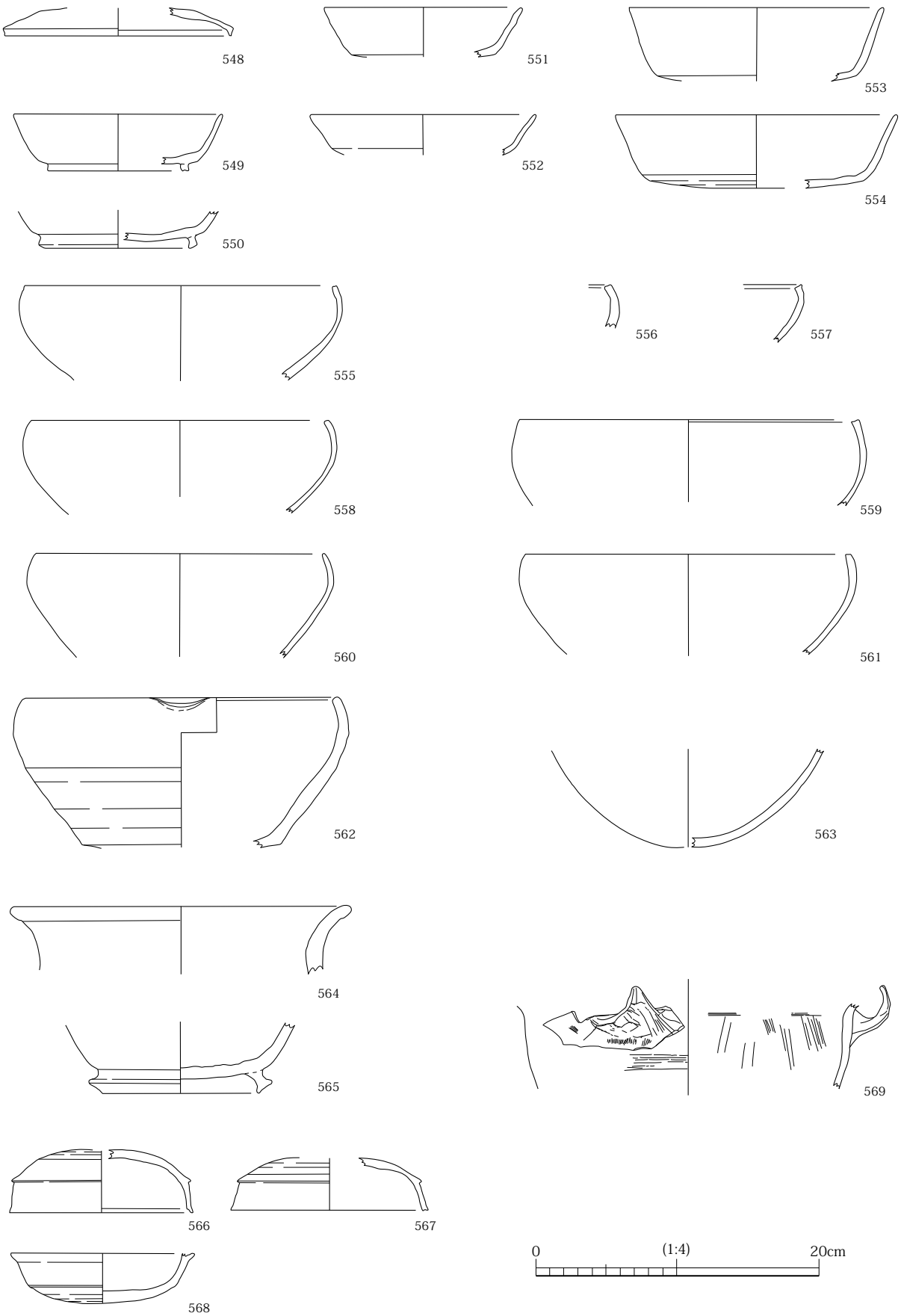


図 89　09017-1 区他土坑 001 出土土器（1）

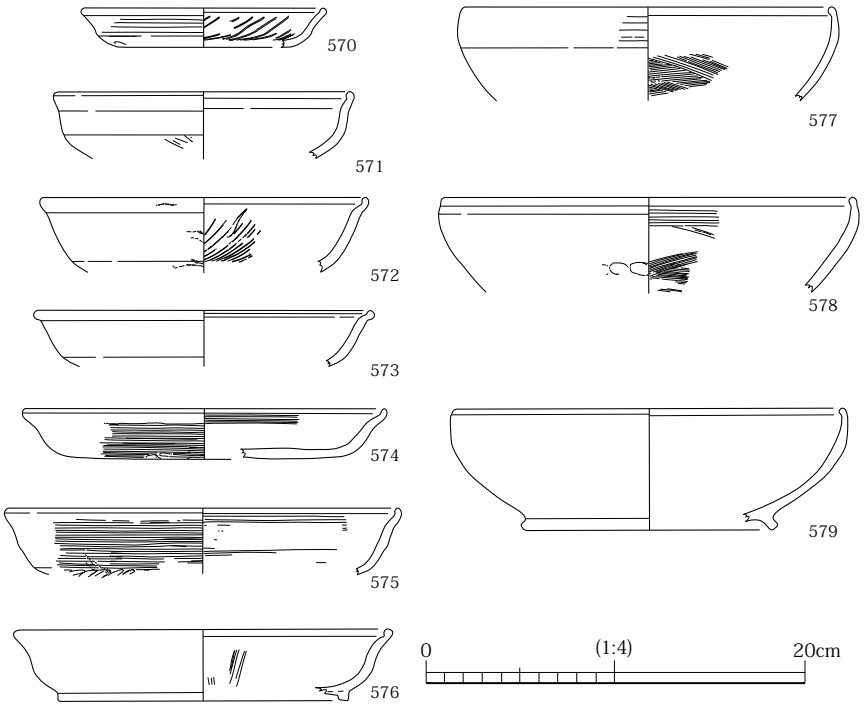


図 90　09017-1 区他土坑 001 出土土器（2）

体部外面は縦方向のハケを施す。体部外面の一部にススが付着する。

582 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内外面にハケを施す。外面のハケは、体部上半では縦方向、下半では斜め方向である。把手の有無は不明である。

583 は、体部内面はケズリを施し、体部外面は縦方向のハケを施す。1 孔をもつ把手 1 が残存し、把手上方の口縁部に 1 孔をもつ。本来の把手数は不明である。口縁部の孔付近に溝状痕跡がみとめられ、孔に紐等を通して使用した際の紐ズレ痕の可能性がある。

584 は、口縁部外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にユビオサエを、体部外面に縦方向のハケを施す。把手の有無は不明である。

585 は、体部内面はケズリを施し、体部外面は縦方向のハケを施す。無孔の把手 1 が残存する。本来の把手数は不明で、欠損により口縁部の孔の有無も不明である。

586 は、体部内面はケズリを施し、頸部付近のみハケがみとめられる。体部外面は、上半では縦方向、下半では斜め方向のハケがみとめられる。把手取り付け時の接合粘土部に不定方向のハケがみとめられる。無孔の把手 1 が残存する。本来の把手数は不明で、欠損により口縁部の孔の有無も不明である。

587 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にハケを施した後、ナデを施す。体部外面は斜め方向のハケを施した後、一部にナデを施す。 1 孔をもつ把手が 1 残存するが、本来の把手数は不明である。把手上方の口縁部に孔はない。

588 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はハケの後ナデ

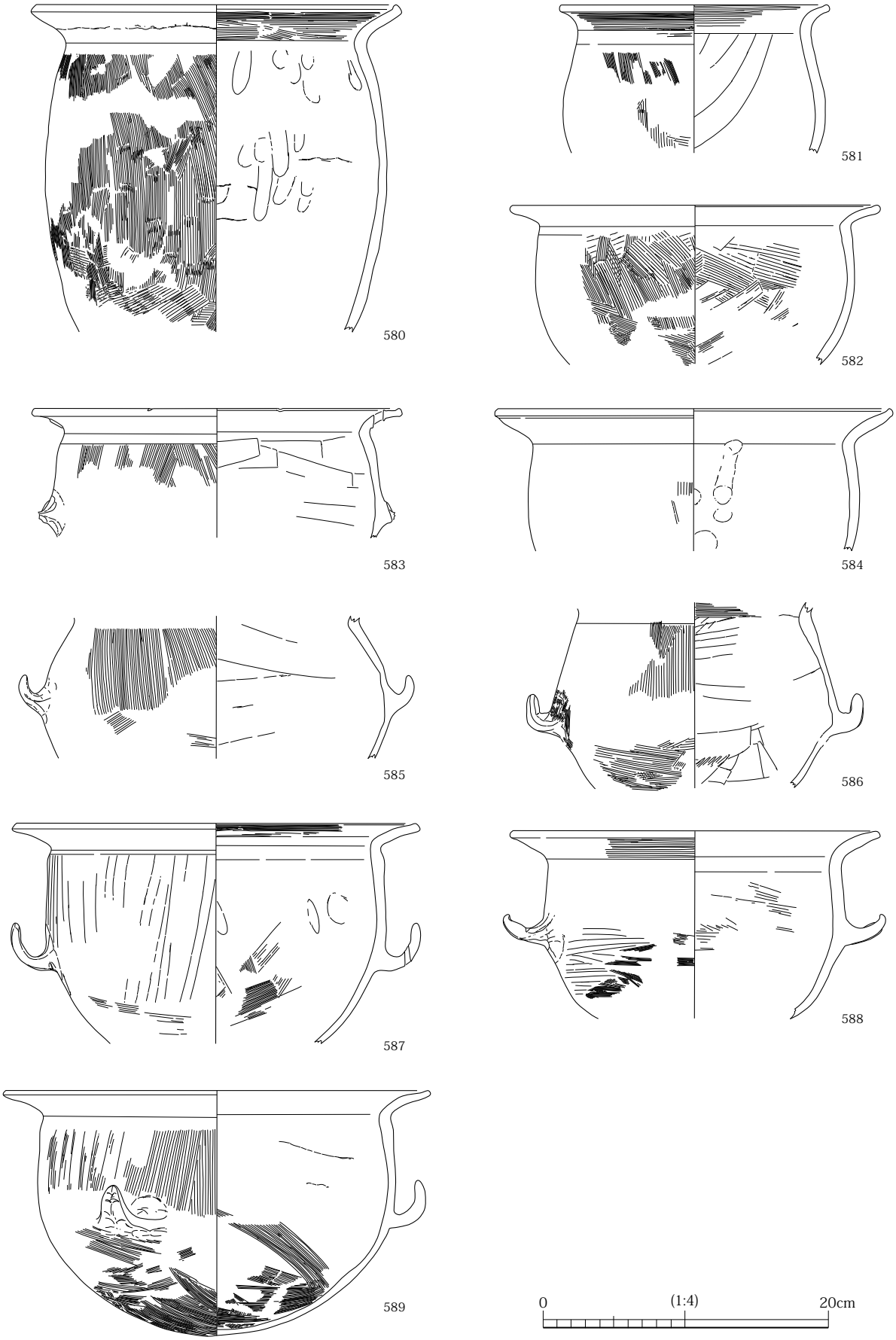


図 91　09017-1 区他土坑 001 出土土器（3）

を施す。体部外面は下半に横方向のハケがみとめられる。無孔の把手１が残存する。本来の把手数は不明である。把手上方の口縁部に孔はない。体部外面に黒斑がみとめられる。

588 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面は下半にハケを施す。体部外面は、上半では縦方向、下半では斜め方向のハケがみとめられる。無孔の把手２が残存し、３方向であったと考えられる。体部外面に黒斑がみとめられる。

590 ～ 599 は鍋である。

590 は、体部下半が欠損するが、形状より鍋とした。口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はケズリ状痕跡がみとめられる。体部外面は、縦方向のハケを施す。把手の有無は不明である。

591 は、体部内外面にハケを施すようであるが、不明瞭である。頸部外面に沈線がみとめられる。把手の有無は不明である。

592 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はナデを施すようであるが、不明瞭である。体部外面は、上半では縦方向、下半では横方向のハケがみとめられる。１孔をもつ把手が１残存し、上方の口縁部に１孔をもつ。接合しないが同一個体と考えられる１孔をもつ把手が他に１あるが、本来の把手数は不明である。

593 は、体部下半が欠損するが、形状より鍋とした。口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はナデを施すようであるが、不明瞭である。体部外面は、斜め方向のハケの後、ユビオサエを施す。把手の有無は不明である。

594 は、体部内面にハケを施した後、不明瞭であるがケズリを施す。体部外面は縦方向のハケを施す。1 孔をもつ把手が 1 残存し、把手上方の口縁部に 1 孔をもつ。本来の把手数は不明である。

595 は、体部内面にハケの後ナデを施す。体部外面は縦方向のハケを施す。１孔をもつ把手が１残存し、上方の口縁部に１孔をもつ。本来の把手数は不明である。

596 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にハケを施した後、下半にケズリとナデを施す。体部外面は、上半では縦方向、下半では斜め方向のハケを施す。把手の有無は不明である。

597 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面は下半にハケを施す。体部外面は、上半では縦方向、下半では斜め方向のハケがみとめられる。上半ではハケの後にユビオサエを施す。把手付近はユビオサエの痕跡が顕著である。３方向に把手をもつ。うち２には１孔があり、１点では欠損のため不明であるが、すべての把手に１孔があったものと推定できる。把手上方の口縁部に孔はない。

598 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部外面成形時の縦方向ハケが口縁部におよぶが、その後にヨコナデを施している。体部内面は、ケズリを施した後、ユビオサエを施す。体部外面は、上半では縦方向、下半では横方向のハケを施し、下半のハケが後に施されている。ハケの後、一部にユビオサエがみとめられる。把手の有無は不明である。

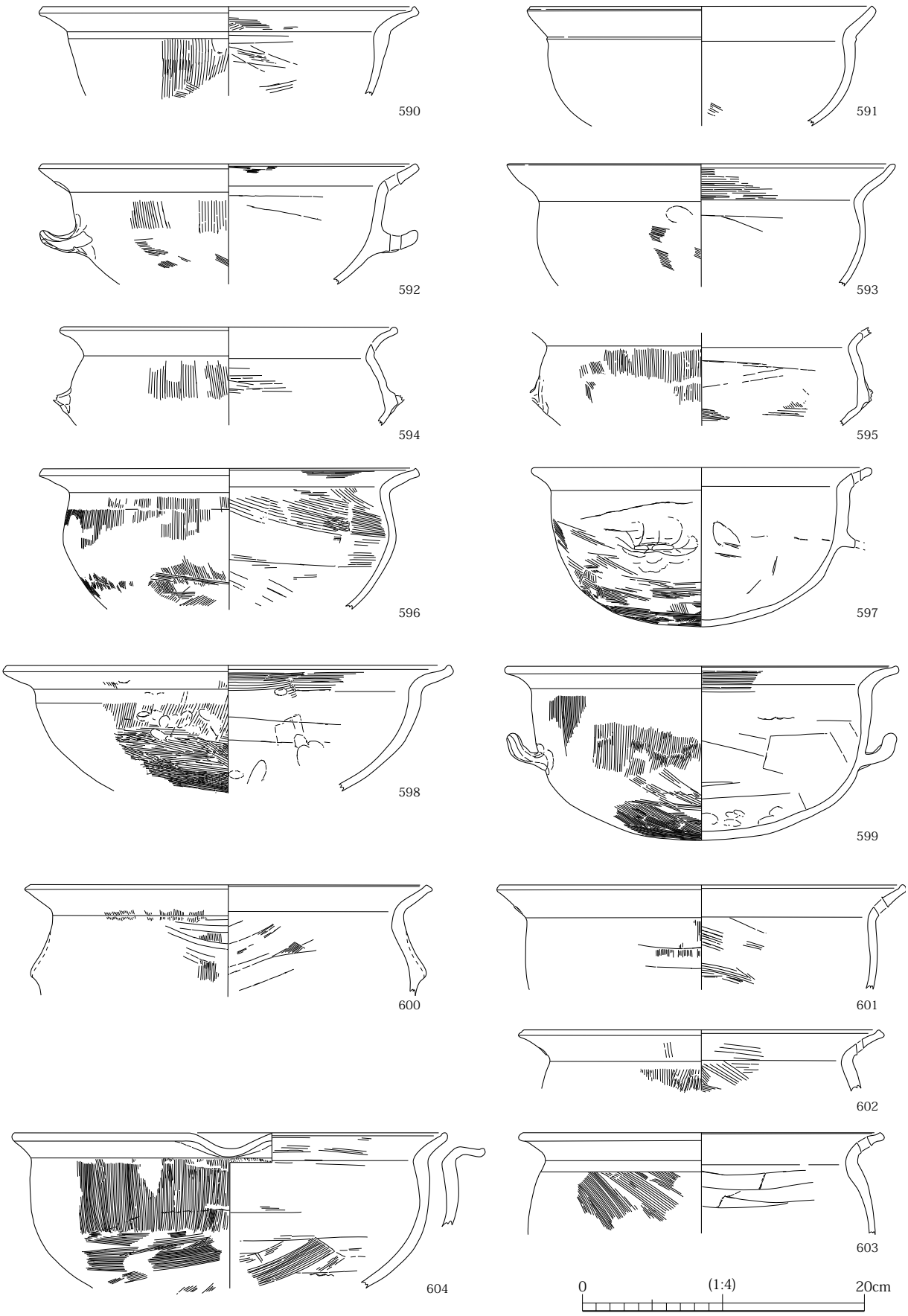


図 92　09017-1 区他土坑 001 出土土器（4）

599 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にはケズリを施し、底部付近にはユビオサエがみとめられる。体部外面は、上半では縦方向、下半では斜め方向のハケを施す。無孔の把手が 1 残存する。把手上方の口縁部に孔はない。接合しないが同一個体と考えられる口縁部から体部片 1 に把手の剥離痕跡がみとめられるが、本来の把手数は不明である。

600 ～ 603 は、甕と考えられるものである。

600 は、体部内面にハケを施す。ハケの後にナデまたはケズリを施すようであるが、不明瞭である。体部は縦方向のハケを施す。把手の剥離痕跡が 1 箇所みとめられるが、本来の把手数は不明である。把手上方の口縁部に孔はない。

601 は、体部内面にハケの後ナデを施す。体部外面は縦方向のハケを施す。口縁部に 1 孔をもつ。把手の有無は不明であるが、他の事例より、口縁部孔の下方に 1 孔の把手をもつものと推定できる。

602 は、体部内面にハケを施す。体部外面は縦方向のハケを施し、口縁部にも一部に残存する。口縁部に 1 孔をもつ。把手の有無は不明であるが、他の事例より、口縁部孔の下方に 1 孔の把手をもつものと推定できる。

603 は、口縁部外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はケズリを施す。体部外面は、縦方向のハケを施す。口縁部に 1 孔をもつ。把手の有無は不明であるが、他の事例より、口縁部孔の下方に 1 孔の把手をもつものと推定できる。

604 は、片口をもつ鍋である。口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にハケを施す。ハケの後にナデを施すようであるが、不明瞭である。体部外面は、上半では縦方向、下半では横方向のハケを施す。把手の有無は不明である。

605 ～ 625 は、甕の口縁部である。残存度の低いものは鍋の可能性のあるものも含まれているが、不明のものは便宜上甕として報告する。いずれも把手の有無は不明である。

605 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。頸部内面にはハケを施す。

606 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にはケズリとハケ、体部外面には縦方向のハケを施す。

607 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にはハケを施し、その後にケズリを施すようであるが、不明瞭である。体部外面にはハケを施した後、ユビオサエを施す。

608 は、口縁部外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面の調整はケズリの可能性があるが不明瞭である。体部外面は、縦方向のハケを施す。

609 は、体部内面にハケを、体部外面に縦方向のハケを施す。頸部内面にススが付着する。

610 は、体部内外面にナデを施すようであるが、不明瞭である。

611 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にケズリを、体

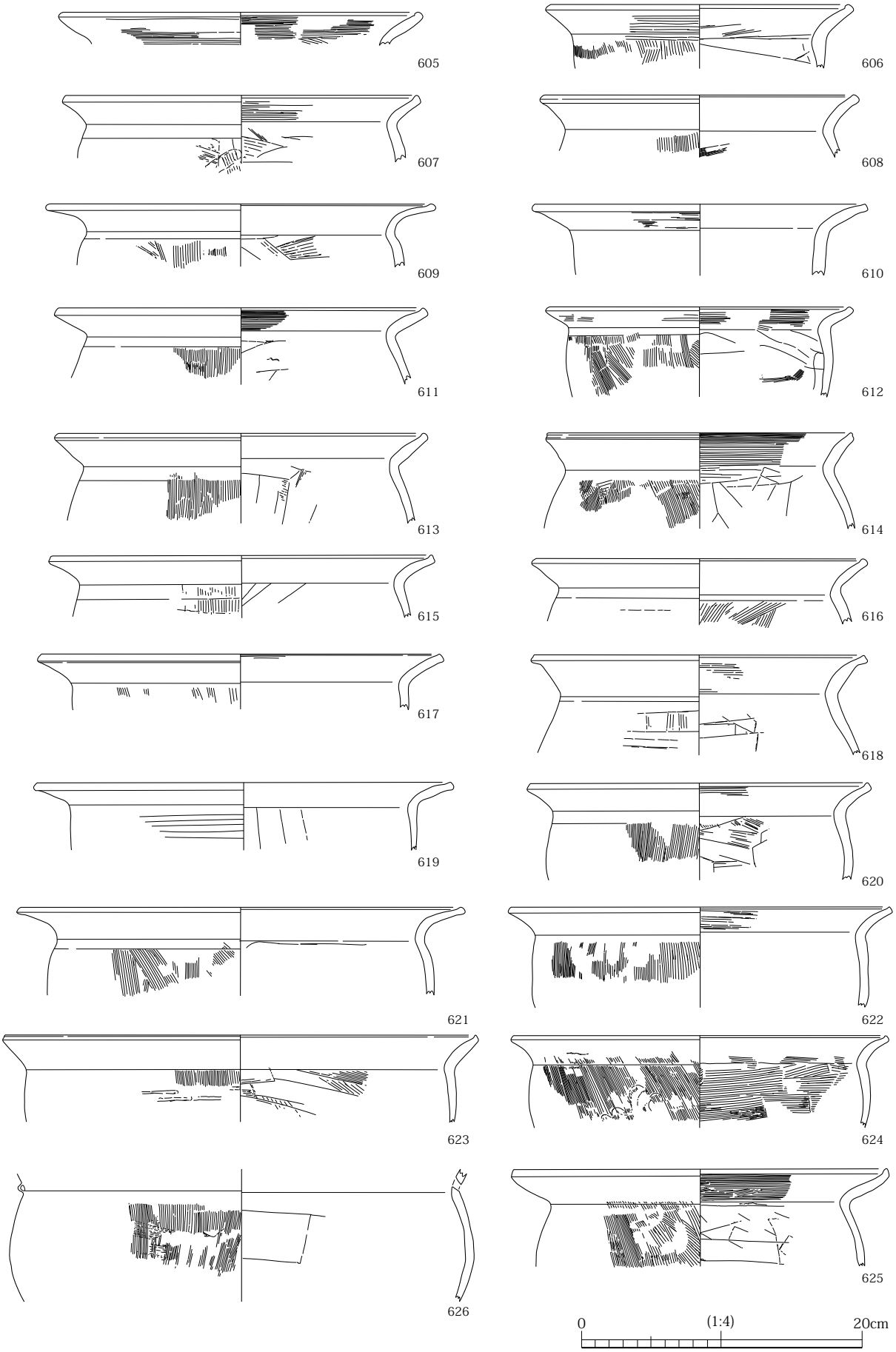


図 93　09017-1 区他土坑 001 出土土器（5）

部外面に縦方向のハケを施す。

612 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面にハケを、体部外面に縦方向のハケを施す。

613 は、体部内面にハケを、体部外面に縦方向のハケを施す。

614 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられ、端部は沈線状になる。体部内面にケズリを、体部外面に縦方向のハケを施す。

615 は、体部内面にナデを施すようであるが、不明瞭である。体部外面に縦方向のハケを施す。口縁端部に黒斑がみとめられる。

616 は、体部内面にハケを施す。体部外面にもハケを施すようであるが、不明瞭である。

617 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面の調整は摩滅により不明である。体部外面は、縦方向のハケを施す。

618 は、体部内面にケズリを施す。体部外面は縦方向のハケを施した後にナデを施すようであるが、不明瞭である。

619 は、体部内面はケズリの後ナデを施す。体部外面は、横方向の工具痕がみとめられるが、不明瞭である。

620 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はハケの後ナデを施す。体部外面は、縦方向のハケの後ナデを施す。

621 は、体部内面にナデを、体部外面に縦方向のハケを施す。

622 は、口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面の調整は摩滅により不明である。体部外面は、縦方向のハケを施す。

623 は、口縁部がひずんでおり口径は不確定である。体部内面はハケの後ナデを施す。体部外面は縦方向のハケの後ナデを施す。

624 は、体部内面にハケを施す。体部外面は、縦方向のハケの後ナデを施す。

625 は、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内面はケズリの後ナデを施す。体部外面は、縦方向のハケを施す。

626 は、甕である。体部内面にナデを、体部外面に縦方向のハケを施す。頸部に 1 孔をもつ。斜め方向に内側から穿孔されている。把手の有無は不明である。

以上のように、土坑 001 から出土した甕、鍋は、長胴甕 1 点（580）と胴部の張る形状の 1 点（581）を除くと、甕としたものも比較的器高が低い。これら器高の低い一群は、口縁端部がやや肥厚する形状、口縁部内外面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる点、体部外面に上半に縦方向、下半に横または斜め方向のハケを施す点等、共通性が高く、同一の技法のもとに製作された一群と考えられる。摩滅の著しいものも多いが、調整の残りの良い個体の特徴からは、体部内面調整はハケの後ケズリやナデを施す、体部外面調整は上半の縦方向ハケの後に下半の横方向または斜め方向のハケを施すという技法が抽出できる。また、大きな特徴の 1 つである把手については、

１孔のもの、無孔のものの両者があり、前者には、上方の口縁部に孔をもつものともたないものがある。これらの差異と形態とには明確な相関はうかがえず、どのような機能差があったのかは明らかでない。把手の方向数については、判明する資料は２点で、どちらも３方向である（589・597）。土坑 001 からは、すべてを図化することはできなかったが、甕または鍋の把手片、口縁部片が多数出土しており、孔をもつ口縁部も出土している。統計的な分析を行えていないが、口縁部の残存度と点数に比して相当数の把手が出土しており、孔をもつ口縁部片も１孔の把手と対応するものと考えられる。したがって、把手数の不明な甕、鍋についても、３方向に把手をもつ可能性が高い。３方向に把手をもつ甕、鍋の類例は現段階では確認できておらず、製作地や、分布範囲の検討が課題である。また、これら器高の低い一群は、使用痕跡がほとんどみとめられないことから、日常的に使用したものではない可能性が高い。土坑 001 周辺の僧侶による活動に関わるものである可能性も考えられる。

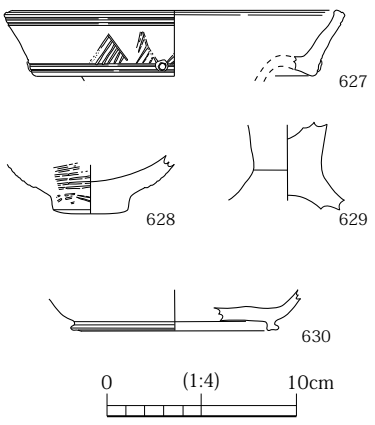


図 94　09017-1 区他落ち込み 004・137 出土土器

甕、鍋は、口縁部形態等から８世紀に位置づけられる。

以上のように、土坑 001 から出土した古代の土器はいずれも８世紀に位置づけられる。また、杯、鉢類の大半は８世紀後半に位置づけられ、前半に限定できる土器はない。以上より、詳細な時期比定は困難な甕、鍋も含め、８世紀後半の土器群と考えられ、これを土坑の機能時期、すなわち、土坑への土器、瓦の廃棄時期と推定できる。

落ち込み 004・137 出土土器（図 94）　落ち込みからは、少量の須恵器、土師器、弥生土器が出土した。このうち、遺構の時期を示す可能性のある古代の土器のほか、混入遺物であるが、特徴的なものを含め、４点を報告する。

627 ～ 629 は、弥生土器である。落ち込み 137 から出土した。627 は、口縁部である。外面に、沈線と三角形状の線刻文、竹管円形浮文を施す。複合口縁壺または淡路型器台で、庄内式併行期に位置づけられる。628 は、甕底部である。外面に右上がりのタタキを施す。内面にコゲが付着する。平底である。後期～庄内式併行期に所属する。629 は、脚台である。外面にユビオサエがみとめられる。製塩土器の可能性があるが、二次焼成の痕跡はみとめられない。

630 は、須恵器杯Ｂである。落ち込み 004 から出土した。８世紀後半に位置づけられる。

小結　奈良時代遺構検出面の遺構出土土器は、土坑 001 からの出土が大半で、その他の遺構からは所属時期を決定するに十分な資料は出土していない。出土瓦、切り合い関係や埋土より、その他の土坑、溝については同時期と考えられる。落ち込みについては、８世紀より新しい遺物は出土していないものの、土坑 001 埋没後の堆積である、直上の第Ⅷ層に埋土が類似するといった点

から平安時代以降に所属する可能性もある。

（３）包含層出土土器（図 95）

包含層出土遺物は、その形成時期を示すものを中心とし、それ以前の時期の遺物については特徴的なものを報告する。

撹乱・基本層序第Ⅱ・Ⅲ層出土土器　撹乱および作土等現代の層出土のものであるが、特徴的なものを６点報告する。土層観察用トレンチ等で下層と一緒に取り上げた遺物もあるが、基本層序第Ⅲ層以上に含まれていた可能性のある遺物はここで報告する。

631 は､須恵器擂鉢である。基本層序第Ⅱ層以下から出土した。14 世紀後半に位置づけられる。

632 は、須恵器甕である。基本層序第Ⅲ・Ⅵ層から出土した。小片であるが、奈良時代に所属する可能性がある。633 は、須恵器鉢である。撹乱から出土した。残存度が低く、口径は不確定である。８世紀後半に位置づけられる。634 は、須恵器壺である。基本層序第Ⅲ層から出土した。奈良時代に所属する可能性がある。

635 は、土師器甕である。基本層序第Ⅱ層から出土した。残存度が低く、口縁部径は不確定である。口縁部内面に強いヨコナデによる線状痕がみとめられる。体部内外面はナデを施す。口縁部内面にススが付着する。奈良時代に位置づけられる。

636 は、弥生土器底部である。基本層序第Ⅱ層から出土した。底部は平底であるが、凹凸が顕著である。壺と考えられる。

以上のように、現代の層からの出土ではあるが、須恵器鉢、土師器甕等奈良時代の土器が出土しており、下層の奈良時代遺構検出面の土器と共通性がみとめられることから、下層の遺構に由来するものである可能性がある。

基本層序第Ⅴ・Ⅵ層出土土器　基本層序第Ⅴ・Ⅵ層は、一体で掘削した部分があること、図化できる出土遺物が少量であることより、あわせて報告する。

基本層序第Ⅴ・Ⅵ層からは、瓦器、須恵器、土師器、弥生土器が出土しており、基本層序第Ⅵ層に限定できる遺物にも瓦器がみられることから、遺物では時期差がみられない。中世の遺物のほか、混入遺物も含め、９点を報告する。

637 は、土師器小皿である。「て」の字状口縁で、12 世紀に位置づけられる。

638・639 は、須恵器杯蓋である。外面に自然釉がみとめられる。640 は、須恵器杯身である。638 は TK47 に、639 は TK217 に、640 は TK209 に位置づけられる。

641 は、土師器蛸壺である。体部内外面にナデを施す。

642 は、弥生土器底部である。底部中心からややずれた位置に 1 孔をもつ。体部外面に右上がりのタタキを施す。有孔鉢または甕と考えられる。後期～庄内式併行期に所属する。

643 ～ 645 は、弥生土器脚台である。643 は、外面に、不明瞭であるがタタキを施した後、ナデを施す。645 は、外面に左上がりのタタキを施す。644 は、外面が赤色～黒色に変色しており、製塩土器の可能性がある。643・645 も製塩土器の可能性があるが、二次焼成の痕跡はみとめら

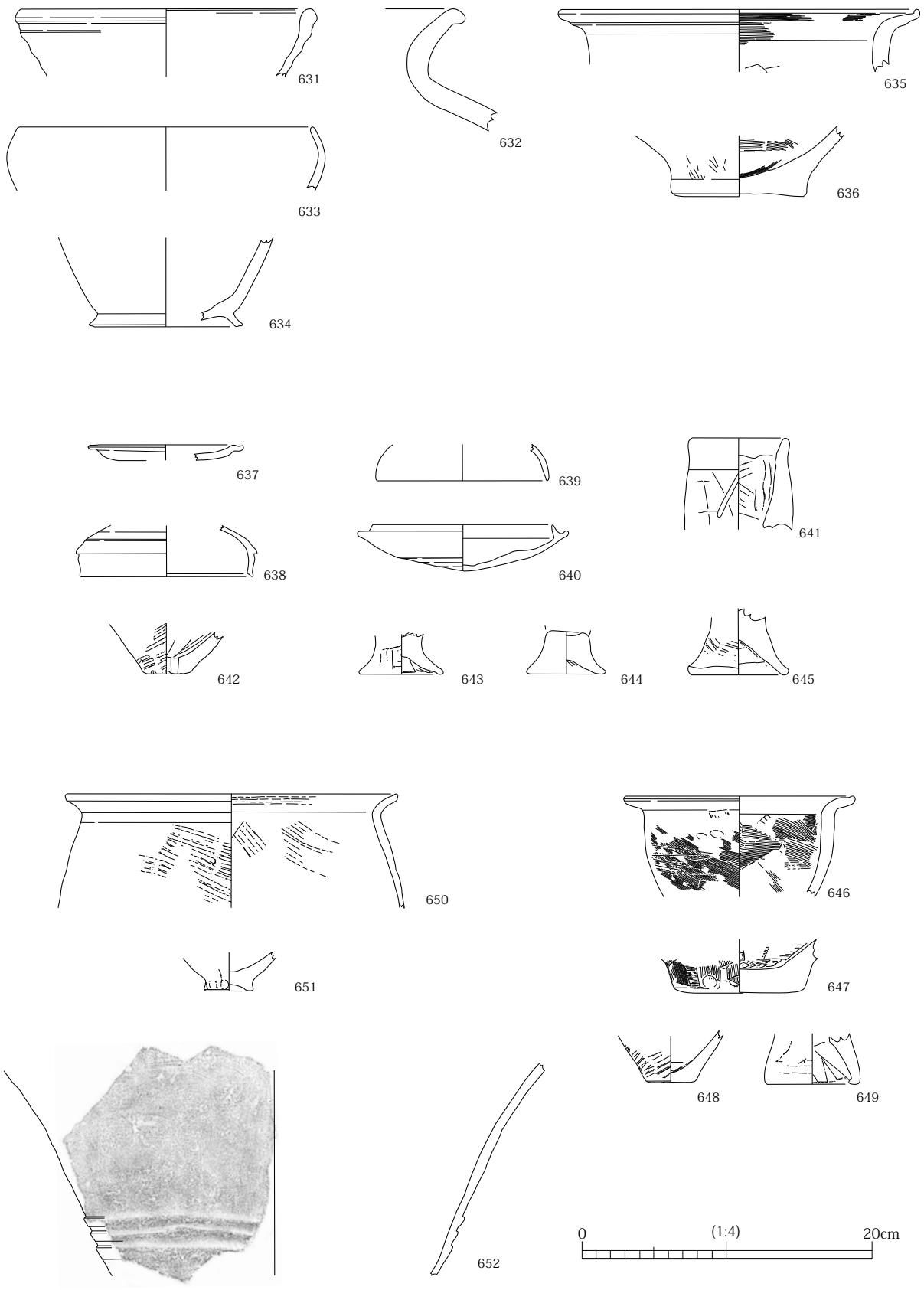


図 95　09017-1 区他包含層出土土器

れない。

基本層序第Ⅴ・Ⅵ層からは、弥生時代から中世の遺物が出土しているが、下面の中世遺構検出面の鋤溝からは近世の磁器が出土している。堆積後に耕作の影響で下層から出土した可能性もあるが、層の形成時期自体が近世に下る可能性もある。

基本層序第Ⅶ・Ⅷ層出土土器　基本層序第Ⅶ・Ⅷ層は、一体で掘削した部分があること、図化できる出土遺物が少量であるため、あわせて報告する。

基本層序第Ⅶ・Ⅷ層からは、須恵器、土師器、弥生土器が出土しており、遺物では時期差がみられない。混入遺物も含め、４点を報告する。

646 は、土師器甕である。体部内外面にハケを施す。体部外面にススが付着する。

647 ～ 649 は、弥生土器である。647 は、弥生土器底部である。平底である。壺と考えられる。648 は、甕底部である。外面に右上がりのタタキを施す。二次焼成により外面が赤色に変色する。平底である。後期～庄内式併行期に所属する。649 は、製塩土器脚台である。脚部外面にナデを施し、裾部は折り返しがみとめられる。二次焼成により脚部内面が赤色に変色する。後期後葉～庄内式併行期に所属する。

基本層序第Ⅶ・Ⅷ層からは、弥生時代から奈良時代の遺物が出土しているが、第Ⅶ層上面で中世の遺構を検出していることから、層の形成時期が平安時代以降に下る可能性もある。

基本層序第Ⅸ層出土土器　基本層序第Ⅸ層からは、少量の縄文土器と弥生土器が出土した。層の形成時期を遡る遺物が含まれている可能性も考えられるが、３点を報告する。

650 は、弥生土器甕である。体部外面にハケを施す。中期中葉頃に位置づけられる。

651 は、弥生土器底部である。外面にユビオサエがみとめられる。上げ底状で、鉢の可能性が考えられる。後期～庄内式併行期に所属する。

652 は、縄文土器深鉢である。外面に凹線３条を施す。後期後葉の宮滝式期に位置づけられる。

基本層序第Ⅸ層からは、弥生土器、縄文土器が出土している。他の調査区の調査成果もあわせると、層の形成時期は弥生時代後期以前と考えられるが、形成に要した時期幅は明らかでない。

第２項　土製品（図 96）

土製品は１点が出土した。

653 は、灯篭形の箱庭道具である。基本層序第Ⅲ・Ⅵ層から出土した。下部を一部欠損する。

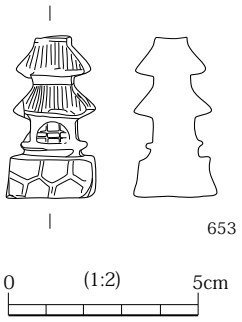


図 96　09017-1 区他出土土製品

第３項　瓦

はじめに、各地区の出土点数、重量を種別ごとに示す。

09017-1 区から出土した瓦は、文字瓦（平瓦）が 4 点で計 3176g、軒丸瓦が 20 点で計 7100g、軒平瓦が 6 点で計 6251g、道具瓦が 10 点で計 4820g、丸瓦が 318 点で計 42969g、平瓦が 974 点で計 178934g、計 1332 点で 243250g である。

10078-1 区から出土した瓦は、軒丸瓦が 1 点で 29g、道具瓦が 2 点で計 491g、丸瓦が 61 点で計 5549g、平瓦が 170 点で計 25620g、計 234 点で 31689g である。

11001-8 区では、瓦は撹乱から出土したもののみで、少量であったため、出土量は計測していない。

09017-1 区は出土点数が多く、特に、調査区南側に位置する奈良時代遺構検出面の土坑 001・046 からの出土が多かった。また、これらの土坑の周辺のみ、現代の層や撹乱も含め、上層の包含層からも多数の瓦が出土し、後述するように諸特徴から同時期の可能性が高いと考えられるものであった。したがって、もともと土坑内に含まれていた遺物が、後世の耕作等の影響により上層から出土したものと考えられる。一方、調査区の北部では瓦の出土量は少なく、11001-8 区でも少量である。10078-1 区は、09017-1 区と同様南部では比較的多く出土したものの、09017-1 区調査時に土坑周辺は調査区を拡張して調査を行っていたため、10078-1 区調査時には 09017-1 区ほど集中した出土はみられなかった。また、10078-1 区は、古代～中世のものが多く出土しているものの、大半は、撹乱や、古代から中世の遺物を含む包含層から出土している。出土遺物の一括性はみとめられず、特に特徴的なもの以外は、個々の詳細な時期比定は困難である。ここでは、09017-1 区の特に奈良時代遺構検出面の土坑 001・046 内または土坑周辺である調査区南側から出土した瓦を中心に、時期比定の可能なものや残存度の高いもの、製作技法を示すもの等特徴的なものを報告する。また報告外のものも含め、一括性が高いと考えられる土坑および周辺出土遺物について、形態や製作技法等の属性を整理し、その特徴を検討する。10078-1 区出土瓦については、特徴的なもののみ報告する。

文字瓦（図 97・98、巻頭図版 1、図版 35・36）　4 点が出土し、すべて図化した。654 ～ 656 は土坑 001 から、657 は調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。

654 は、広狭両端面と 1 側面が残存する。凹面に布目が残り、縦糸 24 本／３cm、横糸 28 本／３cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。凹面一部に縦方向のナデがみとめられ、両端面付近に横方向のケズリ、側縁付近に縦方向のケズリを施す。狭端面付近のケズリが側縁付近のケズリより後に施されたようであるが、断定できない。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定５粒／３cm、縄本数は推定 10 本／３cm である。全面に横方向のケズリを施した後、主に広端側に縦方向のナデを施す。一部に布目痕、指紋がみとめられる。広狭両端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。最大厚は 2.2cm とやや厚い。焼成はやや良で、一部は半須恵質になる。凸面側では破損部を境に色調が異なっており、破損による分割後に二次焼成を受けた可能

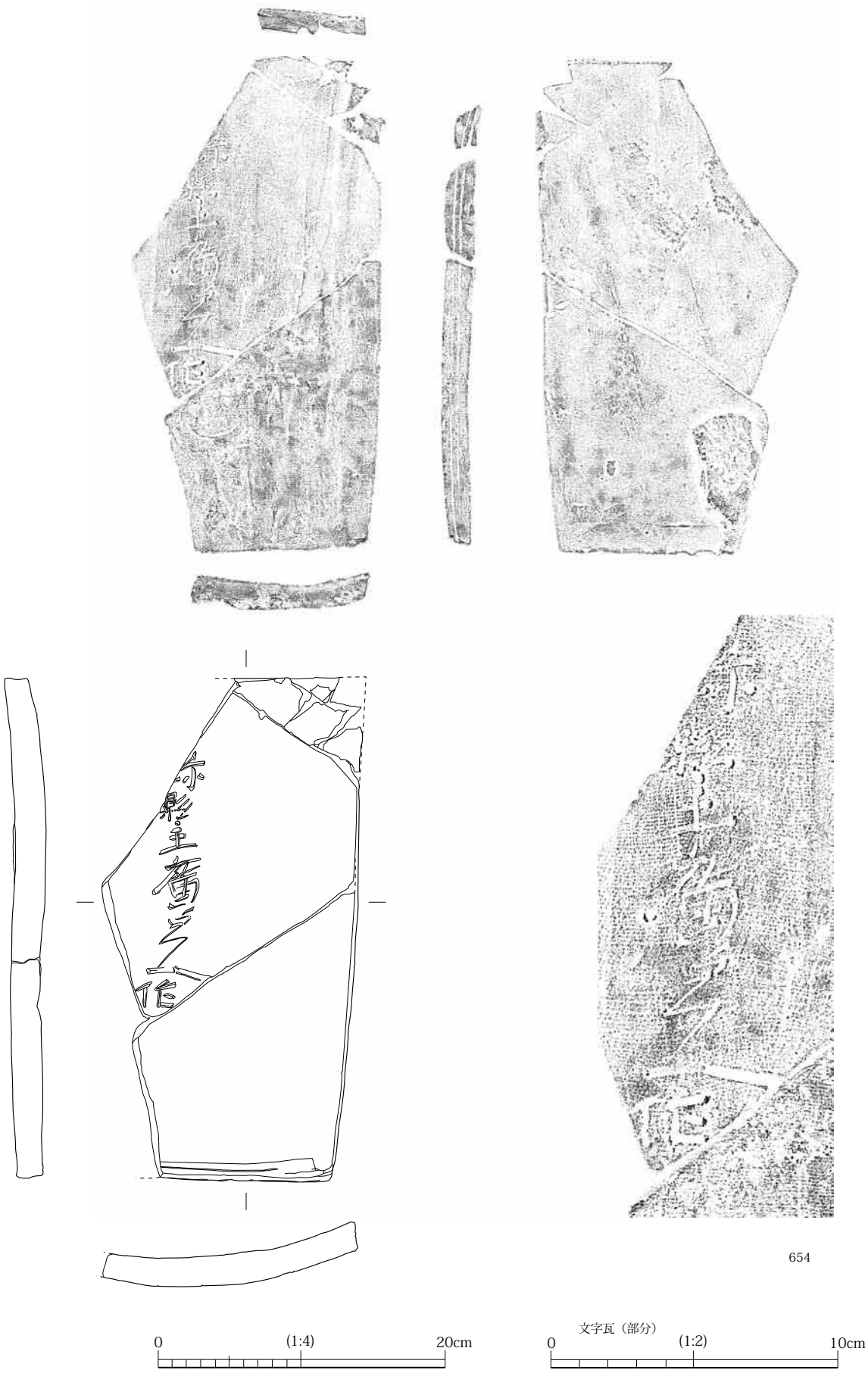


図 97　09017-1 区他出土文字瓦（1）

図 98　09017-1 区他出土文字瓦（2）

性がある。凹面の一部には土の付着がみとめられるが、土が焼けていないことから、焼成時の付着ではなく、葺き砂である可能性も考えられる。文字は、焼成前に凹面に刻まれる。「珎縣主廣足作」と刻まれ、「作」の字はやや左に寄る。「珎縣主廣足」という人名との意味合いを区別するためであるか、文字を刻んだ場や人物の違いによるものと考えられる。また、「作」のみ他の字より細く、工具が異なっている可能性もあるが、工具の向きによるものであるとも解釈できる。

655 は、広端面と 1 側面が残存する。凹面は右下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 22 本／３cm、横糸 26 本／３cm である。幅は不明であるが、枠板圧痕がみとめられ、凸凹が顕著である。広端付近から文字上部にかけて縄叩きの痕跡がわずかにみとめられる。縄目粒数は推定８粒／３cm、縄本数は推定 12 本／３cm である。縄目は横方向に並ぶ。縄叩き後に、文字周辺のみに縦方向のナデを施す。文字周辺以外では枠板圧痕による凸凹が顕著であることから、文字を刻む部分のみを縄叩きとナデによって平坦に整えた可能性が考えられる。端面付近には横方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は８粒／３cm、縄本数は推定 15 本／３cm である。一部に縦方向のハケ状痕跡とナデがみとめられる。広端面は調整を施さず、面取りもないが、隅部を斜めに切断する。側面はケズリを施し、凹面側に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。文字は、焼成前に凹面に刻まれる。「坂合部連前」と刻まれ、欠損部に文字が続くものと考えられる。凹面の縄叩きやナデが文字を刻む部分を平坦にするための調整であれば、そうした調整の可能な粘土の乾燥状態で文字瓦とするための準備がなされたことになり、文字瓦の刻まれた場、さらには文字瓦の性格を示唆する資料である。また、「部」を「ア」ではなく「マ」のように記していることから、８世紀以降に所属すると推定できる。

656 は、端面、側面とも欠損する。部位は不明のため、文字の向きにあわせて図示した。凹面は、図の右下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 24 本／３cm、横糸 22 本／３cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向のナデを施す。凸面は縄叩きを施した後、横方向のケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。文字は、焼成前に凹面に刻まれる。「讃美」と刻まれ、欠損部に文字が続くものと考えられる。２文字目は「善」の可能性もあるが、和泉寺跡推定寺域外の北側調査で「讃美塞」と刻まれた文字瓦が出土しており（和泉市教育委員会 1980a：図版第９―30）、この文字瓦と字体が類似することから、「讃美」と判断した。人名の一部と考えられ、下にさらに文字が続くとすると、「讃美塞」と刻まれていた可能性がある。

657 は、１側面が残存する。部位は不明のため、文字の向きにあわせて図示した。凹面は、糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 24 本／３cm、横糸 26 本／３cm である。幅 2.3cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きの後、横方向のケズリまたはナデを施す。縦方向のナデ状痕跡もみとめられる。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成は良で、須恵質である。文字は、焼成前に凹面に刻まれる。一部のみが残存しているため文字の内容はこの資料のみでは判断できないが、656 の２文字目に類似することから、「美」

と刻まれていた可能性がある。

09017-1 区他からは、以上 4 点の文字瓦が出土し、第 5 章で報告した 09017-2 区他出土資料とあわせ、計 5 点の文字瓦が出土している。これらは、「珎縣主廣足」「坂合部連前」「讃美」「宮」と、人名または人名の一部と考えられる資料である。文字瓦の意味については、5 点全体から、第 8 章であらためて検討することとする。

軒丸瓦（図 99・100、巻頭図版 3、図版 36・37） 21 点が出土し、12 点を図化した。瓦当の残存するものはすべて図化し、瓦当を欠損するものは、調整の痕跡の明瞭なものを中心に図化した。

658 は、土坑 001 から出土した。瓦当径は 13.6cm である。八葉蓮華文で、単弁を二分する。蓮子は 1 ＋ 5 である。丸瓦部凸面には縦方向のケズリを施した後、瓦当付近のみ横方向のケズリを施す。凹面は布目が残り、縦糸 24 本／ 3 cm、横糸 26 本／ 3 cm である。縦方向にケズリを施した後、側縁付近にナデを施す。瓦当接合部には刻みがみとめられ、接合後にナデを施す。側面はケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。和泉寺跡既存資料に類例がみとめられる。

659 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。瓦当径は推定 14.0cm 前後である。単弁を二分する八葉蓮華文で、蓮子は推定 1 ＋ 5 である。丸瓦部凸面は瓦当付近に横方向のケズリを施す。凹面は瓦当接合後にナデを施す。焼成は良で、須恵質である。658 と同型である。

660 は、調査区南部で基本層序第Ⅳ層から出土した。瓦当径は推定 14.0cm 前後である。単弁を二分する八葉蓮華文と推定できる。丸瓦部凸面には縦方向のケズリを施した後、瓦当付近のみ横方向のケズリを施す。凹面は布目が残り、縦糸推定 30 本／ 3 cm、横糸推定 27 本／ 3 cm である。瓦当接合後にケズリを施す。側面はケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。658 と同型と推定できる。

661 は、調査区南部で基本層序第Ⅱ層から出土した。瓦当径は 16.0cm である。複弁八葉蓮華文であるが、単弁になる部分が 2 箇所みとめられる。外区珠文は 24 と推定できる。鋸歯文はない。蓮子は 1 ＋ 8 である。丸瓦部凸面にはナデを施すようであるが不明瞭である。凹面はナデを施す。瓦当接合部には刻みがみとめられ、接合後にナデを施す。焼成は不良である。

662 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。瓦当径は推定 16.0cm 前後である。外区は鋸歯文で、間弁状の痕跡がわずかに残る。焼成は良で、須恵質である。本書で報告する資料の中では、09017-2 区他出土の岡寺式のもの（525）に類似する。

663 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。瓦当径は推定 15.0cm 前後である。欠損により文様は不明である。丸瓦部凸面には横方向のケズリを施す。焼成は不良でいぶし状になる。文様は不明であるが、外縁が狭く高い点は、岡寺式のもの（525）に類似する。

664 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。瓦当径は推定 14.0cm 前後である。外区に珠文が 4 残存し、その外側にも珠文状の痕跡がみとめられるが、文様であるか不明瞭である。焼成は良である。珠文状の痕跡が文様ではないとすると、本書報告の出土資料の中では複弁八葉蓮華文のもの（661）に類似する。

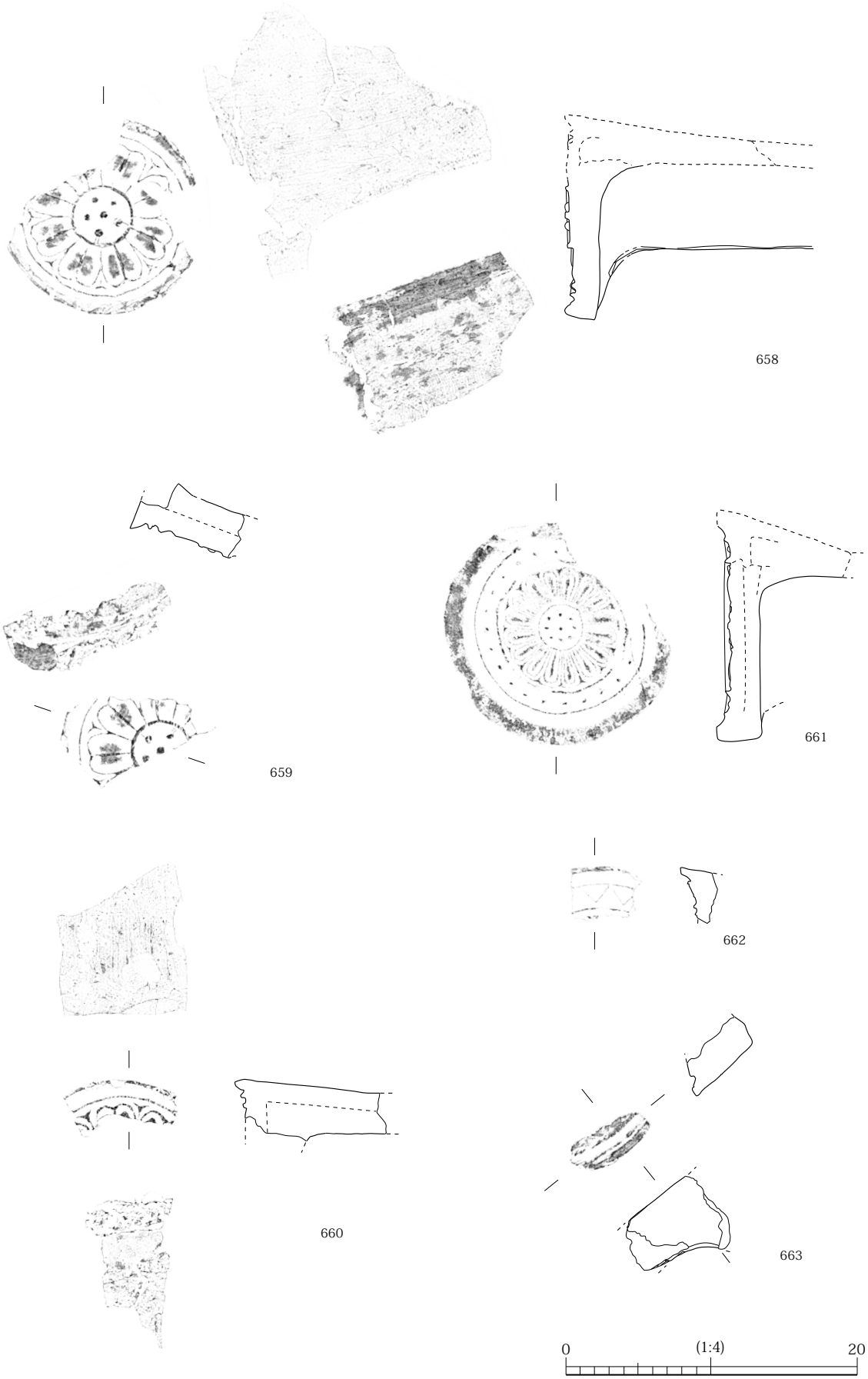


図 99　09017-1 区他出土軒丸瓦（1）

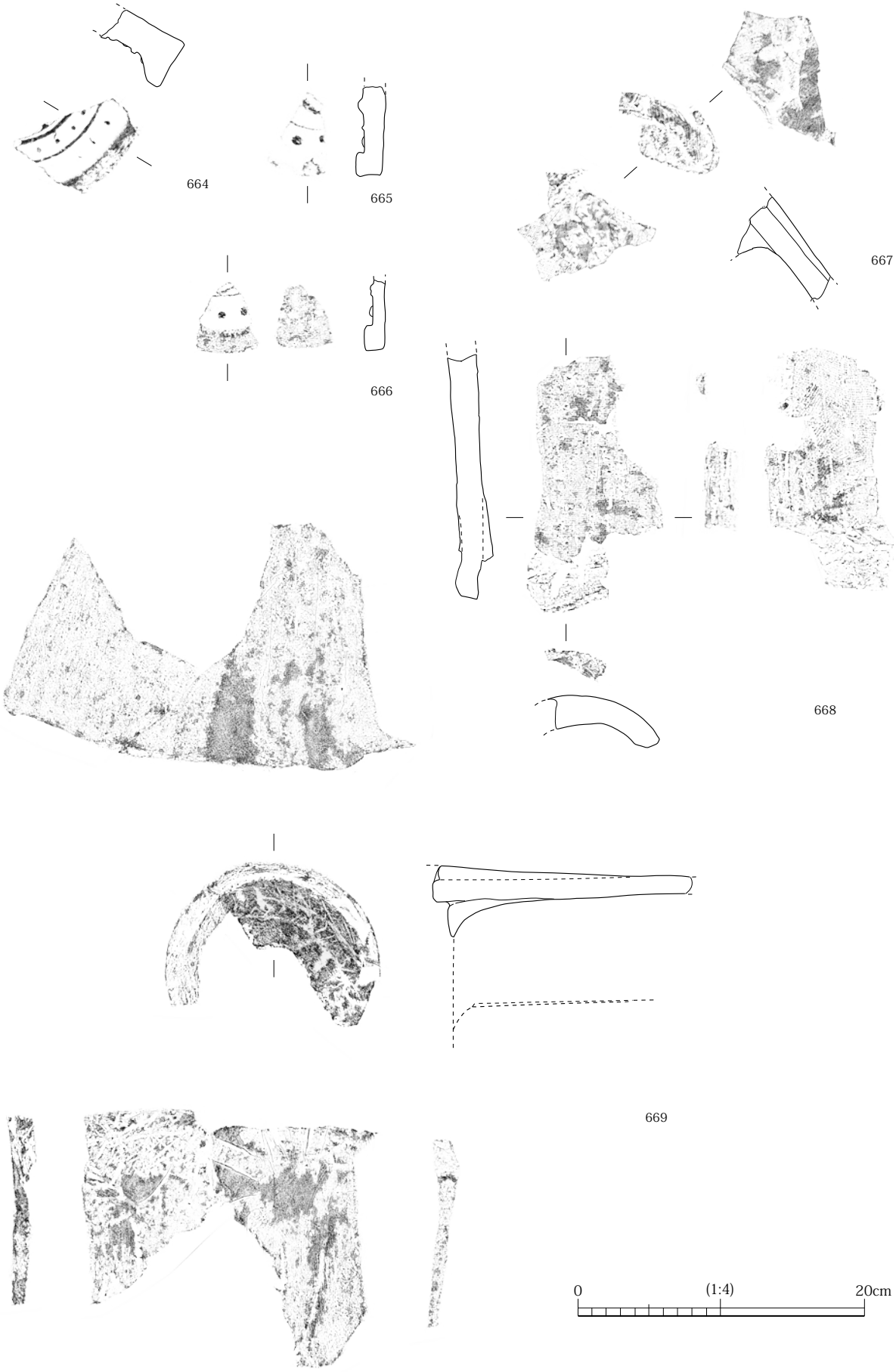


図 100　09017-1 区他出土軒丸瓦（2）

665 は、調査区北部で基本層序第Ⅵ層から出土した。瓦当径は推定 14.0cm 前後である。巴文で、圏線、珠文をめぐらす。室町時代頃に位置づけられる。

666 は、撹乱から出土した。瓦当径は推定 14.0cm 前後である。外区に珠文をめぐらし、不明瞭であるが、圏線状の痕跡がみとめられる。中世のものと考えられる。

667 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。瓦当は剥離する。丸瓦部凸面には縦方向のケズリを施す。凹面は布目が残り、縦糸推定 24 本／ 3 cm、横糸 30 本／ 3 cm である。丸瓦端面と瓦当接合部にはケズリ状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。側面はケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。

668 は、土坑 001 から出土した。瓦当は剥離する。丸瓦部凸面には縦方向のケズリを施す。凹面は布目が残り、縦糸推定 32 本／ 3 cm、横糸推定 22 本／ 3 cm である。端部付近にはケズリを施す。瓦当接合後にナデを施す。側面はケズリを施す。焼成は良で、須恵質である。

669 は、調査区南部で基本層序第Ⅱ層から出土した。瓦当が剥離するが、瓦当径は 16.0cm と推定できる。丸瓦部凸面には縦方向の工具痕がみとめられる。凹面は布目が残り、縦糸推定 22 本／ 3 cm、横糸推定 24 本／ 3 cm である。縦方向に布綴じ合せ目がみとめられる。凹面瓦当接合部には斜格子状の刻みを施し、丸瓦端部から側面にかけても刻みがみとめられる。接合後に凹面側にナデを施す。焼成は不良である。

以上のうち、中世の巴文のものを除く古代の軒丸瓦では、本書報告の資料全体で、瓦当文様からは、単弁を二分する八葉蓮華文（658）、複弁八葉蓮華文（661）に加え、第 5 章で報告した 09017-2 区他出土の複弁五葉蓮華文（525）の計 3 種類が出土した。以下では残存度の低い資料についてもこれらとの比較から文様を推定する。

659・660 は単弁を二分する八葉蓮華文（658）と同型であり、同范の可能性もある。すべて須恵質である。667 は瓦当が欠損するものの、焼成、調整が共通することから同じ文様をもつ可能性が考えられる。

664 は、外区のみが残存するが、複弁八葉蓮華文（661）と同じ文様をもつ可能性が考えられる。669 についても、瓦当径と、焼成が共通することから、同じ文様をもつ可能性が考えられる。

662 は、外区のみが残存するが、複弁五葉蓮華文（525）と同じ文様をもつ可能性があり、663 についても、外縁の特徴から同じ文様をもつ可能性がある。

以上のように、出土した古代の軒丸瓦は、3 種類に分類可能である。このうち、単弁を二分する八葉蓮華文、複弁五葉蓮華文の 2 種については、和泉寺跡既存資料に同型のものがみとめられ、同范の可能性もある。複弁八葉蓮華文のものについては、現在のところ類例を確認していない。時期については、複弁八葉蓮華文、複弁五葉蓮華文については、8 世紀前半に位置づけられる。単弁を二分する八葉蓮華文は、文様からの時期決定が困難である。瓦当接合部の位置が下がっていることからは前 2 種と同様に 8 世紀前半頃と考えられるが、7 世紀に遡る可能性もある。

図化していない 9 点は、奈良時代遺構検出面の土坑 001 または調査区南部で基本層序第Ⅴ層か

ら出土した。いずれも瓦当部は欠損するが、凸面に瓦当接合時の粘土がみとめられることから、軒丸瓦と判断できる。凸面に縦方向ケズリを施すものが５点、横方向ケズリを施すものが２点ある。凹面の残る８点はいずれも布目が残存し、うち３点は、側面付近に縦方向のケズリを施す。また、側面の残存する６点は、いずれも側面にケズリを施す。焼成は、良で須恵質のものが６点、やや良のものが２点、不良のものが１点である。これら９点、および、図化したが瓦当文様を推定できない２点（667・668）の製作技法は、先に瓦当文様から３種に分類した軒丸瓦と共通し、出土位置も、土坑 001 または調査区南部包含層である。以上より、軒丸瓦は、中世の２点を除くと、土坑 001 または土坑 046 に廃棄された一群であった可能性が高い。

軒平瓦（図 101、巻頭図版３、図版 38）　６点が出土し、すべて図化した。

670 は、土坑 001 から出土した。瓦当部一部と側面一部を欠損する。瓦当部は摩滅が著しいが、蕨手文と鋸歯文である。上外区、脇区はない。瓦の幅は、広端幅 24.2cm、瓦当部で推定 26.8cm である。瓦当縦幅は 4.1cm、顎幅 4.6cm、顎高さ 0.2 ～ 0.5cm の低い段顎である。凹面は布目が残り、縦糸 20 本／３cm、横糸 22 本／３cm である。狭端部付近にナデを施すようであるが、不明瞭である。側縁付近に調整を施し、瓦当部付近に横方向のケズリを施す。幅 2.0 ～ 2.4cm の枠板圧痕が 10 枚分みとめられる。凸面は、縄叩きを施し、縄目粒数は推定６粒／３cm、縄本数は推定 15 本／３cm である。縄叩き後に全面にナデを施す。端面付近と顎の瓦当部付近に横方向のケズリを施す。端面はケズリを施し、面取りはない。隅部凹面側にユビオサエ状の痕跡がみとめられる。両側面ともケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。左側面に分割破面状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。焼成は不良でいぶし状になる。和泉寺跡既存資料に類例は確認していない。

671 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。１側面が残存し、凹面は欠損する。鋸歯文である。顎幅 6.4cm、顎高さ 0.3cm の低い段顎である。凹面側剥離面に糸切り痕状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。凸面顎部付近と顎部に横方向のケズリを施し、顎部の側縁付近のみ縦方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成は良で、須恵質である。本書で報告する資料の中では、蕨手文と鋸歯文のもの（670）に類似する。

672 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。１側面が残存し、凹面は欠損する。鋸歯文である。顎幅 5.1cm、顎高さ 0.4cm の低い段顎である。顎部に横または斜め方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成は良で、須恵質である。本書で報告する資料の中では、蕨手文と鋸歯文のもの（670）に類似する。

673 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。均等唐草文であるが、上外区文様が半月形を呈し、釣鐘形の結節をもつ点が特徴的である。下外区は珠文である。瓦当縦幅は 6.1cm、顎幅 7.0cm、顎高さ 0.3cm の低い段顎である。凹面は布目が残り、縦糸 24 本／３cm、横糸 32 本／３cm である。幅 2.1 ～ 2.4cm の枠板圧痕がみとめられる。瓦当部付近に横方向のケズリを施す。顎部はナデを施し、瓦当部付近のみ横方向のケズリを施す。焼成はやや良でいぶし状にな

る。和泉寺跡既存資料に類例がみとめられる。

674 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。凹面は平瓦接合部で剥離する。均等唐草文で、釣鐘形の結節をもつ。下外区は珠文である。顎幅 7.0cm、顎高さ 0.4cm の低い段顎である。凹面側剥離面に左下を支点とする糸切り痕がみとめられるが、接合した平瓦からの圧痕の可能性もある。顎部は横方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成はやや良でいぶし状になる。673 と同型と推定できる。

675 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。凸面は接合部で剥離する。均等唐草文で、上外区文様は半月形を呈し、釣鐘形の結節をもつ。凹面は布目が残り、縦糸推定 26 本／３cm、横糸推定 30 本／３cm である。幅 2.2cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。一部にナデと横方向のケズリを施す。瓦当部付近に横方向のケズリを施すようであるが、不明瞭である。焼成は良である。673 と同型と推定できる。

平瓦は、瓦当文様では、蕨手文と鋸歯文のもの（670）、均等唐草文で、半月形の文様、釣鐘形の結節をもつもの（673）の２種類が出土した。以下では残存度の低い資料についてもこれらとの比較から文様を推定する。

674・675 は釣鐘形の結節をもつ均等唐草文のもの（673）と同型であり、同范の可能性もある。

671・672 は、鋸歯文のみが残存するが、蕨手文と鋸歯文のもの（670）と同じ文様をもつ可能性が考えられる。脇区の有無に違いがあるが、粘土が文様部全体に足りなかったことによるものと解釈すれば、同范の可能性もある。

以上のように、09017-1 区他出土の平瓦は、２種類に分類可能である。このうち、釣鐘形の結節をもつ均等唐草文のものについては、和泉寺跡既存資料に同型のものがみとめられ、同范の可能性もある。蕨手文と鋸歯文のものについては、現在のところ類例を確認していない。時期は、釣鐘形の結節をもつ均等唐草文のものについては、文様と顎形状から７世紀末～８世紀前半に位置づけられる。蕨手文と鋸歯文のものは、文様からの時期決定が困難であるが、顎形状から、釣鐘形の結節をもつ均等唐草文のものと同様、７世紀末～８世紀前半に位置づけられる。また、09017-2 区他出土の唐草文のもの（527）はこれら２種とは異なる文様である。詳細な時期比定が困難であるが、７世紀～８世紀に所属すると考えられ、前２者と同時期の可能性もある。また、平瓦のうち、凹面の残存するものは、いずれも枠板圧痕が確認できる。後述するように平瓦の大半は粘土板桶巻き作りであり、共通する諸特徴から、軒平瓦についても粘土板桶巻き作りと考えられる。この点からも、軒平瓦を８世紀前半以前に位置づけることができる。

道具瓦（図 102 ～ 104、図版 39・40） 12 点が出土し、すべて図化した。この他にも丸瓦や平瓦を分割した熨斗瓦等である可能性があるものが出土しているが、断定できないものについては、丸瓦または平瓦の項で報告する。

676 は、鴟尾である。調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。鰭部周辺であるが、鰭は欠損する。破損部に粘土紐接合痕がみとめられる。接合痕が山形となる向きに図化したが、上下逆

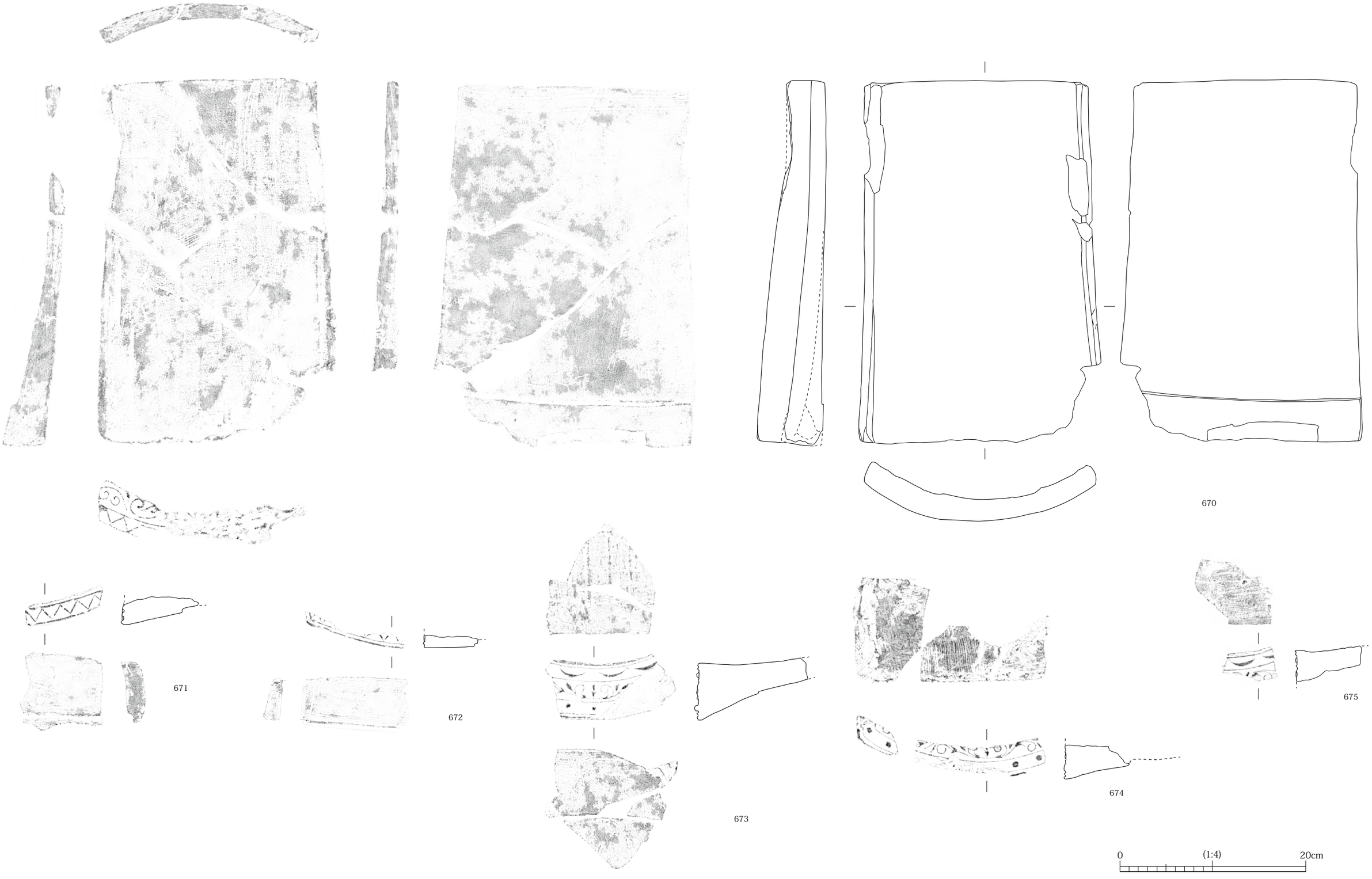


図 101　09017-1 区他出土軒平瓦

の可能性もある。傾きより、下部に近い側と推定できる。外面にケズリを、内面にナデを施す。焼成はやや不良で、いぶし状になる。破片であるが、和泉寺跡では鴟尾の出土は初である。

677 は、土坑 001 から出土した。図の上下面のみが残存し、周囲は欠損する。図上面にケズリがみとめられ、文様の可能性がある。焼成はやや不良で、いぶし状になる。676 と胎土、焼成が類似することから、鴟尾の可能性があり、同一個体の可能性もある。

678 ～ 687 は、後述のように、平瓦を分割したと考えられるものがあることことから、便宜上、平瓦の凹面にあたる面は凹面、反対側を凸面と呼称し、平瓦を分割したと断定できないものについても、布目の残る側を凹面、反対側を凸面と呼称する。

678 は、熨斗瓦である。土坑 001 から出土した。 1 端を欠損する。端部の幅は 8.7cm、最大厚 2.2cm である。凹面には布目が残り、縦糸 26 本／ 3 cm、横糸 32 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕が 4 枚分みとめられる。右側縁付近に縦方向の調整がみとめられる。凸面には全面にナデを施し、一部に工具痕状の痕跡がみとめられる。端面はケズリを施しており、沈線が 1 条みとめられる。文様として施されたものかは不明である。面取りはない。左側面は、凹面際に沈線が 1 条みとめられる。左側面の調整は不明瞭であるが、右側面はケズリを施す。両側面とも面取りはない。後述のように平瓦の大半は粘土板桶巻作りであり、広端幅 27.6 ～ 28.0cm、狭端幅 22.3 ～ 25.3cm で、完形のものの枠板圧痕は 11 ～ 12 枚程度と推定できる。したがって、粘土板桶巻作りの平瓦を焼成前に 3 分割したもので、残存部は狭端側と考えられる。左側面が垂直であるのに対し、右側面は凹面側に傾くこと、凹面の右側縁付近のみに縦方向の調整がみとめられることから、右側面が平瓦の側面にあたると推定できる。左側面の沈線は、分割の際の目印である可能性がある。湾曲が弱いことから、分割後に平らになるよう成形したものと考えられる。焼成はやや良で、いぶし状になる。

679 は、熨斗瓦である。調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。 1 端を欠損するが、両側面が開く形状である。最大厚 2.4cm である。凹面は、左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残るが、枠板圧痕は確認できない。左側縁付近に縦方向のケズリがみとめられる。凸面には縦方向のケズリを施す。端面はケズリを施し、凸面側に面取りを施す。両側面はケズリを施し、面取りはない。平瓦を焼成前に斜めに分割した可能性があるが、分割に関わる痕跡はみとめられず、枠板圧痕もみとめられないことから断定はできない。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

680 は、熨斗瓦である。調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。 1 端を欠損する。端部の幅は 9.3cm、最大厚 2.4cm である。凹面には布目が残り、縦糸推定 27 本／ 3 cm、横糸推定 24 本／ 3 cm である。不明瞭であるが、幅 2.5cm 前後の枠板圧痕が 4 ～ 5 枚分みとめられる。縦方向のケズリを施し、特に側縁付近に顕著である。左側縁から 2.5 ～ 3.0cm の位置に縦方向の撚紐痕跡がみとめられる。凸面は縄叩きを施した後、全面に不定方向のナデを施す。端面は藁状圧痕のような痕跡がみとめられるが不明瞭である。左側面は分割破面の可能性がある。右側面はケズリを施す。端面、両側面とも面取りはない。678 と同様、桶巻作りの平瓦を焼成前に 3 分割し

たもので、残存部は広端側と考えられる。凹面の撚紐痕跡は分割界線と考えられること、側面の傾きより、左側面が平瓦の側面にあたると推定できる。湾曲が弱いことから、分割後に平らになるよう成形したものと考えられ、凹面の削りも湾曲や凹凸の補正を目的としたものと考えられる。焼成はやや良で、いぶし状になる。

681 は、土坑 001 から出土した。1 端を欠損する。端部の幅は 8.1cm、最大厚 1.9cm である。熨斗瓦である。凹面には布目が残り、縦糸 28 本／3 cm、横糸 30 本／3 cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕が 3 枚分前後みとめられる。凸面は横方向の調整の後、一部に縦方向の調整を施す。端面はケズリを施すようであるが、不明瞭である。側面はケズリを施し、面取りはない。桶巻作りの平瓦を焼成前に分割したもので、枠板痕跡からは 4 分割の可能性が高い。焼成は良で、半須恵質である。

682 は、熨斗瓦である。調査区南部で基本層序第Ⅳ・Ⅴ層から出土した。1 端を欠損する。端部の幅は推定 18.0cm、最大厚 2.0cm である。凹面には布目が残り、縦糸推定 32 本／3 cm、横糸推定 32 本／3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。右側縁付近に縦方向のケズリを施した後、端面付近に横方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施した後、ほぼ全面に横方向のケズリを施す。左側面は、凹面側に分割裁面、凸面側に分割破面がみとめられる。端面、右側面はケズリを施し、面取りはない。桶巻作りの平瓦を焼成前に斜めに 2 分割したもので、分割にあたって分割裁線を入れている。残存部は広端側、右上隅部である。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

683 は、熨斗瓦である。調査区南部で基本層序第Ⅱ' 層から出土した。1 端を欠損する。端部の幅は推定 9.0cm、最大厚 2.3cm である。凹面には布目が残り、縦糸推定 28 本／3 cm、横糸推定 25 本／3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕が 4 ～ 5 枚分みとめられる。端面付近に横方向のケズリを、右側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は横方向のケズリを施す。端面調整は不明で、面取りはない。両側面ともケズリを施し、左側面は凹凸両面側縁に、右側面は凸面側縁に面取りを施す。桶巻作りの平瓦を焼成前に 2 分割または 3 分割したものである。凹面の右側縁付近に縦方向のケズリを施すことから、残存部は狭端側、左下隅部と考えられる。焼成はやや不良で、いぶし状になるが、一部はやや良で半須恵質である。

684 は、調査区南部で基本層序第Ⅱ' 層から出土した。1 端を欠損する。端部の幅は 3.8cm、最大厚 1.9cm である。凹面に、右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。不明瞭であるが布目が残り、幅 2.3cm 前後の枠板圧痕が 3 ～ 4 枚分みとめられる。凸面は横方向のケズリを施す。端面の調整は不明で、面取りはない。左側面は分割裁面がみとめられる。両側面ともケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。粘土板桶巻作りの平瓦を焼成前に加工したもので、形状より鬼瓦か隅木瓦の可能性が考えられる。左側面は枠板圧痕の方向と斜向することから、分割裁面は、平瓦製作時でなく、道具瓦への加工に伴うものと考えられる。また、湾曲が弱いことから、分割後に平らになるよう成形したものと考えられる。焼成は良で、須恵質である。

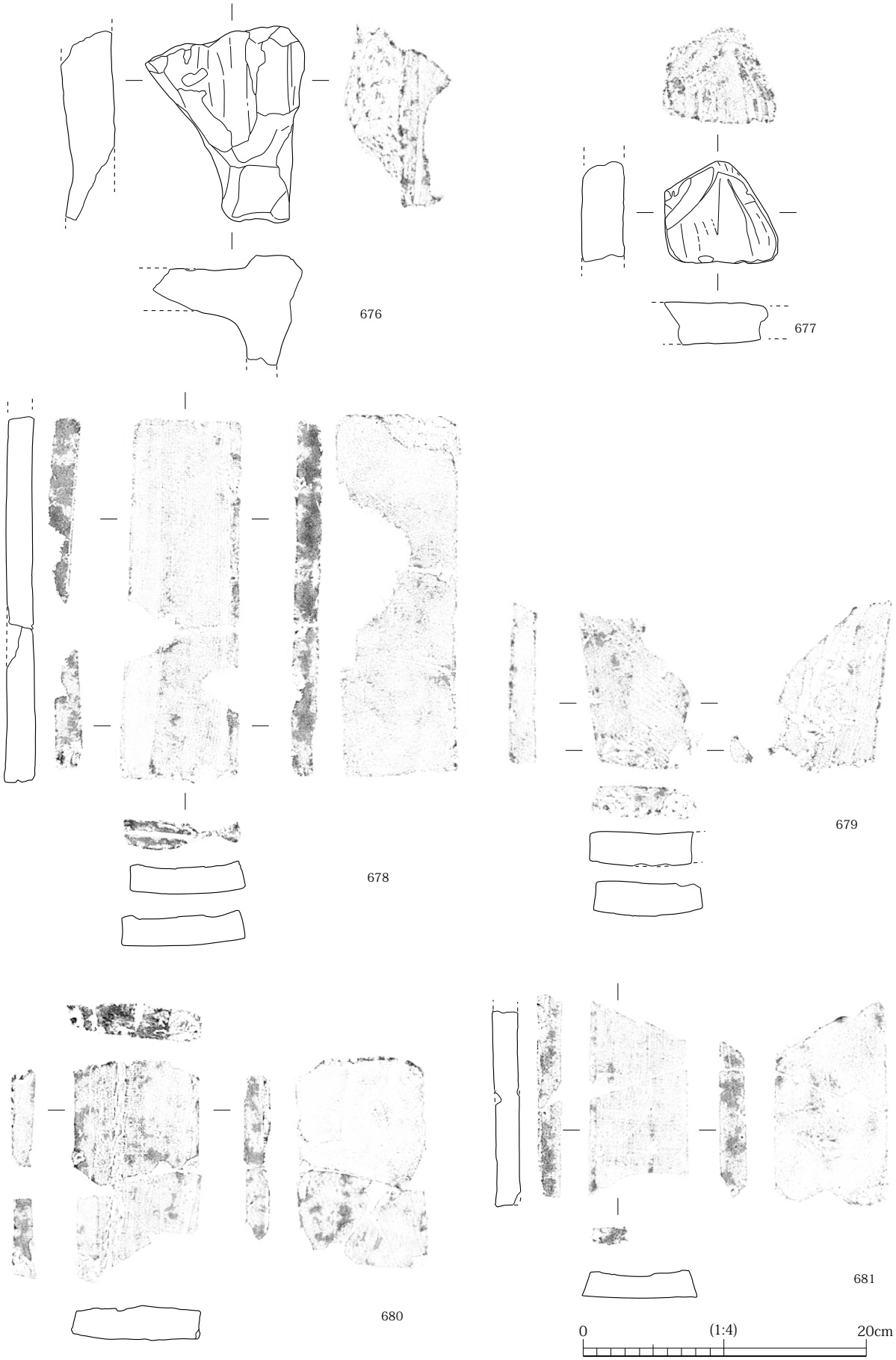


図 102　09017-1 区他出土道具瓦（1）

685 は、土坑 001 から出土した。１端を欠損する。最大厚 2.4cm である。凹面に粘土板合せ目 S の痕跡がみとめられる。布目が残り、縦糸推定 34 本／３cm、横糸推定 26 本／３cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕が６枚分前後みとめられる。粘土板合せ目部分に縦方向のナデを施す。端面付近に調整を施すが、不明瞭である。左側縁から 0.5cm の位置に縦方向の筋状痕跡がみとめられる。凸面は縄叩きの後、縦方向の調整を施す。縄は２種用いており、太いものは縄目粒数推定４粒／３cm、細いものは推定６粒／３cm である。縄本数は推定 10 本／３cm で、太い縄１

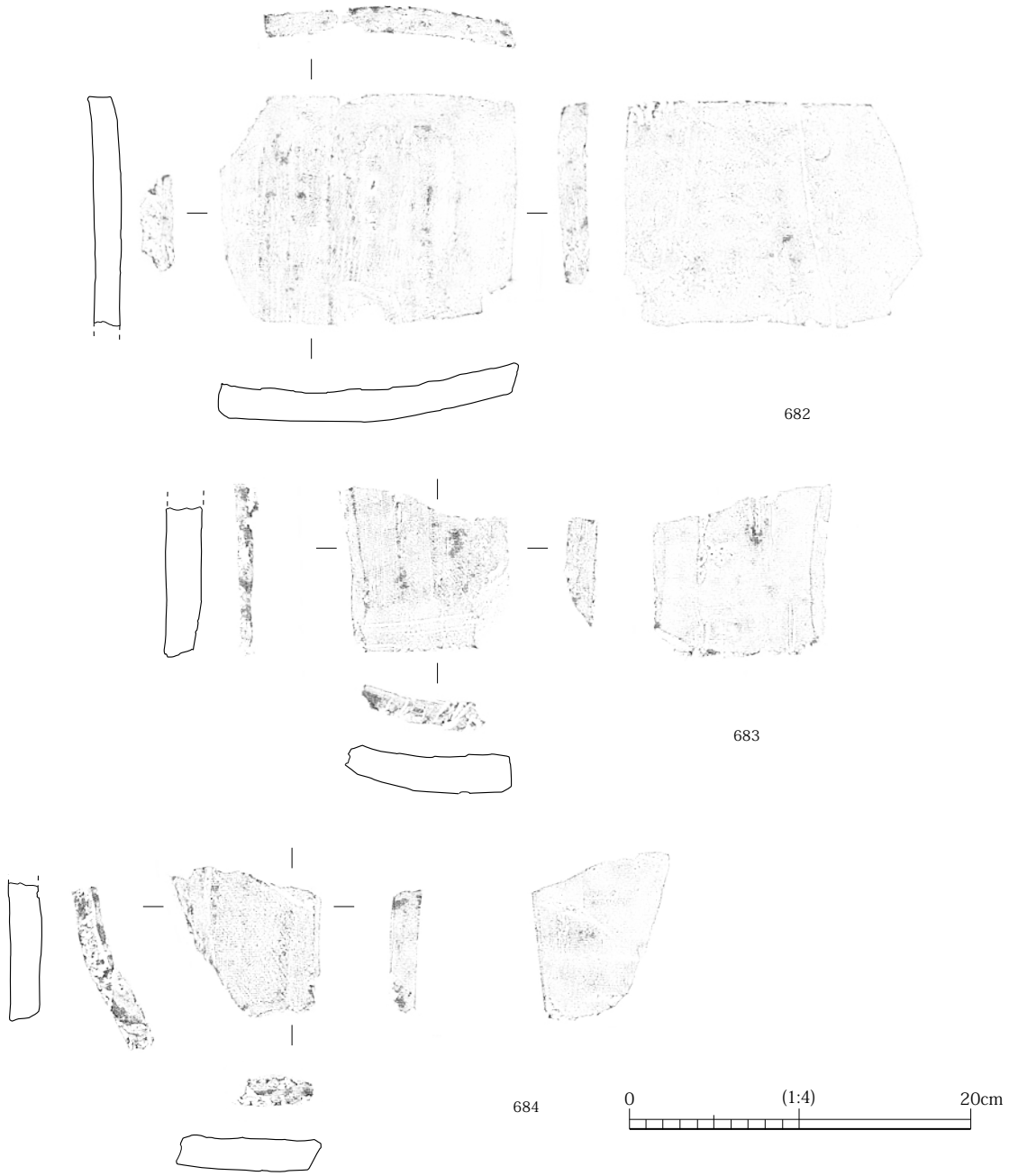


図 103　09017-1 区他出土道具瓦（２）

本と細い縄３本以上の構成となる。右側面は、中央部の凹面側に分割裁面が、凸面側に分割破面がみとめられる。端面はケズリを施し、面取りはない。左側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。右側面は分割後調整を施さないため、いびつな形状となる。粘土板桶巻作りの平瓦を焼成前に斜めに２分割したもので、分割にあたって分割裁線を入れている。残存部は狭端側、左下隅部である。右側面がいびつな形状であり方形を呈するかは不明であるが、熨斗瓦の可能性がある。焼成はやや不良である。

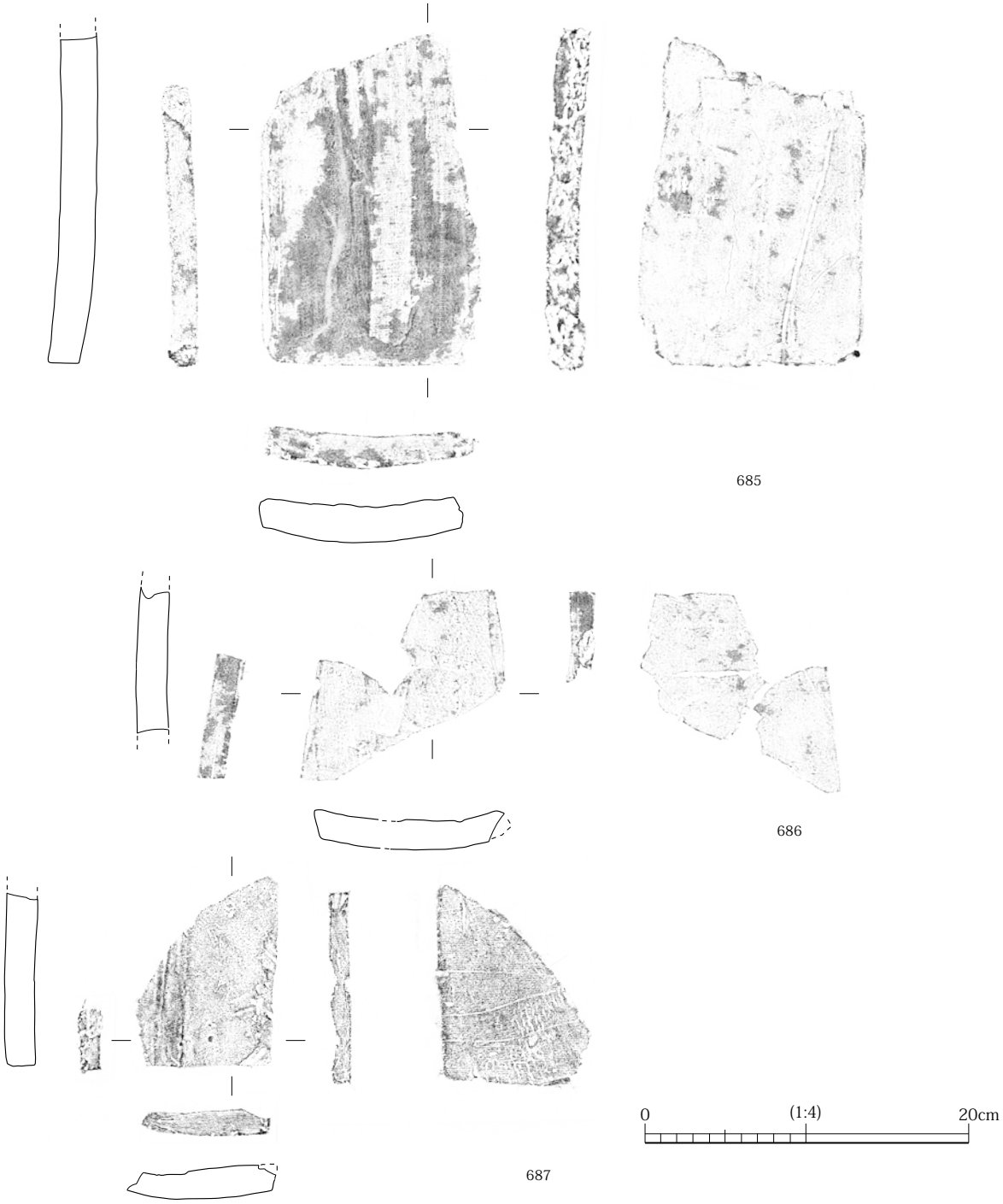


図 104　09017-1 区他出土道具瓦（３）

686 は、土坑 001 から出土した。両端を欠損する。最大厚 2.0cm である。凹面に右上または左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸推定 32 本／３cm、横糸推定 30 本／３cm である。不明瞭であるが、枠板圧痕状の痕跡がみとめられる。凸面は縄叩きの後、横方向のケズリを施す。両側面ともケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。桶巻作りの平瓦を焼成前に斜めに分割したもので、全体の形状は不明であるが、熨斗瓦の可能性がある。焼成は良で、一部須恵質になるが、やや不良の部位もある。

687 は、土坑 001 から出土した。両端を欠損する。端部の幅は 7.3cm、最大厚 1.9cm である。凹面には布目が残り、枠板圧痕状の痕跡が不明瞭であるがみとめられる。斜め方向のケズリを施す。縦方向の段状痕跡が２条みとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は６粒／３cm、縄本数は９本／３cm である。縄叩き後に全面に横方向のケズリを施す。端面はケズリを施し、面取りはない。凹凸両面側から粘土がかぶさっており、ケズリによってはみ出した粘土をユビオサエによって調整したものと考えられる。左側面の調整は不明であるが、端部付近は分割裁面の可能性がある。右側面はケズリを施し、面取りの有無は摩滅により不明瞭である。桶巻作りの平瓦を焼成前に斜めに分割したもので、分割にあたって分割裁線を入れている可能性がある。残存部は狭端側、右下隅部である。全体の形状は不明であるが、熨斗瓦の可能性がある。焼成はやや良である。

以上のように、道具瓦は、鴟尾または鴟尾の可能性のあるものが２点、熨斗瓦または熨斗瓦の可能性のあるものが９点、鬼瓦または隅木瓦の可能性のあるものが１点出土した。これらのうち 10 点は土坑 001 または調査区南部包含層出土であり、その他２点は、10078-1 区の調査区南端部から出土している。また、鴟尾を除くと、いずれも平瓦を焼成前に分割等加工したものまたはその可能性が高いものである。平瓦としての特徴は、後に詳述する、土坑 001 または調査区南部包含層出土平瓦の特徴と一致することから、これらの道具瓦についても、土坑 001 または調査区南部包含層出土の一括性の高い一群に含まれるものと考えられ、同時期に廃棄されたものと推定できる。

丸瓦（図 105 ～ 110、図版 41･42） 379 点が出土し、19 点を図化した。残存度の高いもののほか、形状が特徴的なもの、調整の痕跡の明瞭なものを中心に図化した。

688 は、土坑 001 から出土した。狭端面と１側面が残存する。行基式である。凸面はナデを施すようであるが、不明瞭である。狭端面付近に横方向のケズリを施す。凹面は不明瞭であるが布目が残る。狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目がみとめられ、Ｓタイプである。綴じ合せ目の部分で屈曲する。狭端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面の調整も不明瞭であるが、凹面側縁に面取りを施すようである。焼成は不良である。

689 は、土坑 001 から出土した。狭端面と１側面が残存する。行基式である。凸面調整は摩滅により不明である。凹面は不明瞭であるが布目が残る。狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目がみとめられ、Ｓタイプである。綴じ合せ目の部分で屈曲する。狭端面付近に横方向のケズリを施す。

狭端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面の調整も不明瞭であるが、凹面側縁に面取りを施すようである。焼成は不良である。布の綴じ合せ目の位置、綴じ合せ目の部分で屈曲する形状が 688 と類似する。屈曲の原因が模骨にあるのか、布の綴じ合せ方にあるのかは不明であるが、同一の道具を用いて作られたものと推定できる。

690 は、廃土から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。行基式である。凸面調整は摩滅により不明である。凹面は不明瞭であるが布目が残る。狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目がみとめられ、縫いの手法はまつり縫いである。狭端面付近に横方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面の調整は不明瞭であるが、凸面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

691 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。1 側面が残存する。凸面調整は摩滅により不明である。凹面は布目が残り、縦糸推定 33 本／3 cm、横糸推定 30 本／3 cm である。狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目がみとめられる。綴じ合せ目の部分で屈曲する。側面はケズリを施すが、面取りの有無は摩滅により不明である。焼成はやや不良で、いぶし状になる。部位は異なるが、689 と上下につながる位置に布の綴じ合せ目がみとめられ、綴じ合せ目の部分で屈曲する点も共通する。同一の道具を用いて作られたものと考えられ、行基式と推定できる。

692 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ・Ⅵ層から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凸面はナデを施すようであるが、不明瞭である。凹面は布目が残り、縦糸 32 本／3 cm、横糸 33 本／3 cm である。側縁付近に撚紐痕跡がみとめられ、分割界線の可能性がある。広端面付近に横方向のケズリを施す。広端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面は摩滅により調整、面取りの有無とも不明である。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

693 は、土坑 001 から出土した。狭端面と両側面が残存する。行基式であるが、凹面に緩い段をもつ。狭端幅 8.0cm である。凸面は不明瞭であるが全面に調整を施すようである。横方向のケズリ状痕跡が 2 条みとめられる。凹面は布目が残り、縦糸 27 本／3 cm、横糸 20 本／3 cm である。緩い段を境に狭端面側のみ、両側縁付近に縦方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、左側面のみ凸面側縁に面取りを施す。焼成は良で須恵質であるが、全体に大きくひずむ。

694 は、土坑 001 から出土した。狭端面と両側面が残存する。行基式で、狭端幅 10.0cm である。凸面は縄叩きの後にナデを施すようであるが、不明瞭である。凹面は不明瞭であるが布目が残る。狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目がみとめられる。隅部には、凹凸両面に指痕状の痕跡がみとめられる。狭端面はケズリを施すようであるが、不明瞭である。両側面にケズリを施し、右側面は凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

695 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。行基式である。凸面はナデを施すようであるが、不明瞭である。一部に布目痕がみとめられる。凹面は布目が残り、縦糸 32 本／3 cm、横糸 31 本／3 cm である。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付

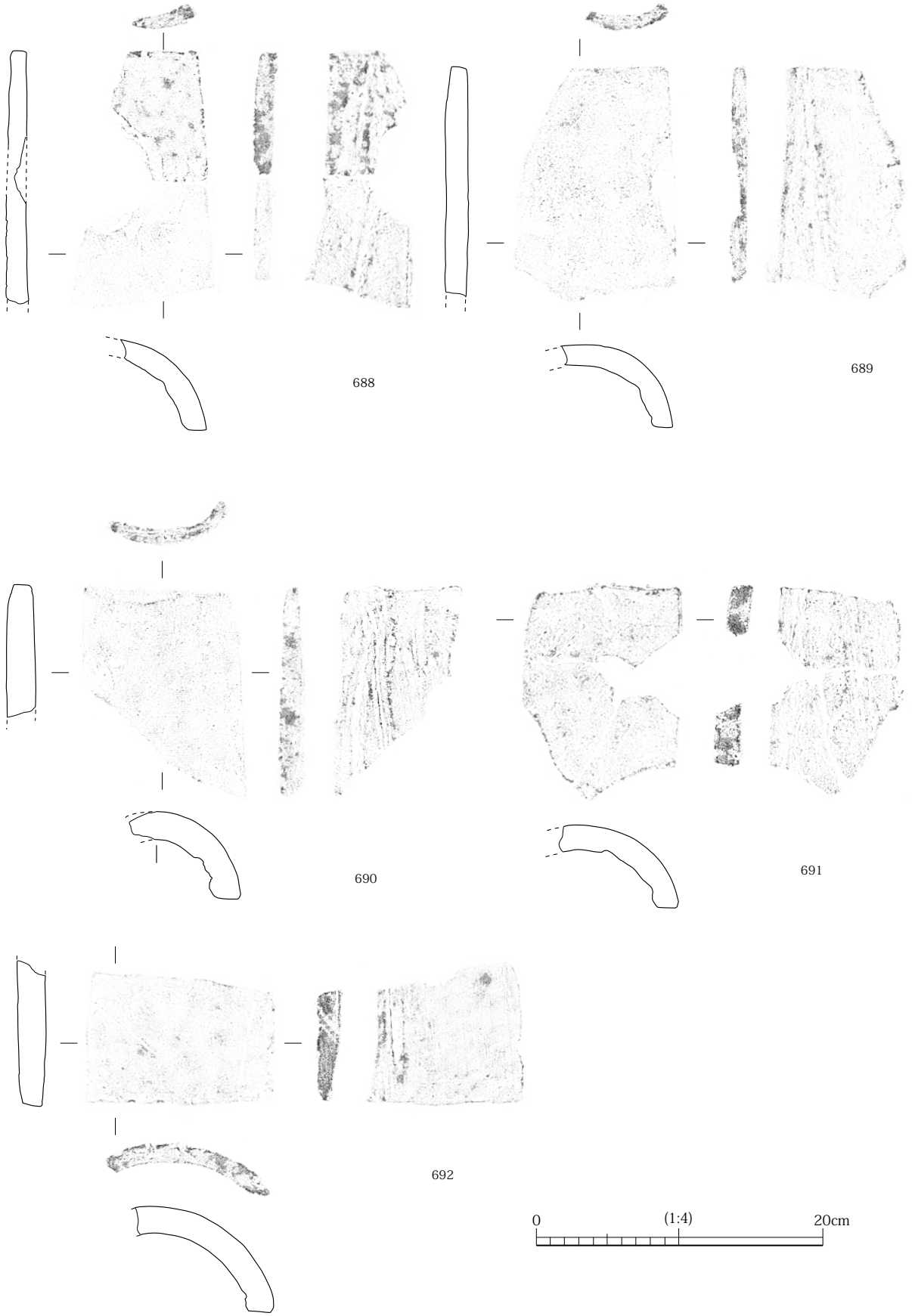


図 105　09017-1 区他出土丸瓦（1）

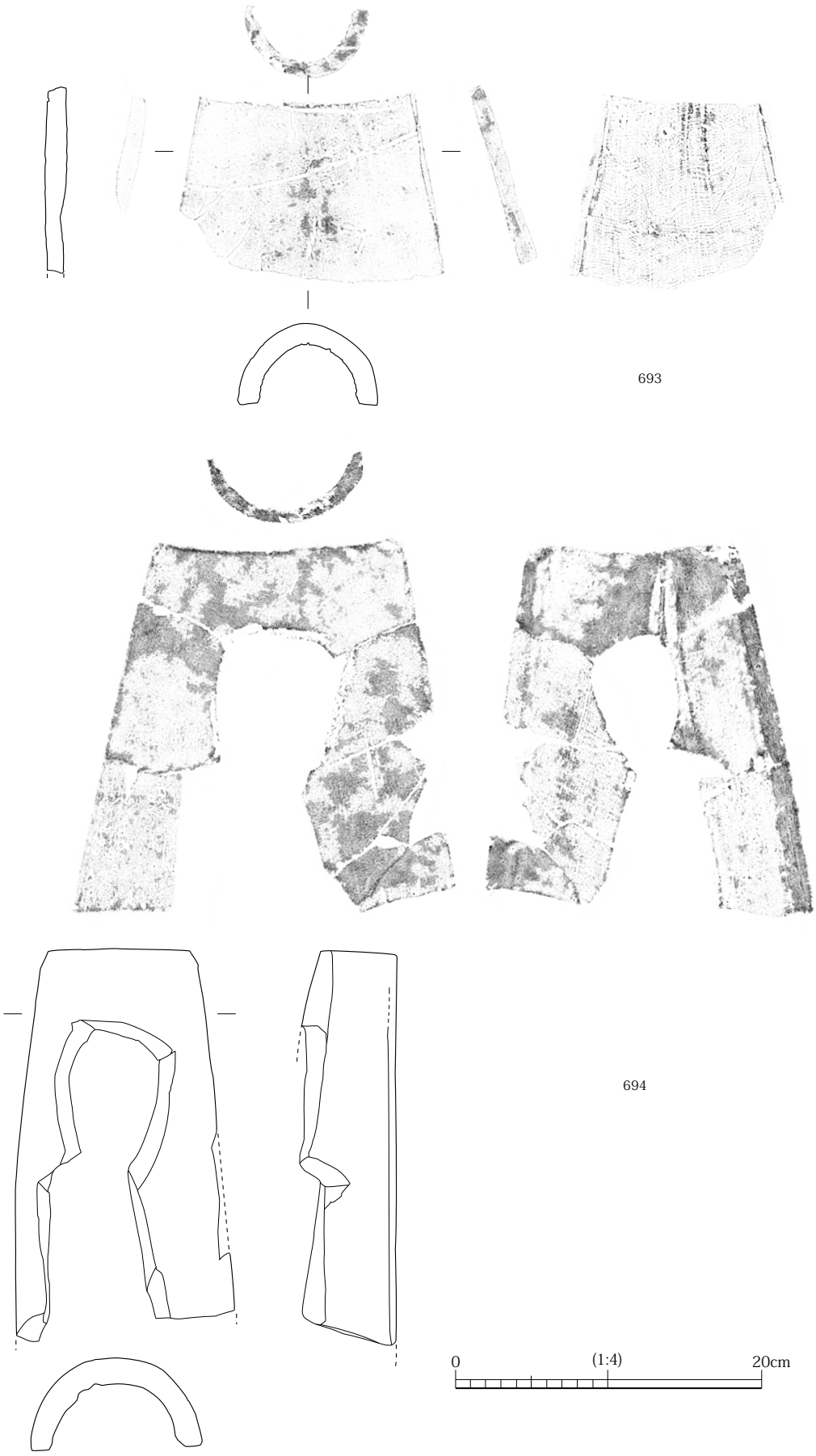


図 106　09017-1 区他出土丸瓦（2）

近一部に縦方向の調整を施す。凹面側縁付近に幅 0.5 ～ 1.0cm の縦方向の窪みがみとめられる。窪み部分を境に布目方向が変わることから、布の綴じ合せ目と考えられる。狭端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面も調整は不明であるが、凸面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良である。

696 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。狭端面と両側面が残存する。行基式で、狭端幅 10.9cm である。凸面は縄叩き後、不明瞭であるが全面に調整を施すようである。凹面は

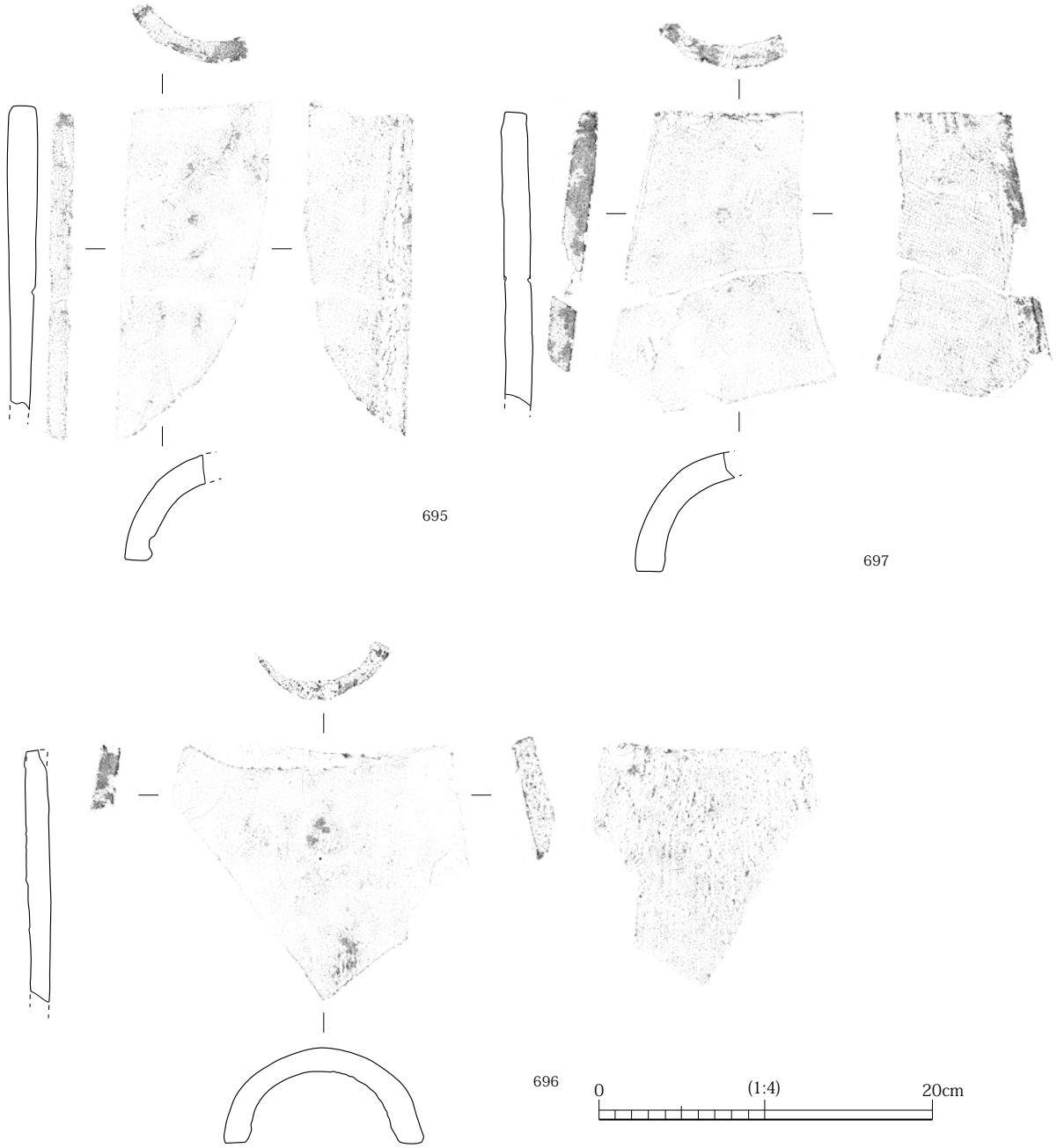


図 107　09017-1 区他出土丸瓦（3）

布目が残り、縦糸 30 本／ 3 cm、横糸 27 本／ 3 cm である。狭端面付近と両側縁付近のみ調整を施す。狭端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面も平坦になるが、調整、面取りの有無とも不明である。焼成はやや不良である。凹面から側面の一部に焼土が付着する。

697 は、土坑 001 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。行基式である。凸面は、不明瞭であるが縦方向のケズリを施した後、狭端面付近に横方向のケズリを施す。凹面は、粘土紐接合痕が明瞭にみとめられ、、粘土紐巻き付け技法である。接合痕の間隔は 2.0 ～ 4.0cm で、接合部は凹面側が高い斜面となる。巻き付けの方向は左回りである。布目が残り、縦糸 28 本／ 3 cm、横糸 28 本／ 3 cm である。一部に縦または横方向のケズリを施す。狭端面付近に横方向のケズリを施す。凹面側縁付近に幅 0.7cm 前後の縦方向の窪みがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

698 は、土坑 001 から出土した。玉縁式で、玉縁端面と 1 側面が残存し、もう 1 方の側面がわずかに残る。玉縁長 4.9cm、玉縁上幅推定 12.5cm、玉縁下幅推定 10.7cm、狭端幅推定 10.0cm である。玉縁の成型は、肩部に粘土を足す手法で、玉縁凹面の屈曲は緩い。玉縁凸面、胴部凸面とも横方向のケズリを、連結面にはナデまたはケズリを施す。調整は、胴部、連結面、玉縁の順である。また、玉縁端面付近にはケズリを、胴部一部に斜め方向のケズリと指紋がみとめられる。玉縁凹面、胴部凹面とも布目が残り、縦糸 23 本／ 3 cm、横糸推定 24 本／ 3 cm であるが、玉縁凹面に横糸間隔が 4 ～ 12 本／ 3 cm と広い部分がみとめられる。玉縁部に幅 0.5cm 前後の縦方向の窪みが 1 ～ 2 条みとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。玉縁側縁付近と端面付近にケズリを施す。玉縁端面はケズリを施すようであるが、不明瞭である。明確な面取りはない。側面はケズリを施す。玉縁側面は、凹面側縁に面取りを施し、胴部の側面は凹凸両面側縁に面取りを施すようであるが、残存度が低く不明瞭である。焼成は良で、須恵質である。

699 は、土坑 001 から出土した。玉縁式で、玉縁端面と 1 側面が残存する。玉縁長 4.9cm である。玉縁の成型は、肩部に粘土を足す手法で、玉縁凹面の屈曲はやや緩い。玉縁凸面は横方向のナデまたはケズリを施す。胴部凸面は縄叩きの後、連結面付近のみ横方向の調整を施す。玉縁凹面、胴部凹面とも布目が残り、縦糸推定 18 本／ 3 cm、横糸推定 18 本／ 3 cm である。玉縁、胴部とも平行する布の綴じ合せ目がみとめられ、 S タイプである。不明瞭であるが、側縁付近にナデまたはケズリを施すようである。玉縁の緩やかな段部に、幅 0.1 ～ 0.2cm の横方向の沈線が 1 条みとめられる。玉縁端面はケズリを施すようであるが、不明瞭である。面取りはない。側面は平坦になるが調整は不明で、凸面側縁にケズリにより面取りを施す。焼成は不良である。

700 は、土坑 001 から出土した。玉縁式で、玉縁端面と 1 側面が残存する。玉縁長 6.5cm である。玉縁の成型は、肩部に粘土を足す手法で、玉縁凹面の屈曲は緩い。玉縁凸面と連結面は横方向のナデを、胴部凸面は横方向のケズリを施す。玉縁凹面、胴部凹面とも布目が残り、玉縁一部に自然釉がみとめられる。玉縁端面は藁状圧痕がみとめられ、調整を施さない。側面はケズリを施し、

凹凸両側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。破損状況から粘土紐の巻き付けによっている可能性もあるが断定できない。

701 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。玉縁端面と 1 側面が残存する。玉縁長 5.5cm である。玉縁の成型は、肩部に粘土を足す手法で、玉縁凹面の屈曲は緩い。玉縁凸面は横方向のケズリを、連結面はナデを施す。胴部凸面は、縄叩きを施し、縄目粒数は推定 9 粒／3 cm、縄本数は推定 14 本／3 cm である。縄叩きの後、全面に横方向のケズリを施す。玉縁凹面、胴部凹面とも布目が残るが、撚れが大きい。幅 0.5cm 前後の縦方向の窪みが 5 条みとめられ、胴部のみのものが 1 条、玉縁のみのものが 2 条、胴部から玉縁につながるものが 2 条である。布の綴じ合せ目と、玉縁のつまみ縫いの痕跡である可能性がある。玉縁端面付近に横方向のケズリを施した後、玉縁側縁付近に縦方向のケズリを施す。玉縁端面はケズリを施すようであるが不明

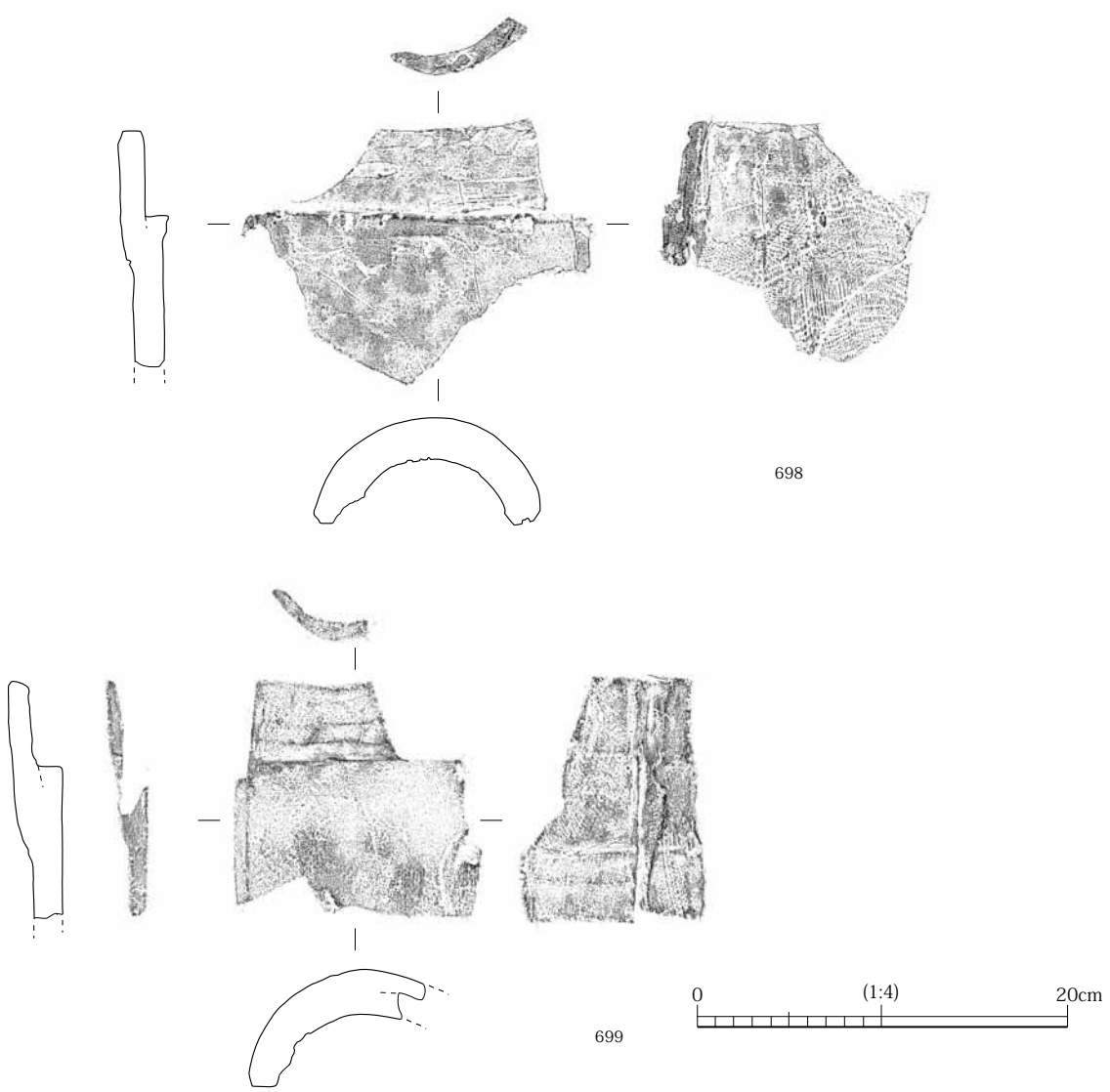


図 108　09017-1 区他出土丸瓦（4）

瞭で、面取りはない。側面はケズリを施し、胴部凸面側縁のみ面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

702 は、土坑 001 から出土した。玉縁式で、玉縁が残存し、胴部 1 側面がわずかに残る。玉縁長 7.3cm、玉縁下幅 10.7cm、狭端幅 9.7cm である。玉縁の成型は、肩部に粘土を足す手法である。玉縁凸面、連結面とも横方向のナデを施し、玉縁端面付近にケズリを施す。玉縁凹面には布目が残り、縦糸 27 本／ 3 cm、横糸 29 本／ 3 cm であるが、横糸は湾曲が著しい。玉縁端面付近、玉縁中央部、胴部との境目付近の 3 箇所に横方向のケズリを施す。玉縁端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

703 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凸面は横方向のケズリを施し、側縁付近に縦方向のケズリを施す。一部に布目痕がみとめられる。横方向の亀裂がはしる。凹面には布目が残り、縦糸 32 本／ 3 cm、横糸 32 本／ 3 cm で、1.5cm 前後の方形単位が確認できる。側縁付近に布の綴じ合せ目がみとめられる。広端面付近に横方向のケズリを施す。一部に布目痕がみとめられる。広端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや良であるが、一部に良で須恵質の部分、やや不良の部分もある。焼成時のひずみがみとめられる。

704 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凸面は横方向のケズリを施し、広端面付近の一部にケズリを施す。凹面には布目が残り、縦糸 27 本／ 3 cm、横糸 21 本／ 3 cm である。側縁付近に縦方向のケズリを施した後、広端面付近に横方向のケズリを施す。広端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凸面側縁に面取りを施す。凸面側縁側から凹面端面側へ向かって、隅部を斜めに切断する。焼成は良で、須恵質である。

705・706 は、丸瓦を分割して熨斗瓦とした可能性のあるものである。

705 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 12 本／ 3 cm である。縄叩き後に、横方向のナデまたはケズリを施す。凹面には布目が残り、縦糸 28 本／ 3 cm、横糸 24 本／ 3 cm で、縦糸方向 1.2cm 前後、横糸方向 1.7cm 前後の方形区画がみとめられる。撚紐状の痕跡が 2 条、側縁および破面側に沿ってみとめられ、狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目の可能性がある。また、破面は撚紐状の痕跡に沿って直線的であることから、意図的に割った可能性が考えられ、熨斗瓦等道具瓦として使用された可能性が考えられる。凹面の広端面付近に調整を施す。広端面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。側面はケズリを施し、凸面側に面取りを施す。凸面側縁に沿って幅 0.1 ～ 0.2cm の沈線がみとめられる。分割に伴う痕跡の可能性が考えられる。焼成はやや良である。

706 は、中世遺構検出面の土坑 005 から出土した。 1 側面が残存する。凸面調整は摩滅により不明である。凹面は粘土紐接合痕がみとめられ、粘土紐巻き付け技法である。凹面には布目が残り、縦糸 34 本／ 3 cm、横糸 29 本／ 3 cm である。破面側に幅 0.5cm の面がみとめられ、破面は面に沿って直線的であることから、意図的に割った可能性があり、熨斗瓦等道具瓦として使用された可能

図 109　09017-1 区他出土丸瓦（5）

性が考えられる。凹面に幅 0.3cm 前後の縦方向の窪みがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。側面は平坦になるが調整は不明で、面取りはない。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

以上のように、丸瓦は残存度が高いものが少なく全長のわかる資料は出土していないが、形態では、行基式、玉縁式の両者が出土している。確実に形態のわかるものでは、行基式は 12 点、玉縁式は 18 点である。玉縁式のうち玉縁成型技法の確認できるもの 15 点はいずれも肩部に粘土を足すものである。また、このうち 9 点と玉縁成型技法の不明な 1 点の計 10 点は、玉縁凹面の屈曲形状が確認でき、いずれも緩い。また、図化していないものも含め玉縁長のわかるものは 14 点あり、4.0 ～ 7.3cm まで幅があるが、うち 11 点は 4.3 ～ 5.5cm におさまる。また、3 点は 4.8 ～ 4.9cm のものである。

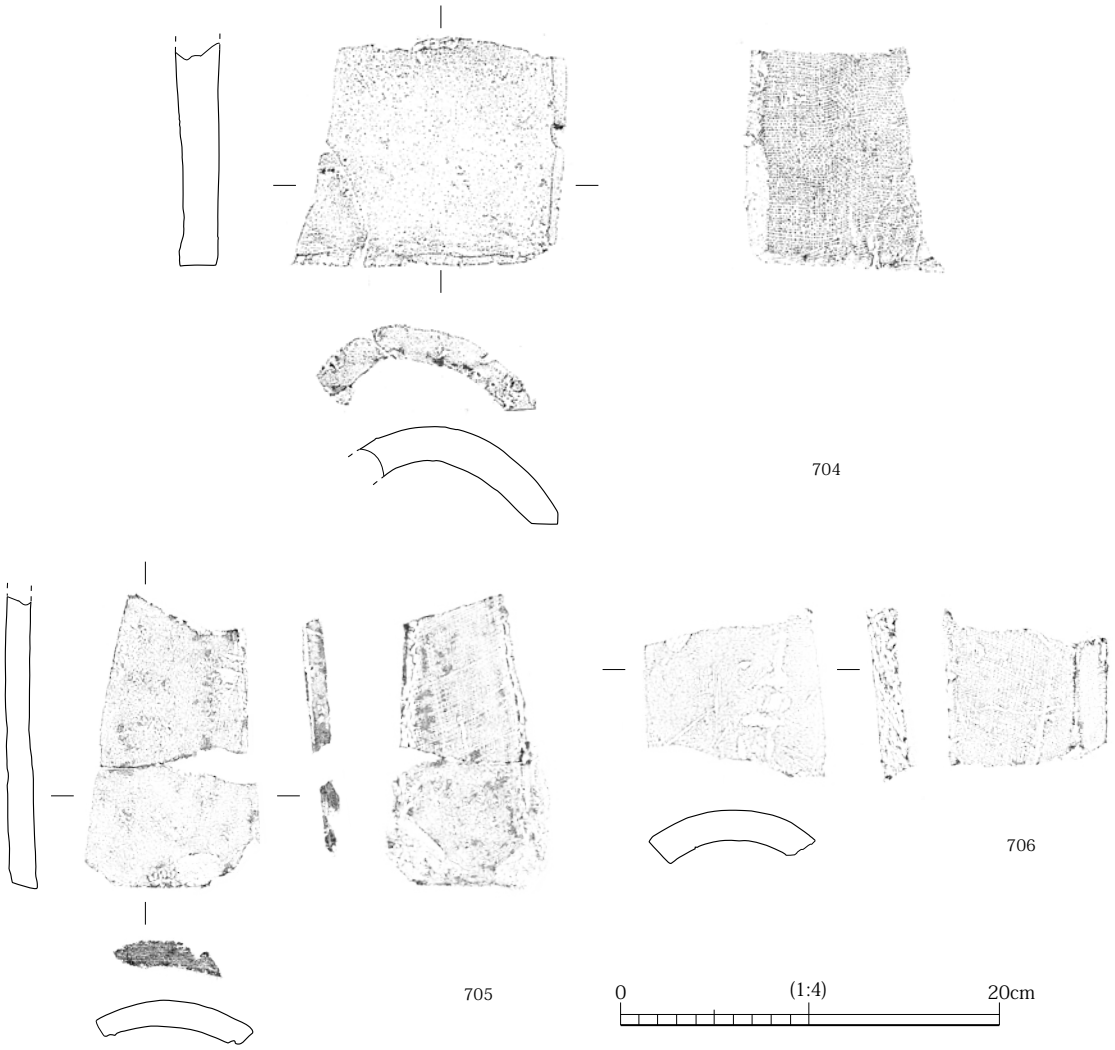


図 110　09017-1 区他出土丸瓦（6）

出土丸瓦は、玉縁形状からは８世紀以前のものと考えられるものが多いが、09017-1 区北部および 10078-1 区出土瓦の中には中世に所属すると考えられるものが一定量含まれる。以下では、一括性が高いと考えられる奈良時代遺構検出面の土坑 001・046 出土の丸瓦のみを対象として、破片資料からではあるが、製作技法等の特徴をまとめておく。

奈良時代土坑出土丸瓦の特徴　対象とするのは、09017-1 区土坑 001・046 出土瓦、計 151 点である。意図的に分割して熨斗瓦等道具瓦として使用した可能性のあるもの２点も含む（705・706）。

残存度が低いことから、各観察項目で該当するものの点数を示し、全体の傾向から特徴をつかむこととする。

１）形態

行基式８点、玉縁式 12 点が出土している。

行基式は、狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目の部分で屈曲するもの２点（688・689）、粘土紐巻き付け技法によるもの１点（697）がある。また、狭端幅の判明する資料は図化した３点（693・694・696）のみで、8.0 ～ 10.9cm である。

玉縁長の判明するものは９点で、4.3 ～ 7.3cm まで幅があるが、うち４点は 4.3 ～ 4.9cm のものである。狭端幅の判明するまたは推定できる資料は図化した２点（698・702）のみであるが、9.7cm・10.0cm と近似している。肩部成型技法のわかるものは 11 点で、すべて肩部に粘土を足す手法である。また、玉縁凹面の形状のわかるものは９点あり、すべて屈曲は緩い。

本来、形態差でまず分類し、それぞれに製作技法等を検討すべきであるが、形態の判明する資料が極めて少ないことから、以下でも対象資料全体での点数を示す。

２）残存部位

残存部位の判明するものの点数は、以下の通りである。

・狭端面のみ残存するもの：１点
・狭端面と両側面の残存するもの：３点
・狭端面と左側面の残存するもの：13 点
・狭端面と右側面の残存するもの：６点
・左側面のみ残存するもの：16 点
・右側面のみ残存するもの：13 点
・広端面と左側面の残存するもの：７点
・広端面と右側面の残存するもの：13 点

また、部位不明であるが、１端面と１側面の残存するものが３点、１端面のみ残存するものが 17 点、１側面のみ残存するものが 26 点ある。

３）胎土

10mm 前後の礫を含む粗のものが 13 点、５mm 前後の礫を含むやや粗のものが 69 点、３mm 前後の礫を含むやや密のものが 55 点、1 mm 前後以下の砂を含む密のものが 14 点である。長石、

チャート、クサリ礫を含むものが多い。

４）粘土形態

粘土板巻き付け技法と粘土紐巻き付け技法の２者が確認できる。前者は糸切り痕の確認できるものが１点、粘土板を重ねたような痕跡がみとめられるものが１点ある。後者は、粘土紐接合痕のみとめられるものが１点（697）、剥離痕からその可能性のあるものが１点（700）である。粘土形態の判明するものが少なく、また、それらの残存度が低いため他の製作技法から粘土形態を推定することが困難で､粘土板巻き付け技法と粘土紐巻き付け技法の割合は不明である。ただし、後述のように粘土板桶巻作り平瓦でも糸切り痕の残存する資料が少ないことを考慮すると、粘土紐巻き付け技法のものの方が、粘土紐接合痕の断面観察等からより識別しやすいと予測できる。したがって、粘土板巻き付け技法が多数を占めていた可能性がある。

５）凸面の調整

調整の不明瞭なものが多いが、縄叩きを施すものが 20 点ある。摩滅や後の調整によって縄目の不明瞭なものが多いが、縄目粒数は６粒／３cm、縄本数は推定９～ 14 本／３cm である。縄の撚りはすべて、圧痕で右上がりの傾斜をもつ。摩滅によって不明なものをのぞくと、いずれも縄叩きの後にケズリまたはナデを施しており、ほぼ全面を調整しているようである。

縄叩きの痕跡のみとめられないものも含めると、ナデ、ケズリ等何らかの調整がみとめられるものが 78 点あること、調整のみとめられないものは摩滅の著しいものであることから、凸面には全面に調整を施したものと推定できる。また、調整の種類を確認できるものは、以下の通りである。

・縦方向のケズリを施すもの：15 点

・横方向のケズリを施すもの：24 点

・横方向のナデを施すもの：２点

・横方向のケズリまたはナデを施すもの：９点

ケズリかナデかを判別できないものもあるが､横方向の調整を施すものの方が多い傾向がある。また、先述のように軒丸瓦では瓦当接合後に凸面に縦方向のケズリを施すものが主体であることから、縦方向のケズリのものは、軒丸瓦が含まれている可能性もある。

また、上記の全体的な調整の後に、端面付近のみにケズリ等の調整を施すものも確認できる。端面付近に調整のみられるものは 21 点で、いずれも横方向であり、確認できるものはすべてケズリである。

なお、玉縁凸面はいずれも横方向のケズリまたはナデがみとめられる。

以上より、凸面調整は、縄叩き後にほぼ全面にケズリを主とした調整を施し、調整は横方向のものが多い。また、端面付近のみに横方向のケズリを施すものも一定量みとめられる。

６）凹面の布目痕跡

摩滅の著しいものをのぞき、計 127 点で布目が残る。計測可能で、布撚れの著しいものをのぞ

くと、布目は以下の通りである。布撚れの著しい資料以外では縦糸と横糸で顕著な差はみとめられないことから、縦糸と横糸の平均値を示す。

・10 ～ 20 本／ 3 cm のもの： 1 点

・21 ～ 30 本／ 3 cm のもの：50 点

・31 ～ 40 本／ 3 cm のもの：15 点

21 ～ 30 本／ 3 cm のものが多く、また、すべて 18 ～ 35 本／ 3 cm におさまる。

７）布の綴じ合せ目

布の綴じ合せ目が確認できるものは 26 点ある。全体の形状の不明なものが多いが、うち 4 点は狭端側が狭くなる布の綴じ合せ目、２点は平行する布の綴じ合せ目である。

８）凹面の調整

全面に調整を施すものはみとめられないが、一部にケズリやナデを施すものが少量みられる。縦方向または縦方向に近い斜め方向のケズリを施すものが２点、横方向または横方向に近い斜め方向のケズリを施すものが 1 点、不定方向のケズリを施すものが 1 点、縦方向または縦方向に近い斜め方向のケズリかナデを施すものが 1 点である。

また、端面付近や側縁付近のみにケズリ等の調整を施すものが確認できる。端面付近に調整のみられるものは 33 点で、いずれも横方向であり、確認できるものはすべてケズリである。側縁付近に調整のみられるものは 25 点で、いずれも縦方向であり、確認できるものはすべてケズリである。

なお、玉縁式では、玉縁端面付近と側縁付近にそれぞれ横方向、縦方向のケズリを施すものが３点、玉縁端面付近に横方向のケズリを施すものが２点、側縁付近に縦方向の調整を施すものが２点ある。

以上より、丸瓦凹面は全体に調整を施すことはなく、端面付近、側縁付近に調整を施すものが一定量あること、玉縁式の場合は玉縁の端面付近や側縁付近に調整を施すものが多い。

９）端面の調整と傾き

狭端面の残存するものでは、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが 4 点、平坦になるが調整不明のものが 15 点、藁状圧痕がみとめられ調整を施さないものが２点である。また、面取りは、凹面側に施すものが 1 点、面取りなしのものが 16 点である。傾きは、垂直になるものが 15 点、凸面にやや傾くものが２点、凹面にやや傾くものが２点である。

広端面の残存するものでは、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが６点、平坦になるが調整不明のものが 13 点である。また、面取りを施す確実な資料はなく、面取りなしのものが 20 点ある。傾きは、垂直になるものが 12 点、凹面に傾くものが８点である。

以上より、狭端面、広端面ともケズリを施すものが一定量みとめられ、面取りは施さないものが多い。また、端面の傾きは、垂直のものが多いが、広端面では凹面に傾くものが一定量みとめられる。

10）側面調整

側面は、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが 58 点、平坦になるが調整不明のものが 46 点である。また、面取りは、凸面側縁に施すものが 18 点、凹面側縁に施すものが８点、凹凸両面側縁に施すものが 16 点、面取りなしのものが 16 点である。また、面取りはいずれも幅の比較的狭いものであるが、凹凸両面側縁に施すもののうち２点は、面取り幅が大きく、側面断面形状がＶ字状を呈する。傾きは、分割する前の円筒状態で円の中心方向に向かう向きを垂直とみなし、そこから凸面と凹面のどちらに傾くかで分類する。垂直になるものが 15 点、凸面に傾くものが３点、凹面にやや傾くものが 82 点である。

以上より、調整の不明瞭なものも多いが、ケズリを施すものが比較的多くみとめられる。また、面取りを施すものの方が多く、特に、凸面側縁に施すもの、凹凸両面側縁に施すものが目立つ。傾きは凹面に傾くものが顕著で、垂直のものは一定量みとめられるが、凸面に傾くものは少量である。

11）焼成

良で須恵質のものが 34 点、良で一部須恵質のものが２点、やや良のものが 10 点、やや不良のものが 12 点、やや不良でいぶし状になるものが 16 点、不良のものが 56 点、不良でいぶし状になるものが 21 点である。いぶし状になるものはやや不良または不良のものであることから、現状でいぶし状でないものに、いぶし状であったものの表面が剥離したものが含まれている可能性がある。

部分によって焼成の異なるものが多いことから、本来は、全体が残っていなければ焼成を判断できないと考えられるが、不良のものが半分以上を占めることは確実である。また、須恵質のもの等焼成の良いものに調整がよく残存するため、図化したものは須恵質のものが多く、また、調整の傾向をみるうえでも観察可能なものが須恵質のものに偏る傾向がある。しかし、焼成の不良のものにも同様の痕跡が確認できるものもみとめられることから、焼成によって大きく製作技法が異なるという傾向はないものと推定できる。部分によって焼成が異なるものが多いことからも、焼成は窯内の位置によって左右された可能性が高い。

以上、丸瓦は残存率が非常に低いが、各部分の調整等の観察から、一定の傾向をみとめることができる。前述のように、行基式と玉縁式があること、布の綴じ合せ目で屈曲する特徴的な一群がみとめられること、粘土板巻き付け技法と粘土紐巻き付け技法の両者が確認できることから、複数の道具や技法が用いられていたことは確実である。こうした形態や技法を判別できるものの点数が少なく個々について形態や粘土板か粘土紐かといった点を判別することは困難であるが、凸面の調整に縦方向と横方向の２通りの調整がみられること等が、何らかの他の調整技法と関連性をもつ可能性がある。今後、和泉寺跡既存資料等との比較によって、検討を深める必要がある。

これらの丸瓦の所属時期については、玉縁式の肩部の成型技法や形態からは、８世紀に位置づ

けられる。また、行基式と玉縁式の両者がみられ、玉縁式の方が多い点からも、８世紀頃に位置づけられると考えられる。個別に時期を検討することの困難な資料が大半であるが、８世紀頃のものと位置づけておく。また、上で挙げたような特徴は、土坑出土遺物のみでなく、調査区南側包含層で出土した瓦についても共通するものであることから、調査区南側で出土した瓦の多くは本来土坑内に廃棄されていたものであるという推定も裏付けられる。

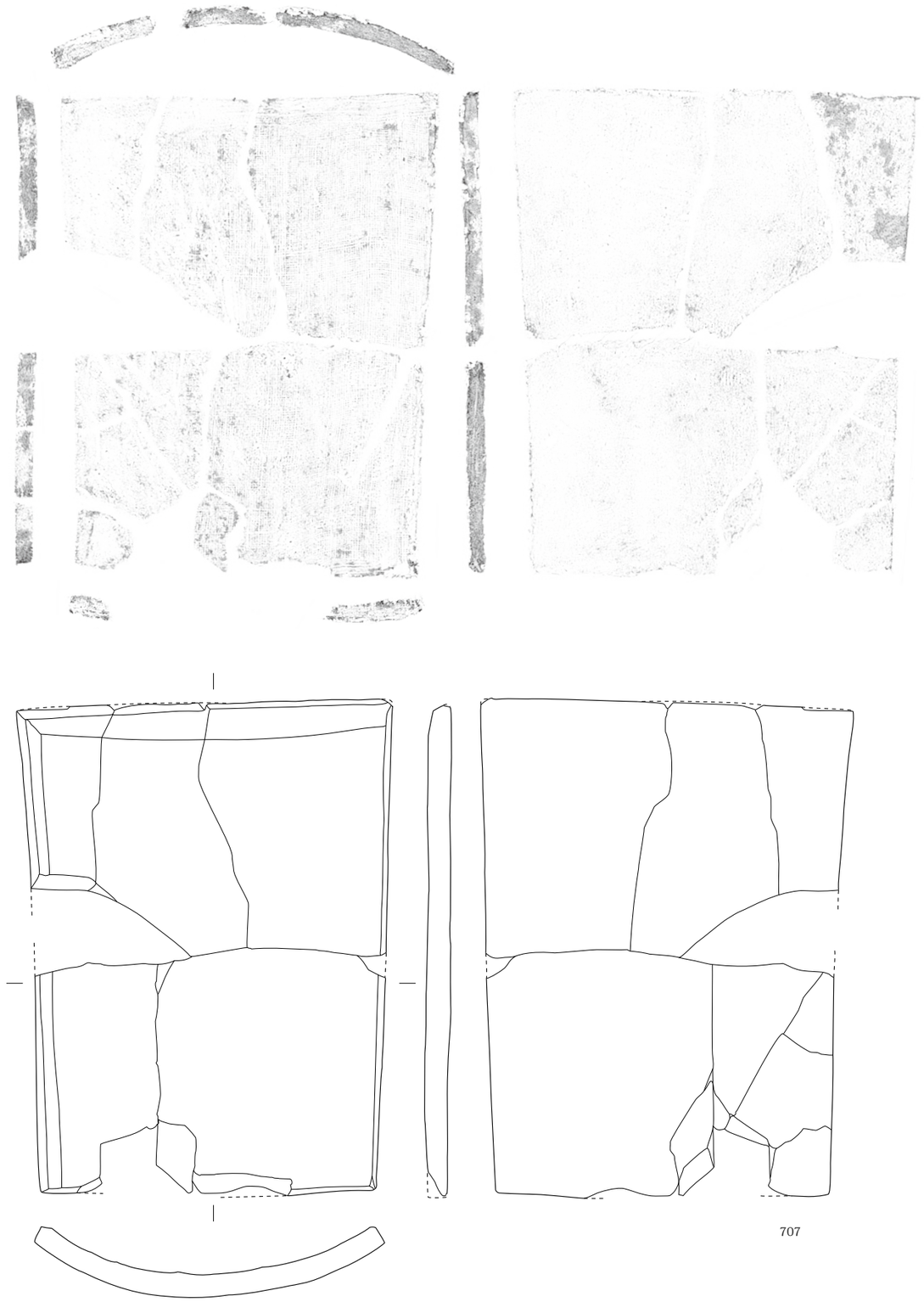
平瓦（図 111 ～ 121、図版 42 ～ 47）　1144 点が出土し、39 点を図化した。残存度の高いもののほか、形状の特徴的なもの、調整の痕跡の明瞭なものを中心に図化した。

707 は、土坑 001・046 から出土した。全長 36.5cm、広端幅 27.6cm、狭端幅 24.5cm、最大厚 1.8cm である。左側面一部と狭端面一部を欠損する。凹面は布目が残り、縦糸 17 本／３cm、横糸 20 本／３cm である。幅 2.0 ～ 2.4cm の枠板圧痕が 12 枚分前後みとめられる。凹面の広狭両端面付近に横方向のケズリを施し、両側縁付近に調整を施す。凸面は縄叩きの後、縦方向の調整を施す。広狭両端面、両側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良で、いぶし状になる。

708 は、土坑 001 から出土した。狭端幅 25.3cm、最大厚 1.9cm である。狭端面と両側面が残存する。凹面は右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 29 本／３cm、横糸 26 本／３cm である。不明瞭であるが、幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを施す。左側縁から 3.0cm 前後のところに縦方向の撚紐状痕跡がみとめられる。摩滅により不明瞭であるが、分割界線か、布の綴じ合せ目と考えられる。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定４粒／３cm、縄本数は推定 10 本／３cm である。縄叩き後、ほぼ全面に調整を施す。側縁付近から狭端面付近にかけて一部に幅 0.3 ～ 0.5cm の凸状部があり、この部分には縄叩きがみとめられない。狭端面はケズリを施し、面取りはない。両側面ともケズリを施し、左側面の凹面側縁のみ面取りを施す。焼成はやや良である。

709 は、土坑 001 から出土した。広端幅 28.0cm である。広端面と両側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 23 本／３cm、横糸 19 本／３cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕が、やや不明瞭であるが 11 枚分前後みとめられる。広端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向の調整を施す。凸面の調整は摩滅により不明である。広端面はケズリを施し、面取りはない。両側面とも平坦になるが調整不明で、面取りはない。焼成は不良で、いぶし状になる。

710 は、土坑 001 から出土した。狭端幅 24.4cm である。狭端面と両側面が残存する。凹面は布目が残り、幅 2.1cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。ナデを施すようであるが、不明瞭である。左側縁から 1.5cm 前後のところに縦方向の窪みがみとめられる。摩滅により不明瞭であるが、分割界線の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定６粒／３cm、縄本数は推定 10 本／３cm である。縄叩きの後、ナデを施すが、摩滅により全面に施したものか不明である。狭端面に沿って幅3.3～5.0cmの凸状部がある。狭端面はケズリを施すようであるが不明瞭である。



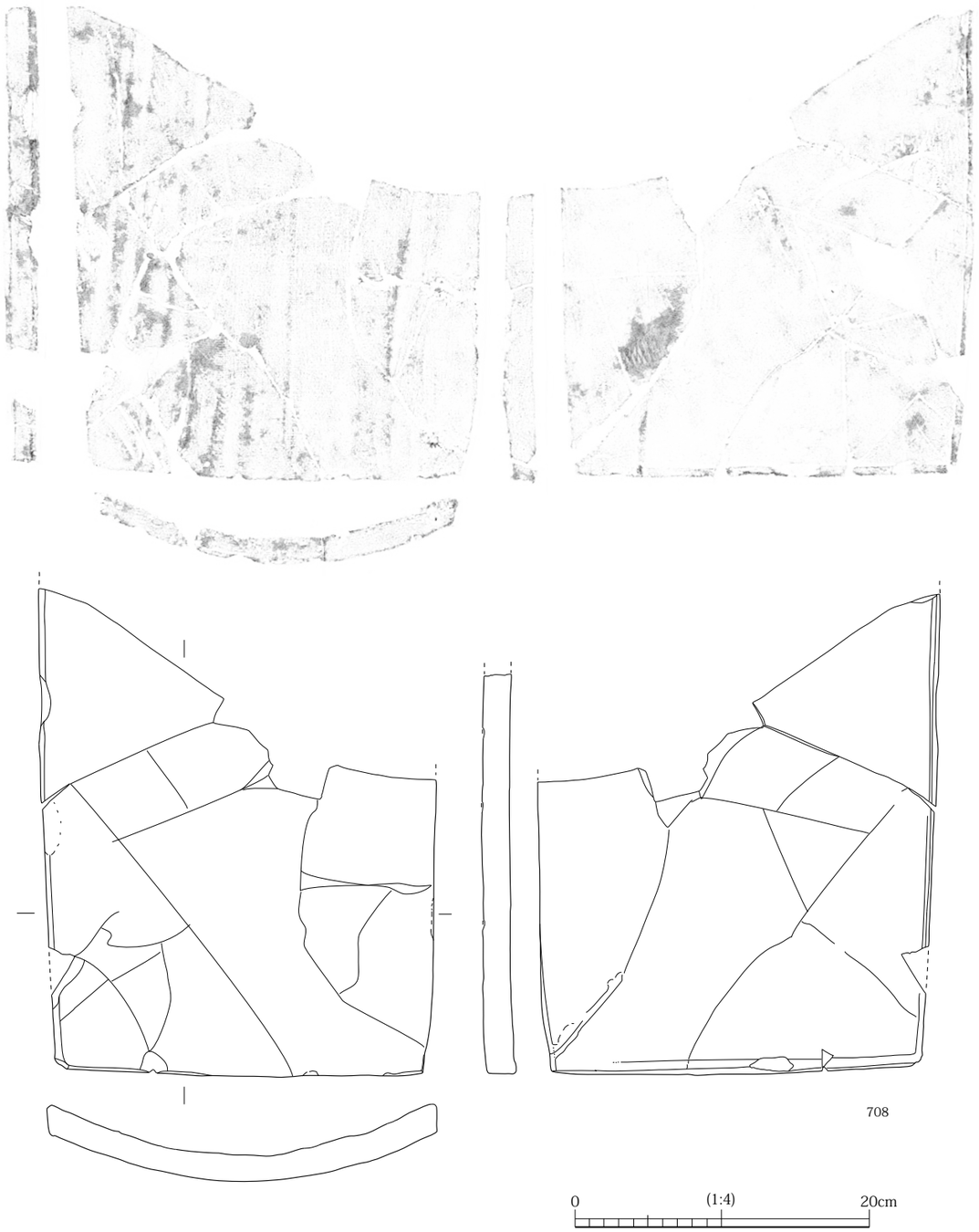


図 111　09017-1 区他出土平瓦（1）

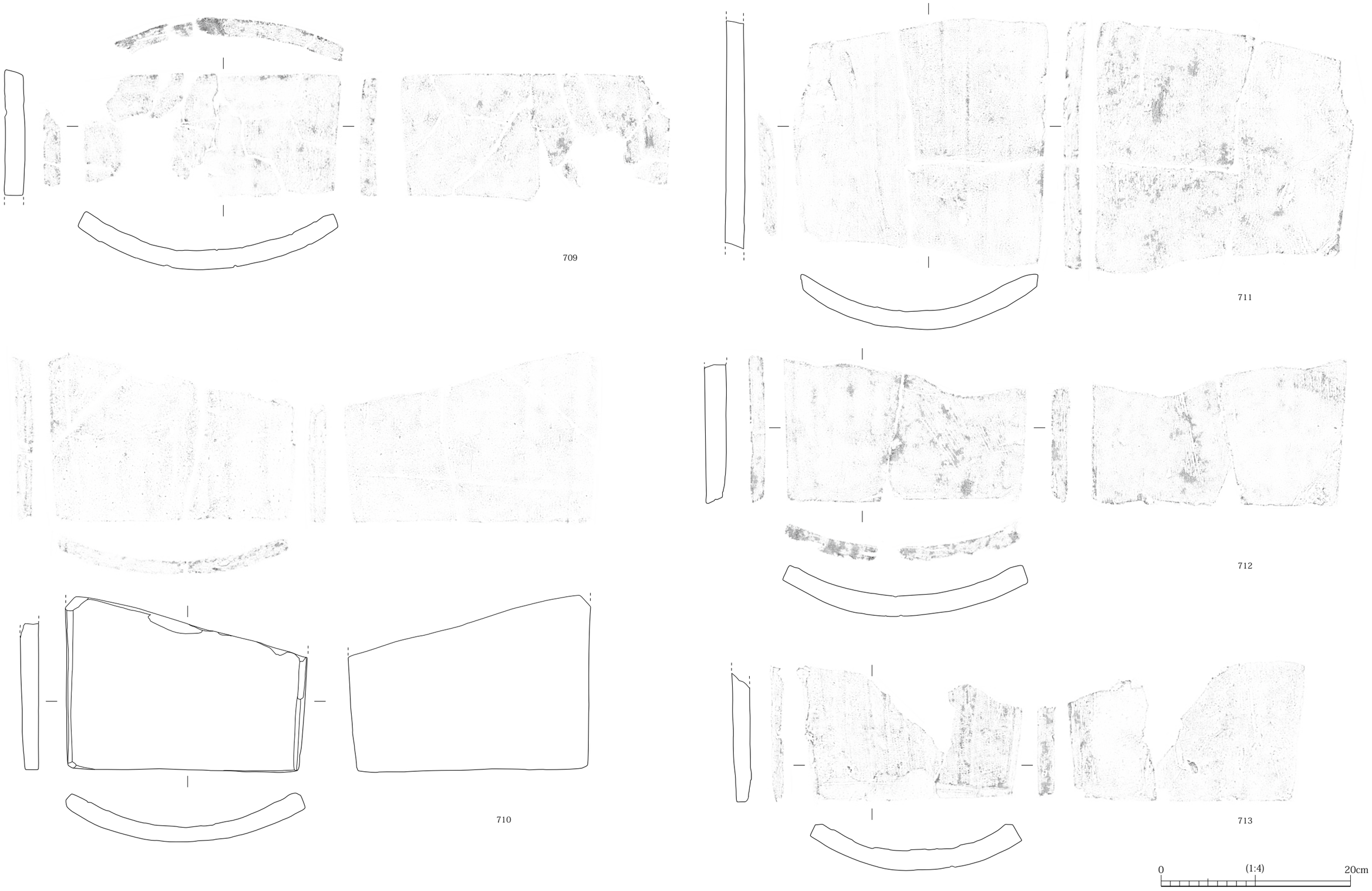


図 112　09017-1 区他出土平瓦（2）

面取りはない。両側面ともケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は不良で、いぶし状になる。

711 は、土坑 001 から出土した。両側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 27 本／ 3 cm、横糸 22 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕が 11.5 ～ 12 枚分前後みとめられる。摩滅により調整の有無は不明である。凸面は縄叩きを施す。縄は 2 種用いており、太いものは縄目粒数 4 粒／ 3 cm、細いものは 6 粒／ 3 cm である。縄本数は推定 9 本／ 3 cm で、太い縄 1 本と細い縄 5 本以上の構成である。縄叩きの後、一部にナデを施す。両側面ともケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は不良で、一部いぶし状になる。

712 は、土坑 001 から出土した。狭端幅 25.2cm である。狭端面と両側面が残存する。凹面は左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、不明瞭であるが枠板圧痕状の痕跡がやや斜め方向にみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを、両側縁付近に縦方向の調整を施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は 5 粒／ 3 cm、縄本数は 12 本／ 3 cm である。縄叩きの後、全面に横方向のケズリ状調整を施す。狭端面、両側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

713 は、土坑 001 から出土した。狭端幅は推定 22.3cm である。狭端面と両側面が残存する。凹面は糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが左下を支点とするようである。布目が残り、縦糸 22 本／ 3 cm、横糸 26 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕が 11 枚分前後みとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを施し、ケズリ後に指紋がみとめられる。左側縁に沿って、径 1.0 ～ 2.0cm の 2 箇所の円形窪みが重複してみとめられ、分割界点の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 9 粒／ 3 cm、縄本数は推定 16 本／ 3 cm である。縄叩きの後、全面に横方向のナデまたはケズリを施す。一部に縦方向のハケ状痕跡と指紋がみとめられる。狭端面はケズリを施し、面取りはない。ケズリ後に、凹面側から粘土がかぶさる。両側面ともケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや良で、半須恵質である。

714 は、土坑 001 から出土した。全長 37.0cm、厚さ 2.7cm で、他の資料と比較して厚みが大きい。広狭両端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸推定 26 本／ 3 cm、横糸 26 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向のケズリを施す。やや湾曲する縦方向の窪みが不明瞭であるがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 9 本／ 3 cm である。縄叩きの後、横方向のケズリを施し、一部に斜め方向のケズリもみとめられる。焼土の付着が顕著である。広狭両端面ともケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良であるが、一部良である。3 破片が接合したが、うち広端面隅部の破片のみ焼成が良で、他の破片と接合する破面にも焼土の付着がみとめられる。したがって、破損による分割後にこの破片のみが二次焼成を受けたものと推定でき、窯内で何らかの用途のために転用された可能性が考えられる。

715 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。全長 37.1cm である。広狭両端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。広狭両端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。横方向の窪みがみとめられ、枠板綴じ痕の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 10 本／ 3 cm である。縄叩きの後、全面に横方向のケズリを施し、側縁付近に縦方向のケズリを施す。広端面はケズリを施し、凸面側にケズリ時の粘土がはみ出して縄目上にかぶさる。狭端面はケズリを施し、一部にケズリ後に凸面側から粘土がかぶさる。両端面とも面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良である。

716 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 30 本／ 3 cm、横糸 32 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向のケズリとナデを施す。左側縁に沿って撚紐痕跡がみ

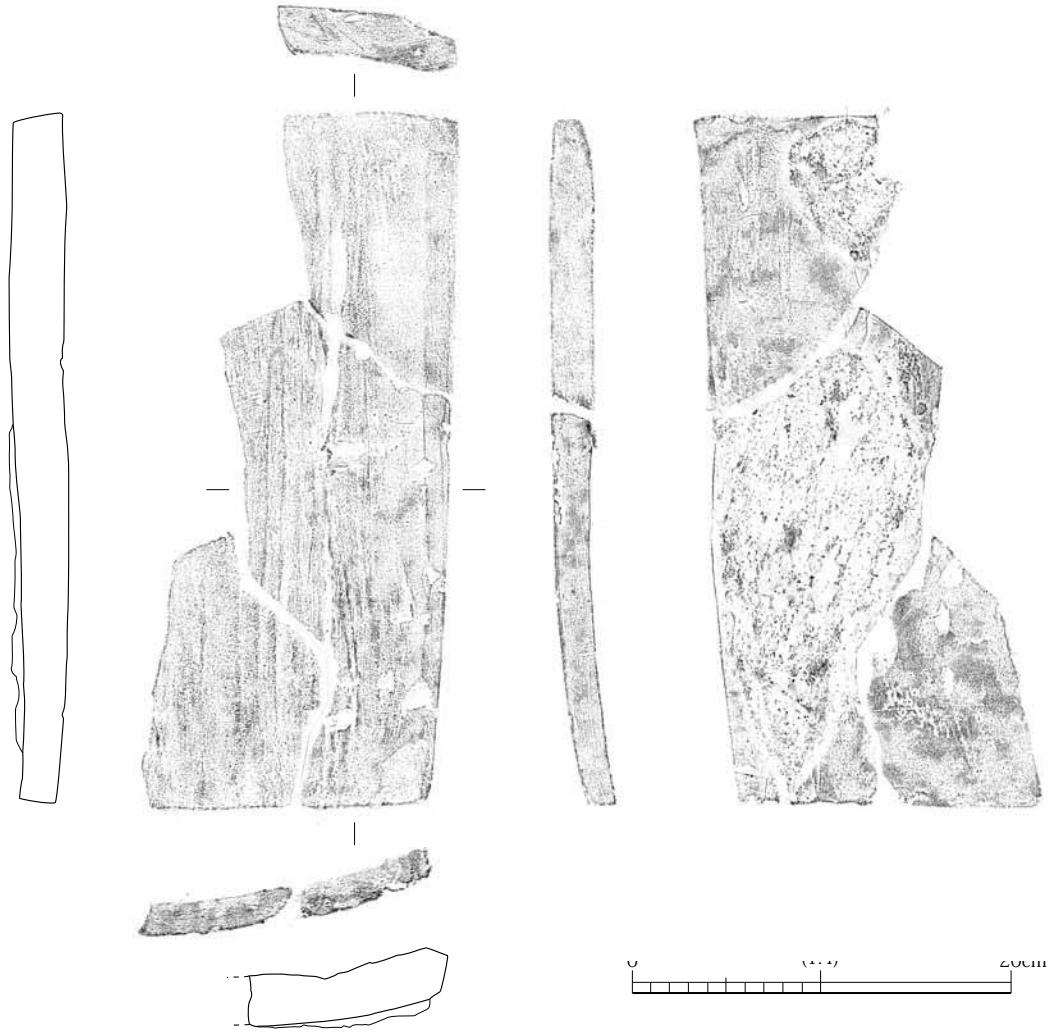


図 113　09017-1 区他出土平瓦（3）

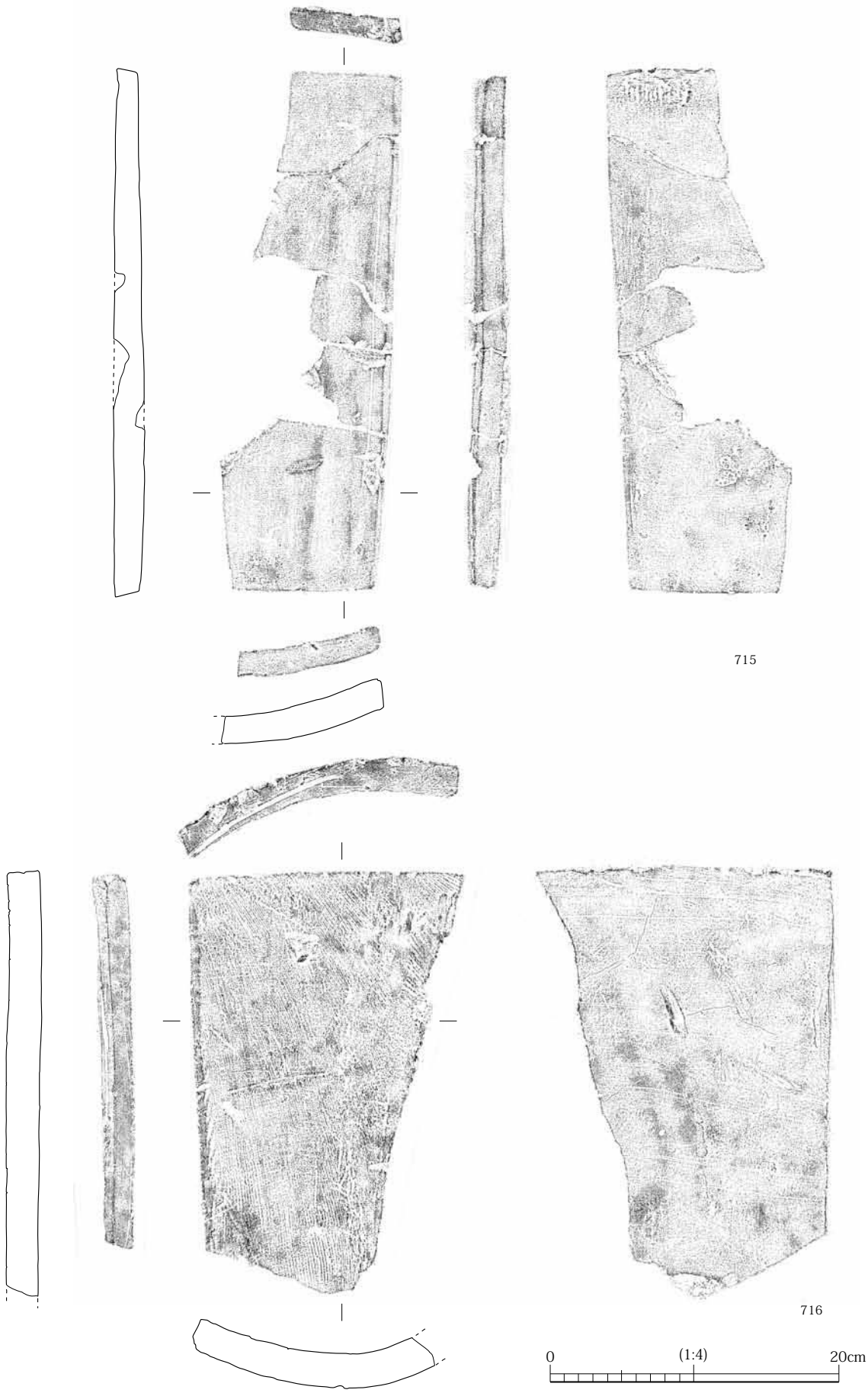


図 114　09017-1 区他出土平瓦（4）

とめられ、分割界線と考えられる。糸切り痕もみとめられることから、粘土板桶巻作りである。また、横方向の窪みもみとめられ、枠板綴じ痕の可能性がある。縦方向のナデは、粘土板合せ目部に施した可能性が考えられる。凸面は縄叩きを施した後、全面に横方向のケズリを施す。一部に斜め方向のナデ状痕跡もみとめられるが、意図的な調整ではないと考えられる。広端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成はやや良で、一部いぶし状になる。

717 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。厚さ 2.7cm と、他の資料と比較して厚みが大きい。凹面は布目が残り、枠板圧痕は確認できない。一部に斜め方向のケズリを施した後に、指紋がみとめられる。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 12 本／ 3 cm である。縄叩きの後、ほぼ全面に横方向のケズリを施し、一部に縦方向のケズリを施す。部分的に別個体の破片が融着する。広端面はケズリを施すが、隅部にはケズリが及ばず藁状圧痕がみとめられ、別個体の破片が融着する。面取りはないが、隅部を斜めに切断する。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

718 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 18 本／ 3 cm、横糸 25 本／ 3 cm である。布撚れが大きく、特に横糸で顕著である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕が不明瞭であるがみとめられる。一部に斜め方向のナデを施すほか、縄叩きもみとめられる。縄目粒数は推定 6 粒／ 3 cm、縄本数は推定 12 本／ 3 cm である。広端面付近にケズリを施す。幅 0.3cm 前後の縦方向の窪みがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。凸面は、左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。縄叩きを施し、縄目粒数は 8 粒／ 3 cm、縄本数は 16 本／ 3 cm である。縄叩きの後、広端面付近に横方向のケズリを施す。広端面は調整を施さず、端面から凹面一部にかけて藁状圧痕がみとめられる。面取りはないが、隅部を斜めに切断する。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、一部を除き須恵質である。

719 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。厚さ 2.5cm と、他の資料と比較して厚みがやや大きい。凹面は布目が残り、縦糸 18 本／ 3 cm、横糸 26 本／ 3 cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。斜め方向に布の綴じ合せ目がみとめられることから、桶巻作りである。端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施す。縄は 2 種用いており、太いものは縄目粒数推定 4 粒／ 3 cm、細いものは推定 6 粒／ 3 cm である。縄本数は推定 10 本／ 3 cm で、太い縄 1 本と細い縄 4 本以上の構成である。縄叩き後一部にナデを施すようであるが、不明瞭である。広端面は、隅部付近に藁状圧痕がみとめられる。破面付近では藁状圧痕はみとめられず平坦になっており、調整を施した可能性がある。隅部は斜めになるが、意図的に切断されたものか破損によるものかは不明である。破面付近のみ凹面側に面取りを施す。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良である。

720 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 23 本／ 3 cm、横糸 22 本／ 3 cm である。幅 2.5 ～ 3.0cm の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向

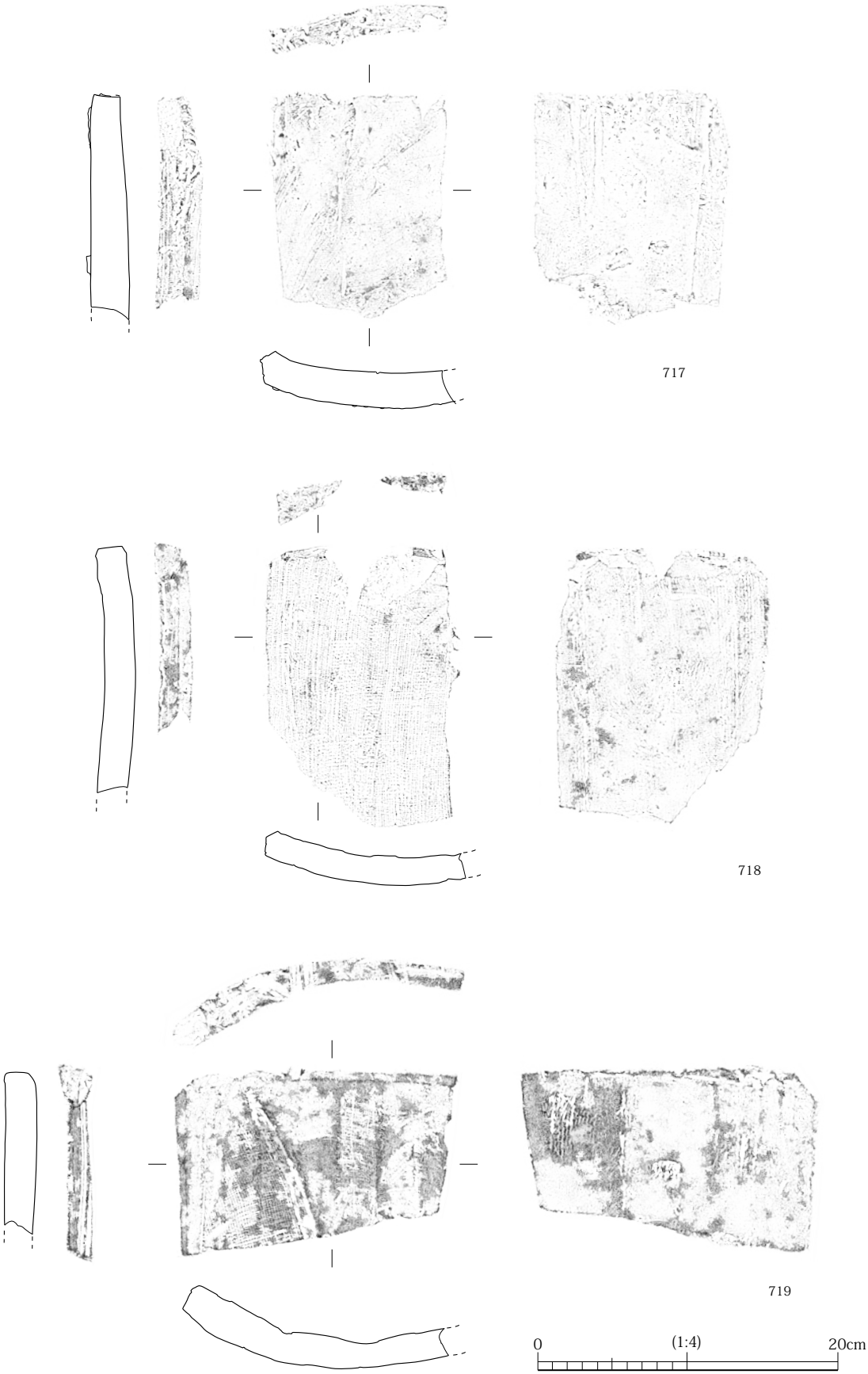


図 115　09017-1 区他出土平瓦（5）

のナデを施す。端面付近に調整を施し、側縁付近に縦方向のケズリを施す。広端面から 4.0 ～ 5.0cm のところに幅 0.5cm の横方向の窪みがみとめられ、枠板綴じ痕の可能性がある。布目方向の変わる部分がみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性があるが、不明瞭である。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 6 粒／ 3 cm、縄本数推定 11 本／ 3 cm である。縄叩き後、広端面付近の一部を除き、ほぼ全面に横方向のケズリを施す。広端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

721 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 30 本／ 3 cm、横糸 25 本／ 3 cm である。幅 2.2cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。布の綴じ合せ目がみとめられることから、桶巻作りである。縫いの手法は MZr である。一部に縦方向の調整を施す。広端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。一部に土が付着するが焼土かは不明である。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 4 粒／ 3 cm、縄本数 10 本／ 3 cm である。縄叩き後、ほぼ全面に調整を施し、側縁付近には縦方向のハケ状痕跡がみとめられる。一部に土が付着するが焼土かは不明である。広端面はケズリを施し、一部のみ凸面側に面取りを施す。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良であるが、一部のみ良で須恵質になる。

722 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。厚さ 2.6cm と、他の資料と比較して厚みが大きい。凹面は糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが右下を支点とするようである。布目が残り、縦糸推定 24 本／ 3 cm、横糸 26 本／ 3 cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。広端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。幅 1.0cm 前後の縦方向の窪みがみとめられ、粘土板合せ目の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 6 粒／ 3 cm、縄本数 12 本／ 3 cm である。縄叩き後、一部に縦方向の調整を施す。広端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良で、一部いぶし状になる。

723 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 24 本／ 3 cm、横糸 22 本／ 3 cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。布の綴じ合せ目がみとめられることから、桶巻作りである。縫いの手法は MZl である。凸面は縄叩きを施す。縄は 2 種用いており、太いものは縄目粒数 5 粒／ 3 cm、細いものは 7 粒／ 3 cm である。縄本数は推定 18 本／ 3 cm で、太い縄 1 本と細い縄 20 本前後の構成である。縄叩き後、一部にナデまたはケズリを施す。広端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹凸両面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

724 は、土坑 001 から出土した。広端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 27 本／ 3 cm、横糸 30 本／ 3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。一部に土が付着するが、焼土かは不明である。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 6 粒／ 3 cm、縄本数推定 8 本／ 3 cm である。縄叩き後、ほぼ全面に横方向のケズリを施し、一部に縦または斜め方向のケズリとナデがみとめられる。広端面は一部にケズリを施すようであるが、不明瞭である。凹面側

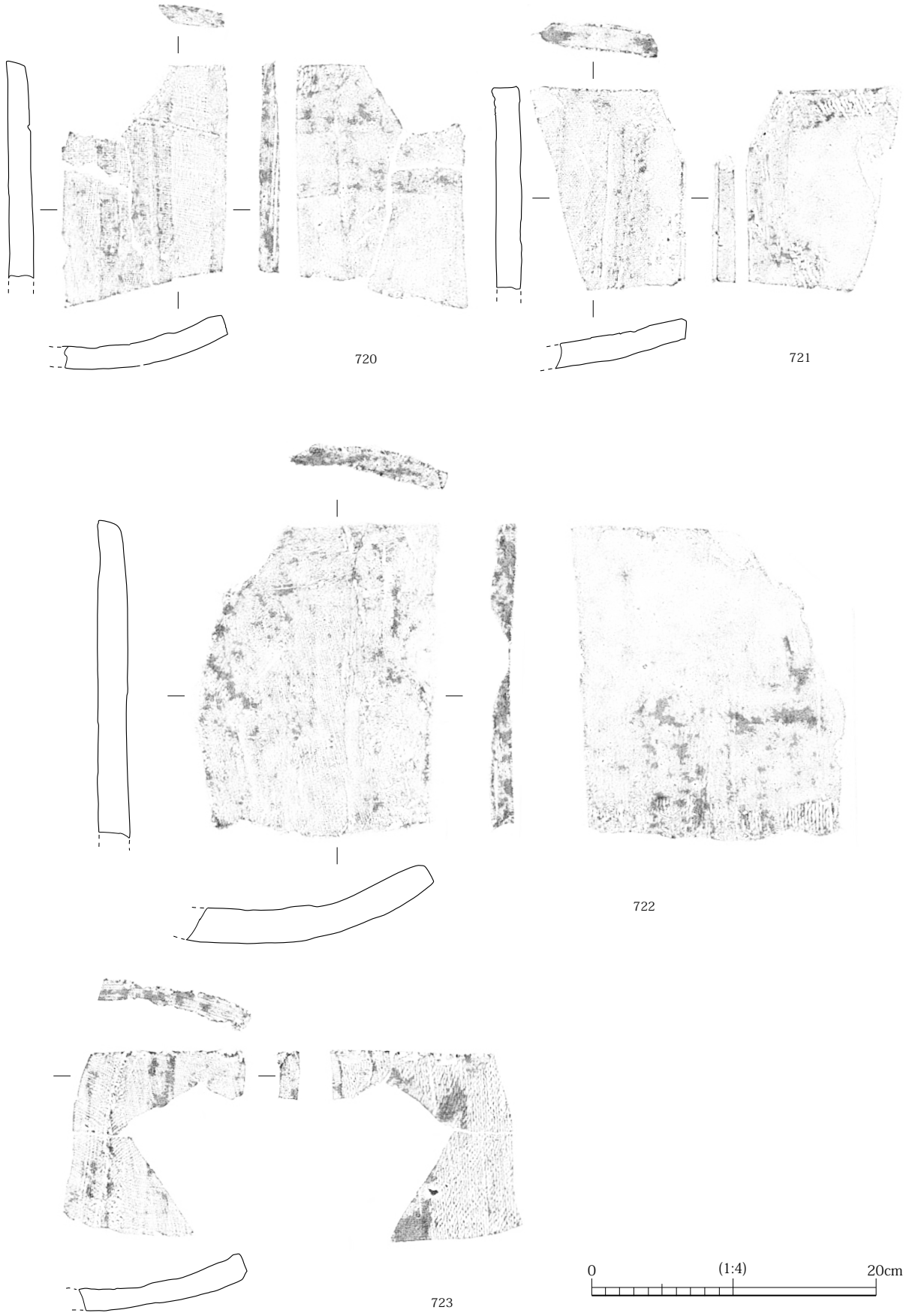


図 116　09017-1 区他出土平瓦（6）

に面取りを施す。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。焼成の際に大きくひずむ。

725 は、土坑 001 から出土した。狭端面の一部と 1 側面が残存する。凹面は、不明瞭であるが糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸推定 36 本／ 3 cm、横糸推定 30 本／ 3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。布の綴じ合せ目がみとめられることから、粘土板桶巻作りである。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数 4 粒／ 3 cm、縄本数 10 本／ 3 cm である。縄叩き後、一部に縦方向のハケ状痕跡と布目痕がみとめられる。一部に土が付着する。狭端面は平坦になるが調整不明で、面取りの有無も不明瞭である。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は全体としてはやや良であるが、凸面側一部は良で須恵質、凹面側はやや不良である。

726 は、土坑 001 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが、右上を支点とするようである。布目が残り、縦糸推定 26 本／ 3 cm、横糸 27 本／ 3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 4 粒／ 3 cm、縄本数 10 本／ 3 cm である。縄叩き後にナデを施すようであるが、不明瞭である。狭端面は平坦になるが調整不明で、面取りはない。隅部を斜めに切断する。側面はケズリを施し、面取りの有無は摩滅により不明瞭である。焼成は不良である。

727 は、土坑 001 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが、左下を支点とするようである。布目が残り、縦糸推定 23 本／ 3 cm、横糸 22 本／ 3 cm である。枠板圧痕は確認できない。布の綴じ合せ目がみとめられることから、粘土板桶巻作りである。縫いの手法は MZr である。狭端面付近に横方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施した後、横方向のケズリを施す。ケズリ後にナデを施すようであるが、不明瞭である。側縁付近に縦方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや良である。

728 は、土坑 046 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は、右下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 32 本／ 3 cm、横糸 35 本／ 3 cm である。幅 2.0 ～ 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。横方向の窪みがみとめられ、枠板綴じ痕の可能性がある。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数 ４～５粒／ 3 cm、縄本数 14 本／ 3 cm である。縄は 2 種以上用いられているようであるが、重複により不明瞭である。一部にナデ状痕跡がみとめられるが、意図的なものかは不明である。狭端面、側面とも、ケズリを施し、面取りはない。焼成はやや良である。

729 は、土坑 001 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は縦方向に半分程度剥離し、剥離面に糸切り痕がみとめられる。不明瞭であるが、左下を支点とするようである。粘土板の合せ目で剥離したものと考えられることから、粘土板桶巻作りである。凹面は布目が残り、縦糸推

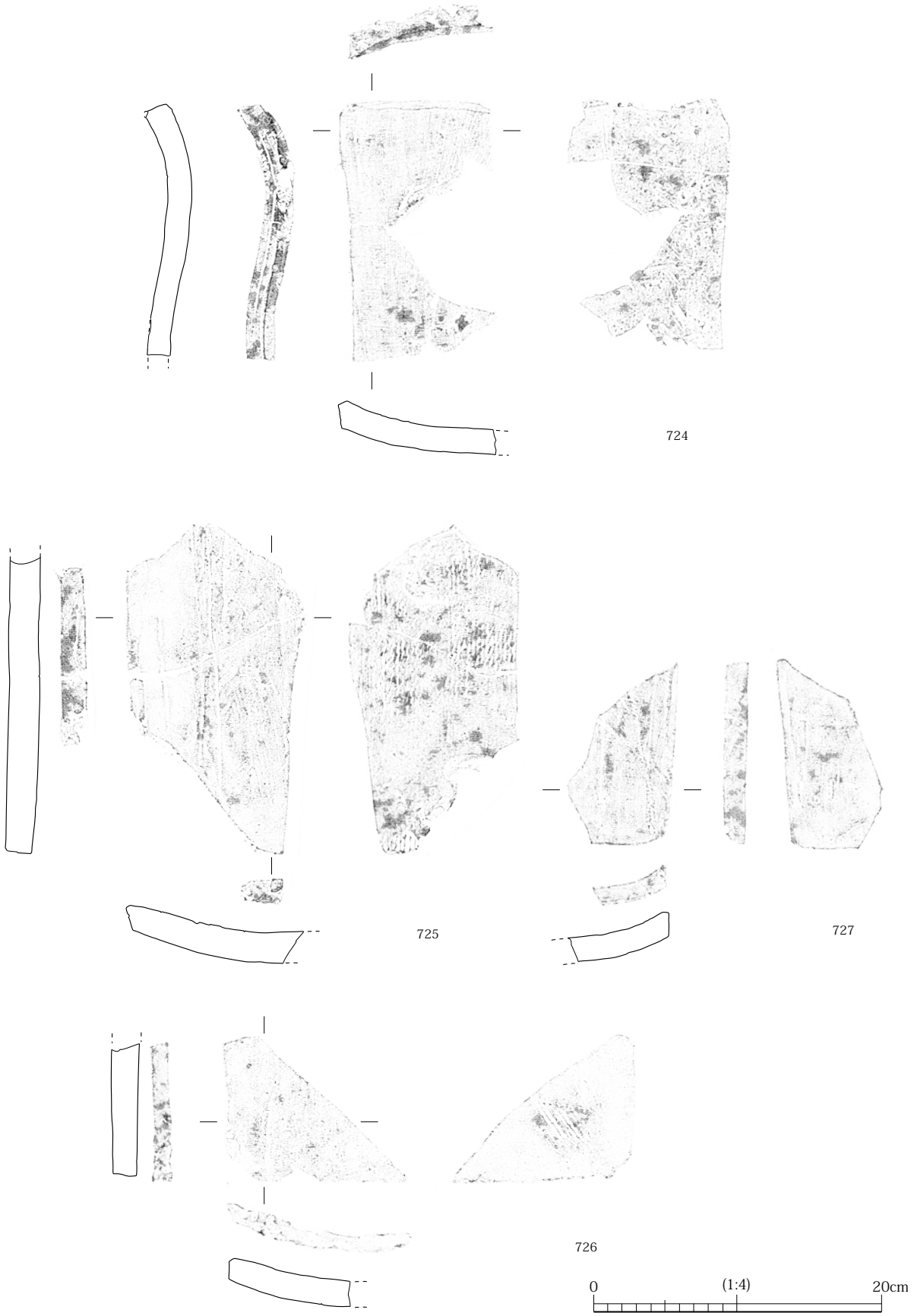


図 117　09017-1 区他出土平瓦（7）

定 22 本／3 cm、横糸 29 本／3 cm である。枠板圧痕は確認できない。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数 6 粒／3 cm、縄本数 14 本／3 cm である。縄叩き後に全面に横方向のケズリを施す。狭端面はケズリを施し、面取りはない。一部に凹面側から粘土がかぶさる。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成はやや良で半須恵質であるが、一部やや不良である。

730 は、土坑 001 から出土した。1 端面が残存する。凹面は、糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが、左上を支点とするようである。布目が残り、縦糸 24 本／3 cm、横糸 24 本／3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。端面付近に横方向のケズリを施す。縦方向の窪みがみとめられ、布の綴じ合せ目の可能性がある。また、径 1.8cm 前後の円形窪みがみとめられる。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数推定 6 粒／3 cm、縄本数推定 14 本／3 cm である。横方向のケズリ状痕跡が、不明瞭であるがみとめられる。また、一部にハケ状痕跡がみとめられ、糸切り痕の可能性もある。端面はケズリを施し、面取りはない。焼成は不良であるが、一部須恵質になる。

731 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。1 端面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 20 本／3 cm、横糸 28 本／3 cm である。幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。凸面は横方向のケズリを施した後、端面付近一部に縦方向のハケ状調整を施す。端面はケズリを施し、凹面側に面取りを施す。焼成は良で、一部須恵質である。

732 は、土坑 046 から出土した。1 端面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 29 本／3 cm、横糸 34 本／3 cm である。幅 1.5cm 前後と他のものと比べやや狭い枠板圧痕がみとめられる。端面付近のみ調整を施す。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数 5 粒／3 cm、縄本数推定 14 本／3 cm である。縄叩き後、一部にナデを施すが、縄目が明瞭に残る。端面は平坦になるが調整不明で、面取りはない。焼成はやや良である。

733 は、土坑 001 から出土した。1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 19 本／3 cm、横糸 20 本／3 cm である。布撚れが大きく、約 1.0cm 四方にわたり、縦糸のみとめられない部分がある。幅 2.0 ～ 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。凸面は縄叩きを施す。縄は 2 種用いており、太いものは縄目粒数推定 6 粒／3 cm、細いものは 9 粒／3 cm である。縄本数は推定 16 本／3 cm であるが、縄の構成は不明である。縄叩き後、不明瞭であるが、横方向のケズリを施すようであり、その後、一部に縦方向のハケ状痕跡、横方向のケズリ状痕跡がみとめられる。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや良である。

734 は、土坑 001 から出土した。広端面と両側面が残存する。凹面は左下を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、縦糸 29 本／3 cm、横糸 23 本／3 cm であるが、横糸が 10 本／3 cm 前後になる部分が 2 箇所みとめられる。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕状の痕跡がみとめられるが、不明瞭である。焼成前の線刻がみとめられるが、文字ではなく記号状のものである。凸面は縄叩きを施す。縄は 2 種用いており、太いものは縄目粒数推定 6 粒／3 cm、細いものは推定

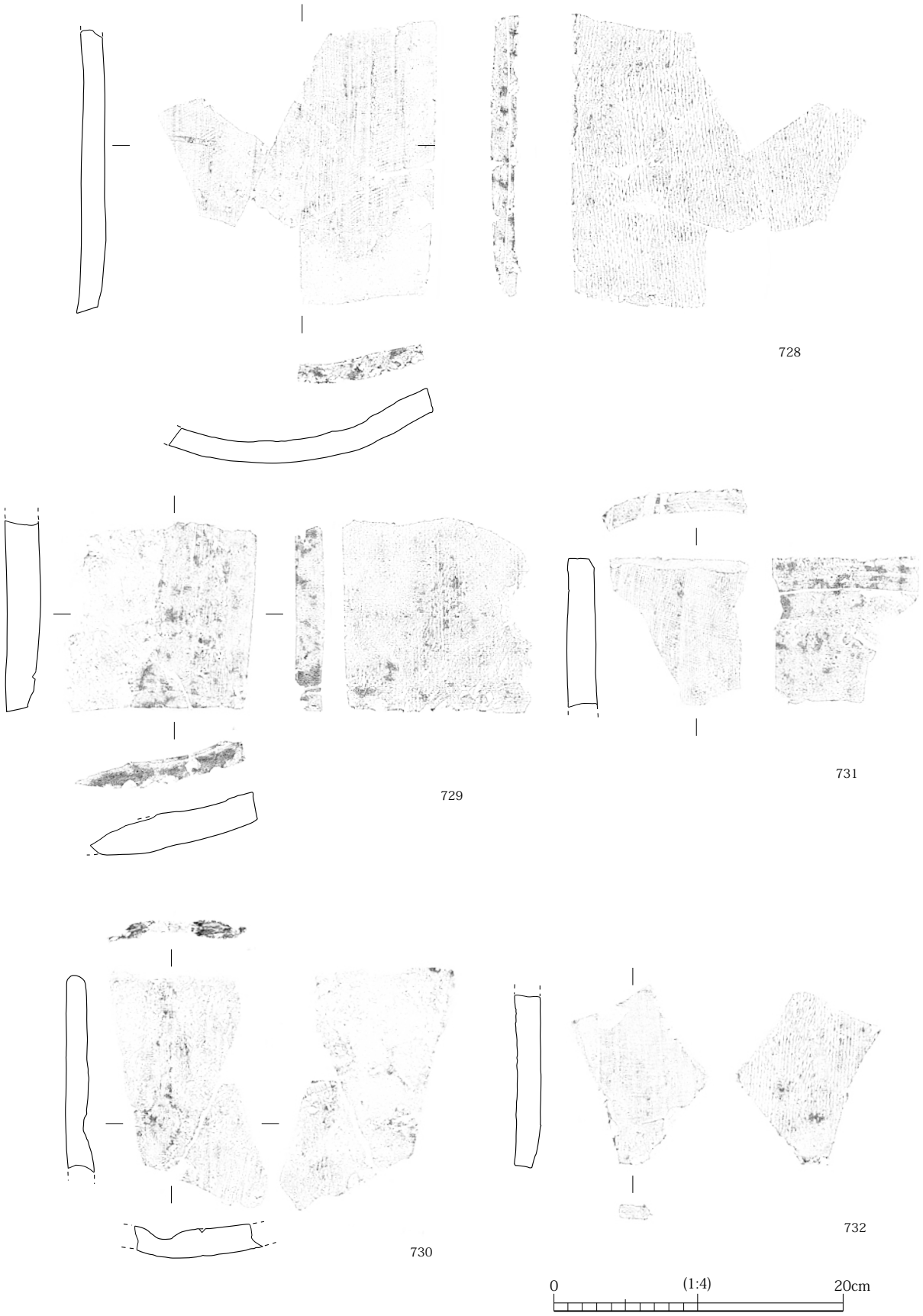


図 118　09017-1 区他出土平瓦（8）

８粒／３cm である。縄本数は推定 12 本／３cm で、太い縄１本と細い縄 13 本前後の構成のようである。縄叩き後、一部にナデを施す。スサ状痕のある焼土が凹面から側面にかけて一部に付着する。広端面はケズリを施し、凹面側に面取りを施す。隅部付近は調整を施さず、藁状圧痕がみとめられる。隅部は斜めに切断する。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で須恵質であるが、一部やや良である。左隅部は大きくひずんで皿状を呈しており、他の破片との接合部がずれることから、焼成時の破損により分割されたものと考えられる。

735 は、土坑 001・046 から出土した。１端面と１側面が残存する。広端面の可能性があるが、残存度が低く断定できない。凹面に縦方向の筋状痕跡がみとめられ、糸切り痕の可能性がある。布目が残り、縦糸 21 本／３cm、横糸 28 本／３cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。隅部付近を除き縄叩きを施し、縄目粒数推定９粒／３cm、縄本数 18 本／３cm で、縄目は横方向に並ぶ。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数９粒／３cm、縄本数推定 15 本／３cm である。叩き後に斜め方向の調整を施す。端面はケズリを施し、凹面側に面取りを施す。隅部は斜めに切断する。側面は平坦になるが調整不明で、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で須恵質である。

736 は、土坑 001 から出土した。１側面が残存する。凹面に糸切り痕がみとめられ、不明瞭であるが、図の右下を支点とするようである。布目が残り、縦糸 21 本／３cm、横糸 25 本／３cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。縄叩きを施し、縄目粒数８粒／３cm、縄本数 19 本／３cm で、縄目は横方向に並ぶ。枠板圧痕の凹凸が顕著であることから、凹凸を滑らかにするために縄叩きを施した可能性がある。凸面は縄叩きを施す。縄目粒数推定８粒／３cm、縄本数推定 13 本／３cm で、凹面の縄叩きとは異なる工具と考えられる。縄叩き後に横方向のケズリを施す。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、須恵質である。

737 は、調査区南部で基本層序第Ⅵ層から出土した。広端面と１側面が残存する。凹面は布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕状の痕跡がみとめられる。広端面付近に横方向のケズリを施す。凸面は縄叩きを施した後、調整を施すようであるが、不明瞭である。端面はケズリを施し、面取りはない。側面は平坦になるが調整不明で、面取りの有無も不明瞭である。広端面から 1.5cm 前後のところに釘穴が１箇所ある。孔径は 1.5cm 前後である。焼成は不良である。

738 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。狭端面と１側面が残存する。凹面は布目が残り、幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は、全面に横方向の調整を施すようであるが、不明瞭である。狭端面はケズリを施し、面取りはない。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。狭端面から 5.0cm 前後、側縁から 7.0cm 前後のところに１孔があり、孔径は 1.5cm 前後である。道具瓦の可能性もある。焼成はやや不良である。

739 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。平瓦を焼成前に斜めに分割する隅切の平瓦で、分割された１側面が残存する。凹面は布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。凸面は縄叩きの後、全面に横方向の調整を施すようであるが、不明瞭である。一部に縦方

図 119　09017-1 区他出土平瓦（9）

向のハケ状痕跡がみとめられる。側面はケズリを施し、面取りはない。焼成は不良で、いぶし状になる。

740 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面に粘土紐接合痕が明瞭にみとめられ、粘土紐桶巻作りと考えられる。接合痕の間隔は 1.5 ～ 2.0cm で、接合部は凹面側が高い斜面となる。粘土紐巻き付けの方向は、成型時の狭端面を上にした状態で右回りである。布目が残り、枠板圧痕は確認できない。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面は、縄叩きの後、全面に調整を施す。狭端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成はやや不良である。

741 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。凹面は布目が残り、縦糸 19 本／ 3 cm、横糸 21 本／ 3 cm である。幅 2.5cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。狭端面付近に横方向のケズリを、側縁付近に縦方向のケズリを施す。凸面から側面にかけて、粘土接合痕状の痕跡がみとめられることから、740 と同様粘土紐桶巻作りと考えられる。凸面は縄叩きを施す。側縁に沿って幅 0.2cm 前後の凸状部がみとめられる。狭端面、側面ともケズリを施し、面取りはない。焼成は不良で、いぶし状になる。

742 は、調査区南部で撹乱から出土した。凸面布目平瓦である。端面、側面とも欠損する。最大厚 2.5cm と、他の資料と比較して厚みが大きい。凹面の調整は摩滅により不明である。凸面は不明瞭であるが布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。焼成は不良である。

743 は、土坑 046 から出土した。 1 側面が残存する。凹面は、全面に縦または斜め方向のケズリを施した後、側縁付近に縦方向のケズリを施す。枠板圧痕は確認できない。凸面は縄叩きを施し、縄目粒数 9 粒／ 3 cm、縄本数推定 14 本／ 3 cm である。縄叩き後に、一部に横方向の調整を施し、斜め方向のハケ状痕跡がみとめられる。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成は良で、半須恵質である。

744・745 は、熨斗瓦等道具瓦の可能性のあるものである。

744 は、調査区南部で基本層序第Ⅴ層から出土した。 1 側面が残存する。凹面は、図で右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、幅 2.0cm 前後の枠板圧痕がみとめられる。一部に縦方向のケズリを施し、側縁付近にも縦方向の調整を施す。凹面の右側縁から 2.0cm 前後のところに縦方向の撚紐痕跡がみとめられ、分割界線の可能性がある。凸面は、横方向の調整を施すようであるが、不明瞭である。側面はケズリを施し、凹面側縁に面取りを施す。焼成はやや不良である。図左の破面も平坦になることから、平瓦を意図的に分割して熨斗瓦等道具瓦として使用されたものの可能性がある。

745 は、土坑 046 から出土した。狭端面と 1 側面が残存する。最大厚 1.3cm と、他の資料と比較して厚みが小さい。凹面は、右上を支点とする糸切り痕がみとめられる。布目が残り、調整は施さない。枠板圧痕は確認できない。直径 2.0cm 前後の円形窪みがみとめられ、分割界点の可能性が考えられる。凸面は縄叩きを施した後、横方向の調整を施す。端面、側面ともケズリを

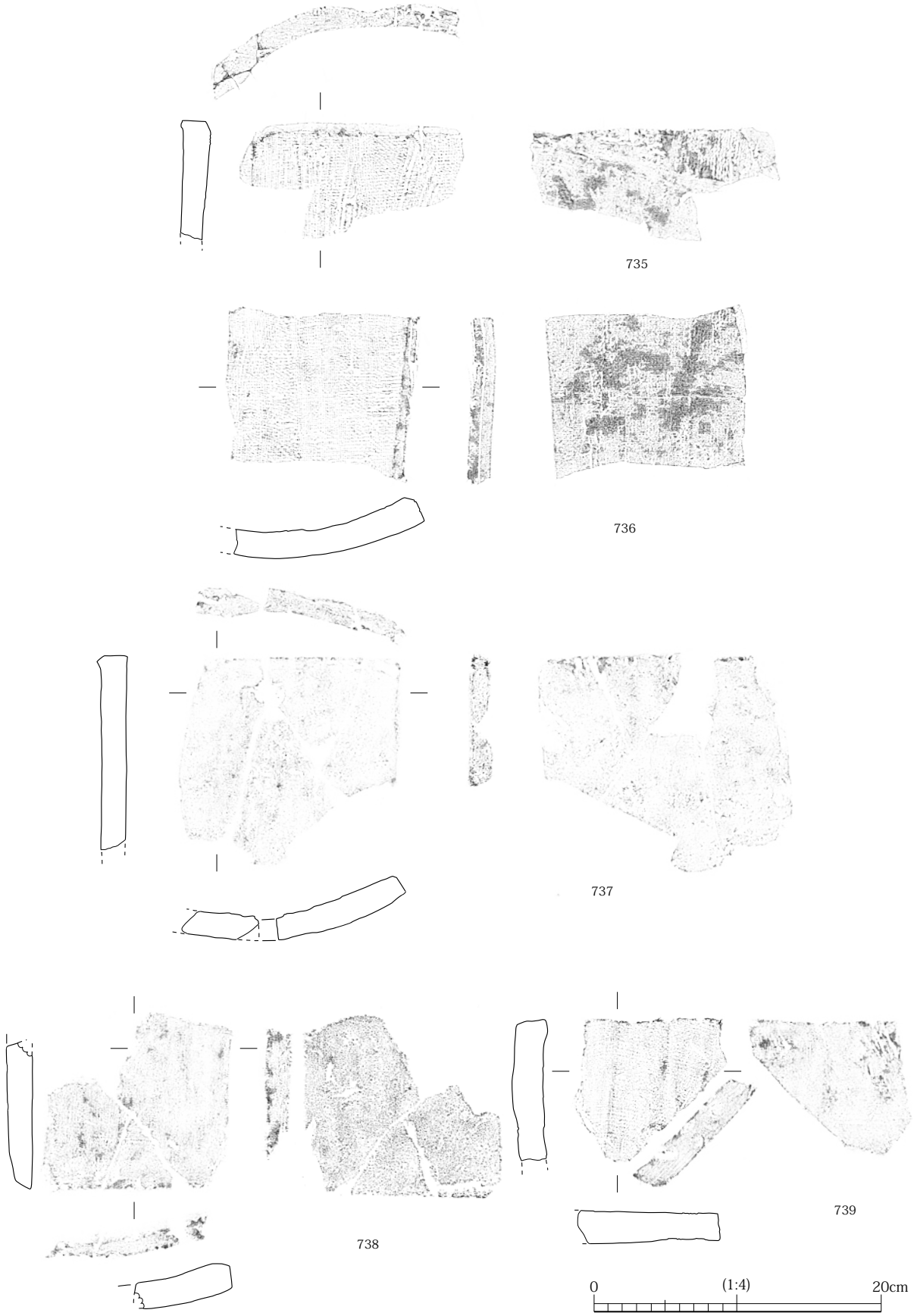


図 120　09017-1 区他出土平瓦（10）

施し、面取りはない。焼成は良で、須恵質である。湾曲が少なく平坦な形状であること、薄いことから、平瓦を加工し、熨斗瓦等道具瓦として使用されたものの可能性がある。

以上のように、平瓦は、全体に残存度の高いものは少ないものの、少数ではあるが、全長など法量の判明するものも出土している。枠板圧痕のみとめられるものが大半であり、他の調整等の部分でも、共通性のみとめられるものが多い。一方で、凹面全面にケズリやナデを施すもの、凹面に縄叩きを施すもの、粘土紐接合痕のあるもの、凸面布目平瓦といった特徴的なものもいくつかみとめられる。また、隅部を斜めに切断するものが複数みとめられる。本来は、こうした特徴をもとに分類し、それぞれの製作技法を明らかにするべきであるが、破片が大半であり、摩滅により調整等の不明なものも多い。そのため、分類不能なものが大半であり、また、同一個体の瓦の別の部分から、異なる種別に分類してしまう危険性もある。そこで、平瓦全体について項目ごとに特徴を整理し、傾向を明らかにしたうえで、上記の特徴的なものを判別する手がかりについても検討する。

出土平瓦は、類似した特徴をもち、後述するように粘土板桶巻作りと考えられるものが大半であることからは、多くは８世紀前半以前のものと考えられる。しかし、09017-1 区および北部 11001-1 区出土瓦の中には中世に所属すると考えられるものが一定量含まれることから、以下では、丸瓦と同様、一括性が高いと考えられる 09017-1 区奈良時代遺構検出面の土坑 001・046 出土の平瓦のみを対象として、破片資料からではあるが、製作技法等の特徴をみることとする。

奈良時代土坑出土平瓦の特徴　対象とするのは、09017-1 区土坑 001・046 出土瓦で、計 520 点である。平瓦に意図的な分割や加工を施して熨斗瓦等道具瓦として使用した可能性のあるもの２点も含まれている（744・745）。残存度の低いものが大半であることから、観察項目ごとに点数を示し、全体の傾向から特徴をつかむこととする。また、先述のように特徴的なものについて、類似した傾向がみとめられる場合は、特に記載する。

１）形態

形態に関わる特徴として、隅部を斜めに切断するものが、23 点ある。いずれも破片であり、全体形状のわかるものはない。部位の判明するものでは、広端左上隅部が 12 点、広端右上隅部が５点、狭端左下隅部が１点と、広端部側の資料が多いことから、広端部のみ隅部を斜めに切断したものが多いと推定できる。

全体では、いずれかの隅部が残存しておりかつ隅部を切断しないことが確認できるものが 132 点あり、うち 50 点は広端隅部が残存する資料である。したがって、広端隅部であり隅部切断の有無が確認できる資料は計 67 点、このうち隅部を斜めに切断するものが 17 点となり、広端部隅部を斜めに切断したものは全体の４分の１程度であったものと推定できる。

２）残存部位

残存部位の判明するものの点数は、以下の通りである。

・広狭両端面と両側面の残存するもの：１点

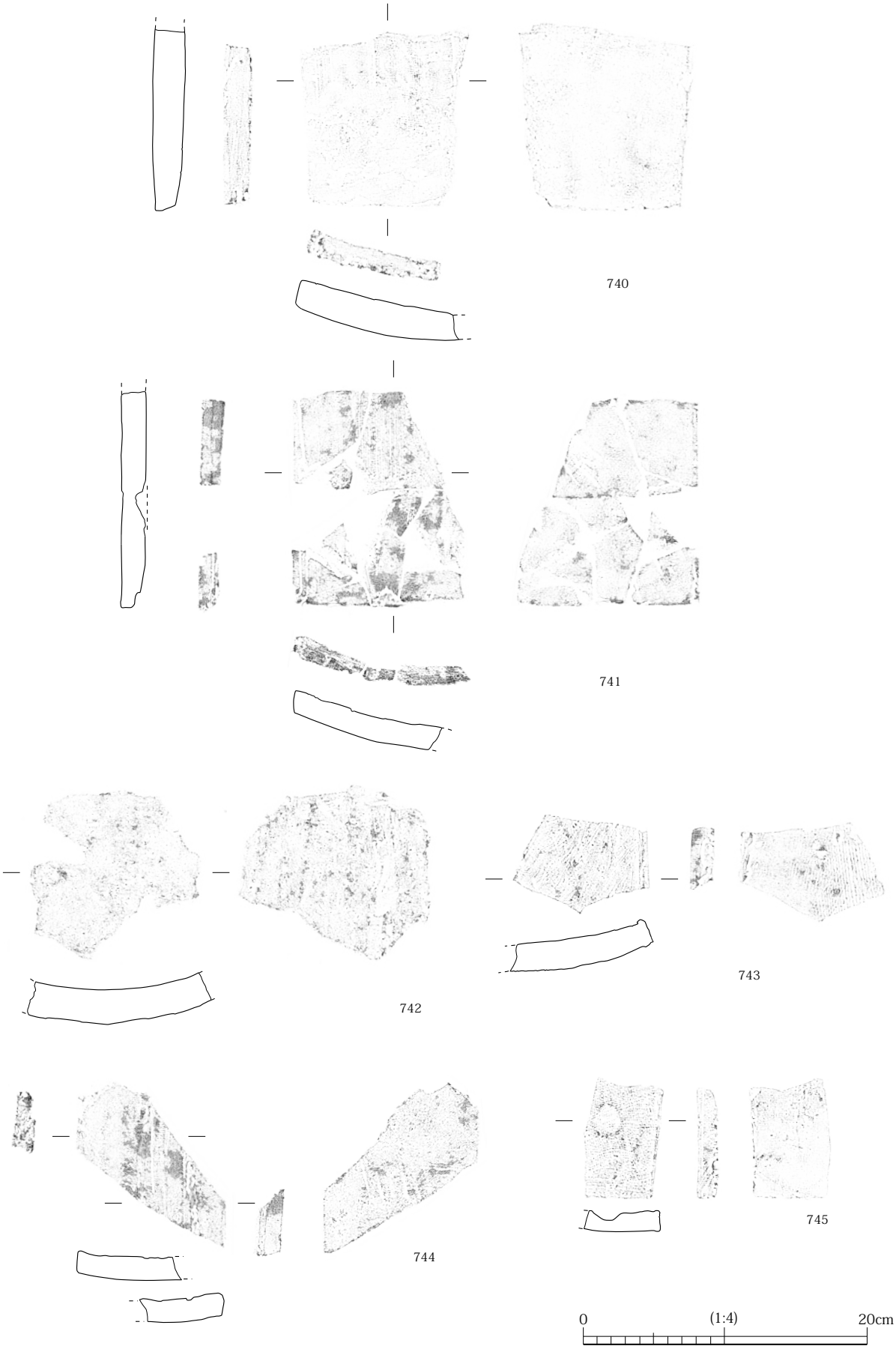


図 121　09017-1 区他出土平瓦（11）

・広狭両端面と１側面の残存するもの：２点

・広端面と両側面の残存するもの：１点

・広端面と左側面の残存するもの：39 点

・広端面と右側面の残存するもの：25 点

・両側面が残存するもの：１点

・左側面のみ残存するもの：20 点

・右側面のみ残存するもの：26 点

・狭端面と両側面の残存するもの：４点

・狭端面と左側面の残存するもの：39 点

・狭端面と右側面の残存するもの：38 点

また、部位不明であるが、１端面のみ残存するものが 61 点、１側面のみ残存するものが 88 点ある。

３）胎土

10mm 前後の礫を含む粗のものが 45 点、５mm 前後の礫を含むやや粗のものが 176 点、３mm 前後の礫を含むやや密のものが 209 点、１mm 前後以下の砂を含む密のものが 90 点である。長石、チャート、クサリ礫を含むものが多い。

４）法量

全長の判明する資料は２点（707・714）で 36.5cm・37.0cm である。

広端幅の判明する資料は２点（707・709）で 27.6cm・28.0cm である。

狭端幅の判明する資料は５点で、１点（713）がやや小さく 22.3cm、ほか４点（707・708・710・712）は 24.4 ～ 25.3cm である。このほか、広端幅の推定可能な資料が１点（734）あるが、ひずみが大きく、25.8cm と他のものよりも小さいことからも、本来の数値を示していない可能性が高い。

なお、土坑外出土のものでは、他に全長の判明する資料が１点（715）出土しており、37.1cm と近似値を示す。

厚みは、1.3 ～ 2.7cm の範囲に分布し、1.7 ～ 2.4cm のものが多い。

５）凹面の枠板圧痕

全資料のうち、やや不明瞭なものも含め、凹面に枠板圧痕または枠板圧痕状の痕跡がみとめられるものは 276 点で、このうち枠板幅の確認できるものは、1.5cm と幅の狭い１点（732）を除くとすべて 2.0 ～ 2.5cm である。残存度の高い資料（707・709・711・713）から、枠板圧痕は平瓦１枚につき 11 ～ 12 枚程度と推定できる。

枠板圧痕のみとめられない資料は、凹面全体にケズリ等の調整を施す資料が少数あるが、摩滅の著しい資料が大半である。

６）粘土形態

糸切り痕から粘土板を用いたことが確認できるものが 76 点あり、凹面に確認できるものが 74 点、凸面に確認できるものが 1 点（718）、剥離面に確認できるものが 1 点（729）である。

凹面に糸切り痕があり支点の確認できるものでは、不明瞭なものも含むと左上のものが 7 点、右上のものが 24 点、左下のものが 8 点、右下のものが 11 点である。不明なものが多いが、右上を支点とするものが多い傾向がある。また、粘土板の合せ目がみとめられるものが 3 点ある。

粘土板を用いるものについては、粘土板の合せ目がみとめられる資料があることから、桶巻作りと推定できる。

なお、土坑外から粘土紐桶巻き作りのものが 2 点出土しているが、土坑内からは確実な資料はない。このほか横方向の亀裂がみとめられる事例があるが、亀裂があっても糸切り痕のみとめられる資料があることから、粘土紐を用いたことによるものではなく、粘土角材成型時の粘土継ぎ足しの痕跡等であると判断した。

７）凹面の布目痕跡

摩滅の著しいものをのぞき、計 417 点で布目が残る。計測可能で、布撚れの著しいものをのぞくと、布目は以下の通りである。布撚れの著しい資料以外では縦糸と横糸で顕著な差はみとめられないことから、縦糸と横糸の平均値を示す。

・10 ～ 20 本／ 3 cm のもの：7 点

・21 ～ 30 本／ 3 cm のもの：61 点

・31 ～ 40 本／ 3 cm のもの：21 点

21 ～ 30 本／ 3 cm のものが多く、また、いずれも 18 ～ 36 本／ 3 cm におさまる。

布目のみとめられない資料は、枠板圧痕のみとめられない資料と同様、凹面全体にケズリ等の調整を施す資料が少数あるが、摩滅の著しい資料が大半である。

８）布の綴じ合せ目

布の綴じ合せ目が確認できるものは 11 点あり、その可能性のあるものが他に 16 点出土ある。全体の形状の不明なものが多いが、縫いの手法の判明するものはすべて図化している。

このように布の綴じ合せ目がみとめられることからも、桶巻作りのものが一定量あると推定できる。

９）凹面の調整

全面に調整を施すものは少数で、大半は一部にケズリやナデを施すものである。

端面付近や側縁付近以外で一部に調整を施すものは 31 点あるが、方向にはばらつきが大きく、不定方向のものも多い。調整ではなく、工具のアタリの可能性もあるが、残存度が低く意図的な調整かどうかを判断できないものも多い。

端面付近や側縁付近のみにケズリ等の調整を施すものは、一定量確認できる。端面付近に調整のみられるものは 114 点で、確認できるものはいずれも横方向のケズリである。側縁付近に調整

のみられるものは 70 点で、確認できるものはいずれも縦方向のケズリである。

また、特徴的なものとして、縄叩きを施すものが３点（718・735・736）あるほか、縄叩きを施した可能性のあるものがほかに１点出土している。

このほか、残存部で全面にケズリを施すものが１点（743）あり、全面にナデを施した可能性のあるものがほかに３点出土しているが、いずれも破片であり、残存部位のみでなく本来全面にケズリやナデを施していたものかは判断できない。

以上より、平瓦凹面は、全体に調整を施すものは少なく、端面付近、側縁付近のみに調整を施すものが多くみられる。また、少数であるが、縄叩きを施すもの、残存部では全面にケズリを施すものがみとめられる。

10）凸面の調整

縄叩きを施すものが 251 点ある。摩滅や後の調整によって不明瞭なものも多いが、縄目粒数は４～９粒／３cm、縄本数は推定９～ 20 本／３cm である。２種以上の縄が用いられた例も確認できるが、いずれも残存度が低く、縄の構成を推定できるものは、図化し詳述した資料のみである。縄の撚りはすべて、圧痕で右上がりの傾斜をもつ。

縄叩きの後にケズリやナデを施すものもあるが、不明瞭なものが多い。全面またはほぼ全面に調整を施すものは 72 点で、確認できるものでは、横方向のケズリを施すものが 41 点である。また、全面調整の後に縦方向のハケ状痕跡のみとめられるものが 19 点ある。

上記の全体的な調整の後に、端面付近や側縁付近のみにケズリ等の調整を施すものも確認できる。端面付近に調整のみられるものは 16 点でいずれも横方向、側縁付近に調整のみられるものは 10 点で、いずれも縦方向であり、確認できるものはすべてケズリである。

縄叩き後に調整のみとめられないものもあるが、いずれも破片であることから、平瓦で凸面にまったく調整を施さないと断定できる資料はない。また、縄叩きの痕跡のみとめられないものでも､部分的なものも含めるとナデ､ケズリなど何らかの調整がみとめられるものが 98 点あること、調整のみとめられないものは摩滅の著しいものであることから、凸面は縄叩き後に調整を施したものが多く、全面に施すものも一定量あるものと推定できる。また、端面付近、側縁付近への調整もみとめられるが、凹面ほどには顕著でない。

11）端面の調整と傾き

広端面の残存するものでは、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが 48 点、平坦になるが調整不明のものが 13 点、藁状圧痕がみとめられ調整を施さないものが２点である。また、面取りは、凹面側に施すものが９点、凸面側に施すものが４点、凹凸両面側に施すものが１点、面取りなしのものが 57 点である。傾きは、垂直になるものが 13 点、凹面に傾くものが 40 点、凸面にやや傾くものが１点である。

狭端面の残存するものでは、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが 47 点、平坦になるが調整不明のものが 35 点である。また、面取りは、凹面側に施すものが３点、凸面側に施

すものが３点、面取りなしのものが 69 点である。傾きは、垂直になるものが 21 点、凹面に傾くものが 46 点である。

以上より、調整の不明なものが多いものの、広端面、狭端面ともケズリを施すものが一定量みとめられ、面取りを施さないものが多い。また、端面の傾きは、広端面、狭端面とも凹面に傾くものが多く、垂直のものも一定量みとめられる。

12）側面調整

側面は、摩滅の著しいものを除くと、ケズリを施すものが 192 点、平坦になるが調整不明のものが 98 点である。また、面取りは、凹面側縁に施すものが 120 点、凸面側縁に施すものが 11 点、凹凸両面側縁に施すものが 18 点、面取りなしのものが 111 点である。また、面取りはいずれも幅の比較的狭いものであるが、凹凸両面側縁に施すもののうち２点は、面取り幅が大きく、側面断面形状がＶ字状を呈する。傾きは、大半が桶巻作りと考えられることから、分割する前の円筒状態で円の中心方向に向かう向きを垂直とみなし、そこから凹面と凸面のどちらに傾くかで分類する。垂直になるものが 53 点、凹面に傾くものが 12 点、凸面に傾くものが 165 点である。

以上より、調整の不明瞭なものも多いが、ケズリを施すものが比較的多くみとめられる。また、面取りを施すものとないものは同数に近く、面取りを施すものの大半は凹面側縁に施すものである。傾きは凸面に傾くものが顕著で、垂直のものは一定量みとめられるが、凹面に傾くものは少量である。また、凸面に傾くものは、やや傾く程度のものが多い。一枚作りの平瓦では、凸面に大きく傾くものが一般的であることから、側面の傾きからも、桶巻き作りのものが大半であると推定できる。

13）焼成

良で須恵質のものが 53 点、良で一部須恵質のものが８点、やや良のものが 47 点、やや不良のものが 68 点、やや不良でいぶし状になるものが 41 点、不良のものが 232 点、不良でいぶし状になるもの 71 点である。いぶし状になるものはやや不良または不良のものであることから、丸瓦と同様、現状でいぶし状でないものに、いぶし状であったものの表面が剥離したものが含まれている可能性がある。

部分によって焼成の異なるものが多いことから、本来は、全体が残っていなければ焼成を判断できないと考えられるが、不良のものが半分以上を占めることは確実である。また、丸瓦と同様、焼成の良いものに調整がよく残存する傾向があるため、図化したものと資料全体とでは焼成による分類の比率は異なっており、調整の傾向をみるうえでも観察可能なものに焼成の良いものの割合が増える傾向がある。しかし、焼成の不良のものにも同様の痕跡が確認できるものがみとめられることから、焼成によって大きく製作技法が異なることはないものと推定できる。部分によって焼成が異なるものが多いことからも、焼成は窯内の位置によって左右された可能性が高い。

以上、平瓦では、破片資料が多いものの、各部分の調整等の観察から、一定の傾向をみとめる

ことができる。製作技法では、糸切り痕、粘土板合せ目、布の綴じ合せ目がみとめられるものがあるほか、分割界線の確認できるものが１点（716）、その可能性のあるものが３点（710 他）、分割界点の可能性のある痕跡のみとめられるものが３点（745 他）ある。こうした痕跡がみとめられる資料は、粘土板桶巻作りと考えられる。また、こうした痕跡の確認できる資料とその他の資料との間では、凹面の調整は全体でなく一部に、特に端面付近や側縁付近に施す点、凸面は縄叩き後に調整を施す点が共通し、枠板圧痕のある資料では１点を除き枠板圧痕の幅が近似する。また、端面や側面の調整や面取りにも両者の間で目立った差異はみとめられない。したがって、粘土板桶巻作りの明瞭な痕跡がみとめられない資料についても、同じく粘土板桶巻き作りであると推定できる。また、隅部を切断する特徴的な形態のもの、凹面に縄叩きを施すものとも、枠板圧痕がみとめられ、前者では、布の綴じ合せ目が確認できる資料もある。また両者ともその他の点では目立った特徴がみとめられないことから、これらの資料についても粘土板桶巻作りであると推定できる。一方、一枚作りの確実な資料はない。以上より、土坑出土平瓦の大半が粘土板桶巻作りであると推定できる。ただし、凹面にケズリを施す資料については、小片で出土数も少ないことから、粘土板桶巻作りであるかどうかは判断できない。

ただし、粘土桶巻作りであっても、隅部形態、凹面の布の特徴や縄叩きの工具から、また、縄叩き後の調整の詳細な検討等から、本来はさらなる細分が可能であろう。しかし、本調査で出土した資料では、全体の判明するものが少なく、詳細な分類は困難である。今後、和泉寺跡既存資料等との比較によって、検討を深める必要がある。

これらの平瓦の所属時期については、桶巻作りであることから、８世紀前半以前と推定できる。また、平瓦の枠板圧痕や調整等の諸特徴は、土坑 001・046 外出土のものも含め、09017-1 区他出土の軒平瓦とも類似しており、糸切り痕のみとめられる軒平瓦（671・674）もある。したがって、軒平瓦も粘土板桶巻作りによって製作されたものと推定でき、同時期に所属する可能性が高い。軒平瓦の所属時期が７世紀末～８世紀前半であることから、平瓦についても同時期に位置づけられる。

また、平瓦の特徴や全体的な傾向は、先述の文字瓦、平瓦を分割した道具瓦にも共通してみとめられ、隅部を切断し、凹面一部に縄叩きを施し凸面にハケ状痕跡のみとめられる文字瓦（655）、糸切り痕のみとめられる文字瓦と道具瓦（655 ～ 657・684・686）、粘土板合せ目のみとめられる道具瓦（685）もある。したがって、これらもまた粘土板桶巻作りによっていると考えられるとともに、道具瓦は、分割時点までは通常の平瓦と同様の過程で作られたものと推定できる。以上より、文字瓦と道具瓦についても、同時期のものと推定でき、文字瓦のうち文字の特徴から８世紀以降に位置づけられるもの（655）があることからもこの推定時期が裏付けられる。

なお、上で挙げたような特徴は、土坑出土遺物のみでなく、調査区南側包含層で出土した瓦についても共通するものであることから、調査区南側で出土した瓦の多くは本来土坑内に廃棄されていたものであるという推定も裏付けられる。ただし、粘土紐桶巻き瓦２点、凸面布目平瓦１点

は土坑外のみからの出土であることから、別の地点のものが混入した可能性も考えられる。特に、凸面布目平瓦については、他の調査区で多く出土しており、それらと特徴が類似することから、その可能性が高い。土坑出土瓦と所属時期が異なるか否かは判断できないが、別の建物で使用されたものである等、使用時や廃棄時に差異がある可能性が考えられる。

小結　最後に 09017-1 区他出土瓦の概要をまとめておく。

09017-1 区他からは古代から中世のものが出土しているが、奈良時代の土坑 001・046 から出土したものは、一括性が高い資料であると推定できる。この土坑出土資料の分析から、丸瓦は、行基式、玉縁式の両者が出土しており、玉縁式の方が多いこと、行基式のものに、凹面が屈曲する特徴的な形態のものがあることが判明した。玉縁式の形態より、８世紀のものを含むことも推定できた。土坑出土の平瓦の分析からは、粘土板桶巻作りのものが大半であることが判明し、８世紀前半以前のものであることが推定できた。また、丸瓦、平瓦とも、土坑出土のものと、土坑周辺である調査区南部包含層から出土したものとの共通性が高いことから、土坑周辺である調査区南部包含層出土資料の多くはもともと土坑内に包含されていた資料が後世の耕作等に伴う掘削により動かされたものであると推定できた。また、土坑外出土のものも含め、丸瓦と軒丸瓦、平瓦と軒平瓦の製作技法に共通性がみとめられることも確認できた。

そこで、あらためて、調査区南部包含層出土資料のものも含めて瓦の所属時期を検討すると、軒丸瓦からは８世紀前半、軒平瓦からは７世紀末～８世紀前半という時期が推定でき、平瓦を分割した道具瓦は上記平瓦と同様８世紀前半以前、文字瓦も上記平瓦と同様８世紀前半以前で、うち１点は８世紀に位置づけられるものである。

以上より、土坑および周辺出土瓦の所属時期は、７世紀末～８世紀前半におさまるものと推定できる。軒丸瓦、玉縁式の丸瓦、また一部の文字瓦からは、さらに限定して８世紀前半と位置づけることも可能ではあるが、詳細の時期の手がかりとなる資料数が多くないことから、７世紀末～８世紀前半と、幅をもたせた推定としておく。

このように、09017-1 区他出土瓦は、古代から近世まで幅広い時期のものを含むものの、奈良時代の廃棄土坑に由来する資料が大半であり、これらの瓦の製作時期は７世紀末～８世紀前半に位置づけられる。11001-4 区、09017-2 区他出土の古代の瓦と比較すると、粘土板桶巻作りによるものと凸面布目瓦の両者がみられることは共通する。しかし、09017-1 区他では凸面布目瓦は１点のみの出土で、11001-4 区、09017-2 区他と比較すると、凸面布目瓦の出土点数、瓦全体の出土量の中での凸面布目瓦の割合、粘土板桶巻作りのものに対する凸面布目瓦の比率には著しい差異がある。また、粘土紐桶巻作りのものは 09017-1 区他のみで出土している点も特徴的である。第８章では、11001-4 区、09017-2 区他出土瓦との比較によって、出土地点による差異や、11001-4 区、09017-2 区他出土瓦の時期について検討する。文字瓦についても、09017-2 区他でも出土していることから、第８章で資料全体からあらためてその意味を検討する。

また、瓦の焼成と胎土、製作技法といった諸特徴には特に関連性がみとめられなかったが、肉

眼では確認できていない差異がある可能性を考慮し、瓦を焼成と色調から分類したうえで、代表的なものについて胎土分析を行った。焼成と色調による分類、目的の詳細については第7章第1節で述べる。

第4項　石器・石製品（図122・123、図版48）

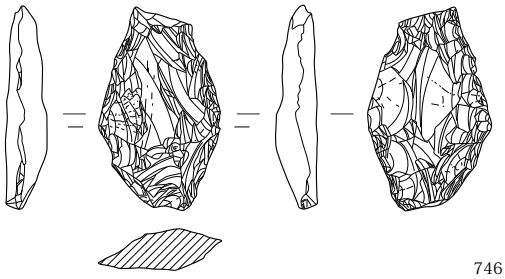
石器・石製品は4点が出土したほか、サヌカイト剥片も出土した。

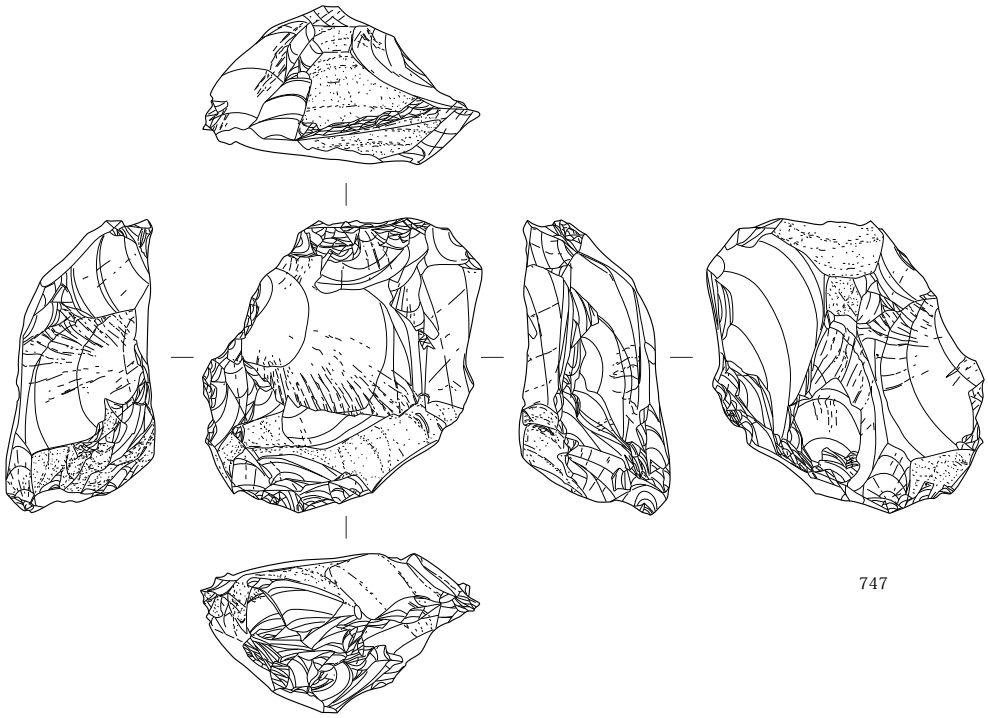
746は、尖頭器である。基本層序第Ⅵ層から出土した。先端部を欠損する。石材はサヌカイトである。両側縁とも両面加工である。形状からも出土層位からも、所属時期の限定は困難である。

747は、石核である。基本層序第Ⅸ層から出土した。ほぼ完形である。石材はサヌカイトで、風化が顕著である。角礫素材で、自然面が残存する。打面は固定せず、作業面を移動させながら剥離を繰り返している。形状からも出土層位からも、所属時期の限定は困難である。

748は、磨石である。奈良時代遺構検出面の土坑001から出土した。完形で、石材は砂岩である。擦痕は不明瞭であるが、多面体状となることから、ほぼ全面を使用したものと考えられる。一部黒色に変色しており、被熱した可能性がある。形状からも出土層位からも、所属時期の限定は困難である。

749は、石棒である。09017-1区廃土出土である。両端を欠損し、上下の向きは判別できない。石材は緑色片岩である。擦痕は不明瞭であるが、全面が滑らかとなることから、全面を研磨したものと考えられる。縄文時代の所産である。





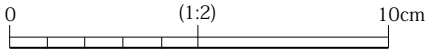


図 122　09017-1 区他出土石器・石製品（1）

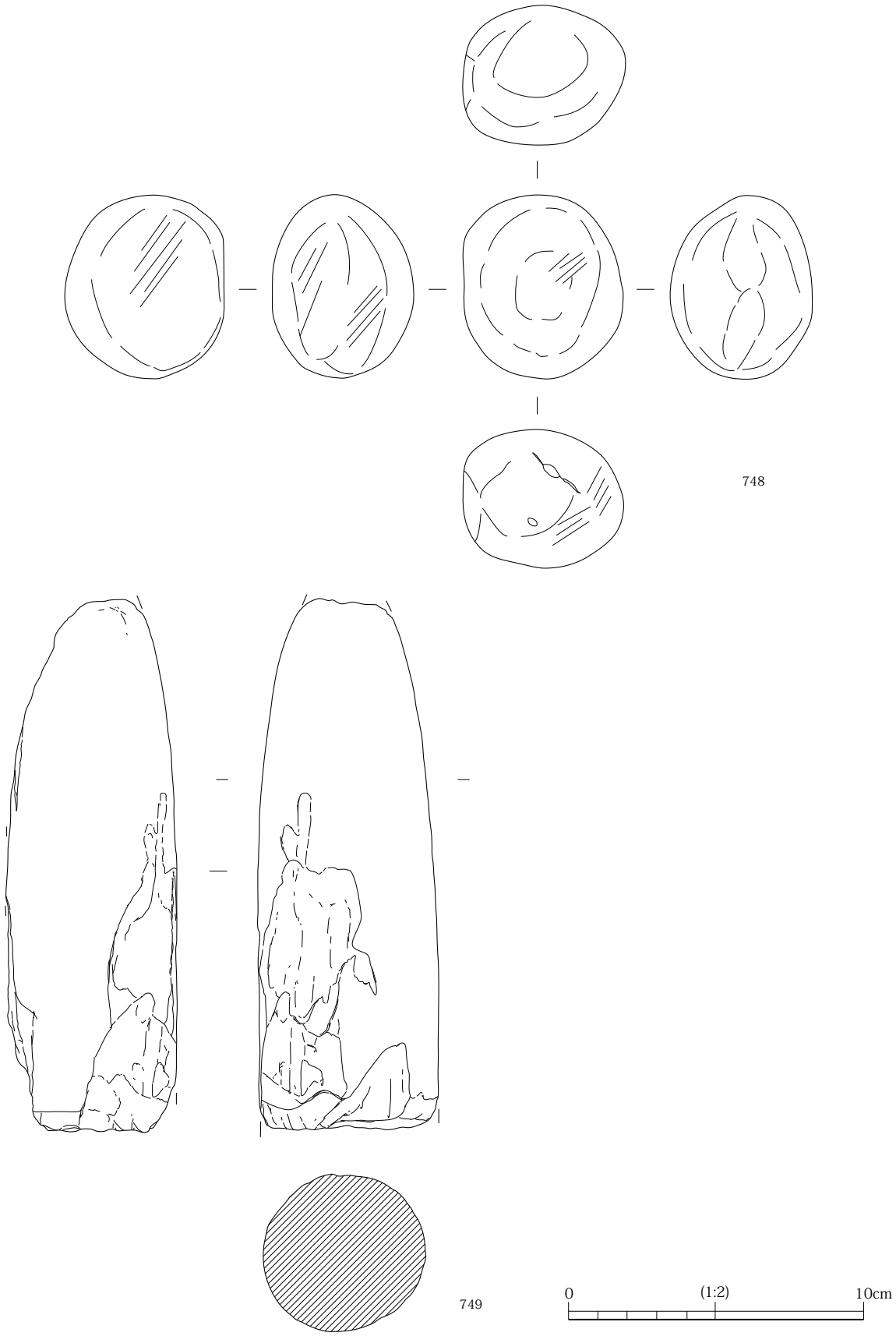


図 123　09017-1 区他出土石器・石製品（2）

第５項　金属製品（図 124、図版 48）

546 は、銅銭である。基本層序第Ⅲ層から出土した。一部欠損する。元祐通宝である。直径2.5cm、重量2.2gである。

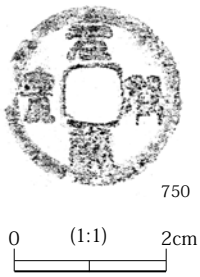


図 124　09017-1 区他出土金属製品

第７章　自然科学分析の成果

第１節　分析の目的

本書で報告する自然化学分析の成果は、11001-4 区出土遺物の胎土分析及び 09017-1 区出土遺物の胎土分析である。分析の詳細な方法や結果については次節の報告文に委ね、ここでは分析の目的と、前章までの記載との対応を示す。

なお、平成 23 年度刊行の報告書において 08019-4 区、10001-3 区出土土器の胎土分析について報告しているが、この胎土分析には 09017-2 区出土遺物も関連資料として分析試料とした。分析結果の詳細は既に報告しているため、その解釈についてのみ第８章で触れることとする。

（１）11001-4 区出土遺物の胎土分析

11001-4 区第Ⅵ層は、自然流路内堆積と推定できる層であり、多くの土器、特に弥生時代後期から古墳時代の土器が多く出土した。その中に、古墳時代の韓式系土器甑１点（45）がみられ、全体の形状が判明する資料であった。その産地を明らかにするために、土器胎土分析を行うこととした。

分析試料は、11001-4 区第Ⅵ層出土の土器３点と、粘土塊２点である。第Ⅵ層出土土器の時期幅は弥生時代から古代と幅広いが、このうち、韓式系土器甑（次節資料番号：土器３、以下同様に表記）と同時代の可能性が高く、かつ在地産と考えられる土師器の甕１点（土器４）と高杯１点（土器５）を比較対象として試料とした。また、同じく第Ⅵ層から出土した粘土塊が土器の素材として持ち込まれたものであるかを調べるため、粘土塊のうち２点（粘土塊１・２）を試料とした。粘土塊の時期を古墳時代に限定することはできないが、出土地点が甑と近接していることから、比較対象とした。

（２）09017-1 区出土遺物の胎土分析

09017-1 区奈良時代遺構検出面の土坑 001・046 からは、７世紀末～８世紀前半の瓦多数と、８世紀後半の土師器が出土した。瓦は焼成の不良なものから良で須恵質のものまでみられた。焼成の差異と胎土の差異に関連性がみとめられれば、焼成の差が窯や工人、あるいは時期の違い等によるものである可能性が考えられることから、瓦の胎土分析を行うこととした。

瓦は、焼成とそれに関連する色調から分類が可能であり、そのうち典型的なものとして６点を試料とした。焼成良・須恵質のもの（灰色、瓦１・２）、やや良のもの（褐灰色、瓦６）、やや不良のもの（灰褐色、瓦５）、不良でいぶし状になるもの（灰白色、瓦４）、不良のもの（黄色、瓦３）である。いずれも土坑 001 出土である。

また、土器と瓦で異なる胎土が用いられているか否かを明らかにするため、同じく土坑 001 出土の土師器２点（甕または鍋の把手、土器１・２）についても胎土分析を行った。

分析方法は、全点についての剥片観察および、韓式系土器試料及びその比較土器試料（土器３～５）の蛍光Ｘ線分析である。

第２節　胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

今回の分析調査では、和泉寺跡・府中遺跡より出土した、奈良時代の廃棄土坑から出土した瓦と土師器および弥生時代～古代自然流路から出土した古墳時代の土器と粘土塊を対象として、その材質の特性を明らかにすることにより、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。

瓦については、須恵質を示す焼成良好なものとそうでないものとに区別されていることから、焼成状態の違いによって材料の違いがあるのか、あるとすればどの程度の違いか (例えば生産地が全く異なるか近接する地域あるいは同一かなど) を検討する。また、同一土坑から出土した瓦と土師器との間の材質の違いの有無および程度についても比較検討する。

自然流路から出土した土器の中には韓式系土器が確認されており、その製作地を検討することを目的として同じ流路内から出土した在地性の可能性の高い土師器との比較を行う。さらに、それらと同じ流路内でかつ近い位置から出土した粘土塊についても、土器との比較を行い、それらが土器の材料に使用された可能性を検討する。

なお、平成 23 年度刊行報告書で行った和泉寺跡・府中遺跡出土の庄内式併行期の土器の胎土分析では、薄片観察法を用いたが、今回の分析も前回の分析結果との比較を考慮して同様の方法を用いる。さらに、今回の分析では、韓式系土器の検討について、薄片観察に加えて蛍光 X 線分析による化学組成の比較も併用する。

（１）試料

試料は、奈良時代の廃棄土坑とされる遺構から出土した瓦片６点と土師器片２点および、自然流路より出土した土器片３点と粘土塊２点の合計 13 点である。

瓦片６点の試料には瓦１～瓦６までの資料番号が付され、いずれも土坑 001 から出土したものである。

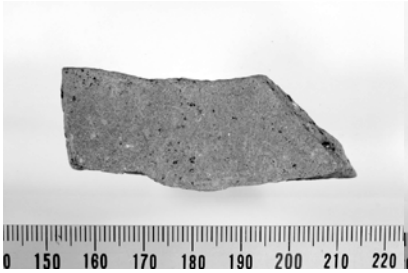
瓦１と瓦２の２点は焼成良好とされ、須恵質の質感を呈し、瓦３と瓦４の２点は焼成不良、瓦５は焼成やや不良、瓦６は焼成やや良好とされている。廃棄土坑から出土した土師器片２点には土器１および土器２の資料番号が付されている。いずれも瓦片試料と同じ土坑 001 から出土しており、ともに甕または鍋の把手とされている。

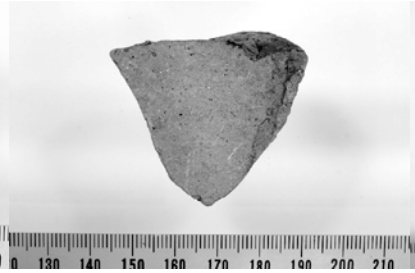
自然流路より出土した土器は、古墳時代とされており、土器３～土器５までの資料番号が付されている。これらのうち、土器３は韓式系土器の甑とされ、土器４と土器５はともに在地の可能性の高い土師器とされている。土器４は甕、土器５は高坏である。粘土塊試料には、粘土塊１、粘土塊２という資料番号が付され、いずれも土器の出土した自然流路内の土器近辺から出土している。

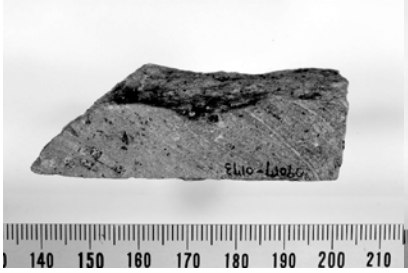
表２に試料の色調や肉眼観察記載も含めて、試料の一覧を呈示する。また、図 1125・126 に試

表２　分析試料一覧

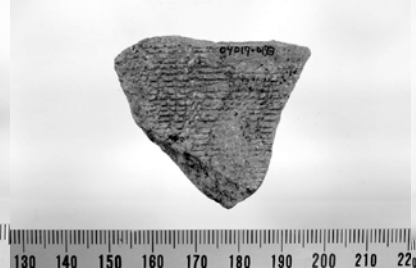
番号	資料番号	種類	色調	焼成	表面・断面観察	調査番号	登録番号	地区	出土遺構等	時代
1	瓦1	平瓦	灰色	良・須恵質	表・裏：径0.5～1mmの白色粒極めて微量。 断面：径2mmの暗灰色岩片と径1mmの白色粒ともに極めて微量。	09017	173	1区	土坑001	奈良時代頃
2	瓦2	丸瓦	灰色	良・須恵質	表：径0.5mmの白色粒極めて微量。 裏：砂粒目立たず。 断面：径1mmの暗灰色岩片と径0.5～1mmの白色粒ともに極めて微量。	09017	173	1区	土坑001	奈良時代頃
3	瓦3	平瓦	黄色	不良	表：径1～2mmの暗灰色岩片と径0.5mmの白色粒極めて微量。 裏・断面：径1～8mmの暗灰色岩片微量、径0.5mmの白色粒極めて微量。	09017	173	1区	土坑001	奈良時代頃
4	瓦4	平瓦	灰白色	不良・いぶし	表：径1mmの灰色岩片少量。 裏：砂粒目立たず。 断面：径1～2mmの暗灰色岩片少量、径0.5mmの白色粒微量。	09017	173	1区	土坑001	奈良時代頃
5	瓦5	平瓦	灰褐色	やや不良	表・裏：砂粒目立たず。 断面：径0.5mmの白色粒微量。	09017	205	1区	土坑001	奈良時代頃
6	瓦6	平瓦	褐灰色	やや良（一部不良）	表：径0.5～1mmの白色粒微量。 裏・断面：径0.5～1mmの白色粒少量。	09017	510	1区	土坑001	奈良時代頃
7	土器1	甕か鍋把手	橙色		径1mmの灰色岩片と径1mmの白色粒および微細な石英粒がいずれも極めて微量。	09017	182	1区	土坑001	奈良時代
8	土器2	甕か鍋把手	橙色		径0.5mmの白色粒極めて微量。	09017	191	1区	土坑001	奈良時代
9	土器3	甑体部	褐灰色		表：径0.5mmの白色粒中量、径1～2mmの灰白色岩片極めて微量。 裏：径1mm前後の灰色岩片少量、同径の褐色岩片微量。	11011	239	4区	韓式系土器	古墳時代
10	土器4	甕口縁部	褐灰色～にぶい黄橙色		表：径0.5mmの白色粒少量、径1～2mmの灰白色岩片極めて微量。 裏：径1mm前後の灰白色岩片極めて微量、微細石英粒微量。	11011	229	4区	S4・N4区第VI層	古墳時代
11	土器5	高杯杯部	橙色		表：径0.5mmの白色粒微量、径1～2mmの暗灰色岩片極めて微量。 裏：径1～2mmの灰白色岩片と径0.5mmの白色粒ともに極めて微量。	11011	232	4区	S4・N4区第VI層	古墳時代
12	粘土塊1		褐灰色～にぶい黄橙色		径1～2mmの暗灰色岩片と径0.5mmの白色粒ともに極めて微量。	11011	452	4区	S4・N4区第VIB層	古墳時代頃（土器近辺で出土）
13	粘土塊2		褐灰色～にぶい黄橙色		径1～2mmの暗灰色岩片極めて微量。	11011	452	4区	S4・N4区第VIB層	古墳時代頃（土器近辺で出土）



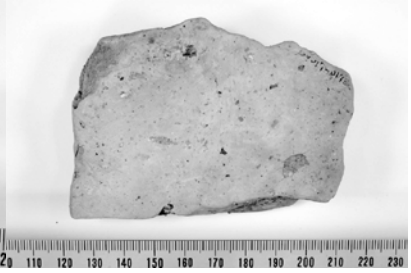




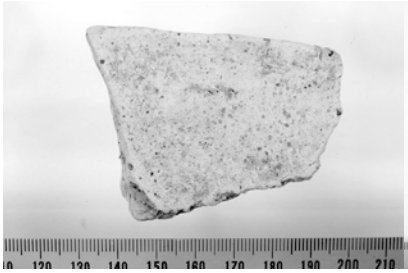
瓦 1

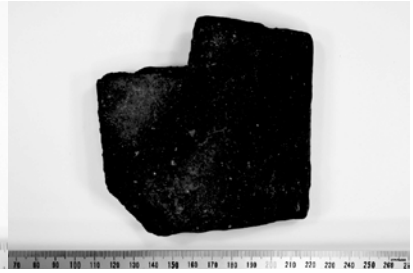


瓦 2

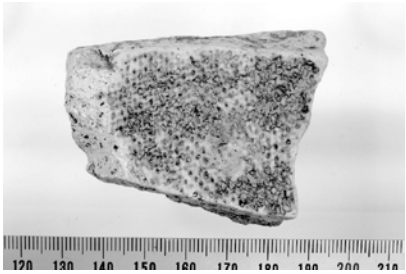


瓦 3



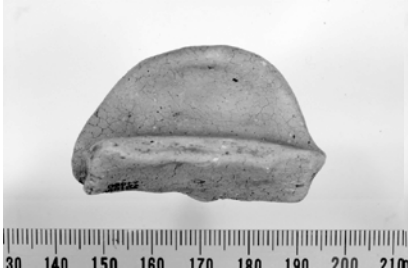


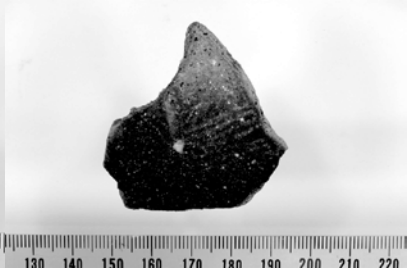
瓦 5

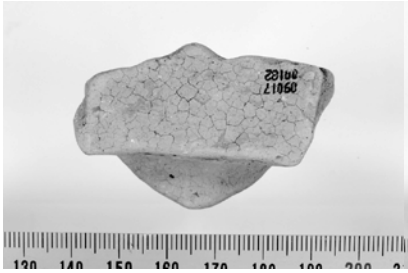


瓦 4

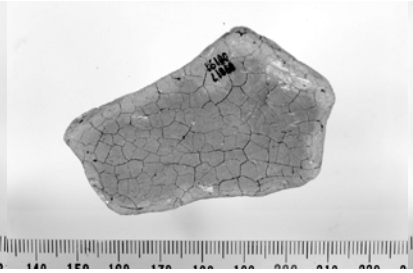
瓦 6



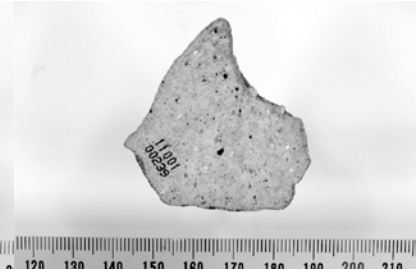




土器 1

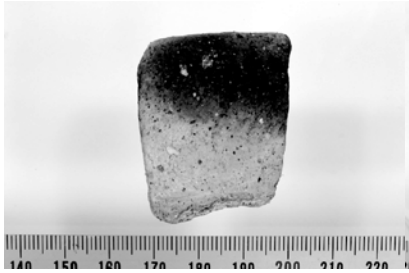


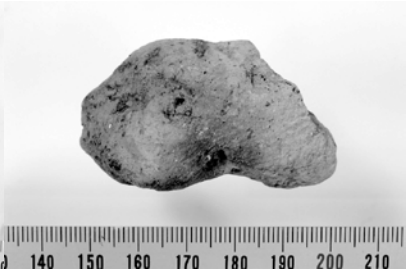
土器 2



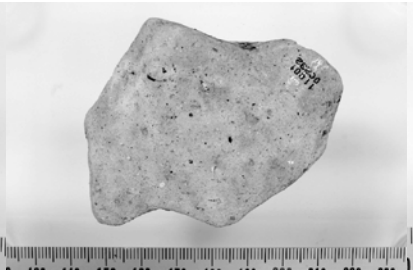
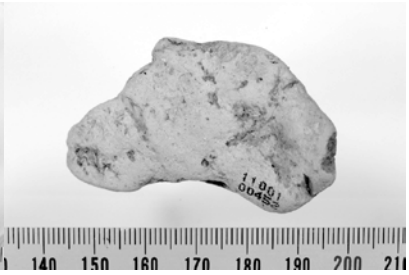
土器 3

図 125　分析試料写真（1）





土器 4　　土器 5　　粘土塊①

粘土塊②

図 126　分析試料写真（2）

料写真を示す。なお、煩雑になるため、表２を含め以下では和泉寺跡、府中遺跡出土資料については和泉寺跡とのみ表記する。

（2）分析方法

薄片作製観察　前回の庄内式土器の分析で用いた松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質の

ポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

蛍光Ｘ線分析　リガク製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置 (ZSX Primus Ⅲ +) を用い、ガラスビード法により分析を実施した。対象は、韓式系土器の土器３と比較試料の土師器である土器４および土器５の計３点である。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムの FP 定量法を使用し、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5 の主要 10 元素および Rb、Sr、Y、Zr、Ba の微量５元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JR-1、JR-3、JA-3、JF-1、JG-1a、JLK-1、Jsy-1、JSd-1、JSd-2、JSd-3、JB-2、JSL-1）を用いた。

a）装置

（株）リガク製　波長分散型蛍光Ｘ線分析装置 ZSX Primus Ⅲ +（FP 定量法アプリケーション）

b）試料作成

機械乾燥（110℃）した試料を、振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、ガラスビードを表３の条件で作成した。

表３　ガラスビード作成条件

溶融装置	自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)
溶剤及び希釈率	融剤（四ホウ酸リチウム）5.000g:試料0.500g
剥離剤	LiI(溶融中1回投入)
溶融温度	1200℃(約7分)

c）測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置（(株）リガク製 ZSX Primus Ⅲ +）を用い、表４・５の条件で測定を実施した。

表４　蛍光Ｘ線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧(KV)	50
管電流(mA)	50
試料マスク	30mmφ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

（３）結果

薄片作製観察　薄片観察結果を表６～８、図 127 ～ 133 に、胎土薄片顕微鏡写真を図 134 ～ 138 に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒径組成、砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合の順に述べる。

a）鉱物片および岩石片の種類構成

鉱物片の組成は、全ての試料においてほぼ同様の特徴を示す。すなわち、石英が最も多く、次いで斜長石が多く、微量または少量のカリ長石を伴い、他に試料によっては微量の角閃石や緑廉石および黒雲母などが含まれる。岩石片の組成は、奈良時代の土師器である土器１と土器２以外

表５　蛍光Ｘ線定量測定条件

測定元素	測定ｽﾍﾟｸﾄﾙ	1次ﾌｨﾙﾀ	ｱｯﾃﾈｰﾀ	ｽﾘｯﾄ	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO2	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO2	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al2O3	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe2O3	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na2O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K2O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	―	142.00	40	20
P2O5	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

は、ほぼ類似した特徴が捉えられる。特に突出して多い種類はないが、共通して、チャート、頁岩、砂岩からなる堆積岩類、結晶質なものが含まれる凝灰岩、多結晶石英、花崗岩類および脈石英、さらには平板状の形態であるバブルウォール型の火山ガラスが含まれるということがあげられる。この特徴は、前回の庄内式土器の胎土分析で分類されたＡ類の組成に相当する。

土器１と土器２の鉱物片の組成は、上述した他の試料の特徴と比べると石英の割合が非常に高いという特徴はあるが、次いで斜長石、カリ長石の順に多く、土器１には微量の角閃石が含まれるなど類似する点は多い。また、岩石片の組成は、岩石片が全体的に少ないことが特徴であるが、出現する種類をみると、２点の試料にチャートとバブルウォール型の火山ガラスが認められ、土器１には凝灰岩、土器１には頁岩が含まれている。これらの組成は、上述したＡ類に近似する分類としてみることができる。ここでいう近似することの意味については後述する。

b）砂分全体の粒径組成

今回の試料についてモードを示す粒径をみると、粗粒砂から粗粒シルトまであることから、以下の分類を設定することができる。

１類：粗粒砂をモードとする。

２類：中粒砂をモードとする。

３類：細粒砂をモードとする。

表６　薄片観察結果（１）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																									合計
			鉱物片								岩石片												その他					
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂塊	砂混じりシルト塊	粘土・シルト塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
瓦1 平瓦 焼成良	砂	細礫																	1					2				3
		極粗粒砂	1								1												1	2				5
		粗粒砂	2	1							2					1			1					1				8
		中粒砂	2		1						3		1	1		1								2				11
		細粒砂	15	1	7						10	1		1		4						1						40
		極細粒砂	51	1	8						4																	64
		粗粒シルト	31		2						2																	35
		中粒シルト	4																									4
	基質																											925
	孔隙																											31
	備考		基質はシルト質。砂混じりシルト塊の基質は酸化鉄質？で黒色を呈する。斜長石はきわめて微弱に溶融し、きわめて微細なムライトが生成している。火山ガラスはバブルウォール型。																									
瓦2 丸瓦 焼成良	砂	細礫												1														1
		極粗粒砂		1							1								2						1			5
		粗粒砂	1								2					2	1		1				1	3				11
		中粒砂	4													4								1				9
		細粒砂	16	1	8						1			1		4						5						36
		極細粒砂	35		11					1	5											1						53
		粗粒シルト	26		9																							35
		中粒シルト	3																									3
	基質																											949
	孔隙																											20
	備考		基質はシルト質。火山ガラスはバブルウォール型。斜長石はきわめて微弱に溶融し、きわめて微細なムライトが生成している。砂混じりシルト塊の基質は酸化鉄質？で黒色を呈する。																									
瓦3 平瓦 焼成不良	砂	細礫									1																	1
		極粗粒砂			1												1											2
		粗粒砂			1						2	2	1				1		2									9
		中粒砂	2	1	1						5			1		2	3			2					1			18
		細粒砂	19	1	4			1			4	1		1		1												32
		極細粒砂	39	6	19	1	1	1			3																	70
		粗粒シルト	37	1	21		1			1	2																1	64
		中粒シルト	3		1																							4
	基質																											1173
	孔隙																											21
	備考		基質はシルト質でセリサイトが散在する。凝灰岩には結晶質なものも認められる。変質岩は風化岩など。長石類の溶融は認められない。																									
瓦4 平瓦 焼成不良 ・いぶし	砂	細礫																	1					2				3
		極粗粒砂	1														1		1					9				12
		粗粒砂			1						3													5	1			10
		中粒砂	1																									1
		細粒砂	11	2	9	1					2					1						3						29
		極細粒砂	35	3	17	1					4	1				1												62
		粗粒シルト	48	1	23					1																		73
		中粒シルト	7		3																							10
	基質																											1014
	孔隙																											43
	備考		基質はシルト質。火山ガラスはバブルウォール型。長石類の溶融は認められない。砂混じりシルト塊の基質は酸化鉄質？で黒色を呈する。																									
瓦5 平瓦 焼成やや不良	砂	細礫																										0
		極粗粒砂															1											1
		粗粒砂	3		1						1	1		3				1	1		1			2				14
		中粒砂	14	7	6						8	1		3		3	1	1	2	1								47
		細粒砂	29	4	2	1			1		7			1		3		2				6						56
		極細粒砂	18	2	8						4											1						33
		粗粒シルト	27	1	16	1																					2	47
		中粒シルト	2																									2
	基質																											1097
	孔隙																											37
	備考		基質は黒雲母質で、酸化により赤褐色を呈する。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は結晶質なものが散見される。長石類の溶融は認められない。																									

表7　薄片観察結果（2）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																									合計
			鉱物片								岩石片											その他						
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂塊	砂混じりシルト塊	粘土・シルト塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
瓦6 平瓦 焼成やや良 （一部不良）	砂	細礫																										0
		極粗粒砂												1												1		2
		粗粒砂	3												1		2		3	1		1				3		14
		中粒砂	13	2	5				1		5			3			3	2	2	1		3			1			41
		細粒砂	13	7	3						3	2		3		3	1		1			9						45
		極細粒砂	31	2	3						1											3						40
		粗粒シルト	41		8		1																				1	51
		中粒シルト	6		1																							7
	基質																											1596
	孔隙																											24
	備考		基質は雲母質。火山ガラスはバブルウォール型。径0.5mm以上の大型の植物片がごく微量含まれる。長石類の溶融は認められない。凝灰岩は結晶質なものが多く認められる。																									
土器1 甕か鍋　把手	砂	細礫																										0
		極粗粒砂																										0
		粗粒砂																										0
		中粒砂	3											1														4
		細粒砂	13	4	3	2					2											1						25
		極細粒砂	24	2							1											1						28
		粗粒シルト	20		7																						1	28
		中粒シルト	1																									1
	基質																											617
	孔隙																											26
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。ジルコンあり。																									
土器2 甕か鍋　把手	砂	細礫																										0
		極粗粒砂																						1				1
		粗粒砂																						1				1
		中粒砂																				2				1		3
		細粒砂	14	3	3						2	1																23
		極細粒砂	21	1	5						2																	29
		粗粒シルト	12		5																							17
		中粒シルト																										0
	基質																											492
	孔隙																											12
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。ジルコンあり。																									
土器3 甑　体部	砂	細礫									1				1			1										3
		極粗粒砂										1		1			1		1									4
		粗粒砂	1	2	1							1					2		1									8
		中粒砂	7	1	1						1			3	1	1			3									18
		細粒砂	4	2	5							1			1	2												15
		極細粒砂	4		9				1			1		1		1												17
		粗粒シルト	6	1	4					1																		12
		中粒シルト	1																									1
	基質																											323
	孔隙																											12
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。ジルコン、酸化角閃石あり。凝灰岩は結晶質。脈石英は、変形作用を被った花崗岩由来と見られる。																									
土器4 甕　口縁部	砂	細礫																										0
		極粗粒砂									1			1			1											3
		粗粒砂	4	1	1						6		3	3	1	2	4		2		2							29
		中粒砂	11		3						3			1	3	3					1							25
		細粒砂	5	2	2	1			1		1					1			1									14
		極細粒砂	5	2	4																	1						12
		粗粒シルト	3	1	7																							11
		中粒シルト																										0
	基質																											390
	孔隙																											12
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩は結晶質。弱酸化の角閃石あり。																									

表８　薄片観察結果（３）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片								岩石片												その他						
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	砂塊	砂混じりシルト塊	粘土・シルト塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
土器5 高杯　杯部	砂	細礫																											0
		極粗粒砂										1		1															2
		粗粒砂	1		1						2	1		3			1		2										11
		中粒砂	18	2	7						4	1	1	3	2	5	5		1										49
		細粒砂	29	4	13						7			4	1	3													61
		極細粒砂	33	8	11						1																		53
		粗粒シルト	15	1	7																								23
		中粒シルト	1																										1
	基質																												646
	孔隙																												21
	備考		基質は雲母粘土鉱物などの褐色粘土鉱物によって埋められる。凝灰岩には結晶質なものが多く認められる。																										
粘土塊1	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂		1								1		2					2										6
		中粒砂	2	1	1						2			1		4	1				1								13
		細粒砂	12	2	6				1		4	3		3		2	1					1							35
		極細粒砂	25	7	17				3																				52
		粗粒シルト	9	2	8		1																						20
		中粒シルト	1																										1
	基質																												662
	孔隙																												41
	備考		基質はシルトが多く、雲母鉱物質。凝灰岩には結晶質なものが散見される。火山ガラスはバブルウォール型。植物珪酸体あり。																										
粘土塊2	砂	細礫																											0
		極粗粒砂									1																		1
		粗粒砂	1	1	1						1				1		1				1								7
		中粒砂	3	4	2						6	3				1	2				1								22
		細粒砂	13		6		1		3		3		1																27
		極細粒砂	25	2	17				1		1																		46
		粗粒シルト	9	3	12		1																						25
		中粒シルト			1																								1
	基質																												590
	孔隙																												10
	備考		基質はシルトが多く、雲母鉱物質。凝灰岩には結晶質なものが散見される。火山ガラスはバブルウォール型。植物珪酸体あり。																										

４類：極細粒砂をモードとする。

５類：粗粒シルトをモードとする。

分類としては、１類から５類に向かって粒径組成の細粒傾向が強くなるようにした。各試料の分類は以下の通りである。１類には古墳時代の土器４、２類には古墳時代の土器３、３類には奈良時代頃の瓦５と古墳時代の土器５、４類には奈良時代頃の瓦１～瓦３、奈良時代の土器２、古墳時代頃の粘土塊１・粘土塊２、５類には奈良時代頃の瓦４・瓦６および土器１がそれぞれ分類される。

c）砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合

砕屑物の割合が、10% 前後のⅠ類と 15% 前後のⅡ類、20% 前後のⅢ類に分類することができる。Ⅰ類は、奈良時代頃の瓦６と土器１、Ⅲ類は古墳時代の土器３～土器５であり、これら以外の試料はいずれもⅡ類に分類される。

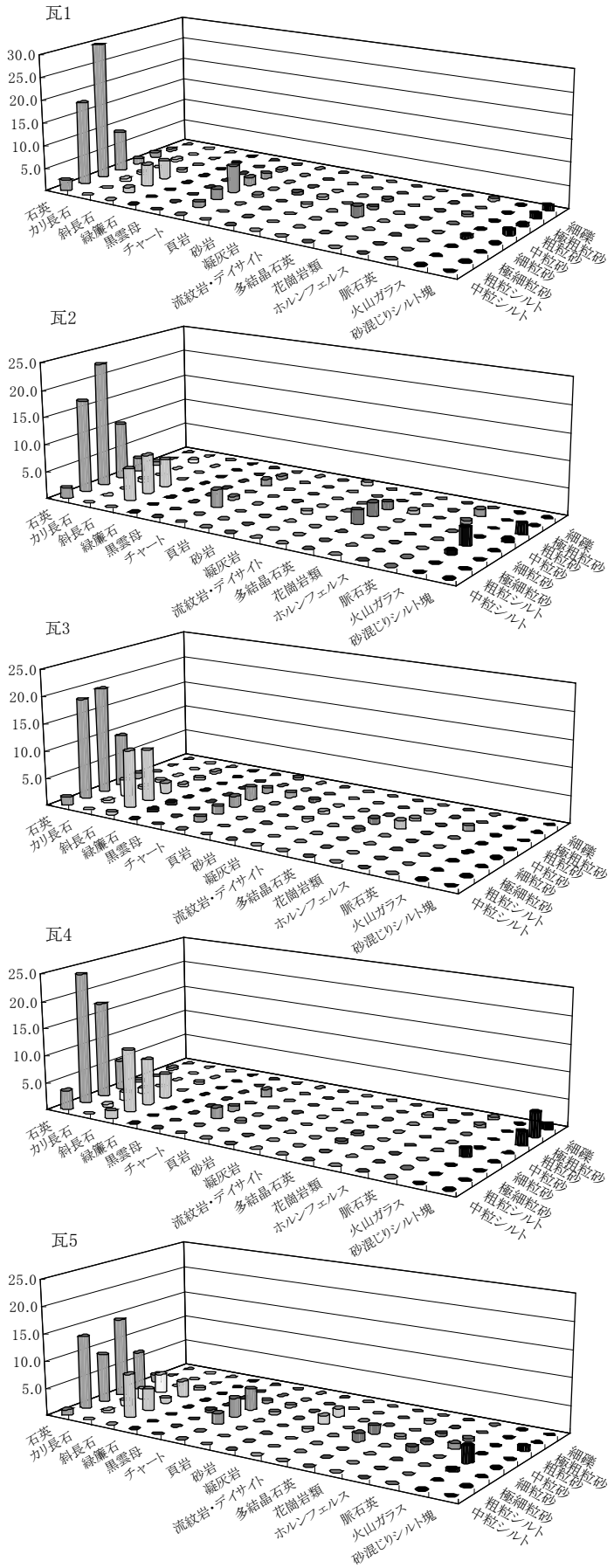


図 127　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

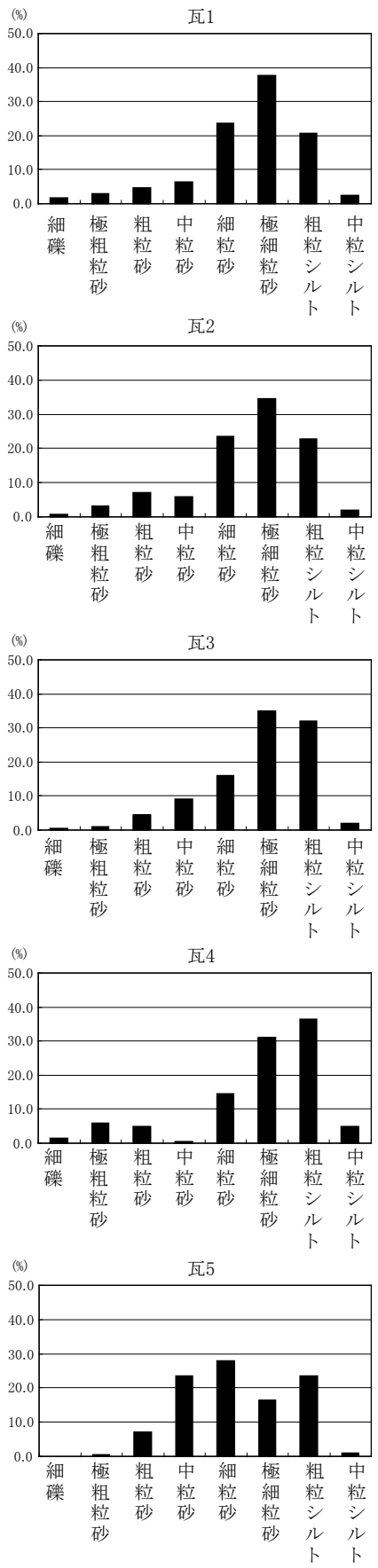


図 128　胎土中の砂の粒径組成（1）

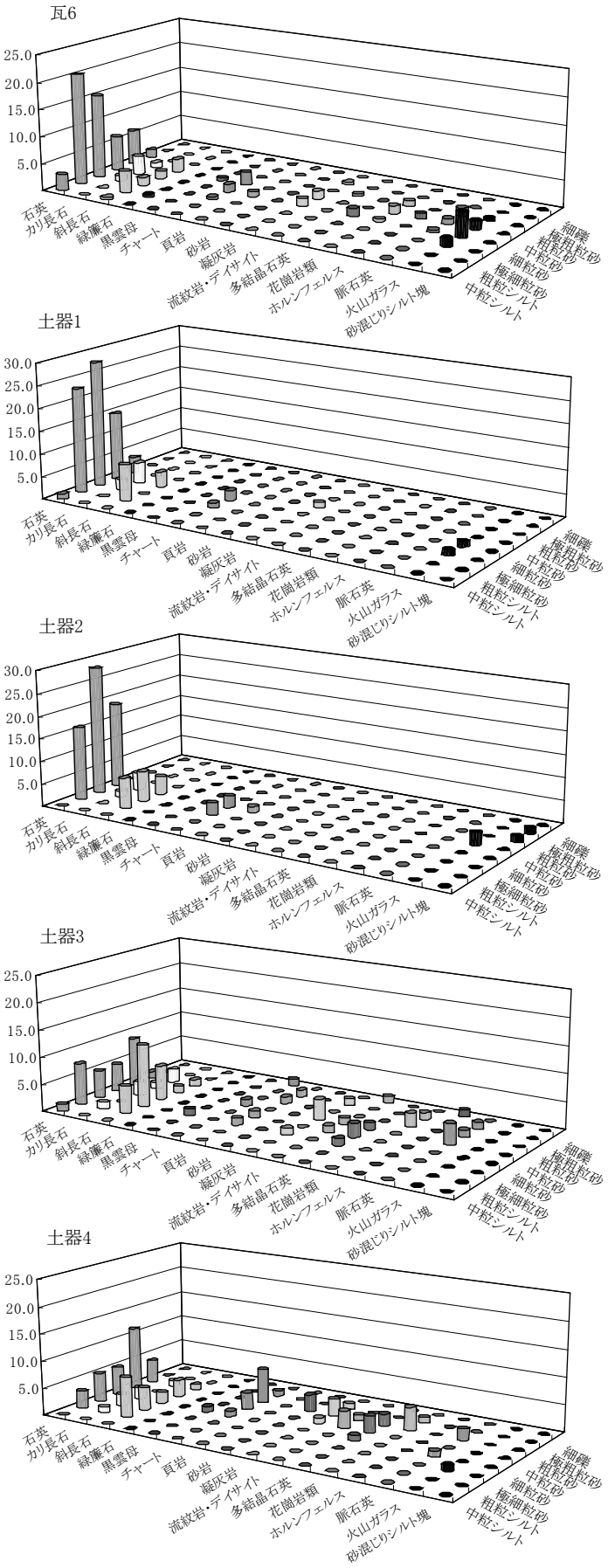


図 129　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

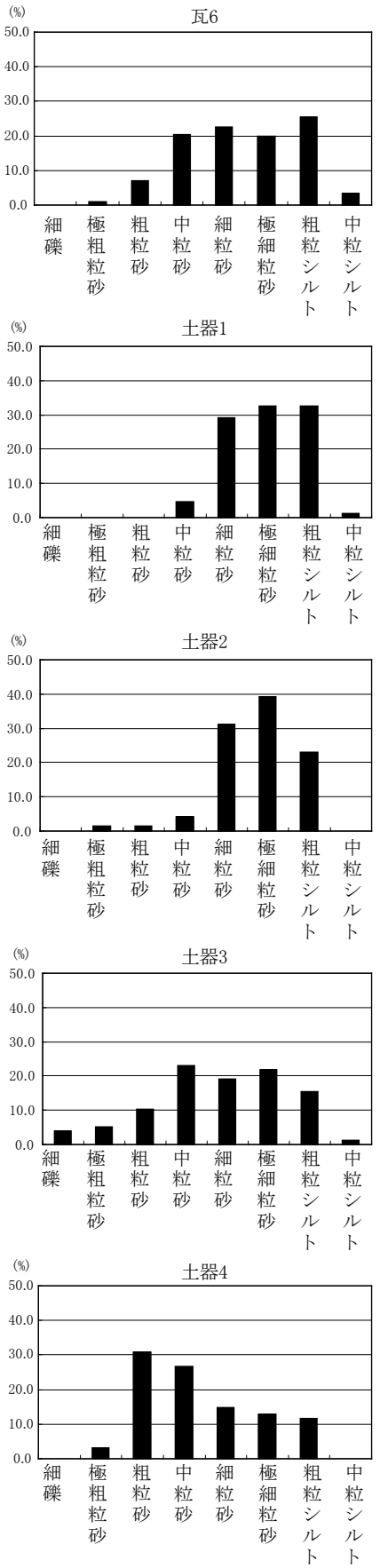


図 130　胎土中の砂の粒径組成（2）

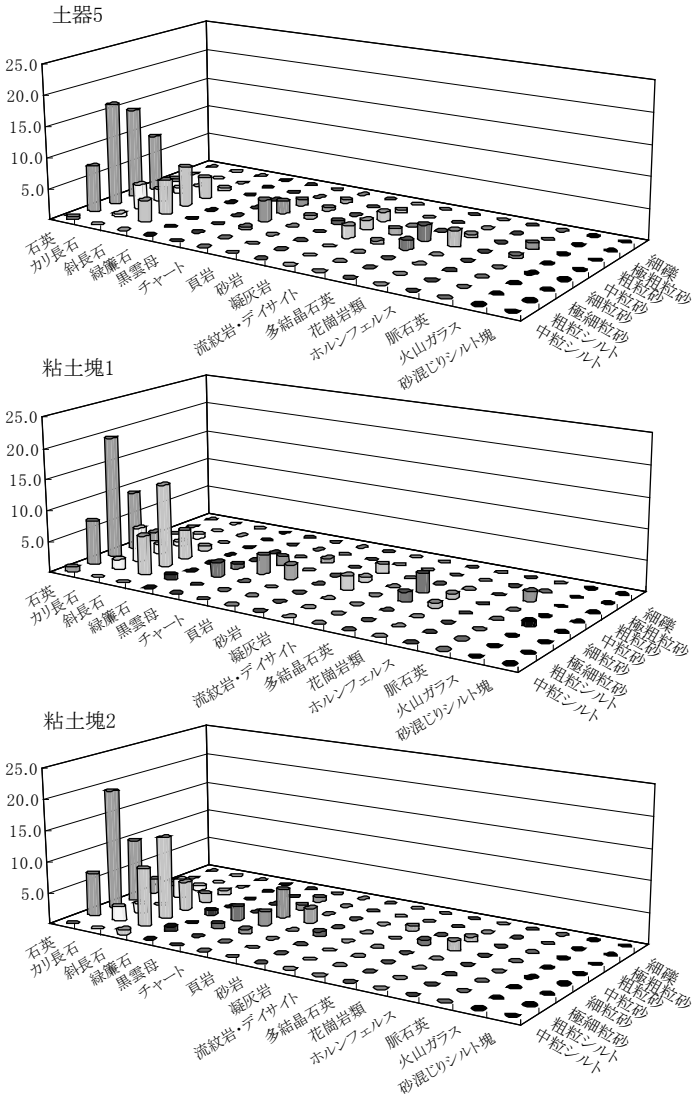


図 131　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（3）

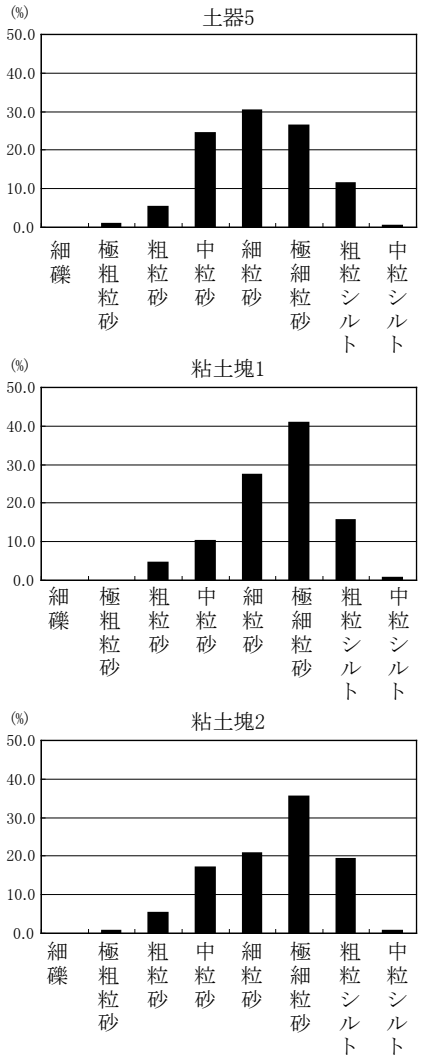


図 132　胎土中の砂の粒径組成（3）

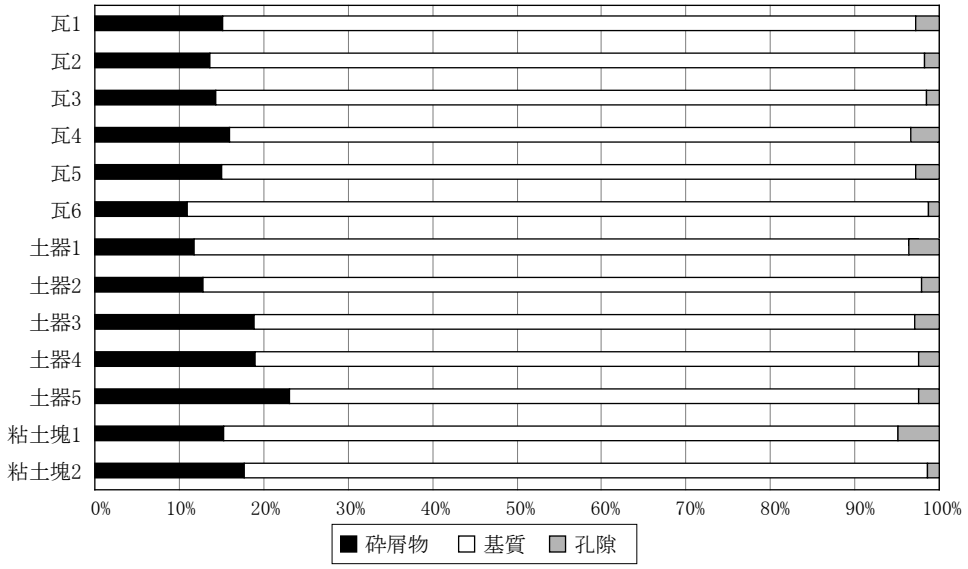
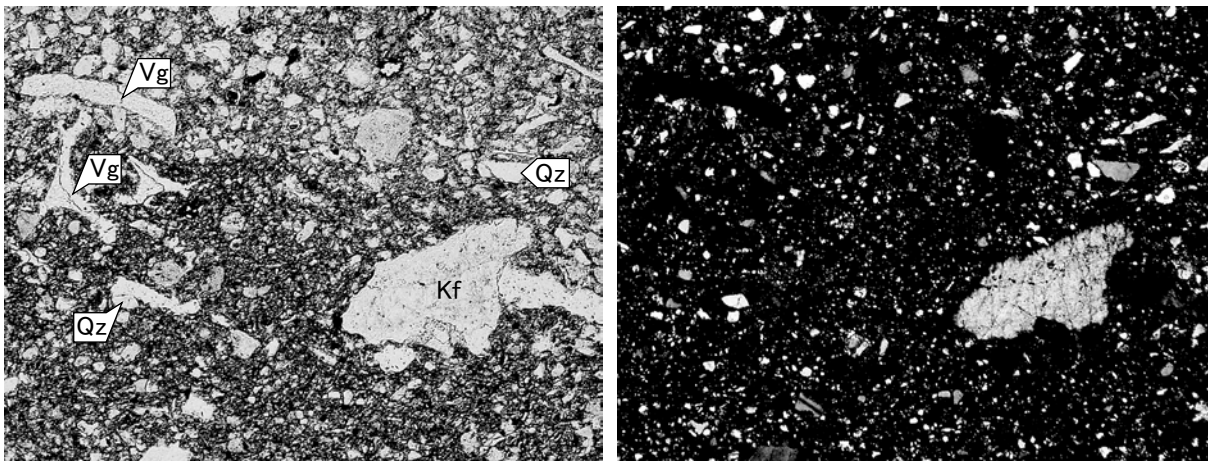
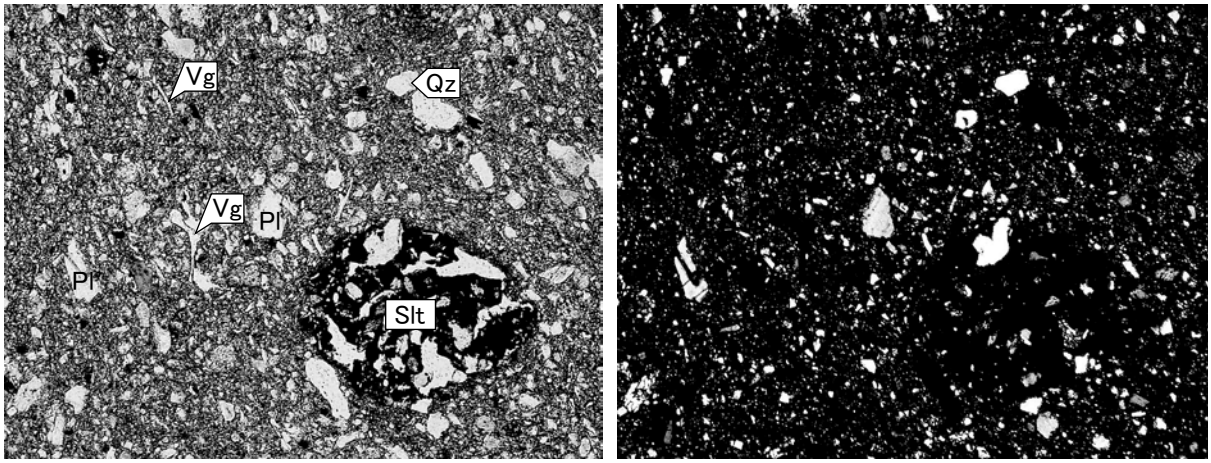


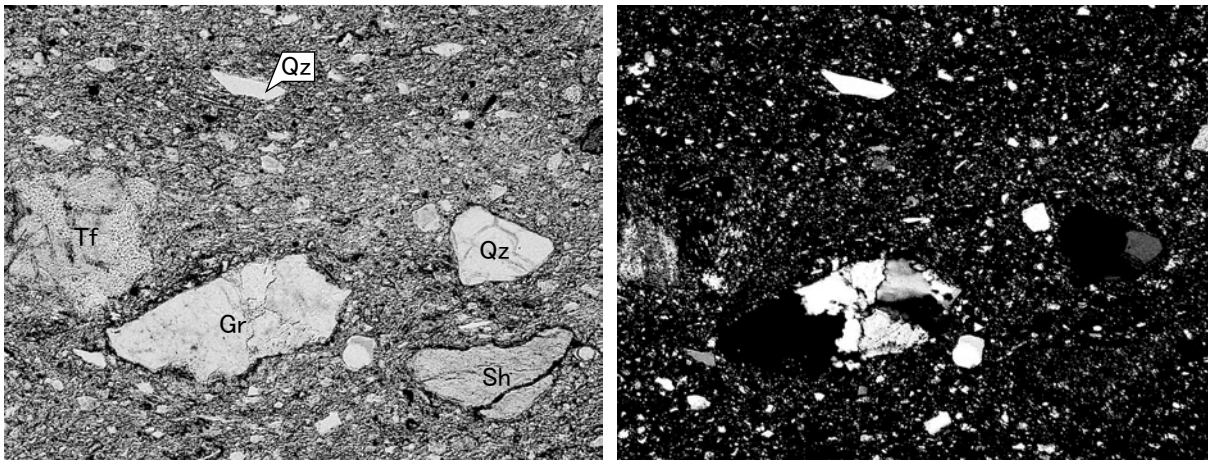
図 133　砕屑物・基質・孔隙の割合



1.瓦1(平瓦　灰色　焼成良・須恵質　09017-1区　土坑001)



2.瓦2(丸瓦　灰色　焼成良・須恵質　09017-1区　土坑001)

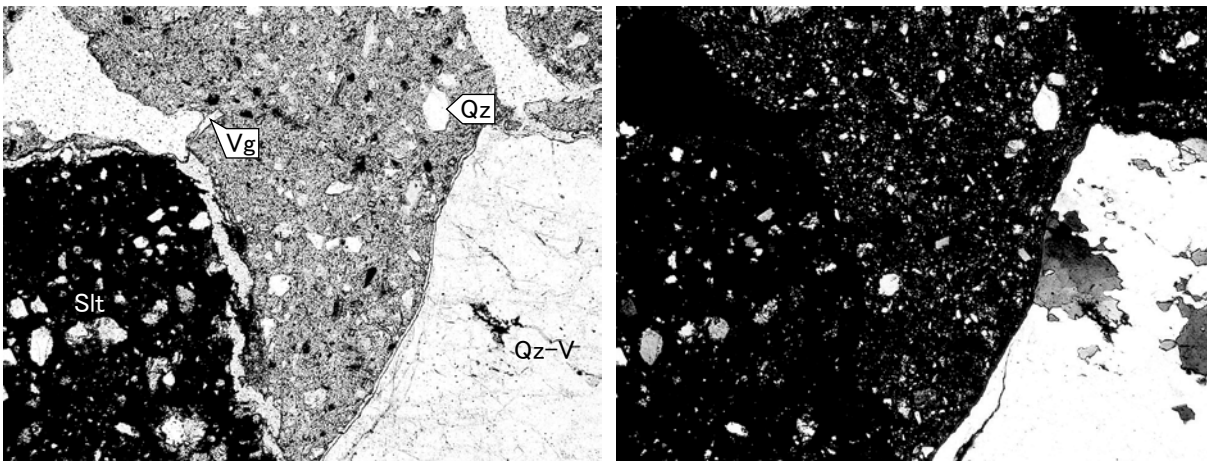


3.瓦3(平瓦　黄色　焼成不良　09017-1区　土坑001)

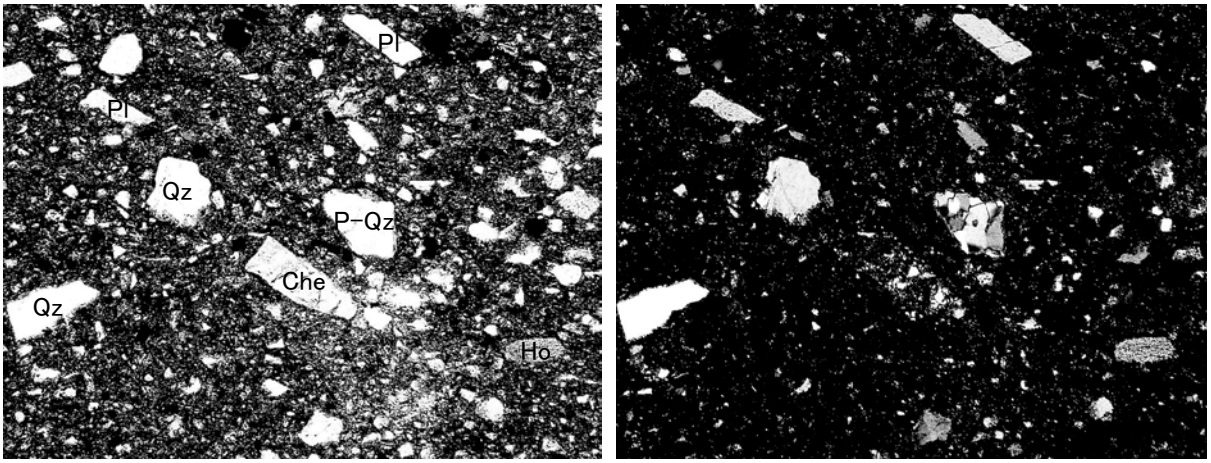
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Sh:頁岩. Tf:凝灰岩. Gr:花崗岩. Vg:火山ガラス.
Slt:砂混じりシルト塊.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

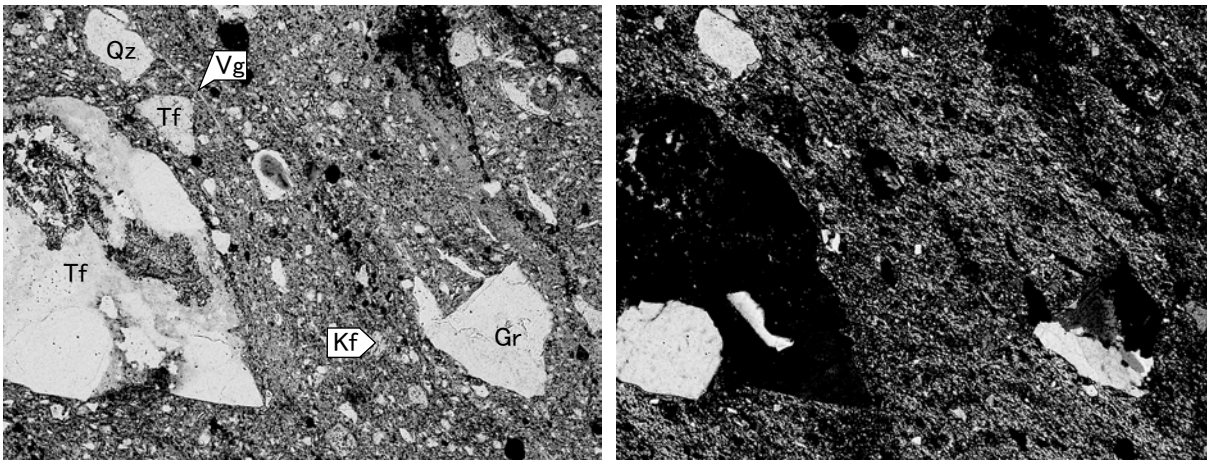
図 134　胎土薄片顕微鏡写真（1）



4.瓦4(平瓦　灰白色　焼成不良・いぶし　09017-1区　土坑001)



5.瓦5(平瓦　灰褐色　焼成やや不良　09017-1区　土坑001)

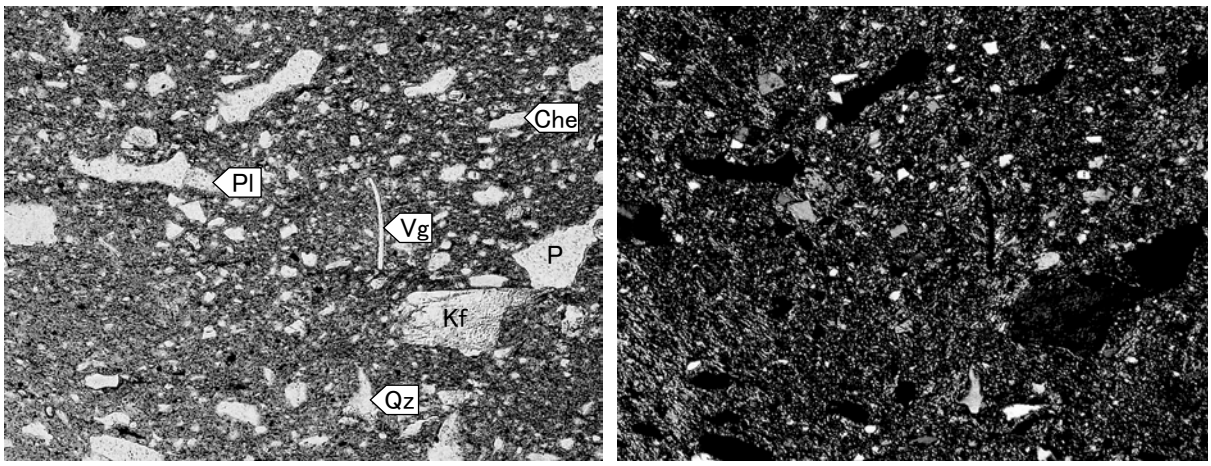


6.瓦6(平瓦　褐灰色　焼成やや良(一部不良)　09017-1区　土坑001)

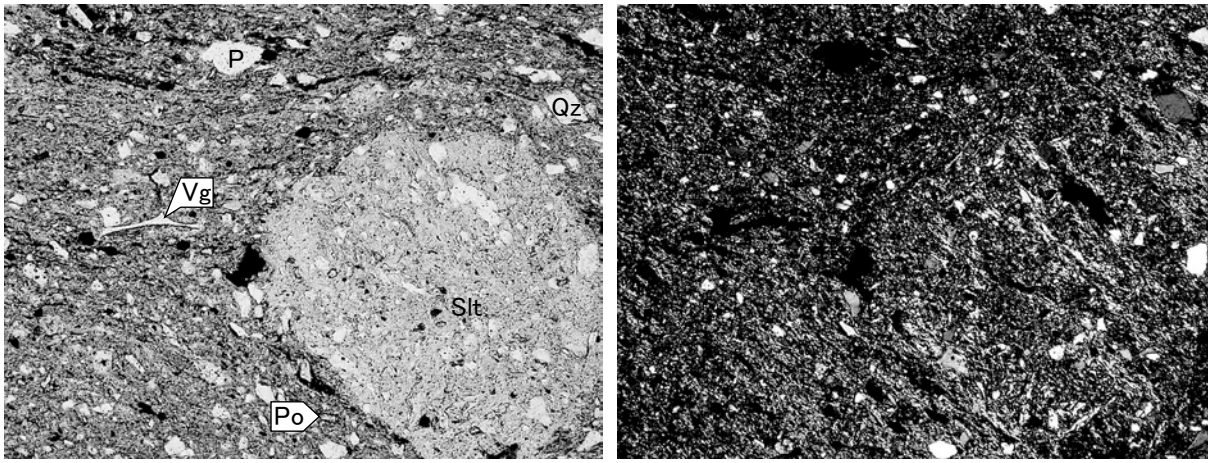
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Che:チャート. Tf:凝灰岩.
P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩. Qz-V:脈石英. Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

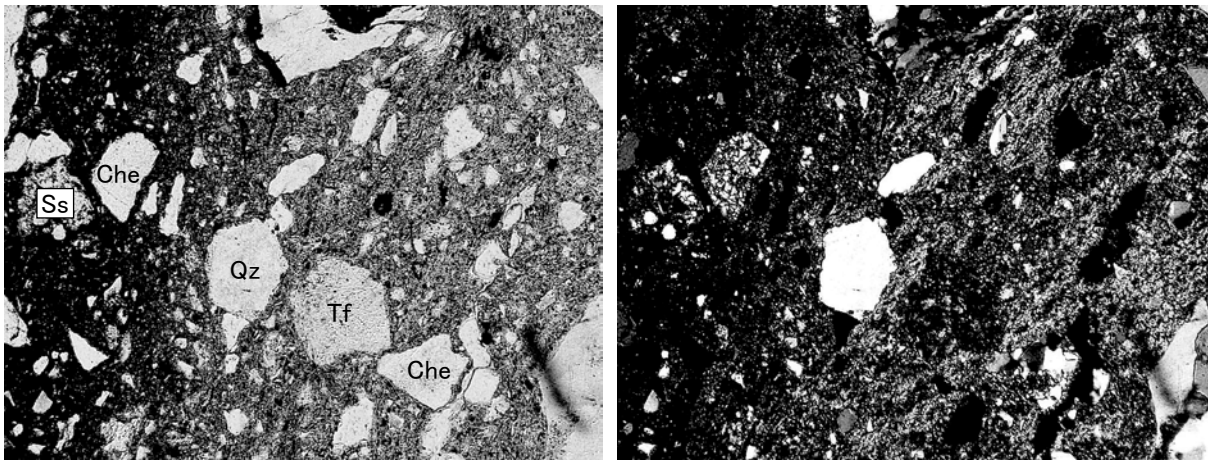
図 135　胎土薄片顕微鏡写真（2）



7.土器1(甕か鍋　把手　09017-1区　土坑001)



8.土器2(甕か鍋　把手　09017-1区　土坑001)

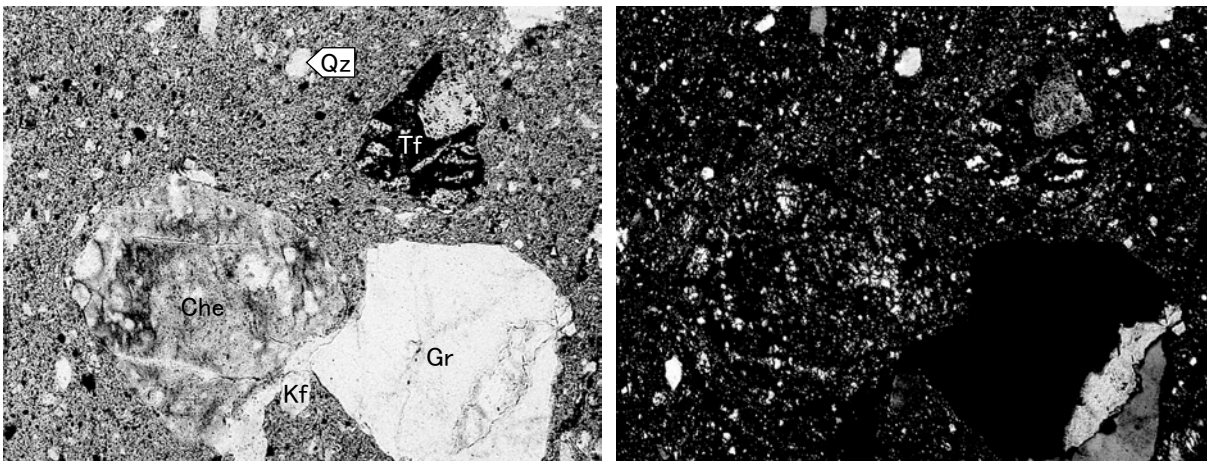


9.土器3(甑　体部　11001-4区　韓式系土器)

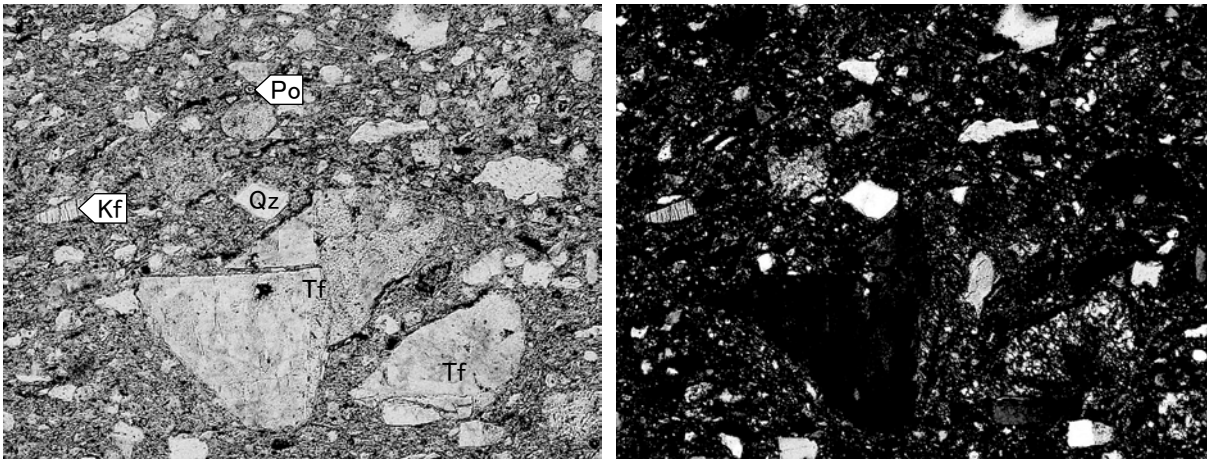
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Che:チャート. Ss:砂岩. Tf:凝灰岩. Vg:火山ガラス.
Slt:砂混じりシルト塊. Po:植物珪酸体. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

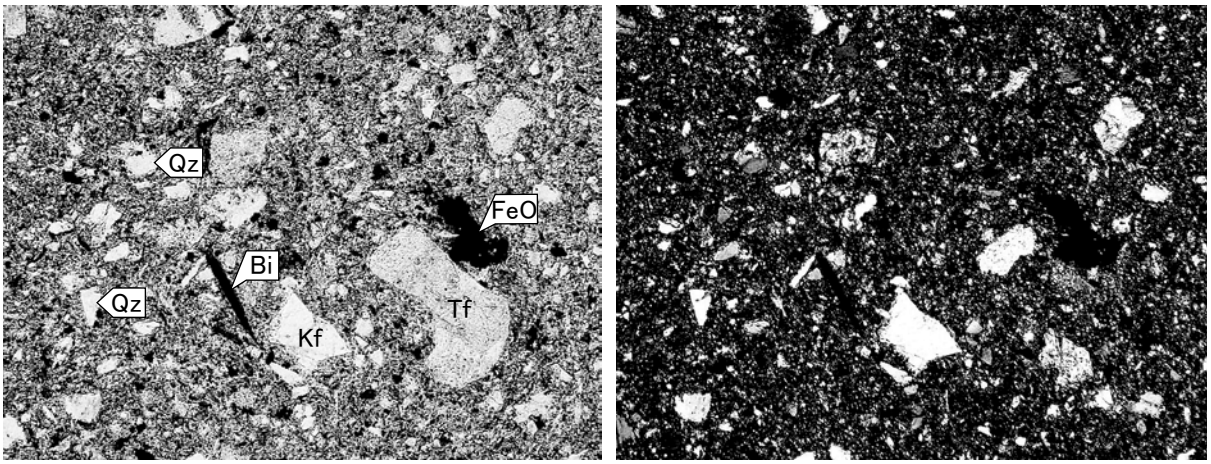
図 136　胎土薄片顕微鏡写真（3）



10.土器4(甕　口縁部　11001-4区　S4・N4第Ⅵ層)



11.土器5(高杯　杯部　11001-4区　S4・N4第Ⅵ層)

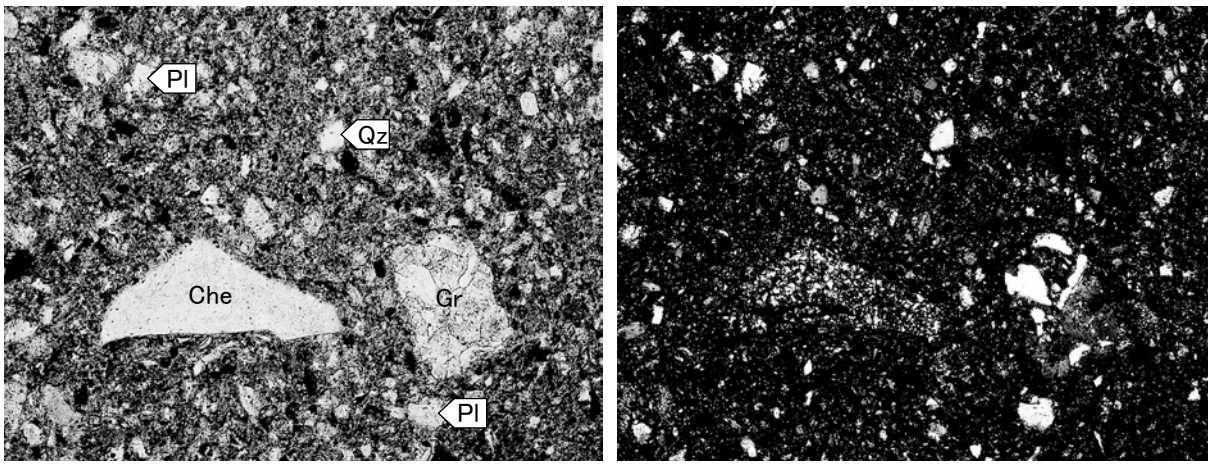


12.粘土塊1(11001-4区　S6・N6第Ⅵ層

0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Bi:黒雲母. Che:チャート. Tf:凝灰岩. Gr:花崗岩.
FeO:水酸化鉄. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図 137　胎土薄片顕微鏡写真（4）



13.粘土塊2(11001-4区　S6・N6第Ⅵ層
Qz:石英. Pl:斜長石. Che:チャート. Gr:花崗岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図 138　胎土薄片顕微鏡写真（５）

d）焼成温度

五十嵐（2007）は、土器の胎土薄片下で観察される特定の鉱物の加熱変化の状況から、焼成温度の推定をしている。瓦試料６点のうち、焼成良好とされた須恵質の２点には、焼成温度推定の基準となる現象の一つである斜長石の微弱な溶融と微細なムライトの生成が認められた。この現象は、1200℃前後で生じることから、焼成良好とされた瓦試料２点は、いずれも 1200℃前後の焼成温度が推定される。他の瓦試料４点の焼成温度については、いずれも五十嵐（2007）に示された焼成温度推定の基準となる現象が認められないことから不明瞭である。ただし、長石類の溶融がみとめられないことは、1150℃よりも低い温度を示しており、試料によっては微量認められる角閃石が酸化角閃石となっていないことからは、800℃以下の可能性があると考えられる。なお、今回の土器試料全点についても、焼成温度推定の基準となる現象はほとんど認められないが、試料によっては微量認められる角閃石において酸化角閃石化が認められないことなどから、やはり 800℃以下の可能性がある。

以上、砂分全体の粒径組成と砕屑物の割合の分類結果および焼成温度を一覧にして表９に示す。

蛍光Ｘ線分析　分析結果を表 10 に示す。比較の主眼は、韓式系土器とされる土器３が、在地の可能性が高いとされた土器４および土器５と特に組成が異なるかということである。この視点から各元素における３点間の量比をみると、主要元素では CaO と P205 以外の元素において、土器４と土器５との間における量比の差が、土器３との間におけるそれよりも大きいという結果が認められる。同様のことは微量元素においても Rb 以外の元素で認められる。

表９　胎土分類結果

番号	資料番号	種類	色調	焼成	出土遺構等	時代	焼成温度	粒径組成					砕屑物		
								1	2	3	4	5	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1	瓦1	平瓦	灰色	良・須恵質	土坑001	奈良時代頃	1200℃±				■			■	
2	瓦2	丸瓦	灰色	良・須恵質	土坑001	奈良時代頃	1200℃±				■			■	
3	瓦3	平瓦	黄色	不良	土坑001	奈良時代頃	800℃≧?				■			■	
4	瓦4	平瓦	灰白色	不良・いぶし	土坑001	奈良時代頃	800℃≧?					■		■	
5	瓦5	平瓦	灰褐色	やや不良	土坑001	奈良時代頃	800℃≧?			■				■	
6	瓦6	平瓦	褐灰色	やや良（一部不良）	土坑001	奈良時代頃	800℃≧?					■	■		
7	土器1	甕か鍋　把手	橙色		土坑001	奈良時代頃	800℃≧?					■	■		
8	土器2	甕か鍋把手	橙色		土坑001	奈良時代頃	800℃≧?				■			■	
9	土器3	甑体部	褐灰色		韓式系土器	古墳時代	800℃≧?		■						■
10	土器4	甕口縁部	褐灰色～にぶい黄橙色		S4・N4区褐色シルト	古墳時代	800℃≧?	■							■
11	土器5	高杯杯部	橙色		S4・N4区褐色シルト	古墳時代	800℃≧?			■					■
12	粘土塊1		褐灰色～にぶい黄橙色		S6・N6区褐色シルト（5b層）	古墳時代頃（土器近辺で出土）	―				■			■	
13	粘土塊2		褐灰色～にぶい黄橙色		S6・N6区褐色シルト（5b層）	古墳時代頃（土器近辺で出土）	―				■			■	

粒径組成　1：粗粒砂をモードとする。2：中粒砂をモードとする。3：細粒砂をモードとする。4：極細粒砂をモードとする。5：粗粒シルトをモードとする。
砕屑物　Ⅰ：砕屑物の割合が10%前後。Ⅱ：砕屑物の割合が15%前後。Ⅲ：砕屑物の割合が20%前後。

表 10　蛍光Ｘ線分析結果

資料番号	主要元素										微量元素					Total
	SiO2	TiO2	Al2O3	Fe2O3	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	Rb	Sr	Y	Zr	Ba	
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(%)
土器3	66.17	0.67	16.61	3.95	0.01	0.46	0.45	1.21	1.88	0.39	90	79	15	191	578	91.90
土器4	67.62	0.77	17.76	4.59	0.01	0.43	0.30	0.79	2.07	0.71	109	69	18	203	558	95.15
土器5	71.66	0.52	14.42	3.29	0.01	0.26	0.32	1.47	2.45	0.72	112	98	13	191	673	95.23

（4）考察

瓦の胎土について　前回の和泉寺跡出土庄内式併行期土器の胎土分析では、A 類とした鉱物・岩石組成は、和泉寺跡の地質学的背景とほぼ一致すると考えた。すなわち和泉寺跡の位置する段丘を構成している砕屑物は、槇尾川および松尾川の上流域の丘陵を構成している新第三紀鮮新世～第四紀更新世中期の大阪層群に由来し、その大阪層群を構成する砕屑物は、丘陵背後に広がる和泉山脈東部を構成する地質に由来する。和泉山脈東部を構成する地質は、北縁部には中生代白亜紀後期の領家帯花崗岩類が分布し、その南側には中生代白亜紀後期の凝灰岩や流紋岩からなる泉南流紋岩類が分布し、さらに南側には山脈の主体をなす中生代白亜紀後期の堆積岩類からなる和泉層群が分布する (市原ほか ,1986; 栗本ほか ,1998)。なお、大阪層群中には第四紀更新世のテフラ層が多数狭在し、それらの中にはバブルウォール型の火山ガラスからなるものも多い。

瓦試料 6 点は、いずれも A 類に分類されたことから、その材料採取地は、和泉寺跡と同様の地質学的背景を有する地域内にあると考えられる。和泉寺跡と同様の地質学的背景を有する地域とは、和泉山脈から大阪湾に流下する河川の分布する流域となり、およそ堺市から泉南市付近までの大阪湾岸の平野に相当する。6 点の瓦試料は、いずれもこの地域内で作られた可能性が高いが、現時点では、これ以上の製作地の絞り込みはできない。ただし、焼成良好の瓦 1 と瓦 2 および焼成不良の瓦 3 と瓦 4 の 4 点間では、粒径組成や砕屑物の割合も近似していることから、これら 4 点は同一の窯で作られた製品である可能性もあると考えられる。このことはまた言い換えれば、焼成状態の違いは、窯の違いよりも窯の中の位置の違いや温度管理の違いなどに起因する可能性があるということになる。

なお、瓦 5 は上記の 4 点の試料との粒径組成の違いがやや大きく、瓦 6 は粒径組成および砕屑物の割合の違いが指摘される。したがって、これら 2 点については、おそらく上記 4 点の瓦が焼かれた窯と近接した場所にはあるが、異なる窯で焼かれた可能性もあると考えられる。

瓦試料と同一土坑から出土した土師器の胎土の鉱物・岩石組成は、A 類と近似する組成とした。これは、土器 1 では A 類の主要な岩石のうち花崗岩類が認められず、土器 2 では凝灰岩と花崗岩類が認められなかったことによるものであるが、石英や長石類の鉱物片の中には花崗岩類の岩石片や凝灰岩の岩石片に由来するものも含まれていることが充分に考えられることやバブルウォール型火山ガラスを含むことなども考慮すると、その地質学的背景は A 類とほぼ同様である。すなわち、土器 1 も土器 2 も、瓦試料と同様に堺市から泉南市付近までの大阪湾岸の平野地域内で製作されたものである可能性が高い。製作場所を絞ることができない事情は瓦試料と同様であり、したがって、より具体的な瓦の製作場所や材料採取地との共通性の検討は今後の課題である。

韓式系土器の胎土について　韓式系土器とされた土器 3 の胎土の鉱物・岩石組成は A 類に分類され、在地性の高いとされた 2 点の土師器の胎土のそれも A 類に分類された。上述したように A 類の胎土は、堺市から泉南市付近までの大阪湾岸の平野地域内で製作された可能性の高いことを示すから、韓式系土器も他の 2 点の土師器も当該地域内で製作されたと考えられる。蛍光 X 線

分析による胎土の化学組成の比較でも、韓式系土器が、在地性の高い土師器に比べて特に異なる値を示すということはなく、むしろ在地性の高い土師器間での値の違いよりも韓式系土器と在地性の高い土器間での値の違いの方が小さいという元素もある。したがって、蛍光 X 線分析による化学組成の比較においても、韓式系土器の胎土の特別な違いという性質は認められないと言える。このことは、上述した薄片観察による鉱物・岩石組成の結果とも整合する。なお、粒径組成では、韓式系土器と在地性の高い土器２点の３点間でそれぞれ異なる組成を示すが、砕屑物の割合は共通する。これだけの結果からでは、各土器の上記地域内における詳細な製作場所の違いや距離関係などはわからないが、今後は、これらの組成の違いを蓄積することでその検討が可能になることが期待される。

土器近辺から出土した粘土塊は、その鉱物・岩石組成が A 類に分類されたことから、土器の材料となった可能性はあると考えられる。その粒径組成が土器試料に比べると細粒傾向にあることや、砕屑物の割合が土器試料に比べて低いことからは、粘土塊がそのまま土器の素地となったのではなく、さらに砂が加えられたものが素地となったことが推定される。

引用文献

市原　実・市川浩一郎・山田直利 ,1986, 岸和田地域の地質 . 地域地質研究報告 (５万分の 1 図幅), 地質調査所 ,148p.

五十嵐俊雄 ,2007, 土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発 . 徳永重元博士献呈論集 , パリノ・サーヴェイ株式会社 ,281-297.

栗本史雄・牧本　博・吉田史郎・高橋裕平・駒沢正夫 ,1998,20 万分の 1 地質図幅「和歌山」, 地質調査所 .

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 ,1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－ . 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集 ,120-121.

第８章　総括

第１節　遺構の変遷

ここでは、地区間の各遺構検出面の関係を検討し、遺構の変遷を明らかにする。すでに平成23年度刊行報告書において、08019-1 ～ 08019-4・10001-3区、および、10001-3区に隣接する1988年度の大阪府埋蔵文化財協会による調査区（以下「協会調査区」と呼称）について基本層序の対応の整理、遺構の変遷を検討している。ここでは、その成果との比較も含めて、本書で報告する調査区、09017-1・09017-2・09049-1・10001-2・10078-1 ～ 10078-3・11001-4 ～ 11001-8区について遺構検出面の関係を検討する。その後、平成23年度報告の調査区もあわせ、一連の調査全体について遺構の変遷を明らかにする。なお、調査区数が多く煩雑となるため、第６章までと同様、必要に応じて「09017-1区他」「09017-2区他」という大調査区の呼称も用いる。

基本層序の対応　はじめに、各調査区の基本層序柱状図を比較し、対応関係を検討する（図139）。なお、協会調査区についてはすでに検討済のため、ここでは図示しない。

まず、近接する09017-1区他と09017-2区他についてみていく。

近世の確実な遺構検出面は09017-2区他のみで検出しており、第Ⅴ層上面での検出である。時期は、遺構出土遺物より、18 ～ 19世紀と考えられる。

中世の遺構検出面は、09017-1区他の第Ⅶ層上面および09017-2区他の第Ⅵ層上面で検出した。これらの遺構検出面の上層に堆積する09017-1区他第Ⅵ層、09017-2区他第Ⅴ層は類似しており、いずれも中世以降の作土と考えられる。また、中世遺構検出面ベース層である09017-1区他の第Ⅶ層と09017-2区他の第Ⅵ層は、やや色調は異なるものの質は類似しており、いずれも上層の作土に伴う床土として機能した可能性が考えられる。以上より、09017-1区他第Ⅵ層と09017-2区他第Ⅴ層が対応すると考えられ、09017-1区他の第Ⅶ層上面および09017-2区他の第Ⅵ層上面で検出した中世の遺構は同時期に所属する可能性がある。ただし、09017-2区他では、第Ⅴ層上面に18 ～ 19世紀と考えられる遺構検出面があることから第Ⅴ層の下限を推定することが可能であるが、09017-1区他では、第Ⅵ層の上層の第Ⅴ層の下限が遺物からは限定できず、また、第Ⅳ層以上は現代の層であることから、第Ⅴ層の下限が明らかでない。09017-1区他では中世遺構検出面の耕作溝から近世の磁器１点の出土があることからも、第Ⅴ層を作土とする耕作が近世まで続いた可能性がある。ただし、09017-1区他の中世遺構検出面で多数見つかった柱穴については、当時の地表面が大きく削平されたものと推定でき、削平の原因のひとつとして、第Ⅴ層を作土とする耕作の影響が考えられる。したがって、中世遺構検出面の遺構すべての時期を近世まで下げる必要はないと考える。以上より、09017-1区他第Ⅶ層上層検出の遺構と09017-2区他第Ⅵ層上層検出の遺構は、中世に所属するもので、このうち09017-1区他の遺構の一部、特に耕作に関係する遺構は、近世まで下がる可能性が考えられる。遺構の詳細な時期は、いずれの調査区とも遺構の時期を示す遺物が少量であることから限定が困難であり、12 ～ 14世紀頃というおおまかな

時期が与えられるのみである。

中世を遡る遺構については、奈良時代の遺構が 09017-1 区他の第Ⅸ層上面で確認され、遺構出土遺物より、８世紀後半頃が中心時期と考えられる。09017-2 区他では同時期の遺構は確認されていない。

弥生時代から古墳時代の遺構は、09017-2 区他の第Ⅶ層および第Ⅸ層上面で確認された。09017-1 区他では同時期の遺構は確認されていない。時期は、遺構出土遺物が少量で限定し難く、遺構出土の弥生土器が混入品である可能性も否定できない。しかし、上層から多くの弥生時代後期～庄内式併行期の土器が出土していることから、弥生時代後期の遺構が存在している可能性を考え、弥生時代後期～古墳時代前期と広く捉えておく。

09017-1 区他第Ⅸ層と 09017-2 区他第Ⅸ層は、一連の調査区すべてで確認している砂礫層であり、対応する層と考えられる。09017-2 区他では、第Ⅵ～Ⅷ層が自然流路内堆積物と推定でき、第Ⅸ層は自然流路底面である。09017-1 区他では、基本層序の中には自然流路内堆積物と断定できる層はないが、奈良時代検出面遺構の埋没後の氾濫堆積物がみとめられることから、河川活動の影響を受けていた点は共通していると考えられる。

次に、11001-4・11001-5 区について、調査区間に位置する 10001-3 区の成果も参照しながらみていく。

11001-4 区第Ⅳ層上面、11001-5 区第Ⅳ層上面では、耕作溝を検出している。それぞれ直上に堆積する第Ⅲ層が作土、第Ⅳ層が床土と考えられる。出土遺物は少量であったが、両調査区とも下層検出遺構の時期から中世以降と考えられる。また、11001-4 区に近接する 10001-3 区の層序の高さを比較すると、10001-3 区第６層上面の近世遺構検出面と対応する可能性が考えられるが、遺物からは、さらに下層の第７・８層上面検出の中世上層遺構検出面と対応する可能性もある。

中世遺構検出面は、11001-4 区第Ⅵ層上面、11001-5 区第Ⅴ層上面で検出している。いずれも多数の柱穴を検出したこと、11001-4 区第Ⅵ層と 11001-5 区第Ⅴ・Ⅵ層は類似することからも、対応する遺構検出面と考えられる。10001-3 区では、第７・８層上面検出の中世上層遺構検出面で規模の類似する柱穴を多数検出していること、また、検出面の高さからも、これらの遺構検出面が対応するものと推定できる。そうであれば、10001-3 区の成果より、時期は 15 ～ 16 世紀となる。一方で、10001-3 区では、第８～ 10 層上面検出の 12 ～ 13 世紀頃に位置づけられる中世下層遺構検出面でも柱穴を検出していること、11001-4 区・11001-5 区の中世遺構検出面では確実に 15 ～ 16 世紀まで下る遺物は出土していないことから、これらの遺構面が 10001-3 区中世下層遺構検出面に対応するものであり、12 ～ 13 世紀頃に所属する可能性も否定できない。

弥生時代遺構検出面は、11001-4 区第Ⅷ層上面、11001-5 区第Ⅶ層上面で検出している。両調査区とも遺構出土遺物が少量であるが、直上層出土遺物も考慮すると、弥生時代後期～庄内式併行期に位置づけられ、対応する遺構面と考えられる。

11001-4 区第Ⅷ層と 11001-5 区第Ⅷ層は、一連の調査区すべてで確認している砂礫層であり、

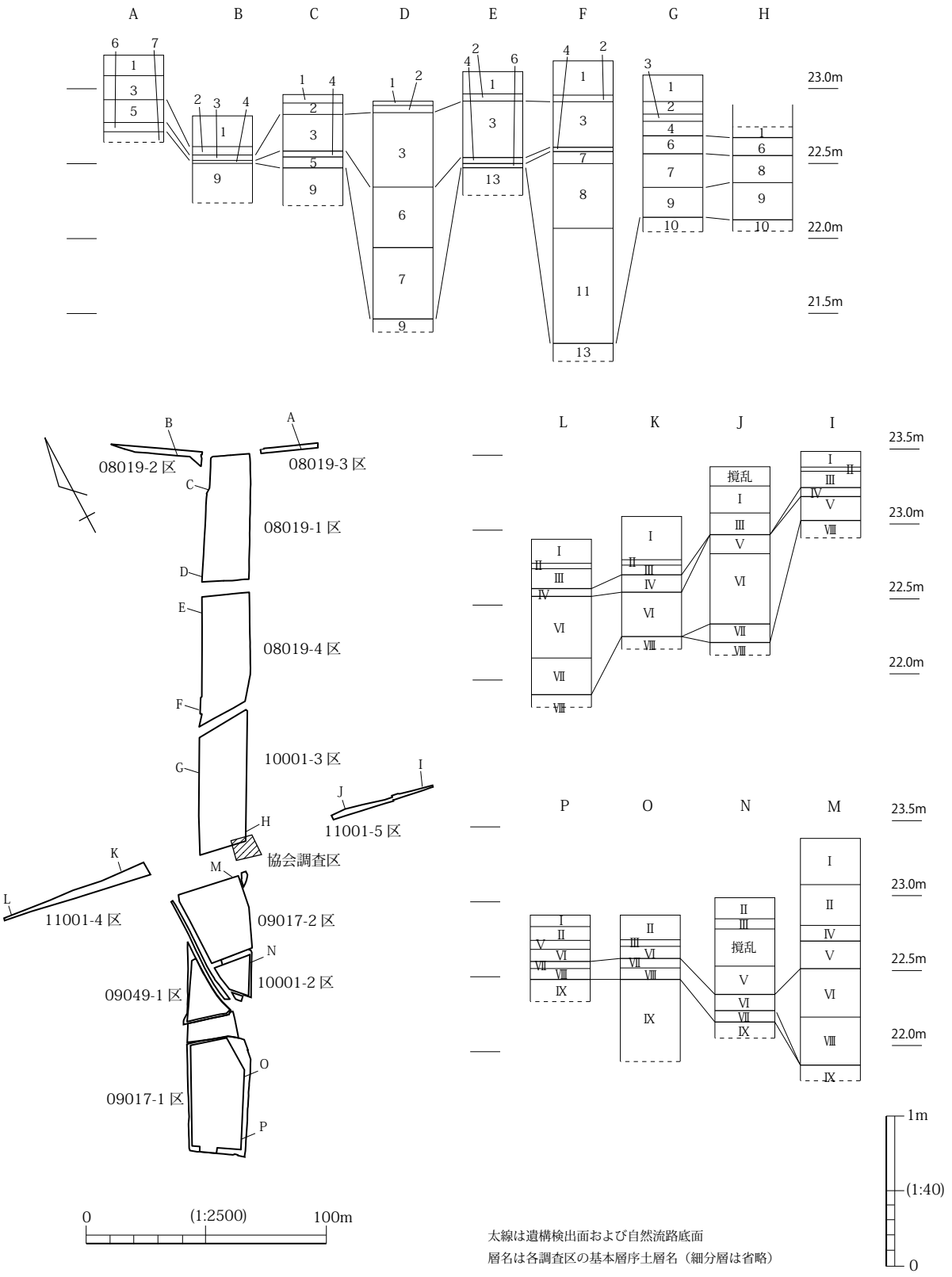

A
B
C
D
E
F
G
H
23.0m
22.5m
22.0m
21.5m
08019-2 区
08019-3 区
08019-1 区
08019-4 区
10001-3 区
11001-5 区
協会調査区
11001-4 区
09017-2 区
10001-2 区
09049-1 区
09017-1 区
0
(1:2500)
100m
L
K
J
I
23.5m
23.0m
22.5m
22.0m
撹乱
P
O
N
M
1m
(1:40)
0
太線は遺構検出面および自然流路底面
層名は各調査区の基本層序土層名（細分層は省略）

図 139　層序柱状図

対応する層と考えられる。11001-4 区では、10001-3 区の成果も踏まえて、第Ⅵ・Ⅶ層が自然流路内堆積物と推定でき、第Ⅷ層は自然流路底面である。11001-5 区についても、11001-4 区第Ⅵ層と 11001-5 区第Ⅴ～Ⅶ層が類似すること、各層出土遺物も量は異なるものの同時期のものが出土していることから、対応する層と考えられる。したがって、これらの層は自然流路内堆積物と推定でき、11001-4 区他第Ⅷ層と 11001-5 区他第Ⅷ層は自然流路底面と考えられる。

最後に、09017-2 区他と 11001-4 区との対応を検討し、調査区全体の関係についてまとめる。

11001-4 区の耕作溝検出面は、近世の可能性が考えられることから、09017-2 区近世遺構検出面との対応が考えられる。ただし、先述のように、11001-4 区の耕作溝検出面が中世に遡る可能性もある。

11001-4 区の中世検出面は、10001-3 区との比較より 15 ～ 16 世紀あるいは 12 ～ 13 世紀の可能性が考えられた。検出面ベース層をみると、11001-4 区第Ⅵ層と、09017-2 区他第Ⅵ層とは類似しており、出土遺物の時期は、それぞれ弥生時代～古代、弥生時代～中世であるが、弥生時代～古代のものを中心とする点では共通する。したがって、形成の中心時期は同時期と推定できる。09017-2 区中世遺構検出面については 12 ～ 14 世紀頃としたものの、明確に限定はできない。したがって、両調査区の中世遺構検出面は対応するものと推定はできるものの、10001-3 区の中世上層遺構検出面と中世下層遺構検出面の両者ともに対応する可能性があり、それぞれ 15 ～ 16 世紀、12 ～ 13 世紀であることから、12 ～ 16 世紀の中で時期を限定し難いということになる。

11001-4 区の弥生時代遺構検出面のベース層である基本層序第Ⅷ層は、09017-2 区他の弥生～古墳時代遺構検出面ベース層のうち第Ⅸ層と一連の層であることから、対応するものと考えられる。前者が弥生時代後期～庄内式併行期と考えられるのに対し、後者は時期を限定し難く古墳時代前期の遺構も含むが、同時期の遺構も存在している可能性がある。

以上より、本書で報告する 09017-1・09017-2・09049-1・10001-2・10078-1 ～ 10078-3・11001-4 ～ 11001-8 区の遺構検出面の対応と時期については以下のようになる。

09017-2 区他では近世、18 ～ 19 世紀の遺構を検出している。11001-4 区・11001-5 区の耕作溝検出面も同時期の可能性がある。

09017-1 区他・09017-2 区他・11001-4 区・11001-5 区では、中世の遺構を検出している。出土遺物からでは、いずれも 12 ～ 14 世紀頃と推定できるが、10001-3 区の成果からは、15 ～ 16 世紀の可能性もある。また、09017-1 区他の遺構のうち耕作に関わるものは、近世に下る可能性がある。

09017-1 区他では奈良時代、８世紀後半頃の遺構を検出している。

09017-2 区他・11001-4 区・11001-5 区では弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を検出している。11001-4 区・11001-5 区については弥生時代後期～庄内式併行期と推定できるが、09017-2 区他についてはより広い時期幅をもつ可能性がある。

遺構の変遷　以上の地区間の層序、遺構検出面の関係をふまえ、遺構の変遷を示す（図 140）。

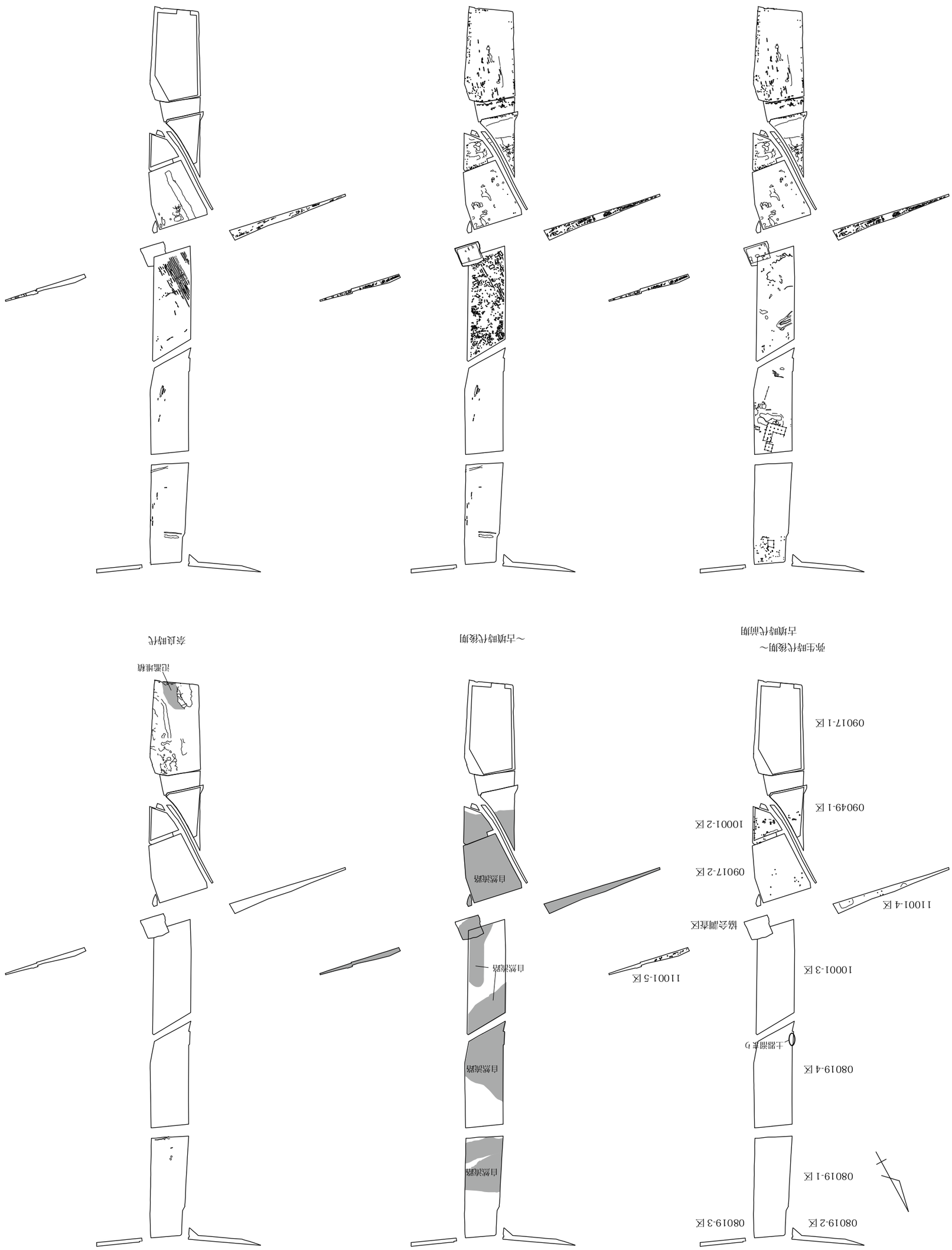


図 140　遺構変遷図

0　(1:2000)　10m

平成 23 年度に報告した調査区も、また、協会調査区も含めて図示する。なお、協会調査区については、10001-3 区遺構検出面との対応を判断できる遺構のみを表示する。また、所属時期を限定し難い場合は、可能性のある両時期にまたがって図示する。

弥生時代後期～古墳時代前期においては、09017-2 区他・11001-4 区・11001-5 区で柱穴やピットを検出した。11001-4 区・11001-5 区では弥生時代後期～庄内式併行期の柱穴、ピットを検出し、竪穴住居の可能性のある落ち込みも検出しており、居住域があったことが判明した。08019-4 区でも庄内式前半の自然流路内土器溜まりが検出されていたが、実際に調査区内に居住域が確認されたのは、本書で報告する調査区が初となる。また、時期の限定はできないものの、09017-2 区他でも柱穴等が検出されており、一部は古墳時代前期まで存続したものと考えられる。したがって、調査全体では、北端、南端を除く範囲で、この時期の遺構が確認されていることになる。

また、弥生時代後期以降から古墳時代前期頃のある段階以降、調査区一体で自然流路の痕跡が検出されている。調査区北部、南部を除くすべての範囲で自然流路内堆積がみとめられる。調査区周辺の地形から判断して、すべて南東から北西または東から西方向への流れと想定できる。自然流路内堆積物出土遺物の時期幅は、中央部では弥生時代後期から古墳時代後期、北部・南部では弥生時代後期から古代であるが、特に出土遺物が多いのは古墳時代以前のものであることから、この時期に特に、調査区周辺が自然流路や洪水により堆積物が流入する環境であったものと考えられる。また、これらの自然流路の底面となる層は大礫を含む粗砂層で、調査区全域に堆積している。したがって、弥生時代後期以前においては、より活発な河川堆積作用を受けていたのが、弥生時代後期～古墳時代後期にかけては、それ以前より埋積作用が小さくなることがわかる。また、第 2 節で述べるように、自然流路内堆積物出土遺物の時期は出土位置により所属時期にやや差異がみとめられる。時期による居住域の相違を反映しているものと考えられる。

古代の遺構検出面は 09017-1 区他・08019-1 区で検出した。調査範囲の南部にあたる 09017-1 区他では、奈良時代の土坑や溝を検出し、古代寺院に関わる遺物が出土している。北部にあたる 08019-1 区の遺構の性格、詳細な時期は明らかではないが、08019-1 区および 11001-4 区以南の調査区では奈良時代頃の土器や瓦が比較的多く出土している。したがって、08019-1 区の古代の遺構は奈良時代頃に位置づけられる可能性が高く、また、11001-4 区以南の調査区で遺構を確認していない箇所でも、周辺に奈良時代頃の遺構が存在した可能性が高いと考えられる。ただし、09017-1 区他・08019-1 区とも、古代遺構検出面の一部または全体が洪水堆積物に覆われることから、古代以降も洪水堆積物の流入する安定しない環境であったものと考えられる。

12 ～ 14 世紀には、調査範囲のほぼ全域で遺構が確認され、建物等明確な居住域が確認できる。調査範囲南部の遺構については時期が下る可能性もあるが、少なくとも北部においてはこの時期の明確な居住域が確認でき、自然化学分析の成果より空閑地で水田耕作が行われていたことも推定できる。北側を主な居住域、中央部を水田耕作等を行う生産域として利用し、東西部分や南部についても、この時期の遺構であるとすれば、居住域または生産域として利用していたことにな

る。

15 ～ 16 世紀には、それまで遺構が希薄であった調査範囲中央部に建物が集中するようになる。建物の構成を明らかにし得たものはいずれも狭小であるが、おそらく居住に使用され得る規模の建物も存在したものと考えられる。また、北部では前代の建物の廃絶後に水田耕作が営まれ、土地利用のあり方が変化したものと考えられる。調査範囲南部の遺構群がこの時期のものであれば、居住域が中央部東西に広く広がっていたものと推定でき、居住域の移動がさらに鮮明であることになる。

近世には、調査範囲北部で耕作溝が検出されるほか、中央部のやや南よりで大規模な溝が検出されている。いずれも耕作に関わる遺構と推定できる。南部では確実にこの時期と言える遺構は検出していないが、近世に下る可能性のある耕作溝があることから、全域が生産域となったものと推定できる。17 世紀に所属する明確な遺物の出土がなかったため 18 ～ 19 世紀としたが、少なくとも中世にすでに生産域であった場所においては、17 世紀にも連綿と耕作が行われていたものと推定できる。

以上のように、調査範囲全体の土地利用は、弥生時代後期～古墳時代前期の居住域、古墳時代後期頃までを中心とした自然流路、奈良時代の古代寺院に関わる遺物の廃棄土坑と生産域、中世の居住域と生産域、近世の生産域という変遷をたどる。

周辺地割の形成時期について　次に、こうした遺構変遷の中で、和泉寺跡の推定寺域の根拠ともされてきた地割がいつ形成されたのかを検討する。

平成 23 年度の報告において、調査範囲の北半での遺構主軸方向を検討した。その結果、和泉寺跡の推定寺域とその周辺で現在みとめられるほぼ正方位の地割が 12 ～ 13 世紀まで遡ってみとめられるが、古代まで遡るとは言い難いと結論づけた。ここでは、平成 23 年度報告にも触れながら、本書で報告する調査区、調査範囲全体では南部および東西部分にあたる部分の地割形成時期を検討する。

11001-4・5 区では、耕作溝検出面と中世遺構検出面の各 2 面の溝に加え、11001-4 区の弥生時代遺構検出面の建物、落ち込みについても参考に示した。09017-2 区他では近世遺構検出面、中世遺構検出面の 2 面の溝、09017-1 区他では中世遺構検出面、奈良時代遺構検出面の 2 面の溝について、遺構主軸方向分布を示した。また、平成 23 年度報告の調査範囲の北半部については、時期によらず地区ごとに一定の方向性がみとめられるため、検出面に関わらずまとめて提示している（図 141）。

この図より、まず 11001-4・5 区では、耕作溝検出面で、座標北または直交する方向に近い範囲に分布することがわかる。また、中世遺構検出面では、検討できる遺構が少なくばらつきがあるが、概ね耕作溝検出面と同じ範囲に分布する。

09017-2 区他では、近世遺構検出面の溝 1 条のみではあるが、座標北にほぼ一致する。一方、中世遺構検出面では、検討対象は 09049-1 区等南半の遺構のみであるが、一定の方向性がみとめ

られない。座標北から西に振れるものが比較的多く、座標北やそれに直交する方向のものは確認できない。

09017-1 区他では、中世遺構検出面では、座標北より東に振れる分布を示し、東西方向でもその直交に近い範囲に分布する。奈良時代遺構検出面では、検討できるのは溝 1 条のみであるが、同じく座標北より東に振れる。

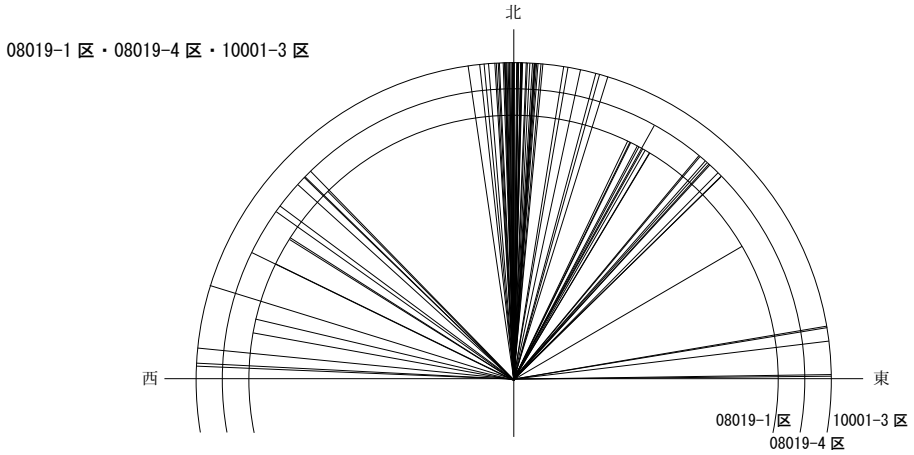
各地区の遺構主軸分布を平成 23 年度報告の調査区もあわせて比較すると、08019-1 区および 08019-4 区では、北東方向 N―26 ～ 46°―E の間に集中し、北西方向も概ねそれに直交する範囲内に分布する。10001-3 区の主軸方向は座標北から東西 5 °以内に集中し、直交する座標東西付近にも分布する。11001-4・5 区では、10001-3 区に類似する座標北に近い分布範囲を示す。10001-3 区ほど集中はみとめられないが、検討対象の遺構数の差もあり、同じ傾向を示すと考えられる。09017-2 区他では、近世遺構検出面では座標北にほぼ一致するが、中世遺構検出面では、一定の方向性がみられず、座標北や座標東西に近い方向のものは確認できない。09017-1 区他では、中世遺構検出面では、座標北より東に振れる分布およびそれに直交する分布を示し、奈良時代遺構検出面でも同じ範囲に分布がみられる。

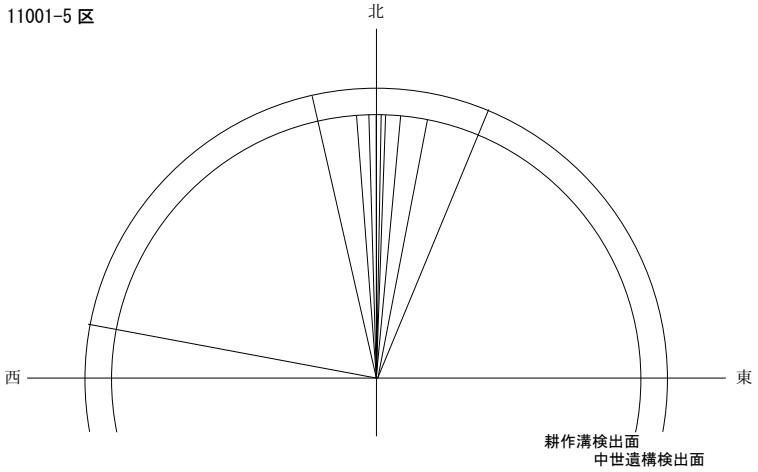
以上より、遺構主軸の分布は、08019-1・08019-4 区、10001-3・11001-4・11001-5 区、09017-2 区他、09017-1 区他の 4 通りに分けられる。ただし、09017-2 区では近世のみ 10001-3・11001-4・11001-5 区と類似する。

ここで、現在より地割がよく残存する 1961 年度撮影空中写真によって、推定される和泉国府および和泉寺跡周辺の地割と、調査によって明らかになった近世以前の地割を比較する（図 142、図版 1 － 1 ）。図には方 5 町と推定した際の推定国府跡と和泉寺跡の推定寺域、遺構主軸分布を検討した 3 つの調査区の位置を示した。これを見ると、推定国府域と周囲の広い範囲において、和泉郡域の条里制に則った、海岸線に平行する方向、N―46°―E の傾きをもつ地割が確認される。08019-1・4 区調査で確認された地割も概ねこの方向に則っている。

和泉寺跡の推定寺域とその周辺では、ほぼ正方位の地割がみとめられる。推定寺域内に位置する 11001-4 区、推定寺域外となる 10001-3・11001-5 区でも同じ方向に則っている。したがって、和泉寺跡推定寺域の根拠となる正方位の地割は、11001-4・11001-5 区では遺構の詳細な時期が明確ではないものの、10001-3 区の成果も考慮すると、12 ～ 13 世紀頃まで遡るものと推定できる。

一方、南方を流れる槇尾川の周囲では、両岸にわたって一定の方向性のみとめられない地割が確認でき、槇尾川の氾濫の影響を受けて不定方向の地割が形成されたものと考えられる。09017-2 区他南部の中世遺構検出面でみられる不定の主軸方向、09017-1 区他の中世遺構検出面でみられる座標北より東に振れる主軸方向は、氾濫の影響を受け、上記の 2 方向とはあわない方向に地割が形成されていたことを示すものであろう。一方で、特に 09017-1 区他については概ね 1961 年度撮影空中写真と一致することから、中世のある段階以降、この周辺では一定の方向で地割が形成されていたとも考えられる。また、09017-2 区他北部では、近世において、溝 1 条の


08019-1 区・08019-4 区・10001-3 区
北
西
東
08019-1 区
08019-4 区
10001-3 区


11001-5 区
北
西
東
耕作溝検出面
中世遺構検出面

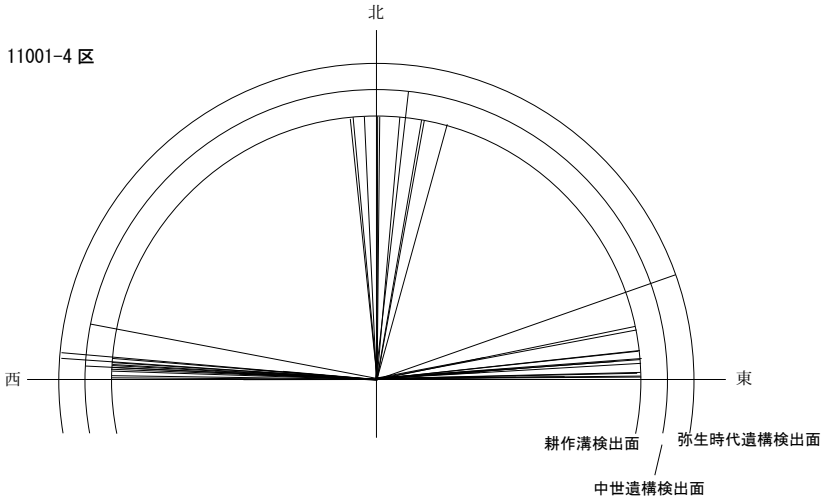
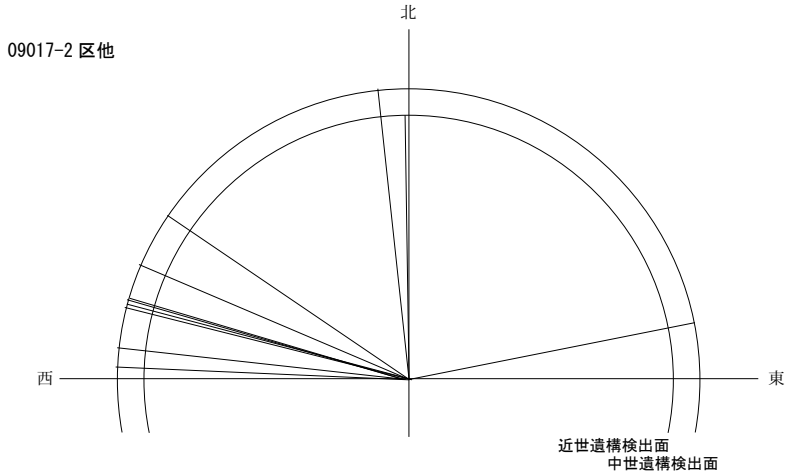
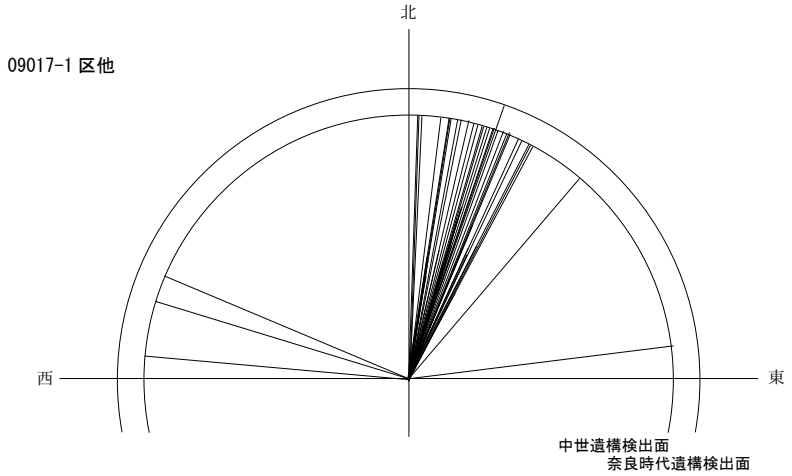

11001-4 区
北
西
東
耕作溝検出面
弥生時代遺構検出面
中世遺構検出面

図 141　遺構


09017-2 区他
北
西
東
近世遺構検出面
中世遺構検出面

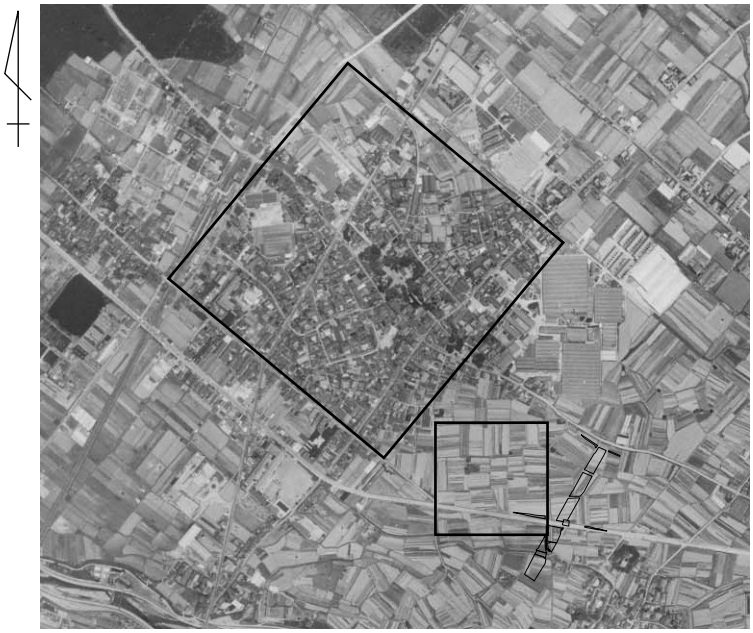

09017-1 区他
北
西
東
中世遺構検出面
奈良時代遺構検出面

主軸方向分布図

みではあるが 1961 年度撮影空中写真と一致する座標北方向の遺構がみとめられる。和泉寺跡推定寺域周辺の地割が周辺に広がったことにより、正方位の地割をもつ範囲が広がった可能性が考えられる。これは、先述のように、地割推定寺域外となる 10001-3・11001-5 区でも正方位の地割がみとめられることからも裏付けられる。

一方で、古代以前については、08019-1 区で遺構を確認したものの主軸方向を検討できるものではなく、09017-1 区他の奈良時代遺構検出面では、中世と同様座標北より東に振れる分布を示す。いずれも推定寺域外でもあり、寺域周辺の正方位地割の形成時期を示す成果とはならない。一方で、両調査区とも、古代以降に洪水堆積物の流入を受けていることから、調査区の大半で確認された自然流路の中心時期である弥生時代後期から古墳時代後期のみでなく、古代においても安定した環境にはなかったものと推定できる。推定寺域内南東部に位置する 11001-4 区でも、古代の遺構は検出していないが、自然流路内堆積から古代の瓦も出土しており、古代以降にも一定の洪水堆積物の流入を受けていると推定できる。08019-1 区自然流路は湾曲せずに流れていたとすれば推定寺域北東部にかかることからも、推定寺域内においても、古代以降、安定した環境ではなかったと考えられる。

以上より、和泉寺跡推定寺域の根拠となる地割がそのまま古代に遡るものであるとは現時点では言い難い。平成 20 年度の和泉市教育委員会による推定寺域内西部の調査で奈良時代の東西方向の溝が確認されていることから、和泉寺跡が正方位であったという推定は妥当であり、和泉寺跡周囲のみに残る正方位の地割は寺院の方位に由来するものではあろう。しかし、和泉寺跡推定



左：和泉国府推定域　右：和泉寺跡推定寺域

図 142　和泉寺跡推定寺域・和泉国府推定域と調査区位置図
（昭和 36 年度大阪府撮影空中写真に加筆）

寺域外の東側や南東側でも正方位地割がみとめられ、09017-2 区他では、近世に正方位地割の範囲が広がっていく様相が確認できた。したがって、古代寺院の廃絶後に正方位の地割が寺域外東部や南東部へと次第に拡大された可能性が考えられる。今回の調査結果からは、少なくとも 12～13 世紀までは現在の地割が遡ることが確認できたが、現在に残る正方位地割の範囲がそのまま古代寺院跡の寺域であるとする根拠は得られず、今回の調査から和泉寺跡の寺域範囲を確定することはできないと考える。検出できた古代の遺構からのみでなく、古代の遺物の出土地点や出土量の検討からも、古代の土地利用を探っていくことが今後の課題である。

第２節　弥生時代から古墳時代遺物の様相

すべての調査区で、自然流路内堆積物等から、弥生時代後期～古墳時代の土器が多く出土した。この時期の土器は平成 23 年度報告の調査区でも多く出土したことから、人為的遺構は明確でなかったものの、周囲に居住域が存在したものと推定していたが、本書報告の調査区の成果により、あらためて弥生時代後期～古墳時代前期頃の居住域の存在が明らかとなった。自然流路出土土器については、本書で報告する調査区では、08019-4 区で検出した庄内式後半の土器溜まりのように一時期のものがまとまって出土する傾向はそれほど明瞭ではなく、広い時期幅のものが同じ層から出土している地点が大半である。しかし、特に弥生時代後期～庄内式併行期の土器について、遺物の出土地点と所属時期に一定の関係がみとめられることから、時期による居住域の変遷を反映している可能性もあるものと考え、出土傾向を整理しておく。また、韓式系土器について、自然科学分析の成果を整理しておく。

弥生時代後期～庄内式併行期の土器　弥生時代後期～庄内式併行期の土器が特に多く出土したのは、11001-4 区、09017-2 区他である。11001-4 区では、自然流路内堆積物の第Ⅵ層から多く出土し、特に、形状より竪穴住居跡の可能性もある落ち込み２の周辺で、まとまった出土がみられた。第Ⅵ層出土土器は弥生時代後期から少なくとも奈良時代の長期にわたるが、下層については後期から庄内式併行期頃に堆積したものと考えられる。中でも、落ち込み２周辺を中心に後期後葉に位置づけられる土器が比較的多く出土しており、落ち込み２を検出した弥生時代遺構検出面について、後期後葉頃を中心とした時期と推定することができる。

09017-2 区他でも、自然流路堆積物の第Ⅵ層から、弥生時代後期～庄内式併行期の土器が多く出土した。11001-4 区ほどまとまっての出土ではないが、後期後葉に位置づけられる土器、前葉～中葉に遡る土器も出土している。弥生時代～古墳時代検出面の遺構の時期は限定できないが、出土土器からは、遺構の時期が後期後葉あるいは前葉～中葉に遡る可能性もある。

以上のような土器の出土傾向を平成 23 年度報告の調査区、特に当該期の土器を多く出土した 08019-4 区、10001-3 区を含めて比較する。いずれも自然流路内堆積物からの出土であるが、08019-4 区では自然流路内に土器溜まりを検出した。平成 23 年度報告と同様、出土地点から、08019-4 区土器溜まり、08019-4 区自然流路、10001-3 区北側自然流路、10001-3 区南側自然流路

と分類して呼称する。土器の時期的な傾向をみると、08019-4 区土器溜まりでは庄内式前半に限定できる。その他の３地点では、いずれも弥生時代後期～庄内式併行期の土器が多く出土しているが、08019-4 区自然流路と比較すると、10001-3 区の方が後期後葉の土器をより多く含む傾向がみとめられる。したがって、調査範囲全体でみると、南側ほどより古い時期の土器が多く含まれていることが指摘できる。人為的な遺構と考えられる 08019-4 区土器溜まりでは庄内式前半、竪穴住居の可能性がある 11001-4 区落ち込み２の周辺で後期後葉の土器がそれぞれまとまって出土していることから、居住域の北側への広がりが、遺構外のものも含め、土器の時期別出土傾向に現れているものと考えられる。

また、平成 23 年度報告では、弥生時代後期から庄内式併行期の甕について口縁部形態や技法上の特徴をまとめ、口縁端部をまるくおさめ、外面に右上がりタタキを施すものが主流であると考えた。一方、11001-4 区、09017-2 区他出土の甕についてみると、タタキの傾向は共通するが、口縁部については、鈍い端面をもつものも多く、端部を上方に拡張するものも一定量出土している。こうした口縁部形態の違いも、後期後葉段階のものをより多く含むという、11001-4 区、09017-2 区他出土土器の傾向を示しているものと考えられる。

また、一連の調査で出土した弥生時代後期～庄内式併行期の土器の傾向のひとつとして、淡路型甕、淡路型器台の出土が挙げられる。平成 23 年度報告では、口縁部にタタキによる刻目状痕跡をもつ淡路型甕７点、口縁部にタタキによる刻目状痕跡をもつ鉢１点、複合口縁状の精製の淡路型器台５点を報告したほか、本書報告の 09017-2 区他出土淡路型器台１点（411）も、胎土分析試料として掲載した。合計で、淡路型甕７点、同様の特徴をもつ鉢１点、淡路型器台６点が出土していることになる。また、本書報告の土器の中に、淡路型甕の可能性のあるもの（497）、淡路型器台の可能性のあるもの（327・627）が出土しており、さらに数が増える可能性もある。生駒西麓産等搬入土器が少量である中で、淡路型とされる土器が一定量出土していることは、大きな特徴と言える。

淡路型甕、淡路型器台の産地については、淡路島出土土器と比較しての胎土分析を行い平成 23 年度報告に掲載している。詳細には触れないが、淡路型甕のうち１点が淡路島北部地域から、淡路型甕と淡路型器台の一部は淡路島中部からの搬入品の可能性が指摘された。ただし、淡路島中部と和泉地域では地質学的背景が一致することから、生産地の限定はできなかった。淡路型甕は、淡路島以外では淡路島産の搬入品と在地産の両者があることが指摘されており、和泉寺跡・府中遺跡で出土したものにも両者が混在している可能性は十分にある。周辺遺跡も含めて淡路型甕の出土事例を集成し、胎土や製作技法の詳細な比較検討から搬入品と在地産を判別していくことが課題である。また、淡路型器台はこれまで 50 例ほどしか確認されておらず、精製タイプに限定するならその半分ほどになるようである（池田 2003）。また、これまでの事例では１遺跡から淡路型器台が多く出土する事例はなく、和泉寺跡･府中遺跡での計６点の出土は顕著と言える。本書報告の事例にもあるように、破片では複合口縁壺との区別の困難なものがあることにも留意

したうえで、淡路型器台の資料集成を行い、詳細な時期や分布範囲、成立過程を検討することが今後の課題である。

11001-4 区出土の韓式系土器について　11001-4 区からは、自然流路内堆積物の第Ⅵ層より、韓式系土器甑（45）が出土した。第Ⅵ層出土土器のうち、古墳時代のものをみると、土師器と、TK23 ～ MT15 頃の須恵器が出土している。土師器では、布留式後半に位置づけられる有稜高杯が出土していることから、韓式系土器甑に近い時期の土器は土師器であると推定し、産地を明らかにするため、胎土分析を行い、在地産の可能性が高いと考えられる土師器と比較した。また、周辺で粘土塊が多く出土し、加工痕のような痕跡もみとめられたことから、土器の材料として持ち込まれたものである可能性を考え、あわせて分析を行った。

分析結果の詳細は第７章に記載したが、結論としては、韓式系土器と土師器とは胎土の鉱物・岩石組成、蛍光Ｘ線分析とも差異がみとめられなかった。また、粘土塊についても、胎土の鉱物・岩石組成が類似し、土器の材料となった可能性が指摘されたが、粒度等に差異もみとめられることから、素地としてはさらに砂を加える等の処置が行われたものと推定された。鉱物・岩石組成からは、韓式系土器、土師器とも、堺市から泉南市付近までの大阪湾岸の平野地内で製作された可能性が高いと判断された。より細かい地域単位での生産地の違いがある可能性があるが、現在のところ、胎土分析事例は少なく、今後分析事例の増加によってあらためて検討する必要がある。

小結　以上のように、弥生時代から古墳時代において、検出遺構のほか、土器の出土傾向も含め、居住域の変遷を検討した。古墳時代中期、後期の居住域は現段階では確認していないが、一定量の土器が出土することから居住域が近辺にある可能性は十分に考えられる。平成 23 年度報告で述べたように、小型丸底壺、滑石製品、鉄鋌といった特徴的な遺物が多く出土していることからは祭祀遺構の存在もうかがえる。自然流路の変遷等河川活動の様相も含め、調査区周辺、さらにはより広い範囲について、弥生時代から古墳時代の土地利用の検討を深めることが今後の課題である。

第３節　古代遺物の様相

本書で報告する調査区のうち古代の遺構を検出したのは 09017-1 区他のみであるが、その他の調査区でも、多量の瓦など、古代の遺物が出土した。ここでは、主に瓦について、所属時期や出土傾向、調査区間で共通してみられる特徴等を検討する。また、和泉寺跡で初出土となる文字瓦の意味についても検討する。

瓦の所属時期　09017-1 区他出土瓦については、第６章で、奈良時代の土坑出土遺物を中心に検討し、７世紀末～８世紀前半に位置づけられることを明らかにした。一方、11001-4 区、09017-2 区他で出土した古代の瓦については、包含層等からの出土であり、時期の限定が困難である。ここでは、これらの地区出土の瓦について、09017-1 区他出土瓦との比較を通じて所属時期を検討する。

まず、7世紀末～8世紀前半に位置づけられる09017-1区他土坑出土瓦については、次のような特徴が挙げられる。丸瓦は、行基式、玉縁式の両者が出土しており、玉縁式の方が多いこと、行基式のものに、凹面が屈曲する特徴的な形態のものがあることが判明した。平瓦は、粘土板桶巻作りで、凹面の調整は全体でなく一部に、また端面付近や側縁付近に施す点、凸面は縄叩き後に調整を施す点、枠板圧痕のある資料ではその幅が2.0～2.5cmであるといった点が多くの瓦に共通する特徴として挙げられる。また、こうした共通点をもつ粘土板桶巻作りのものの中に、隅部を斜めに切断するものが一定量みとめられるほか、少数であるが、凹面に縄タタキを施すものがある。また、桶巻作りであるか判断できないものに、凹面全体にケズリを施すものがある。土坑周辺の調査区南部包含層から出土したものも含め、丸瓦と軒丸瓦、平瓦と軒平瓦で製作技法等で共通性がみとめられるほか、平瓦の特徴も調査区南部包含層から出土したものも含め、共通性がみとめられる。したがって、調査区南部包含層から出土したものの大半は、もともと土坑内に包含されていた資料が後世に動かされたものであると推定した。ただし、粘土紐桶巻作りのもの、凸面布目平瓦は土坑外のみで出土している。

次に、11001-4区出土瓦のものをみると、丸瓦は行基式、玉縁式の両者が出土しており、玉縁式の中には形状から8世紀に位置づけられるものもある。平瓦は、粘土板桶巻き作りのものと、凸面布目瓦が出土している。粘土板桶巻き作りのものは、やや法量の小さいもの（107）があるものの、凹面は端面付近や側面付近等一部のみに調整を施す点、端面、側面の調整等に、09017-1区他土坑出土瓦と共通点がみとめられる。凸面布目平瓦は、凹面にナデを施す、凸面の枠板圧痕による凹凸が比較的顕著である、凸面に縦方向のケズリを施す、最大厚2.1～2.7cmと他の平瓦と比べて厚いという特徴をもっており、09017-1区他土坑周辺出土の凸面布目平瓦（742）とも共通する特徴である。基本層序第Ⅵ層出土瓦のみに限ると凸面布目瓦の点数は全体の約4分の1を占め、調査区全体では可能性のあるものも含めて計17点出土しており、凸面布目平瓦の出土点数が他の調査区と比較して多い。なお、基本層序第Ⅵ層では、奈良時代の土器も出土している。

09017-2区他出土瓦では、丸瓦は、行基式、玉縁式の両者が出土している。平瓦については、凹面に枠板圧痕が確認できるものが一定量みとめられ、粘土板桶巻作りのものが含まれていると推定できる。また、凸面布目平瓦が計45点出土しており、先述の11001-4区出土のものと共通する特徴をもつ。09017-2区他出土瓦の全体量からみると、割合としては多くはないが、09017-1区他出土瓦と比較すると多量である。また、09017-2区他では中世のものも確実に含むことを考慮すると、古代のものに限ればより出土割合が高くなると考えられる。特に、11001-6区出土では、平瓦出土点数が計137点であるのに対し、凸面布目平瓦が計23点と2割弱を占める。11001-6区では、調査面積に比すると瓦の出土量が多く、比較的残存度の高いものも多い。また、奈良時代の土器が比較的多く出土している。

以上のように、11001-4区、09017-2区他、09017-1区他とも粘土板桶巻作りのものまたは粘土

板桶巻作りと推定できるもの、および、凸面布目平瓦が出土している。このうち粘土板桶巻き作りのものについては、11001-4 区、09017-2 区他出土のものと 09017-1 区土坑出土のものに共通点がみとめられることから、同時期に所属するものと推定できる。また、凸面布目平瓦については、各調査区とも、瓦が多く出土した地点や層から奈良時代頃の遺物が出土していること、09017-2 区他で 8 世紀前半に位置づけられる軒丸瓦が出土していることからも、概ね同時期に所属するものと考えられる。以上より、少なくとも粘土板桶巻き作りと凸面布目平瓦のものについては、7 世紀末～8 世紀前半に位置づけられる可能性が高いと考えられる。また、09017-1 区土坑外出土の粘土紐桶巻作りのものについては、他の調査区ではみとめられなかったが、土坑周辺から出土していることより、同時期のものと推定できる。

出土地点と瓦の特徴　次に、瓦の出土地点と製作技法の関連性についてまとめる。先述のように、各調査区で粘土板桶巻作りと凸面布目平瓦の両者が出土しているものの、その量比には著しい差異がある。最も瓦が多量に出土し、一括性も高い 09017-1 区土坑およびその周辺出土瓦では、凸面布目平瓦は 1 点のみで、調査区全体でも他に出土例はない。したがって、大半が粘土板桶巻作りと考えられる。

11001-4 区では、凸面布目平瓦が計 17 点出土し、古代以前の遺物を含む基本層序第Ⅵ層出土瓦のみに限ると約 4 分の 1 を占める。その他の資料については粘土板桶巻作りと断定できないものもあることから、同時期の粘土板桶巻作りのものに対する比率はさらに高まる可能性もある。

09017-2 区他では、凸面布目平瓦が計 45 点出土しており、特に 11001-6 区出土では 23 点が出土し全体の 2 割弱を占める。11001-4 区と同様、粘土板桶巻作りと断定できないものもあり、また、中世のものも含むと考えられることから、同時期の粘土板桶巻作りのものに対する比率はさらに高まる可能性もある。

以上のように、粘土板桶巻作りと凸面布目平瓦の量比をみると、11001-4 区、09017-2 区他の特に 11001-6 区では凸面布目平瓦の比率が高く、09017-1 区他では出土点数の割に凸面布目平瓦が極めて少ないという傾向が指摘できる。11001-4 区、09017-2 区他では奈良時代頃の遺構を検出してはいないが、このように出土傾向が明確に分かれることから、凸面布目平瓦のものが、09017-1 区他土坑周辺で出土した瓦とは異なる建物に葺かれていた可能性が考えられる。また、粘土板桶巻作りのものでも、隅部を切断するものは 09017-1 区他のみで出土している。出土瓦の残存度が低いことから詳細な分類は行えていないが、粘土板桶巻作りのものの中でも、調整等の細かな点で、出土地区による差異がこのほかにも存在している可能性がある。

なお、凸面布目平瓦については、桶の形状等製作技法について複数の説があるが、今回の調査で出土した凸面布目平瓦では、残存度の低いもの、摩滅の著しいものが多く、詳細な検討は行っていない。

瓦の焼成　瓦の焼成について、第 7 章の分析結果を踏まえてまとめておく。上の検討により 7 世紀末～8 世紀前半に位置づけられる瓦は各調査区とも焼成の不良なものが大半であるが、須恵質

のものも一定量含む。肉眼観察では、胎土と焼成の差異との関連はみとめられず、焼成により製作技法が異なるという傾向もみとめられなかったが、焼成の差異から窯等の差異に言及できるかを検討するため、胎土分析を行った。この結果、瓦はいずれも堺市から泉南市付近で生産されたものと指摘された。また、焼成によって胎土も異なるという明確な傾向はみとめられず、焼成の差異は、窯の違いよりも窯の中の位置や温度管理によるものと推定された。ただし、一部に粒径組成等の異なるものがみとめられることから、近接した場所の中で複数の窯が存在していた可能性もあると指摘された。

焼成の差異が、窯の違いよりも窯の中の位置や温度管理によるという分析結果からの考察は、同じ瓦でも、部位によって焼成の大きく異なる資料が多数みとめられることからも裏付けられる。また、窯の場所については、09017-1 区他土坑 001・046 およびその周辺で出土した瓦の中に、スサ状痕のある焼土が付着したもの、大きくひずむもの、破損面に焼土が付着したもの、焼成時に破損したものがあることから、09017-1 区他土坑周辺に窯が存在していた可能性が高い。

文字瓦の特徴　ここで、出土した 5 点の文字瓦についてまとめておく。文字瓦は、09017-1 区他土坑 001 およびその周辺で出土したものが 4 点（654 ～ 657）、09017-2 区他で出土したものが 1 点（522）である。このうち 09017-1 区他土坑 001 およびその周辺で出土したものについては粘土板桶巻作りと考えられるが、09017-2 区他出土の 1 点については、枠板圧痕がみとめられない。しかし、側面調整等が粘土板桶巻作りのものと共通すること、側面の傾きからは一枚作りとは考えにくいことから、同じく粘土板桶巻作りによるものと推定できる。したがって、文字瓦はすべて土坑 001・046 およびその周辺出土瓦と同時期、7 世紀末～ 8 世紀前半のものと考えられる。

文字瓦 5 点について、次の共通点が指摘できる。すべて平瓦であること、文字がいずれも凹面に焼成前に記され、工具はヘラ状のものであることである。また、うち 2 点（654・655）については、広端部右上隅部付近という記載の位置、向きも一致している。こうした特徴から、瓦製作の過程において文字が刻まれたタイミングや場所が共通している可能性が高いと考えられる。

記載内容は、「珎縣主廣足作」「坂合部連前」「讃美」「宮」と、いずれも人名、または人名の一部と考えられる資料である。前 2 者は、古代氏族の人名であり、「珎縣主」「坂合部連」はいずれも文献資料等にみられる氏族名である。

珎縣主氏については、「珎縣主倭麻呂」「珎縣主深麻呂」の名が天平 9 年和泉監正税帳にみられ、和泉郡の郡領氏族であったことが判明している。「珎縣主廣足」の名は初出である。珎縣主氏は、和泉郡と関わりの深い氏族であると考えられ、和泉国府推定地周辺を珎縣主氏の本拠地として、和泉寺跡を氏寺であるという推定もなされてきた。今回の資料は、実際に珎縣主氏が和泉寺跡と関わりをもっていたことを示す初めての資料であるとともに、同時代の文字資料としても重要である。

坂合部氏は、「境部」「堺部」とも書かれ、外交あるいは国や郡の境界確定に関わったという説がある。天武天皇 13 年（684）に宿祢のカバネを与えられており、瓦の所属時期がそれより下る

こと、連のカバネをもつことから傍流であると考えられる。文献資料や古地名より畿内とその周辺に在住すると考えられてきたが、本拠地は不明である。和泉国との関わりとしては、『新撰姓氏録』の和泉国神別に「坂合部」とあり、今回の瓦資料が、坂合部氏と和泉国との関わりを示す２例目の資料である。また、和泉寺跡との関わりを示す資料としては初である。

「讃美」と記載された資料（654）は、先述のように、府中遺跡の既調査出土瓦より「讃美塞」と書かれていた可能性が考えられる。「讃美」のみでも僧侶の名の可能性があるが、「讃美塞」であれば、優婆塞の名である可能性が高まる。文字不明の１点（655）も「美」と記載された可能性があることから、既調査出土資料も含め、「讃美塞」と記載された瓦が計３点にのぼる可能性もある。そうであれば、和泉寺跡に深く関わりをもった優婆塞であると考えられる。

「宮」については、「宮」一字のみが刻まれた文字瓦の事例がないことから欠損部に文字が続くと推定し、他の４点がいずれも人名または人名の可能性があることから、人名の可能性が高いと考えられる。また、堺市大野寺跡で「宮道」と刻まれた８世紀の文字瓦が出土していることより、該期に「宮」ではじまる人名が存在していたと言える。

以上の文字瓦は、一字一字をしっかり刻む字体が共通しており、特に「讃美」と記載された資料（654）はその傾向が強い。こうした字体からは８世紀のものと考えられ、また、「坂合部連前」については「部」の記載方法からも８世紀と推定できる。こうした特徴から、文字瓦の所属時期が、瓦全体の所属時期よりさらに限定でき、８世紀前半のものである可能性が指摘できる。

文字瓦の意味　最後に、文字瓦の意味、文字を記した目的について検討する。文字の内容がいずれも人名または人名の可能性があることからは、仏教的作善行為、知識の可能性が高いと考えられる。文字瓦が多く出土し、知識瓦と考えられる堺市大野寺跡の資料と比較すると、大野寺跡では全体で1200点以上の文字瓦が見つかっており、文字瓦の割合が全体の約４％であるのに対し、和泉寺跡の文字瓦は、09017-1区出土平瓦で978点中４点、約0.4％と約10倍の差がある。また、文字記載の位置やタイミング、瓦の種類が大野寺跡では多様であるのに対し、和泉寺跡では、共通性がみとめられる。字体についても、大野寺跡では判読の困難なものがみられるのに対し、和泉寺跡では比較的判読が容易で、文字を書きなれている人物による記載と推定できる。また、記載のタイミングに関しては、「坂合部連前」(655) に興味深い特徴がみとめられる。この資料では、文字が記載される部分を中心に、縄叩き、ナデを施しており、文字記載のために表面を整えている可能性がある。そうであれば、文字を記す位置があらかじめ決められ、一定のタイミングで記載がされるという体系的なあり方が想定できる。桶巻作りの瓦の分割前後ともに文字が記載され、分割によって文字が分かれる事例もある大野寺跡とは異なる状況と言える。和泉寺跡出土の文字瓦点数は５点と少ないことから、今後の資料増加によっては解釈が変わる可能性もあるが、現時点では、古代氏族、僧侶等文字を書きなれた人物により、一定のルールに従って体系的に記載されたというあり方が想定できる。

また、２氏の古代氏族の人名がみられることについては、和泉寺跡との関わり方として、２通

りの考え方が可能である。ひとつは一方の氏寺であり、他氏が協力したというあり方、もう一方は、２氏が協力したというあり方である。珎縣主氏が和泉郡の郡領氏族であることからは、珎縣主氏の氏寺として前者の立場をとることが考えられる。しかし、近年、寺院を建立するということは一大事業であり、１氏族のみで可能であったのかという点等から、これまで氏寺とされてきた古代寺院についても、周辺氏族の協力によって成り立っていた、広い意味での知識が一般的であったという指摘もなされている（栄原 2011 他）。和泉寺跡周辺は、古代寺院が集中する地域であり、また、複数の氏族分布が知られていることから、氏族間の協力体制も考えられる。したがって、寺院の建立、維持にあたっては、２氏のどちらかが中心的な立場に立っていた可能性、２氏の古代氏族の協力によって成り立っていた可能性の両者があり得ると捉え、現段階では、和泉寺跡がどちらか１氏の氏寺であるとの断定は避けることとする。

小結　以上、瓦の検討から所属時期、地点による傾向を明らかにし、また、文字瓦に刻まれた人名の内容、文字瓦の性格についても検討した。瓦の残存度は全体的に低いものの、７世紀末～８世紀前半に位置づけられるものが複数調査区から多数出土していることが指摘できた。また、製作技法の大きく異なる瓦は、異なる場所で用いられていた可能性があることも指摘した。

奈良時代と言える遺構を検出したのは調査範囲南部のみであるが、７世紀末～８世紀前半に位置づけられる瓦が、８世紀後半の土器と共に出土したことは、長くみつもっても 50 年程度で瓦が廃棄されたことになる。推定寺域外の調査であり、寺域中心部の動向は不明であるが、大量に瓦を廃棄する何らかの事情が存在したものと考えられる。今後、推定寺域内を含め、周辺調査の進展によって、和泉寺跡の盛衰が明らかになることが期待される。また、既存資料についても十分に検討を進め、地点による瓦の特徴等の差異についても検討を深めることが今後の重要な課題である。

遺物整理および本書作成にあたっては、下記の方々からご教示を賜りました。記して感謝いたします。（五十音順・敬称略）
古代寺院史研究会、古墳出現期土器研究会、摂河泉古代寺院研究会
浅野啓介、池田毅、市大樹、市本芳三、上原眞人、上田睦、大脇潔、梶原義実、岸本直文、
桑田訓也、小森俊寛、近藤康司、栄原永遠男、大洞真白、林正憲、菱田哲郎、堀大輔、三好美穂、
森岡秀人、森村健一、吉川真司、渡辺晃宏

参考文献

池田毅　2003「揺籃期の象徴『淡路型器台』」『水野正好先生古稀記念論文集　続文化財学論集』文化財学論集刊行会　105-114

池田毅　2012「淡路地域における古墳出現期以前の土器様相―土器編年構築に向けての一試行―」『菟原Ⅱ―森岡秀人さん還暦記念論文集―』　菟原刊行会　253-264

池峯龍彦　2006「和泉北部地域における弥生時代集落の動向」『みずほ』第 40 号　大和弥生文化の会　100-118

和泉市史編さん委員会編　2006『古代和泉郡の歴史的展開』　和泉市教育委員会

市村慎太郎　2009「土器・土製品・瓦　（１）弥生時代～古墳時代」『下池田遺跡―大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財調査報告―』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 190 集　（財）大阪府文化財センター　47-185

市本芳三　1993「摂河泉における古代末･中世瓦の様相―堺市日置荘遺跡出土瓦を中心に―」『研究紀要』Vol 1　（財）大阪文化財センター　44-68

大脇潔　1991「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第 49 冊　奈良国立文化財研究所　1-56

小谷徳彦　2001「凸面布目平瓦の製作技法とその系譜―大和盆地出土例を中心として―」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅲ　帝塚山大学考古学研究所　53-74

古代の土器研究会編　1992『古代の土器 1　都城の土器集成』　古代の土器研究会

小森俊寛　2005『都から出土する土器の編年的研究』　真陽社

近藤康司　1997「和泉における古代寺院の成立と展開」『摂河泉古代寺院論纂第 1 集』摂河泉古代寺院研究会　44-65

堺市市長公室文化部文化財課編　2010『史跡土塔講演会録　堺の誇り土塔と行基』　堺市

堺市文化観光局文化部文化財課編　2011『史跡土塔講演会録　堺の宝　土塔の文字瓦』　堺市

栄原永遠男　2010「和泉寺跡出土の文字瓦」『和泉国誕生』和泉市いずみの国歴史館平成 22 年度特別展　和泉市いずみの国歴史館　17-18

栄原永遠男　2011「史跡土塔出土文字瓦の歴史的意義」『史跡土塔講演会録　堺の宝　土塔の文字瓦』　堺市　43-78

佐原真 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第 58 巻第２号　日本考古学会　30-72

積山洋　2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊 14　雄山閣　109-120

瀧本正志　1983「平瓦桶巻作りにおける一考察―粘土円筒分割のための指標の種類について―」『考古学雑誌』第 69 巻第２号　日本考古学会　166-184

田中元浩　2010「古墳出現期の大田・黒田遺跡―紀伊における古墳出現期集落の一様相―」『紀

伊考古学研究』第 13 号　紀伊考古学研究会　11-29
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園
地村邦夫　1999「和泉地域第Ⅲ・Ⅳ様式の編年―97 年度調査出土土器の検討―」『池上曽根遺跡―拠点集落東方の墓域の調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 1998-1　大阪府教育委員会　88-110
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
辻美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室　351-365
中井公　2002「凸面布目平瓦研究の最近の動向について」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』　藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会・帝塚山大学考古学研究所　362-377
中野咲　2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『橿原考古学研究所紀要　考古学論考』第 33 冊　橿原考古学研究所　43-75
奈良文化財研究所編　2006『評制下荷札木簡集成』奈良文化財研究所史料第 76 冊　奈良文化財研究所
奈良文化財研究所編　2009『古代瓦研究Ⅳ』　奈良文化財研究所
西村歩　1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡―都市計画道路常磐浜寺線建設に伴う発掘調査報告書―』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 18 集　（財）大阪府文化財調査研究センター　523-660
西村歩・池峯龍彦　2006「古式土師器編年集成　和泉地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　145-175
橋本久和　2009「瓦器椀の編年と年代観」『第 28 回中世土器研究会　中世考古学と地域・流通』日本中世土器研究会　1-28
樋口吉文　1990「和泉地域」『弥生土器の様式と編年―近畿編Ⅱ―』　木耳社　3-76
藤澤一夫　1942「摂河泉出土古瓦の研究―編年的様式分類の一試企―」『佛教考古學論叢』考古學評論第三輯　237-308
宮地聡一郎　2000「脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 54 集　（財）大阪府文化財調査研究センター　75-80
森岡秀人　2003「「淡路型叩き甕」の提唱と摂津―環大阪湾をめぐる交流の一要素―」『初期古墳と大和の考古学』学生社　211-221
若林邦彦　1999「土器」『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査報告書第２冊　同志社大学歴史資料館　86-136

【報告書類】

和泉市教育委員会　1980a『府中遺跡発掘調査概要・Ⅲ―和泉市府中町所在―』

和泉市教育委員会　1980b『府中遺跡発掘調査概要・Ⅳ―和泉市府中町所在―』

和泉市教育委員会　1983『府中遺跡群発掘調査概要Ⅲ』

和泉市教育委員会　1984『和泉市の文化財』

和泉市教育委員会　1993『和泉市の文化財』

和泉市教育委員会　2009『和泉市埋蔵文化財発掘調査概報 19』

大阪府教育委員会　1999『池上曽根遺跡―拠点集落東方の墓域の調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 1998-1

大阪府教育委員会　2001『新堂廃寺』大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-1

大阪府教育委員会　2011『安松田遺跡Ⅲ―府営泉佐野東羽倉崎住宅建て替え工事に伴う発掘調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-7

大阪府教育委員会　2012『大町遺跡Ⅲ―府営岸和田大町住宅建て替え工事に伴う発掘調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011-2

大阪府教育委員会　2012『和泉寺跡・府中遺跡―都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011-3

財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1988『和泉寺跡―発掘調査報告書―』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 29 輯

堺市教育委員会　2004『史跡土塔―文字瓦聚成―』

堺市教育委員会　2007『史跡土塔―遺構編―』

土器観察表

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
14	1		須恵器	蓋	(14.4)		(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	やや不良	10	11001-5	溝 223	
14	2		須恵器	杯身	(13.4)		(3.3)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	15	11001-5	柱穴 339	
14	3		弥生土器	鉢		(4.2)	(2.3)	不明	タタキ・ユビオサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	密	良	(30)	11001-5	柱穴 334	
14	4		弥生土器	甕		4.6	(2.0)	ハケ	タタキ	7.5YR3/1 黒褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	密	良	(60)	11001-5	柱穴 405	外面赤変
14	5		須恵器	杯蓋	12.7		4.0	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	やや密	良	55	11001-5	2 区Ⅳ層	口縁部一部ひずむ
14	6		弥生土器	底部		4.6	(1.9)	工具痕	ナデ？	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(60)	11001-5	4 区Ⅴ層	
14	7		弥生土器	底部		4.0	(1.9)	不明	平行タタキ	5YR7/6 橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	(80)	11001-5	4 区Ⅵ層	鉢？
23	9		須恵器	杯蓋	(12.0)		(4.2)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ→天井部不定方向ナデ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	25	11001-4	溝 233	
23	10		須恵器	杯蓋	(12.0)		(4.8)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	35	11001-4	柱穴 364	天井部外面に小片融着
23	11		須恵器	蓋			(1.9)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	やや密	良		11001-4	柱穴 269	つまみ欠損、復元稜径 12.0cm
23	12		弥生土器	広口壺	(20.0)		(2.5)	不明	不明	2.5Y7/1 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	10	11001-4	柱穴 191	口縁部に波状文・竹管円形浮文
23	13		弥生土器	高杯			(8.9)	シボリ目	不明	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	やや粗	やや良		11001-4	柱穴 379	
23	14		弥生土器	底部		4.0	(2.7)	ナデ	タタキ？・ユビオサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	やや粗	良	(100)	11001-4	土坑 126	
23	15		弥生土器	底部		3.8	(2.9)	ナデ	不明	2.5Y8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	11001-4	柱穴 377	
24	16		磁器	椀			(3.5)	施釉	施釉	5GY7/1 明オリーブ灰	5GY7/1 明オリーブ灰	密	良	10	11001-4	S2 区Ⅳ層	龍泉窯系青磁連弁文椀
24	17		土師器	小皿	(8.2)		(1.2)	ナデ	ヨコナデ・ユビオサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	30	11001-4	N5 区Ⅳ層	
24	18		瓦器	椀	(14.2)		(3.8)	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	11001-4	N6・S6 区Ⅳ層	
24	19		須恵器	杯	(12.0)		(3.9)	回転ナデ・不定方向ナデ	回転ナデ・ヘラ切り後未調整	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	5 (20)	11001-4	N5 区Ⅳ層	
24	20		須恵器	杯	(16.0)		(3.0)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	15	11001-4	S3 区Ⅱ層以下	高台欠損
24	21		須恵器	把手付鉢	(8.7)		(5.0)	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	N7/ 灰白	N5/ 灰	密	良	5	11001-4	N5 区Ⅳ層	波状文
24	22		須恵器	器台	(30.0)		(8.1)	回転ナデ・同心円当て具痕	回転ナデ・タタキ→ナデ	N7/ 灰白	N5/ 灰	密	良	5	11001-4	S3 区Ⅲ-Ⅳ層	
25	23	15	土師器	杯	(18.2)		(3.9)	不明	ヨコナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	60	11001-4	S5 区Ⅵ層	
25	24		須恵器	杯蓋	(14.0)		(4.4)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	20	11001-4	S3 区Ⅵ層	
25	25		須恵器	杯蓋	(13.0)		(3.8)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや密	良	10	11001-4	S4・S5・N4・N5 区Ⅵ層	
25	26		須恵器	杯蓋	(13.0)		(4.3)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	20	11001-4	S3 区Ⅵ層	
25	27		須恵器	杯蓋	(12.0)		(3.9)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	20	11001-4	S3 区Ⅵ層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
25	28		須恵器	杯蓋	(12.8)		(3.4)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/灰	N6/灰	密	良	5	11001-4	S4・N4 区VI層	
25	29		須恵器	杯蓋	(12.0)		(5.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/灰	N8/灰白	やや密	良	25	11001-4	N6・S6 区VI層	ややひずむ
25	30		須恵器	杯蓋	(12.0)		(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	密	良	20	11001-4	S4・N4 区VI層	外面自然釉
25	31		須恵器	杯蓋	(12.0)		(4.1)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/灰	N6/灰	密	良	15	11001-4	S3 区VI層	
25	32		須恵器	杯蓋	(13.8)		(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	密	良	20	11001-4	N6・S6 区VI層	外面自然釉
25	33		須恵器	杯蓋	(14.2)		(4.2)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/灰	N6/灰	密	良	20	11001-4	S4・N4 区VI層	
25	34		須恵器	蓋	(12.8)		(4.3)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/灰	N6/灰	密	良	15	11001-4	S3 区VI層	つまみ欠損
25	35		須恵器	杯身	(11.0)		(4.1)	回転ナデ→底部ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	良	10	11001-4	N6・S6 区VI層	
25	36		須恵器	杯身	(10.4)		(3.7)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/灰	N6/灰	密	良	10	11001-4	S4・N4 区VI層	
25	37		須恵器	杯身	(12.0)		(4.3)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/灰	N5/灰	密	良	5	11001-4	S4・N4 区VI層	
25	38	15	須恵器	杯身	(10.4)		(4.9)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/灰	N7/灰白	やや密	良	55	11001-4	N6・S6 区VI層	底部外面自然釉
25	39		須恵器	高杯		(9.0)	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	N8/灰白	N8/灰白	密	やや不良	(10)	11001-4	S4・N4 区VI層	長方形透かし 4
26	40	15	土師器	甕	(14.8)		(15.9)	口縁部:不明、体部:ユビオサエ	口縁部:不明、体部:工具痕(摩滅)	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	密	やや良	10	11001-4	S5・N5 区VI層	
26	41	15	土師器	有稜高杯	(23.8)		(7.7)	ハケ?	不明	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	30	11001-4	S5・N5 区VI層	杯部底部に円形刺突痕
26	42		土師器	高杯			(2.2)	ハケ(不明瞭)	ハケ	5YR8/4 淡橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや密	良		11001-4	S2 区VI層	杯部底部に円形刺突痕
26	43		土師器	高杯			(2.6)	不明	ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	良		11001-4	N6・S6 区VI層	外反高杯か、杯部底部に円形刺突痕?
26	44		土師器	製塩土器		(3.2)	(2.7)	不明	ユビオサエ	10YR7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	良	(50)	11001-4	N6・S6 区VI層	脚台外面褐変
26	45	15/巻頭4	韓式系土器	甑	19.4	10.4	24.6	口縁部:ヨコナデ、体部:板ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ、把手:ナデ・ケズリ、底部:ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗	良	75 (20)	11001-4	S5・N5 区VI層	底部孔 6 残存、把手端部垂直、体部外面黒斑、胎土分析
27	46		弥生土器	広口壺	(26.0)		(2.1)	不明	ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR6/4 にぶい橙	密	良	10	11001-4	N6・S6 区VI層	口縁部に沈線・竹管円形浮文
27	47		弥生土器	弥生形甕	(14.9)		(6.7)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	やや密	良	20	11001-4	N6・S6 区VI層	
27	48		弥生土器	底部		(3.0)	(1.8)	不明	ユビオサエ	5Y4/1 灰	5YR6/6 橙	やや密	良	(95)	11001-4	N6・S6 区VI層	鉢?
27	49		弥生土器	底部		3.4	(2.2)	工具痕	ユビオサエ	5YR6/6 橙	10YR8/2 灰白	やや密	良	(100)	11001-4	N6・S6 区VI層	甕か鉢?
27	50		弥生土器	甕		4.1	(2.2)	工具痕	タタキ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(100)	11001-4	N6・S6 区VI層	底部外面木の葉文、外面スス
27	51		弥生土器	底部		3.3	(2.8)	ハケ	タタキ	10YR4/1 褐灰	5YR5/6 明赤褐	やや密	良	(75)	11001-4	S5・N5 区VI層	甕か鉢
27	52		弥生土器	底部		4.0	(2.2)	不明	ユビオサエ	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	やや密	良	(100)	11001-4	N6・S6 区VI層	
27	53		弥生土器	底部		4.0	(2.2)	ナデ	ユビオサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	やや密	良	(100)	11001-4	N6・S6 区VI層	
27	54		弥生土器	底部		5.6	(2.5)	不明	不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(95)	11001-4	N6・S6 区VI層	甕?
27	55		弥生土器	底部		5.4	(2.7)	ユビオサエ	ユビオサエ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	やや粗	良	(95)	11001-4	N6・S6 区VI層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
27	56		弥生土器	有稜高杯	(16.8)		(11.8)	杯部:不明、脚部:ケズリ	杯部:不明、脚部:ハケ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	15	11001-4	S4・N4 区Ⅵ層	脚柱部中空、脚柱部中央付近に円形窪み 1
28	57	16	弥生土器	広口壺	(16.6)		(3.5)	ミガキ	ミガキ	7.5YR5/2 灰褐	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	25	11001-4	S6 区Ⅵ層落ち込み 2	口縁部に沈線・竹管円形浮文
28	58	16	弥生土器	広口壺	(17.8)		(3.9)	ミガキ	ミガキ	7.5YR4/3 褐	10YR8/3 浅黄橙	やや密	良	35	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	口縁部に沈線・竹管円形浮文
28	59	15	弥生土器	広口壺	15.6		(5.1)	口縁部:ヨコナデ、頸部:ハケ(摩滅)	口縁部:ヨコナデ、頸部:ハケ(摩滅)	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	90	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	60	16	弥生土器	広口壺	(12.6)		(10.3)	口縁部:ヨコナデ、頸部:ヨコナデ、体部:ユビオサエ・ハケ	口縁部:ヨコナデ、頸部:ミガキ、体部:(ケズリ?→)ミガキ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	やや密	良	35	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	61	15/巻頭4	弥生土器	広口壺	13.4	3.9	20.4	口縁部:ヨコナデ、頸部:ミガキ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、頸部:ミガキ、体部:ミガキ	10YR7/8 にぶい黄橙	7.5YR7/8 黄橙	やや粗	良	80 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	底部内面コゲ、体部下半外面スス
28	62		弥生土器	壺		5.0	(13.6)	板ナデ?	ハケ	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(45)	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	体部中央部～下半外面黒斑、体部下半外面スス
28	63	16	弥生土器	壺		7.0	(13.1)	ハケ(摩滅)→ナデ	ハケ→ミガキ?、底部付近タタキ?	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや密	良	(100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	64	15	弥生土器	壺		(5.1)	(9.1)	板ナデ	ハケ→ミガキ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	密	良	(90)	11001-4	S5・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	65		弥生土器	壺		5.4	(4.5)	ハケ	ミガキ(不明瞭)	5YR7/6 橙	10YR8/2 灰白	やや粗	良	(100)	11001-4	S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	66		弥生土器	壺		5.6	(2.4)	ハケ	ミガキ	10YR4/2 灰黄褐	5YR5/3 にぶい赤褐	やや粗	良	(85)	11001-4	S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	67		弥生土器	壺		(4.4)	(2.8)	不明	ミガキ	2.5Y8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	(45)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	68		弥生土器	壺			(20.1)	ハケ	ミガキ	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良		11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	体部最大径推定 31.8cm
28	69		弥生土器	小形壺?		(3.2)	(3.9)	ナデ	不明	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	密	良	(95)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
28	70	16	弥生土器	小形壺	(6.7)	2.0	9.7	不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ミガキ?	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	10 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	体部下半に焼成前穿孔 1
29	71	17	弥生土器	弥生形甕	(11.6)	4.2	推定 10.9	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ハケ状痕→ナデ、体部:タタキ→一部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	やや密	良	15 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	図上復元
29	72		弥生土器	弥生形甕		4.5	(9.8)	ハケ	体部:タタキ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	図上復元、底部外面スス
29	73	16	弥生土器	弥生形甕	(14.2)		(10.7)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケナデ・ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ→一部ユビオサエ、底部付近ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	やや密	良	5	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	口縁部いびつ、体部外面スス、体部外面赤変

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
29	74	16/巻頭4	弥生土器	弥生形甕	14.4	4.5	14.4	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?(摩滅)	口縁部:ハケ状痕、体部:タタキ→一部縦方向ハケ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	やや密	良	95 (60)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	体部下半～底部内面黒斑
29	75	17	弥生土器	弥生形甕	(13.2)	5.1	17.0	口縁部:不明、体部:ハケ(摩滅)	口縁部:不明、体部:タタキ	5YR7/4にぶい橙	5YR6/6橙	やや粗	良	45 (100)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	ひずみ大、体部上半外面黒斑、体部下半外面スス
29	76	17	弥生土器	弥生形甕	(14.0)		(12.8)	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ→一部縦方向調整	10YR7/4にぶい黄橙	5YR6/6橙	やや粗	良	65	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	体部下半外面黒斑？スス？
29	77	17	弥生土器	弥生形甕	(15.0)		(3.3)	不明	口縁部:タタキ→ヨコナデ、体部:タタキ	7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	やや密	良	15	11001-4	S6区Ⅵ層落ち込み2	
29	78		弥生土器	弥生形甕	(18.0)		(4.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ユビオサエ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ	10YR8/2灰白	7.5YR7/2明褐灰	やや粗	良	30	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	
29	79	17	弥生土器	弥生形甕	(13.8)	3.9	20.0	口縁部:不明、体部:ハケ(摩滅)	口縁部:不明、体部:タタキ→下半縦方向ハケ？	5YR7/8橙	5YR6/8橙	やや粗	良	40 (100)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	口縁部いびつ、口縁部～体部上半外面黒斑、体部下半外面スス
29	80	17	弥生土器	弥生形甕	14.6	5.6	推定24.1	口縁部:不明、体部:板ナデ?ハケ？	口縁部:不明、体部:タタキ→下半縦方向ハケ？	5YR6/8橙	5YR6/8橙	やや粗	やや良	85 (100)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	図上復元、口縁部いびつ、体部下半～底部外面スス
29	81	18	弥生土器	弥生形甕	(18.8)		(14.3)	口縁部:不明、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ	N5/灰	7.5YR7/3にぶい橙	やや粗	良	40	11001-4	S5区Ⅵ層落ち込み2	体部外面スス
29	82		弥生土器	弥生形甕		(4.8)	(2.0)	不明	タタキ	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	やや密	良	(50)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	外面スス？
29	83		弥生土器	弥生形甕		(5.0)	(5.9)	工具痕	タタキ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	やや密	良	(80)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	外面スス
29	84		弥生土器	底部		(5.6)	(4.3)	不明	不明	2.5Y4/1黄灰	10YR7/3にぶい黄橙	粗	良	(50)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	壺？、底部外面黒斑
29	85		弥生土器	底部		(4.0)	(5.1)	不明	不明	5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	(50)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	甕？
29	86		弥生土器	底部		5.0	(2.8)	不明	タタキ	5Y5/1灰	7.5YR7/4にぶい橙	やや密	良	(90)	11001-4	S6区Ⅵ層落ち込み2	外面スス付着?、甕？
29	87		弥生土器	底部		3.8	(3.8)	工具痕	タタキ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや密	良	(90)	11001-4	S6区Ⅵ層落ち込み2	鉢？
29	88		弥生土器	底部		3.9	(2.7)	ナデ？	ハケ？	7.5YR6/8橙	7.5YR7/8黄橙	やや密	やや良	(70)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	甕？
29	89		弥生土器	底部		2.4	(2.0)	工具痕	タタキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	やや粗	良	(100)	11001-4	S6区Ⅵ層落ち込み2	甕か鉢
29	90		弥生土器	底部		4.2	(1.6)	ナデ	(タタキ?)・ユビオサエ	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや粗	良	(60)	11001-4	S6区Ⅵ層落ち込み2	甕？
30	91	18	弥生土器	椀形高杯	(14.9)	(11.2)	推定11.5	杯部:ミガキ、脚部:シボリ目・ナデ	杯部:ミガキ、脚部:ミガキ	2.5YR6/6橙	2.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	10 (15)	11001-4	N6・S6区Ⅵ層落ち込み2	脚柱部中空、円形透かし、脚部内面に穿孔途中痕跡1

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
30	92	18	弥生土器	椀形高杯	17.8		(6.3)	ハケ	ハケ(→ミガキ?)	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	75	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	脚柱部中空
30	93	18	弥生土器	椀形高杯	(18.3)		(9.8)	杯部:ハケ、脚部:不明	杯部:板ナデ、脚部:板ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	やや粗	良	40	11001-4	S5 区Ⅵ層落ち込み 2	脚柱部中空、円盤充填、円形透かし
30	94	18/巻頭 4	弥生土器	椀形高杯	17.8	11.4	12.5	杯部:ハケ、脚部:シボリ目・ハケ	杯部:ハケ、脚部:ハケ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	やや粗	良	50 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	ひずみ大、脚柱部中空、円形透かし 3
30	95	18/巻頭 4	弥生土器	小形鉢	12.0	4.9	5.6	ハケ	不明	5YR6/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	やや粗	やや良	90 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	ひずみ大
30	96	18/巻頭 4	弥生土器	小形鉢	19.6	5.7	8.9	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ・板ナデ	10YR8/2 灰白	5YR7/6 橙	やや粗	良	55 (100)	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層落ち込み 2	
30	97		弥生土器	製塩土器			(3.8)	不明	タタキ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや密	良		11001-4	S6 区Ⅵ層落ち込み 2	黒～灰白変
30	98		弥生土器	底部		4.4	(3.6)	工具痕	タタキ	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(90)	11001-4	S1 区Ⅶ層	甕か鉢
50	112	19	磁器	椀	(13.5)		(4.5)	施釉	施釉	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	密	良	15	09017-2	溝 042 下層	波佐見焼白磁椀
50	113	19	磁器	椀	(9.6)		(5.1)	施釉	施釉	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	密	良	10	09017-2	溝 042 中層	京焼系灰釉椀
50	114	19	磁器	椀	(9.2)		(2.9)	施釉	施釉	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	密	良	10	09017-2	溝 042	波佐見焼染付椀
50	115	19	磁器	椀		3.8	(3.3)	施釉	施釉	10Y7/1 灰白	N8/ 灰白	密	良	(100)	09017-2	溝 042 上層	波佐見焼染付一重網目椀
50	116	19	磁器	椀	(10.0)		(4.7)	施釉	施釉	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	密	良	25	09017-2	溝 042 中層	波佐見焼染付草花文椀
50	117		瓦質土器	羽釜	(26.0)		(4.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	N5/ 灰	N4/ 灰	やや密	良	5 未満	09017-2	溝 042 上層	
50	118		瓦器	椀	(13.6)		(2.5)	不明	ユビオサエ	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	密	やや良	10	09017-2	溝 042 上層	
50	119		瓦器	椀		(5.8)	(1.2)	不明	不明	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	やや密	やや良	(10)	09017-2	溝 042 上層	
50	120		須恵器	擂鉢			(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	5 未満	09017-2	溝 042 中層	
50	121		土師器	竈?	残存長 8.2	残存幅 7.5	(5.1)	ナデ?	不明	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや密	良		09017-2	溝 042 中層	移動式竈?、内外面一部スス
50	122		須恵器	蓋			(2.9)	回転ナデ	不明	N7/ 灰白	7.5Y6/1 灰	密	良		09017-2	溝 042 上層	外面自然釉、宝珠つまみ
50	123		須恵器	蓋	(12.4)		(2.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	5	09017-2	溝 042 上層	つまみ剥離(剥離部径 2.0cm)
50	124		須恵器	蓋	(15.8)		(2.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	やや密	良	5	09017-2	溝 042 下層	
50	125		須恵器	蓋	(18.0)		(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	10	09017-2	溝 042 下層	
50	126		須恵器	杯		(10.0)	(3.1)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ?	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	やや良	(15)	09017-2	溝 042 中層	
50	127		須恵器	皿	(16.0)	(13.0)	2.2	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N7/ 灰白	密	良	5 (15)	09017-2	溝 042 上層	
50	128		須恵器	甕	(16.0)		(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	20	09017-2	溝 042 上-中層	口縁部ひずむ
50	129		須恵器	壺		(11.0)	(1.9)	回転ナデ・ナデ	回転ヘラケズリ、高台:回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	やや密	良	(25)	09017-2	溝 042 上層	
50	130		須恵器	杯身	(12.4)		(3.5)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	15	09017-2	溝 042 上層	
50	131		須恵器	杯身	(12.6)		(4.0)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	N5/ 灰	やや密	良	15	09017-2	溝 042 中層	口縁部ひずむ
50	132		須恵器	高杯			(8.0)	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや密	良		09017-2	溝 042 上層	外面自然釉、長方形透かし 4

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
50	133		弥生土器	広口壺	推定20.6		(3.3)	不明	不明	10YR5/2黄灰	10YR7/6明黄褐	やや粗	良		09017-2	溝042上層	口縁部に沈線・竹管円形浮文
50	134		弥生土器	高杯		(13.2)	(4.9)	不明	裾部：ケズリ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	やや粗	良	(20)	09017-2	溝042上層	脚柱部中実、杯部底部に円形刺突痕状孔、円形透かし4
50	135		弥生土器	甕		4.1	(2.0)	工具痕？	タタキ	5YR7/8橙	10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	溝042中層	体部外面スス
50	136		須恵器	杯蓋	(11.2)		3.5	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	やや密	良	30	09017-2	土坑047	ひずみ大
50	137		須恵器	蓋	(21.0)		(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	密	良	10	09017-2	土坑047	
51	138		土師質土器	羽釜	(25.0)		(6.5)	口縁部：ヨコナデ、体部：ケズリ？	口縁部：ヨコナデ、体部：ケズリ	10YR8/3浅黄橙	7.5YR7/6橙	やや粗	良	15	09017-2	落ち込み051	
51	139		土師器	小皿	(7.6)		(1.5)	不明	不明	7.5Y8/3浅黄橙	7.5Y8/3浅黄橙	やや密	良	5	10001-2	落ち込み002	
51	140	19	瓦器	小皿	7.4		1.6	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N7/灰白	N7/灰白	密	良	70	10001-2	落ち込み002	
51	141	19	瓦器	碗		(3.2)	(0.7)	不明	不明	N5/灰	N5/灰	密	やや良	(20)	10001-2	落ち込み002	
51	142	19	瓦器	碗		(5.0)	(1.1)	不明	不明	N7/灰白	N7/灰白	密	やや良	(20)	10001-2	落ち込み002	
51	143	19	瓦器	椀	(11.8)		(2.3)	ミガキ	ヨコナデ	N3/暗灰	N3/暗灰	密	良	10	09049-1	土坑012・014	
51	144	19	瓦器	碗		4.2	(1.6)	ミガキ	ユビオサエ	N4/灰	N5/灰	密	やや不良	(50)	10078-3	柱穴199	
51	145		弥生土器	甕		4.4	(6.4)	ハケ(摩滅)	タタキ	10YR3/1黒褐	2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良	(100)	09049-1	溝003	底部外面木の葉文、体部外面スス
51	146		弥生土器	甕		3.4	(4.9)	ハケ(摩滅)	タタキ	10YR6/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	やや粗	良	(100)	09049-1	溝002	底部外面木の葉文、内面コゲ、外面スス
51	147		弥生土器	底部		2.8	(3.4)	工具痕	タタキ	10YR8/2灰白	2.5Y8/1灰白	やや密	良	(100)	09049-1	ピット013	甕か鉢
51	148		弥生土器	底部		3.0	(3.55)	ハケ(摩滅)	タタキ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	溝002	甕か鉢
51	149		弥生土器	底部		3.4	(2.1)	ユビオサエ	ユビオサエ	5YR6/8橙	10YR8/4浅黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	土坑005	底部外面木の葉文
51	150		弥生土器	小形蛸壺			(2.7)	ナデ	ユビオサエ	7.5YR3/1黒褐	7.5YR7/6橙	やや密	良	(100)	09049-1	溝002	
51	151		弥生土器	製塩土器		(6.6)	(4.9)	ナデ	タタキ	10YR5/2灰黄褐	10YR6/4にぶい黄褐	やや粗	良	(5)	09049-1	溝003	脚部黒変
52	152	20	瓦質土器	甑？	(27.4)		(10.3)	口縁部：ヨコナデ、体部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：タタキ→ナデ	2.5Y8/2灰白	N5/灰	やや密	不良	15	09049-1	流路001	
52	153		須恵器	壺		(3.1)	(15.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	N7/灰白	N7/灰白	やや粗	良	(30)	09049-1	流路001	
52	154		須恵器	壺		9.0	(8.7)	回転ナデ・当て具痕？	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/灰白	N5/灰	やや密	良	(80)	09049-1	流路001	
52	155		須恵器	壺	(8.7)		(8.6)	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	密	良	30	09049-1	流路001	
52	156		須恵器	杯	(13.8)	8.5	(4.6)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	N5/灰	N4/灰	やや粗	良	10 (100)	09049-1	流路001	
52	157		須恵器	鉢	(8.2)		(4.3)	不明	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	密	良	5	09049-1	流路001	体部外面波状文
52	158	20	須恵器	蓋	(15.6)		(4.9)	回転ナデ	カキメ・回転ナデ	7.5YR5/1褐灰	7.5Y4/1灰	密	良	15	09049-1	流路001	
52	159		須恵器	蓋	(8.4)		4.5	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/灰白	N5/灰	やや密	良	20	09049-1	流路001	ひずみ大、外面自然釉
52	160		須恵器	杯蓋	11.8		3.9	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1灰	N7/灰白	やや粗	良	(70)	09049-1	流路001	
52	161		須恵器	杯蓋	(12.2)		(4.1)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N8/灰白	N8/灰白	密	良	30	09049-1	流路001	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
52	162		須恵器	杯蓋	(15.0)		(4.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	密	良	25	09049-1	流路 001	
52	163		須恵器	杯蓋	(13.0)		(4.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	09049-1	流路 001	
52	164		須恵器	杯蓋	(13.9)		(4.3)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	10	09049-1	流路 001	
52	165		須恵器	杯蓋	(12.7)		3.8	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	やや密	良	10	09049-1	流路 001	
52	166		須恵器	杯身	(10.3)		4.8	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	7.5YR7/3 にぶい黄橙	5Y7/1 灰白	やや密	やや不良	45	10078-2	流路 187	焼成あまい
52	167		須恵器	杯身	(10.2)		4.9	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	密	やや不良	30	09049-1	流路 001	焼成あまい
52	168		須恵器	杯身	11.9		4.8	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N5/ 灰	N6/ 灰	やや密	良	100	09049-1	流路 001	
52	169		須恵器	杯身	(12.2)		(3.4)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	7.5Y6/1 灰	密	良	10	09049-1	流路 001	外面自然釉、受部に釉着片
52	170		須恵器	杯身	(13.8)		(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	20	09049-1	流路 001	
52	171		須恵器	杯身	11.8		3.5	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N4/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	60	09049-1	流路 001	
52	172		須恵器	杯身	(12.0)		推定 3.6	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N5/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	10	09049-1	流路 001	ひずみ大
52	173		須恵器	杯身	(12.7)		(3.2)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	20	09049-1	流路 001	
52	174		須恵器	杯身	(12.0)		3.9	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	09049-1	流路 001	
52	175		須恵器	甕			(10.0)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ・ケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや粗	良	(100)	10078-2	流路 187	円形 1 孔
52	176		須恵器	高杯		(7.8)	(4.1)	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y7/2 灰黄	密	やや不良	(30)	09049-1	流路 001	円形透かし
52	177		須恵器	高杯		(8.9)	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	やや密	良	(30)	09049-1	流路 001	
52	178		須恵器	高杯		(8.6)	(6.2)	杯部 : 回転ナデ・ナデ、脚部 : ナデ・回転ナデ	杯部 : 回転ヘラケズリ、脚部 : 回転ナデ	N4/ 灰	5Y3/1 オリーブ黒	やや密	良	(30)	09049-1	流路 001	脚部外面自然釉
52	179		須恵器	高杯		8.9	(5.45)	杯部 : 回転ナデ、脚部 : ナデ・回転ナデ	杯部 : 回転ヘラケズリ、脚部 : 回転ナデ	N7/ 灰白	N4/ 灰	やや密	良	(75)	09049-1	流路 001	脚部に竹管文 1
52	180		須恵器	甕	(16.4)		(5.0)	口縁部 : ヨコナデ、体部 : ナデ	口縁部 : ヨコナデ、体部 : タタキ？	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	やや不良	25	09049-1	流路 001	
52	181		須恵器	甕	23.7		(6.3)	口縁部 : 回転ナデ、体部 : ナデ	口縁部 : 回転ナデ、体部 : タタキ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	やや良	25	09049-1	流路 001	
52	182		須恵器	甕	(21.4)		(4.4)	不明	口縁部 : ヨコナデ、体部 : タタキ？	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y4/1 黄灰	やや密	やや不良	10	09049-1	流路 001	
52	183		須恵器	甕	(24.2)		(10.0)	口縁部 : 回転ナデ、体部 : 同心円当て具痕	口縁部 : 回転ナデ、体部 : カキメ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	やや密	不良	35	09049-1	流路 001	図上復元
52	184	20	須恵器	甕？			(15.3)	工具ナデ	タタキ→上部カキメ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良		09049-1	流路 001	
53	185		土師器	甕	(21.6)		(7.3)	口縁部 : ハケ、体部 : ハケ	口縁部 : ハケ、体部 : ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	20	09049-1	流路 001	外面黒斑
53	186		土師器	甕	(20.6)		(12.3)	口縁部 : ハケ、体部 : ユビオサエ→ハケ	口縁部 : ヨコナデ、体部 : タタキ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	10	09049-1	流路 001	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
53	187	20	土師器	甕	14.3		17.3	口縁部:ハケ、体部:ユビオサエ→ケズリ	口縁部:ハケ(摩滅)、体部:ハケ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	やや粗	良	65 (100)	09049-1	流路 001	体部外面スス
53	188		土師器	杯?	(10.8)		(2.6)	ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	密	良	15	09049-1	流路 001	
53	189		土師器	高杯		8.4	(6.1)	ケズリ	不明	2.5YR6/6 明赤褐	2.5YR6/6 明赤褐	やや密	やや良	(25)	09049-1	流路 001	杯部底部に円形刺突痕
53	190		土師器	高杯			(6.4)	不明	杯部:ハケ、脚部:不明	2.5YR6/6 橙	5YR4/6 橙	やや密	良		09049-1	流路 001	杯部底部に円形刺突痕
53	191		弥生土器	高杯	(14.0)		(5.1)	不明	不明	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	やや不良	20	09049-1	流路 001	脚柱部中空
53	192		弥生土器	高杯		(13.0)	(10.7)	シボリ目	ミガキ?	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	(10)	09049-1	流路 001	脚柱部中空
53	193		弥生土器	脚台?			(4.5)	シボリ目・ハケ	ハケ	2.5Y7/3 浅黄	5YR7/6 橙	やや密	良		09049-1	流路 001	
53	194		弥生土器	製塩土器			(5.3)	不明	体部:タタキ、脚部:不明	10YR4/1 褐灰	2.5Y7/2 灰黄	やや粗	やや良		09049-1	流路 001	
53	195	21	弥生土器	広口壺	15.0		(7.0)	口縁部:ヨコナデ?、頸部:ハケ	口縁部:ヨコナデ?、頸部:ハケ(摩滅)	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	70	09049-1	流路 001	
53	196		弥生土器	器台		(12.6)	(7.9)	ケズリ	ハケ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(5)	09049-1	流路 001	円形透かし
53	197		弥生土器	底部		3.9	(3.1)	不明	タタキ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001	甕か鉢
53	198		弥生土器	底部		(2.4)	(1.8)	不明	不明	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/3 淡黄	やや密	やや良	(50)	09049-1	流路 001	鉢?
53	199		弥生土器	甕		5.8	(3.2)	不明	タタキ	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	粗	良	(90)	09049-1	流路 001	外面スス?
54	200		須恵器	杯蓋	(12.7)		(4.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N4/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	5	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	201		弥生土器	広口壺	(15.4)		(1.7)	不明	ミガキ?	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	やや密	良	5	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	口縁部に沈線・竹管円形浮文・刻目
54	202		弥生土器	広口壺	(16.0)		(4.9)	ミガキ?	ミガキ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	15	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	口縁部に沈線・円形浮文剥離痕
54	203		弥生土器	広口壺	(13.4)		(4.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	やや密	良	25	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	204		弥生土器	広口壺	(15.0)		(6.45)	不明	不明	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密	やや良	5	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	図上復元
54	205	20	弥生土器	広口壺	13.5		(17.3)	口縁部:不明、体部:ハケ?・ユビオサエ	口縁部:不明、体部:ハケ?	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良	75	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	206		弥生土器	長頸壺		(6.6)	(24.5)	不明	頸部:不明、体部:ハケ(摩滅)	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	(10)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	図上復元
54	207		弥生土器	長頸壺			(14.0)	頸部:ナデ・ユビオサエ、体部:シボリ目→ユビオサエ	頸部:ハケ(摩滅)、体部:ハケ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	208		弥生土器	壺		5.5	(3.6)	工具痕	不明	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	209		弥生土器	壺		6.6	(5.3)	ユビオサエ	不明	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	210	21	弥生土器	壺		6.2	(7.9)	ナデ?	不明、底部:ユビオサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
54	211		弥生土器	甕	(19.4)		(3.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/4 褐	やや密	良	5	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	生駒西麓産？
54	212		弥生土器	弥生形甕	(17.0)		(4.5)	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケ（摩滅）	口縁部：ヨコナデ、体部：タタキ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	15	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	213		弥生土器	弥生形甕	(19.0)		(6.7)	口縁部：不明、体部：ユビオサエ	口縁部：不明、体部：タタキ	2.5Y7/1 灰白	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	20	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	214		弥生土器	弥生形甕	(20.2)		(7.5)	口縁部：ヨコナデ？、体部：不明	口縁部：ヨコナデ？、体部：タタキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	やや粗	良	15	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	215		弥生土器	弥生形甕		7.0	(6.0)	ユビオサエ	タタキ	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	底部外面スス
54	216		弥生土器	弥生形甕		5.0	(2.8)	ハケ	タタキ	10YR3/1 黒褐	10YR5/4 にぶい褐	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	生駒西麓産？
54	217		弥生土器	弥生形甕		5.4	(3.2)	不明	タタキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	生駒西麓産？
54	218		弥生土器	甕		6.8	(4.4)	ハケ	不明	10YR6/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	やや粗	良	(40)	10078-2	流路 187 黒褐色粘シルト層	外面スス
54	219		弥生土器	弥生形甕		3.7	(3.9)	工具痕	タタキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	内面コゲ？
54	220		弥生土器	弥生形甕		3.5	(4.6)	不明	タタキ	7.5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	外面黒斑
54	221		弥生土器	弥生形甕		6.1	(3.6)	工具痕	タタキ	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(90)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
54	222		弥生土器	底部		2.7	(2.4)	不明	体部：不明、底部：ナデ	2.5YR7/6 橙	2.5Y8/2 灰白	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	甕か鉢、外面黒斑
54	223		弥生土器	底部		3.2	(3.1)	工具痕	タタキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	甕か鉢、底部外面に木の葉文
54	224		弥生土器	底部		3.2	(3.7)	工具痕	タタキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	壺または鉢？
54	225		弥生土器	底部		4.8	(3.4)	不明	不明	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	壺？
54	226		弥生土器	底部		6.5	(3.7)	不明	不明	5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	甕か鉢？
55	227		弥生土器	高杯	(23.8)		(3.7)	不明	不明	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/3 浅黄	やや密	良	5	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	外面黒斑
55	228		弥生土器	有稜高杯	(22.8)		(5.1)	不明	口縁部：ヨコナデ、杯部：不明	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	20	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	
55	229		弥生土器	高杯			(6.2)	シボリ目	ミガキ？	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部中空、円形透かし
55	230		弥生土器	高杯			(5.5)	杯部：不明、脚部：シボリ目	不明	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部中空、円形透かし 3
55	231		弥生土器	高杯			(6.0)	不明	ハケ（摩滅）	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	やや密	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部半中実

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
55	232		弥生土器	高杯		(7.7)	(10.1)	不明	不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良	(10)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部中空、円形透かし 4
55	233		弥生土器	高杯			(7.8)	工具痕	ミガキ(摩滅)	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	密	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部中実、円形透かし
55	234		弥生土器	高杯			(7.8)	ユビオサエ	不明	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良		09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	脚柱部中空
55	235		弥生土器	小形鉢		3.8	(3.4)	不明	不明	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	粗	やや良	10 (100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	図上復元
55	236		弥生土器	有孔鉢			(4.1)	ハケ？	タタキ	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	孔部石でふさがる
55	237		弥生土器	有孔鉢			(4.1)	工具痕	タタキ	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	外面黒斑
55	238		弥生土器	脚台		7.7	(4.5)	不明	不明	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	裾部に沈線
55	239	21	弥生土器	大形器台	(18.0)	(16.5)	15.6	口縁部:不明、体部:ユビオサエ、裾部:ヨコナデ	口縁部:不明、体部:ミガキ、裾部:ヨコナデ→ミガキ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	50 (100)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	図上復元、孔 3 × 2 段
55	240		弥生土器	大形器台		13.1	(12.4)	不明	不明	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	やや粗	良	(35)	09049-1	流路 001 黒褐色粘シルト層	裾部ひずむ
56	241		須恵器	杯蓋	(12.1)		(3.8)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	密	良	20	09049-1	流路 001 黄褐色粗砂層	
56	242		須恵器	杯蓋	(12.9)		4.5	回転ナデ→一部ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	30	09049-1	流路 001 黄褐色粗砂層	
56	243		土師器	高杯		(11.4)	(8.4)	杯部:不明、脚部:ケズリ	杯部:ハケ、脚部:ケズリ？	5YR5/6 明赤褐	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(10)	09049-1	流路 001 黄褐色粗砂層	杯部底部に円形刺突痕 2
56	244		土師器	高杯		(8.7)	(7.3)	杯部:不明、脚部:シボリ目・ケズリ・ナデ	杯部:ハケ、脚部:不明	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	(10)	10078-2	流路 187 黄褐色粗砂層	
56	245		弥生土器	底部		3.6	(1.9)	不明	タタキ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黄褐色粗砂層	甕？
56	246		弥生土器	底部		5.9	(3.8)	不明	不明	2.5Y4/2 暗灰黄	7.5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黄褐色粗砂層	甕？、内面に黒色物付着
57	247	21	弥生土器	弥生形甕	(14.4)		(12.9)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ→一部縦方向タタキ状痕跡	5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	やや密	良	20	09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	口縁部ややいびつ、体部下半外面スス
57	248		弥生土器	弥生形甕		4.6	(4.6)	工具痕	タタキ	5Y2/1 黒	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	
57	249		弥生土器	底部		5.6	(5.0)	ハケ(摩滅)	ケズリ→ハケ・ユビオサエ	N3/ 暗灰	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	甕か壺？
57	250		弥生土器	底部		4.3	(2.3)	不明	タタキ？	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(100)	09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
57	251		弥生土器	高杯			(5.7)	不明	ミガキ	5YR7/8 橙	7.5YR6/6 橙	やや粗	良		09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	脚柱部中実、円形透かし
57	252		弥生土器	高杯			(5.3)	不明	不明	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良		09049-1	流路 001 黄褐色シルト層	脚柱部中空、円形透かし
58	253		瓦器	小皿	(8.0)		1.1	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	40	11001-6	流路 001	
58	254		瓦器	椀		(3.9)	(9.5)	不明	ユビオサエ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	(25)	11001-6	流路 001	
58	255		瓦器	椀	(13.9)		(4.2)	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	5	11001-6	流路 001	
58	256		須恵器	杯		(10.0)	(2.3)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ(底部中央無調整)	N8/ 灰白	N8/ 灰白	密	良	(30)	11001-6	流路 001	
58	257		須恵器	杯		(10.2)	(2.0)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	(30)	11001-6	流路 001	
58	258	20	須恵器	皿	(24.4)		(2.2)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	25	11001-6	流路 001	
58	259		須恵器	壺			(9.2)	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良		11001-6	流路 001	
58	260		須恵器	平瓶?			(5.9)	回転ナデ・ユビオサエ	回転ナデ・タタキ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良		11001-6	流路 001	
58	261		須恵器	甕?			(8.3)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良		11001-6	流路 001	体部に沈線・櫛描列点文
58	262	21	弥生土器	長頸壺	(11.8)	5.0	(20.6)	口縁部:不明、体部:ユビオサエ・工具痕	口縁部:不明、体部:ハケ?	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	やや粗	良	10 (100)	11001-6	流路 001 黒褐色粘シルト層	図上復元
58	263		弥生土器	甕		4.4	(6.0)	板ナデ・ユビオサエ	タタキ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	(50)	11001-6	流路 001 黒褐色粘シルト層	
58	264		弥生土器	甕		3.7	(3.8)	ユビオサエ	タタキ→ユビオサエ	5YR6/6 橙	7.5YR5/2 灰褐	やや密	良	(100)	11001-6	流路 001	外面スス
58	265		弥生土器	底部		3.0	(2.9)	不明	タタキ	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(100)	11001-6	流路 001	甕か鉢
58	266		弥生土器	底部		3.6	(3.7)	不明	ミガキ?	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	(100)	11001-6	流路 001	壺?
58	267		弥生土器	底部		2.9	(2.3)	不明	不明	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(100)	11001-6	流路 001	
58	268		弥生土器	製塩土器		推定 6.2	(6.0)	体部:ナデ、脚部:工具痕・ナデ	脚部タタキ・ユビオサエ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR7/2 明褐灰	やや密	良		11001-6	流路 001	外面一部橙～黒変
59	269		須恵器	鉢	(16.8)		(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	密	やや不良	15	10078-3	流路 001	
59	270		須恵器	杯身	(11.0)		(4.0)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N5/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	25	10001-2	流路 003	
59	271		須恵器	杯身	(14.0)		(3.5)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	10	10078-3	流路 001	
59	272	20	須恵器	甑	(33.6)		(7.4)	口縁部:回転ナデ、体部:ナデ	口縁部:回転ナデ、体部:タタキ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	10	10078-3	流路 001	
59	273		土師器	布留形甕	(20.8)		(10.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ(摩滅)	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	25	10001-2	流路 003	
59	274		土師器	小型丸底壺	(8.4)		(6.1)	口縁部:不明、体部:ユビオサエ	不明	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	やや良	25	10001-2	流路 003	
59	275	20	土師器	外反高杯	(18.1)		(11.4)	不明	不明	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	50	10078-3	流路 001	
59	276		土師器	高杯		(8.3)	(4.8)	シボリ目	ケズリ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	(30)	10001-2	流路 003	
59	277		土師器	高杯		(8.8)	(4.9)	シボリ目?	不明	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	やや密	良	(30)	10001-2	流路 003	杯部底部に円形刺突痕

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
59	278		弥生土器	製塩土器		6.0	(4.7)	ユビオサエ	ナデ・ユビオサエ	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(70)	10078-3	流路 001	
60	279	21	土師器	布留形甕	(17.8)		(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	2.5YR6/6 橙	やや密	良	10	10001-2	柱穴 004	
60	280	21	土師器	布留形甕	(17.0)		(4.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	5	10001-2	柱穴 004	
60	281		弥生土器	甕	(22.0)		(2.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	5	10001-2	柱穴 020	
60	282		弥生土器	甕底部		(4.7)	(1.4)	工具痕	タタキ・ユビオサエ	10YR5/3 にぶい黄褐	5YR5/6 明赤褐(変色部)	やや密	良	(50)	09017-2	ピット 062	外面・断面赤変
60	283	21	弥生土器	有稜高杯	(19.0)		(5.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ミガキ?	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	やや密	良	5	09017-2	ピット 062	
61	284		土師器	焙烙	(29.6)		(4.5)	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	100	10001-2	撹乱	外面スス、把手2(孔各1)
61	285		土師器	焙烙	(28.9)		(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ?	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	やや密	良	10	10001-2	撹乱	外面スス、把手1残存(孔1)
61	286		土師器	壺蓋	(17.8)	(18.4)	2.5	ヨコナデ	ヨコナデ・タタキ?	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	やや密	良	15 (25)	10001-2	撹乱	
61	287		須恵器	杯蓋	15.4		(4.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	やや粗	良	25	09017-2	撹乱	
61	288		須恵器	杯身	10.0		4.8	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	85	10001-2	撹乱	
61	289		須恵器	高杯		(8.0)	(4.5)	杯部:回転ナデ、脚部:回転ナデ	杯部:回転ナデ、脚部:カキメ・回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	密	良	(45)	10001-2	撹乱	長方形透かし3
61	290		須恵器	器台			(10.3)	タタキ→ヘラ切り?・回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良		10001-2	撹乱	脚部外面波状文、上段長方形透かし・下段三角形透かし
61	291		土師器	外反高杯	(18.0)		(9.9)	不明	不明	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	やや粗	良	5	10001-2	撹乱	杯部底部に円形刺突痕1(貫通)
61	292		土師器	製塩土器		5.6	(2.8)	ユビオサエ	不明	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	(75)	10001-2	撹乱	
61	293		瓦器	小皿	(8.2)		1.6	不明	不明	2.5Y8/3 淡黄	N7/ 灰白	密	やや良	5	10001-2	E1-Ⅲ区Ⅲ・Ⅴ層	
61	294		瓦器	小皿	(9.0)		(1.9)	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	5	10001-2	W1-Ⅰ区Ⅲ・Ⅴ層	
61	295		須恵器	杯蓋	(12.9)		4.4	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N4/ 灰	N7/ 灰白	密	良	5	10001-2	E1-Ⅲ区Ⅲ・Ⅴ層	
61	296		須恵器	杯蓋	(12.1)		(4.4)	ナデ・回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	密	良	20	10001-2	E1-Ⅲ区Ⅲ・Ⅴ層	外面自然釉
61	297		須恵器	杯身	9.9		3.4	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	80	09049-1	E3-Ⅰ区Ⅲ層	
61	298		須恵器	杯	(10.8)		(3.3)	口縁部:回転ナデ、体部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ、体部:回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	25	09049-1	E2-Ⅱ・Ⅳ区Ⅱ-Ⅴ層	
61	299		須恵器	杯身	(10.2)		(4.4)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	15	10001-2	E1-Ⅲ区Ⅲ・Ⅴ層	
61	300		弥生土器	底部		5.1	5.5	不明	不明	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	10078-2	E1 東区Ⅲ層以下	底部付近に1孔
62	301	22	磁器	椀	(7.9)		(3.3)	施釉	施釉・染付	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	密	良	35	09017-2	E3-Ⅱ区Ⅳ層	波佐見焼染付仏飯器
62	302		土師器	小椀	7.3		4.6	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	80	09049-1	W1-Ⅰ区Ⅴ・Ⅵ B 層	口縁部スス?
62	303		土師質土器	羽釜	(29.2)		(5.0)	ナデ?	ナデ?	10Y8/3 浅黄橙	10Y8/3 浅黄橙	やや粗	良	10	09017-2	E1-Ⅰ区Ⅴ層	
62	304		瓦器	椀	(13.8)	(3.2)	3.7	ミガキ	ユビオサエ	N4/ 灰	N5/ 灰	密	良	10 (20)	09017-2	E1-Ⅱ区Ⅴ層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
62	305		瓦器	椀	(15.2)		(2.2)	ミガキ	ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	20	09017-2	W1- Ⅰ区Ⅴ層	口縁部ややひずむ
62	306		瓦器	椀	(11.4)		2.6	ミガキ	ユビオサエ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	良	10	09017-2	E1- Ⅰ区Ⅴ層	
62	307		瓦器	椀		2.9	(0.8)	ミガキ(摩滅)	ユビオサエ	N5/ 灰	N4/ 灰	密	良	(50)	09017-2	W2- Ⅱ区Ⅴ層	
62	308		瓦器	椀	(14.8)	(3.4)	3.1	ミガキ	ナデ、ユビオサエ	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	密	良	25 (25)	09017-2	E1- Ⅱ区Ⅴ層	
62	309		土師器	大皿	(12.6)	(9.7)	2.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ユビオサエ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	密	良	60	09049-1	W1- Ⅰ区Ⅴ・Ⅵ B 層	口縁部 2 段ナデ
62	310		土師器	杯	(11.8)		3.1	ヨコナデ	ヨコナデ・ユビオサエ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	10	09049-1	W3- Ⅲ区Ⅴ層	
62	311		須恵器	杯	(11.8)		(4.2)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや粗	良	15 (15)	09049-1	W3- Ⅲ区Ⅴ層	
62	312		須恵器	杯蓋	(12.8)		(3.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	5	09049-1	W3- Ⅲ区Ⅴ層	
62	313		須恵器	杯蓋	(12.4)		4.2	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	10	10078-3	E2 東区Ⅴ層	
62	314		須恵器	杯身	(11.0)		3.2	回転ナデ→一部ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや密	良	25	09017-2	E2- Ⅱ区Ⅴ層	
62	315		須恵器	横瓶？	(11.4)		(5.7)	口縁部:回転ナデ、体部:当て具痕	口縁部:回転ナデ、体部:タタキ→カキメ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	40	09049-1	W2- Ⅳ区Ⅴ層	
62	316		須恵器	甕	(24.0)		(5.4)	口縁部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	やや密	良	25	09049-1	E2- Ⅲ・W2- Ⅳ区Ⅴ層	
62	317		須恵器	甕	(21.0)		(5.5)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N5/ 灰	密	良	10	09017-2	E2- Ⅳ・E3- Ⅱ区Ⅳ - Ⅴ・Ⅵ B 層	
62	318		須恵器	壺	(17.0)		(8.7)	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y3/1 オリーブ黒	密	良	25	10078-3	E2 東区Ⅴ層	頸部外面に波状文、内外面自然釉
62	319		須恵器	壺底部		(12.0)	(5.0)	回転ナデ→底部ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	5Y7/1 灰白	密	良	(20)	09017-2	E2- Ⅱ区Ⅴ層	
62	320		須恵器	脚部		(10.4)	(3.9)	杯部:回転ナデ、脚部:回転ナデ	杯部:回転ナデ、脚部:回転ナデ→カキメ	N7/ 灰白	N6/ 灰	やや粗	良	(75)	09049-1	W3- Ⅲ区Ⅴ層	ひずみ大
62	321		須恵器	高杯	(10.8)	8.6	9.6	杯部:回転ナデ→底部ナデ、脚部:ナデ・回転ナデ	杯部:回転ナデ・回転ヘラケズリ、脚部:回転ナデ	5Y7/1 灰白	2.5Y7/3 浅黄	やや密	やや不良	20 (70)	09017-2	W2- Ⅳ区Ⅴ層	円形透かし 3
62	322		須恵器	高杯		(9.2)	(3.7)	回転ナデ	カキメ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	密	良	(35)	10078-3	E1 東区Ⅴ層	長方形透かし
62	323		土師器	布留形甕	(17.6)		(7.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:工具痕？、指頭圧痕→ケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/3 にぶい黄橙	密	良	10	09017-2	W3- Ⅱ区Ⅳ層	口縁～体部外面スス
62	324		土師器	甕	13.0		(7.9)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ？	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	30	09017-2	W3- Ⅱ区Ⅳ層	
62	325		土師器	小形丸底壺			7.6	不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	やや密	良		09049-1	E2- Ⅲ区Ⅴ層	
62	326		弥生土器	椀形高杯		9.4	(5.3)	杯部:不明、脚部:ケズリ？	杯部:不明、脚部:ミガキ	2.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(80)	09017-2	W3- Ⅱ区Ⅳ - Ⅴ・Ⅵ B 層	脚柱部中実

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
62	327	22	弥生土器	口縁部			(4.0)	ミガキ(摩滅)	不明	10YR6/3にぶい黄橙	10YR8/2灰白	やや粗	良		09017-2	E3-Ⅰ区Ⅴ層	口縁部に波状文・竹管円形浮文・刻目、複合口縁壺か淡路型器台
62	328		弥生土器	弥生形甕	(17.8)		(6.5)	口縁部:ヨコナデ?、体部:工具痕?、指頭圧痕、ハケ?(不明瞭)	口縁部:ヨコナデ?、体部:タタキ	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	やや粗	良	10	09017-2	W3-Ⅳ区Ⅴ層	
62	329		弥生土器	底部		2.9	(3.1)	不明	タタキ	5YR7/6橙	2.5Y6/2灰黄	やや粗	良	(100)	09017-2	E3-Ⅰ区Ⅴ・ⅥB層	底部1孔、有孔鉢か甕
62	330		弥生土器	底部		3.5	(5.5)	ハケ	タタキ	10YR8/4浅黄橙	5YR5/6明赤褐	やや密	良	(100)	09049-1	E1-Ⅳ区Ⅴ・ⅥB層	甕か鉢
62	331		弥生土器	弥生形甕		4.4	(9.8)	工具痕(摩滅)	タタキ→一部ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W3-Ⅱ区Ⅴ層	
63	332	22	須恵器	杯蓋	(12.9)		4.3	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	5Y7/1灰白	N5/灰	やや粗	良	40	09017-2	E3-Ⅳ区ⅥA層	
63	333		土師器	鉢	(15.3)		(9.6)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	やや密	良	25	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	図上復元
63	334	22	弥生土器	細頸壺			(16.3)	体部:ユビオサエ・ナデ	頸部:ミガキ?	2.5Y7/3浅黄	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	良		09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	図上復元
63	335	22	弥生土器	弥生形甕	(18.0)		(12.3)	口縁部:ユビオサエ→ヨコナデ、体部:上半ハケ?→ユビオサエ	口縁部:ユビオサエ→ヨコナデ、体部:タタキ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	やや粗	良	35	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	口縁部いびつ、体部中央部外面スス
63	336		弥生土器	弥生形甕		3.6	(4.5)	ハケ→ユビオサエ	タタキ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W3-Ⅲ区ⅥA層	
63	337		弥生土器	弥生形甕		4.4	(4.5)	ハケ・工具痕	タタキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	外面スス
63	338		弥生土器	弥生形甕		5.6	(6.3)	ナデ?	タタキ?、ユビオサエ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/2灰褐	やや粗	良	(100)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	内面コゲ
63	339		弥生土器	弥生形甕		4.0	(4.9)	ナデ	タタキ	10YR8/3浅黄橙	10Y4/1褐灰	やや粗	良	(90)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	外面スス
63	340		弥生土器	底部		(4.1)	(3.6)	工具痕	タタキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	やや粗	良	(90)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	鉢?
63	341		弥生土器	底部		(7.1)	(3.4)	不明	タタキ	10YR7/6明黄褐	10YR7/6明黄褐	やや粗	良	(20)	09017-2	E3区ⅥA層	体部～底部外面黒斑、甕か鉢
63	342		弥生土器	底部		6.5	(2.3)	ユビオサエ	ハケ	10YR8/2灰白	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	
63	343		弥生土器	底部		4.7	(6.7)	ハケ?・ユビオサエ	タタキ→縦方向ケズリ?	2.5Y7/2灰黄	10YR5/2灰黄褐	やや密	良	(100)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	
63	344	22	弥生土器	有稜高杯	(28.0)		(12.0)	杯部:ヨコナデ、ミガキ、脚部:ケズリ→ナデ	杯部:ヨコナデ・ミガキ、脚部:ミガキ	7.5YR6/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	良	30	09017-2	W3-Ⅳ区ⅥA層	脚柱部中空、口縁部ひずむ、杯部外面黒斑
63	345		弥生土器	高杯			(5.4)	シボリ目	ミガキ(摩滅)	2.5YR6/6橙	5YR6/6橙	やや粗	良		09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	脚柱部中空、円形透かし
63	346		弥生土器	大形鉢	(32.3)		(5.9)	ナデ?	ナデ?	10YR6/6明黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	35	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	
63	347	22	弥生土器	大形器台	(21.7)	(19.4)	17.1	口縁部・裾部:ナデ?、体部:ユビナデ	口縁部・裾部:ナデ、体部:ハケ	10YR7/4にぶい黄橙	5YR5/6明赤褐	やや粗	良	40 (35)	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	円形透かし3段
63	348	22	弥生土器	手焙			(11.6)	ナデ?	ナデ?	10YR6/2灰黄褐	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	30	09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	口縁端部に刻目文、体部に突帯
63	349	24	弥生土器	手焙			(8.0)	ナデ	ハケ(磨滅)・ヨコナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	やや密	良		09017-2	W3-Ⅱ区ⅥA層	覆い部下端に刻目のある突帯
64	350	23	土師器	杯	12.7		3.3	口縁部:ヨコナデ?	口縁部:ヨコナデ、底部:ユビオサエ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	やや粗	良	80 (100)	09017-2	W1-Ⅳ区ⅥB層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
64	351		須恵器	蓋	(16.8)		(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	10	09017-2	E2- Ⅳ区 Ⅵ B 層	
64	352	23	須恵器	蓋	14.8		4.8	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	やや粗	良	80	09017-2	E3- Ⅲ区 Ⅵ B 層	ひずみ大
64	353		須恵器	杯蓋			(3.8)	回転ナデ→ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	やや密	良		09017-2	E3- Ⅳ区 Ⅵ B 層	
64	354	23	須恵器	杯蓋	14.3		4.3	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや粗	良	60	09017-2	E3- Ⅲ区 Ⅵ B 層	
64	355		須恵器	杯身	(12.4)		(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	やや密	良	15	09017-2	E1- Ⅲ区 Ⅵ B 層	
64	356		須恵器	杯身	(12.0)		(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	10	09017-2	E2- Ⅲ区 Ⅵ B 層	
64	357	23	須恵器	高杯	9.8	9.2	8.6	杯部 : 回転ナデ、脚部 : 回転ナデ	杯部 : 回転ナデ・回転ヘラケズリ、脚部 : 回転ナデ→カキメ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	95 (75)	09017-2	W1- Ⅳ区 Ⅵ B 層	円形透かし 3
64	358		土師器	小型丸底壺	(10.0)		(4.8)	指頭圧痕	ナデ？	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	10	09017-2	E1- Ⅳ区 Ⅵ B 層	
64	359		土師器	高杯			(7.2)	杯部 : 不明、脚部 : シボリ目・ユビオサエ	杯部 : ハケ、脚部 : ハケ？	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	粗	良		09017-2	W2- Ⅲ区 Ⅵ B 層	杯部底部に円形刺突痕
65	360	23	弥生土器	長頸壺	11.4	5.0	(22.4)	口縁部 : ナデ、体部 : ナデ？	口縁部 : ナデ、底部付近 : タタキ	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	30 (100)	09017-2	E1- Ⅲ・Ⅳ区・W1- Ⅲ区 Ⅵ B 層	外面頸部～体部上半黒斑
65	361		弥生土器	長頸壺			(9.3)	頸部 : ハケ・ユビオサエ、体部 : ユビオサエ	頸部 : ハケ、体部 : ハケ	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良		09017-2	E1- Ⅳ・E2- Ⅰ・Ⅱ区Ⅵ B- Ⅵ C 層	
65	362		弥生土器	長頸壺			(13.3)	頸部 : ナデ、肩部 : シボリ痕→ユビオサエ	頸部～肩部 : ハケ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良		09017-2	E2-Ⅰ区Ⅵ B- Ⅵ C 層	
65	363		弥生土器	広口壺	(17.2)		(5.9)	不明	ヨコナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	30	09017-2	W2- Ⅲ区 Ⅵ B 層	口縁端部に刻目
65	364		弥生土器	広口壺	(18.1)		(5.6)	不明	不明	5YR7/6 橙	5YR6/8 橙	やや粗	良	25	09017-2	E3- Ⅰ区 Ⅵ B 層	口縁部に沈線・竹管円形浮文
65	365	23	弥生土器	広口壺	(15.4)		(4.7)	ナデ	ナデ？	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	70	09017-2	E2- Ⅲ区 Ⅵ B 層	口縁部に竹管円形浮文
65	366		弥生土器	広口壺	(25.0)		(2.5)	ナデ？	ナデ？	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	やや粗	良	25	09017-2	E2- Ⅰ・Ⅲ区Ⅵ B- Ⅵ C 層	口縁部に竹管円形浮文、生駒西麓産
65	367		弥生土器	複合口縁壺	(19.7)		(3.8)	ナデ？	ナデ？	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	15	09017-2	W1- Ⅲ区 Ⅵ B 層	口縁部に竹管円形浮文
65	368		弥生土器	壺			(5.7)	不明	不明	2.5Y6/1 黄灰	5YR6/6 橙	やや粗	良		09017-2	W1- Ⅲ・Ⅳ区Ⅵ B 層	肩部に刺突文
65	369		弥生土器	壺		2.0	(2.5)	ナデ？	不明	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2- Ⅲ区 Ⅵ B 層	
65	370		弥生土器	壺		3.1	(4.1)	工具痕	不明	10YR7/8 黄橙	10YR7/6 明黄褐	やや粗	良	(100)	09017-2	E3- Ⅱ区 Ⅵ B 層	体部～底部外面黒斑
65	371		弥生土器	壺		(7.7)	(6.1)	ハケ→ナデ	ミガキ	10YR6/2 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密	良	(5 未満)	09017-2	W1- Ⅱ区 Ⅵ B 層	
65	372		弥生土器	壺		4.4	(6.3)	ハケ	ケズリ→ナデ・ミガキ？	5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	(80)	09017-2	E1- Ⅳ区 Ⅵ B 層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
65	373		弥生土器	壺底部		(5.7)	(10.5)	ハケ	ハケ・ミガキ	2.5Y5/1 黄灰	10YR7/3 にぶい黄橙	粗	良	(45)	09017-2	E2-Ⅲ区 ⅥB・Ⅷ層	外面黒斑？
66	374		弥生土器	甕	(15.0)		(3.8)	口縁部：ヨコナデ、体部：指頭圧痕？	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	やや粗	良	30	09017-2	W1-Ⅰ区 ⅥB層	
66	375		弥生土器	甕	(17.3)		(5.1)	口縁部：ヨコナデ？、体部：不明	不明	5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	粗	やや良	15	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB層	
66	376		弥生土器	甕	(18.0)		(4.7)	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ？	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密	良	5	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB層	生駒西麓産？
66	377		弥生土器	弥生形甕	(15.8)		(12.2)	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケ？→板ナデ？	口縁部：ヨコナデ、体部：タタキ→一部ナデ？	5YR6/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	やや密	良	30	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB層	図上復元、口縁部ややいびつ、体部上半外面スス
66	378	23	弥生土器	弥生形甕	(17.0)		(18.9)	口縁部：ナデ、体部：ハケ(磨滅)	口縁部：ナデ、体部：タタキ→下半縦方向ハケ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	15	09017-2	E3-Ⅰ区 ⅥB層	口縁部いびつ、体部下半外面スス
66	379	23	弥生土器	弥生形甕	(19.0)		(10.5)	口縁部：不明、体部：ケズリ？	口縁部：不明、体部：タタキ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや粗	やや良	65	09017-2	E2-Ⅰ区 ⅥB層	
66	380		弥生土器	弥生形甕	(23.0)		(6.8)	口縁部：ヨコナデ？、体部：ハケまたはナデ	口縁部：ヨコナデ？、体部：タタキ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	5	09017-2	E2-Ⅳ区 ⅥB層	
66	381	24	弥生土器	甕	(26.0)		(6.8)	口縁部：ハケ(磨滅)、体部：ユビオサエ	口縁部：ユビオサエ、体部：ユビオサエ	2.5Y3/1 黒褐	5Y3/1 オリーブ黒	やや粗	良	15	09017-2	E2-Ⅰ区 ⅥB-ⅥC層	口縁部いびつ
66	382	24	弥生土器	弥生形甕	(17.4)		推定27.0	口縁部：ナデ？、体部：ハケ？	口縁部：ナデ？・頸部ユビオサエ？、体部：タタキ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや粗	良	25 (95)	09017-2	W1-Ⅰ区 ⅥB層	図上復元、口縁部いびつ、体部内面コゲ、体部外面スス
66	383		弥生土器	弥生形甕	(24.0)		(7.4)	口縁部：ヨコナデ、体部：工具痕	口縁部：ヨコナデ、体部：タタキ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	やや粗	良	15	09017-2	E2-Ⅳ区 ⅥB層	口縁部ややいびつ、体部上半外面黒斑
66	384		弥生土器	甕	(22.0)		(6.1)	口縁部：ヨコナデ？、体部：指頭圧痕？	口縁部：ヨコナデ、体部：不明	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや密	やや良	15	09017-2	E3-Ⅳ区 ⅥB層	
66	385		弥生土器	甕	(18.0)		(7.5)	口縁部：不明、体部：ユビオサエ	不明	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	粗	良	20	09017-2	E2-Ⅲ区 ⅥB-ⅥC層	
66	386		弥生土器	甕		3.8	(2.0)	工具痕	タタキ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W1-Ⅲ区 ⅥB層	外面スス
66	387		弥生土器	甕		4.1	(2.5)	工具痕	タタキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W1-Ⅰ区 ⅥB層	内面コゲ
66	388		弥生土器	甕		3.8	(3.4)	工具痕	タタキ→ナデ？	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/6 明黄褐	やや密	良	(100)	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB層	外面赤変
66	389		弥生土器	甕		3.8	(3.8)	不明	タタキ	10YR8/2 灰白	5YR7/8 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E3-Ⅱ区 ⅥB層	外面スス
66	390		弥生土器	甕		5.7	(6.0)	工具痕？	タタキ→一部ナデ？	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	(90)	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB層	外面スス
66	391		弥生土器	甕		4.7	(5.3)	工具痕？	タタキ→ナデ？	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅰ区 ⅥB-ⅥC層	外面スス
66	392		弥生土器	甕		7.0	(4.4)	ハケ→ナデ	タタキ→一部ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W2-Ⅳ区 ⅥB層	内面黒斑？、外面スス
66	393		弥生土器	甕		3.4	(4.3)	不明	タタキ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y8/1 灰白	やや粗	良	(100)	09017-2	E1-Ⅲ区 ⅥB層	体部～底部外面黒斑
66	394		弥生土器	甕		5.8	(4.5)	ユビオサエ？	不明	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	(100)	09017-2	E2-Ⅰ区 ⅥB層	底部内面コゲ
67	395		弥生土器	有稜高杯	(19.7)		(4.8)	不明	不明	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	15	09017-2	E3-Ⅲ区 ⅥB層	口縁部ひずむ

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
67	396		弥生土器	有稜高杯	(21.7)		(3.9)	不明	不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	10	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	
67	397		弥生土器	有稜高杯			(7.2)	不明	不明	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良		09017-2	W2-Ⅳ区 ⅥB 層	脚柱部中実、円形透かし 3
67	398		弥生土器	有稜高杯	(26.2)		4.9	不明	不明	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	やや密	良	5 未満	09017-2	E1-Ⅲ区 ⅥB 層	
67	399		弥生土器	椀形高杯	(9.3)		(4.7)	ユビオサエ・ナデ?	ミガキ?	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/3 にぶい橙	やや粗	良	5 未満	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	
67	400		弥生土器	椀形高杯			(4.2)	不明	不明	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	やや粗	良		09017-2	E2-Ⅳ区 ⅥB 層	脚柱部中空、円形透かし?
67	401		弥生土器	椀形高杯			(4.0)	不明	不明	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	やや粗	良		09017-2	W1-Ⅱ区 ⅥB 層	脚柱部中空、円形透かし
67	402		弥生土器	椀形高杯			(2.9)	不明	不明	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	やや密	良		09017-2	E2-Ⅲ区 ⅥB-ⅥC 層	脚柱部中空、円形透かし 4
67	403		弥生土器	高杯		12.0	(7.2)	シボリ目・ケズリ?	ミガキ?・ハケ?	7.5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	良	(30)	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB 層	脚柱部中空、円形透かし 3
67	404		弥生土器	高杯			(4.6)	シボリ目	不明	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良		09017-2	W1-Ⅱ区 ⅥB 層	脚柱部中空
67	405		弥生土器	脚部			(3.6)	ハケ?	タタキ→ミガキ(磨滅)	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	やや密	良		09017-2	W3-Ⅱ区 ⅥB 層	脚柱部中空、円形透かし
67	406		弥生土器	小形鉢	(13.0)	3.4	推定 6.3	不明・ユビオサエ	タタキ	10YR8/2 灰白	10YR8/6 黄橙	やや粗	良	15 (100)	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	図上復元
67	407		弥生土器	小形鉢	(17.0)	3.4	推定 9.0	不明	タタキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB 層	図上復元
67	408		弥生土器	小形鉢	(15.8)		(5.4)	口縁部:ヨコナデ、体部:ミガキ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ミガキ?	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	やや粗	良	10	09017-2	E2-Ⅳ区 ⅥB 層	体部外面黒斑
67	409	24	弥生土器	鉢	(5.0)	2.9	4.7	ユビナデ・ユビオサエ	ナデ	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	粗	良	5 未満 (100)	09017-2	E2-Ⅰ区 ⅥB-ⅥC 層	口縁部いびつ
67	410	24	弥生土器	手焙			(4.2)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?	2.5Y4/2 暗灰黄	7.5YR4/2 灰褐	やや密	良	5	09017-2	焼土溜まり 059 周辺ⅥB 層	鉢部口径推定 16.8cm
67	411	24	弥生土器	淡路型器台	(15.0)		(4.7)	ヨコナデ、波状文	ヨコナデ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	80	09017-2	W1-Ⅳ区 ⅥB 層	受部内外面に波状文、受部外面に刻目・沈線、口縁部外面一部黒斑
67	412		弥生土器	底部		4.8	(6.9)	工具ナデ?	タタキ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y6/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅱ・Ⅲ区ⅥB-ⅥC 層	外面黒斑、外面スス?、甕?
67	413		弥生土器	底部		4.3	(2.7)	不明	タタキ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	やや粗	良	(100)	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	底部 1 孔、有孔鉢か甕
67	414		弥生土器	底部		3.8	(3.3)	不明	ユビオサエ(摩滅)	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	W1-Ⅱ区 ⅥB 層	鉢?
67	415		弥生土器	底部		(4.7)	(0.9)	不明	不明	2.5Y4/3 オリーブ褐	7.5YR6/6 橙	やや粗	良	(55)	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	内面コゲ?、生駒西麓産?
67	416		弥生土器	底部		5.2	(2.4)	ナデ?	タタキ→一部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(95)	09017-2	E3-Ⅳ区 ⅥB 層	底部外面木の葉文
67	417		弥生土器	製塩土器		(5.6)	(3.7)	ナデ	体部:タタキ、脚部:ユビオサエ	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	(40)	09017-2	E1-Ⅳ区 ⅥB 層	脚部外面赤変
67	418		弥生土器	製塩土器		5.5	(4.5)	ハケ?	タタキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅳ区 ⅥB 層	体部内面赤変
67	419		弥生土器	製塩土器		(6.4)	(5.9)	体部:不明、脚部:ナデ?	体部:タタキ、脚部:ユビオサエ	10YR8/6 黄橙	2.5Y8/3 淡黄	やや粗	良	(5)	09017-2	W2-Ⅳ区 ⅥB 層	体部内面赤変、脚部内面黒変
67	420		弥生土器	製塩土器			(6.5)	ナデ?	タタキ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良		09017-2	W2-Ⅳ区 ⅥB 層	脚部全体橙変

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
67	421		弥生土器	脚台		5.6	(6.5)	体部:工具痕?、脚部:ナデ	体部:工具痕?→ユビオサエ、脚部:ユビオサエ	5YR7/8 橙	5YR7/6 橙	粗	良	(80)	09017-2	W1-Ⅳ区 Ⅵ B 層	
67	422		弥生土器	脚台		(5.9)	(4.8)	ナデ	ミガキ?	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	(40)	09017-2	E1-Ⅳ区 Ⅵ B 層	台付鉢?
67	423		弥生土器	蛸壺	(6.0)		(9.4)	ユビオサエ・ナデ?	タタキ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	やや良	35	09017-2	E1-Ⅳ区 Ⅵ B 層	図上復元、口縁部付近に 1 孔
68	424		土師器	高杯脚部		(12.7)	(9.4)	シボリ痕、ナデ	ハケ?	7.5YR6/8 橙	2.5Y5/1 黄灰	やや粗	良	(50)	09017-2	E1-Ⅳ区・E2-Ⅱ区 Ⅵ C 層	脚柱部中空
68	425		弥生土器	長頸壺	(10.0)		(6.6)	口縁部:ヨコナデ(ハケ状)、頸部:ハケ	口縁部:ヨコナデ(ハケ状)、頸部:ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	やや密	良	15	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	
68	426		弥生土器	長頸壺			(7.5)	ナデ?	ハケ	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良		09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	
68	427		弥生土器	広口壺	(11.6)		(5.2)	不明	不明	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	やや良	55	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	口縁部いびつ
68	428		弥生土器	広口壺	(15.9)		(6.3)	口縁部:不明、体部:ユビオサエ?	不明	5Y4/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	粗	良	20	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	
68	429		弥生土器	壺		7.4	(4.2)	ナデ?	ミガキ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	
68	430		弥生土器	壺		3.5	(3.6)	不明	不明	2.5Y6/3 黄橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	
68	431		弥生土器	壺		6.3	(6.2)	工具痕?	ナデ?	2.5Y6/1 黄灰	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	底部外面炭化物付着・木の葉文状の痕跡
68	432		弥生土器	壺		5.4	(11.6)	工具痕	不明	2.5Y5/2 暗灰黄	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	図上復元、体部外面黒斑
68	433		弥生土器	底部		2.9	(5.2)	工具痕・ユビオサエ	工具痕・ミガキ(磨滅)	2.5Y5/1 黄灰	5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅱ区 Ⅵ C 層	壺?、外面黒斑
68	434		弥生土器	壺			(3.8)	ユビオサエ	棒状工具による刺突状痕跡・ミガキ	7.5YR5/1 褐灰	5YR4/1 褐灰	やや密	良	(40)	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	
68	435	25	弥生土器	弥生形甕	16.5		(12.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:工具ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ	7.5YR6/6 橙	2.5Y6/2 灰黄	やや粗	良	100	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	口縁部ややひずむ
68	436		弥生土器	弥生形甕	(13.6)		(6.8)	口縁部:不明、体部:工具痕	口縁部:不明、体部:タタキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	30	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	
68	437		弥生土器	弥生形甕	(17.0)		(6.8)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	25	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	
68	438		弥生土器	甕	(18.8)		(5.1)	口縁部:ヨコナデ、体部:ユビオサエ	口縁部:ヨコナデ?、頸部付近:工具痕	2.5Y5/3 黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	25	09017-2	E2-Ⅰ区 Ⅵ C 層	外面スス
68	439	24	弥生土器	弥生形甕	(16.0)		(7.2)	口縁部:ナデ、体部:不明	口縁部:ユビオサエ→ナデ、体部:タタキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	45	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	口縁部ややいびつ
68	440	25	弥生土器	甕	(16.4)	4.8	推定 28.5	口縁部:ヨコナデ?、体部:ハケ・ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ→ミガキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	50 (100)	09017-2	E2-Ⅱ区 Ⅵ C 層	図上復元、口縁部ひずむ、体部下半外面スス
68	441	24	弥生土器	弥生形甕	(15.4)		(16.3)	口縁部:ナデ、体部:板ナデまたはハケ?	口縁部:ユビオサエ→ナデ、体部:タタキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	良	20	09017-2	E2-Ⅲ区 Ⅵ C 層	口縁部ややいびつ、肩部外面に線刻
68	442		弥生土器	弥生形甕		4.6	(8.7)	ハケ?・ユビオサエ	タタキ	5Y4/1 灰	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅱ・Ⅲ区Ⅵ C 層	図上復元、体部～底部外面ススス・赤変

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
68	443		弥生土器	甕		8.6	(3.6)	工具痕(ハケ?)	体部:タタキ、底部:ナデ	5Y3/1 オリーブ黒	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	09017-2	E1-Ⅳ区・E2-Ⅱ区Ⅵ C 層	内面コゲ
68	444		弥生土器	甕		4.8	(4.6)	工具痕	タタキ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/6 明黄褐	やや粗	良	(100)	09017-2	E1-Ⅲ区・E2-Ⅰ区Ⅵ C 層	体部内面コゲ、体部外面スス
69	445	25	弥生土器	有稜高杯	(27.3)	15.2	17.3	口縁部:ナデ、杯部:ミガキ、脚部:シボリ目→ナデ	口縁部:ナデ、杯部:ミガキ、脚部:ミガキ?	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	25 (100)	09017-2	E2-Ⅰ・Ⅲ区Ⅵ C 層	脚柱部中空、円形透かし 2 × 3 方向、円盤充填
69	446		弥生土器	有稜高杯	(19.6)		(4.0)	ナデ→ミガキ?(摩滅)	ナデ→ミガキ(摩滅)	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	35	09017-2	E1-Ⅳ区・E2-Ⅱ区Ⅵ C 層	
69	447		弥生土器	有稜高杯	(21.0)		(3.2)	ナデ?	不明	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	やや粗	良	5 未満	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	
69	448		弥生土器	有稜高杯	(21.7)		(4.5)	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	やや粗	良	40	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	
69	449		弥生土器	高杯			(7.3)	シボリ目・ケズリ?	不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良		09017-2	E1-Ⅳ区・E2-Ⅱ区Ⅵ C 層	充填法、脚柱部中空、円形透かし?
69	450		弥生土器	高杯			(2.6)	不明	不明	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良		09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	円板充填、脚柱部中空、円形透かし
69	451		弥生土器	高杯		(11.5)	(9.5)	シボリ目・ユビオサエ・ヨコナデ	工具痕	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	(75)	09017-2	E2-Ⅰ区Ⅵ C 層	脚柱部中空
69	452		弥生土器	高杯			(8.8)	シボリ目→ユビオサエ	ミガキ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	良		09017-2	E2-I 区Ⅵ C 層	脚柱部中空、円形透かし
69	453		弥生土器	底部		2.7	(2.0)	工具痕	ミガキ?	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	壺?
69	454		弥生土器	底部		3.4	(3.1)	工具痕(ハケ?)	ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR6/6 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	壺か鉢?
69	455		弥生土器	底部		6.1	(1.7)	ナデ	不明	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	壺?
69	456		弥生土器	底部		2.9	(2.8)	ユビオサエ?	不明	7.5YR7/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	やや密	良	(100)	09017-2	E2-Ⅲ区Ⅵ C 層	外面黒斑
69	457		弥生土器	底部		4.0	(3.5)	不明	ユビオサエ	7.5YR6/2 灰褐	2.5Y8/2 灰白	やや粗	良	(100)	09017-2	E1-Ⅲ区・E2-Ⅰ区Ⅵ C 層	外面スス?、甕か鉢?
69	458		弥生土器	底部		2.9	(3.1)	不明	ミガキ?	2.5Y5/1 黄灰	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E1-Ⅲ区・E2-Ⅰ区Ⅵ C 層	壺?
69	459		弥生土器	底部		5.1	(4.6)	ユビオサエ?	不明	10YR7/8 黄橙	7.5YR7/8 橙	やや粗	良	(100)	09017-2	E2-Ⅱ区Ⅵ C 層	底部 1 孔、有孔鉢か甕
70	460		瓦器	碗	(13.7)		(3.1)	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	5	10078-3	E1 北区Ⅵ B 層	
70	461		瓦器	碗		(3.6)	1.1	不明	不明	N6/ 灰	2.5Y8/1 灰白	密	不良	(40)	10078-3	E1 北区Ⅵ B 層	焼成あまい
70	462		瓦器	碗	(11.8)	(2.2)	3.9	ミガキ	ヨコナデ・ユビオサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	10 (25)	10078-3	E1 北区Ⅵ B 層	
70	463		須恵器	杯		(8.4)	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	(30)	10001-2	W1 区Ⅵ B 層	
70	464		須恵器	杯	(9.6)		(4.8)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	25	10001-2	W1-Ⅲ区Ⅵ B 層以下	ひずむ
70	465		須恵器	杯蓋	(13.0)		(4.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	10	10001-2	E1-Ⅳ区Ⅵ B 層	
70	466		須恵器	杯蓋	(12.8)		(3.8)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	10	11001-7	Ⅵ B 層	
70	467		須恵器	杯蓋	(13.8)		(3.7)	回転ナデ→天井部不定方向ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	2.7Y6/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	やや密	やや不良	10	11001-7	Ⅵ B 層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
70	468		須恵器	杯蓋	(14.4)		(3.9)	回転ナデ	回転ヘラケズリ(→一部カキメ)・回転ナデ	N6/灰	N4/灰	やや密	良	10	10001-2	W1-Ⅲ区ⅥB層以下	
70	469		須恵器	杯身			(3.7)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N5/灰	N5/灰	やや密	良		11001-7	ⅥB層	
70	470		須恵器	器台		(31.2)	(7.2)	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	密	良	(5)	10078-3	W1北区ⅥB層	脚部外面に波状文、外面自然釉
70	471		弥生土器	口縁部	(19.6)		(2.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや密	良	10	10078-3	W1北区ⅥB層	
70	472		弥生土器	口縁部	(26.0)		(2.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	10	10001-2	W1-Ⅱ区ⅥB層	口縁部に沈線・竹管文・線刻文、生駒西麓産、壺か器台
70	473		弥生土器	壺		5.0	(5.3)	工具痕	ミガキ	2.5Y6/1黄灰	7.5YR8/4浅黄橙	やや密	良	(60)	10078-3	E1北区ⅥB層	
70	474	25	弥生土器	甕	(22.0)		(17.8)	不明	不明	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	粗	良	20	10078-3	W1北区ⅥB層	口縁部いびつ
70	475		弥生土器	甕		2.8	(2.7)	ハケ	タタキ	7.5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	やや粗	良	(100)	10078-3	E1北区ⅥB層	
70	476		弥生土器	甕		4.2	(5.8)	不明	タタキ	7.5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	(100)	10001-2	W1-Ⅱ区ⅥB層	
70	477		弥生土器	底部		1.4	(1.7)	不明	不明	5YR6/8橙	5YR6/8橙	密	やや良	(100)	10078-3	W1北区ⅥB層	
70	478		弥生土器	底部		3.3	(4.0)	不明	不明	5YR6/8橙	5YR6/8橙	やや密	良	(50)	10001-2	W1-Ⅱ区ⅥB層	
70	479		弥生土器	底部		2.1	(2.8)	ナデ?	ケズリ?	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良	(85)	10001-2	W1-Ⅱ区ⅥB層	壺?
70	480		弥生土器	底部		4.0	(2.8)	不明	タタキ	10YR8/4浅黄橙	2.5Y4/1黄灰	やや密	良	(100)	10001-2	W1-Ⅱ区ⅥB層	甕?
71	481		須恵器	杯		10.4	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	密	良	(10)	11001-6	2区ⅥB層	
71	482		須恵器	杯身	(12.0)		(4.6)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N7/灰白	N7/灰白	密	良	20	11001-6	4区ⅥB層	
71	483		須恵器	高杯	(14.0)		(6.9)	杯部:回転ナデ、脚部:カキメ・回転ナデ	杯部:回転ナデ・回転ヘラケズリ→回転ナデ、脚部:回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	やや粗	良	10	11001-6	4区ⅥB層	長方形透かし2
71	484		須恵器	高杯			(4.4)	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	N8/灰白	5PB6/1青灰	密	良		11001-6	4区ⅥB層	
71	485		須恵器	壺		(13.0)	(4.8)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	N8/灰白	N6/灰	密	良	(20)	11001-6	4区ⅥB層	
71	486		須恵器	壺			(8.6)	ユビオサエ→回転ナデ	タタキ→回転ナデ	N5/灰	5Y7/1灰白	密	良		11001-6	4区ⅥB層	肩部外面自然釉、肩部に沈線・波状文
72	487		須恵器	鉢	(12.8)		7.5	回転ナデ	回転ナデ・ケズリ	N7/灰白	N6/灰	密	良	20	10078-2	W2西区ⅥB層以下	口縁部内外面自然釉
72	488		須恵器	杯身	(10.6)		(3.7)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	N4/灰	N5/灰	やや密	良	15	09049-1	ⅥB層	
72	489		須恵器	壺			(5.7)	ユビオサエ→回転ナデ	回転ヘラケズリ	N7/灰白	N5/灰	密	良		09049-1	W2-Ⅰ区ⅥB層	肩部外面自然釉
72	490		土師器	脚台		(9.0)	(5.2)	不明	ハケ?	7.5YR7/8黄橙	7.5YR7/8黄橙	やや密	良	(70)	10078-2	W2西区ⅥB層以下	台付土器か器台
72	491		弥生土器	高杯			(5.9)	不明	杯部:不明、脚部:ミガキ	7.5YR6/8橙	7.5YR6/8橙	やや粗	良		09049-1	E2-Ⅲ区ⅥB層	脚柱部中空、円形透かし3
72	492		弥生土器	高杯			(5.3)	ナデ?	ミガキ?	5YR7/6橙	5YR7/6橙	やや粗	良		09049-1	E1-Ⅳ区ⅥB層	脚柱部中実、円形透かし
72	493		弥生土器	製塩土器			(3.8)	ナデ	タタキ	2.5Y7/1灰白	2.5Y8/2灰白	やや粗	良		09049-1	W2-Ⅰ区ⅥB層	底部内面赤変

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
72	494	25	弥生土器	広口壺	17.5	4.5	31.2	口縁部:ヨコナデ、頸部:ヨコナデ、体部:板ナデ	口縁部:ヨコナデ、頸部:ミガキ(摩滅)、体部:ミガキ	N1.5/黒	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	良	75 (100)	09049-1	E2-Ⅲ・W2-Ⅰ区 ⅥB層	口縁部に竹管円形浮文、底部付近外面黒斑
72	495		弥生土器	広口壺	(17.7)		(7.9)	口縁部:ヨコナデ、体部:ユビオサエ	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	5Y4/1 灰	7.5YR 浅黄橙	やや密	良	5	10078-2	W1 西区 ⅥB層	図上復元
72	496		弥生土器	広口壺	(20.0)		(7.2)	不明	口縁部:ヨコナデ、頸部:ミガキ	10YR8/6 黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや密	良	25	09049-1	W1-Ⅱ区 ⅥB層	
72	497		弥生土器	甕?			(1.25)	不明	口縁端部タタキ	5Y6/6 橙	5Y5/3 にぶい赤褐	やや密	良	5 未満	09049-1	E1-Ⅳ区 ⅥB層	口縁端部タタキによる刻目状痕跡
72	498	26	弥生土器	弥生形甕	(13.4)		(20.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ?→ナデ	口縁部:ユビオサエ、体部:右上がりタタキ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR5/6 明赤褐	やや粗	良	35	09049-1	W2-Ⅰ区 ⅥB層	口縁部いびつ、体部下半内面コゲ、体部下半外面スス
72	499	26	弥生土器	弥生形甕	(14.0)		(11.7)	口縁部:ハケ状痕跡、体部:工具痕	口縁部:ハケ状痕跡、体部:タタキ	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/4 にぶい橙	やや密	良	40	10078-2	W1 北区 ⅥB層	体部外面スス
72	500	25	弥生土器	庄内式甕	(15.8)		(2.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/3 にぶい黄褐	やや密	良	10	09049-1	W1-Ⅰ区 ⅥB層	生駒西麓産
72	501	26	弥生土器	甕	19.0		(7.2)	口縁部:ヨコナデ、体部:板ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:タタキ→ハケ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや粗	良	95	09049-1	W1-Ⅰ区 ⅥB・Ⅷ層	口縁部ひずむ、体部外面スス
72	502		弥生土器	甕		3.6	(6.7)	工具痕	タタキ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや密	良	(100)	09049-1	W2-Ⅰ区 ⅥB層	
72	503		弥生土器	甕		(4.2)	(5.9)	工具痕	タタキ	10YR4/1 褐灰	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良	(30)	09049-1	W2-Ⅰ区 ⅥB層	外面スス
72	504		弥生土器	甕		4.1	(3.8)	工具痕	タタキ	5YR6/6 橙	7.5YR4/1 褐灰	やや密	良	(100)	10078-2	W1 北・W1 西区 ⅥB層	外面スス
72	505	25	弥生土器	甕		4.7	(2.6)	不明	タタキ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(100)	10078-2	W1 北区 ⅥB層	底部外面木の葉文、外面スス
72	506		弥生土器	甕		(3.4)	(4.5)	不明	タタキ	5Y2/1 黒	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(40)	09049-1	E1-Ⅳ区 ⅥB層	
72	507		弥生土器	甕		3.3	(4.9)	工具痕	タタキ?	2.5Y8/3 淡黄	2.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	(100)	09049-1	E1-Ⅳ区 ⅥB層	外面赤変
72	508		弥生土器	甕		3.7	(2.7)	工具痕	タタキ	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(100)	09049-1	E2-Ⅲ区 ⅥB層	
72	509		弥生土器	底部		4.4	(3.1)	工具痕	ユビオサエ	7.5YR3/1 オリーブ黒	10YR8/3 浅黄橙	密	良	(100)	09049-1	W2-Ⅰ区 ⅥB層	鉢?
72	510		弥生土器	底部		2.7	(4.3)	工具痕	タタキ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR6/6 橙	やや密	良	(100)	09049-1	W2-Ⅰ区 ⅥB層	甕か鉢
72	511		弥生土器	底部		3.3	(2.7)	工具痕	タタキ	2.5Y8/3 淡黄	5Y6/4 にぶい橙	密	良	(100)	09049-1	E1-Ⅳ区 ⅥB層	外面スス?、甕?
72	512		弥生土器	底部		3.4	(2.6)	不明	タタキ	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	(70)	09049-1	E2-Ⅲ区 ⅥB層	甕か鉢
72	513		弥生土器	底部		4.6	2.2	不明	タタキ?	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	10078-2	W1 西区 ⅥB層	甕か鉢?
72	514		弥生土器	底部		3.1	(3.0)	工具痕	不明	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	やや粗	良	(100)	09049-1	E2-Ⅲ区 ⅥB層	甕か鉢
72	515		弥生土器	底部		4.9	(4.0)	工具痕	ユビオサエ	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	(50)	09049-1	E2-Ⅲ区 ⅥB層	
88	547		磁器	皿	(15.0)		(3.4)	施釉	施釉	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	密	良	5	09017-1	溝 017	瀬戸焼染付皿
89	548		須恵器	蓋	(16.0)		(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	N8/灰白	7.5Y4/2 灰オリーブ	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	外面自然釉
89	549	27	須恵器	杯	(14.6)	(10.0)	4.1	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	やや密	やや不良	10 (15)	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
89	550		須恵器	杯		(11.0)	(2.6)	体部:回転ナデ、底部:ナデ	回転ナデ(底部中央部無調整)	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	良	(20)	09017-1	土坑 001 中層	
89	551		須恵器	杯	(14.0)	(10.0)	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	09017-1	土坑 001	
89	552		須恵器	杯	(16.0)	(10.8)	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	密	良	15	09017-1	土坑 001 上層	
89	553	27	須恵器	杯	(18.0)	(14.0)	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	密	良	15	09017-1	土坑 001 上層	
89	554	26	須恵器	杯	(20.0)	(15.0)	5.2	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	良	20 (10)	09017-1	土坑 001 上層	
89	555		須恵器	鉢	(22.0)		(6.8)	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	やや密	やや良	15	09017-1	土坑 001 上層	
89	556		須恵器	鉢			(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5Y5/1 灰	やや密	良	5	09017-1	土坑 001	
89	557		須恵器	鉢			(4.0)	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ?	5Y5/1 灰	N5/ 灰	密	良	5 未満	09017-1	土坑 001 上層	
89	558		須恵器	鉢	(21.0)		(6.7)	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	09017-1	土坑 001 上層	
89	559		須恵器	鉢	(24.0)			回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	密	やや良	20	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	
89	560		須恵器	鉢	(20.4)		(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	密	良	15	09017-1	土坑 001	
89	561	27	須恵器	鉢	(23.0)		(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	密	良	5	09017-1	土坑 001	
89	562	26	須恵器	鉢	(22.0)	(14.0)	(10.7)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ケズリ	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	やや密	良	20 (5 未満)	09017-1	土坑 001	片口
89	563	26	須恵器	鉢			(7.0)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	密	良	(70)	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
89	564		須恵器	甕?	(24.0)		(4.8)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	25	09017-1	土坑 001	口縁部内面自然釉
89	565		須恵器	壺		(11.0)	(5.0)	体部:回転ナデ、底部:指ナデ	体部:回転ナデ、底部:回転ヘラケズリ→指ナデ?	5Y7/1 灰白	N6/ 灰	やや粗	良	(80)	09017-1	土坑 001	
89	566		須恵器	杯蓋	(13.0)		4.5	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	N5/ 灰	5Y6/1 灰	密	良	(20)	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
89	567		須恵器	杯蓋	(14.0)		(3.7)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい器橙	密	やや不良	(20)	09017-1	土坑 001 上層	
89	568		須恵器	杯蓋			(3.6)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	7.5R5/1 赤灰	N5/ 灰	やや密	良		09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	底部中央付近にヘラ記号
89	569	27	土師器	甕?			(8.3)	工具痕	ナデ・工具痕(櫛目状)	5Y7/1 灰白	N6/ 灰	密	やや良		09017-1	土坑 001	図上復元、把手
90	570	27	土師器	杯	(12.6)		(2.1)	ヨコナデ→暗文	強いヨコナデ・(ヘラケズリ?→)ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	15	09017-1	土坑 001 炭溜まり 1	
90	571		土師器	杯	(15.4)		(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ?	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
90	572	27	土師器	杯	(17.0)		(4.0)	ヨコナデ→暗文	ヨコナデ→ミガキ(摩滅)	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	密	良	5	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
90	573		土師器	杯	(17.6)		(3.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	やや密	やや良	15	09017-1	土坑 001 上層	
90	574	27	土師器	杯	(19.0)		2.7	強いヨコナデ	強いヨコナデ・ヘラケズリ→ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	
90	575	27	土師器	杯	(20.6)		(3.6)	強いヨコナデ・暗文?	強いヨコナデ・ナデ→ヘラケズリ	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/6 橙	密	良	15	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	
90	576	26	土師器	杯	(19.4)	(15.2)	3.8	ヨコナデ・暗文(摩滅)	ヨコナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	20 (25)	09017-1	土坑 001 上層	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
90	577		土師器	鉢	(19.4)		(5.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ?	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	密	良	5 未満	09017-1	土坑 001 炭溜まり 1	
90	578	27	土師器	鉢	(21.6)		(5.1)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ・ケズリ?→ユビオサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
90	579	26	土師器	鉢	(20.4)	(13.0)	6.5	口縁部:ヨコナデ、体部:ミガキ?(摩滅)	口縁部:ヨコナデ、体部:不明	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	密	良	20 (15)	09017-1	土坑 001	
91	580	28	土師器	甕	(25.2)		(23.2)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ?→ユビナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→頸部付近一部ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR5/6 明赤褐	密	良	30	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	口縁部〜体部外面スス
91	581		土師器	甕	(18.6)		(10.5)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	密	良	25	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	体部外面一部スス
91	582	29	土師器	甕	(25.6)		(11.3)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	やや密	良	20	09017-1	土坑 001 中層	
91	583	28	土師器	甕	(25.6)		(9.1)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/8 橙	10YR7/6 明黄褐	やや密	良	15	09017-1	土坑 001 上層	把手(1 孔)、把手上方口縁部に 1 孔
91	584		土師器	甕	(27.5)		(10.1)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?→ユビオサエ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良	15	09017-1	土坑 001	
91	585		土師器	甕			(10.1)	ケズリ・ユビオサエ	ハケ	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/6 橙	密	良		09017-1	土坑 001 上層	把手(無孔)
91	586		土師器	甕			(13.1)	ハケ・ケズリ	ハケ→一部ナデ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	密	良		09017-1	土坑 001 上層	把手(無孔)
91	587	29	土師器	甕	(23.6)		(11.4)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ・ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→上半ユビオサエ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	50	09017-1	土坑 001 上 - 中層	把手(1 孔)
91	588	29	土師器	甕	(25.5)		(13.3)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→工具ナデ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	25	09017-1	土坑 001	把手(無孔)、体部外面黒斑
91	589	29	土師器	甕	(29.6)		17.4	口縁:強いヨコナデ、体部:ハケ	口縁:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	35	09017-1	土坑 001 上 - 中層	把手(無孔)推定 3、体部外面黒斑
92	590		土師器	鍋	(26.4)		(6.4)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ?→ナデ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
92	591		土師器	鍋	(24.2)		(8.6)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001 上層	
92	592	28	土師器	鍋	(26.4)		(8.9)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	25	09017-1	土坑 001 上 - 中層	把手(1 孔)、把手上方口縁部に 1 孔
92	593		土師器	鍋	(27.2)		(8.8)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ナデ?	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	密	良	5 未満	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
92	594	28	土師器	鍋	(23.4)		(7.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	密	良	30	09017-1	土坑 001	把手(1 孔)、把手上方口縁部に 1 孔

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
92	595		土師器	鍋			(7.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良		09017-1	土坑 001 上層	把手 (1 孔)、把手上方口縁部に 1 孔
92	596	29	土師器	鍋	(26.4)		(10.1)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ケズリ・ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	密	良	25	09017-1	土坑 001 中層	
92	597	29	土師器	鍋	(28.0)		(15.6)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ・ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→下半ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	良	40	09017-1	土坑 001 中層	把手 (1 孔)3、把手上方口縁部に 1 孔
92	598	28	土師器	鍋	(31.4)		(9.0)	口縁部:ハケ→強いヨコナデ、体部:ケズリ→ユビナデ・ユビオサエ	口縁部:タテハケ→ヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001	
92	599	29	土師器	鍋	(27.6)		12.5	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ・ケズリ、底部:ユビオサエ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	やや密	良	15	09017-1	土坑 001	把手 (無孔)
92	600		土師器	甕	(28.1)		(7.9)	口縁部:ヨコナデ?、体部:ハケ→ナデかケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上 - 中層	把手剥離痕
92	601		土師器	甕	(28.6)		(7.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ?	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	密	良	5 未満	09017-1	土坑 001 上層	口縁部に 1 孔
92	602		土師器	甕	(25.2)		(4.4)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ハケ→ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001	口縁部に 1 孔
92	603		土師器	甕	(25.4)		(7.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	やや密	良	20	09017-1	土坑 001	口縁部に 1 孔
92	604	29	土師器	甕	(30.6)		(11.1)	口縁部:強いヨコナデ、体部/ハケ→ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	10	09017-1	土坑 001	片口
93	605		土師器	甕	(25.4)		(2.4)	口縁部:強いヨコナデ、頸部:ハケ	口縁部:強いヨコナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	20	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
93	606		土師器	甕	(21.2)		(4.6)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ・ハケ	口縁部:強いヨコナデ、体部/ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001	
93	607		土師器	甕	(25.0)		(4.8)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ケズリ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
93	608		土師器	甕	(22.0)		(4.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ?	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
93	609		土師器	甕	(27.2)		(4.6)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	密	良	5 未満	09017-1	土坑 001 上層	頸部内面スス
93	610		土師器	甕	(23.6)		(5.1)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	やや密	良	5	09017-1	土坑 001	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
93	611		土師器	甕	(26.0)		(5.5)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
93	612		土師器	甕	(21.4)		(6.5)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
93	613		土師器	甕	(26.0)		(6.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ・ケズリ?→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
93	614		土師器	甕	(21.6)		(6.9)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	密	良	15	09017-1	土坑 001 上層	
93	615		土師器	甕	(27.0)		(4.5)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/6 橙	10YR7/6 明黄褐	密	良	5	09017-1	土坑 001 中層	口縁端部一部黒斑
93	616		土師器	甕	(23.3)		(4.7)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001 上層	
93	617		土師器	甕	(28.4)		(4.0)	口縁部:強いヨコナデ、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/8 黄橙	5YR7/8 橙	密	良	20	09017-1	土坑 001 中層	
93	618		土師器	甕	(23.5)		(7.2)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ?	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上 - 中層	
93	619		土師器	甕	(29.5)		(4.9)	口縁部:ヨコナデ、体部:ケズリ→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:細い工具痕	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001 上層	
93	620		土師器	甕	(24.0)		(7.0)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ→ナデ・ケズリ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	5	09017-1	土坑 001	
93	621		土師器	甕	(31.4)		(6.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001	
93	622		土師器	甕	(27.0)		(7.3)	口縁部:強いヨコナデ、体部:不明	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	密	良	25	09017-1	土坑 001 上層	
93	623		土師器	甕	(33.6)		(6.3)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	10	09017-1	土坑 001 中層	口縁部ひずむ
93	624		土師器	甕	(26.6)		(6.6)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ユビナデ	7.5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	やや密	良	15	09017-1	土坑 001 中層	
93	625		土師器	甕	(26.6)		(7.0)	口縁部:強いヨコナデ、体部:ケズリ→ナデ	口縁部:強いヨコナデ、体部:ハケ	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	やや密	良	10	09017-1	土坑 001 中層	
93	626	28	土師器	甕			(9.6)	口縁部:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや密	良		09017-1	土坑 001 上層	頸部に 1 孔
94	627	30	弥生土器	口縁部	(17.0)		(3.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR5/3 明赤褐	5YR6/6 橙	やや密	良	5	10078-1	落ち込み 137	複合口縁壺か淡路型器台、口縁部に沈線・線刻文・竹管円形浮文
94	628		弥生土器	甕		(4.0)	(2.7)	不明	タタキ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR7/6 橙	やや密	良	(40)	10078-1	落ち込み 137	内面コゲ
94	629		弥生土器	製塩土器?		6.2	(4.0)	不明	ユビオサエ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや粗	良	(100)	10078-1	落ち込み 137	

図番号	遺物番号	図版番号	種別	器種	口径(推定)(cm)	底径(推定)(cm)	器高(残存)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	口縁部(底部)残存率(%)	調査区	出土位置	備考
94	630		須恵器	杯			(10.8)	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	やや密	良	(15)	09017-1	落ち込み004	
95	631		須恵器	擂鉢	(20.0)		(4.7)	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	密	良	10	10078-1	E2 東区Ⅱ層以下	
95	632		須恵器	甕			(8.5)	口縁部:回転ナデ、体部:回転ナデ	口縁部:回転ナデ、体部:タタキ→ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	密	良	5	11001-8	SW 区Ⅲ・Ⅵ層	
95	633		須恵器	鉢	(20.2)		(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	密	良	(10)	09017-1	撹乱	
95	634		須恵器	壺		(9.8)	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	密	良	(25)	11001-8	SE 区Ⅲ層	
95	635		土師器	甕	(24.5)		(4.3)	口縁部:ハケナデ、体部:ナデ・ケズリ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良	5	09017-1	W4 区Ⅱ層	口縁部内面スス
95	636		弥生土器	壺		9.2	(4.2)	ハケ	不明	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	やや密	良	(100)	10078-1	W1 北Ⅱ層	
95	637		土師器	小皿	(9.3)		(1.1)	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	やや密	良	10	09017-1	E2- Ⅲ区Ⅵ層	「て」の字状口縁
95	638		須恵器	杯蓋	(11.8)		(3.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	密	良	10	09017-1	W2- Ⅱ区Ⅵ層	外面自然釉
95	639		須恵器	杯蓋	(11.7)		(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	7.5Y6/1 灰	密	良	15	09017-1	W2- Ⅱ区Ⅵ層	外面自然釉
95	640		須恵器	杯身	(12.4)		3.3	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	N7/ 灰白	N6/ 灰	やや密	良	25	09017-1	E2- Ⅲ区Ⅵ層	
95	641		土師器	蛸壺	(6.4)		(6.4)	口縁部:ヨコナデ、体部:シボリ目→ナデ	口縁部:ヨコナデ、体部:不定方向ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	やや密	良	25	09017-1	W4- Ⅰ区Ⅴ - Ⅵ層	
95	642		弥生土器	底部		3.5	(3.3)	工具痕	タタキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	やや密	良	(80)	09017-1	W3- Ⅱ区Ⅴ - Ⅵ層	底部に 1 孔、有孔鉢か甕
95	643	30	弥生土器	脚台		5.9	(2.9)	ケズリ	タタキ→ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	やや密	良	(70)	09017-1	E4- Ⅲ区Ⅴ - Ⅵ層	製塩土器?
95	644		弥生土器	脚台		5.4	(3.1)	工具痕	ナデ?	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	やや粗	良	(90)	09017-1	E0 区Ⅵ層	製塩土器?、外面赤～黒変
95	645	30	弥生土器	脚台		6.6	(4.6)	ケズリ?→ナデ	タタキ→ナデ?	7.5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	(35)	09017-1	W3- Ⅱ区Ⅵ層	製塩土器?
95	646		土師器	甕	(15.7)		(7.0)	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ→ユビオサエ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	10	09017-1	E1- Ⅱ・Ⅳ区Ⅶ - Ⅷ層	体部外面スス
95	647		弥生土器	壺		(9.0)	(3.8)	工具痕、ユビオサエ	ハケ→ユビオサエ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗	良	(40)	09017-1	W2- Ⅱ・Ⅳ区Ⅶ - Ⅷ層	
95	648		弥生土器	甕		(3.4)	(3.6)	工具痕	タタキ	2.5Y6/1 黄灰	5YR7/2 明褐灰	やや粗	良	(60)	09017-1	E3- Ⅰ・Ⅲ区Ⅶ - Ⅷ層	底部外面赤変
95	649		弥生土器	製塩土器		(6.2)	(3.6)	工具痕	ナデ	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	良	(40)	09017-1	E2- Ⅱ・Ⅳ・E3- Ⅰ・Ⅲ区Ⅶ - Ⅷ層	脚部内面赤変
95	650		弥生土器	甕	(22.7)		(8.0)	口縁部:ヨコナデ?、体部:ハケ→ナデ?	口縁部:ヨコナデ、体部:ハケ?	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5YR6/6 橙	やや粗	良	25	09017-1	W2 区Ⅸ B 層	
95	651		弥生土器	底部		3.4	(2.7)	不明	ユビオサエ	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	やや粗	良	(100)	09017-1	W2 区Ⅸ B 層	鉢?
95	652	30	縄文土器	深鉢			(14.3)	ケズリ	ナデ?	10YR5/6 黄褐	10YR4/2 灰黄褐	やや密	良		10078-1	E2 東区Ⅸ B 層	体部凹線 3 条

土製品・粘土塊観察表

図番号	遺物番号	図版番号	種別	全長(残存長)(cm)	最大幅(残存幅)(cm)	調整(内面)	調整(外面)	色調(内面)	色調(外面)	胎土	焼成	調査区	出土位置	備考
31	99		土錘	(3.9)	1.2	不明	ナデ？	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5YR7/4 淡赤橙	密	良	11001-4	N5 区Ⅱ - Ⅲ層	一端欠損、孔径 0.4-0.5cm
31	100		不明土製品	径 3.7	2.2	不明	不明	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層	完形？
32	101	30	粘土塊	15.5	11.7			10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	粗	不良	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層	一部やや滑らかになる
32	102	30	粘土塊	12.0	7.3			10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	粗	不良	11001-4	N6・S6 区Ⅵ層	一部滑らかになる、一部黒変
73	516		土錘	6.1			ナデ、両端面ナデ		2.5Y8/3 淡黄	やや粗	良	09017-2	W1- Ⅱ区ⅥB 層	2 孔、1 端面の一部欠損、一部黒斑
73	517		土錘	(6.6)	2.2	不明	ナデ？	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	粗	良	10078-2	流路 187 黒褐色粘シルト層	2 孔、1 端欠損 (端部付近)
73	518		土錘	8.3	3.9	不明	ユビオサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい橙	やや粗	良	09049-1	W2- Ⅰ区Ⅴ層	完形
73	519		土錘	7.6	3.8	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	やや粗	良	09017-2	土坑 047	片面の約半分剥離
73	520		箱庭道具	(5.7)	(2.9)	不明	不明	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	密	良	09017-2	W3- Ⅲ区Ⅳ層	上部・基部欠損
74	521		煉瓦	(15.0)	(8.8)	ケズリ？			5YR2/1 黒褐	密	良	09017-2	Ⅳ層	上面・側面に方形孔
96	653		箱庭道具	4.3	2.4				5YR7/6 橙	密	良	11001-8	SW 区Ⅲ・Ⅵ層	一部欠損

瓦観察表

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
33	103		平瓦	(21.7)	(17.0)	2.2	904	布目	縄叩き	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/6 橙	やや粗	やや不良	1 側面	11001-4	S2 区Ⅵ B 層	凹面に糸切り痕
33	104		平瓦	(14.2)	(18.0)	2.0	784	布目→一部ナデ	縄叩き→調整	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	密	不良	狭端面・1 側面	11001-4	柱穴 044	
33	105		平瓦	(14.3)	(13.2)	1.7	486	布目→一部ハケ状痕	不明	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	やや粗	やや不良	狭端面・1 側面	11001-4	S2 区Ⅵ層	
34	106		平瓦	37.0	28.3	1.8	2588	布目	縄叩き→調整	N5/ 灰	N5/ 灰	やや粗	不良	両端面・両側面	11001-4	S2 区Ⅵ層	広端幅 28.3cm・狭端幅 21.9cm、凹面に糸切り痕
34	107	31	平瓦	34.8	(24.5)	2.1	2438	布目→一部ナデ	縄叩き→全面調整→一部ハケ状調整	N6/ 灰	N6/ 灰	やや粗	やや良	両端面・両側面	11001-4	S2 区Ⅵ層	広端幅推定 26cm・狭端幅推定 22cm、凹面に糸切り痕・布綴じ合せ目
35	108	31	平瓦	(7.7)	(18.4)	2.6	495	ナデ→一部ハケ状痕	布目→ケズリ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	やや不良	1 端面	11001-4	S3 区Ⅵ層	凸面布目平瓦
35	109	31	平瓦	(10.7)	(13.5)	2.1	516	ナデ	布目→ケズリ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	やや粗	やや不良	狭端面・1 側面	11001-4	S3 区Ⅵ層	凸面布目平瓦、凸面に布綴じ合せ目？
35	110	31	平瓦	(4.1)	(7.5)	2.3	100	ナデ？	布目→ケズリ？	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	やや粗	不良	狭端面・1 側面	11001-4	S2 区Ⅳ・Ⅵ層	凸面布目平瓦？
75	522	32/巻頭 2	文字瓦(平瓦)	(7.3)	(11.1)	2.6	280	布目	縄叩き→一部ナデ？	N5/ 灰	N6/ 灰	やや粗	良・須恵質	1 側面	09017-2	E1-Ⅲ 区Ⅵ層	凹面に焼成前線刻「宮
75	523	32	軒丸瓦	径 16 前後	(12.6)	3.0	250	ナデ		N4/ 灰	N4/ 灰	やや粗	やや不良	瓦当	10001-2	撹乱	巴文・圏線・珠文
75	524	32	軒丸瓦	径 16 前後	(9.4)	2.8	255	ナデ		N6/ 灰	N6/ 灰	やや密	やや良	瓦当	10001-2	撹乱	巴文・圏線・珠文
75	525	巻頭 3	軒丸瓦	径 14 以上	(11.8)	4.5	372	ナデ		N4/ 灰	N6/ 灰	やや粗	やや良	瓦当	10001-2	撹乱	複弁五葉蓮華文
75	526	32	軒平瓦	(12.6)	(8.0)	5	671	ナデ・一部ケズリ	ナデ・一部ハケ状痕	N6/ 灰	N5/ 灰	やや密	やや良	瓦当	11001-6	2 区Ⅵ B 層	凹面に糸切り痕、唐草文、瓦当幅 4.6㎝
75	527	32	軒平瓦	(7.3)	(9.5)	2.7	265	凹面側剥離部：布目	凸面側剥離部：一部ケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	瓦当・1 側面	09017-2	E2-Ⅳ 区Ⅵ B 層	凹凸両面側剥離面に糸切り痕、唐草文
75	528		道具瓦？	(9.5)	(8.7)	1.9	304	布目	縄叩き	N5/ 灰	N5/ 灰	やや粗	やや良	1 端面・1 側面	10001-2	撹乱	ひずみ大?、凹凸両面に糸切り痕
75	529		道具瓦？	(10.5)	(10.4)	4.4	451	不明	不明	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	やや密	やや不良	部位不明	10001-2	落ち込み 002	一面に窪み
76	530	33	平瓦	(15.6)	(14.3)	2.4	683	ケズリ？	布目→ケズリ、一部に縄目？	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	やや不良	1 端面	09017-2	W2-Ⅱ 区Ⅴ層	凸面布目平瓦
76	531	33	平瓦	(7.0)	(6.0)	2.1	94	ナデ	布目→ケズリ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	やや粗	不良	1 側面	09017-2	北Ⅰ区Ⅲ層以下	凸面布目平瓦、凸面に縦方向窪み(布綴じ合せ目?)
76	532	33	平瓦	(7.1)	(10.2)	2.3	211	ナデ	布目→ケズリ	N4/ 灰	N5/ 灰	やや粗	やや良	1 側面	10078-3	撹乱	凸面布目平瓦、凸面に縦方向窪み(枠板綴じ痕?)
76	533	33	平瓦	(15.2)	(11.6)	2.3	489	ナデ	布目→ケズリ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	やや粗	やや良	狭端面・1 側面	10078-2	W1 北区Ⅲ・Ⅴ層	凸面布目平瓦
76	534		平瓦	(8.5)	(8.5)	2.5	166	ナデ	布目→ケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	粗	やや良	1 側面	09049-1	W1-Ⅰ区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦
76	535	33	平瓦	(22.7)	(21.6)	2.3	1240	ナデ	布目→ケズリ	N5/ 灰	5Y6/1 灰	粗	やや不良	1 側面	09049-1	E2-Ⅳ 区Ⅴ層	凸面布目平瓦
77	536	34	平瓦	(17.8)	(14.0)	2.5	676	ナデ	布目→ケズリ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	やや粗	不良	1 側面	11001-6	3 区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦
77	537	34	平瓦	(8.3)	(7.0)	2	156	ナデ	布目→ケズリ	N5/ 灰	N6/ 灰	やや粗	良	1 側面	11001-6	撹乱	凸面布目平瓦
77	538	34	平瓦	(15.0)	(12.0)	2.5	496	調整	布目	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	不良	1 側面	11001-6	流路 001	凸面布目平瓦、凹面に布綴じ合せ目？

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
77	539		平瓦	(14.0)	(13.2)	2.3	638	ナデ?	布目→ケズリ	10YR8/2 灰白	5YR6/6 橙	やや粗	不良	狭端面・1 側面	11001-6	1 区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦
77	540		平瓦	(7.0)	(6.8)	2.1	139	ナデ?	布目→ケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	やや密	良	狭端面・1 側面	11001-6	2 区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦
77	541	34	平瓦	(18.0)	(13.0)	2.1	717	ナデ	布目→一部調整	N5/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	狭端面・1 側面	11001-6	1 区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦、凸面に枠板綴じ痕?
77	542	34	平瓦	(7.2)	(9.2)	2.1	215	ナデ	布目→ケズリ?	N5/ 灰	N4/ 灰	やや粗	良	狭端面・1 側面	11001-6	2 区Ⅵ B 層	凸面布目平瓦、凸面に縦方向段(布綴じ合せ目?)
97	654	35/巻頭1	文字瓦(平瓦)	35.1	(18.3)	2.2	1802	布目→一部ナデ	縄叩き→全面調整	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	やや密	やや良	両端面・1 側面	09017-1	土坑 001	凹面に焼成前線刻「珎縣主廣足作」、凹凸面土付着
98	655	35/巻頭1	文字瓦(平瓦)	(18.0)	(14.5)	2.0	845	布目→一部縄叩き→ナデ	縄叩き→ハケ状痕跡→ナデ	2.5Y5/1 黄灰	5Y5/1 灰	やや粗	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001	凹面に糸切り痕・焼成前線刻「坂合部連前、隅部切断
98	656	36/巻頭2	文字瓦(平瓦)	(15.3)	(14.7)	2.0	364	布目→一部ナデ	縄叩き→ケズリ	10Y6/1 灰	N6/ 灰	やや粗	良		09017-1	土坑 001	凹面に糸切り痕・焼成前線刻「讃美カ
98	657	36/巻頭2	文字瓦(平瓦)	(6.8)	(10.4)	1.9	165	布目	縄叩き→ケズリかナデ→一部ナデ?	5Y5/1 灰	N5/ 灰	密	良	1 側面	09017-1	W4-I 区Ⅴ層	凹面に糸切り痕・焼成前線刻(美カ)
99	658	36/巻頭3	軒丸瓦	復元径 13.6		3.0	1117	布目	ケズリ	N6/ 灰	10Y5/1 灰	やや粗	良	瓦当・丸瓦部	09017-1	土坑 001	八葉蓮華文(単弁を二分)、丸瓦凹面接合部に刻み
99	659	36	軒丸瓦	径 14 前後		3.8	213	瓦当接合部:ナデ	ケズリ	10Y6/1 灰	N5/ 灰	密	良	瓦当	09017-1	E4-IV 区Ⅴ層	八葉蓮華文(単弁を二分)
99	660	36	軒丸瓦	径 14 前後		3.6	334	布目→ケズリ	ケズリ	N4/ 灰	N5/ 灰	やや粗	良	瓦当	09017-1	E3-I 区Ⅵ層	蓮華文
99	661	37/巻頭3	軒丸瓦	径 16 前後		2.5	1215	ナデ	ナデ?	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	やや密	不良	瓦当・丸瓦部	09017-1	南拡張区Ⅱ層	複弁八葉蓮華文(単弁部あり・外区珠文)、丸瓦部凹面接合部に刻み
99	662	37	軒丸瓦	径 16 前後		2.2	42			―	N7/ 灰白	やや粗	良	瓦当	09017-1	E4-IV 区Ⅴ層	鋸歯文・間弁?
99	663		軒丸瓦	径 15 前後		2.3	78	不明	ケズリ	N4/ 灰	N4/ 灰	やや密	不良	瓦当	09017-1	W4-III 区Ⅴ層	文様不明
100	664	37	軒丸瓦	径 14 前後		3.6	150	ナデ		10YR6/1 褐灰	10YR5/2 灰黄褐	やや粗	良	瓦当	09017-1	E3-IV 区Ⅴ層	珠文
100	665		軒丸瓦	径 14 前後		1.8	44	ナデ?		N4/ 灰	N5/ 灰	やや密	不良	瓦当	09017-1	E2-I 区Ⅵ層	巴文・珠文・圏線
100	666		軒丸瓦	径 14 前後		1.5	29	不明		N4/ 灰	5Y7/1 灰白	やや粗	不良	瓦当	10078-1	撹乱	珠文・圏線?
100	667	37	軒丸瓦	(7.5)		3.4	172	丸瓦部:布目、瓦当接合部:ナデ	ケズリ	N5/ 灰	N6/ 灰	やや密	良	丸瓦部、瓦当剥離	09017-1	E4-IV 区Ⅴ層	
100	668		軒丸瓦	(18.0)	(8.4)	2.4	405	布目→一部ナデ?	ケズリ	N4/ 灰	N4/ 灰	粗	良	1 側面、瓦当剥離	09017-1	土坑 001	
100	669	37	軒丸瓦	(18.1)		4.9	944	布目→一部ナデ	工具痕(ケズリかナデ)	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	不良	両側面、瓦当剥離	09017-1	南拡張区Ⅱ層	凹面に布綴じ合せ目、瓦当接合部に斜格子刻み、復元瓦当径 16.0㎝
101	670	38/巻頭3	軒平瓦	39.1	(25.7)	4.1	4110	布目	顎:ケズリ、平瓦部:縄叩き→ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや粗	不良	瓦当	09017-1	土坑 001	広端幅推定 24.2cm・瓦当縦幅 4.1cm・顎幅 4.6cm、蕨手文・鋸歯文、段顎
101	671	38	軒平瓦	(8.3)	(9.8)	2.2	232		顎:ケズリ、平瓦部:ケズリ	―	N6/ 灰	密	良	瓦当	09017-1	W4-I 区Ⅴ層	顎幅 6.4cm、鋸歯文、凹面剥離面に糸切痕、段顎
101	672	38	軒平瓦	(6.0)	(12.5)	1.9	171		顎:ケズリ	―	N5/ 灰	密	良	瓦当	09017-1	W4-I 区Ⅴ層	顎幅 5.1cm、鋸歯文、段顎

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
101	673	38/巻頭3	軒平瓦	(12.3)	(13.9)	6.1	835	布目→一部ケズリ	顎:ナデ・ケズリ	N6/灰	N6/灰	やや粗	やや良	瓦当	09017-1	E4-III区Ⅴ層	瓦当縦幅6.1cm・顎幅7.0cm、均等唐草文、段顎
101	674	38	軒平瓦	(12.0)	(22.2)	3.6	706		顎:ケズリ・ナデ?、平瓦部:ナデ?	N6/灰	N5/灰	やや粗	やや良	瓦当	09017-1	W4-III区Ⅴ層	顎幅7.0cm、均等唐草文、段顎、凹面剥離面に糸切り痕
101	675	38	軒平瓦	(7.1)	(9.1)	3.3	197	布目→一部ナデ		5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	やや粗	良	広端面	09017-1	E4-IV区Ⅴ層	均等唐草文
102	676	39	鴟尾	(14.0)	(11.2)	4.1	653	ナデ	ケズリ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y6/2灰黄	やや粗	やや不良	鰭部付近	09017-1	E4-I区Ⅴ層	
102	677	39	鴟尾?	(8.0)	(7.4)	3.2	203	ケズリ(文様?)	不明	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	やや粗	やや不良		09017-1	土坑001炭溜まり2	
102	678	39	熨斗瓦	(25.7)	8.7	2.2	683	布目	ナデ	N4/灰	N4/灰	粗	やや良	1端面・両側面	09017-1	土坑001	端部幅8.7cm、平瓦を焼成前分割
102	679		熨斗瓦	(11.7)	(7.8)	2.4	292	布目	ケズリ	N4/灰	2.5Y5/1黄灰	やや密	やや不良	1端面・両側面	09017-1	E5-I区Ⅴ層	凹面に糸切り痕、平瓦を焼成前分割?
102	680	39	熨斗瓦	(16.8)	9.3	2.4	464	布目→一部ケズリ	縄叩き→ナデ	N3/暗灰	N4/灰	やや密	やや良	1端面・両側面	09017-1	E4-IV区Ⅴ層	端部幅9.3cm、平瓦を焼成前分割、凹面に撚紐圧痕(分割界線?)・縦方向窪み(布綴じ合せ目?)、端面に藁状圧痕?
102	681		熨斗瓦	(14.7)	8.1	1.9	310	布目	ケズリ?→一部調整	N5/灰	N5/灰	やや密	良・半須恵質	1端面・両側面	09017-1	土坑001上層	端部幅8.1cm、平瓦を焼成前分割
103	682	40	熨斗瓦	(13.7)	(18.1)	2.0	676	布目	縄叩き→ケズリ	10YR8/2灰白	10YR6/1褐灰	粗	やや不良	1端面・両側面	09017-1	W4-III区Ⅴ・Ⅵ層	平瓦を焼成前分割、分割裁面・分割破面
103	683		熨斗瓦	(10.3)	(10.3)	2.3	287	布目	ケズリ	N5/灰	N4/灰	やや密	やや不良	1端面・両側面	10078-1	E5南区Ⅱ'層	平瓦を焼成前分割、分割裁面・分割破面
103	684	40	道具瓦	(9.3)	(9.0)	1.9	204	布目	ケズリ	N5/灰	N4/灰	密	良・須恵質	1端面・両側面	10078-1	E5南区Ⅱ'層	平瓦を焼成前分割(隅木瓦か鬼瓦?)、凹面に糸切り痕、分割裁面
104	685	40	熨斗瓦?	(20.8)	(14.2)	2.4	974	布目→一部ナデ	縄叩き→ナデかケズリ?	10YR7/4にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	やや密	やや不良	両端面・1側面	09017-1	土坑001炭溜まり2	凹面に粘土板接合痕(S)・縦方向筋状痕跡、分割裁面・破面
104	686	40	熨斗瓦	(12.3)	(13.2)	2.0	306	布目	縄叩き→ケズリ	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	やや密	良	両側面	09017-1	土坑001上層	平瓦を焼成前分割、凹面に糸切り痕
104	687		熨斗瓦?	(12.2)	(10.3)	1.9	259	布目→ケズリ	縄叩き→全面ケズリ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	やや密	やや良	1端面・両側面	09017-1	土坑001上層	分割裁面?、平瓦を分割か、凹面に縦方向段(布綴じ合せ目?)
105	688		丸瓦	(18.2)	(9.5)	1.8	260	布目	ナデ?	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/2灰黄	やや粗	不良	狭端面・1側面	09017-1	土坑001炭溜まり2	行基、凹面布綴じ合せ目部で屈曲
105	689		丸瓦	(16.7)	(10.0)	1.7	350	布目	不明	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/2灰黄	やや粗	不良	狭端面・1側面	09017-1	土坑001上層	行基、凹面布綴じ合せ目部で屈曲
105	690	41	丸瓦	(15.1)	(10.1)	2.0	353	布目	不明	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや粗	やや不良	狭端面・1側面	09017-1	廃土	行基、凹面に布綴じ合せ目
105	691		丸瓦	(15.2)	(9.9)	1.8	326	布目	ナデ?	10YR8/3浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	やや不良	1側面	09017-1	E4-IV区Ⅴ層	凹面布綴じ合せ目部で屈曲
105	692		丸瓦	(10.6)	(12.1)	2.0	328	布目	ナデ?	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	やや密	やや不良	広端面・1側面	09017-1	W4-III区Ⅴ・Ⅵ層	凹面に布綴じ合せ目・撚紐痕(分割界線?)
106	693	41	丸瓦	(12.9)	(10.6)	1.5	418	布目	全面調整→一部ケズリかナデ?	N5/灰	N3/暗灰	やや粗	良・須恵質	狭端面・両側面	09017-1	土坑001	狭端幅8.0cm、行基、凹面に緩い段、ひずみ大
106	694		丸瓦	(25.2)	(14.4)	1.7	795	布目	縄叩き→ナデ	N4/灰	N4/灰	やや密	やや不良	狭端面・両側面	09017-1	土坑001	狭端幅10.0cm、行基、凹面に布綴じ合せ目
107	695	41	丸瓦	(20.3)	(9.5)	1.7	334	布目	ナデ?→一部布目	10YR8/4浅黄橙	10YR8/2灰白	やや粗	やや不良	狭端面・1側面	09017-1	E5-I区Ⅴ層	行基、凹面に縦方向窪み(布綴じ合せ目?)
107	696		丸瓦	(15.1)	(12.2)	1.6	397	布目	縄叩き→全面調整	7.5YR8/4浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	粗	やや不良	狭端面・両側面	09017-1	W4-I区Ⅴ層	狭端幅10.9cm、行基、凹面・側面に焼土付着

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
107	697	41	丸瓦	(18.8)	(11.5)	1.9	523	布目→一部ケズリ	ケズリ	N4/ 灰	N4/ 灰	やや粗	やや不良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	行基、凹面に粘土紐接合痕・布綴じ合せ目？
108	698	41	丸瓦	(13.8)	(12.5)	2.5	422	布目	ナデ・ケズリ	5Y5/1 灰	7.5Y6/1 灰	やや粗	良	玉縁端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	玉縁長 4.9cm、凹面に布綴じ合せ目？
108	699	41	丸瓦	(13.6)	(10.8)	2.7	335	布目	玉縁 : ナデかケズリ、胴部 : 縄叩き	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや密	不良	玉縁端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	玉縁長 4.9cm、布綴じ合せ目
109	700		丸瓦	(13.8)	(8.9)	2.5	340	布目	ナデ・ケズリ	N4/ 灰	N3/ 暗灰	粗	良	玉縁端面・1 側面	09017-1	土坑 001	玉縁長 6.5cm、端部に藁状圧痕
109	701	42	丸瓦	(15.5)	(10.4)	1.9	447	布目	玉縁 : ケズリ、縄叩き→全面ケズリ	10Y5/1 灰	N5/ 灰	やや粗	良	玉縁端面・1 側面	09017-1	E4-IV 区Ⅴ層	玉縁長 5.5cm、凹面に縦方向窪み (布綴じ合せ目とつまみ縫い ?)
109	702		丸瓦	(8.5)	(12.3)	1.6	290	布目	ナデ	10Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	やや粗	良	玉縁完存	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	玉縁長 7.3cm、凹面に布綴じ合せ目？
109	703	42	丸瓦	(14.7)	(10.0)	1.4	299	布目	ケズリ→一部布目痕	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/2 灰黄	粗	やや良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に布綴じ合せ目、ひずみ大
110	704		丸瓦	(12.4)	(11.6)	2.2	529	布目	ケズリ	N4/ 灰	N4/ 灰	粗	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	隅部切断
110	705	42	丸瓦？	(15.5)	(8.8)	1.5	121	布目	縄叩き→ナデかケズリ？	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	やや密	やや良	端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に撚紐痕、熨斗瓦？
110	706		丸瓦？	(9.2)	(8.7)	1.7	178	布目	不明	N4/ 灰	N4/ 灰	やや密	やや不良	1 側面・分割側面？	09017-1	土坑 005	凹面に粘土紐接合痕・縦斜め方向窪み (布綴じ合せ目 ?)、熨斗瓦？
111	707	43	平瓦	36.5	27.6	1.8	2714	布目	縄叩き→調整	N4/ 灰	N4/ 灰	やや粗	やや不良	狭端面一部・1 側面一部欠損	09017-1	土坑 001・046	広端幅 27.6cm・狭端幅 24.5cm
111	708	43	平瓦	(33.1)	(27.2)	1.9	2291	布目	縄叩き→ほぼ全面調整	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	やや粗	やや良	狭端面・両側面	09017-1	土坑 001 上層	狭端幅 25.3cm、凹面に糸切り痕・縦方向撚紐状痕跡 (分割界線か布綴じ合せ目 ?)
112	709		平瓦	(13.7)	28.0	2.1	1105	布目	不明	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	やや粗	不良	広端面・両側面	09017-1	土坑 001	広端幅 28.0cm
112	710		平瓦	(18.4)	(25.6)	1.9	1205	布目→ナデ？	縄叩き→ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/6 黄橙	やや粗	不良	狭端面・両側面	09017-1	土坑 001 上層	狭端幅 24.4cm、凹面に縦方向棒状窪みあり (分割界線 ?)
112	711	42	平瓦	(27.2)	(26.7)	2.1	2039	布目	縄叩き→一部ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/1 灰白	やや粗	不良	両側面	09017-1	土坑 001 上層	
112	712		平瓦	(16.4)	(26.1)	2.3	1236	布目	縄叩き→全面調整 (ケズリ ?)	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	やや粗	やや不良	狭端面・両側面	09017-1	土坑 001	狭端幅 25.2cm、凹面に糸切り痕
112	713	42	平瓦	(15.0)	(23.4)	2.3	1010	布目	縄叩き→全面ナデかケズリ→一部ハケ状痕	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	やや粗	やや良	狭端面・両側面	09017-1	土坑 001	狭端幅推定 22.3cm、凹面に糸切り痕・円形窪み (分割界点 ?)
113	714	44	平瓦	37.0	(18.4)	2.7	2077	布目→一部ケズリ	縄叩き→ケズリ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	やや粗	やや不良	両端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凹面に縦方向窪み (布綴じ合せ目 ?)、凸面に焼土付着
114	715	44	平瓦	37.1	(13.3)	2.3	980	布目	縄叩き→全面ケズリ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	やや不良	両端面・1 側面	09017-1	E4-III 区Ⅴ層	凹面に横方向窪み (枠板綴じ痕 ?)
114	716	45	平瓦	(29.4)	(20.3)	2.4	1934	布目→一部ケズリ・ナデ	縄叩き→全面ケズリ	N6/ 灰	N5/ 灰	やや粗	やや良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凹面に糸切り痕・撚紐痕跡 (分割界線)・横方向窪み (枠板綴じ痕 ?)

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
115	717	45	平瓦	(15.8)	(13.2)	2.7	807	布目→ケズリ→指紋	縄叩き→ほぼ全面ケズリ	N5/ 灰	N4/ 灰	粗	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凸面に融着片、端部一部に藁状圧痕、隅部切断
115	718	43	平瓦	(19.0)	(14.0)	2.0	792	布目→一部ナデ・縄叩き	縄叩き→ナデ？	5Y4/1 灰	N4/ 灰	やや粗	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凸面に糸切り痕・縦斜め方向窪み (布綴じ合せ目 ?)、凸面土付着、端面に藁状圧痕、隅部切断
115	719	43	平瓦	(13.0)	(19.3)	2.5	739	布目	縄叩き→一部ナデ？	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	やや粗	やや不良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 3	凹面に布綴じ合せ目、端面に藁状圧痕
116	720	43	平瓦	(17.2)	(12.6)	1.8	475	布目→一部ナデ	縄叩き→ほぼ全面ケズリ	2.5Y8/4 淡黄	10Y5/1 灰	粗	やや不良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に布綴じ合せ目？
116	721	45	平瓦	(14.7)	(11.2)	1.8	410	布目→一部調整	縄叩き→ほぼ全面調整	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR6/1 褐灰	やや粗	やや不良	広端面・1 側面	09017-1	W4-I 区Ⅴ層	凹面に布綴じ合せ目、凹凸面土付着
116	722	45	平瓦	(22.6)	(19.6)	2.6	1442	布目	縄叩き→一部調整	10YR4/1 褐灰	2.5Y6/3 にぶい黄	やや粗	やや不良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に糸切り痕・粘土板合せ目？
116	723		平瓦	(13.8)	(13.7)	1.7	322	布目	縄叩き→一部ナデかケズリ・指痕	7.5Y4/1 灰	7.5Y5/1 灰	やや密	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に布重ね目
117	724		平瓦	(17.7)	(11.5)	1.7	473	布目	縄叩き→全面ケズリ→一部ケズリ・ナデ	N3/ 暗灰	N5/ 灰	粗	良	広端面・1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	ひずみ大、凹面に土付着
117	725		平瓦	(24.0)	(12.9)	2.1	808	布目	縄叩き→一部ハケ状痕跡→一部布目	2.5Y5/1 黄灰	7.5Y5/1 灰	やや粗	やや良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 001	凹面に糸切り痕・布綴じ合せ目、凸面一部土付着
117	726		平瓦	(10.3)	(13.5)	1.8	267	布目	縄叩き→ナデ？	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	不良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凹面に糸切り痕、隅部切断
117	727		平瓦	(13.5)	(8.0)	1.8	228	布目	縄叩き→ケズリ→ナデ？	2.5Y5/1 黄灰	10Y4/1 灰	密	やや良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凹面に糸切り痕・布綴じ合せ目
118	728		平瓦	(20.7)	(18.3)	1.8	784	布目	縄叩き→一部ナデ？	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	粗	やや良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 046	凹面に糸切り痕・横方向窪み (枠板綴じ痕 ?)
118	729	46	平瓦	(13.8)	(13.6)	2.3	587	布目	縄叩き→全面ケズリ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	やや粗	やや良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 001	凹面側剥離面に糸切り痕
118	730	46	平瓦	(17.6)	(12.3)	1.9	382	布目	縄叩き→ケズリ？	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	粗	不良	1 端面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 2	凹面に糸切り痕・円形窪み・縦方向窪み (布綴じ合せ目 ?)
118	731		平瓦	(10.5)	(10.3)	2.1	290	布目	ケズリ→一部ハケ状痕	7.5YR6/1 褐灰	7.5YR6/2 灰褐	やや密	良・須恵質	1 端面	09017-1	E4-III 区Ⅴ層	
118	732	46	平瓦	(12.6)	(10.4)	1.8	228	布目	縄叩き→一部ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	やや粗	やや良	1 端面	09017-1	土坑 046	枠板圧痕幅狭い
119	733	47	平瓦	(22.3)	(17.9)	1.7	786	布目	縄叩き→ケズリ？→一部ハケ状・ケズリ状痕	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y5/1 黄灰	粗	やや良	1 側面	09017-1	土坑 001 炭溜まり 3	
119	734	46	平瓦	(28.1)	(24.7)	1.8	1539	布目	縄叩き→一部ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	やや粗	良	広端面・両側面	09017-1	土坑 001 上層	広端幅推定 25.8cm、ひずみ大、凹面に糸切り痕・焼成前線刻、凸面・側面に焼土付着、隅部切断
120	735	47	平瓦	(8.3)	(15.8)	1.8	326	布目→縄叩き	縄叩き→調整	N5/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	1 端面・1 側面	09017-1	土坑 001・046	凹面に糸切り痕？・隅部切断
120	736	47	平瓦	(11.9)	(13.7)	2.0	544	布目→縄叩き	縄叩き→ケズリ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	やや密	良	1 側面	09017-1	土坑 001 上層	凹面に糸切り痕
120	737	47	平瓦	(15.5)	(17.0)	1.8	575	布目	縄叩き→調整？	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	やや密	不良	広端面・1 側面	09017-1	E3-I 区Ⅵ層	釘孔 1

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存)(cm)	幅(残存)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整(凹面)	調整(凸面)	色調(凹面)	色調(凸面)	胎土	焼成	残存部	調査区	出土位置	備考
120	738	47	平瓦	(13.0)	(13.7)	2.2	410	布目	全面調整？	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	やや不良	狭端面・1 側面	09017-1	W4-III 区Ⅴ層	1 孔
120	739		平瓦	(10.4)	(11.3)	2.3	291	布目	縄叩き→全面調整？→一部ハケ状痕	N5/ 灰	N4/ 灰	密	不良	1 側面	09017-1	W4-I 区Ⅴ層	平瓦を焼成前分割・隅切の平瓦
121	740		平瓦	(13.4)	(12.3)	2.3	546	布目	縄叩き→全面調整	10YR6/3 にぶい黄橙	N3/ 暗灰	やや粗	やや不良	狭端面・1 側面	09017-1	E4-III 区Ⅴ層	凹面に粘土紐接合痕
121	741	47	平瓦	(15.7)	(13.2)	1.8	407	布目	縄叩き	N4/ 灰	N4/ 灰	やや粗	不良	狭端面・1 側面	09017-1	W5-I 区Ⅴ層	凹面に粘土紐接合痕？
121	742	47	平瓦	(13.4)	(13.8)	2.5	445	不明	布目	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	粗	不良		09017-1	撹乱	凸面布目平瓦
121	743		平瓦	(7.7)	(10.4)	2.2	210	全面ケズリ	縄叩き→一部調整・ハケ状痕	N5/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	1 側面	09017-1	土坑 046	
121	744		平瓦？	(12.8)	(11.0)	1.8	210	布目→一部ケズリ	調整？	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	やや不良	1 側面	09017-1	E4-IV 区Ⅴ層	凹面糸切り痕・縦方向撚紐圧痕 (分割界線 ?)、熨斗瓦？
121	745		平瓦？	(8.8)	(5.8)	1.3	114	不明	縄叩き→調整	N4/ 灰	N5/ 灰	やや密	良	狭端面・1 側面	09017-1	土坑 046	凹面糸切り痕・円形窪み (分割界点?)、熨斗瓦?

石器・石製品観察表

図番号	遺物番号	図版番号	器種	全長(残存長)(cm)	最大幅(残存幅)(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	調査区	出土位置	備考
15	8		砥石	(12.5)	5.5	2.5	324	砂岩 (褐色)	11001-5	4 区Ⅱ - Ⅲ層	一端欠損
36	111		砥石	(4.2)	3.2	1.1	26	砂岩 (淡緑灰色)	11001-4	N5 区Ⅱ - Ⅵ層	一端欠損
78	543	48	石包丁	(10.4)	5.7	0.7	69	片岩 (緑灰色)	09017-2	E3- Ⅱ区Ⅵ B 層	左孔内面～周縁紐ずれ痕、両刃、孔外径左 : 上面 10mm/ 下面 10.5mm、孔外径右 : 上面 10.6mm/10.2mm、孔内径左 :5.5mm、孔内径右 :5.3mm
78	544		砥石	(7.5)	4.7	2.2	100	泥岩 (緑灰色)	09017-2	E1- Ⅱ区Ⅴ層	一端欠損、全面に擦痕
78	545		砥石	(10.4)	(6.4)	2.2		砂岩 (淡緑色)	11001-6	2 区Ⅵ B 層	1 側縁欠損、両面使用、自然面残存、円礫素材
122	746	48	尖頭器	(5.4)	3.2	1.1	19	サヌカイト (灰色)	09017-1	W0 区Ⅵ層	先端部欠損
122	747	48	石核	7.8	7.4	4.0	219	サヌカイト (灰色)	09017-1	E4 区Ⅸ A 層	ほぼ完形、風化顕著、自然面あり、角礫素材
123	748		磨石	6.3	5.5	4.8	216	砂岩 (緑色)	09017-1	土坑 001 上層	完形、一部黒変
123	749	48	石棒	(18.2)	6.2	5.8	1044	片岩 (緑色)	09017-1	廃土	両端欠損

金属製品観察表

図番号	遺物番号	図版番号	種別	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	調査区	出土位置	備考
79	546	48	銅銭	2.5	1.2	1.8	09017-2	W3- Ⅲ区Ⅳ層	一部欠損、破損により 3 分割、寛永通宝
124	750	48	銅銭	2.5	1.2	2.2	10078-1	W1 西区Ⅲ層	一部欠損、元祐通宝

図　　版

調査区遠景（南から）

図版一　空中写真・一一〇〇一―五区遺構

1　和泉寺跡・府中遺跡空中写真（昭和36年度大阪府撮影）

2　中世遺構検出面東部（西から）

1　中世遺構検出面西部(西から)

2　弥生時代遺構検出面西部(西から)

1　耕作溝検出面東部(東から)

2　中世遺構検出面東部(東から)

1　弥生時代遺構検出面中央部（南西から）

2　落ち込み２土器出土状況（北東から）

3　落ち込み２土器出土状況（東から）

4　落ち込み２土器出土状況（北東から）

5　落ち込み２土器出土状況（北から）

1　近世遺構検出面（南東から）

2　溝042（南東から）

3　溝042（南から）

4　溝042土層断面（南から）

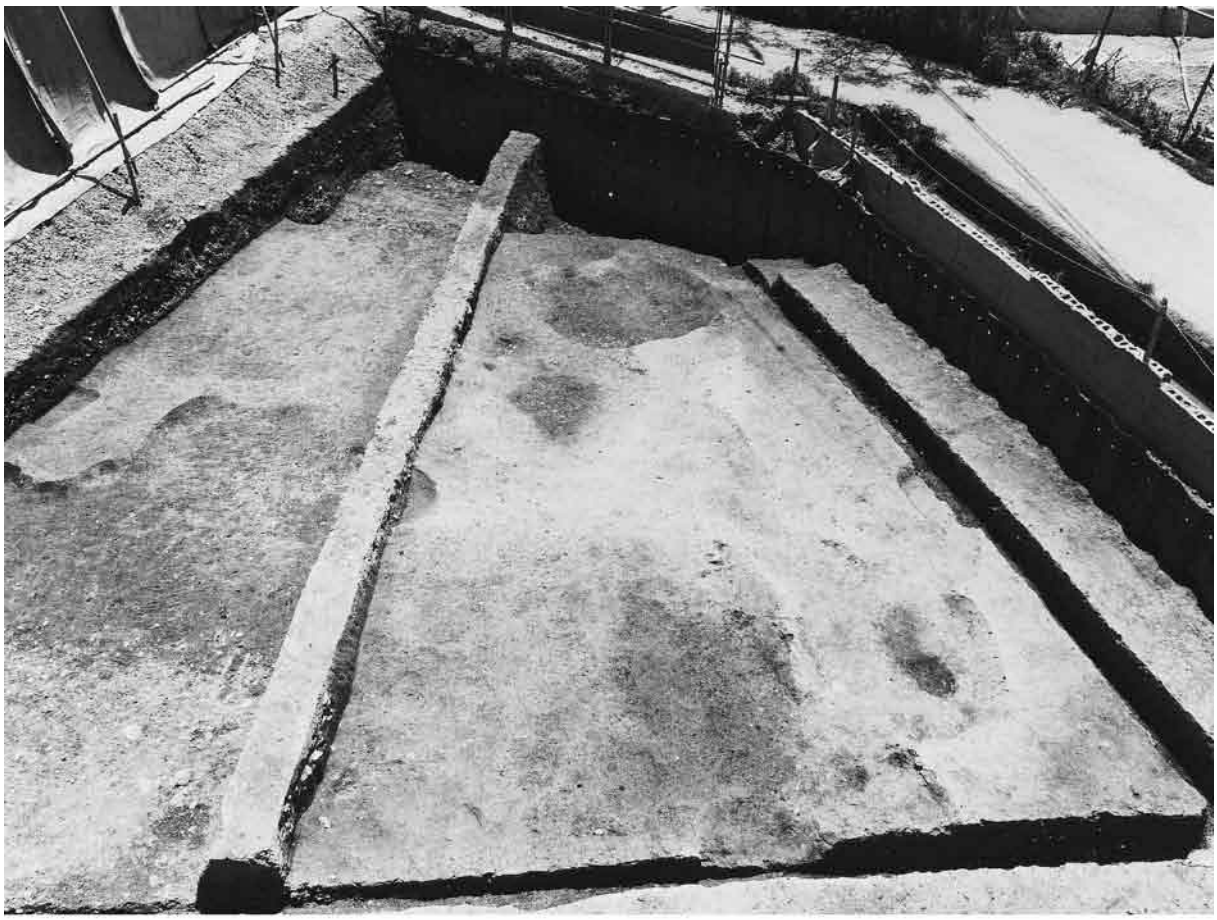
5　中世遺構検出面（09017-2区　南東から）

6　中世遺構検出面（09017-2区　南西から）

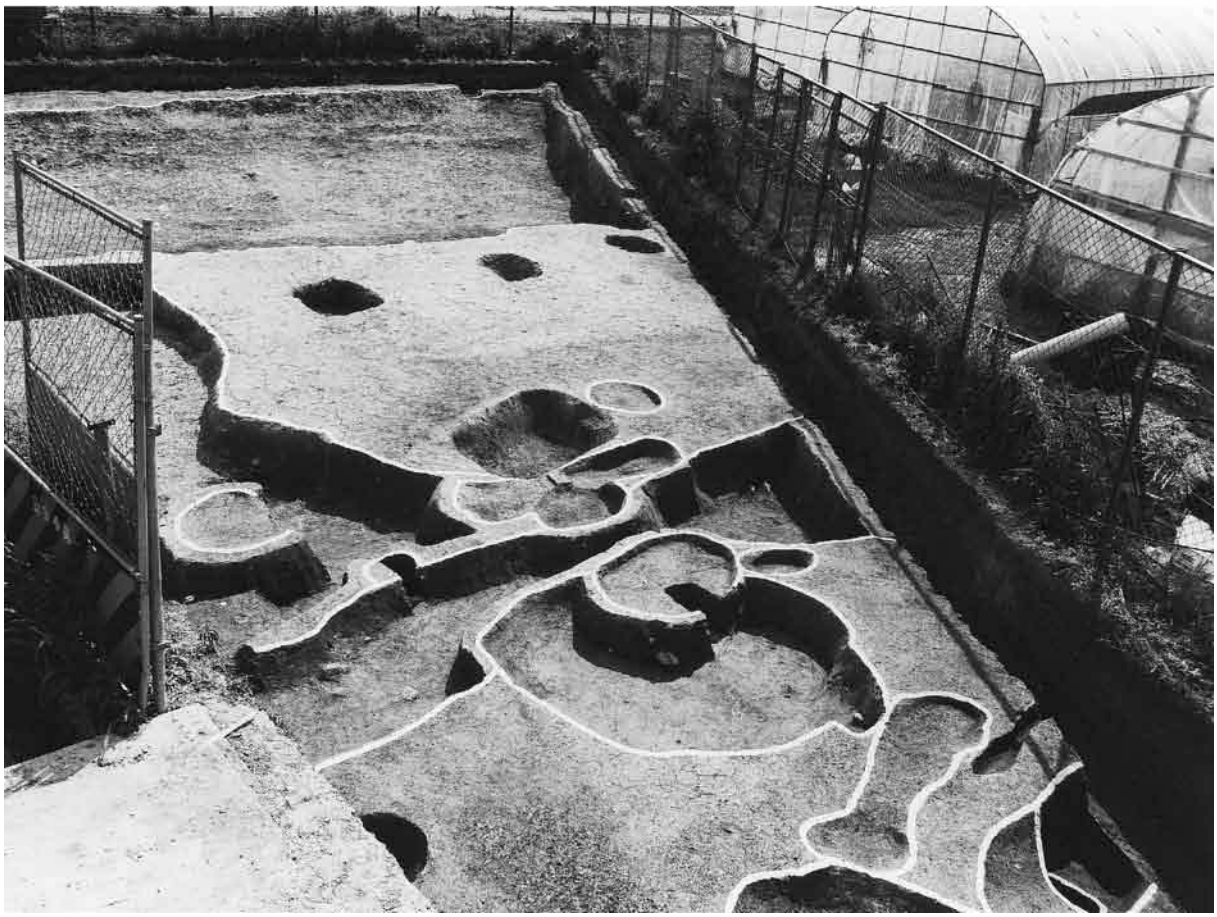
7　中世遺構検出面（10078-3区　東から）

8　中世遺構検出面（10078-3区　北から）

図版六　〇九〇一七―二区他遺構



1　中世遺構検出面（10001-2区　北から）



2　中世遺構検出面（09049-1区　北東から）

1　中世遺構検出面（10078-2区　南から）

2　中世遺構検出面（10078-2区　北から）

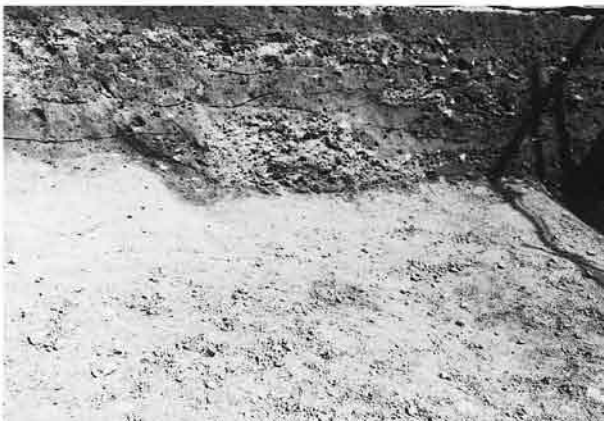
3　溝09049-002・003（南から）

4　溝09049-002・003（南東から）

5　流路001（09049-1区　東から）

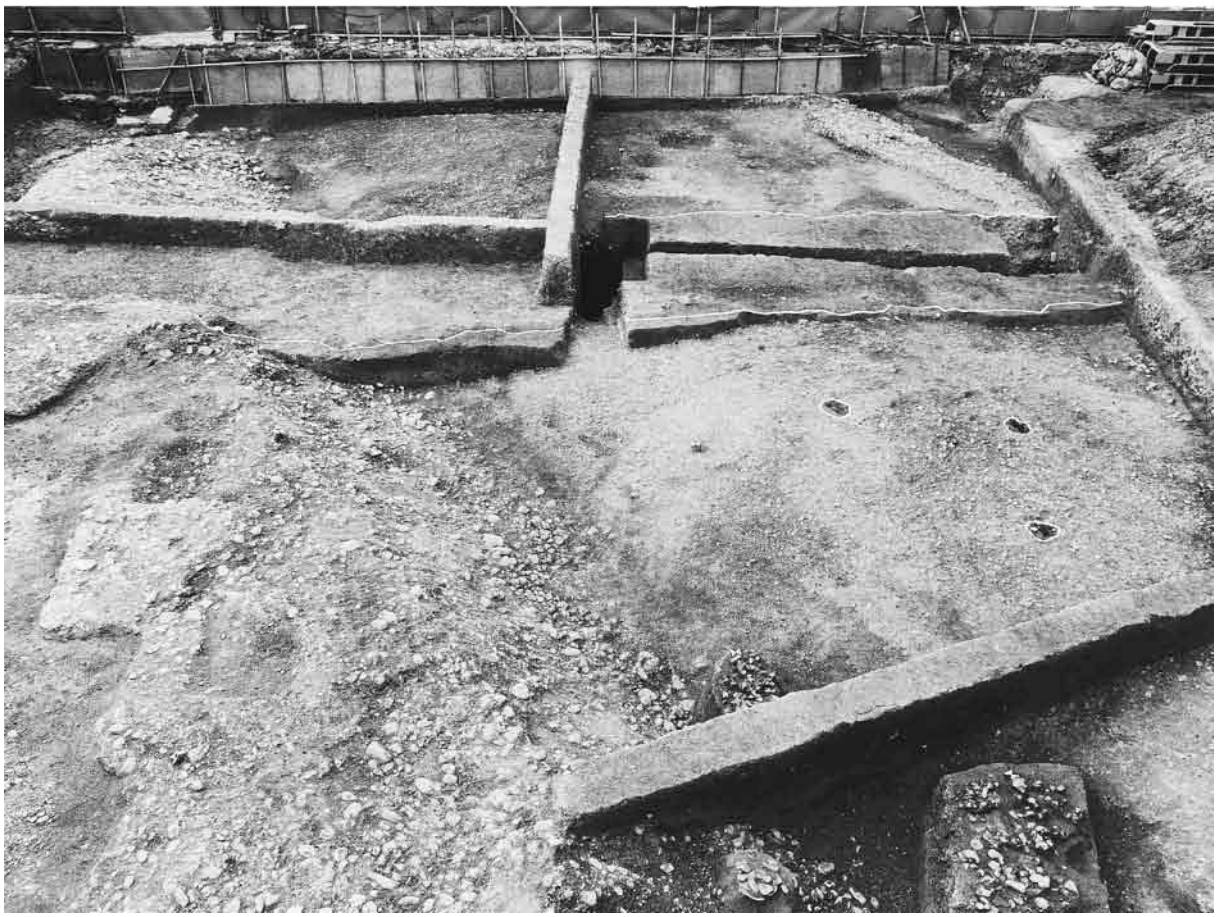
6　流路001（10001-2区　西から）

7　流路001土層断面（09049-1区　東から）



8　流路001土層断面（10001-2区　西から）

1　弥生～古墳時代遺構検出面（09017-2区　南西から）



2　弥生～古墳時代遺構検出面（09017-2区　東から）

1　弥生～古墳時代遺構検出面（10001-2区　北から）

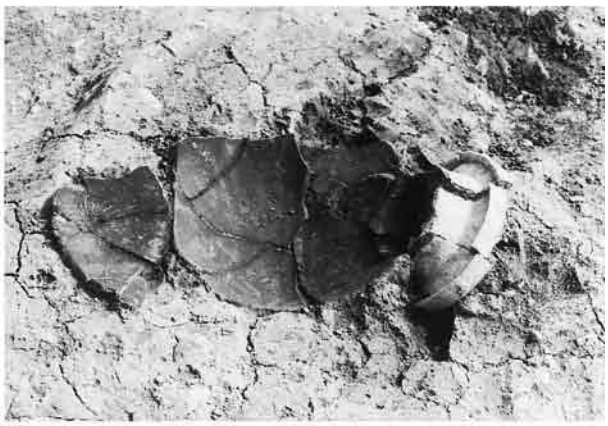
2　弥生～古墳時代遺構検出面
（10078-3区　東から）

3　弥生～古墳時代遺構検出面
（10078-3区　北東から）

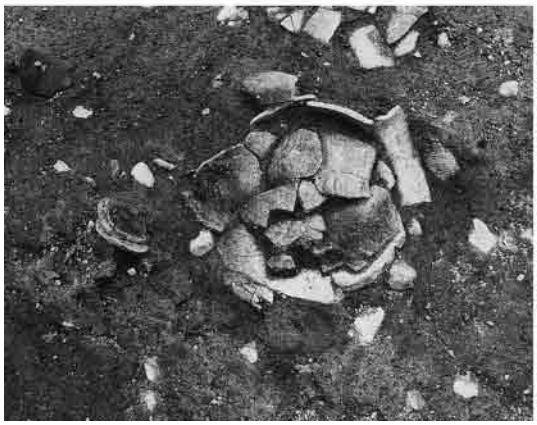
4　柱穴004土器出土状況

1　弥生～古墳時代遺構検出面（09049-1区　北東から）

2　自然流路土器出土状況
（09049-1区　南東から）



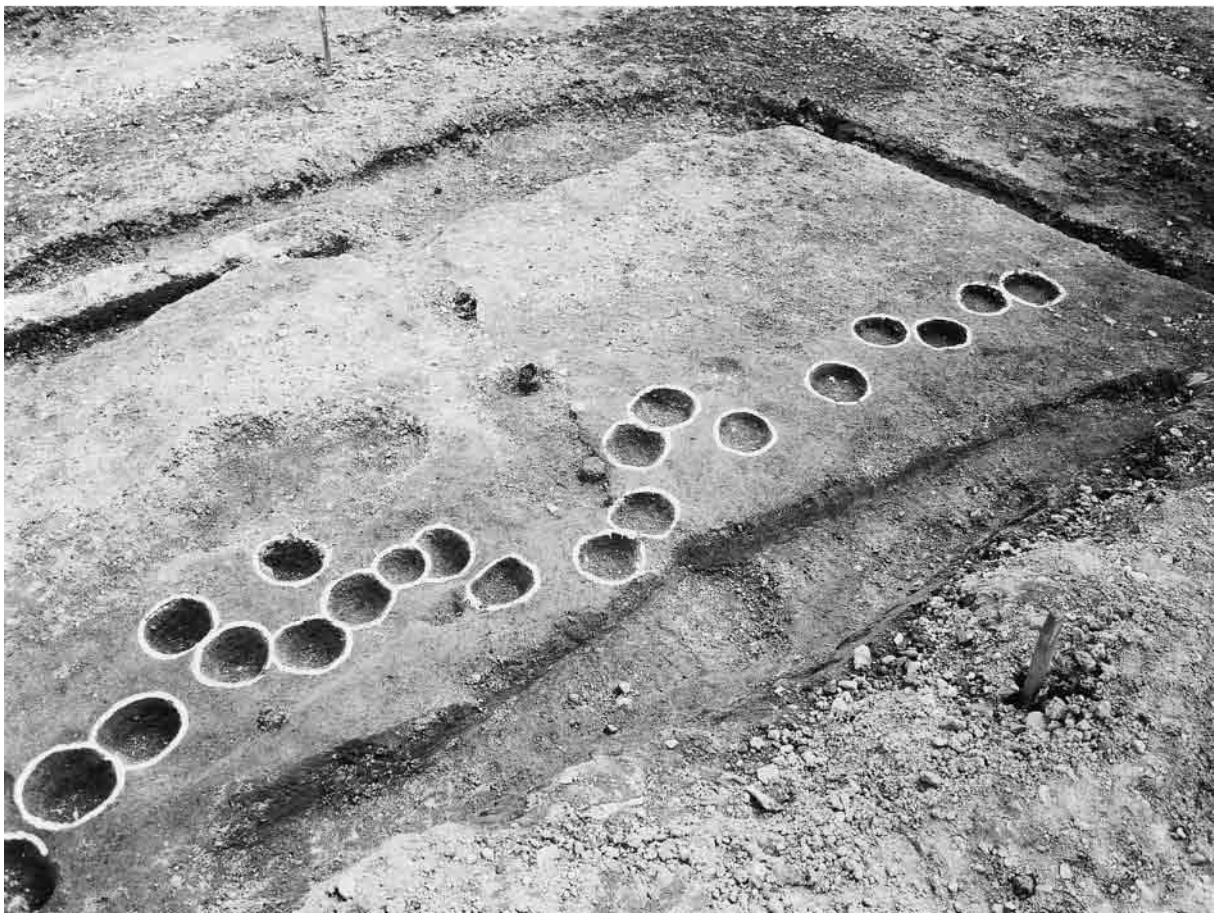
3　自然流路土器出土状況
（09049-1区　北東から）



4　自然流路土器出土状況
（09049-1区　南から）

5　自然流路土層断面
（09049-1区　北東から）

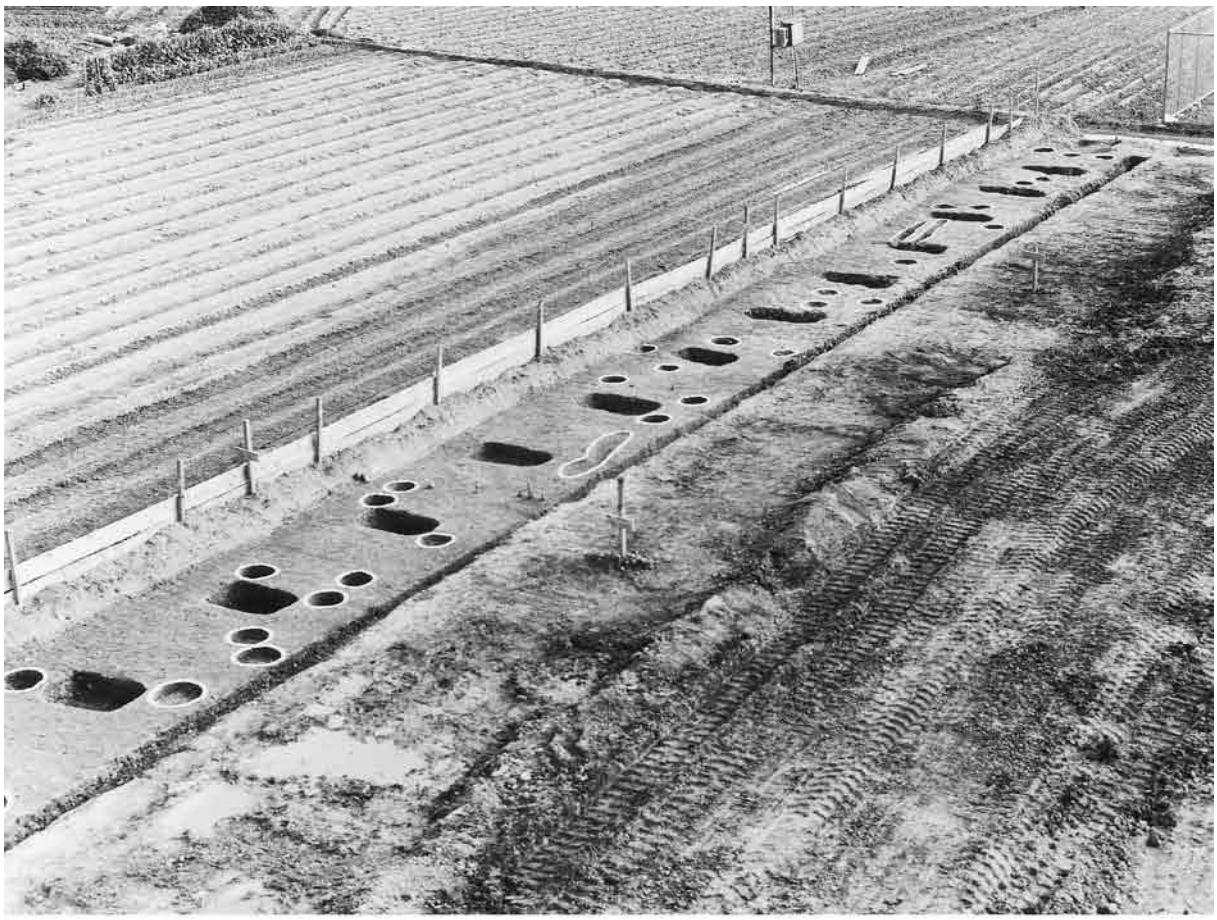
1　中世遺構検出面（11001-8区　南東から）



2　中世遺構検出面（11001-8区　南西から）

1　中世遺構検出面（09017-1区　南西から）

2　中世遺構検出面（10078-1区　北西から）

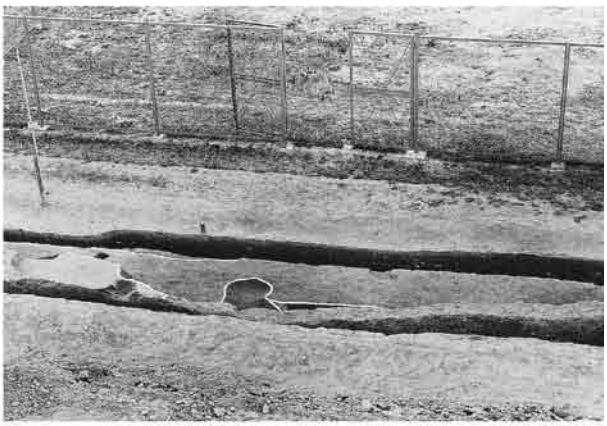


1　中世遺構検出面（10078-1区　北から）

2　中世遺構検出面（10078-1区　西から）

1　奈良時代遺構検出面（09017-1区　南西から）

2　溝033（北西から）



3　落ち込み004（北から）

4　土坑001土層断面（南西から）

5　落ち込み004土層断面（北西から）

図版一五　一一〇〇一―四区出土土器

23

38

40

41

64

45

61

59

包含層・落ち込み２出土土器

図版一六　一一〇〇一—四区出土土器

57

58

60

63

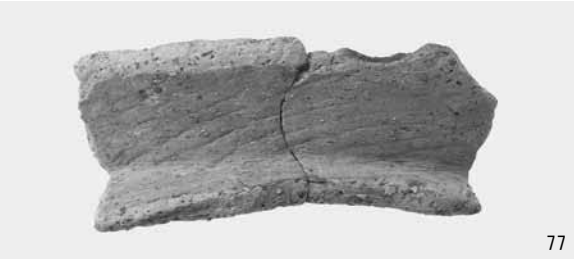
70

73

74

落ち込み２出土土器

図版一七　一一〇〇一―四区出土土器


77

76

71

75

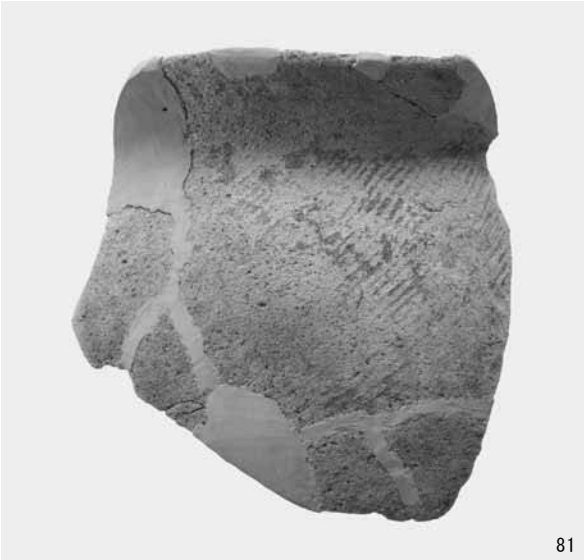
80

80

79

落ち込み２出土土器

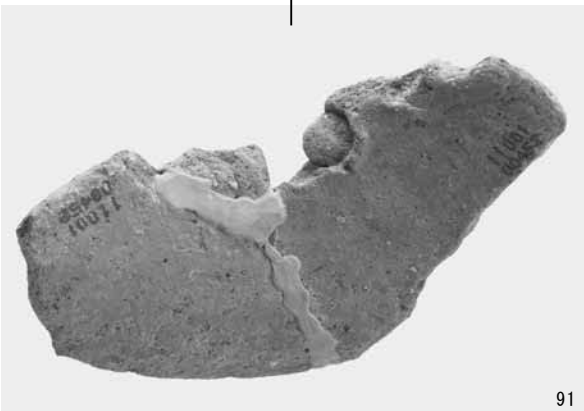
図版一八　一一〇〇一―四区出土土器


81

92

91

93


91

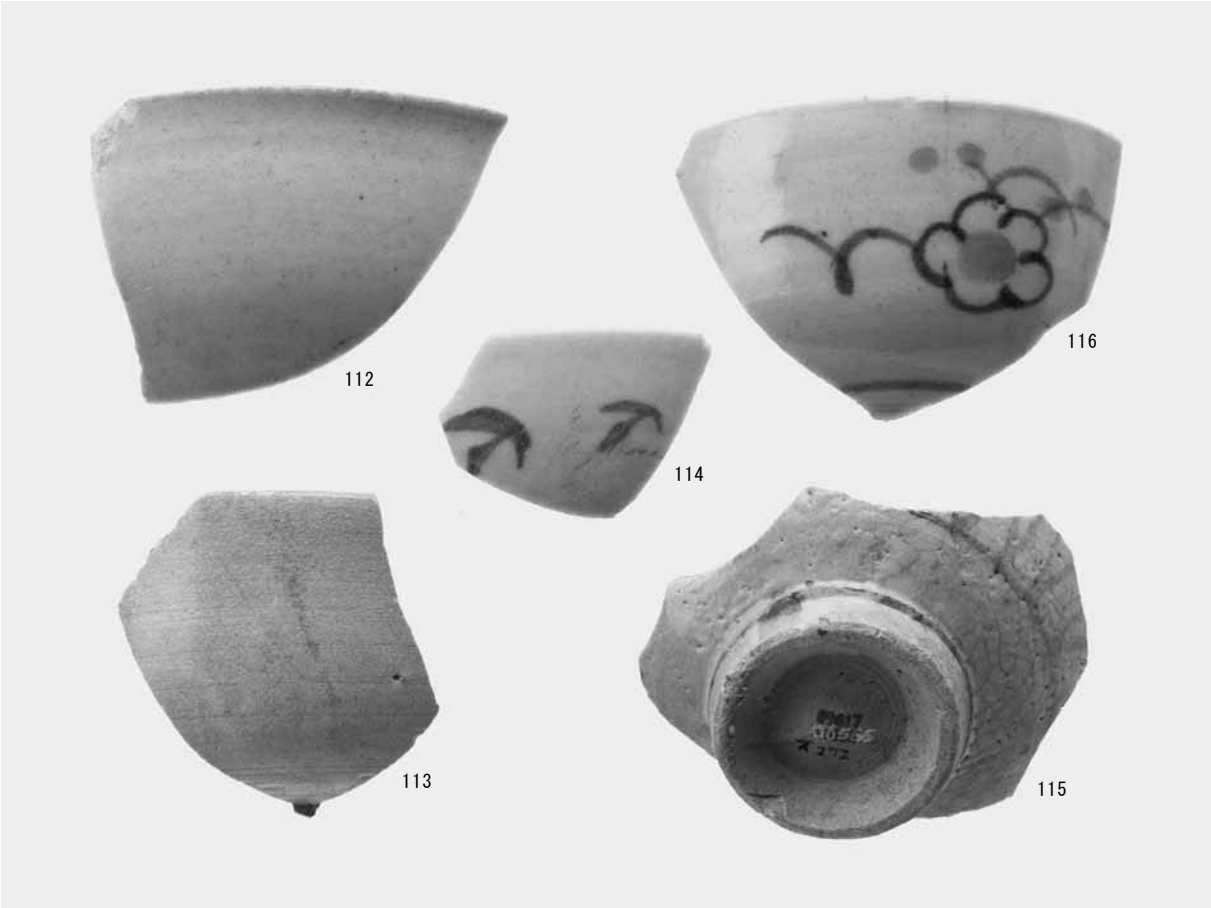
94

95

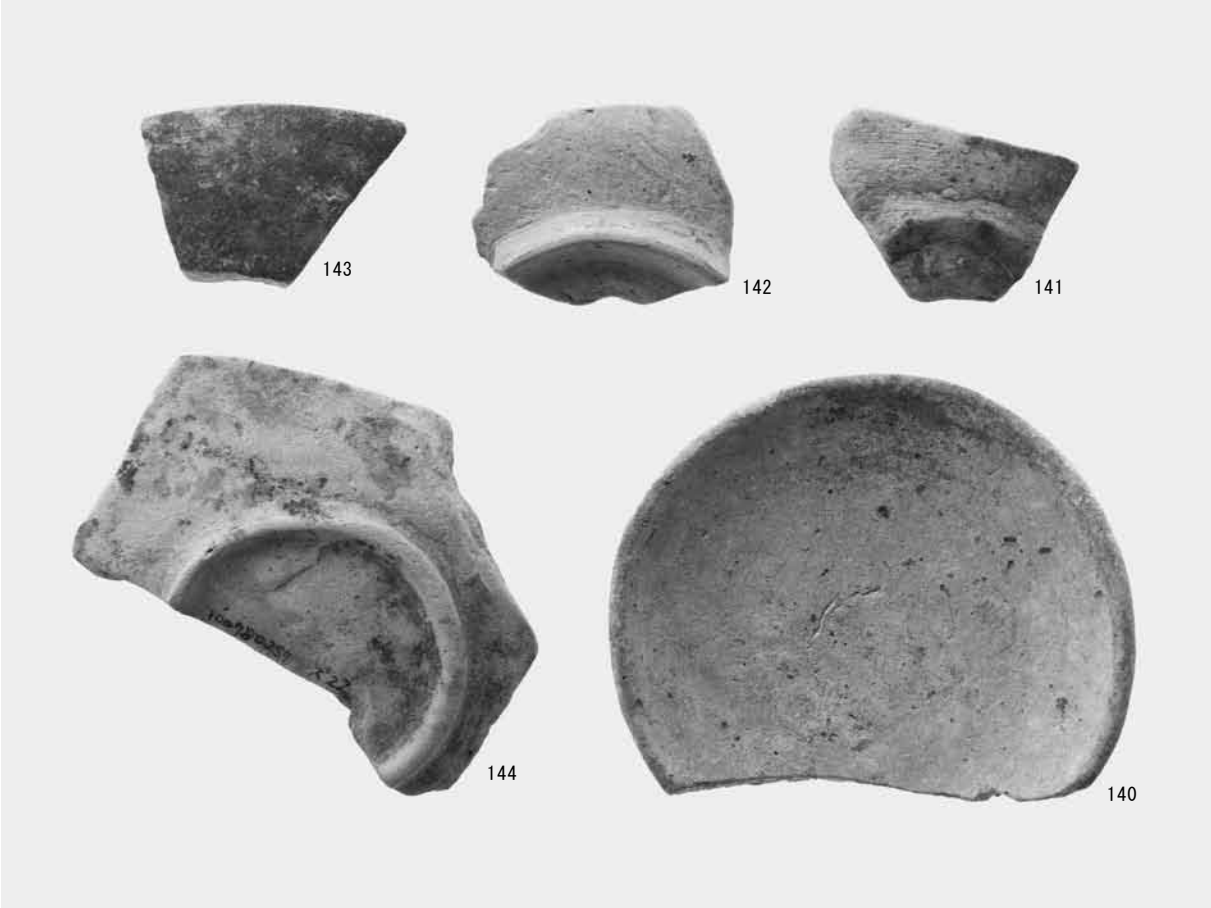
96

落ち込み２出土土器

図版一九　〇九〇一七―二区他出土土器



1　溝042出土土器



2　中世遺構検出面遺構出土土器

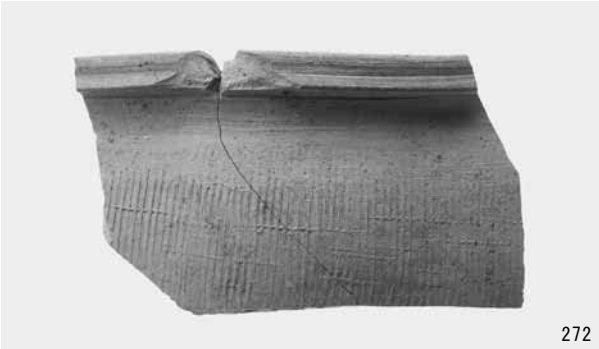
図版二〇　〇九〇一七—二区他出土土器

152

158

258

187


272

184

275

205

流路 001 出土土器

図版二一　〇九〇一七—二区他出土土器

1　流路001出土土器

2　柱穴004・ピット062出土土器

図版二三一　〇九〇一七—二区他出土土器

301

327

332

348

344

334

335

347

包含層出土土器

図版二三　〇九〇一七—二区他出土土器

350

352

354

365

378

357

379

360

包含層出土土器

図版二四　〇九〇一七—二区他出土土器

349

410

411

409

381

439

382

441

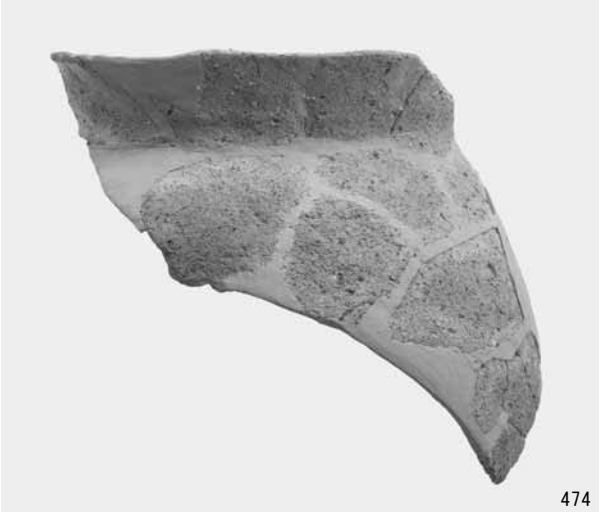
包含層出土土器

図版二五　〇九〇一七—二区他出土土器

440

440

435


474

500

505

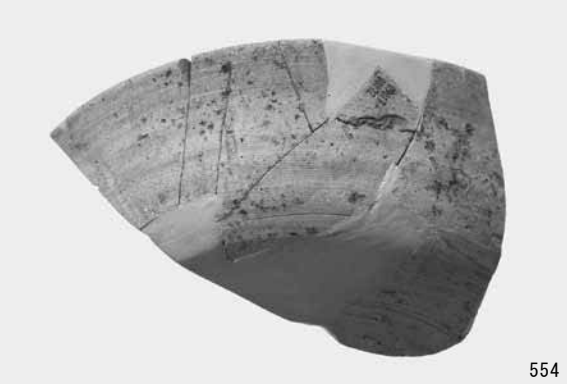
445

494

包含層出土土器

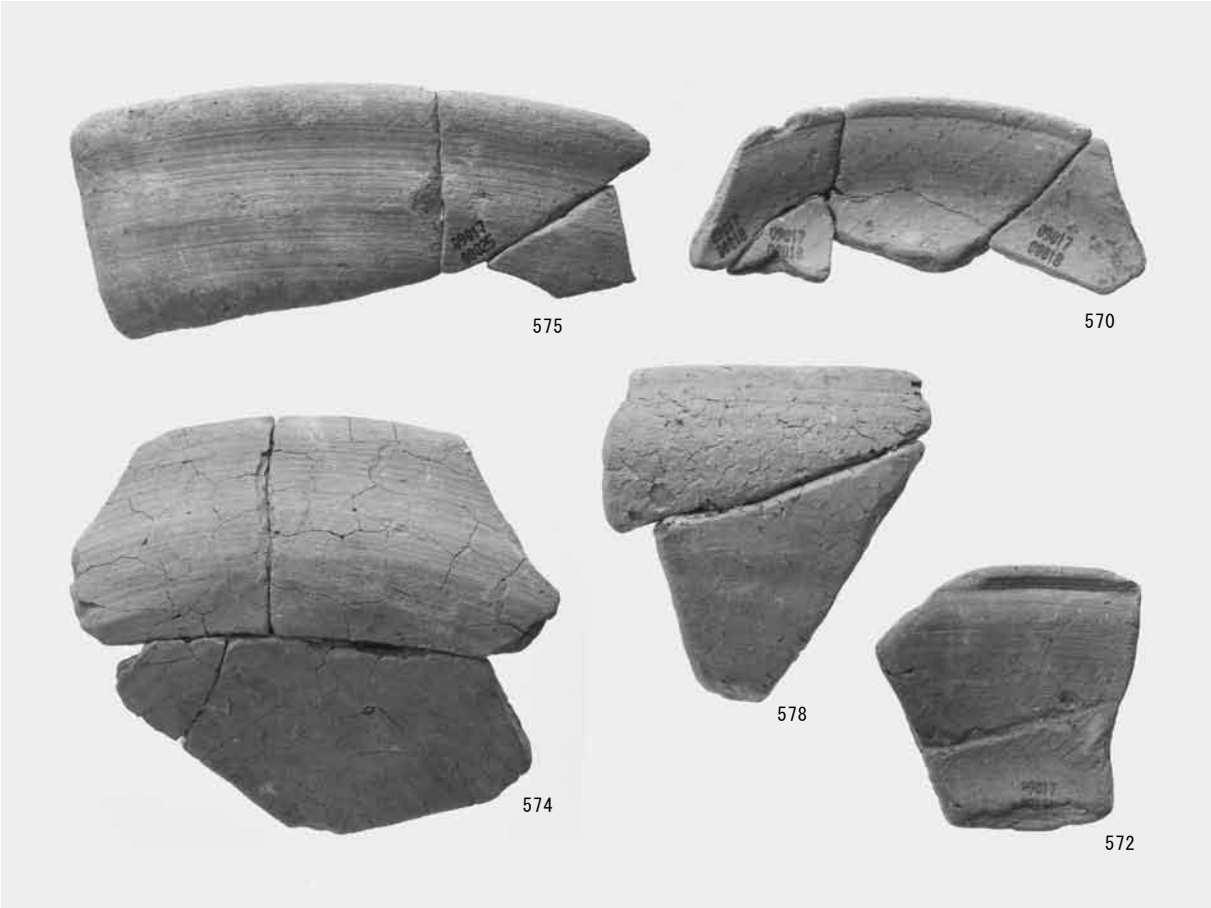
図版二六　〇九〇一七—二区他・〇九〇一七—一区他出土土器

1　09017-2区他包含層出土土器

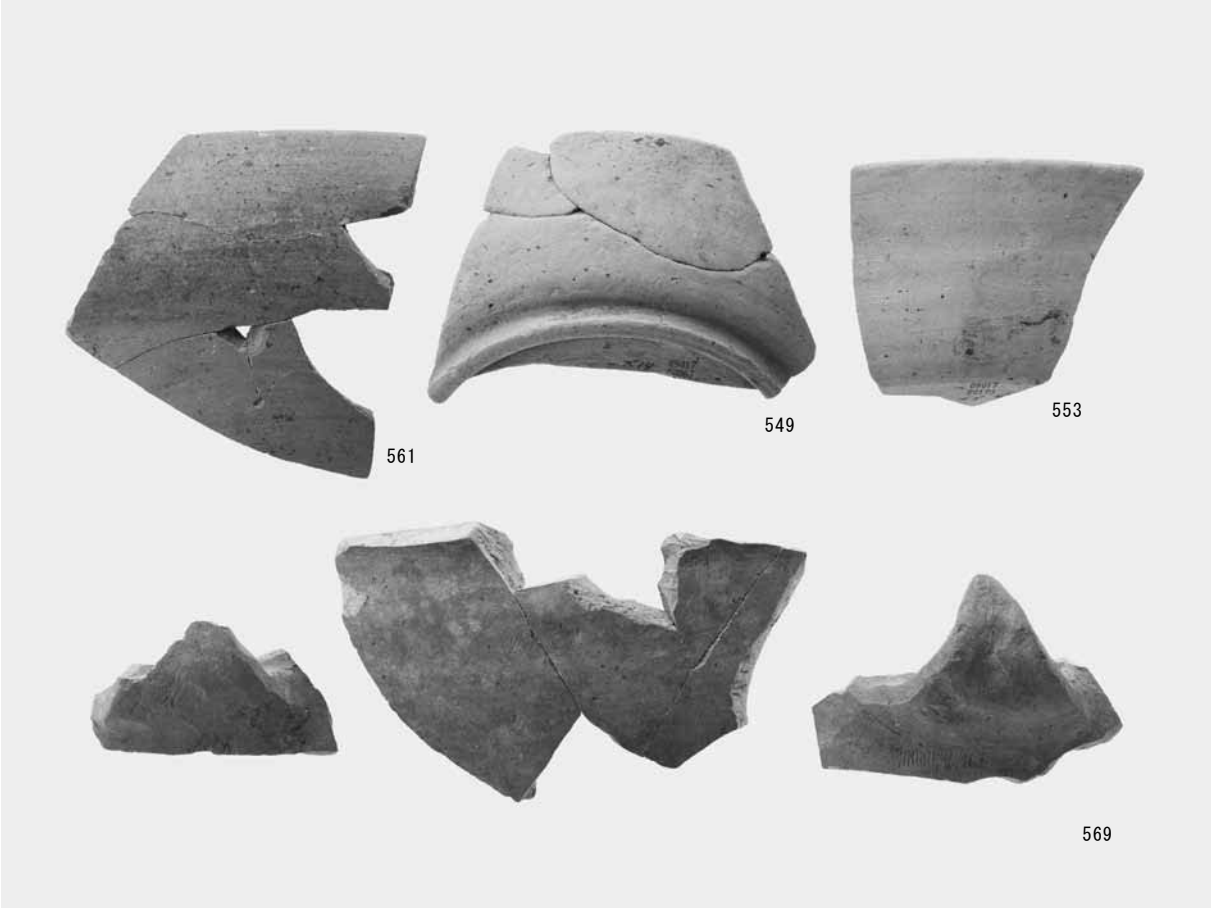


2　09017-1区他土坑001出土土器

図版二七　〇九〇一七—一区他出土土器

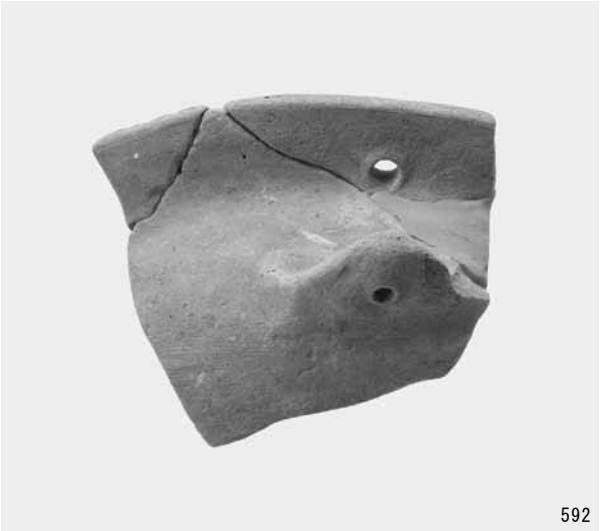


1　土坑001出土土器

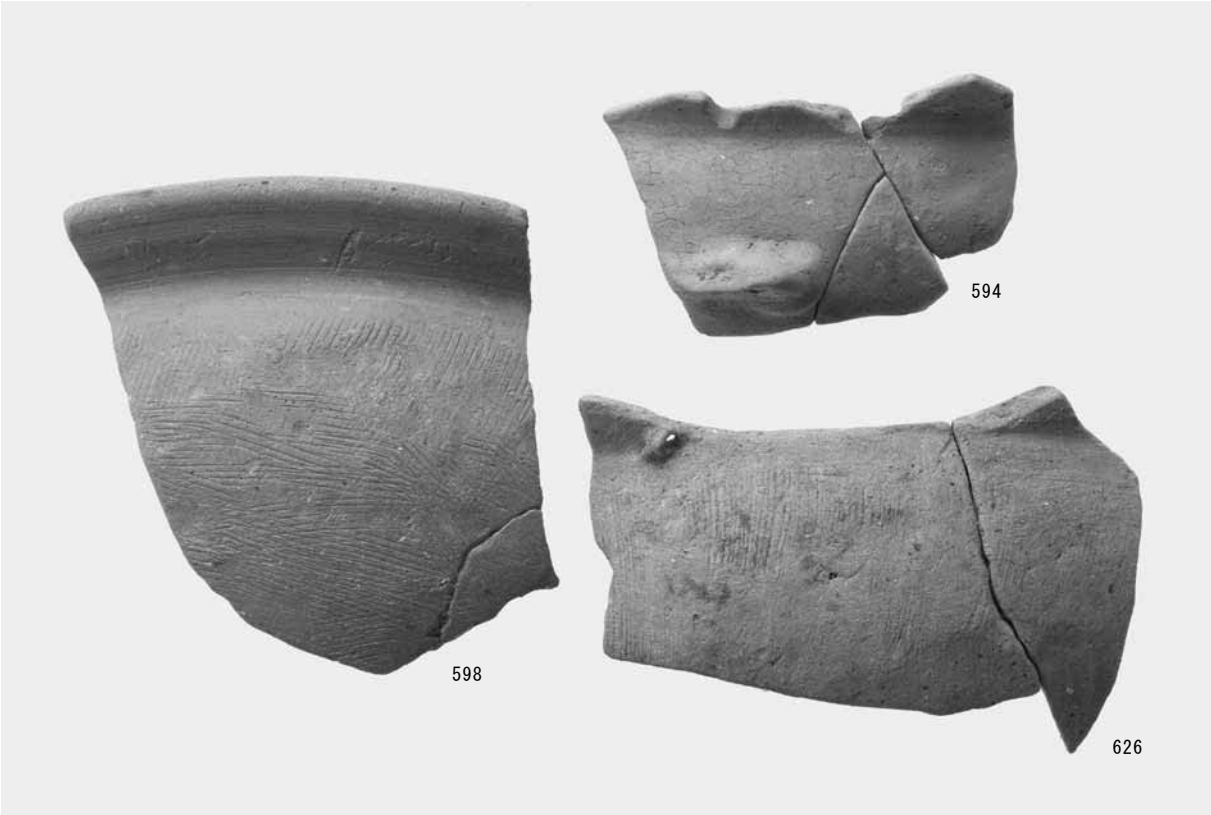


2　土坑001出土土器

図版二八　〇九〇一七—一区他出土土器



1　土坑001出土土器



2　土坑001出土土器

図版二九　〇九〇一七—一区他出土土器

604

599

596

597

588

587

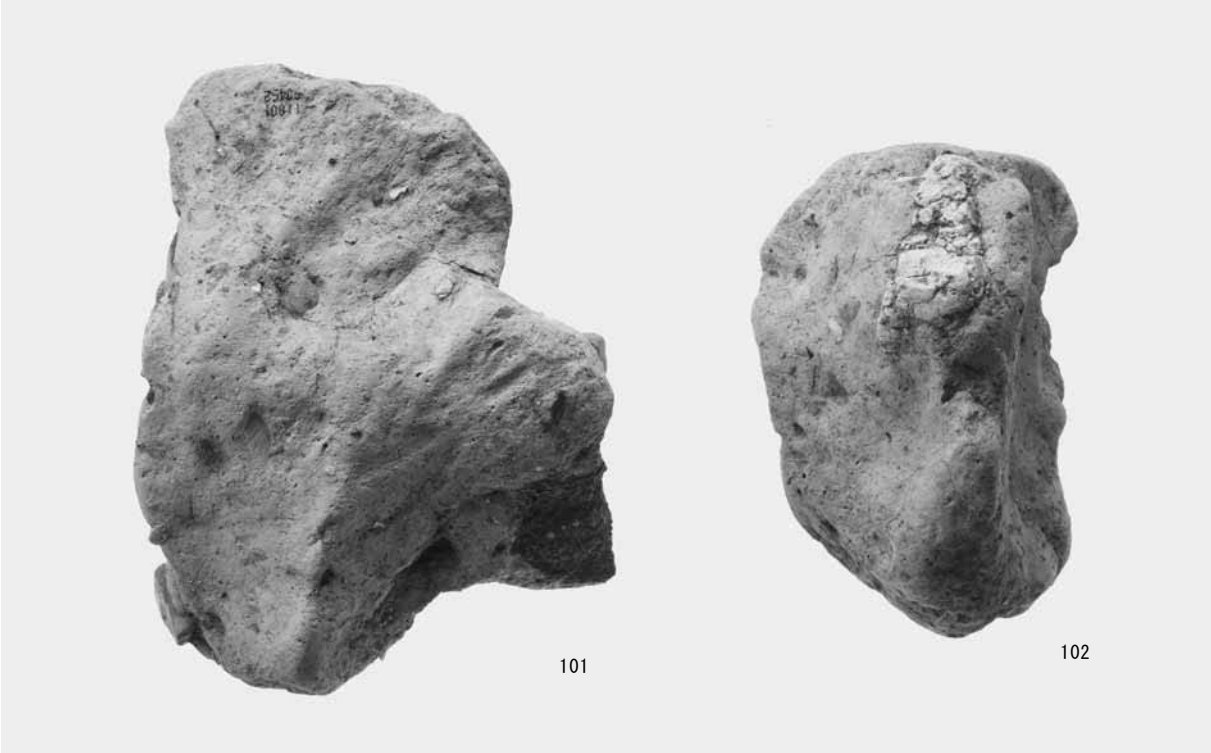
589

582

土坑001出土土器

図版三〇　〇九〇一七—一区他出土土器・一一〇〇一—四区出土粘土塊

1　09017-1区他落ち込み137・包含層出土土器



2　11001-4区出土粘土塊

図版三一　一一〇〇一—四区出土瓦

107

108

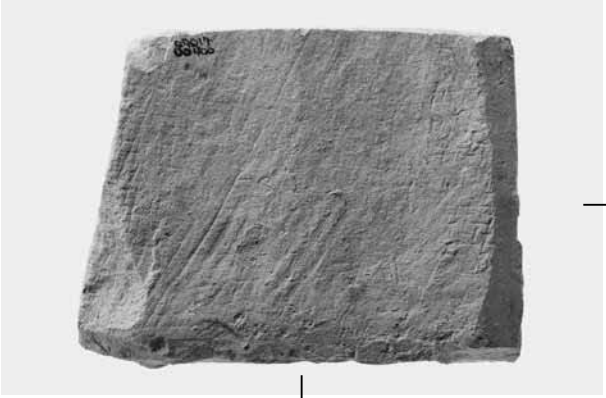
109

110

平瓦

図版三二　〇九〇一七—二区他出土瓦

522



527

527

524

523

526

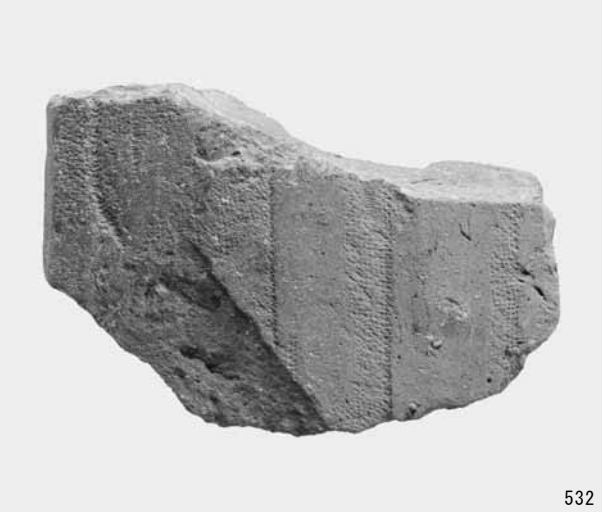
文字瓦・軒丸瓦・軒平瓦

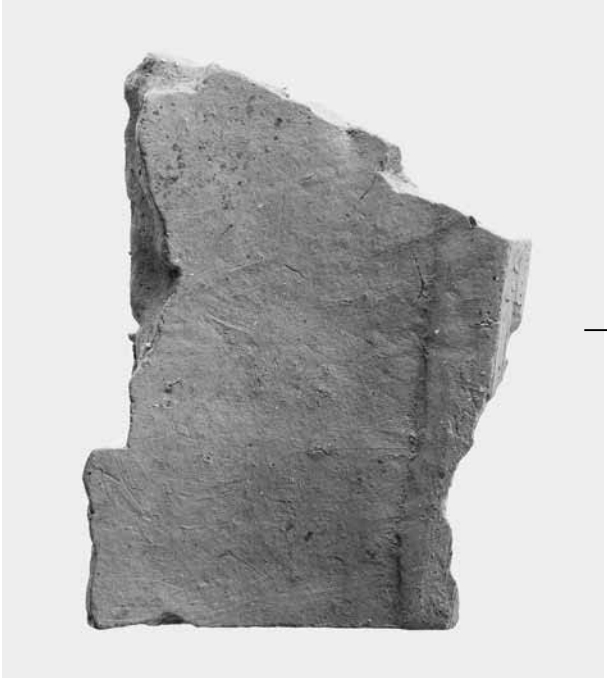
図版三三　〇九〇一七—二区他出土瓦

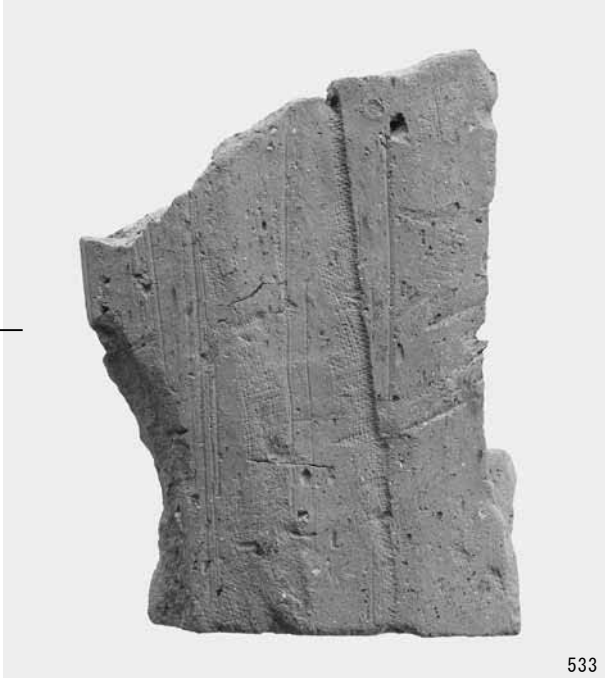
530

535

531


532




533

平瓦

図版三四　〇九〇一七—二区他出土瓦

536

538

537

542

541

平瓦

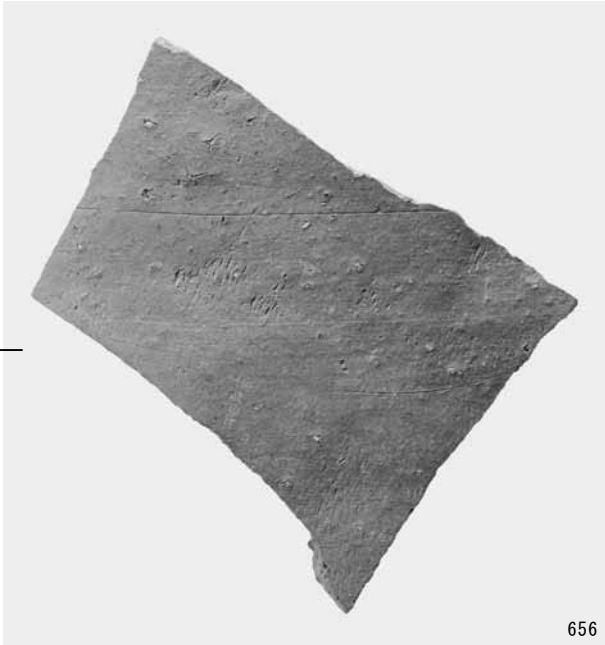
図版三五　〇九〇一七―一区他出土瓦

654

655

文字瓦

図版三六　〇九〇一七—一区他出土瓦



656

657

658

659

660

文字瓦・軒丸瓦

図版三七　〇九〇一七―一区他出土瓦

661

664

669

662

667

軒丸瓦

図版三八　〇九〇一七―一区他出土瓦

670

674

672

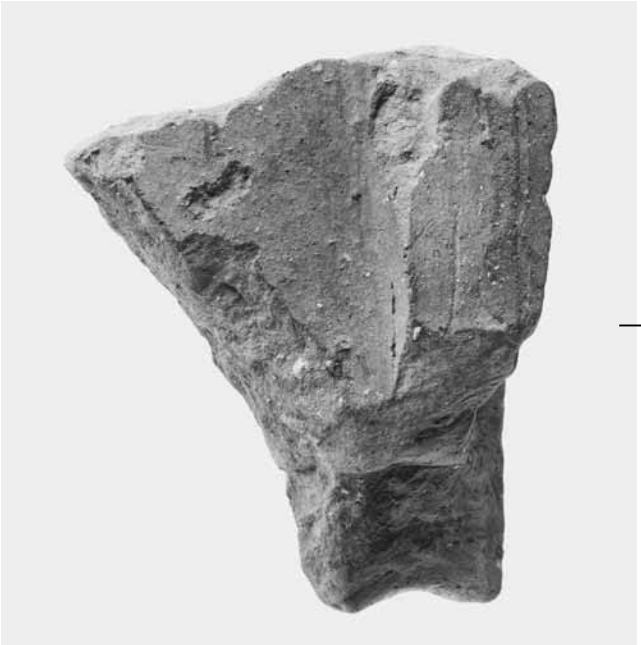
671

673

675

軒平瓦

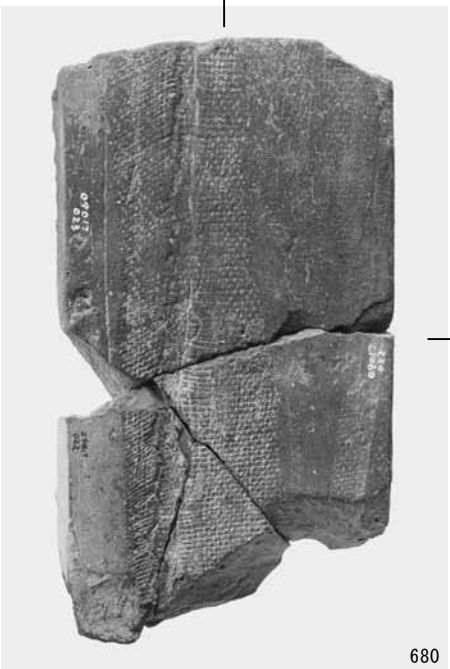
図版三九　〇九〇一七—一区他出土瓦



676

677

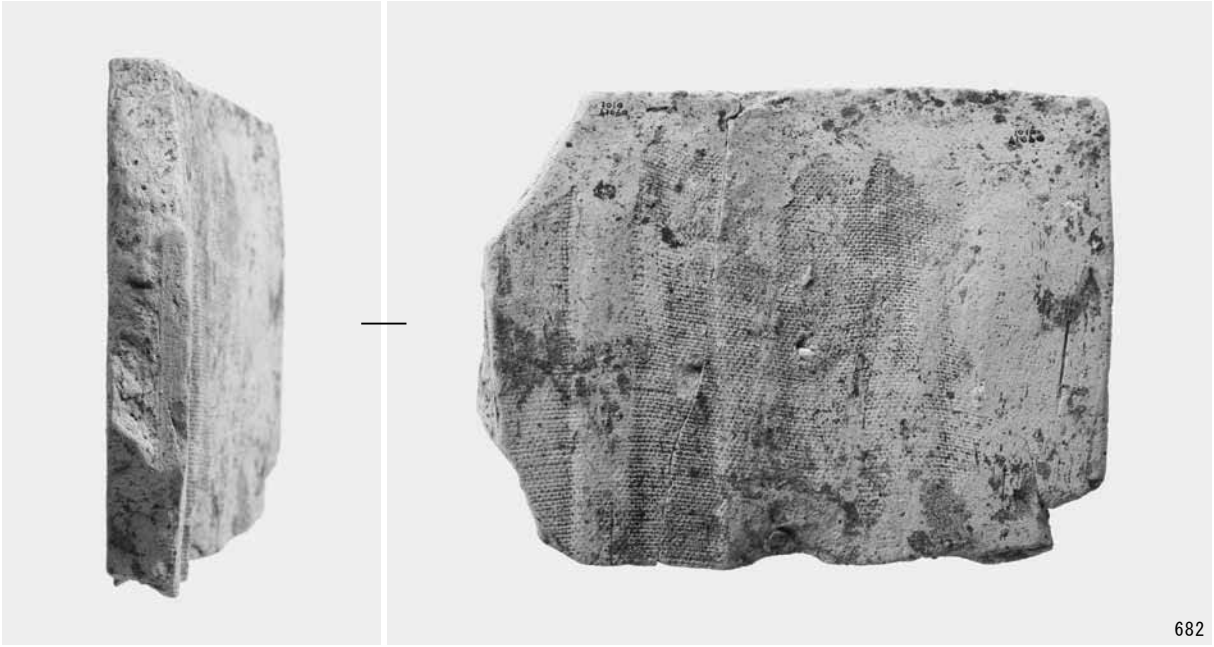
678

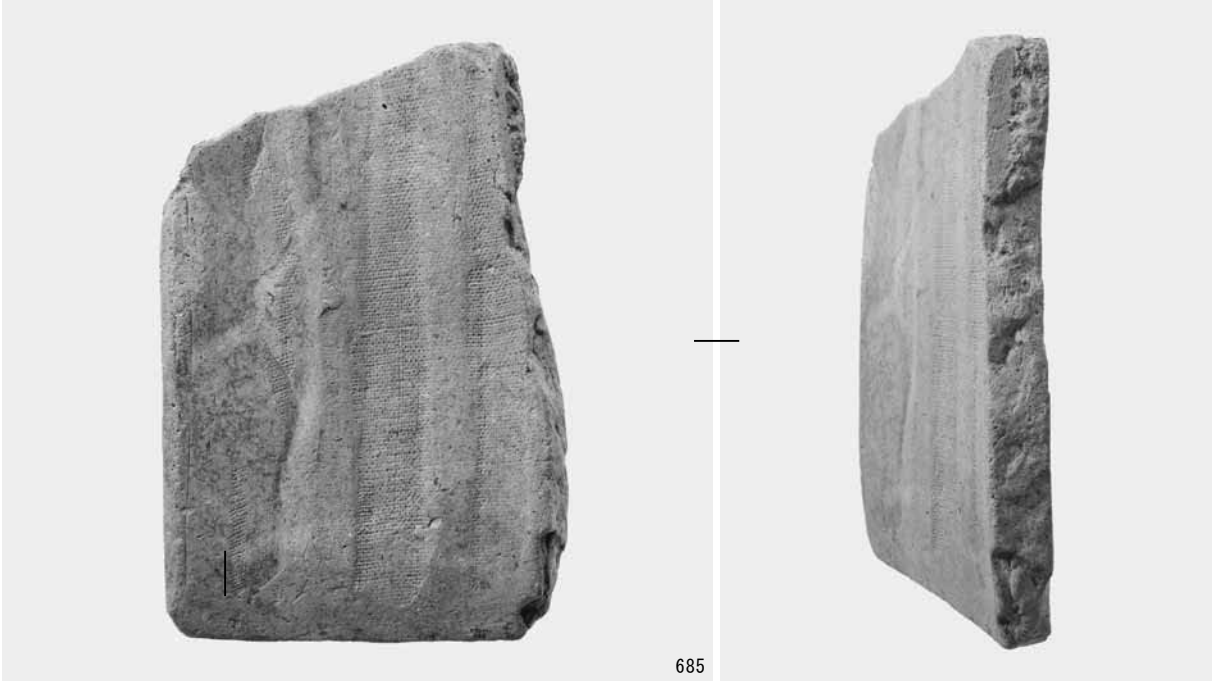


680

道具瓦

図版四〇　〇九〇一七—一区他出土瓦


682


685

684

686

道具瓦

図版四一　〇九〇一七—一区他出土瓦

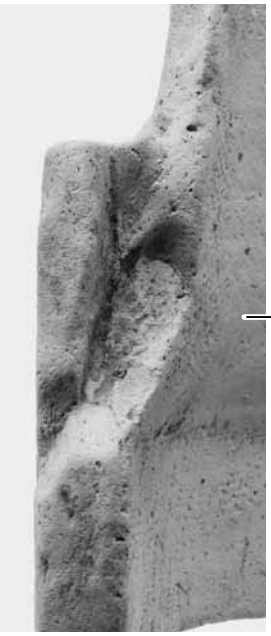
690

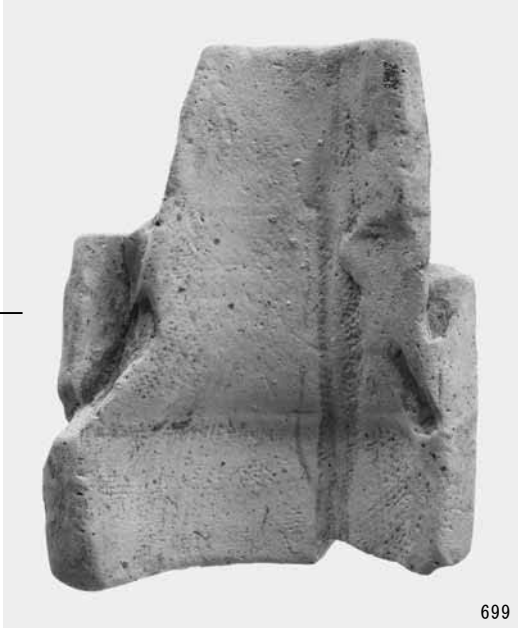
697

693

698

695




699

丸瓦

図版四二　〇九〇一七—一区他出土瓦

701

705

703

713

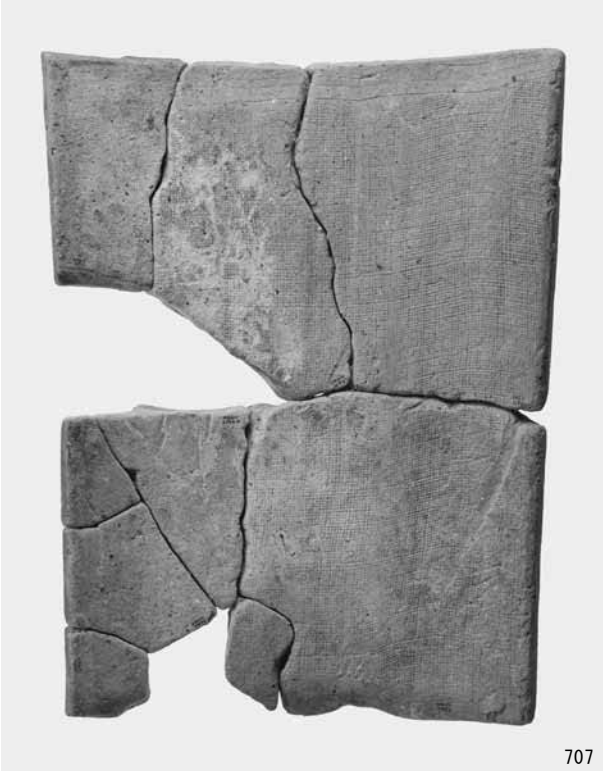
711

丸瓦・平瓦

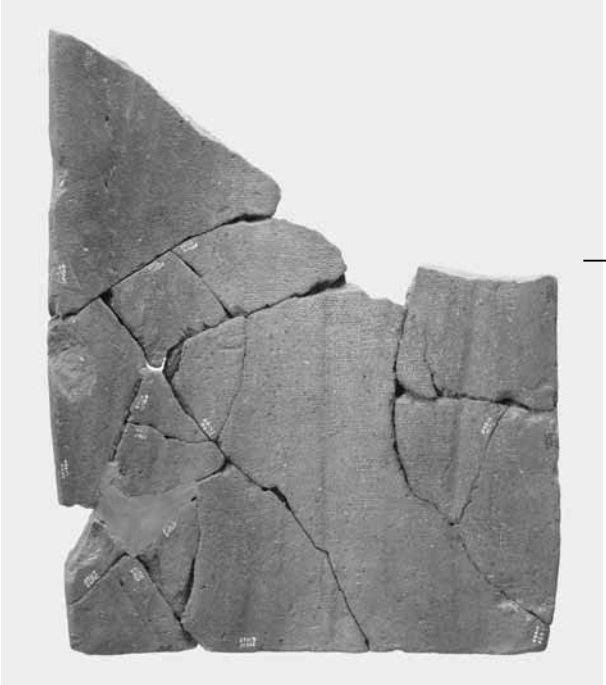
図版四三　〇九〇一七—一区他出土瓦

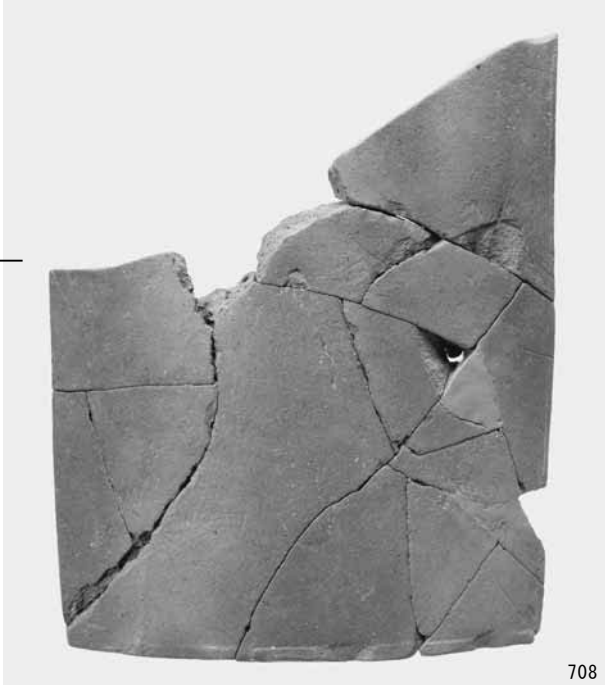
719

718


707

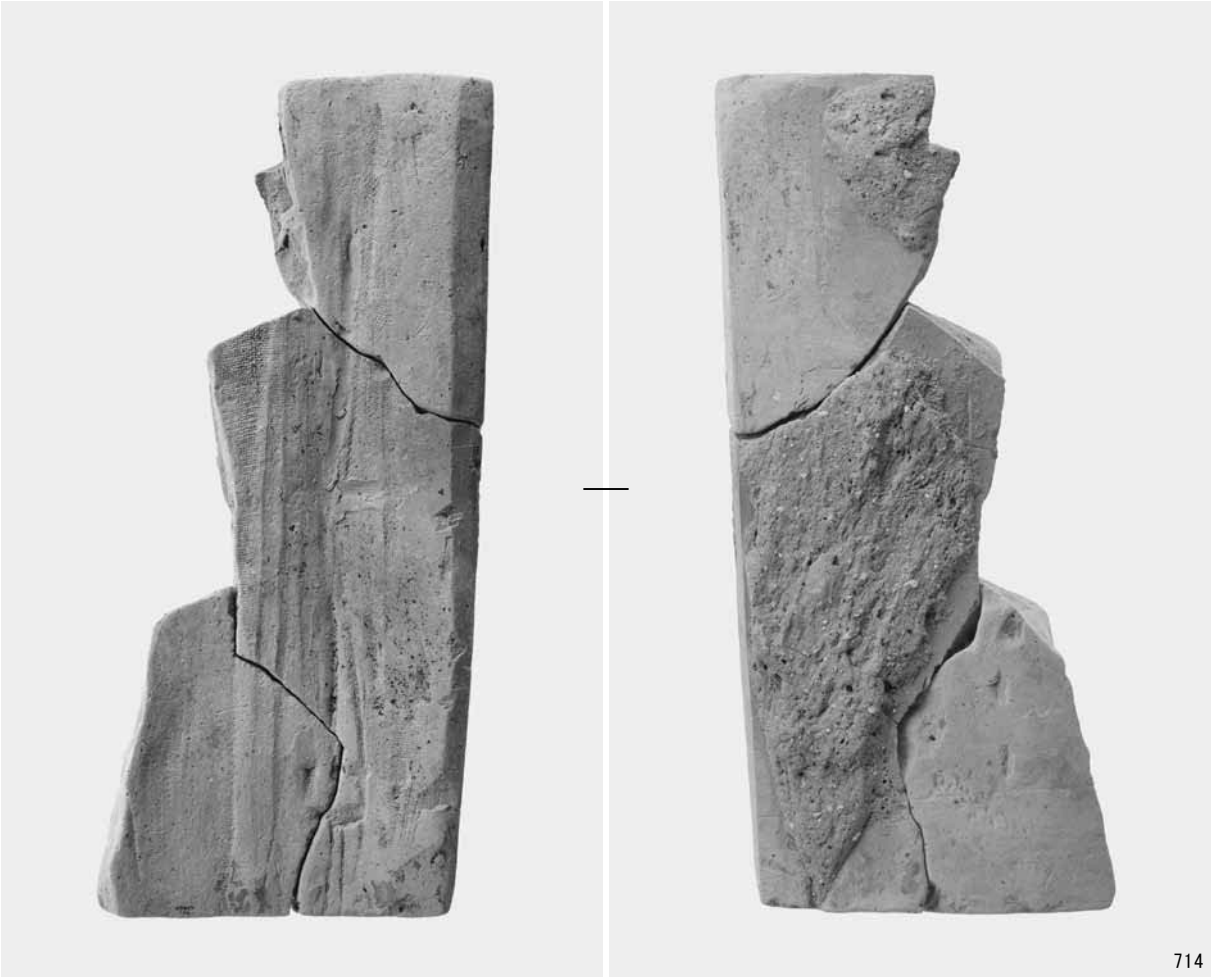
720



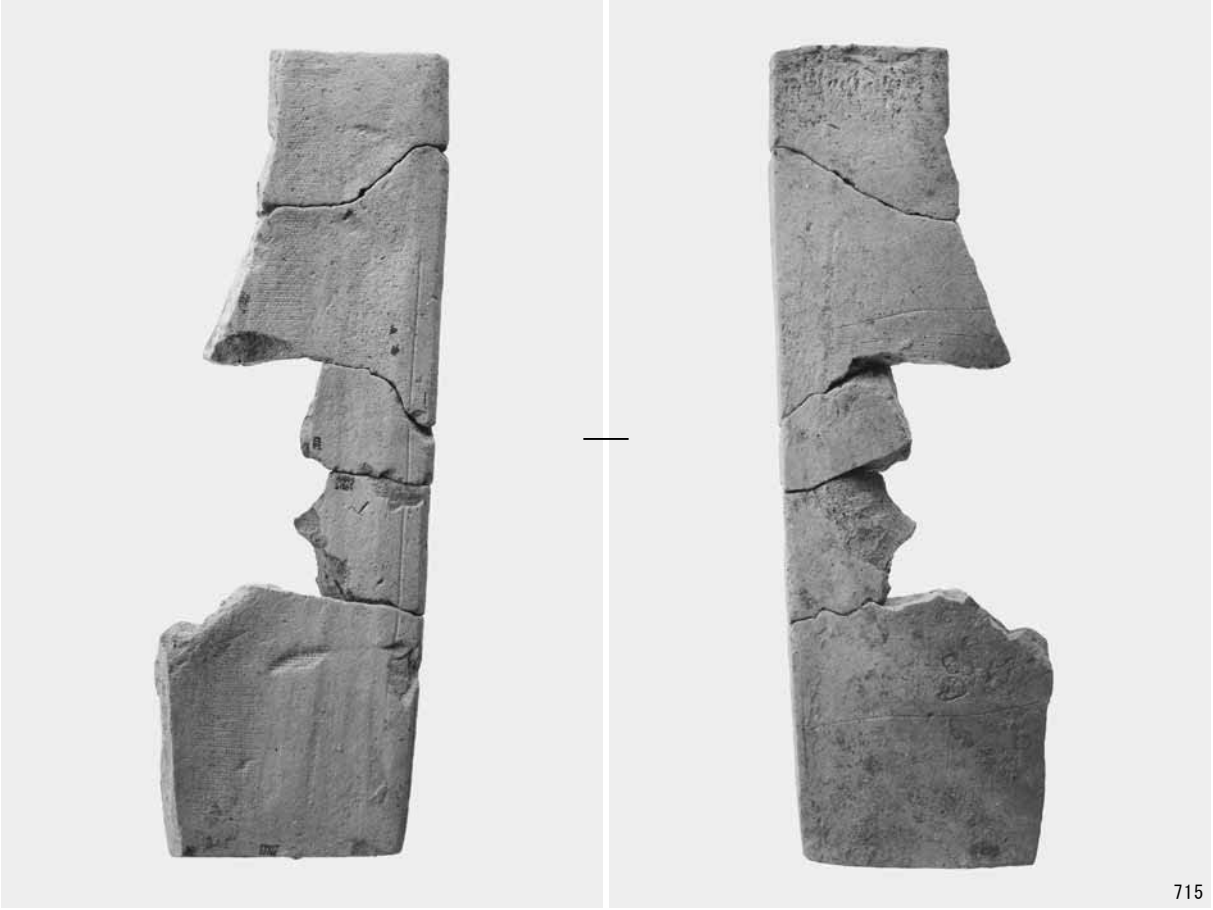

708

平瓦

図版四四　〇九〇一七—一区他出土瓦



714



715

平瓦

図版四五　〇九〇一七—一区他出土瓦

716

717

721

722

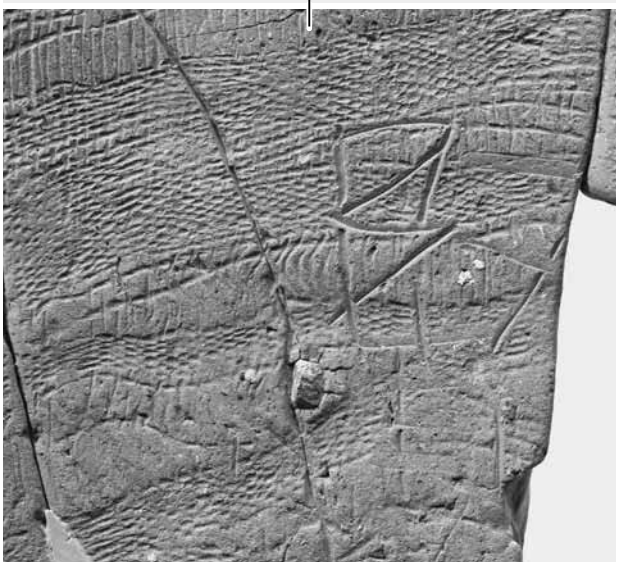
平瓦

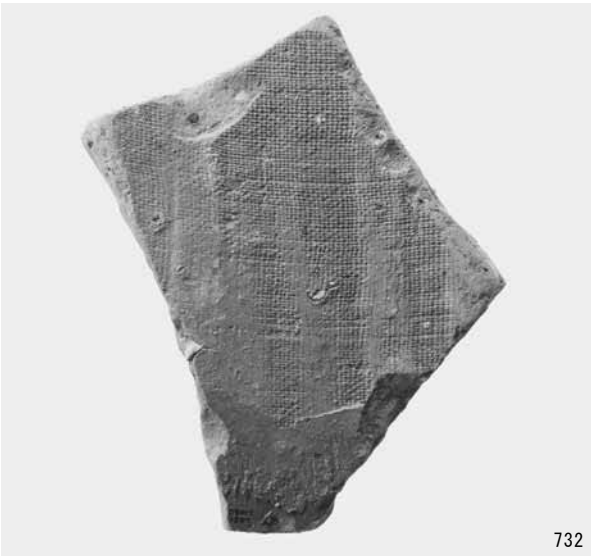
図版四六　〇九〇一七—一区他出土瓦

729

730

734




732

平瓦

図版四七　〇九〇一七—一区他出土瓦

733

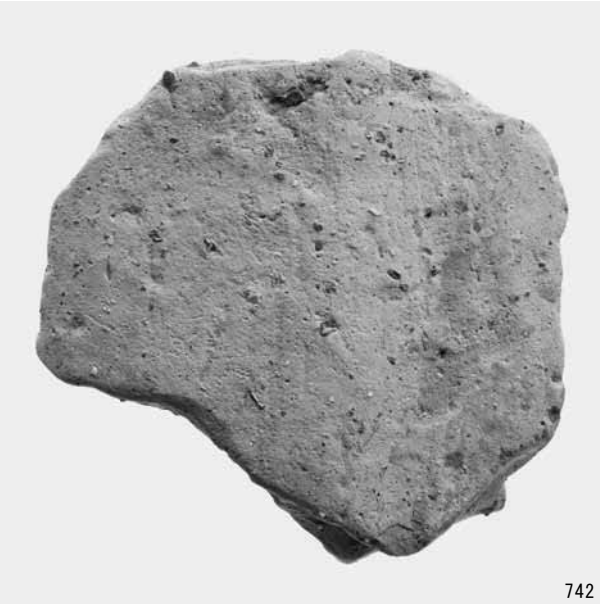
735

736

738

737

741


742

平瓦

図版四八　石器・石製品・金属製品

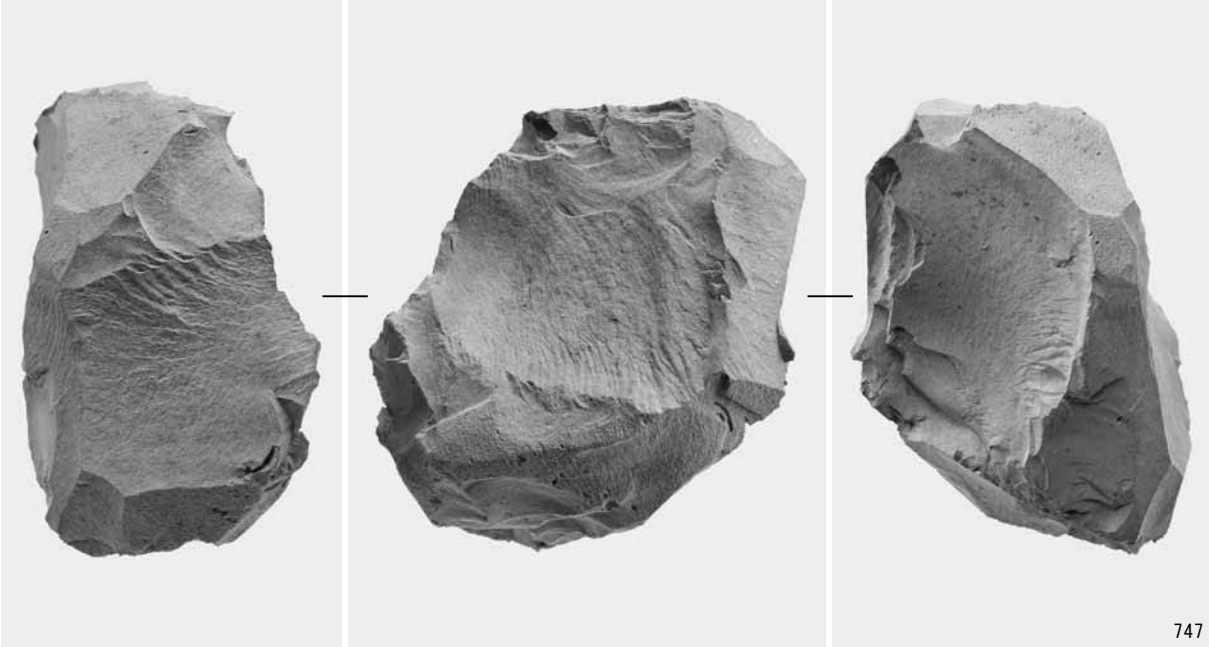
546

750

746

543

749


747

09017-2区他・09017-1区他出土石器・石製品・金属製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	いずみでらあと・ふちゅういせき　に
書名	和泉寺跡・府中遺跡　Ⅱ
副書名	都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2012－5
編著者名	土屋みづほ
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL　06－6941－0351(代)
発行年月日	2013年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
和泉寺跡 府中遺跡	和泉市 府中町四丁目 府中町	27219	35 34	34° 28′ 55″	135° 25′ 51″	20090901 ～ 20100906 20110201 ～ 20110729	1880 1320	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和泉寺跡	社寺跡	奈良時代	土坑、溝	土師器、須恵器、瓦	奈良時代の土坑から瓦が大量に出土し、文字瓦も見つかった。
府中遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	柱穴、自然流路	弥生土器、土師器、須恵器、韓式系土器、石器	
		中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦	
		近世	溝	土師器、磁器	

要　約	和泉寺跡は、瓦の出土や周辺の地割から古代寺院跡と推定されてきた遺跡であるが、これまで詳細は不明であった。今回、推定寺域内南東部から推定寺域外にかけての調査を行い、寺域外で、奈良時代の土坑、溝を検出した。土坑からは多数の瓦が出土し、軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾、熨斗瓦のほか、和泉寺跡では初となる文字瓦も出土した。文字瓦は遺構外も含め計５点出土、このうち２点には古代氏族の人名が刻まれており、寺院建立に関わりをもった氏族が明らかとなった。 府中遺跡は広範囲にわたる遺跡で、これまで多数の調査が行われ、縄文時代から近世にわたる遺構、遺物が確認されてきた。今回の調査地点は、既往調査事例の少ない遺跡範囲東端部分であり、弥生時代から古墳時代の柱穴や、中世の掘立柱建物、耕作溝等を検出した。弥生時代から古墳時代の居住域、中世の居住域や生産域が判明し、土地利用の変遷が明らかとなった。

大阪府埋蔵文化財調査報告2012－５

和 泉 寺 跡 ・ 府 中 遺 跡 Ⅱ

－都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成25年３月31日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号